

青森県埋蔵文化財調査報告書第97集

大石平遺跡Ⅱ

昭和60年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書第97集

大石平遺跡Ⅱ

—おつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書—

昭和60年度

青森県教育委員会

序

青森県教育委員会は、昭和59年度に、むつ小川原開発予定地内に所在する大石平(1)・(2)遺跡の記録保存を図るため、発掘調査を実施しました。

遺跡からは、縄文時代後期及び弥生時代の住居跡と数多くの遺構・遺物が発見されました。

本報告書は、この発掘調査の成果をまとめたものであり、いささかでも文化財の保護及び活用に資するところがあれば幸いに存じます。

最後であります、調査の実施と報告書の作成にあたり関係各位から御協力、御指導を賜りましたことに対し心から感謝の意を表します。

昭和61年3月

青森県教育委員会

教育長 本 間 茂 夫

例 言

- 本報告書は、昭和59年度に実施した青森県上北郡六ヶ所村に所在する大石平(1)・(2)遺跡の発掘調査報告書である。
- 調査に際しては、試掘調査を先行させて行い、遺構・遺物のみられる箇所では、その周辺を拡張・調査する弾力的な考えのもとに実施した。
- 本報告書中のⅣ―1区については、その東側隣接地が、昭和58年度に発掘調査を実施し、多くの成果を収めた当時のⅢ区に相当していることから、本区の内容は、Ⅲ区の成果と関連させた記述をしており、また、本書の内容を検討・把握する際にもⅢ区と関連づける必要がある。なお、昭和58年度の調査成果は、青森県埋蔵文化財調査報告書第90集「大石平遺跡」として昭和59年度に刊行している。
- 昭和60年度には、昭和58年度調査時のⅢ区西側と、本書のⅣ―1区の各々南側一帯の発掘調査を実施しており、予想通りかなりの成果をあげている。これら3か年にわたる発掘調査の結果、58年度のⅢ区、59年度のⅣ―1区、60年度の調査区の3区は、連続した一つの集落……遺跡の中心部……であることが判明した。換言すれば、一つの大集落跡を3回に分けて調査したということである。

このような観点からすれば、昭和58年度に実施した発掘調査は1次的調査、59年度実施のⅣ―1区については、2次的調査という意味に受けとめることができる。

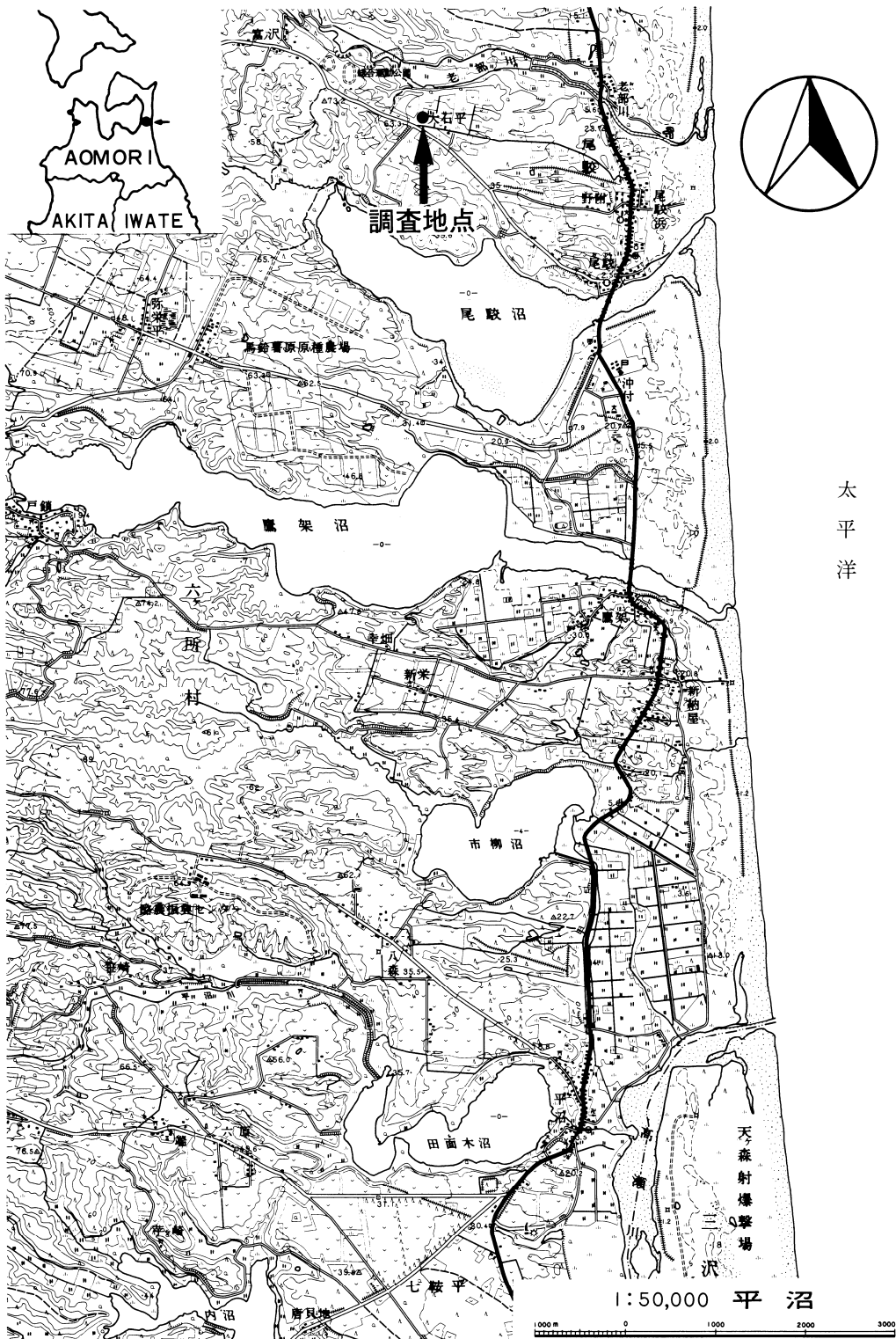
そこで、本文中の随所に、昭和58年度の発掘調査における遺構・遺物が引用されることから、便宜上、昭和58年度に実施した発掘調査のことを第1次調査、59年度を第2次調査と仮称することにした。

- 本報告書では、広大な調査対象面積のため、地区割りをを行い、区ごとに記述する形式をとっているが、主体を占めている区は、Ⅳ―1区とⅦ区である。
- 本報告書の記載内容は、前述のごとく2次的調査であることと、昭和60年度の発掘調査が3次的調査であり、「大石平遺跡」の最終年度調査でもあることから、できるだけ、遺構・遺物のとらえ方は、第1次調査のとらえ方に準拠し、そのイメージを損なわないよう努めた。
- 執筆者の氏名は、依頼原稿については文頭に、ほかは文末に記した。
- 石質鑑定は、県立八戸高等学校教諭 松山 力氏に依頼した。
- 本報告書の文中における用語は、できるだけ統一をとるよう努めたが、数度にわたり使用されるものは、簡略化したり、仮称したりしたものもある。
- 図版の縮尺は、各図ごとに表示してあるが、ないものは任意の縮尺である。
なお、写真図版の縮尺は、統一していない。
- 土層の観察・表記は、農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖」に基づいている。

目 次

序	
例 言	
第 I 章 調査に至る経過と調査要項	1
第 1 節 調査に至る経過	1
第 2 節 調査要項	1
第 II 章 調査の概要	3
第 1 節 調査の方法	3
第 2 節 整理の方法	5
第 3 節 調査の経過	6
第 III 章 遺跡の環境	7
第 1 節 遺跡周辺の地形	7
第 2 節 遺跡周辺の地質と遺跡内の土層区分	8
第 IV 章 検出遺構と出土遺物	12
第 1 節 IV 区	12
1 検出遺構	12
(1) 竪穴住居跡	12
(2) 土 壙	37
(3) 配 石	83
(4) その他の遺構	87
2 出土遺物	90
(1) 土 器	90
(2) 石 器	137
(3) 土 製品	158
第 2 節 V 区	202
1 検出遺構	202
2 出土遺物	203
(1) 土 器	203
(2) 石 器	206

第3節 VI	区	211
1	検出遺構	211
2	出土遺物	213
(1)	土器	213
(2)	石器	216
(3)	その他の遺物	217
第4節 VII	区	224
1	検出遺構	224
(1)	竪穴住居跡	224
(2)	土器埋設遺構	244
(3)	土壙	245
2	出土遺物	249
(1)	土器	249
(2)	石器	256
(3)	その他の遺物	256
第V章	調査の成果	262
ま	と	
め		269



第1図 遺跡の位置

第 I 章 調査に至る経過と調査要項

第 1 節 調査に至る経過

むつ小川原開発事業計画にかかわるむつ小川原開発株式会社所有地内の調査は、昭和49年、50年に実施した新住区建設に係る千歳遺跡(13)の発掘調査に始まり、昭和54年、55年には、石油国家備蓄基地建設に伴うパイプライン敷設に係る表館遺跡並びに発茶沢遺跡の発掘調査、更に昭和56年、57年には、備蓄基地の消火用水確保に伴う弥栄平遺跡(2)の発掘調査、昭和58年には大石平遺跡の第 1 次発掘調査を実施してきた。

昭和58年11月、むつ小川原開発株式会社から、大石平遺跡（総面積約76万㎡）約25,000㎡の第 2 次発掘調査の依頼があった。

そこで、青森県教育委員会では、同年11月受諾する旨回答し、昭和59年 5 月 7 日から同年11月 9 日までの予定で発掘調査を実施することにした。（山田）

第 2 節 調査要項

1. 調査目的

むつ小川原開発事業実施に先立ち、当該地区に所在する埋蔵文化財の発掘調査を行い、その記録保存をはかり、地域社会の文化財活用に資する。

2. 調査期間 昭和59年 5 月 7 日から昭和59年11月 9 日まで

3. 遺跡名及び所在地

大石平 (1)・(2)遺跡 青森県上北郡六ヶ所村大字尾駱字野附

4. 調査面積 25,0000㎡

5. 調査委託者 むつ小川原開発株式会社

6. 調査受託者 青森県教育委員会

7. 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター

8. 調査協力機関 六ヶ所村企画課
六ヶ所村教育委員会
上北教育事務所
県むつ小川原開発室

9. 調査参加者

(1) 調査指導員 村越 潔 弘前大学教育学部教授
青森県文化財保護審議会委員

- (2) 調査協力員 田中 澄 六ヶ所村教育委員会教育長
 (3) 調査員 小山 陽造 八戸工業高等専門学校教授
 " 滝沢 幸長 八戸市文化財保護審議会委員
 " 佐藤 巧 県立郷土館学芸員
 " 山口 義伸 県立木造高等学校稲垣分校教諭

(4) 青森県埋蔵文化財調査センター

- 所 長 工藤 泰典 (現・県地方労働委員会事務局総務課長)
 " 三橋 時男 (昭和60年4月 教育庁財務課副参事から)
 次 長 須藤 昭二
 総務課長 館浦 善清
 調査第一課長 新谷 武
 調査第二課長 山田 洋一
 主 査 遠藤 正夫
 " 三浦 圭介
 主 事 白山 昇
 " 白鳥 文雄
 " 赤平 智尚
 " 一条 秀雄
 調査補助員 須藤 徹彦 (昭和60年3月退職)
 " 大沢 匡 (昭和60年3月 ")
 " 安原 渡 (昭和59年5月 ")
 " 木村 清孝
 " 福士 聡彦 (昭和60年2月退職)
 " 小田川 暫彦
 " 佐藤 譲 (昭和59年10月退職)
 " 石塚 邦仁 (昭和60年3月退職)
 " 鶴谷しげ子 (昭和60年10月退職)
 " 田中 伸子 (昭和60年1月退職)
 " 佐井 理賀
 " 蝦名 知子
 " 奈良 郁子 (昭和60年3月退職)
 " 竹内 史

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 調査の方法

1 調査区の設定

調査対象区域が広範囲にわたるため、第1次調査の区割りに準じてⅣ～Ⅶ区の4地区に区割りした。調査時においてはⅣ区—C地点・Ⅴ区—D地点・Ⅵ区—D5地点・Ⅶ区—中の島と仮称し、遺物の取り上げ・遺物の注記等もこれを用いた。

また、各地区内でも作業の円滑化を図るために数地点に分割した。

第2次調査（59年度）が、埋蔵文化財調査センター2チーム・文化課1チームの計3チームで実施することや、第1次調査（58年度）の調査区に接することなどから、各地点ごとに軸線等に異同がないよう、第1次調査の基準軸線を延長して遺跡全域に4m×4mのグリッドを設定した。

グリッドは、第1次調査に準じて、南北方向にアルファベット2文字の組み合わせを、東西方向に算用数字を付し、その組み合わせで呼称した。またAAラインから北側はZZ～YAを付した。呼称は第1次調査に連続したが、Ⅶ区は調査開始が遅かったことなどから、軸線は同一としたが、呼称は独自なものを使用した。Ⅶ区のIIA100グリッドは全体のCH—300グリッドに相当する。アルファベット及び数字の方向は全体と同じである。

2 発掘の方法

基準線に沿って試掘トレンチを設け、遺構・遺物が検出された部分から順次拡幅を行った。

トレンチは対象面積の10%を目安とし、各地区の地形・現状等を考慮して設定した。このため、各地点ごとにトレンチの形状等は異なる。

各地点ごとに土層観察用のトレンチを設けた。各層はローマ数字を付して呼称した。

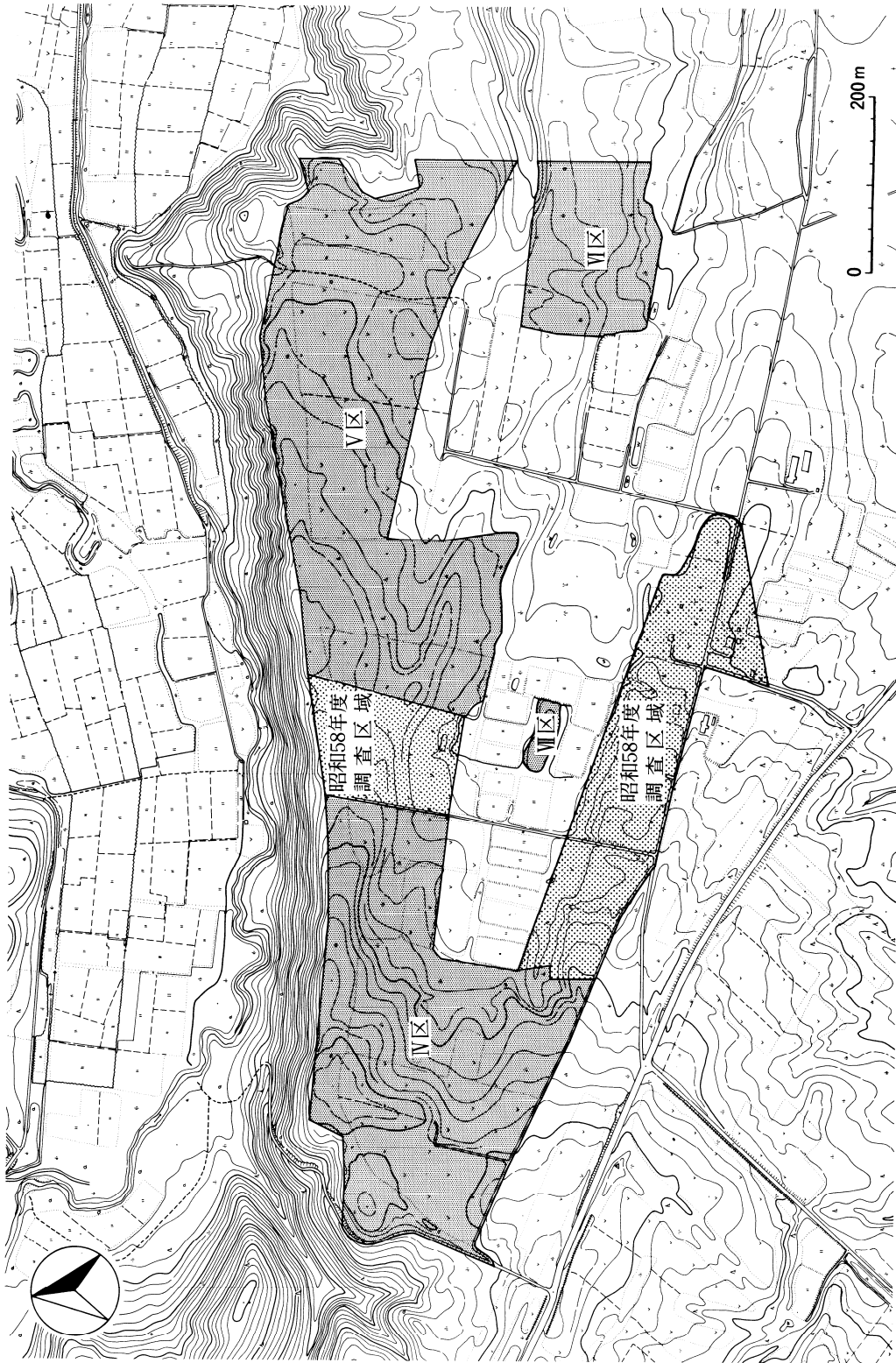
〈遺構の調査方法〉

遺構は、各種類ごと及び確認順に番号を付した。遺構の調査は堆積土の状態を観察するために原則的には四分法を用い、規模の大小により二分法・半截・その他を用いた。堆積土層は算用数字を用いて呼称した。

遺構の実測における縮尺は、基本的には20分の1とし、遺物出土状況・規模の大小等により10分の1・その他とした。

また、記録保存のため適宜写真撮影を行った。写真は、モノクロフィルム及びカラーリバーサルフィルムを使用した。

〈遺物の取り上げ方法〉



第2図 遺跡周辺の地形・遺跡全体図

遺構内出土遺物は、遺構及び層位ごとに取り上げることを原則とした。遺構外出土遺物は、グリッド単位で取り上げた。取り上げに際しては、種類ごとに色分けしたカードを使用し、出土位置、出土層位を記入した。(土器一白・石器一青・その他一赤)

第2節 整理の方法

調査終了後、遺物は水洗い、乾燥ののち出土地点等の注記を行った。注記は、前述のとおり調査区の仮称を用いている。復原・実測・拓影・写真撮影等、一連の整理作業を行った。また遺構実測図等の補正・トレースなども、これと併行した。

各遺物における分類基準は、おおむね第1次調査に準じたが、担当者の変更等による見解の相異などから若干異なる部分がある。以下各遺物の分類基準を明記する。

1 土器

土器の分類は、大筋では第1次調査に準じた。時期的区分による群別は以下のとおりである。

第I群 縄文時代早期の土器	第IV群 縄文時代後期の土器
第II群 縄文時代前期の土器	第V群 縄文時代晩期の土器
第III群 縄文時代中期の土器	第VI群 弥生時代の土器

各群の中における細分(類)は、第1次調査のものと相異点があり、その詳細については、第IV章第1節一2一(1)の項で記載する。

2 石器

石器の分類は大筋では第1次調査と同じである。しかし、あらたに注目された石器の存在や、担当者の変更等による見解の相異によって、変更した部分がある。なお、分類についての具体的な概念規定は最も多量に出土したIV一1区からの出土石器に基づいている。

第1次調査で示された分類基準との相異から想起される誤解を防ぐために、これら相互の共通点・相異点及び再分類の理由等は、記載が重複することから第IV章第1節の石器の項で明確に記述する。この項では各類別の名称を記載し、細分は前述の石器の項で記載する。

第I群石器(剥片石器)	第II群石器(石斧)	O類 円盤状石製品
A類 石鏃	I類 磨製石斧	P類 有孔石製品
B類 石槍	J類 打製石斧	Q類 滑車形石製品
C類 石錐	第III群石器(礫石器)	R類 石棒
D類 石匙	K類 石錘	S類 石刀(石劍)
E類 石篋	L類 敲磨器類	T類 石冠
F類 不定形石器	M類 石皿・台石・砥石	U類 その他
G類 靴形石篋	第IV群石器(石製品等)	

H類 ピエス・エスキューユ N類 軽石

出土石器の観察表は、各器種別に遺構内・遺構外出土を含め、付表として巻末に一括した。実測図に用いたスクリーン・トーンの指示は、類似する図柄が、縮尺率の違いから、混乱を招く恐れがあることから、各図版上に明示した。

表中の略語等は、本文中及び表の欄外に表示した。 (遠藤・畠山・白鳥・一条)

第3節 調査の経過

5月7日、調査区のほぼ全面を覆う笹刈り作業から開始した。10日には、これと併行して、58年度の調査地点からグリッドの軸線を移動し、IV区では西方、V区では東方へとグリッドの設定をすすめた。

広大な面積のため、試掘を先行し、包含層や遺構を検出した際にはその範囲を拡大し精査するという基本的な考えから、グリッド組みは、東西方向は20m間隔、南北方向は4m間隔を原則とした。

11日から粗掘りを開始し、以後、刈り払いして、グリッドを組み、粗掘りするというサイクルで順次進めていった。6月の半ば過ぎ、V-4区では溝状ピットの検出が続き、IV区でも土器片等の遺物が若干出土し始めたが、遺構は検出されなかった。

7月に入り、V-2区の南東部から焼土や土器が出土、IV区では北側縁辺部で配石遺構を確認し精査に入った。18日から19日にかけて、V-2区から弥生式土器が1個体単独で出土したため、周辺を拡張・精査したところ、縄文土器片が多量に出土した。末頃には、V-3区の縁辺部まで粗掘りが及び、縄文土器の密集部を2箇所検出した。IV区では竪穴遺構1基を確認し精査を終える頃には、粗掘りは南東部の沢頭IV-1区付近まですすんだ。

8月初め、以前、遺物が出土したV-2区の隣接部である1区南側を調査したが、遺構・遺物の出土はなかった。そこで、次の調査区であるVI区(D-5地点)の現地踏査を行い、道づくりや作業の手順を整えた。11日には、V区の全調査が終了した。VI区の笹刈りは29日で一応終了し、グリッド設定、粗掘りにかかった。IV区では4号土壌を精査中、軟玉17個が出土した。

9月上旬、調査の主体がIV区西側からIV-1区に移り、確認した溝状ピット、フラスコ状ピット等の精査に併行して、407ライン付近の粗掘りや397、447ラインのグリッド組みを行った。

9月10日、VII区の笹刈りを開始し、13日には粗掘りに入った。また、VI区においては粗掘りが続行された。一方、IV-1区の遺構精査はいよいよ本格化し、出土遺物もこの時点で約120箱(ダンボール箱)に達した。

10月には、大きく調査の拠点がIV-1区とVII区に分かれ、他チームの応援も得て、31日にはVI区、IV区の調査が終了し、残るVII区の調査は11月9日に終了した。 (山田)

第三章 遺跡の環境

第1節 遺跡周辺の地形

上北郡六ヶ所村は下北半島頸部の太平洋側にあつて、この付近には、北方から尾駈沼、鷹架沼、市柳沼、田面木沼、内沼そして小川原湖の湖沼群がみられる。太平洋沿岸には、これらの湖沼を閉塞するような形で天ヶ森砂丘が現汀線に沿ってほぼ南北方向に約200mの幅で分布し、さらに内陸側には標高5～23mにも及ぶ古砂丘が同じく南北方向に300m余の幅で分布している。現在、古砂丘は松林となっていて防風、防砂林の役割を果している。また、この付近には、海岸段丘の発達も顕著であつて、上位から吹越烏帽子段丘、長者久保段丘、千歳段丘、七鞍平段丘の4段丘が確認できる。これらの段丘のうち、本遺跡が立地しているのは最下位の七鞍平段丘（標高50～12m）が主であつて、一部は上位の千歳段丘（標高100～60m）上にも立地している。

本遺跡が立地している地域は、北方に東流して太平洋に注ぐ老部川があり、南方には尾駈沼があつて、その幅は約2kmである。この地域に広く分布している段丘は最下位の七鞍平段丘で西端部には千歳段丘が幅狭く分布している。本地域のほぼ中央部には南東流して尾駈沼に注ぐ侵食谷があつて、この侵食谷の北側に分布する七鞍平段丘は、小谷の開析作用がみられるものの比較的平坦な地形をなしている。侵食谷の南側においては、この谷の侵食作用により、多少起伏に富む地形となっている。なお、西端部においては上位の千歳段丘とは約10mの比高差をもつ侵食斜面でもって接している。

本遺跡は、現汀線より2～3km程内陸側にあつて、標高が62～37mである。遺跡の北端は老部川に臨む急峻な段丘崖となっている。遺跡内には老部川の支流が2本あり、いずれも七鞍平段丘上に谷頭をもち、並行して東流している。両支流の間は、侵食作用によって東西方向に帯状の小丘地としては残っているものの、全体的には200m余の幅で、5～10mの比高差のある谷状凹地となっている。またこの支流の谷頭付近は、上位の千歳段丘へ連続する侵食斜面でありかつ、この支流による馬蹄形状の侵食地形となっている。支流の南縁から本地域の中央部を南東流する侵食谷までは比較的平坦な地形となっている。（第3図）

本遺跡はかなり広範囲にわたって分布しているので、各地区毎にその地形の概要を述べたい。本遺跡は、上述の2本の支流のうち、南に位置する支流の右岸に沿うほぼ東西方向の線引きで南側を大石平(1)遺跡、北側を大石平(2)遺跡と区分している。なお、大石平(1)遺跡の中で支流右岸沿いについては昭和58年度においてすでに発掘している。

まず大石平(1)遺跡は、昭和58年度発掘した地点より西方にあつて、支流の谷頭付近に拡がる

馬蹄形状の侵食地形の南半分をしめている。標高は61～46mでかなり急傾斜面となっている。ただ、フラスコ状ピット及び溝状ピットの分布する地点は千歳段丘上であってこの付近はやや平坦な地形となっている。なお、本調査した場所は、枝流の谷頭部を取り囲む形であって、湧水がひどい所である。

大石平(2)遺跡第Ⅳ区は、大石平(1)遺跡の北に隣接していて、馬蹄形状の侵食地形の北半分を占めている。第Ⅳ区の北端は、老部川に臨む段丘崖となっている。標高62～44mであり、全体的に南方への急傾斜面となっている。ただ、配石遺構の分布する地点は、標高が62mあり、やや小丘状をなすように千歳段丘が発達している。

大石平(2)遺跡第Ⅴ区は、北端の段丘崖に沿って、約200mの幅で800mの長さをもつ帯状の分布を示している。標高が48～37mであって、枝流の侵食作用によりやや起伏がみられるが比較的平坦である。全体的には南方への緩傾斜面となっている。

大石平(2)遺跡第Ⅵ・Ⅶ区は枝流間の小丘地内に点在している。第Ⅶ区は、標高が42m程で、周囲が開墾のために削平されていて全くの孤立丘である。第Ⅵ区は標高が36～34mで、枝流の侵食作用により低湿地状の地形である。

第2節 遺跡周辺の地質と遺跡内の土層区分

下北半島の頸部を構成している地層のうち、基盤をなす地層は新第三系中新統の泊安山岩類及び鷹架層である。また、本地域に最も広く分布する地層は新第三系鮮新統の浜田層及び第四系下部洪積統の野辺地層である。新第三系中新統の泊安山岩類は安山岩質角礫岩及び同質集塊岩からなっていて、本遺跡北端の老部川に臨む段丘崖にみられるが、主に本地域北方の山岳地に広く分布している。中新統の鷹架層は主として塊状のシルト質砂岩からなり、泊安山岩類の上部と指交関係にあって、本遺跡南方の鷹架沼を中心にほぼ南北に分布している。新第三系鮮新統の浜田層は塊状無層理の砂質シルト岩と砂岩との互層からなり、下位の中新統を不整合におおっていて、本地域に広く分布している。また、第四系下部洪積統の野辺地層は全体的に砂とシルトの互層からなり、下位の第三系を不整合におおい、ほぼ水平に堆積していて、一般に段丘構成層におおわれている。

次に遺跡内における土層区分及び各地区の土層の対比を第4図に示した。これに基づき、各層の概要を述べたい。

I層 黒褐色土層 (10～20cm) 表土。 ※昭和58年度発掘した大石平遺跡のI a及びI b層に対比される。草根を多量に含んでいて、全体的にしまりがなく、ソフトな感じがする。斜面及び低地においては約20cmと厚くなり、I a及びI bの2層に区分され、このうち、I b層はやや腐植質となり、苔の発生がみとめられる。

II層 黒色腐植質土層 (10～20cm) ※のII層に対比される。草根を含み、粘性湿性が多少あ

り、やや硬さもある。乾くと灰黒色に変色し、全体的に格子状の割れ目が発達する。本層は平坦地においてはレンズ状の分布を示している。

Ⅲ層 暗茶褐色土層（5～25cm）※のⅢ a 層に対比される。風成による堆積でしまりがなく、非常にソフトな感じである。平坦地では下位層の粒子状の混入で明るい色調を示すが、低地においては水の影響をうけていて、多少粘土質になっている。なお第Ⅳ区 B Q—387の低地においては本層に2枚の降下火山灰層が挿入されているのを確認できた。

Ⅳ層 黒色腐植質土層（0～40cm）※のⅢ b 層に対比される。上位のⅡ層に酷似していて、より粘土質である。Ⅱ層よりも湿性が多く、Ⅱ層が格子状の割れ目が発達するのに対して、本層は表面がなめらかでしまっている感じである。部分的に欠如することはあってもほぼ遺跡全体に分布している。

Ⅴ層 暗褐色火山灰質土層（20～40cm）※のⅣ層に対比される。下位の火山灰層を粒子状あるいはブロック状に多量に混入していて、層全体としてのしまりに欠ける。本層は火山灰の混入状況により2層に区分でき、上位のⅤ a 層は火山灰が粒子状に混入し、暗い色調を示し、下位のⅤ b 層はブロック状に混入し、全体的に火山灰質になっていて、明るい色調を示している。ただ低地においては、火山灰粒の混入はあるものの、全体的には黒褐色粘土質土に変化し、下部には砂礫層を伴うこともある。

Ⅵ層 黄褐色粘土質火山灰層（50cm+）※のⅥ層に対比される。全体的によくしまった感じで粘土質である。昭和58年度に発掘調査した大石平(1)遺跡の296ラインにおいては本火山灰層の直上にブロック状のラピリ質浮石を確認できた。この浮石は、おそらく、上北上部火山灰層基底部に伴う千曳浮石（C b, P）に相当するものと考えられる。

ところで、各地区の土層分布をみると、まず大石平(1)遺跡においてフラスコ状ピット及び溝状ピットの分布する地点では耕作による削平のため火山灰質のⅤ層の直上はほとんど耕作土としてのⅠ層があるのみである。また第Ⅳ区では傾斜面であるためⅡ層がレンズ状に分布するほかはほぼ標準層序に従って堆積している。なお枝流の谷頸部に臨む急傾斜面地（DA—375グリッド）ではⅣ層が100cm以上の厚さで堆積していて4層に区分できる。この4層のうち、上位から3番目のⅣ₃層にはブロック状の焼土や縄文時代後期（十腰内Ⅰ式）の土器片が1片確認できた。

大石平(2)遺跡第Ⅳ区では、配石遺構の分布する地点がⅠ層直下が風成作用によって全体的に火山灰質のⅣ層及びⅤ層が堆積している。ただ傾斜地においては、ほぼ標準層序に従って堆積している。

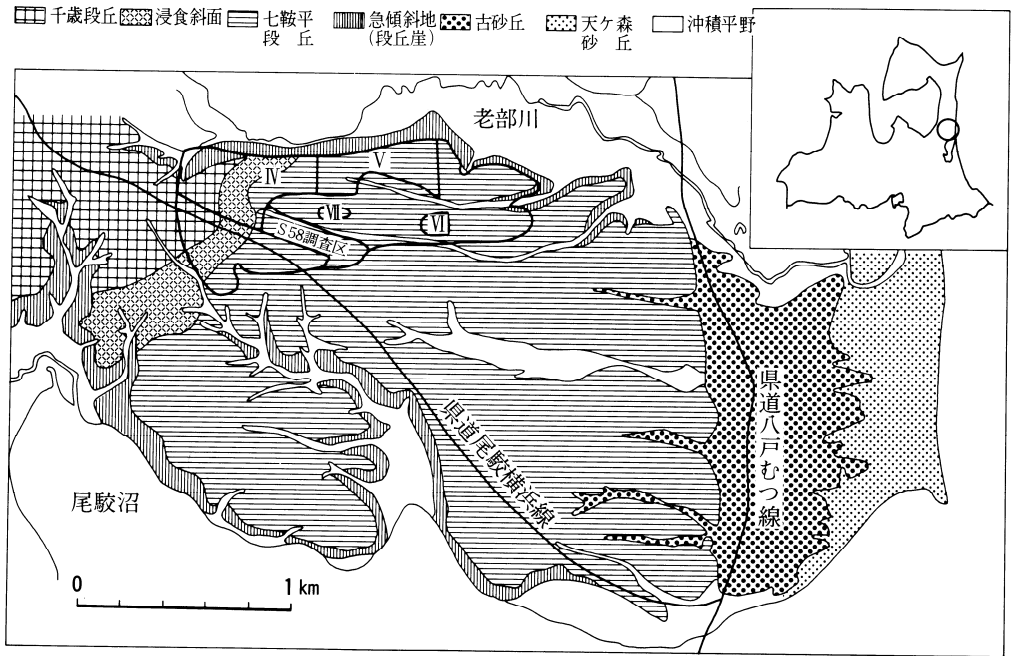
第Ⅴ区では、北端の段丘崖沿いの段丘面を除いては全体的に枝流の侵食作用によって平坦地ながらもやや低湿地状になっている。このため、標準層序に従って堆積しているものの、Ⅳ層が厚く堆積していて、非常に粘土質であり、下位のⅤ層も砂礫層となっているところがある。

第Ⅵ区は低湿地であるために全体的に粘土質であって層区分がなかなか困難である。第Ⅶ区では開墾による削平あるいは盛土のために全体的に攪乱されている。Ⅰ層直下はⅣ層あるいはⅤ層になっている。

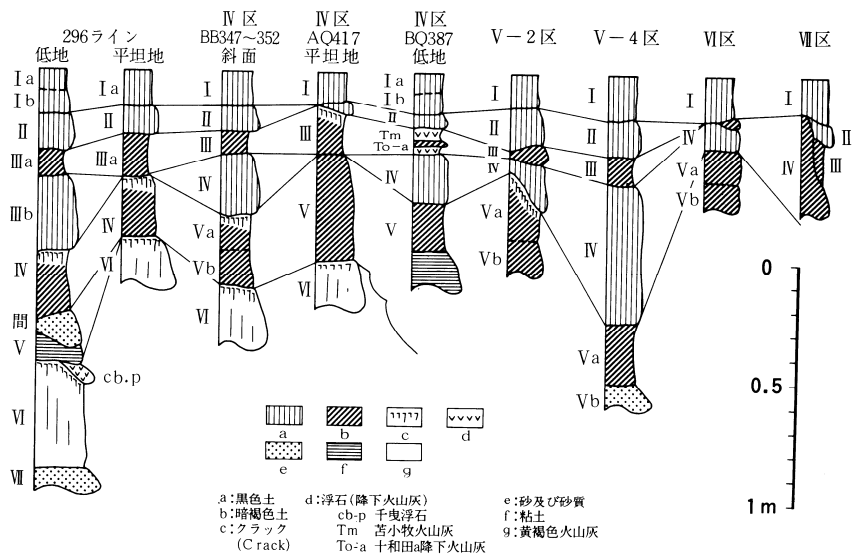
本遺跡から出土する遺物については、遺跡全体が耕作による攪乱があるためプライマリー (Primary) な状態での確認は困難である。概して、Ⅲ層下部からⅣ層上部にかけて縄文時代前期～後期の遺物が出土している。ただ平坦地においては、風成作用によりⅤ層中に含まれることもある。なお第Ⅵ区ではⅣ層上部より縄文時代中期、Ⅳ層下部から前期、そしてⅤ層上部 (Ⅴ a 層) からは早期の遺物が出土している。ところで昭和58年度発掘の大石平(1)遺跡においては、Ⅱ層下位～Ⅲ a 層上部から縄文時代後期、Ⅲ a 層下部～Ⅳ層上部からは前期の遺物が出土している。

参考文献

- | | | |
|------|-----------------|-------------|
| 1976 | 千歳遺跡(13)発掘調査報告書 | 青森県教育委員会 |
| 1981 | 科学Vol. 51. No.9 | 町田・新井・森協 |
| 1982 | 発茶沢遺跡 | 青森県教育委員会 |
| 1983 | 鶉窪遺跡 | 青森県教育委員会 |
| 1983 | 古文化財教育研究報告No.12 | 三辻・松山・山本・高林 |
| 1985 | 大石平遺跡 | 青森県教育委員会 |



第3図 遺跡周辺の地形分類図



第4図 遺跡内における土層の模式柱状図

第IV章 検出遺構と出土遺物

第1節 IV 区

1. 検出遺構

IV区で検出した遺構の総数は、205基であり、その種別は次のとおりである。

竪穴住居跡	13軒（縄文期…11軒、弥生期…2軒）
土壇	166基（160基がIV—1区、6基がIV—2区）
溝状ピット	1基
焼土状遺構	10基
屋外炉	3基
配石	12基（12基が狭い範囲にまとまっている）

これらの遺構の検出位置をみると、その大半が湧水のあるIV—1区に集中しており、わずかに溝状ピット1基とフラスコ状ピット6基が調査区南西側のIV—2区、（CK—432）グリッドを中心にした狭少範囲に、また、12基の配石も狭少範囲で、調査区北西隅に各々位置している。

（遠藤）

(1) 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡（第7図、第8図）

〈位置〉CP～CR—385—387グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉西側の1/2しか確認できなかったが、8.0m×約5.5mの楕円形と思われ、推定床面積は約35.5㎡である。

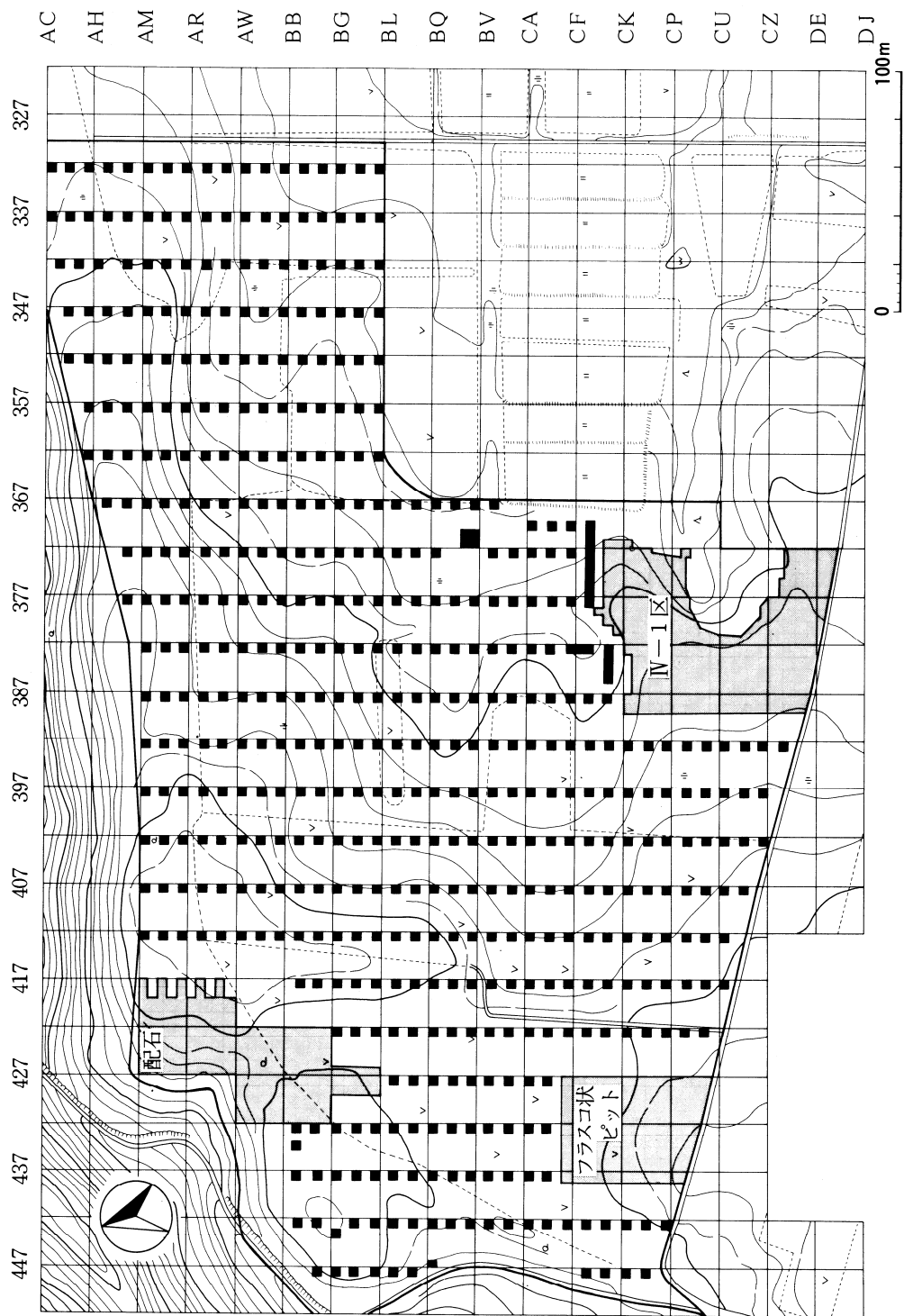
〈重複〉北東に検出した第8号焼土遺構と隣接、又は重複関係にあると思われるが、確認できなかった。

〈堆積土〉5層に区分できた。自然堆積である。

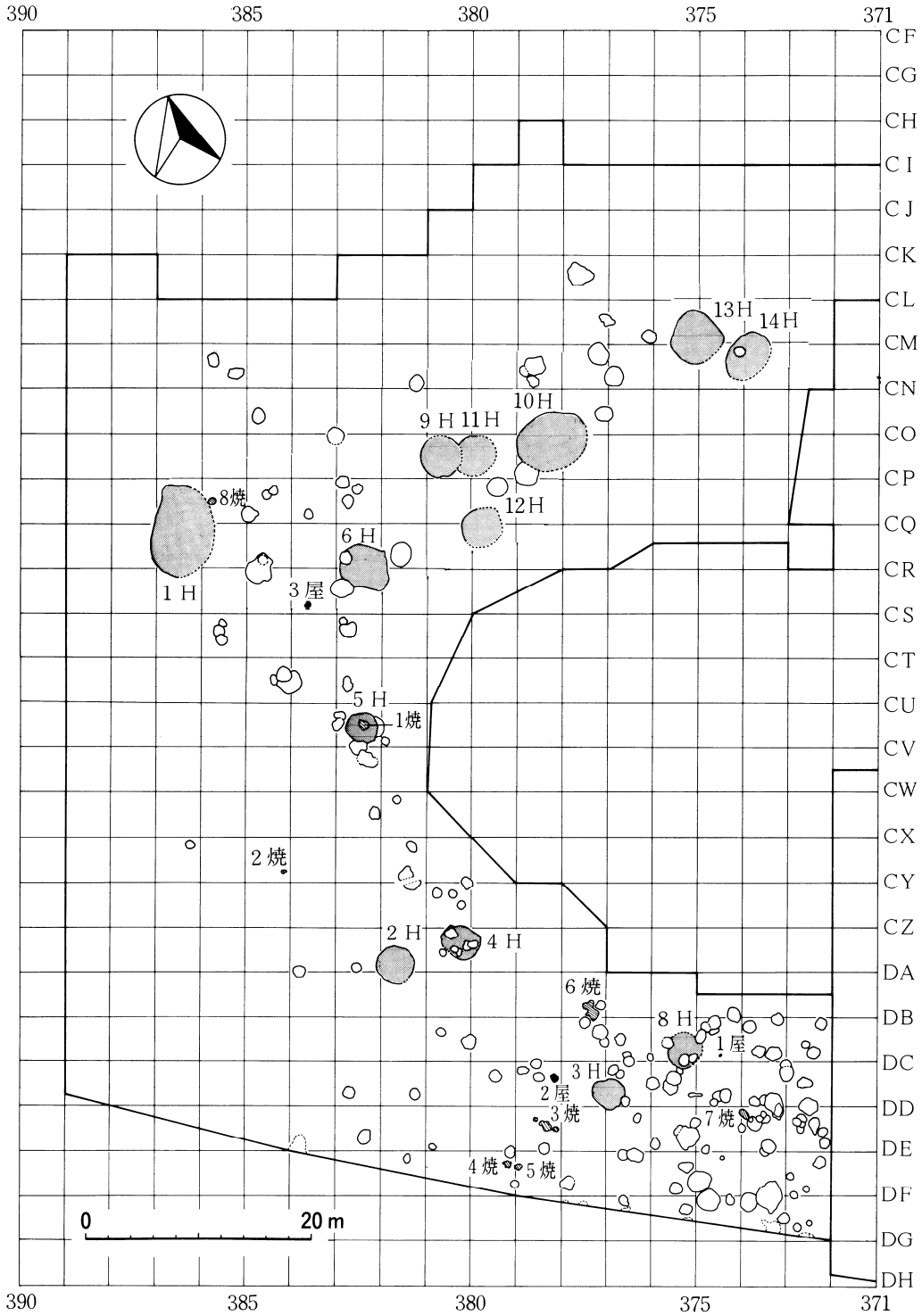
〈壁・床〉東側の壁は確認できなかった。壁高は南壁12cm、西壁13cm、北壁13cmで、壁の立ち上がりは急である。床面は、比較的堅緻で、平坦であるが、炉の周辺は10cm程低くなっている。

〈柱穴〉住居跡内から22個、外から3個のピットを検出した。主柱穴と思われるのは、ピット1・2・4・5である。他の小ピットのいくつかは、補助柱穴と思われる。また、住居跡外のピットが、本住居跡と関連をもつかどうかは、不明である。

〈炉〉住居跡の、ほぼ中央に土器埋設炉がつくられている。炉の構築は、径34cm×28cmで深さ20cmの円形のピットを掘り、そのピット内に土器（第VI群土器）を埋設したものである。また、南側に床面が焼けた部分が見られ、補助的な炉（地床炉）と思われる。



第5図 IV区調査グリッド配置図



第6図 IV-1区遺構配置図 (土壌番号は第23図に記載
H…竪穴住居跡 焼…焼土状遺構 屋…屋外炉)

〈出土遺物〉ピット4から、第Ⅵ群土器の壺形土器（第8図2）が出土した。このほかには、覆土及び床面から、第Ⅳ群土器が多数出土したが、第Ⅵ群土器は、小破片のものが数点出土したにすぎない。石器は、覆土中からは石鏃1点、不定形石器（F—Ⅱd類）1点、ピエス・エスキューユ2点、床面下位からは石鏃1点、床面直上から敲磨器3点、石皿類3点が出土している。

第2号竪穴住居跡（第9図）

〈位置〉CZ・DA—381・382グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉3.3m×3.15mのほぼ円形を呈し、床面積は7.8㎡である。

〈堆積土〉4層に区分できた。自然堆積である。

〈壁・床〉壁高は東壁7cm、南壁11cm、西壁14cm、北壁7cmで、壁の立ち上がりは急である。床面は堅韌で、平坦である。

〈柱穴〉住居跡内から8個の小ピットを検出した。ピット3・8以外は、30cm前後の深さを持ち、柱穴と考えられる。配置からは、ピット1・2・4～6の5本柱か、ピット1・2・4・6の4本柱と考えられる。

〈炉〉地床炉である。径40cm×45cmのほぼ円形を呈し、若干凹んでいる。炉は中央から、やや東側に寄っている。

〈出土遺物〉床面及び床面直上から、第Ⅳ群土器が出土した。また、第Ⅰ群土器の尖底部が覆土中から出土した。石器では、不定形石器（F—Ⅱ類）と敲磨器各1点と、石皿類2点が出土した。

第3号竪穴住居跡（第10図）

〈位置〉DC・DD—376・377グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉3.0m×2.7mの楕円形を呈し、床面積は4.0㎡である。

〈重複〉南東壁を第27号土壌に切られている。

〈堆積土〉5層に区分できた。自然堆積と思われる。

〈壁・床〉壁高は東壁20cm、南壁28cm、西壁30cmで、北壁27cmで、壁の立ち上がりは緩やかである。壁・床ともに軟弱である。

〈柱穴〉及び〈炉〉は検出できなかった。

〈出土遺物〉覆土中から、第Ⅳ群土器が多数出土した。石器では、石鏃・不定形石器（F—Ⅲ類）・敲磨器（凹石）が各1点と石皿2点が出土した。

第4号竪穴住居跡（第11図）

〈位置〉CZ・DA—379・380グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉3.2m×2.92mの楕円形を呈し、床面積は7.0㎡である。

〈重複〉第9 a・b号、第30号、第34 a・b号土壙を切って構築している。

〈堆積土〉9層に区分できた。自然堆積と思われる。

〈壁・床〉壁高は、東壁5cm、南壁17cm、西壁19cm、北壁5cmである。床面は東へ向かって低くなり、西と東の比高差は8cmである。

〈柱穴〉住居内から5個のピットを検出した。ピット4は45cmの深さがあり、柱穴と思われるが、他のピットは20cm前後で、やや浅い。配置からは柱穴の可能性のあるものの、疑問である。

〈炉〉住居跡の中央から東側につくられた石囲炉である。炉の北側に石の抜取痕を検出したことから、これと3個の礫とで、「コ」の字状に組んだものと考えられる。また、炉の南側は、4cmほどの高まりが見られ、炉壁の一部をなしていたものと思われる。

〈出土遺物〉覆土中から、第I群土器が1点の他、第IV群土器が若干出土した。石器は、ピエス・エスキューユと石皿が各1点出土している。

第5号竪穴住居跡（第11図、第12図）

〈位置〉CU-382グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉2.91m×2.6mのやや不整な円形を呈し、床面積は4.6㎡である。

〈重複〉第108号・第114号土壙を切って構築している。

〈堆積土〉5層に区分できた。自然堆積と思われる。

〈壁・床〉壁高は東壁46cm、南壁34cm、西壁49cm、北壁42cmで、壁の立ち上がりは急である。壁・床ともに堅緻である。床面はほぼ平坦で、第114号土壙の上部にロームを貼っている。

〈柱穴〉住居内から深さ19cmのピット1個を検出したが、柱穴かどうか不明である。

〈炉〉中央から、やや南側に寄る。炉の南側に1個の礫があり、他に礫の抜取痕を検出できなかったので、単独礫炉と思われる。

〈出土遺物〉床面及び床面直上から、第IV群土器が出土した。石器は、石鏃と石皿の破損品が床面から出土している。

第6号住居跡（第12図、第13図）

〈位置〉CQ・CR-381・382グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉4.24m×3.76mの不整楕円形を呈し、床面積は12.7㎡である。

〈重複〉第66号、第116号土壙に切られている。

〈堆積土〉壁高があまりなく、堆積土は2層しか確認できなかった。

〈壁・床〉壁高は南壁9cm、北壁9cmである。床面は沢（東）に向かって低くなり、東西の比高差は13cmである。

〈柱穴〉住居跡内から、大小あわせて7個のピットを検出した。ピット2・3は主柱穴の可能性が考えられる。ピット4は浅いことから、6は配置から、柱穴かどうか判断できない。

〈炉〉中央から、わずかに北東寄りに位置する。方形に石を組んだ石囲炉である。

〈出土遺物〉覆土中から、若干の第Ⅳ群土器が出土した。

第8号竪穴住居跡（第13図、第14図）

〈位置〉DB・DC—374・375グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉確認した部分から推定して、径約3.2mの円形か楕円形を呈すると思われる。

〈重複〉北壁は第84号土壌に切られ、南側では、第133a・b土壌、第134号土壌を切っている。また北東では第135号土壌と重複関係にあると思われるが、確認できなかった。

〈堆積土〉第Ⅵ層を2cm位しか掘り込んでないため、確認した覆土は薄い。シルト質の暗褐色土で、粘性、しまりとも弱いものが堆積していた。

〈壁・床〉西側の約1/2しか確認できなかった。壁高は南西壁で2cm前後である。床面は、全体に軟弱であるが、炉の周辺は堅緻である。

〈柱穴〉大小合わせて17個のピットを検出した。ピット15は、第84号土壌に切られた時の断面から柱穴であることが確認できた。配置及び深さからは、ピット15の他に、2・7a・7C・9～11などが柱穴と考えられるが、断定できない。

〈炉〉地床炉である。

〈出土遺物〉床面及び床面直上から、多数の土器（第Ⅳ群）・石器が出土した。また、ピット4から小形の壺が出土した（第13図7）。第13図12は器面の内外に、連続山形文が施文されている。石器は、石鏃1点、不定形石器5点（F—Ⅱ類1、F—Ⅲ類3、F—Ⅳ類1）、磨製石斧3点、石錘2点、敲磨器2点、石皿1点、軽石1点出土した。

第9号竪穴住居跡（第15図、第16図）

〈位置〉CO—380・381グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉3.5m×3.32mのほぼ円形を呈し、床面積は8.9㎡である。

〈重複〉東側で第11号住居跡を切って構築している。

〈堆積土〉7層に区分できた。覆土中（特に第3層）に焼土を多量に含んでいる。

〈壁・床〉壁高は南壁10cm、西壁38cm、北壁11cmで、壁は急に立ち上がっている。床面は、ほぼ平坦で、堅緻である。

〈柱穴〉16個のピットを検出した。このうち、ピット15・16は、第11号住居跡に伴うものかもしれない。

〈炉〉ほぼ中央に、地床炉を検出した。

〈出土遺物〉住居跡の床面東側から、4個体の土器が横転して出土した。P—1・3は壺形土器P—2・4は小形の鉢形土器である。P—2は、器内外面に連続山形文が施文されているもので、特殊な用途に用いられたものと考えられる。石器は敲磨器が3点、石皿1点出土した。

第10号竪穴住居跡（第17図、第18図）

〈位置〉C N・C O—377・378グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉北側しか確認できなかったが、確認できた部分では、長径（東西）6.5mの楕円形を呈するものと思われる。推定床面積は、約23㎡である。

〈重複〉西壁で、第119号土壌を切って構築している。

〈堆積土〉5層に区分した。自然堆積と思われる。

〈壁・床〉壁高は北壁が50cmで、壁は緩やかに立ち上がる。床面は、ほぼ平坦であるが、北西では若干高く、炉の周りとの比高差は28cmである。

〈柱穴〉大小合わせて、48個のピットを検出した。このうち支柱穴と考えられるのは、炉の局辺のピット1～8である。ピット1～4とピット5～7は、同時存在よりも、立て替え（拡張？）と考えられる。ピット1の南側には、ピット5～7に対応するピットを確認できなかった。しかし、黒色土を掘り込んでいるため、ピットの存在を鬼のがした可能性がある。また、壁際に沿って検出した多数の小ピットは、壁柱穴（補助柱穴）の可能性が考えられる。ピット14には、底部を欠いた浅鉢形土器が、正位に埋まっていた。

〈炉〉中央あるいは南側に少し寄った場所に、土器埋設石囲炉を検出した。石囲いに用いた礫をはずした床面上は、焼けて、硬くなっており、炉床と思われる。すなわち、この炉は当初、地床炉か、土器埋設炉として構築・使用され、後に円形に礫を組み、土器埋設石囲炉として再び構築されたものであろう。

〈出土遺物〉覆土内から、第I群・第IV群土器と第VI群土器が若干出土したほか、床面直上からは、第VI群土器の小破片が数点出土した。石器は、敲磨器2点と石皿1点が出土した。

第11号竪穴住居跡（第15図、第16図）

〈位置〉C O—379・380グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉径3.6m前後の（楕）円形を呈すると思われる。

〈重複〉第9号竪穴住居跡に西壁を切られている。

〈堆積土〉西壁の一部しか確認できなかった。そこでは、2層を確認できた。

〈壁・床〉北壁の壁高は18cmで、西壁は、第9号竪穴住居跡の床面より13cm低い。床面は、ほぼ平坦であるが、南に若干低くなり、その比高差は13cmほどである。

〈柱穴〉7個のピットを検出した。ピット1・3～5が柱穴と思われる。

〈炉〉地床炉である。

〈出土遺物〉炉の北側の床面から3～5cm浮いたところに、土器が横位に潰れた状態で出土した。図のP—1は、第16図3、P—2は1・2の2個体である。また、P—3は7・8・10である。7は第VI群土器であり、一見セット関係を思わせる出土状況であるが、いくらか混在し

ている証であろう。しかし、第16図1と2は同時期のものと考えられ、本住居跡の構築時期と深い関連をもつものと考えられる。石器は、石錘と敲磨器が各1点出土している。

第12号竪穴住居跡（第19図）

〈位置〉C P・C Q—379・380グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉北西側の一部しか確認できなかったが、確認できた部分から推定すると、円形か楕円形を呈するものと思われる。規模は不明である。

〈堆積土〉確認できた部分では、2層に区分できた。

〈壁・床〉確認できた北西壁の高さは17cmである。床面は沢に向かって低くなり、炉の近辺までの比高差は14cmである。

〈柱穴〉4個のピットを検出したが、柱穴かどうかは不明である。

〈炉〉方形の右囲炉である。

〈出土遺物〉覆土中から、第I群・第IV群土器のほか第VI群土器が出土した。また、床面直上から第IV群土器が出土した。石器は、敲磨器が4点出土した。

第13号竪穴住居跡（第20図、第21図）

〈位置〉C L・C M—374・375グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉南東壁を確認できなかったが、4.77m×4.76mの不整（楕）円形を呈する。推定床面積は14.5㎡である。

〈堆積土〉4層に区分できた。第3・4層は、沢に向かって見られ、壁は確認できなかった。

〈壁・床〉確認した北壁の高さは、21cmである。床面は、沢（南）に向かって低くなり、その比高差は18cmである。

〈柱穴〉大小合わせて、10個のピットを検出した。配置からピット1・5—7が柱穴と思われるが、断定はできない。

〈炉〉石囲炉である。中央から、幾分東に寄っている。

〈出土遺物〉覆土及び炉の上位から、若干の第IV群土器と、敲磨器・石皿（床直）が各1点出土した。

第14号竪穴住居跡（第20図、第21図）

〈位置〉C L・C M—373・374グリッドに位置する。

〈平面形・規模〉北東側の約1/2しか確認できなかったが、4.65m×(3.50)mの楕円形を呈すると思われる。

〈重複〉第132号土壇を切って構築している。

〈堆積土〉斜面を掘り込んでいるため、南側は確認できなかった。確認できた北側では、5層に区分できた。このうち、第5層には焼土をブロック状に含んでいる。

〈壁・床〉壁高は北壁が37cmで、やや急に立ち上がっている。床面は、沢に向かって、やや低くなり、炉の近辺までの比高差は10cmほどである。

〈柱穴〉2個の小ピットを検出した。ピット1（深さ39cm）は、土壌との切合い面と覆土の違いから、柱穴であることが確認できたが、ピット2は、柱穴かどうかは不明である。

〈出土遺物〉覆土及び床面直上から、若干の第IV群土器と、ピエス・エスキューユ1点、床面から敲磨器1点が出土した。 (畠山)

第1表 竪穴住居跡ピットの深さ一覧（単位：cm）

第1号竪穴住居跡

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
深さ	52	62	29	44	61	24	11	13	13	13	11	8	14	7	11	20	3	4	5	6
番号	21	22	23	24	25															
深さ	6	4	10	3	14															

第2号竪穴住居跡

番号	1	2	3	4	5	6	7	8												
深さ	28	32	7	27	31	31	28	7												

第4号竪穴住居跡

番号	1	2	3	4	5															
深さ	21	23	17	45	16															

第6号竪穴住居跡

番号	1	2	3	4	5	6	7													
深さ	23	34	30	18	7	69	21													

第8号竪穴住居跡

番号	1	2	3	4	5	6	7a	7b	7c	8	9	10	11	12	13	14	15			
深さ	51	28	16	14	18	20	42	15	35	56	26	44	28	16	11	21	37			

第9号竪穴住居跡

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16				
深さ	44	30	31	29	30		8	11	18	54	51	58	25	10	10	26				

第10号竪穴住居跡

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
深さ	43	51	52	55	49	77	65	67 ^{10+a}	51	9	21	14	22	17	15	28	37	17	19	
番号	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
深さ	9	32	26	12	12	10	13	8	13	7	26	3	3	14	7	11	19	15	23	15
番号	41	42	43	44	45	46	47	48												
深さ	15	15	42	43	36	12	23	16												

第11号竪穴住居跡

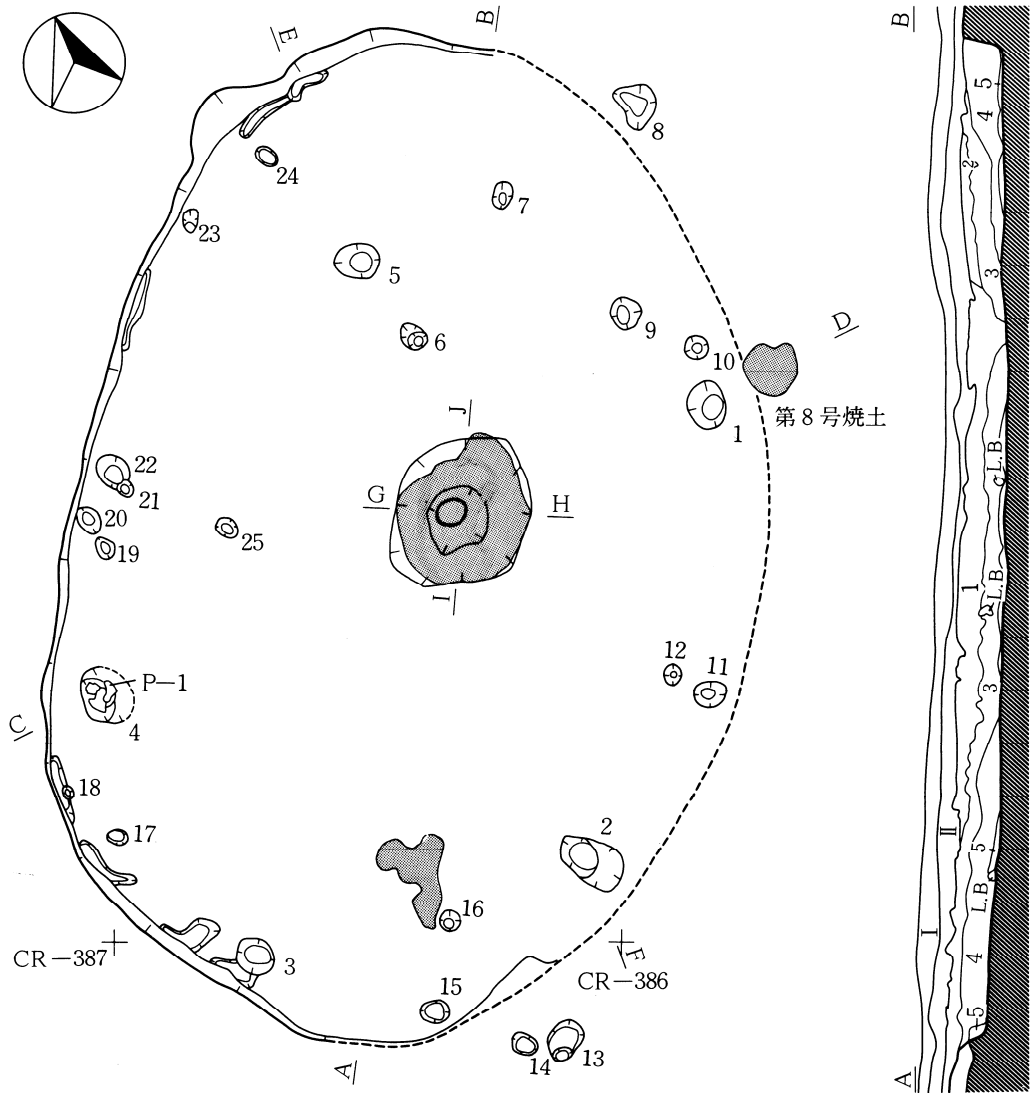
番号	1	2	3	4	5	6	7													
深さ	48	25	40	32	40	6	7													

第12号竪穴住居跡

番号	1	2	3	4																
深さ	22	13	6	9																

第13号竪穴住居跡

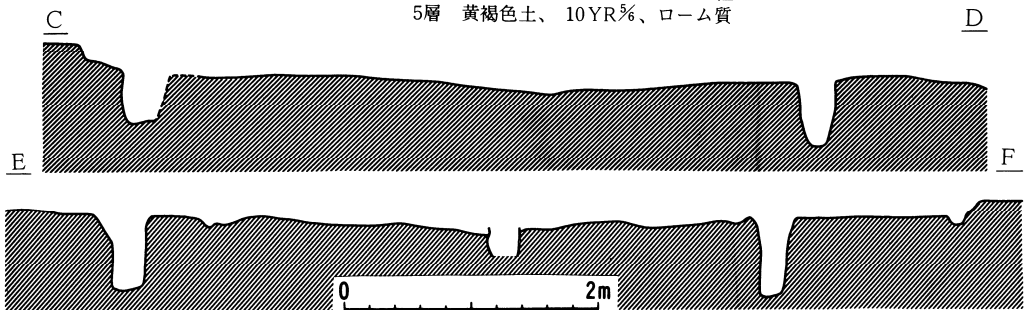
番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10										
深さ	16	11	25	8	18	15	19	7	5	21										



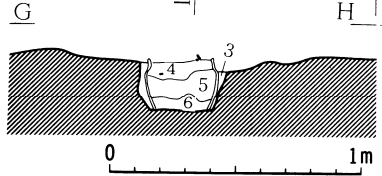
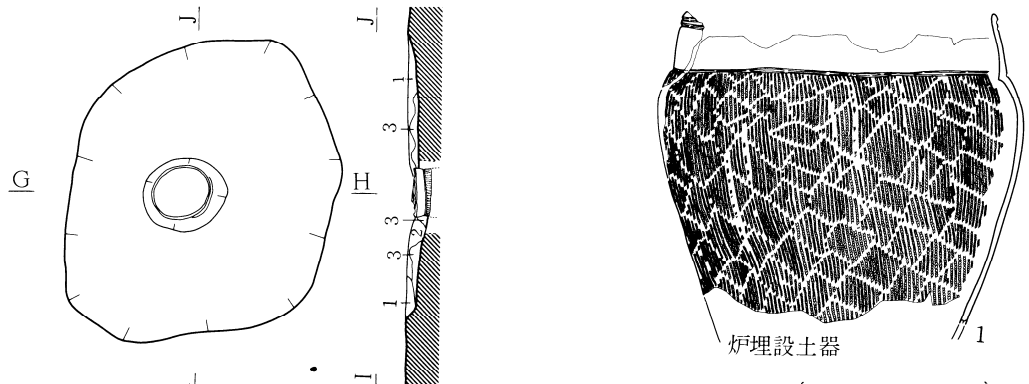
土層注記

- 1層 黒色土、7.5YR $\frac{2}{1}$ 、やや硬い
- 2層 暗褐色土、10YR $\frac{3}{4}$ 、軟らかい混入、カーボン混入
- 3層 褐色土、10YR $\frac{6}{4}$ 、ローム粒混入、カーボン混入
- 4層 暗褐色土、10YR $\frac{3}{4}$ 、ローム粒
- 5層 黄褐色土、10YR $\frac{6}{4}$ 、ローム質

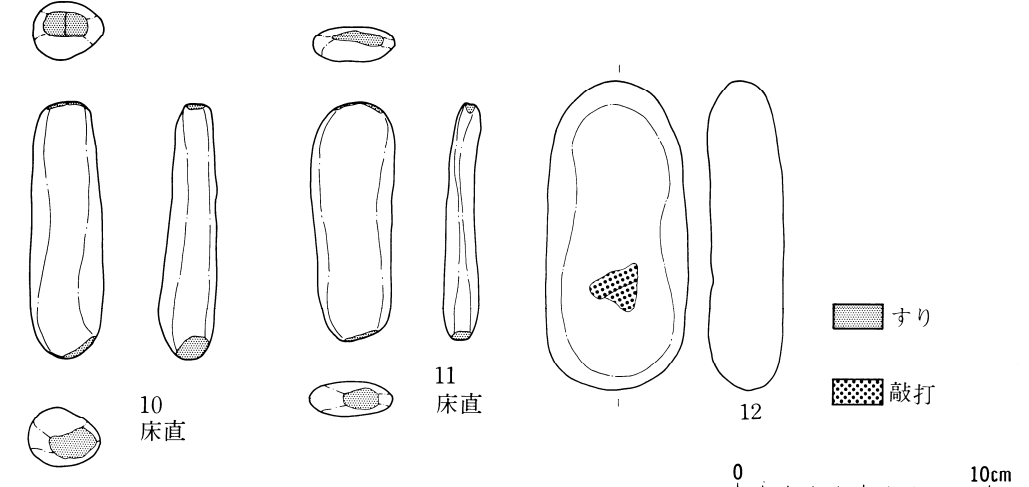
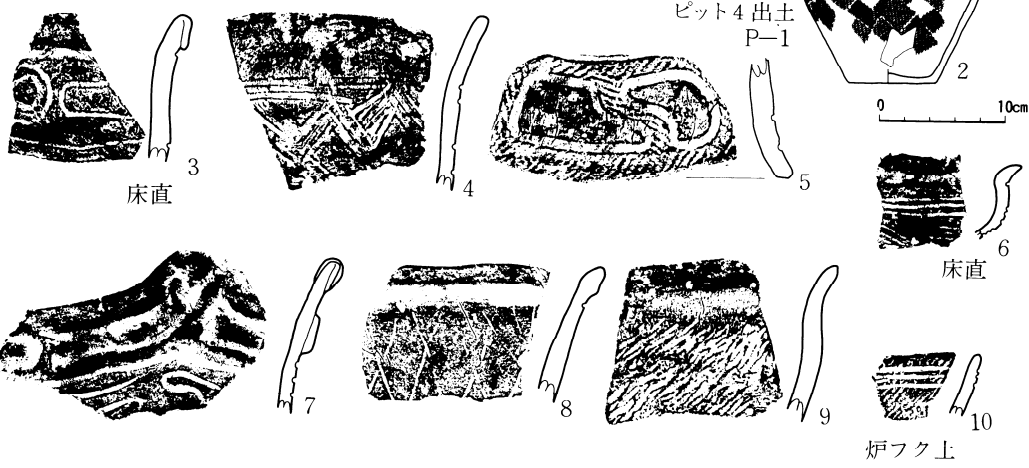
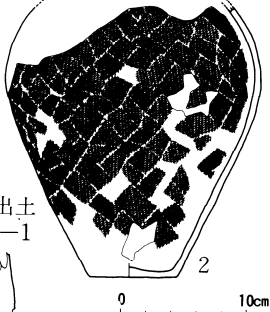
■ 焼土



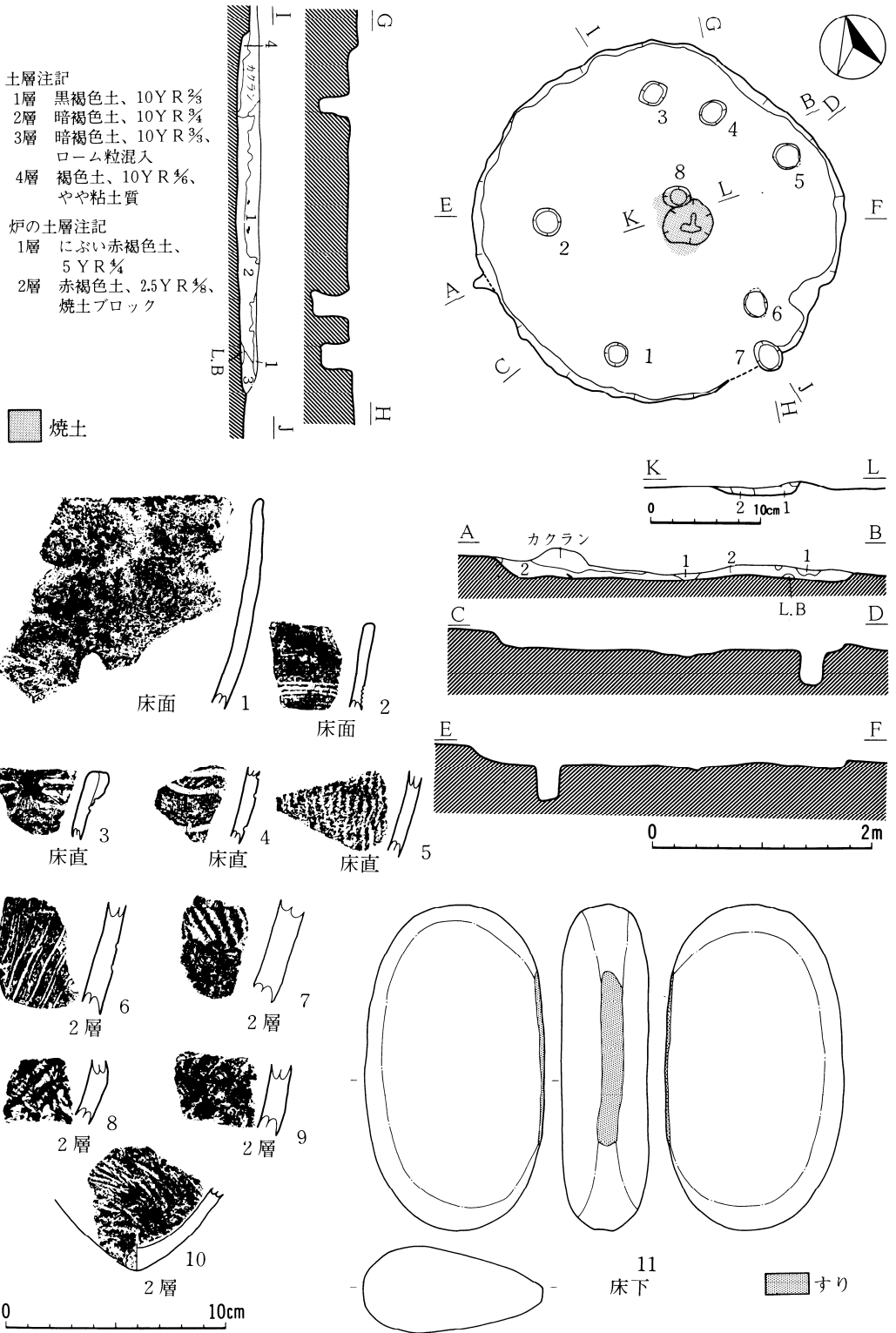
第7図 第1号竪穴住居跡



- 土層注記
- 1層 黒褐色土、5 Y R 3/4
 - 2層 黒褐色土、5 Y R 3/4
 - 3層 にぶい赤褐色、5 Y R 4、焼土
 - 4層 黒褐色土、10 Y R 2/4、焼土を微量含有
 - 5層 褐色土、10 Y R 4、焼土多量に含有
 - 6層 黒色土、7.5 Y R 4、軟らかい、焼土微量、カーボン多量含有



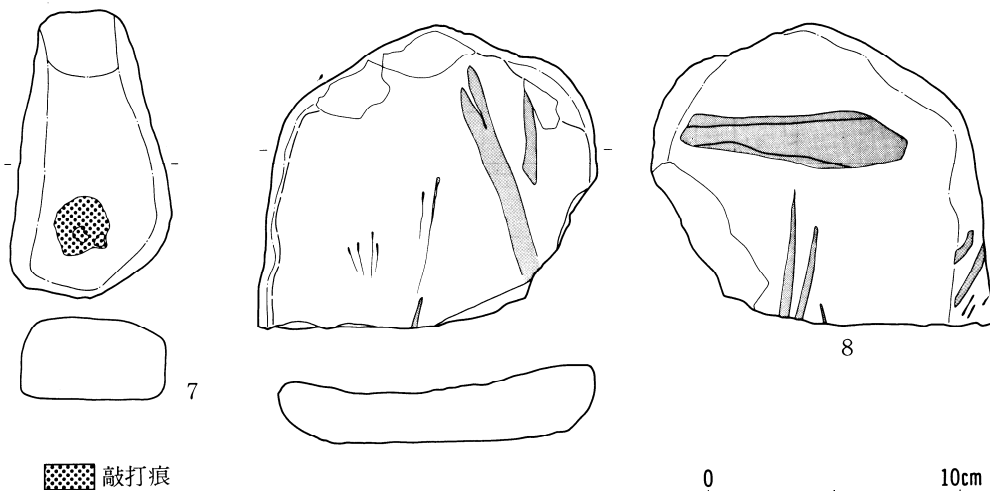
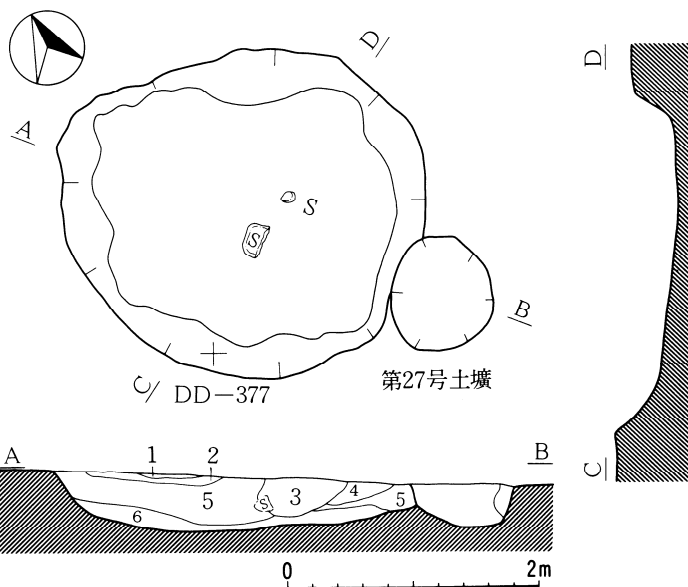
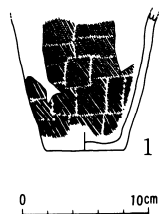
第8図 第1号竪穴住居跡の炉と出土遺物



第9図 第2号竪穴住居跡と出土遺物

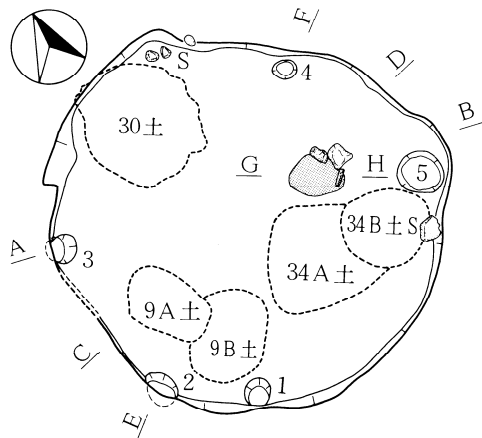
土層注記

- 1層 暗褐色土、10YR $\frac{3}{4}$ 、ローム・焼土粒を含む。
- 2層 褐色土、10YR $\frac{3}{4}$ +黄褐色土、10YR $\frac{3}{4}$ 、硬く、しまりある
- 3層 黄褐色土、10YR $\frac{3}{4}$
- 4層 暗褐色土、10YR $\frac{3}{4}$ 、ローム・ブロックを若干含む
- 5層 暗褐色土、10YR $\frac{3}{4}$ 、ローム粒を多く含む
- 6層 黄褐色土、10YR $\frac{3}{4}$ 、軟らかくしまりない

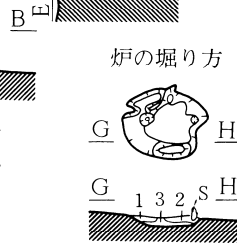
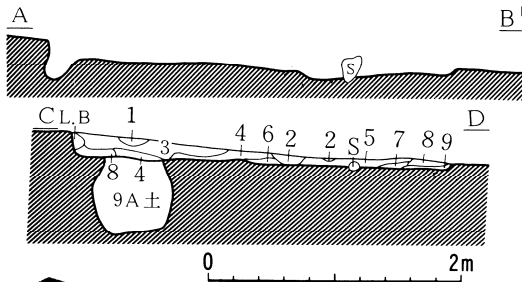


敲打痕

第10図 第3号竪穴住居跡と出土遺物

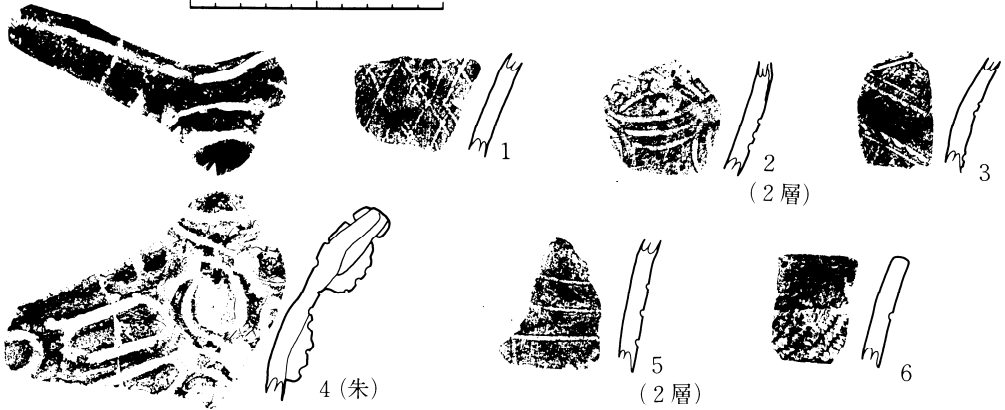


- 土層注記
- 1層 褐色土、10YR 4/
 - 2層 黒褐色土、10YR 2/、カーボン微量混入
 - 3層 黒褐色土、10YR 2/、ローム粒を微量混入
 - 4層 暗褐色土、10YR 3/、ローム粒を微量混入
 - 5層 褐色土、10YR 4/、カーボンと焼土を微量混入
 - 6層 黄褐色土、10YR 6/
 - 7層 黄褐色土、10YR 6/
 - 8層 暗褐色土、10YR 3/、カーボン少量混入
 - 9層 褐色土、10YR 4/、ローム粒混入

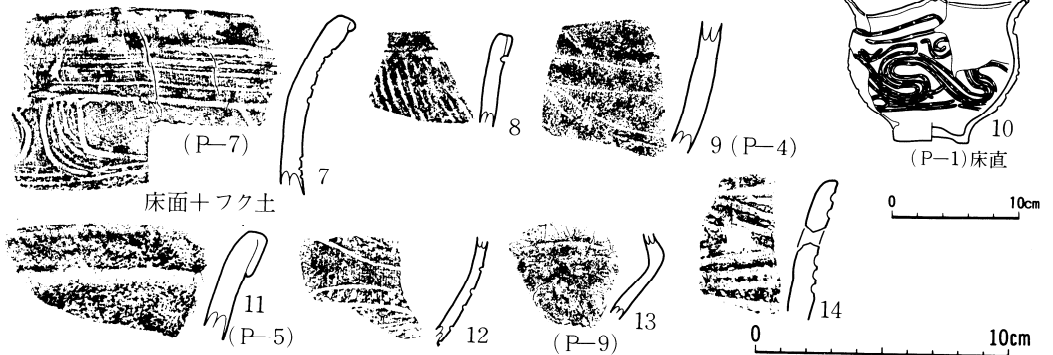


- 炉の土層注記
- 1層 暗褐色土、7.5YR 3/、ローム粒と焼土混入
 - 2層 褐色土、7.5YR 4/、ローム粒・焼土・カーボン混入
 - 3層 赤褐色土、5YR 6/、焼土、カーボン混入

■ 焼土

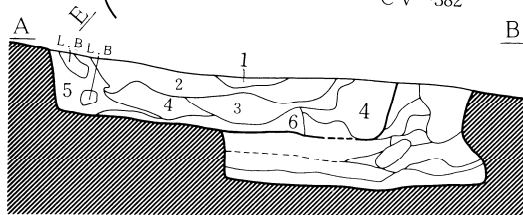
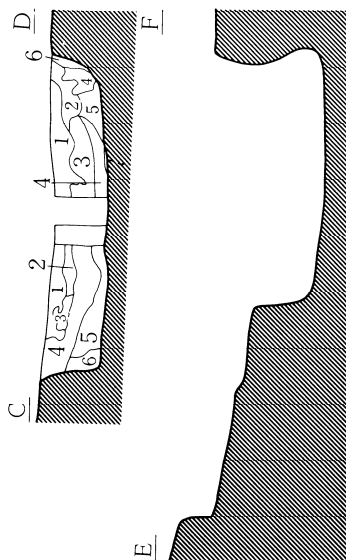
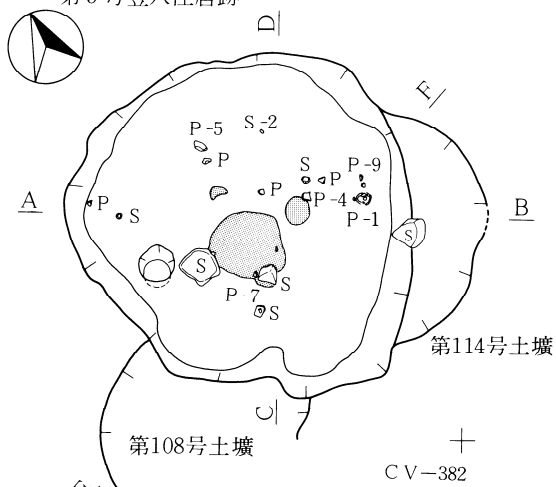


第5号竪穴住居跡出土土器



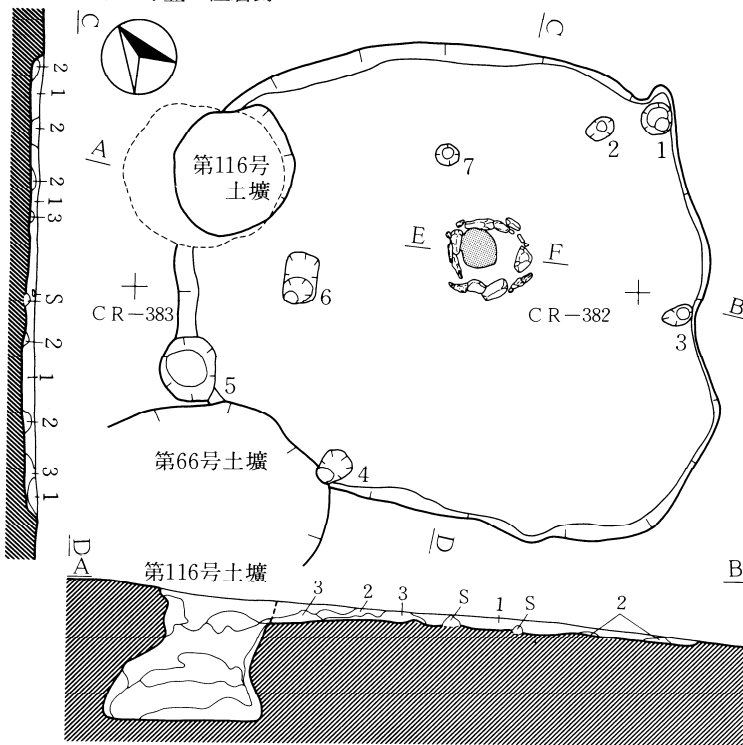
第11図 第4号竪穴住居跡と出土土器及び第5号竪穴住居跡出土土器

第5号竖穴住居跡

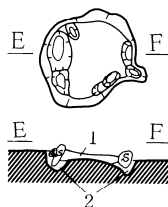


- 土層注記
- 1層 黒褐色土、10YR 5/2、粘性・しまりない
 - 2層 黒褐色土、10YR 5/2、粘性・しまりない、ローム混入
 - 3層 暗褐色土、10YR 5/3、粘性・しまりともややある、ローム混入
 - 4層 褐色土、10YR 5/4、粘性ない、しまり強い、ローム混入
 - 5層 暗褐色土、10YR 5/3、粘性・しまりない、ローム混入
 - 6層 黄褐色土、10YR 5/6、粘性強くしまりない、ローム質

第6号竖穴住居跡

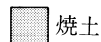


炉の掘り方



- 土層注記
- 1層 暗褐色土、10YR 5/3、粘性・しまりない、ローム混入
 - 2層 褐色土、10YR 5/4、粘性・しまりない、カーボン混入
 - 3層 黄褐色土、10YR 5/6、ローム質

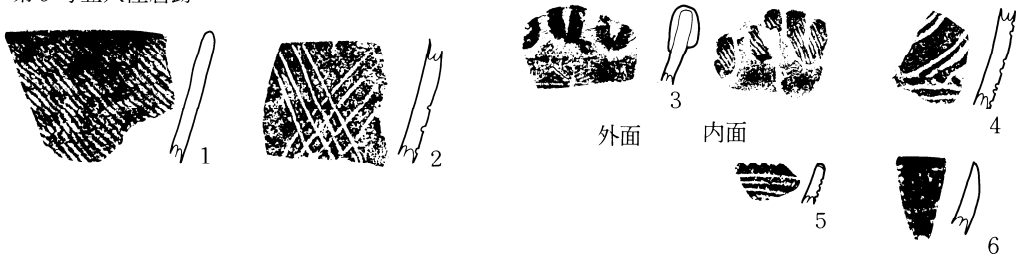
- 炉の土層注記
- 1層 褐色土、10YR 5/4、焼土・カーボン混入
 - 2層 褐色土、10YR 5/4～黄褐色土、10YR 5/6、焼土・カーボン混入



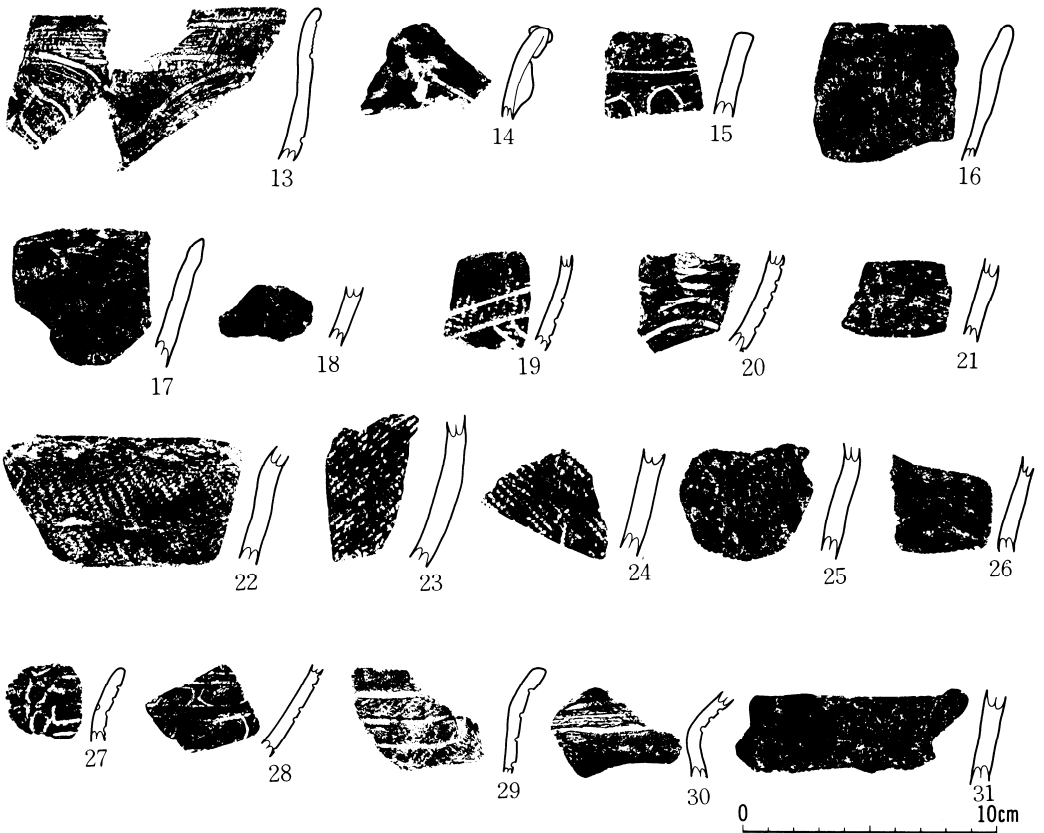
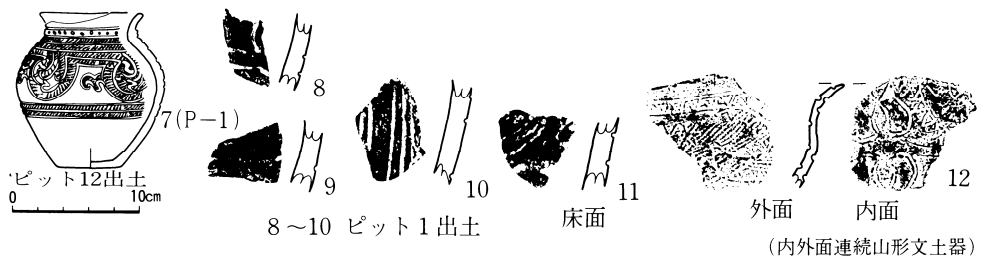
0 2m

第12図 第5号・第6号竖穴住居跡

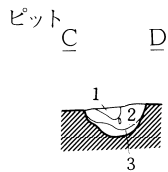
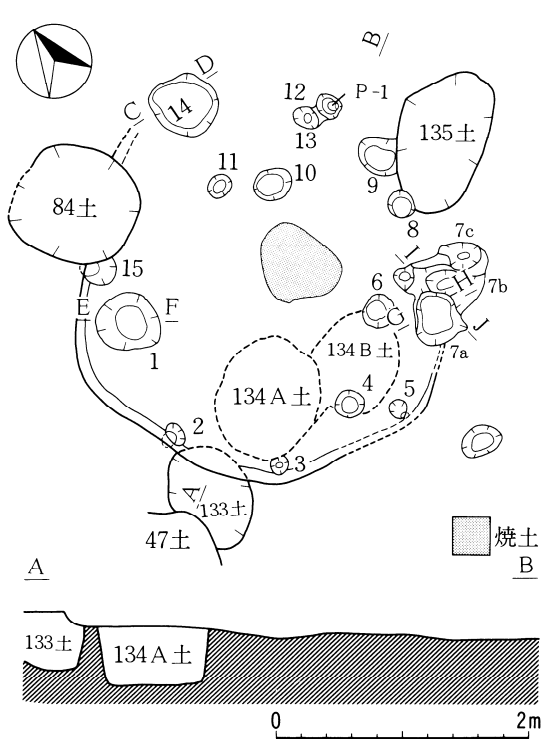
第6号竖穴住居跡



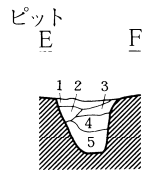
第8号竖穴住居跡



第13図 第6号・第8号竖穴住居跡出土遺物



土層注記
 1層 暗褐色土、7.5YR 5/6
 2層 暗褐色土、7.5YR 5/6
 3層 褐色土、7.5YR 5/6

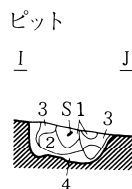


土層注記
 1層 暗褐色土、7.5YR 5/6
 2層 暗褐色土、7.5YR 5/6
 3層 暗褐色土、7.5YR 5/6
 4層 褐色土、7.5YR 5/6
 5層 明褐色土、7.5YR 5/6

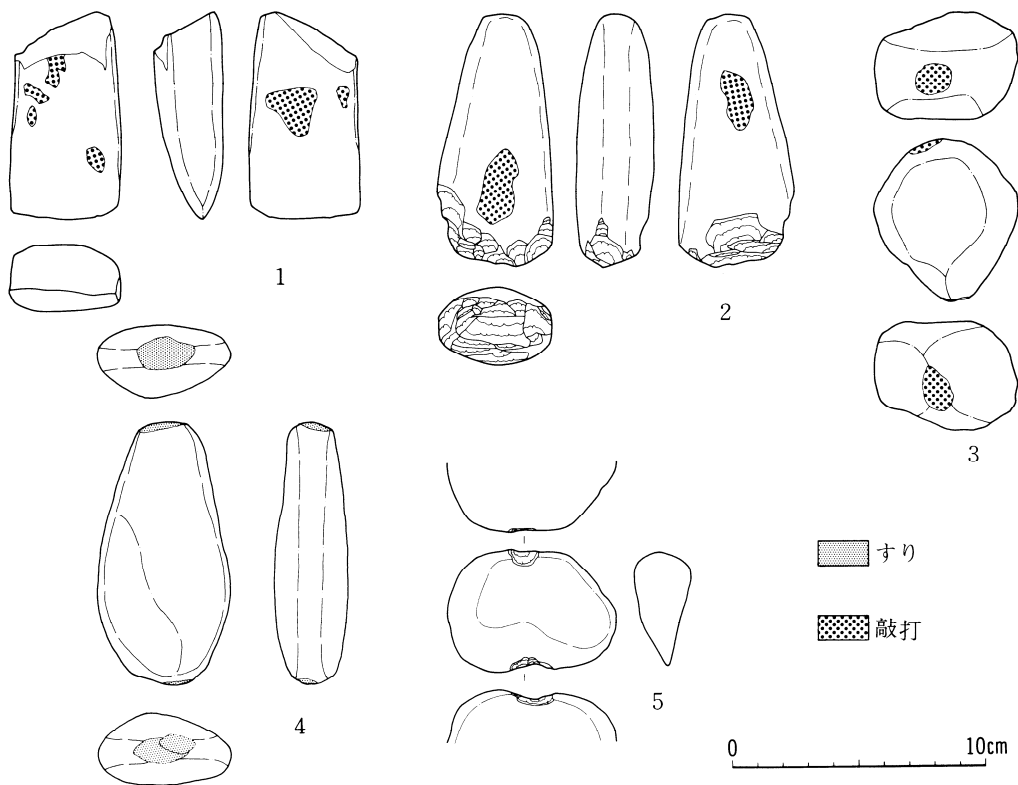
第1号屋外炉
 ピット
 G H



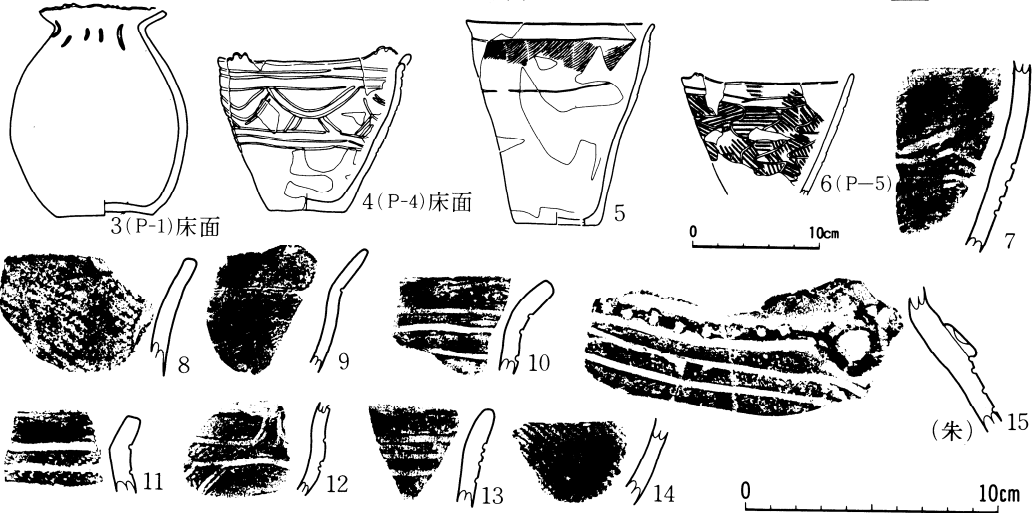
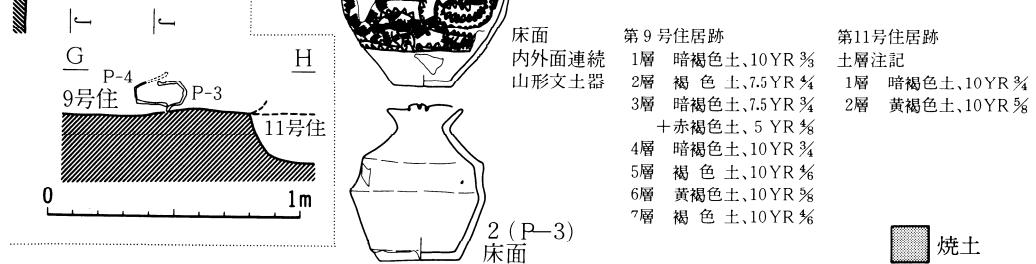
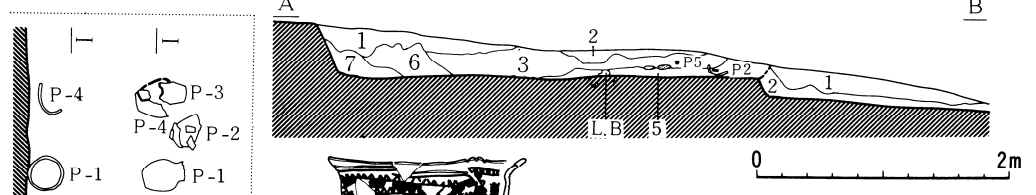
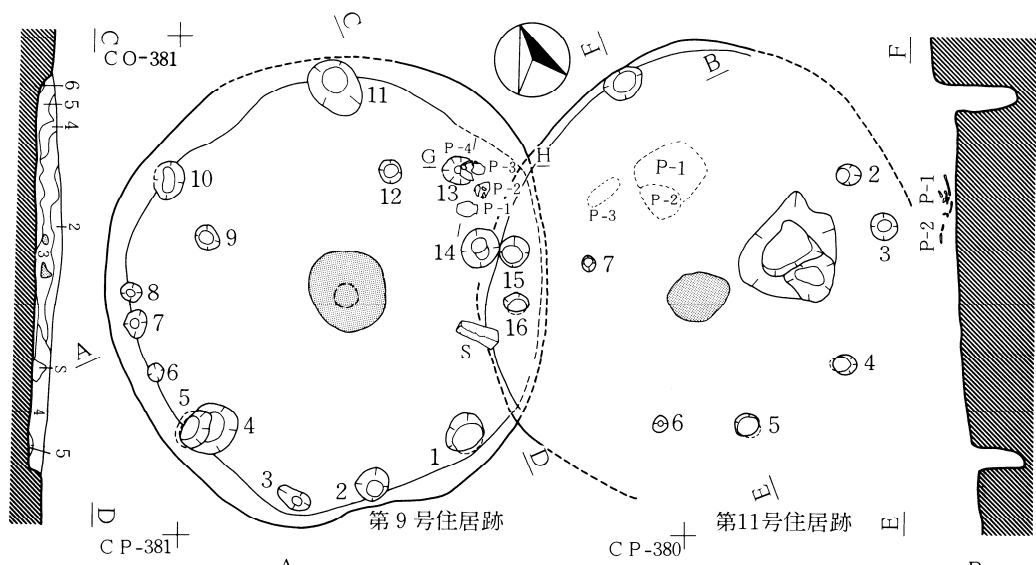
土層注記
 1層 暗褐色土、7.5YR 5/6
 2層 暗褐色土、7.5YR 5/6
 3層 黄褐色土、10YR 5/6
 4層 黒褐色土、7.5YR 5/6



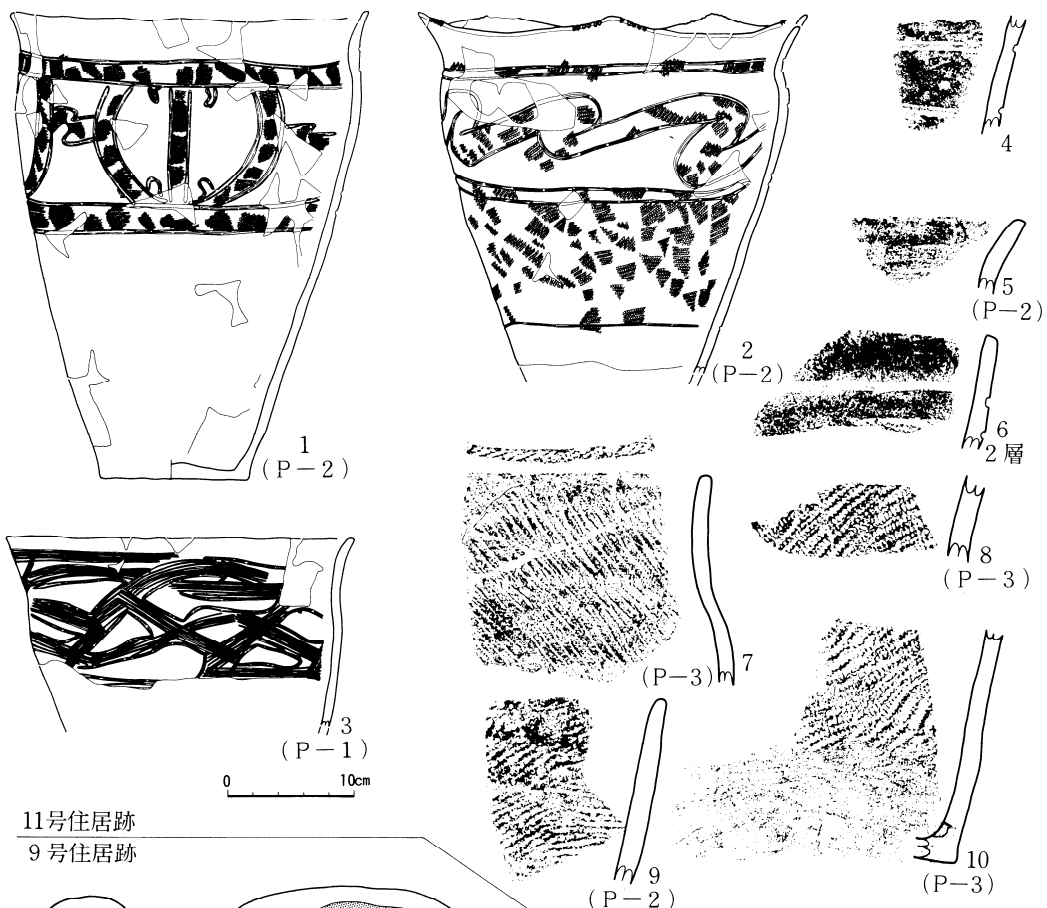
土層注記
 1層 暗褐色土、7.5YR 5/6
 2層 褐色土、7.5YR 5/6
 3層 暗褐色土、7.5YR 5/6
 4層 暗褐色土、10YR 5/6
 + 黄褐色土、10YR 5/6



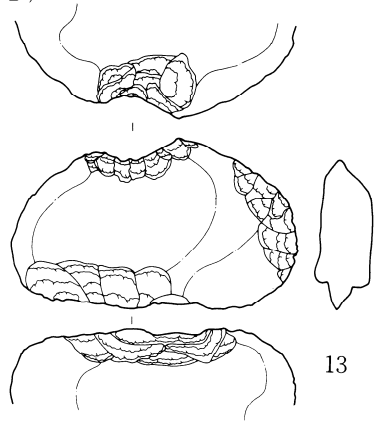
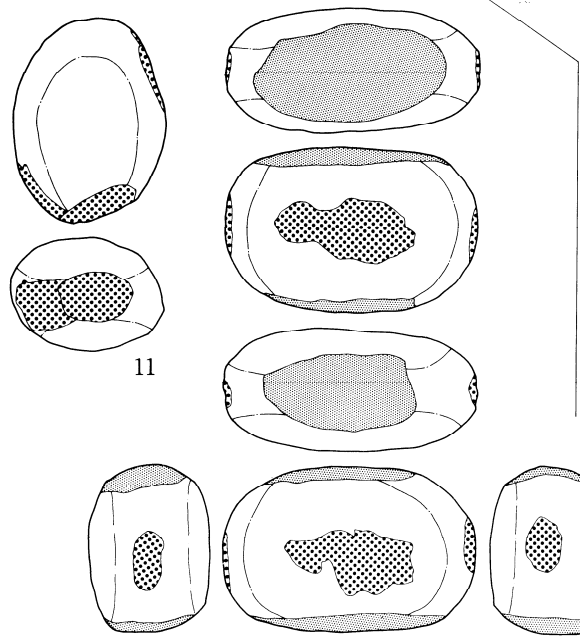
第14図 第8号竖穴住居跡と出土遺物



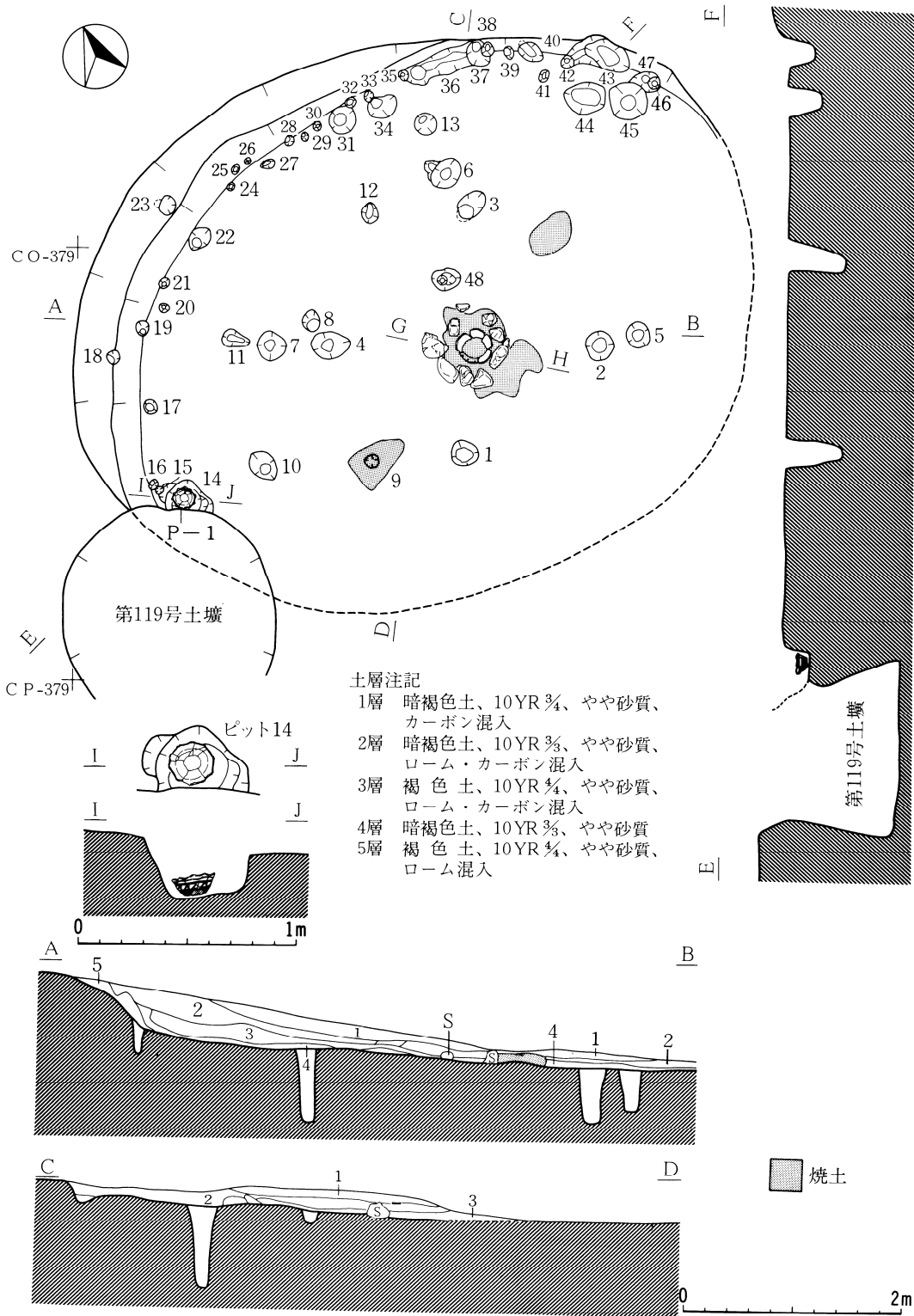
第15図 第8号・第11号竖穴住居跡と第9号竖穴住居跡出土土器



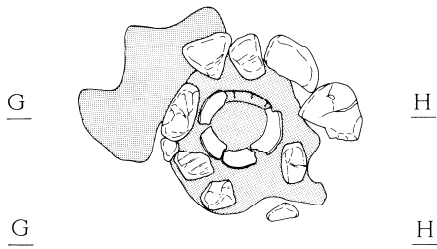
11号住居跡
9号住居跡



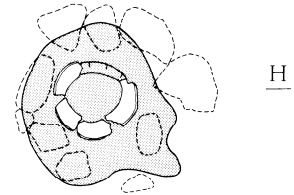
第16図 第9号竖穴住居跡出土石器、第11号竖穴住居跡出土遺物



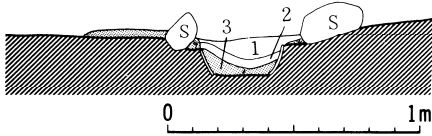
第17図 第10号竪穴住居跡



炉石除去

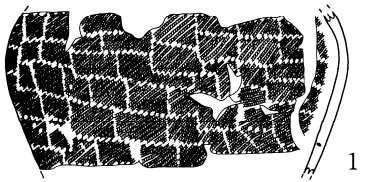


炉石除去後の火床面

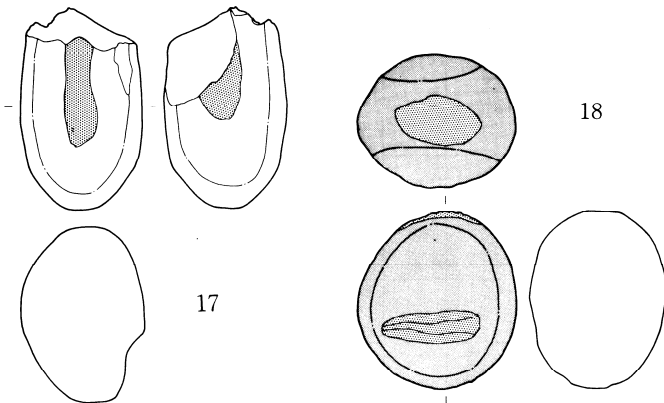
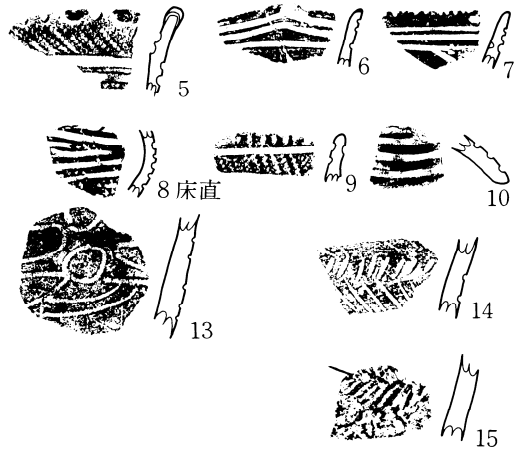
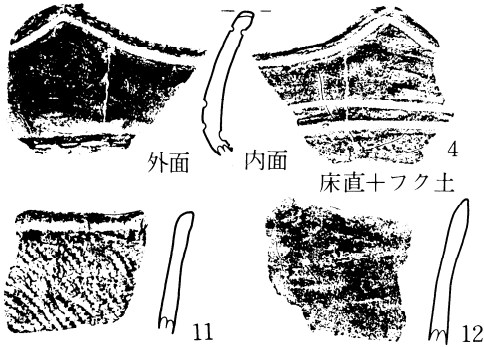
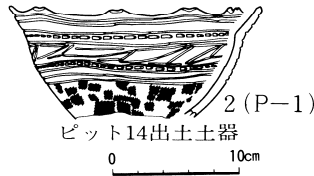


土層注記

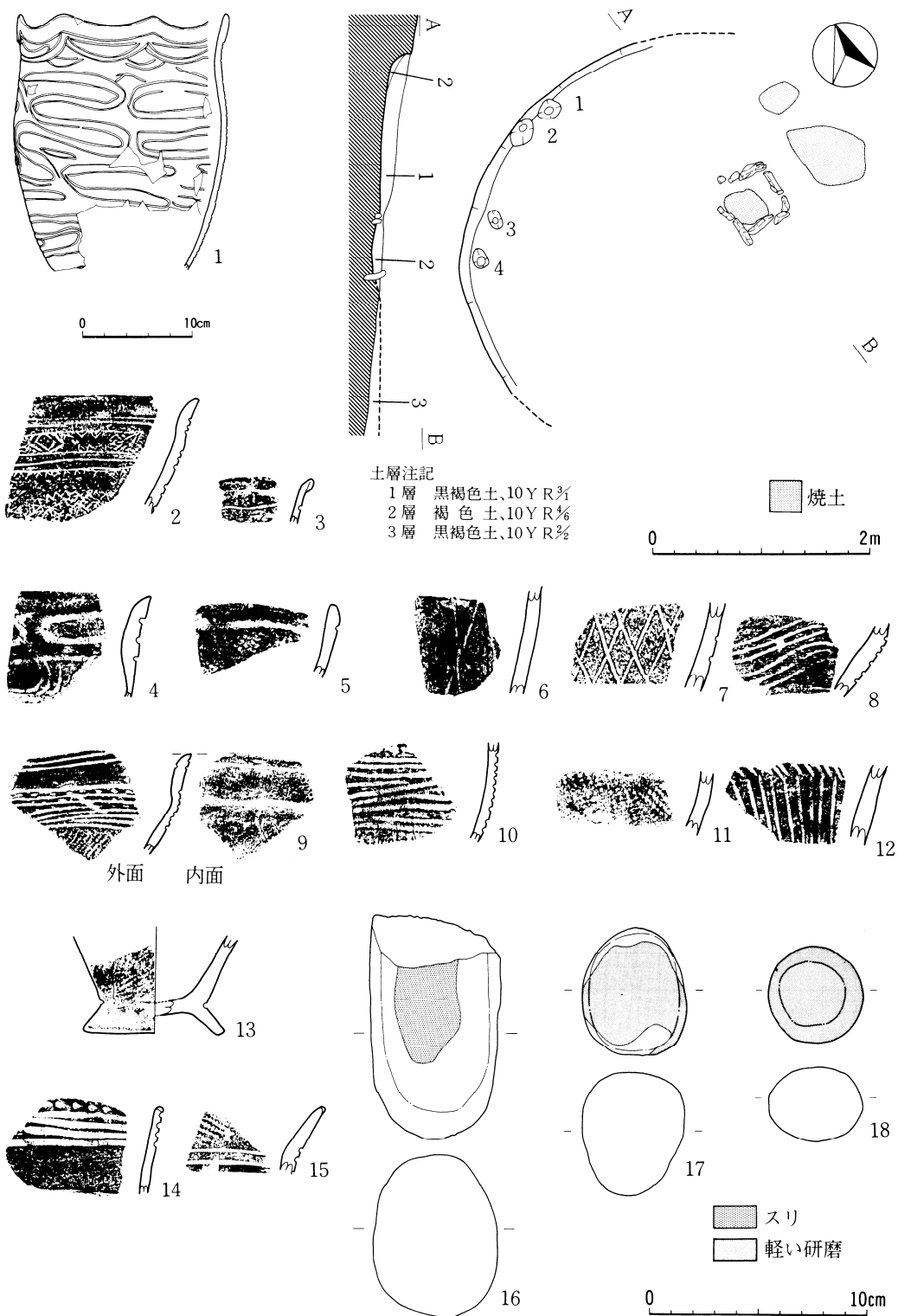
- 1層 暗褐色土、10YR $\frac{3}{6}$ 、焼土粒・ローム粒を若干含む。
- 2層 褐色土、10YR $\frac{6}{6}$ 、やや硬い。ローム粒を多量に含む。
- 3層 赤褐色土、5YR $\frac{6}{6}$ 、焼土。しまり・粘性ない。



炉埋設土器



第18図 第10号竪穴住居跡、炉と出土遺物



第19図 第12号竖穴住居跡と出土遺物

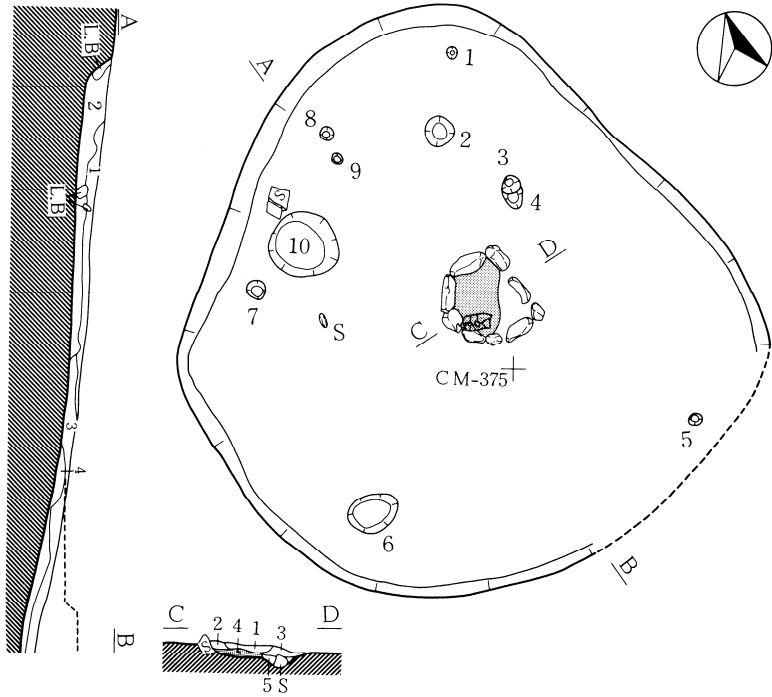
第13号竪穴住居跡

土層注記

- 1層 暗褐色土、10YR $\frac{3}{4}$
粘性弱く、しまりある
- 2層 暗褐色土、10YR $\frac{3}{4}$
粘性・しまりある
- 3層 黒褐色土、10YR $\frac{2}{2}$
粘性・しまりある
- 4層 黒褐色土、10YR $\frac{2}{2}$
粘性・しまりある

炉の注記

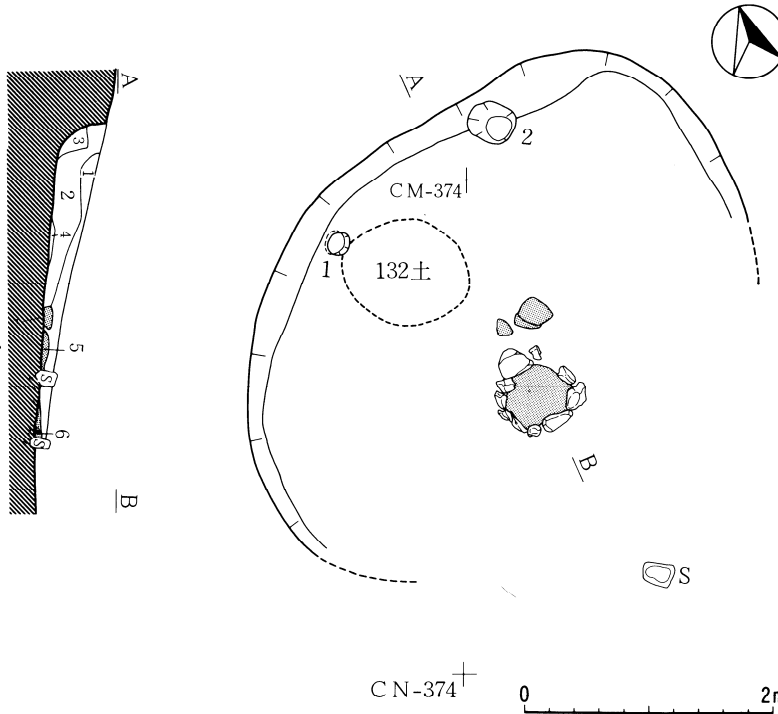
- 1層 黒褐色土、10YR $\frac{2}{2}$
焼土・カーボン混入
- 2層 暗褐色土、10YR $\frac{3}{4}$
カーボン混入
- 3層 黒褐色土、10YR $\frac{2}{2}$
カーボン混入
- 4層 赤褐色土、5YR $\frac{4}{6}$
焼土
- 5層 暗褐色土、10YR $\frac{3}{4}$



第14号竪穴住居跡

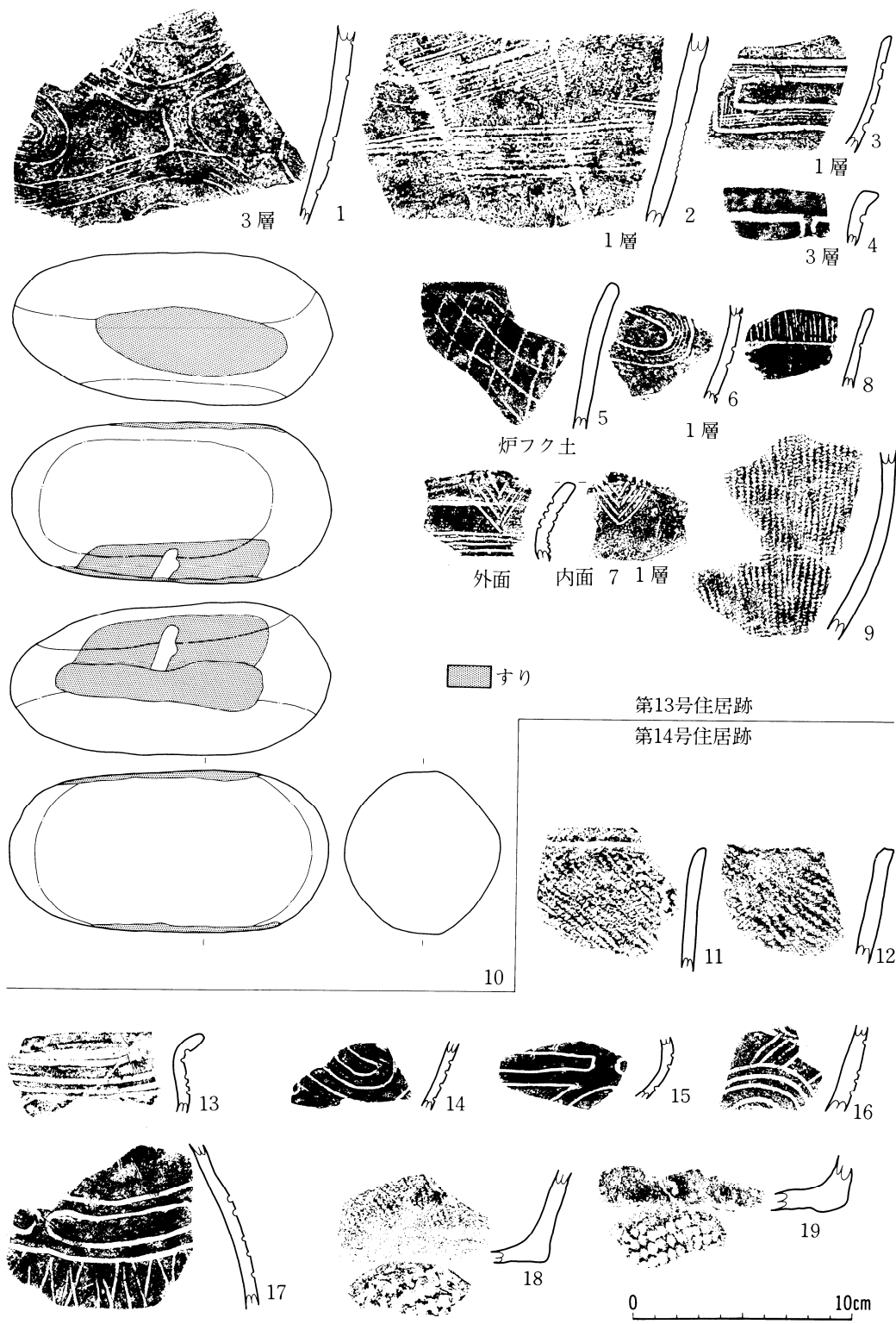
土層注記

- 1層 黒褐色土、10YR $\frac{2}{2}$
粘性・しまりある
- 2層 黒褐色土、10YR $\frac{2}{2}$
粘性・しまりある
- 3層 暗褐色土、10YR $\frac{3}{4}$
ローム粒を多量に含む
- 4層 褐色土、10YR $\frac{4}{6}$
粘性・しまりある
- 5層 赤褐色土、2.5YR $\frac{1}{6}$
焼土
- 6層 褐色土、7.5YR $\frac{4}{6}$
焼土混じり

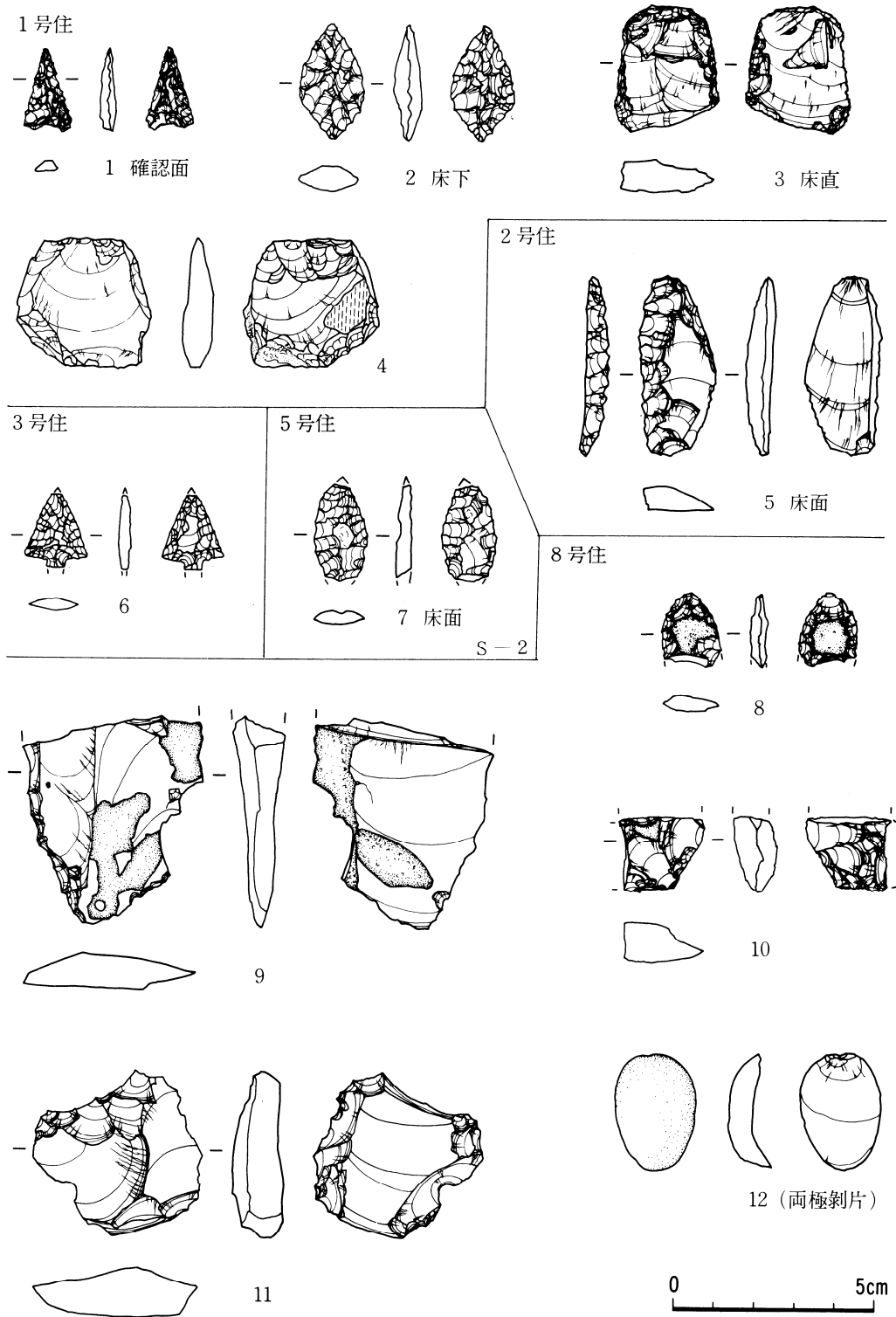


焼土

第20図 第13号・第14号竪穴住居跡



第21図 第13号・第14号竪穴住居跡出土遺物



第22図 竪穴住居跡出土遺物実測図 (第I群石器)

(2) 土 壤

IV区で検出した土壌は、総数167基であり、うち160基がIV—1区で、6基がIV—2区で検出された。以下、IV—1・IV—2区の順で記載する。

IV—1区における土壌（第24—44図）

IV—1区における土壌の配置は、第6図でもわかるとおり、湧水の存在する沢を中心に馬蹄形状になって群在している。

IV—1区は、その東側隣接地が昭和58年度に発掘調査を実施し多数の遺構を検出し多量の遺物の出土をみた当時のⅢ区にあたることから、Ⅲ区の遺構の在り方等を抜きにしては考察することができない。いわばⅢ区と連続した面でとらえるべき重要な地域である。

本区における土壌の在り方は、約5,000㎡に160基もの土壌が密集している状況である。そこで第6図に掲示した遺構配置図には、土壌番号をすべて付すと煩雑になり、遺構配置図の本来の目的が半減することから、土壌番号を付さないことにし、第23図のごとくIV—1区を便宜上、A・B・Cの三つのブロックに分け番号を付すことにした。以下の記述に際しては、A・B・Cのブロック順で行うことにした。従って、土壌番号は、調査時に付した番号をそのまま本書に踏襲したので必ずしも連番にはなっていない。

なお、前記した土壌の数160という数値は、最終土壌番号と合致しないが、その理由は、重複している土壌や、精査中に一つの土壌の中にもう一つの土壌が検出された場合に、各々に異なる数値の番号を付した場合と、一つの番号でa・b・Cの細分記号を付した場合とがあったからであり、実際最終土壌番号の137と上記の160との間に差が生じたわけで、その差は、a・b・Cの記号を付した総計23個分に相当する。

個々の土壌についての説明は、表を使い「土壌観察一覧表」としてまとめ、本区全体における土壌の帰属時期等については、第V章で記述する。

観察一覧表における凡例

1. 重複関係…新) 旧の意味で) 記号を利用して表現した。
2. 平面形……基本的には、円形・楕円形を使用しているが、なかには、形容詞の意味で不整の文字を付加している場合がある。また、円形・楕円形についての基準は、数学的な概念規定に困るものではなく、あくまでも主観による判断である。
3. 計測値……単位は、すべてcmであり、計測部位は、その土壌のもつイメージを損なわないような最も妥当と思われる箇所である。
4. 欠番土壌…31・57・79番は欠番である。
5. 出土土器…◎—多、○—少、△—微量、×—なし

実測—復原完形土器個数（挿図掲載）

（遠藤）

第2表 土壌観察一覧表

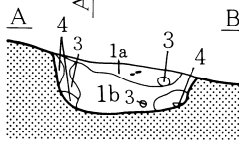
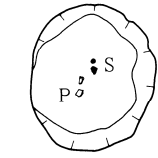
土壌 番号	検出グリッド	重複関係	平面形	形態	計測値 (cm)			出土遺物						土壌 の 時期	備考		
					開口部	堀底部	深さ	土器									
								有 無	実 測	拓 影	割 片	残 存	有 無				
第1号	CM-385	なし	円形		115×97	95×80	45	△									
2	CM-385	"	不定形		135×90	47×30	60	△									
3	CK-377	"	不定形		235×200	70×55	65	×			○						
4	CL-376-7	"	楕円形		120×75	120×55	40	△						○	弥生	土壌墓	
5	CL-376	"	円形	フラスコ状	125	175	55	△									
10	CS-382	11土 不明	円形		125	85	35	○	○								
11	CS-382	10土 不明	円形		70	55	30	△	○								
66	CR-382-3	>6H	楕円形		215×145	160×120	45	◎	3								
76	CQ-381	なし	楕円形		120×185	120×95	50	△									
77a	CQ-R-384	>b	不定形		280×225	160×100	40	○	1	○	○						
77b	"	"	楕円形		(-)	80×55	65	○									
100	CP-382	なし	円形		115×100	80	30	△									
101	CP-382	"	円形		95	90	17	○	1								十層内 1群期
102	CP-382	"	円形		105	95×85	16	△			○						
104	CP-384	110土 不明	不整形円形		75	55×35	25	×									
105	CP-384-5	なし	不整形円形		150×140	95×80	35	△			○						
106a	CS-385	b・c 不明	円形		100	75×60	40	×									
106b	"	"	円形		100	75	45	×									
106c	"	"	円形		60	40	40	×									
107	CN-384	なし	円形		145×120	120×70	35	△									
109	CM-381	"	円形		150×125	115×95	35	×									
110	CP-384	104土 不明	円形		80	50	45	△									
111	CP-383	なし	円形	フラスコ状	80×70	115×100	95	○									
112	CN-O-382-3	なし	円形	フラスコ状	155	175	105	◎	3	○	○						十層内 1群期
113	CM-378	底部のみ 115土	楕円形	フラスコ状	110×90	145×125	65	×									
115a	CM-378	底部のみ 113土	円形	フラスコ状	150	125	70	△									
115b	"	"	不定形		110×(-)	75×45	40										
116	CQ-382	>6H	円形	フラスコ状	100	130×110	105	△			○						
117	CP-379	なし	円形	フラスコ状	175	190	85	○	1	○							
118	CM-377	なし	楕円形	フラスコ状	190×160	180×175	90	△			○						
119	CO-P-378	(10H)	円形		200	200	135	○	1	○	○						
129	CN-376-7	なし	不整形円形		170×145	160×145	55	×									
130	CM-376-7	"	円形	フラスコ状	170	200×180	80	△									
132	CM-374	(14H)	楕円形	フラスコ状	105×85	145	75	△			○						
6	CT-382	なし	不整形円形		140×80	150×90	70	○									
9a	CZ-382	<4H>b	楕円形	フラスコ状	70×45	70×45	55	○			○						
9b	"	<4H>	楕円形		75×55	65×50	50	○									底面中央 小ピット
12	CX-386	なし	円形	フラスコ状	90×75	100	50	△			○						
13	CZ-DA-383	"	円形	フラスコ状	100	110	40	△									一部覆乱
14	CZ-382	"	円形	フラスコ状	65	90×80	45	△									
18a	CU-382-3	>b	不定形	フラスコ状	90	115	110	○			○						
18b	"	"	不定形		(-)×90	30	100	○									

土壌 番号	検出グリッド	重複関係	平面形	形態	計測値 (cm)			出土遺物					土壌 の 時期	備考			
					開口部	堀底部	深さ	土器									
								有 無	実 測	拓 影	割 片	残 存			有 無		
29	CZ-380	底部のみ 4H	円形	フラスコ状	70	90	50	×									
30	CZ-380	<4H	円形	フラスコ状	80	70	40	△									
32	CY-380	なし	円形		85	70	55	○	1	○	○						
33	CY-380	"	円形		75	40	25	×									
34a	CZ-379-80	<4H	不定形		85×(-)	75×45	55										
34b	"	a・b不明	楕円形		(80)×60	50×40	75	◎	2	○	○						
42	CY-380	なし	円形	フラスコ状	70	70×60	60	△									
50	CX-Y-380	なし	不定形		110×90	65×45	30	○	1	○							十層内 1群期
60	CX-Y-381	61土 不明	不定形		175×(-)	150×(70)	70	○									
61	CX-381	60土 不明	不定形		(-)	(-)	20	○	1	○							
62	CX-381	なし	楕円形		90×65	(80)×(45)	25	△									
63	CW-382	"	楕円形		110×90	85×50	50	○									
64	CW-381	"	円形	フラスコ状	55	40	25	△									
65a	CT-383-4	>b)c	楕円形		145×120	100	20	○									
65b	"	"	円形		200	140×(-)	35	○	1								
65c	CT-384	"	円形	フラスコ状	75	80	50										
75	CU-381	なし	円形		70	65×50	25	×									
103	CV-382	108土 不明	不定形	不定形	(-)×140	140×100	45	△			○						
108	CU-V-382	(5H:103土 不明	(円形)		(140)	145	40	×									
114	CU-381-2	<5H	円形	フラスコ状	2.0	210	85	○									
7	DE-F-373	>8土	不定形		270×220	200×150	30	◎	3	○	○	○					弥生 十層内 1群期
8	DE-F-373	<7土	楕円形		175×140	135×105	20	○									
15	DC-382	なし	円形		110×100	90×75	15	×									
16	DD-382	"	不整形円形		130×110	90×80	50	×									
17	DE-381	"	楕円形		80×55	60×50	35	△									
19	DD-380	"	不整形円形		60	50	15	×									
20	DC-381	"	円形		95	85	10	×									
21	DB-380	"	円形		80	65	15	×									
22	DC-379	"	円形		100	85	35	×									
23	DB-379-80	"	円形		125	110	10	×									
24	DE-378-9	"	円形	円筒状	85	60	80	○									柱穴(?)
25	DE-377	"	方形		130×120	105×85	50	○									底面焼土
26a	DB-C-376	>b	円形	フラスコ状	90	70	65	◎	4	○	○	○					十層内 1群期
26b	"	"	(円形)		75	65	55										
27	DC-376	>3H	不整形円形		90	80×60	35	×									
28	DD-E-379	なし	円形	フラスコ状	100×85	80×65	65	△									
35	DC-378	"	楕円形	フラスコ状	95×80	85×70	45	△									
36	DC-378	"	円形	円筒状	85	65	40	×									柱穴(?)
37a	DD-375	<b	不定形	不定形	105×55	60×35	(-)	◎	3	○	○	○					
37b	"	>12土	不定形	不定形	190×140	(-)	(-)										
38	DB-377	>8土	円形		130	110	85	◎	1	○	○	○					
39	DC-378	なし	不整形円形		100×80	25	35	×									
40	DB-377	"	円形		95	75	35	◎	2	○	○	○					
41	DB-376	"	不整形円形	フラスコ状	120×100	90	45	○									

土 壤 番 号	検出グリッド	重複関係	平 面 形 態	計測値 (cm)						出土遺物					土壌の 時期	備 考
				開口部	壇底部	深さ	土器		石器		有無	土器 の 時期	備 考			
							実測	拓影	刻片	鏢						
43	DD-376	なし	楕円形	95×75	70×55	45	○	○	○							
44	DB-375-6	"	不定形	75×55	55×35	35	△	○	○							
45	DC-375-6	"	円形	120	85×65	45	△	○	○							
46	DC-374-5	"	"	130×30	130×15	40	○	○	○							
47a	DC-375	>b-133土	円形	140	115	65	○	○	○							
47b	"	"	不定形	—	110×(-)	(-)	◎	○	○							
48	DD-378	なし	円形	100	125	80	×	○	○							
49a	DC-376	>b	円形	100	85	30	×	○	○							
49b	"	"	楕円形	85×70	55	25	×	○	○							
51	DD-375	なし	円形	95×80	95	105	○	○	○							
52a	DE-376	<b	円形	95	(-)	30	○	○	○							
52b	"	"	不整楕円	145×120	110×95	20	△	○	○							
53a	DC-374	<c	不定形	(-)	(-)	20	○	○	○							
53b	"	a 不明	円形	60	45×30	30	△	○	○							
53c	"	"	不定形	110×(90)	90×65	25	△	○	○							
54	DC-373	>120土	楕円形	105×80	60	105	△	○	○							
55	DB-373	なし	不整円形	130	100	40	○	○	○							
56a	DC-D-373	120土	円形	160	170	50	△	○	○							
56b	"	"	不定形	130×90	90×70	110	△	○	○							
58a	DD-E-373	>b	不整円形	145×125	(-)	40	△	○	○							
58b	"	"	円形	80	65	110	△	○	○							
59a	DD-373	>b >131土	不整円形	140	125×90	25	△	○	○							
59b	"	"	不定形	50×40	40×30	(60)	△	○	○							
67	DB-372	底部のみ 96土	円形	100	110	110	○	○	○							
66	DC-D-372	なし	不整円形	135	145	165	△	○	○							
69	DE-372	"	不定形	115×100	70×60	30	△	○	○							
70	DF-372-3	"	不整円形	105×95	90×70	40	△	○	○							
71	DD-374	"	楕円形	90×80	75×60	30	△	○	○							
72	DA-B-374	"	不整円形	140×115	75	100	◎	○	○							
73	DB-372	"	円形	105	105	70	○	○	○							
74	DF-374	"	不定形	95×85	65×40	45	△	○	○							
78	DE-F-374	"	円形	200	170	50	○	○	○							
80	DD-372	>128土	円形	100	130	120	○	○	○							
81	DA-B-373	なし	不整円形	100	65	90	△	○	○							
82a	DB-374	<135土、a・b不明	楕円形	135×(95)	120×(90)	55	○	○	○							
82b	"	"	楕円形	140×(100)	120×(85)	90	○	○	○							
82c	DB-374	<a・b	不整楕円	120×(-)	90×(-)	100	○	○	○							
83	DB-376-7	<38土	円形	80	60	45	△	○	○							
84	DB-375	<8H	円形	90	80×50	65	○	○	○							
85	DA-377	なし	不整円形	85	55×45	40	×	○	○							
86	DE-374-5	"	円形	200	135	45	○	○	○							
87	DD-373	124-131土 不明	不定形	70×(-)	(-)×40	(50)	×	○	○							
88	DE-F-372	なし	円形	70×60	25	70	△	○	○							
89	DE-375	"	不定形	135×110	80×65	30	△	○	○							

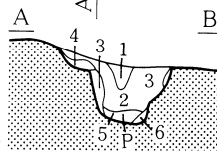
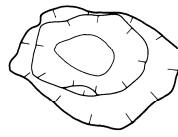
土 壤 番 号	検出グリッド	重複関係	平 面 形 態	計測値 (cm)						出土遺物					土壌の 時期	備 考
				開口部	壇底部	深さ	土器		石器		有無	土器 の 時期	備 考			
							実測	拓影	刻片	鏢						
90	DE-372	なし	円形	50	20	65	△	○	○							
91a	DC-372-3	>b	不定形	(-)	50×35	125	○	○	○							
91b	"	"	不定形	(-)	80	90	○	○	○							
92	DE-372	なし	円形	30	10	40	△	○	○							
93	DE-374	"	円形	60	20	75	×	○	○							
94	DF-372	"	円形	70	35	55	△	○	○							
95	DF-372	"	円形	50	30	30	×	○	○							
96	DB-372	底部のみ 67土	円形	70	50	115	×	○	○							
97	DD-372	なし	不定形	160×105	(-)×70	35	◎	○	○							
98	DB-373	"	楕円形	110×90	90×80	35	◎	○	○							
99a	DD-372	>b	不定形	(-)	(-)	35	△	○	○							
99b	"	<c・d	不定形	(-)	(-)	35	△	○	○							
99c	"	"	不定形	(-)	(-)	35	△	○	○							
99d	"	<c	円形	70	60	30	○	○	○							
120	DC-373	<54土(56a土	不定形	80×(-)	30	30	×	○	○							
121	DD-373-4	なし	楕円形	80×60	70×60	135	△	○	○							
122	DD-374-5	<37土	不整楕円	110×80	90×55	30	×	○	○							
123	DC-372	なし	不定形	140×100	80×40	30	×	○	○							
124	DD-373	87-131土 不明	不定形	55×45	30×20	(30)	×	○	○							
125	DB-373	なし	不整円形	105	60×50	150	×	○	○							
126	DE-375	"	不定形	160×100	(-)	40	○	○	○							
127	DB-372	"	◎	○	○	○	○	○	○							
128	DD-372	<80土	不整円形	100	50	30	△	○	○							
131	DD-373	87-124土 不明 (59a土)	不定形	70×55	35	105	○	○	○							
133	DC-375	<8H・47b土	楕円形	90×60	50×25	45	○	○	○							
134a	DB-C-375	<8Hb 不明	楕円形	100×80	75×50	30	△	○	○							
134b	"	"	楕円形	85×70	60×45	30	△	○	○							
135	DB-374	>82a土 8H 不明	楕円形	115×70	70×40	140	○	○	○							
136	DF-376	なし	不定形	100×70	(-)	20	○	○	○							
137	DF-375	"	円形	110×95	80	30	○	○	○							

1号土塙



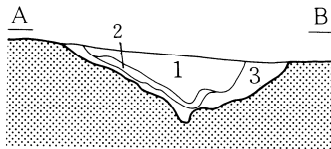
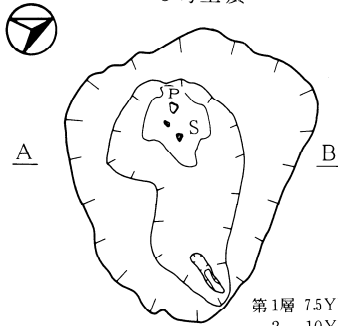
- 第1層 7.5YR 7/2, 黒色, シルト質
 1a とほぼ同じ
 2 7.5YR 7/2, 黒色
 3 I とIV層の土が混じっている
 4 IV層 (基本層序)

2号土塙



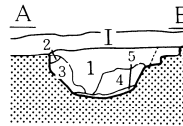
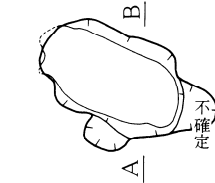
- 第1層 7.5YR 7/2, 黒色, シルト質
 2 7.5YR 7/2, 黒色, シルト質
 3 7.5YR 7/2, 黒褐色, シルト質
 4 7.5YR 7/2, 褐色, シルト質
 5 7.5YR 7/2, 黒色, 粘土質
 6 7.5YR 7/2, 黒褐色, 粘土質

3号土塙



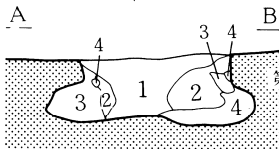
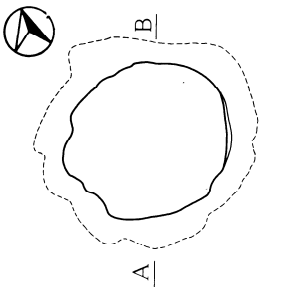
- 第1層 7.5YR 7/2, 黒褐色, シルト質
 2 10YR 7/2, 暗褐色, シルト質
 3 10YR 7/2, 褐色, 粘土質

4号土塙



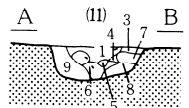
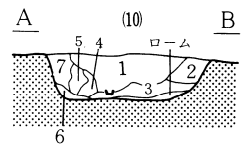
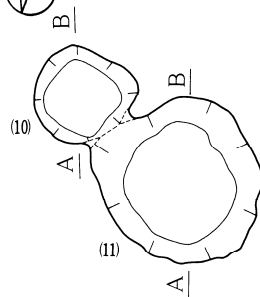
- 第I層 10YR 7/2, 黒褐色
 1 10YR 7/2, 暗褐色, シルト質
 2 10YR 7/2, 暗褐色, シルト質
 3 10YR 7/2, 褐色, シルト質
 4 10YR 7/2, 褐色, シルト質
 5 10YR 7/2, 褐色, シルト質

5号土塙



- 第1層 10YR 7/2, 暗褐色, シルト質
 2 10YR 7/2, 黒褐色, シルト質
 3 10YR 7/2, 黒褐色, シルト質
 4 10YR 7/2, 褐色, シルト質

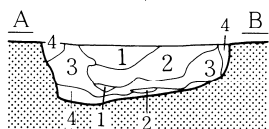
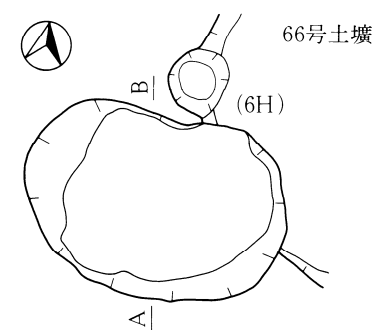
10.11号土塙



- 第1層 10YR 7/2, 黒褐色
 2 10YR 7/2, にぶい黄褐色
 3 10YR 7/2, 暗褐色
 4 10YR 7/2, 黒褐色
 5 10YR 7/2, 黒褐色
 6 7.5YR 7/2, 暗褐色
 7 10YR 7/2, 褐色
- 第1層 10YR 7/2, 黒褐色, シルト質
 2 10YR 7/2, 黒褐色, シルト質
 3 10YR 7/2, 暗褐色, シルト質
 4 10YR 7/2, 黒褐色, シルト質
 5 10YR 7/2, 褐色, シルト質
 6 10YR 7/2, 黒褐色, シルト質
 7 10YR 7/2, 黄褐色
 8 10YR 7/2, 褐色
 9 10YR 7/2, 褐色

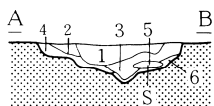
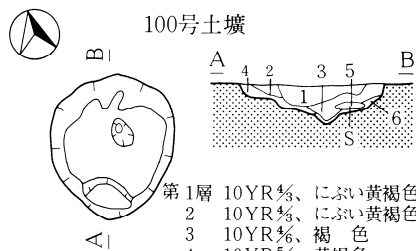
0 2m

第24図 土塙平面図 (A-1 第1.2.3.4.5.10.11号)



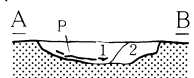
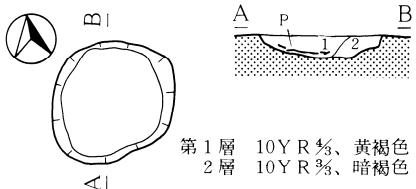
- 第1層 10YR 5/6、暗褐色
 2 10YR 5/6、褐色
 3 10YR 5/6、褐色
 4 10YR 5/6、黄褐色

100号土壌



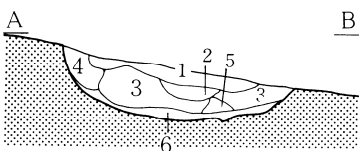
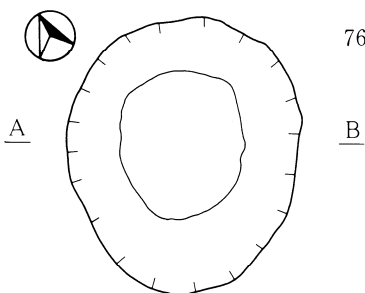
- 第1層 10YR 5/6、にぶい黄褐色
 2 10YR 5/6、にぶい黄褐色
 3 10YR 5/6、褐色
 4 10YR 5/6、黄褐色
 5 10YR 5/6、褐色
 6 10YR 5/6、黄褐色

101号土壌



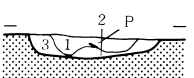
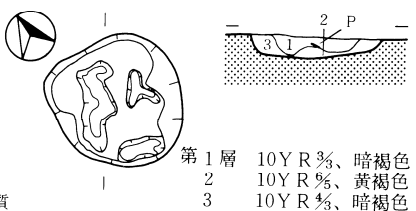
- 第1層 10YR 5/6、黄褐色
 2層 10YR 5/6、暗褐色

76号土壌



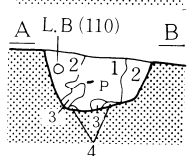
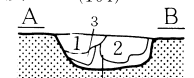
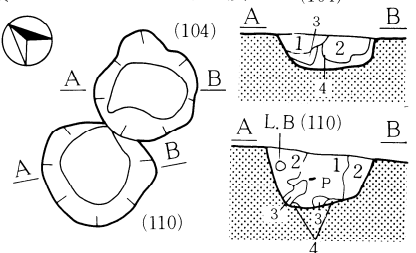
- 第1層 10YR 5/6、黒褐色、シルト質
 2 10YR 5/6、黒色、シルト質
 3 10YR 5/6、黒褐色、シルト質
 4 10YR 5/6、暗褐色、シルト質
 5 10YR 5/6、暗褐色、シルト質
 6 10YR 5/6、黄褐色、ローム質

102号土壌

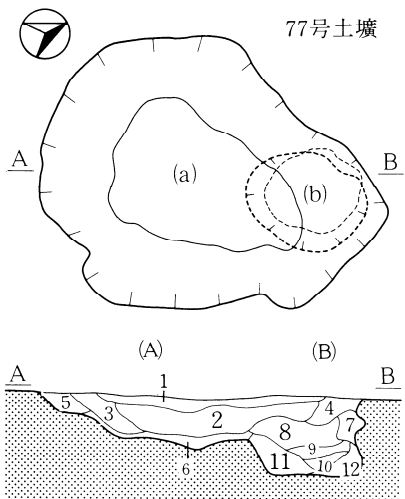


- 第1層 10YR 5/6、暗褐色
 2 10YR 5/6、黄褐色
 3 10YR 5/6、暗褐色

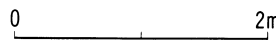
104・110号土壌



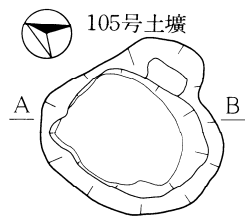
- 第1層 10YR 5/6、暗褐色
 2 10YR 5/6、黒褐色
 3 10YR 5/6、黒褐色
 4 10YR 5/6、褐色
- 第1層 10YR 5/6、黒褐色
 シルト質
 2 10YR 5/6、暗褐色
 シルト質
 3 10YR 5/6、黒褐色
 シルト質
 4 10YR 5/6、明黄褐色
 ローム質



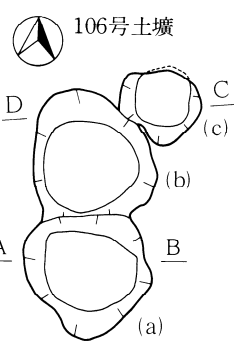
- 第1層 10YR 5/6、黒褐色
 2 10YR 5/6、黒色
 炭化物が多くある
 3 10YR 5/6、黒褐色
 4 10YR 5/6、暗褐色
 5 10YR 5/6、暗褐色
 6 10YR 5/6、黄褐色
 7 10YR 5/6、褐色
 8 10YR 5/6、褐色
 9 7.5YR 5/6、明るい褐色
 10 10YR 5/6、暗褐色
 11 10YR 5/6、褐色
 12 7.5YR 5/6、明るい褐色



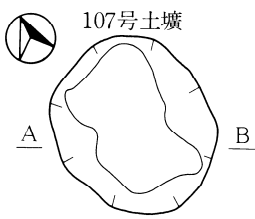
第25図 土壌平面図 (A-2 第66・76・77・100・101・102・104・110号)



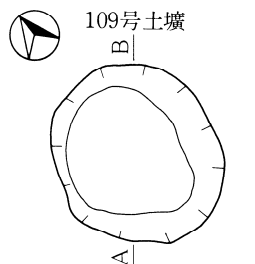
- 第105号土壤
- | | | |
|-----|----------|----------|
| 第1層 | 10YR 8/3 | 黒褐色、シルト質 |
| 2 | 10YR 6/3 | 暗褐色、シルト質 |
| 3 | 10YR 5/3 | 黒褐色、シルト質 |
| 4 | 10YR 4/3 | 黄褐色、ローム質 |
| 5 | 10YR 3/3 | 暗褐色、シルト質 |
| 6 | 10YR 2/3 | 褐色、シルト質 |
| 7 | 10YR 1/3 | 黄褐色、ローム質 |



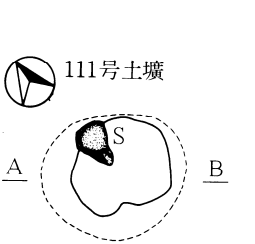
- 第106号土壤 (a)
- | | | |
|-----|----------|----------|
| 第1層 | 10YR 8/3 | 黒褐色、シルト質 |
| 2 | 10YR 6/3 | 褐色、シルト質 |
| 3 | 10YR 5/3 | 黄褐色、ローム質 |
- 第106号土壤 (c)
- | | | |
|-----|----------|----------|
| 第1層 | 10YR 8/3 | 暗褐色、シルト質 |
| 2 | 10YR 6/3 | 暗褐色、シルト質 |
| 3 | 10YR 4/3 | 褐色、シルト質 |
| 4 | 10YR 3/3 | 暗褐色、シルト質 |
| 5 | 10YR 2/3 | 褐色、シルト質 |
| 6 | 10YR 1/3 | 黄褐色、ローム質 |



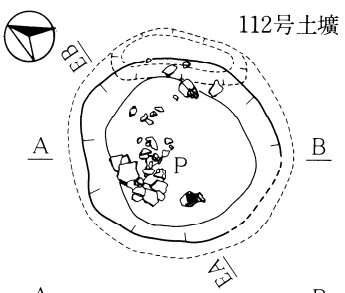
- 第107号土壤
- | | | |
|-----|----------|----------|
| 第1層 | 10YR 8/3 | 黒色、シルト質 |
| 2 | 10YR 6/3 | 暗褐色、シルト質 |
| 3 | 10YR 5/3 | 黒褐色、シルト質 |
| 4 | 10YR 4/3 | 黄褐色、ローム質 |



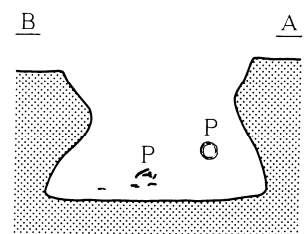
- 第109号土壤
- | | | |
|-----|----------|-----|
| 第1層 | 10YR 8/3 | 黒褐色 |
| 2 | 10YR 6/3 | 褐色 |
| 3 | 10YR 4/3 | 暗褐色 |
| 4 | 10YR 3/3 | 黄褐色 |
| 5 | 10YR 2/3 | 黄褐色 |
| 6 | 10YR 1/3 | 黄褐色 |



- 第111号土壤
- | | | |
|-----|----------|-----|
| 第1層 | 10YR 8/3 | 黒褐色 |
| 2 | 10YR 6/3 | 暗褐色 |
| 3 | 10YR 5/3 | 黄褐色 |
| 4 | 10YR 4/3 | 暗褐色 |
| 5 | 10YR 3/3 | 黒褐色 |
| 6 | 10YR 2/3 | 黄褐色 |
| 7 | 10YR 1/3 | 黄褐色 |
| 8 | 10YR 8/3 | 暗褐色 |
| 9 | | |
| 10 | | |
| 11 | 10YR 6/3 | 暗褐色 |
| 12 | 10YR 5/3 | 黒褐色 |
| 13 | 10YR 4/3 | 黒褐色 |
| 14 | 10YR 3/3 | 暗褐色 |
| 15 | 10YR 2/3 | 黄褐色 |
| 16 | 10YR 1/3 | 褐色 |

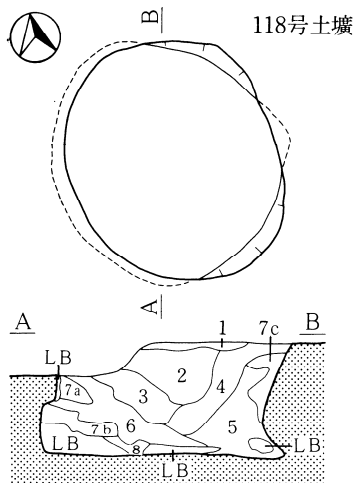
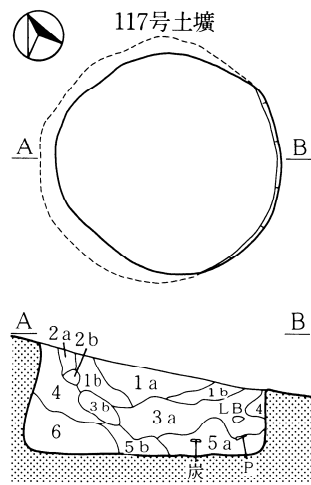
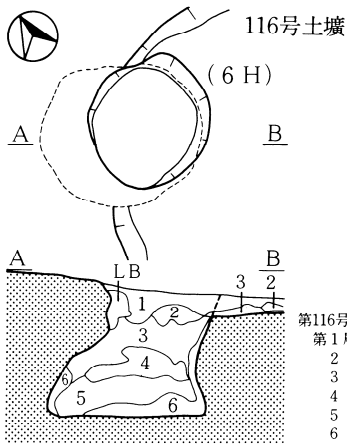
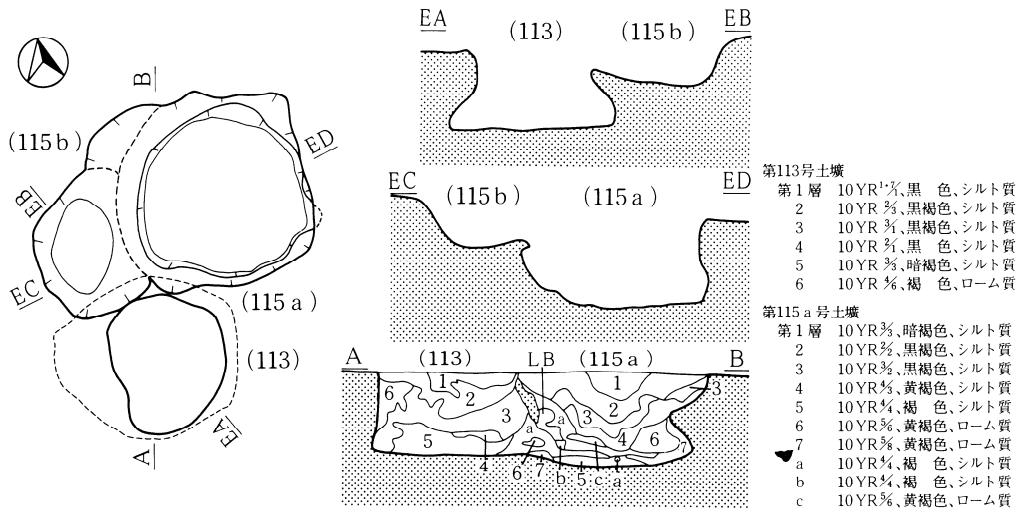


- 第112号土壤
- | | | |
|-----|----------|-----|
| 第1層 | 10YR 8/3 | 黒色 |
| 2 | 10YR 6/3 | 黒色 |
| 3 | 10YR 4/3 | 褐色 |
| 4 | 10YR 3/3 | 黒褐色 |
| 5a | 10YR 6/3 | 暗褐色 |
| 5a | 10YR 4/3 | 褐色 |
| 6 | 10YR 2/3 | 黄褐色 |
| 7 | 10YR 1/3 | 黒褐色 |
| 8 | 10YR 8/3 | 黒褐色 |
| 9 | 10YR 6/3 | 暗褐色 |
| 10 | 10YR 5/3 | 暗褐色 |
| 11 | 10YR 4/3 | 暗褐色 |
| 12 | 10YR 3/3 | 暗褐色 |
| 13 | 10YR 2/3 | 黒褐色 |
| 14 | 10YR 1/3 | 暗褐色 |



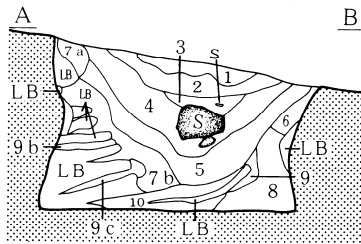
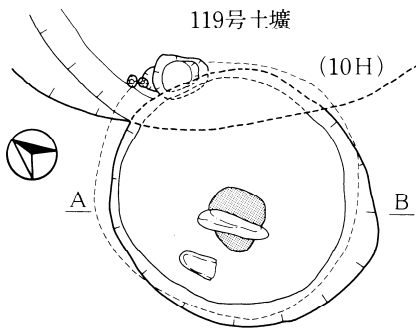
- 第112号土壤
- | | | |
|-----|----------|-----|
| 第1層 | 10YR 8/3 | 黒色 |
| 2 | 10YR 6/3 | 黒色 |
| 3 | 10YR 4/3 | 褐色 |
| 4 | 10YR 3/3 | 黒褐色 |
| 5a | 10YR 6/3 | 暗褐色 |
| 5a | 10YR 4/3 | 褐色 |
| 6 | 10YR 2/3 | 黄褐色 |
| 7 | 10YR 1/3 | 黒褐色 |
| 8 | 10YR 8/3 | 黒褐色 |
| 9 | 10YR 6/3 | 暗褐色 |
| 10 | 10YR 5/3 | 暗褐色 |
| 11 | 10YR 4/3 | 暗褐色 |
| 12 | 10YR 3/3 | 暗褐色 |
| 13 | 10YR 2/3 | 黒褐色 |
| 14 | 10YR 1/3 | 暗褐色 |

第26図 土壤平面図 (A-3、第105・106・107・109・111・112号)



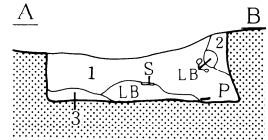
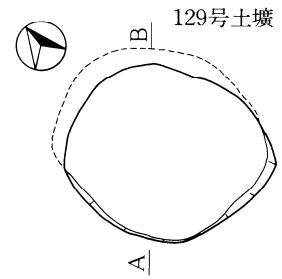
0 2m

第27図 土壌平面図 (A-4、第113・115~118号)



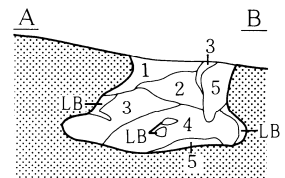
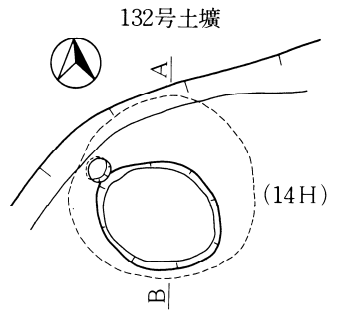
第119号土壤

- 第1層 5 Y R $\frac{3}{4}$ 、赤褐色
- 2 10 Y R $\frac{3}{4}$ 、黑褐色
- 3 10 Y R $\frac{3}{4}$ 、黑褐色
- 4 10 Y R $\frac{3}{4}$ 、暗褐色
- 5 10 Y R $\frac{3}{4}$ 、黑褐色
- 6 10 Y R $\frac{3}{4}$ 、黑褐色
- 7 10 Y R $\frac{3}{4}$ 、暗褐色
- 8 10 Y R $\frac{3}{4}$ 、黑褐色
- 9 10 Y R $\frac{3}{4}$ 、暗褐色
- 10 10 Y R $\frac{3}{4}$ 、黑褐色

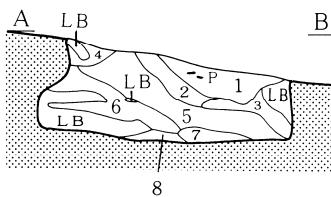
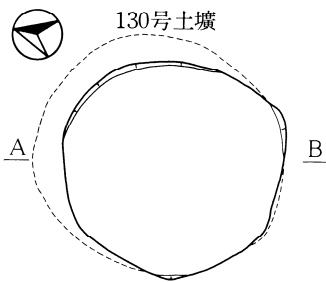


第129号土壤

- 第1層 10 Y R $\frac{3}{4}$ 、黑褐色
- 2 10 Y R $\frac{3}{4}$ 、褐色
- 3 10 Y R $\frac{3}{4}$ 、暗褐色



132号土壤

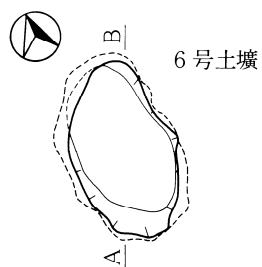


第130号土壤

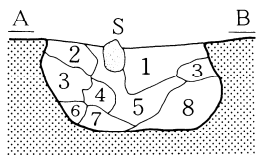
- 第1層 10 Y R $\frac{3}{4}$ 、黑褐色
- 2 10 Y R $\frac{3}{4}$ 、暗褐色
- 3 10 Y R $\frac{3}{4}$ 、暗褐色
- 4 10 Y R $\frac{3}{4}$ 、暗褐色
- 5 10 Y R $\frac{3}{4}$ 、黑褐色
- 6 10 Y R $\frac{3}{4}$ 、褐色
- 7 10 Y R $\frac{3}{4}$ 、黑褐色
- 8 10 Y R $\frac{3}{4}$ 、暗褐色

0 ————— 2m

第28图 土壤平面图 (A-5、第119·129·130·132号)

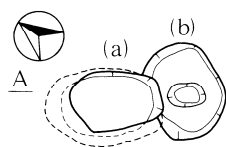


6号土坑

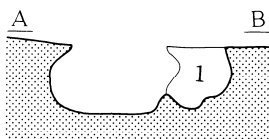


第6号土坑

- | | |
|-----|--------------|
| 第1層 | 10YR 3/6、黒褐色 |
| 2 | 10YR 3/4、褐色 |
| 3 | 10YR 3/6、黄褐色 |
| 4 | 10YR 3/4、暗褐色 |
| 5 | 10YR 3/6、黒褐色 |
| 6 | 10YR 3/4、暗褐色 |
| 7 | 10YR 3/6、褐色 |
| 8 | 10YR 3/6、褐色 |

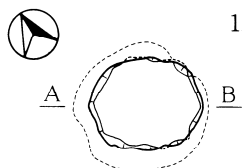


9号土坑

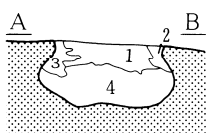


第9号土坑

第1層 10YR 3/6、褐色

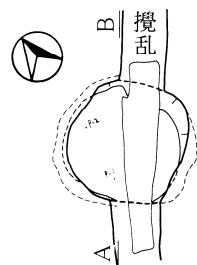


12号土坑

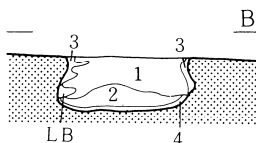


第12号土坑

- | | |
|-----|------------------|
| 第1層 | 10YR 3/4、黒色、シルト質 |
| 2 | 10YR 3/4、褐色、シルト質 |
| 3 | 10YR 3/4、褐色、シルト質 |
| 4 | 10YR 3/4、黒色、シルト質 |



13号土坑

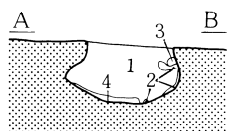


第13号土坑

- | | |
|-----|-------------------|
| 第1層 | 10YR 3/4、黒色、シルト質 |
| 2 | 10YR 3/4、黒褐色、シルト質 |
| 3 | 10YR 3/4、褐色、 |
| 4 | 10YR 3/4、暗褐色、 |

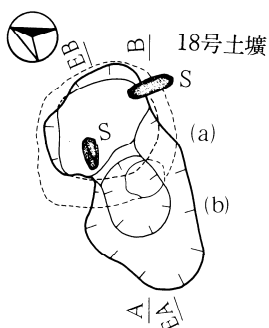


14号土坑



第14号土坑

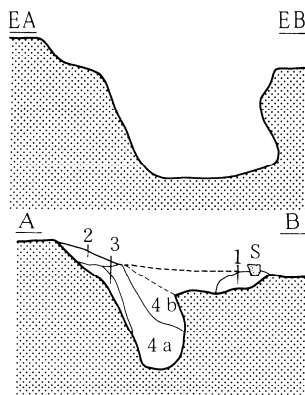
- | | |
|-----|---------------|
| 第1層 | 7.5YR 3/4、黒色 |
| 2 | |
| 3 | シルト質 |
| 4 | 7.5YR 3/4、黒褐色 |



18号土坑

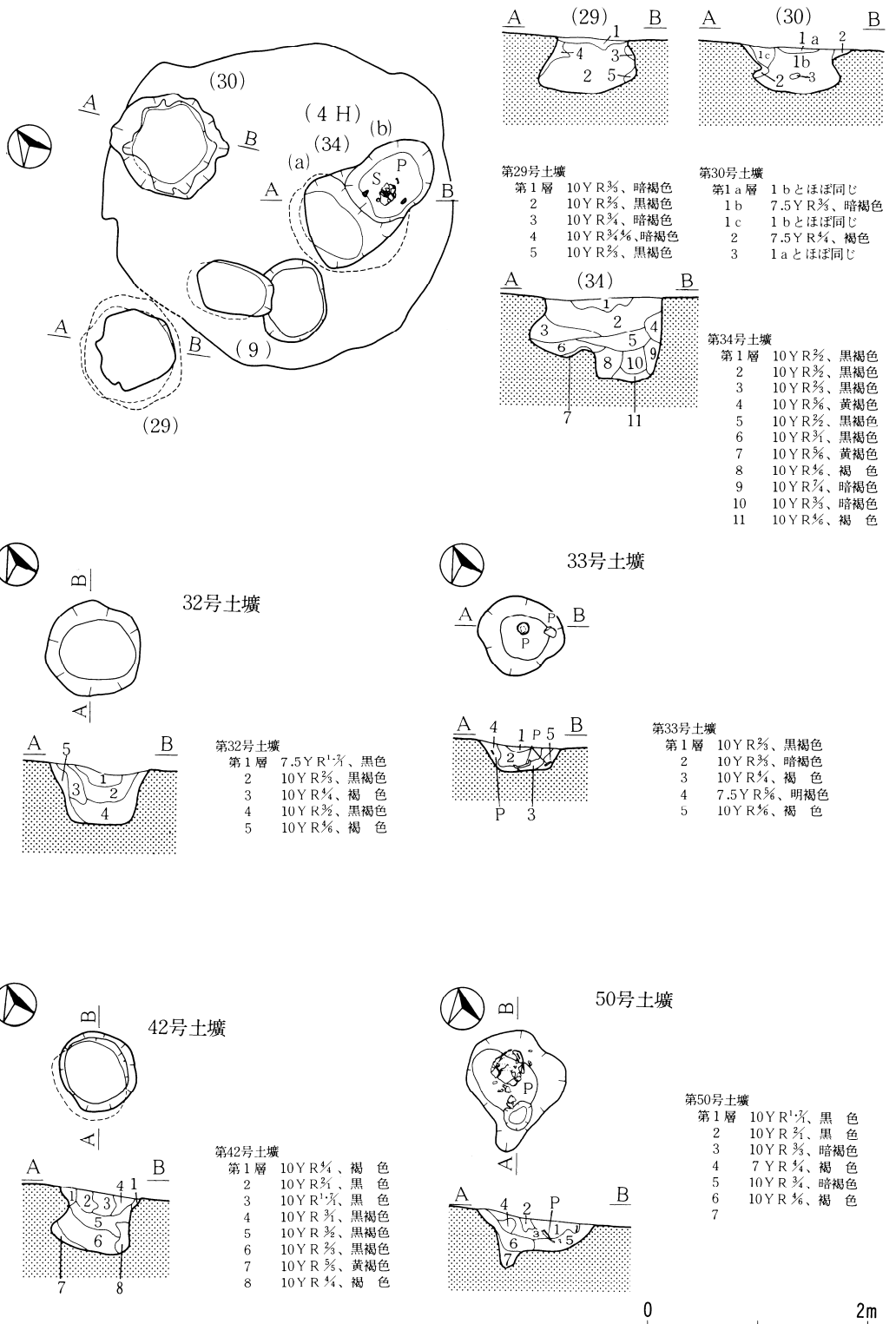
第18号土坑

- | | |
|-----|-------------------|
| 第1層 | 10YR 3/4、暗褐色、シルト質 |
| 2 | 10YR 3/4、黒褐色、シルト質 |
| 3 | 10YR 3/6、黄褐色、 |
| 4 | 10YR 3/4、黒色 |

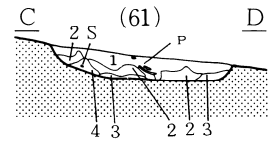
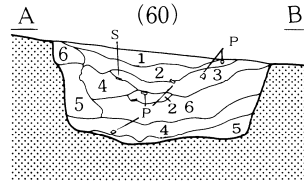
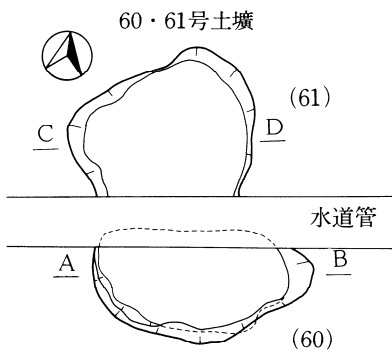


0 2m

第29図 土坑平面図 (B-1、第6・9・12~14・18号)



第30図 土壤平面図 (B-2、第29・30・32~34・42・50号)

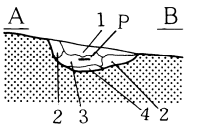
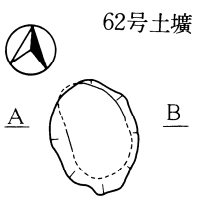


第60号土壌

- 第1層 10YR 7/1、黒色
- 2 10YR 7/2、黒褐色
- 3 10YR 7/3、黒褐色
- 4 10YR 7/4、にぶい黄褐色
- 5 10YR 7/5、黄褐色
- 6 10YR 7/6、褐色

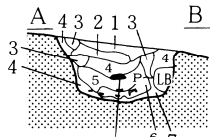
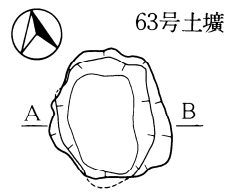
第61号土壌

- 第1層 10YR 7/1、黒色
- 2 10YR 7/2、暗褐色
- 3 10YR 7/3、黄褐色、ローム質
- 4 10YR 7/4、褐色、ローム質



第62号土壌

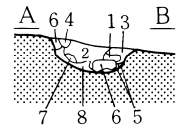
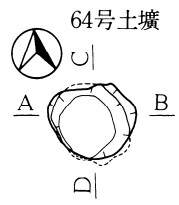
- 第1層 10YR 7/1、黒色、シルト質
- 2 10YR 7/2、にぶい黄褐色、シルト質
- 3 10YR 7/3、暗褐色、シルト質
- 4 10YR 7/4、黄褐色、ローム質



焼土

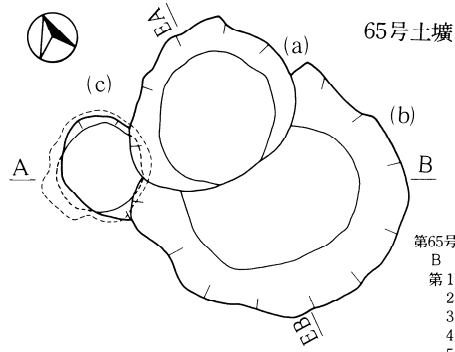
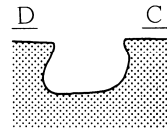
第63号土壌

- 第1層 10YR 7/1、黒褐色
- 2 10YR 7/2、黒色
- 3 10YR 7/3、褐色
- 4 10YR 7/4、黄褐色
- 5 10YR 7/5、黄褐色
- 6 10YR 7/6、褐色
- 7 10YR 7/7、黄褐色



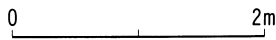
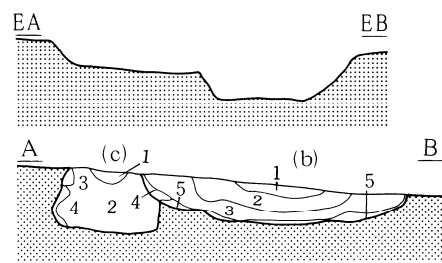
第64号土壌

- 第1層 10YR 7/1、黒色
- 2 10YR 7/2、黒褐色
- 3 10YR 7/3、褐色
- 4 10YR 7/4、暗褐色
- 5 10YR 7/5、褐色
- 6 10YR 7/6、黄褐色
- 7 10YR 7/7、黄褐色
- 8 10YR 7/8、明黄褐色



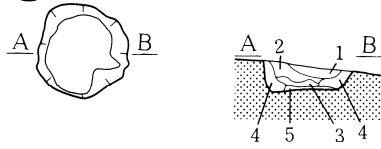
第65号土壌

- B
- 第1層 10YR 7/1、黒色、シルト質
 - 2 10YR 7/2、黒色、シルト質
 - 3 10YR 7/3、黒褐色、シルト質
 - 4 10YR 7/4、暗褐色、シルト質
 - 5 10YR 7/5、黄褐色、ローム質
- C
- 第1層 10YR 7/1、黒褐色、シルト質
 - 2 10YR 7/2、褐色、ローム質
 - 3 10YR 7/3、褐色、ローム質
 - 4 10YR 7/4、黄褐色、ローム質



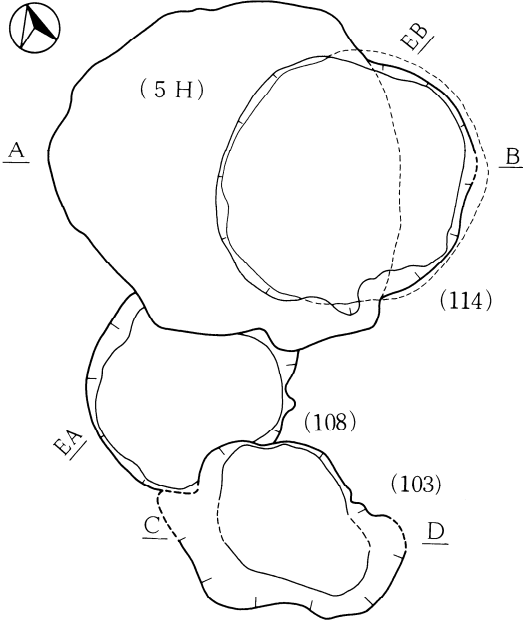
第31図 土壌平面図 (B-3、第60~65号)

75号土壇

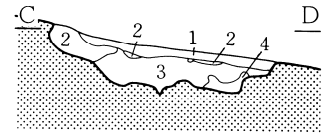


第75号土壇

- 第1層 10YR¹/₂、黒色、シルト質
- 2 10YR²/₂、黒褐色、シルト質
- 3 10YR³/₂、黒褐色、シルト質
- 4 10YR⁴/₂、暗褐色、シルト質
- 5 10YR⁵/₂、黄褐色、ローム質



103号土壇



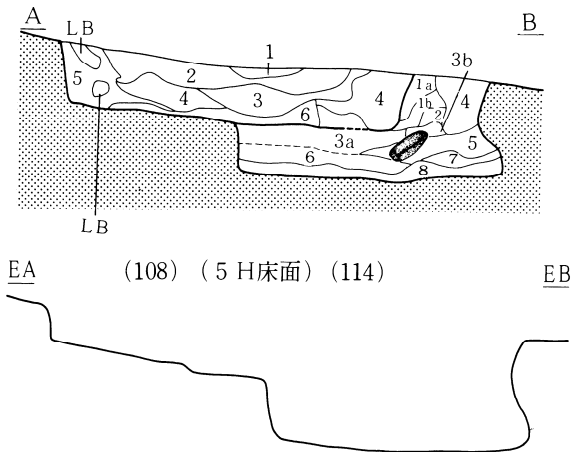
第103号土壇

- 第1層 10YR³/₄、暗褐色、シルト質
- 2 10YR⁴/₂、にぶい黄褐色、シルト質
- 3 10YR³/₂、暗褐色、シルト質
- 4 10YR⁴/₂、褐色、シルト質

114号土壇

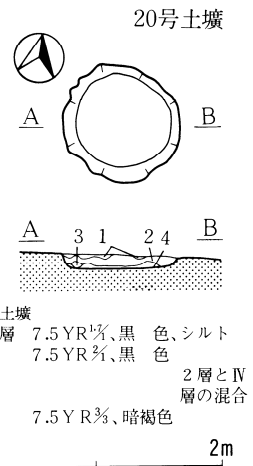
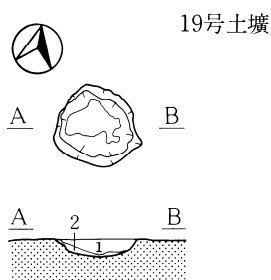
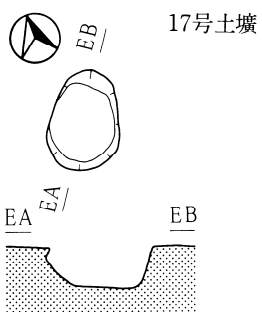
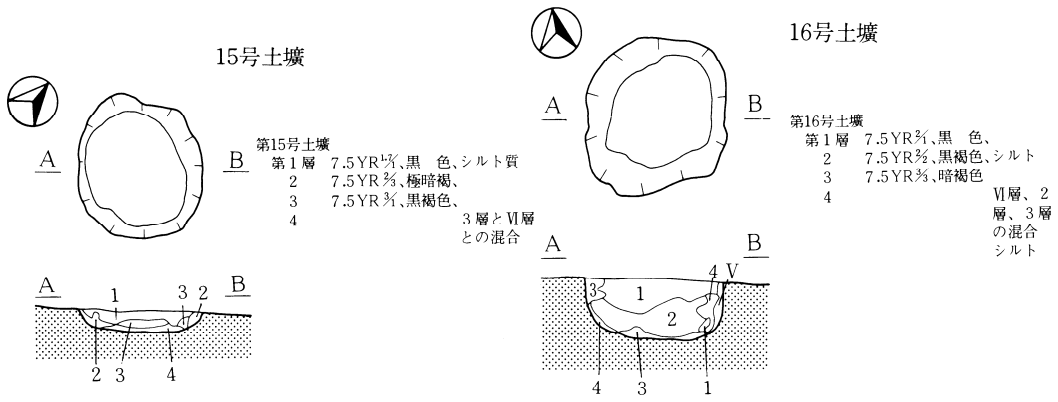
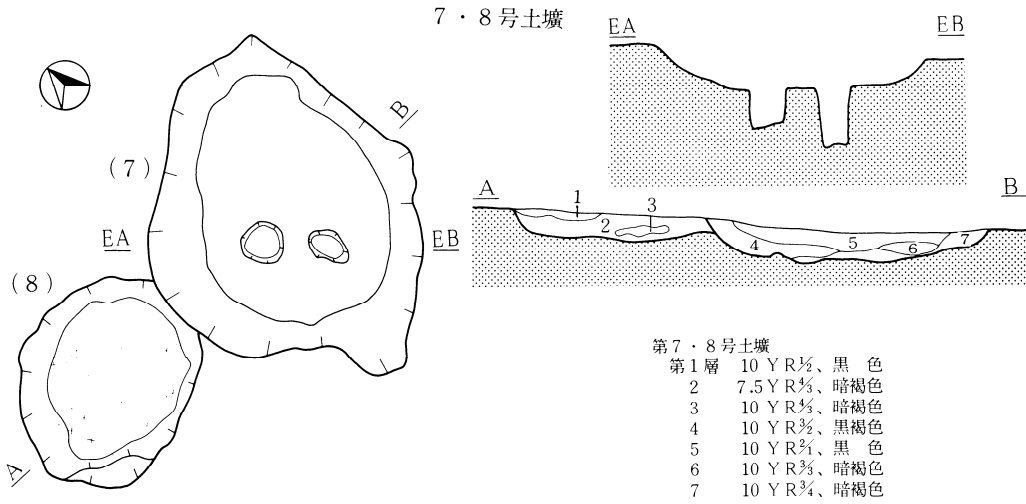
第114号土壇

- 第1a層 10YR²/₂、黒褐色、シルト質
- 1b 10YR²/₂、黒褐色、
- 2 10YR²/₂、黒褐色、ロームブロック
- 3a 10YR³/₂、暗褐色、シルト質
- 3b 10YR³/₂、暗褐色、
- 4 10YR⁴/₂、明黄褐色、ローム質
- 5 10YR⁴/₂、褐色、シルト質
- 6 10YR³/₂、暗褐色、シルト質
- 7 10YR⁴/₂、暗黄褐色、ローム質
- 8 10YR⁴/₂、褐色、シルト質

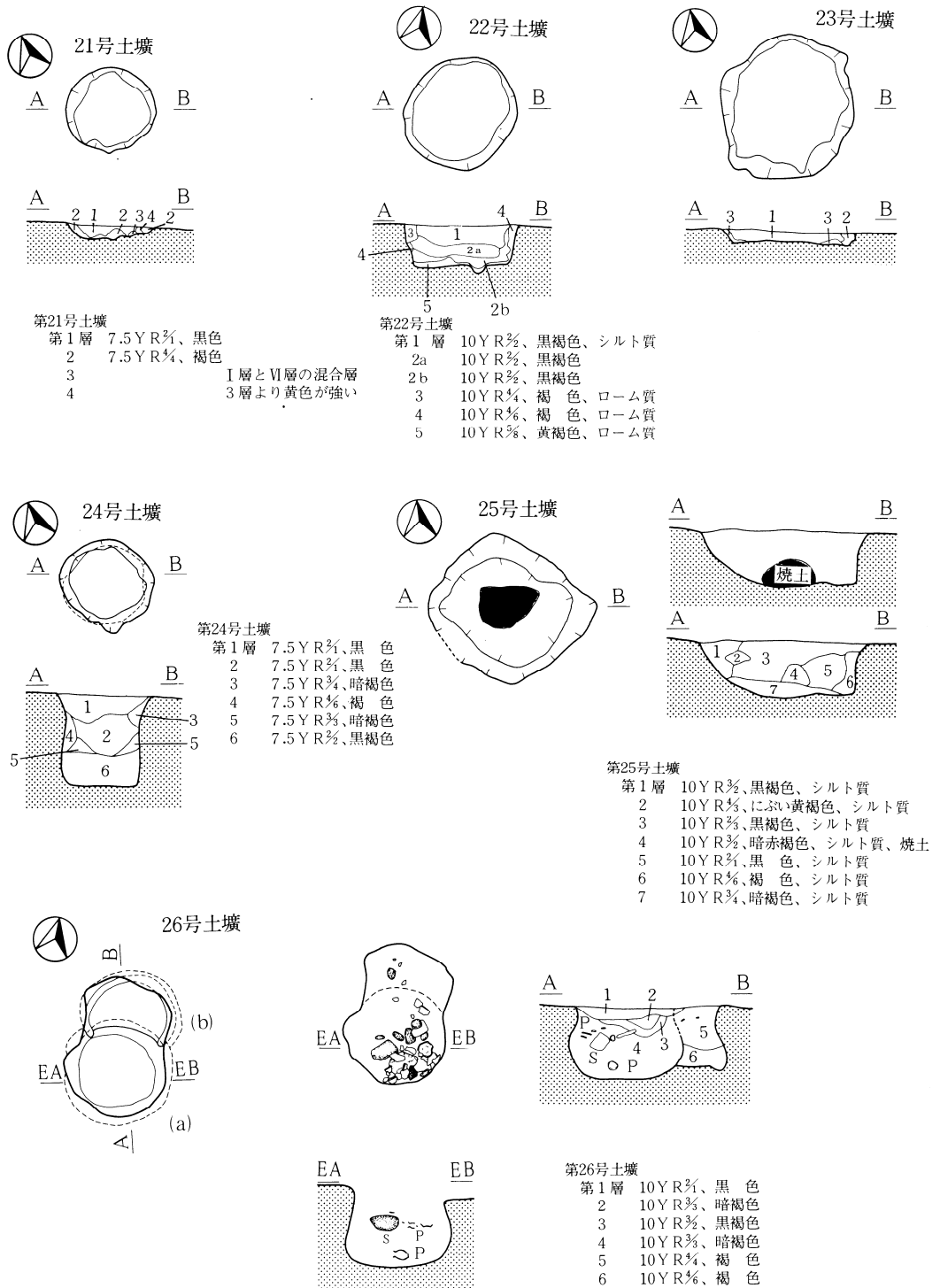


0 2m

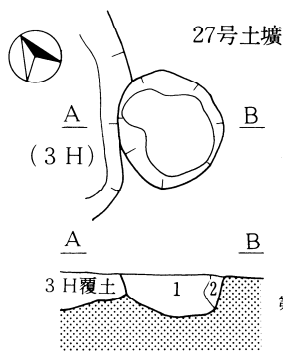
第32図 土壇平面図 (B-4、第75・103・108・114号)



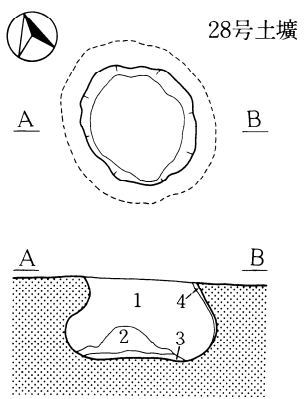
第33図 土壌平面図 (C-1、第7・8・15~17・19・20号)



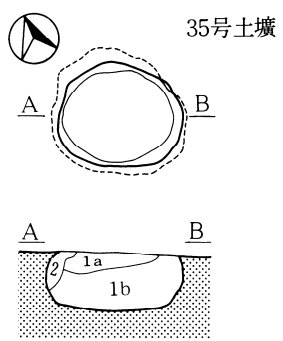
第34図 土壌平面図 (C-2、第21~26号)



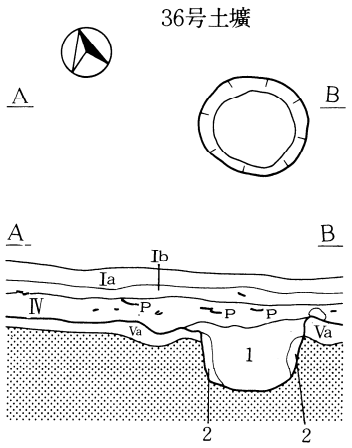
第27号土壤
 第1層 10YR $\frac{3}{4}$ 、暗褐色
 2 10YR $\frac{1}{4}$ 、褐色



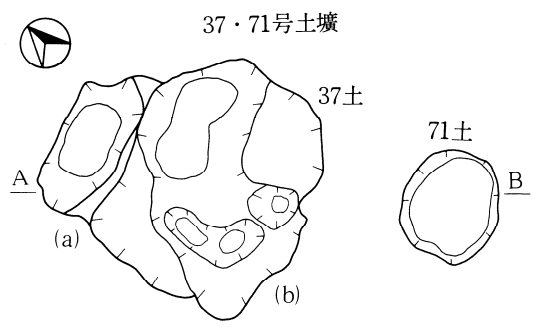
第28号土壤
 第1層 10YR $\frac{2}{4}$ 、黑褐色
 2 10YR $\frac{3}{4}$ 、黑褐色
 3 10YR $\frac{3}{4}$ 、暗褐色
 4 10YR $\frac{1}{4}$ 、暗褐色



第35号土壤
 第1a層 7.5YR $\frac{3}{4}$ 、暗褐色
 1b 7.5YR $\frac{2}{4}$ 、暗褐色
 2 7.5YR $\frac{1}{4}$ 、褐色

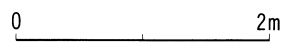


第36号土壤
 第1層 10YR $\frac{1}{4}$ 、暗褐色
 2 10YR $\frac{3}{4}$ 、暗褐色

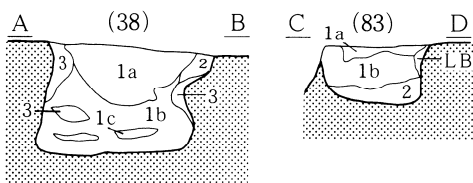
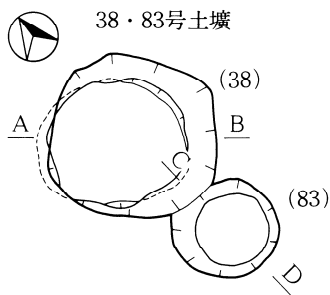


第37号土壤
 第1層 10YR $\frac{3}{4}$ 、暗褐色
 2 10YR $\frac{1}{4}$ 、褐色
 3 10YR $\frac{3}{4}$ 、黄褐色
 4 10YR $\frac{1}{4}$ 、暗褐色
 5 10YR $\frac{3}{4}$ 、暗褐色
 6 10YR $\frac{2}{4}$ 、黑褐色
 7 10YR $\frac{2}{4}$ 、黑褐色
 8 10YR $\frac{1}{4}$ 、褐色
 9 10YR $\frac{3}{4}$ 、黄褐色、ローム

第71号土壤
 第1層 10YR $\frac{3}{4}$ 、暗褐色
 2 10YR $\frac{3}{4}$ 、暗褐色
 3 10YR $\frac{1}{4}$ 、褐色、ローム



第35图 土壤平面图 (C-3、第27·28·35~37·71号)



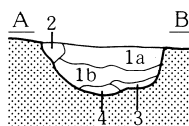
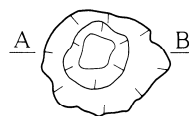
第38号土壌

- 第1a層 7.5YR%, 黒色
 1b 7.5YR%
 1c 1b層と性質は全く同じ
 2 7.5YR%, 褐色
 3 VI層と1層がまだら状に混入

第83号土壌

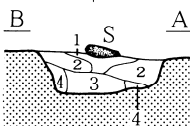
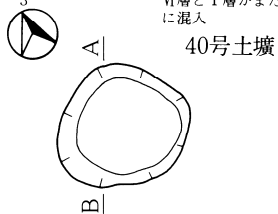
- 第1a層 10YR%, 暗褐色、ロームブロック
 1b 10YR%, 褐色、ロームブロック
 2 10YR%, 褐色、ロームブロック

39号土壌



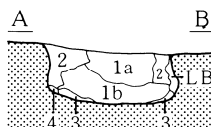
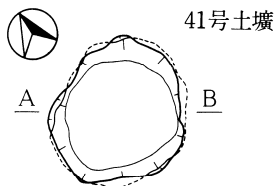
第39号土壌

- 第1a層 7.5YR%, 極暗褐色
 1b 1a層とほぼ同じ性質
 2 7.5YR%, 褐色
 3 1b層とVI層の混じり
 4 7.5YR%, 黒色



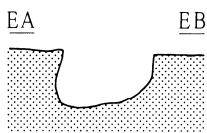
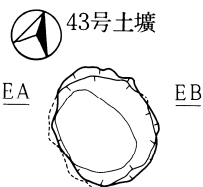
第40号土壌

- 第1層 10YR%, 褐色、ローム
 2 10YR%, 褐色
 3 10YR%, 暗褐色
 4 10YR%, 黄褐色、ローム

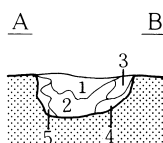
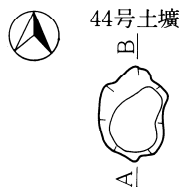


第41号土壌

- 第1a層 10YR%, 黒褐色、シルト質
 1b 10YR%, 黒色
 2 I層とVI層の混合層
 3 I層とVI層の混合層
 4 VI層の混合層



43号土壌



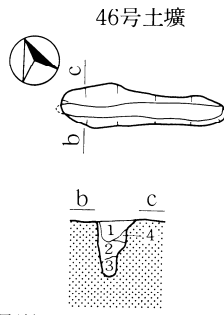
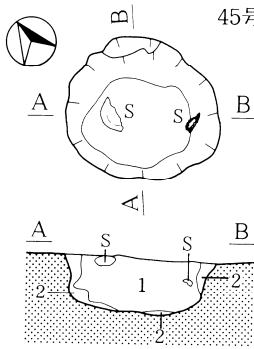
44号土壌

第44号土壌

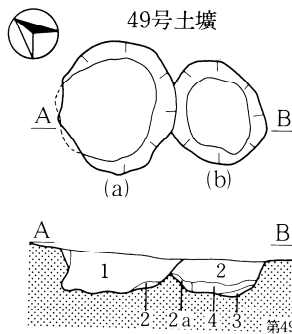
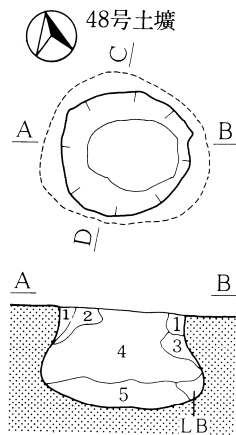
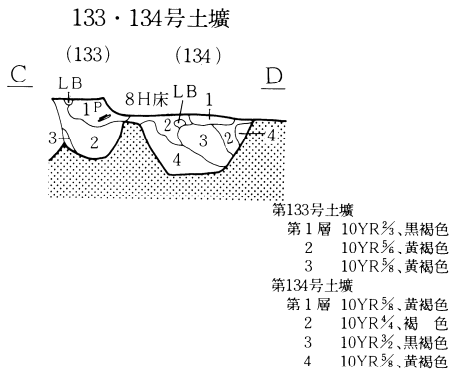
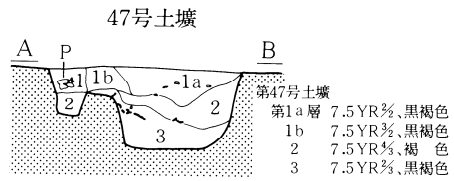
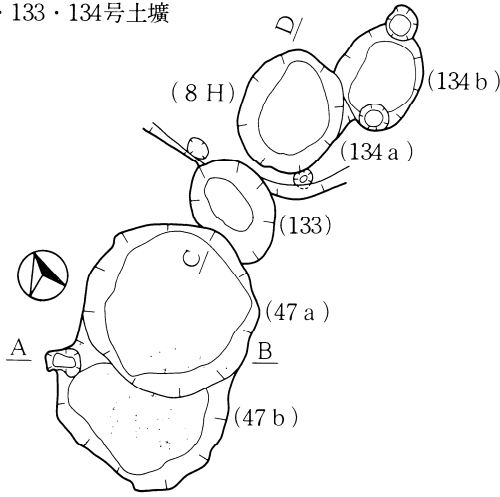
- 第1層 10YR%, 黒褐色
 2 10YR%, 暗褐色
 3 10YR%, 褐色
 4 10YR%, 黄褐色
 5 10YR%, 褐色

0 2m

第36図 土壌平面図 (C-4、第38~41・43・44・83号)

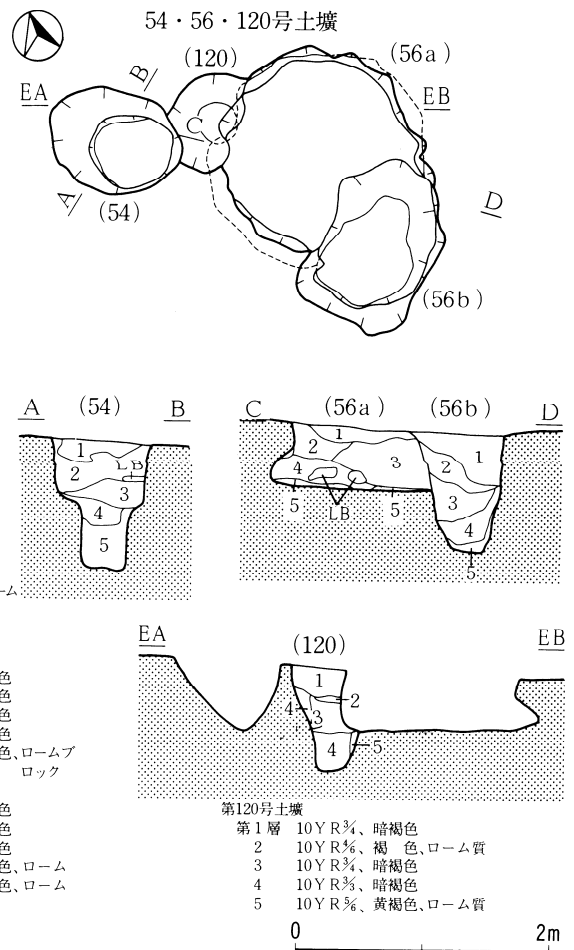
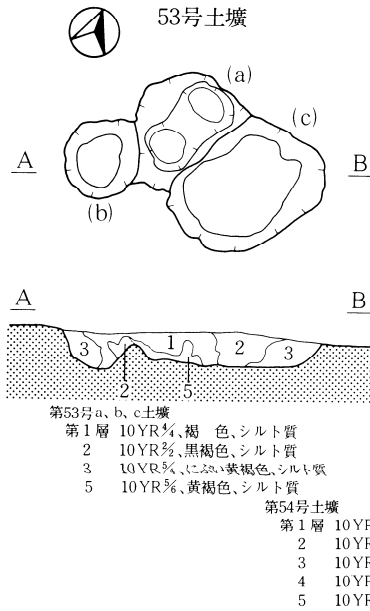
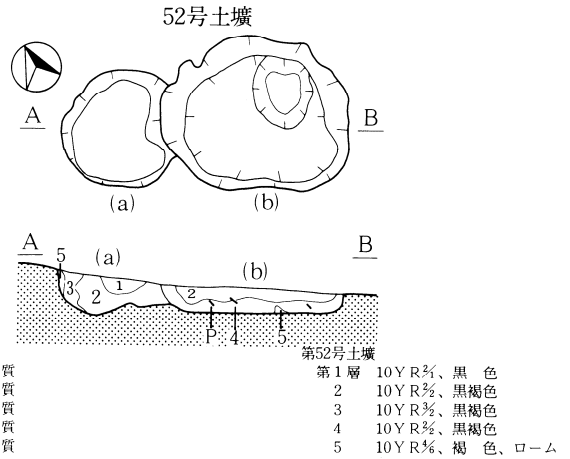
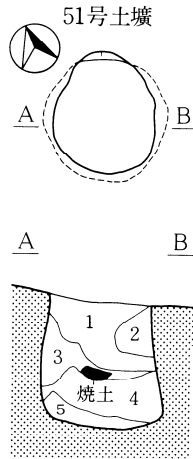


47・133・134号土壙

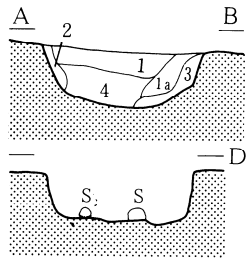
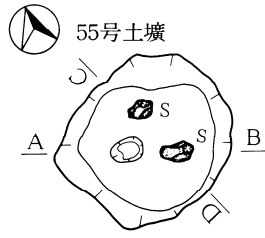


0 2m

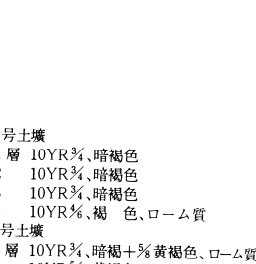
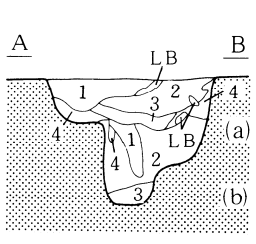
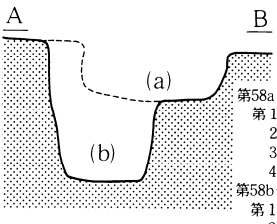
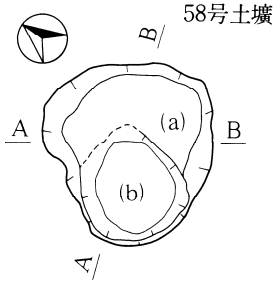
第37図 土壙平面図 (C-5、第45~49・133・134号)



第38図 土壌平面図 (C-6、第51~54・56号)

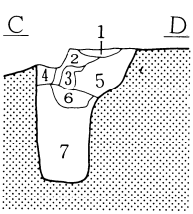
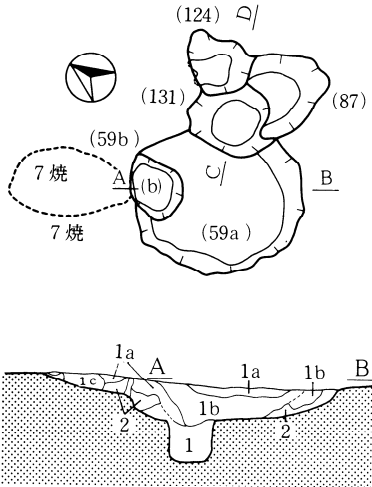


- 第55号土壌
- 第1層 10YR%, 黒褐色、シルト質
 - 1a 10YR%, 暗褐色、シルト質
 - 2 10YR%, 褐色、シルト質
 - 3 10YR%, 褐色、シルト質
 - 4 10YR%, 黒褐色、シルト質



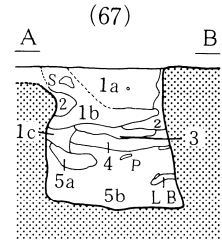
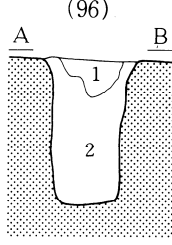
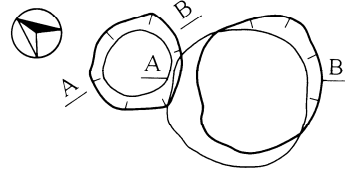
- 第58a号土壌
- 第1層 10YR%, 暗褐色
 - 2 10YR%, 暗褐色
 - 3 10YR%, 暗褐色
 - 4 10YR%, 褐色、ローム質
- 第58b号土壌
- 第1層 10YR%, 暗褐+%黄褐色、ローム質
 - 2 10YR%, 黄褐色、ローム質
 - 3 10YR%, 黒褐+%黄褐色、ローム質

59・87・124・131号土壌



- 第59a号土壌
- 第1a層 10YR%, 黒褐色
 - 1b 10YR%, 暗褐色
 - 2 7.5YR%, 明褐色
- 第59b号土壌
- 第1層 7.5YR%, 暗褐色
- 第131号土壌
- 第1層 10YR%, 暗褐色
 - 2 10YR%, 暗褐色
 - 3 10YR%, 褐色、ローム質シルト
 - 4 10YR%, 黄褐色、ローム質
 - 5 10YR%, 暗褐色
 - 6 10YR%, 暗褐色
 - 7 10YR%, 黄褐色、ローム質

67・96号土壌

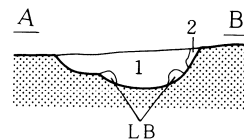
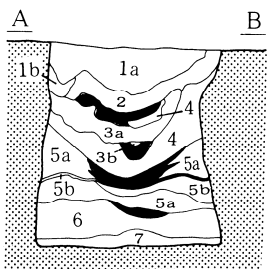
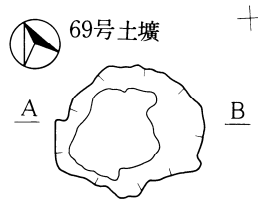
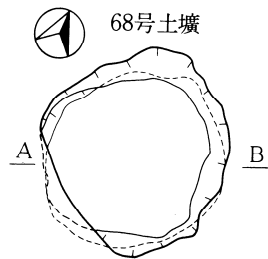


- 第96号土壌
- 第1層 10YR%, におい黄褐色
 - 2 10YR%, 褐色

- 第67号土壌
- 第1a層 10YR%, 暗褐色、ローム質
 - 1b 10YR%, 暗褐色
 - 1c 10YR%, 暗褐色
 - 2 . 3層と1層と混合
 - 3 VI層
 - 4 7.5YR%, 極暗褐色
 - 5a 7.5YR%, 極暗褐色
 - 5b . 5a層と等しい

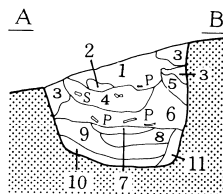
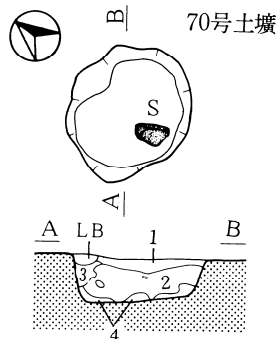
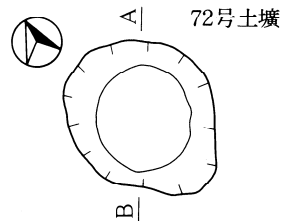


第39図 土壌平面図 (C-7、第55・58・59・67・87・96・124・131号)



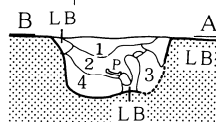
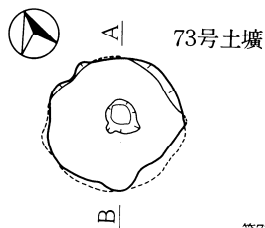
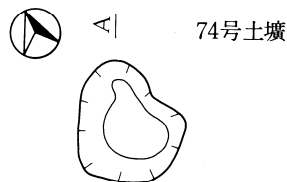
第69号土壤
第1層 10YR $\frac{3}{4}$ 、暗褐色
2 10YR $\frac{3}{4}$ 、褐色

第68号土壤
第1a層 7.5YR $\frac{1}{2}$ 、黒色
1b 7.5YR $\frac{1}{2}$ 、黒色
2 7.5YR $\frac{3}{4}$ 、暗褐色
3a 7.5YR $\frac{3}{4}$ 、褐色
3b 7.5YR $\frac{3}{4}$ 、褐色
4 7.5YR $\frac{3}{4}$ 、橙褐色
5a 7.5YR $\frac{3}{4}$ 、明褐色
5b 7.5YR $\frac{3}{4}$ 、褐色
6 7.5YR $\frac{3}{4}$ 、褐色
7 7.5YR $\frac{3}{4}$ 、暗褐色



第72号土壤
第1層 10YR $\frac{3}{4}$ 、黒褐色
2 5YR $\frac{3}{4}$ 、赤褐色
3 10YR $\frac{3}{4}$ 、黄褐色、ロームブロック
4 7.5YR $\frac{3}{4}$ 、暗褐色
5 10YR $\frac{3}{4}$ 、褐色
6 7.5YR $\frac{3}{4}$ 、黒褐色
7 10YR $\frac{3}{4}$ + $\frac{3}{4}$ 、暗褐色+黄褐色
8 10YR $\frac{3}{4}$ 、暗褐色
9 10YR $\frac{3}{4}$ 、黒褐色
10 10YR $\frac{3}{4}$ 、黒褐色
11 10YR $\frac{3}{4}$ 、黄褐色

第70号土壤
第1層 10YR $\frac{3}{4}$ 、暗褐色
2 10YR $\frac{3}{4}$ 、暗褐色
3 10YR $\frac{3}{4}$ 、褐色、ローム質
4 10YR $\frac{3}{4}$ 、黄褐色、ローム質

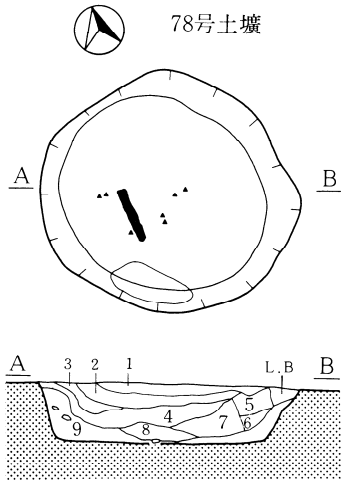


第74号土壤
第1層 10YR $\frac{3}{4}$ 、暗褐色
2 10YR $\frac{3}{4}$ 、褐色
3 10YR $\frac{3}{4}$ 、暗褐色
4 10YR $\frac{3}{4}$ 、褐色

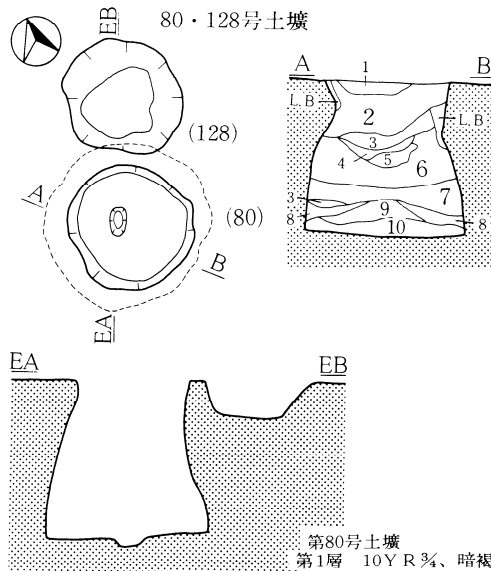
第73号土壤
第1層 10YR $\frac{3}{4}$ 、黒色、シルト質
2 10YR $\frac{3}{4}$ 、暗褐色、シルト質
3 10YR $\frac{3}{4}$ 、褐色、シルト質
4 10YR $\frac{3}{4}$ 、褐色、シルト質
5 10YR $\frac{3}{4}$ 、黄褐色、シルト質
5a 10YR $\frac{3}{4}$ 、明黄褐色、シルト質
6 10YR $\frac{3}{4}$ 、黒褐色、シルト質
7 10YR $\frac{3}{4}$ 、黒褐色、シルト質
8 10YR $\frac{3}{4}$ 、黒褐色、シルト質
9 10YR $\frac{3}{4}$ 、暗褐色、シルト質

0 2m

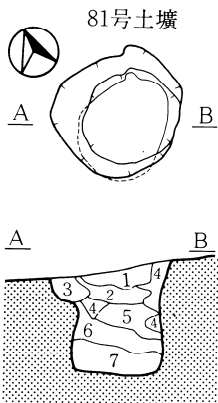
第40図 土壤平面図 (C-8、第68~70・72~74号)



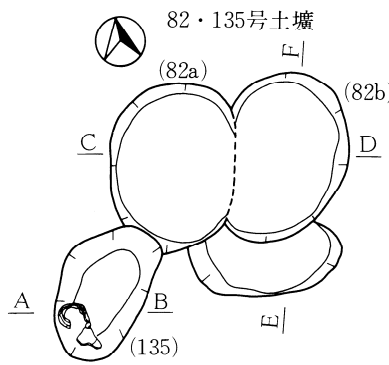
- 第78号土壤
- | | | |
|-----|-----------|-----|
| 第1層 | 10Y R 3/4 | 暗褐色 |
| 2 | 10Y R 3/4 | 黒色 |
| 3 | 10Y R 3/4 | 暗褐色 |
| 4 | 10Y R 5/6 | 褐色 |
| 5 | 10Y R 3/4 | 暗褐色 |
| 6 | 10Y R 3/4 | 褐色 |
| 7 | 10Y R 3/4 | 褐色 |
| 8 | 10Y R 3/4 | 暗褐色 |
| 9 | 10Y R 3/4 | 褐色 |



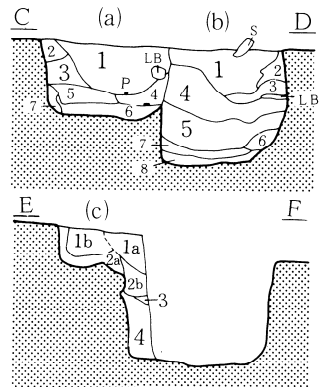
- 第80号土壤
- | | | |
|-----|-----------|-----|
| 第1層 | 10Y R 3/4 | 暗褐色 |
| 2 | 10Y R 3/4 | 褐色 |
| 3 | 10Y R 3/4 | 褐色 |
| 4 | 10Y R 3/4 | 暗褐色 |
| 5 | 10Y R 3/4 | 褐色 |
| 6 | 10Y R 3/4 | 暗褐色 |
| 7 | 10Y R 3/4 | 暗褐色 |
| 8 | 10Y R 3/4 | 暗褐色 |
| 9 | 10Y R 3/4 | 暗褐色 |
| 10 | 10Y R 3/4 | 暗褐色 |



- 第81号土壤
- | | | |
|-----|------------|------|
| 第1層 | 7.5Y R 3/4 | 極暗褐色 |
| 2 | 7.5Y R 3/4 | 暗褐色 |
| 3 | VI層に等しい | |
| 4 | 10Y R 3/4 | 褐色 |
| 5 | 7.5Y R 3/4 | 褐色 |
| 6 | 7.5Y R 3/4 | 褐色 |
| 7 | 10Y R 3/4 | 褐色 |



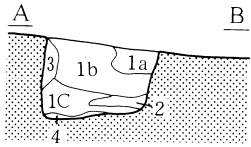
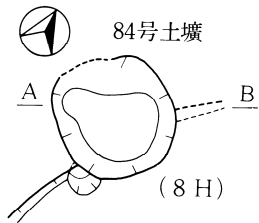
- 第135号土壤
- | | | |
|-----|------------|-----|
| 第1層 | 7.5Y R 3/4 | 黒褐色 |
| 2 | 7.5Y R 3/4 | 暗褐色 |
| 3 | 7.5Y R 3/4 | 暗褐色 |
| 4 | 10Y R 3/4 | 黄褐色 |



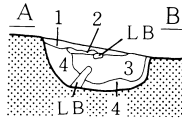
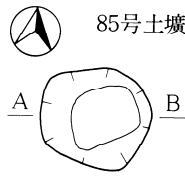
- | | | |
|---------------------|-------------------------|---------------|
| 第82a号土壤 | 第82b号土壤 | 第82c号土壤 |
| 第1層 10Y R 3/4 暗褐色 | 第1層 10Y R 3/4、黒褐色 | 第1層 10Y R 3/4 |
| 2 10Y R 3/4 褐色、ローム | 2 10Y R 3/4、褐色 | 2 10Y R 3/4 |
| 3 10Y R 3/4 黒褐色 | 3 10Y R 3/4、暗褐色 | 1b 黒褐色 |
| 4 10Y R 3/4 暗褐色 | 4 10Y R 3/4、暗褐色 | 2a 10Y R 3/4 |
| 5 10Y R 3/4 暗褐色 | 5 10Y R 3/4、黒褐色 | 2b 10Y R 3/4 |
| 6 10Y R 3/4 暗褐色 | 6 10Y R 3/4、暗褐色 | 3 2層とロームが混合 |
| 7 10Y R 3/4 暗褐色、ローム | 7 10Y R 3/4+3/4 暗褐色+黄褐色 | 4 1a層に等しい |
| 8 10Y R 3/4 褐色、ローム | 8 10Y R 3/4、黒褐色 | |

0 2m

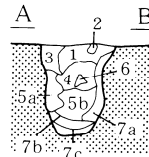
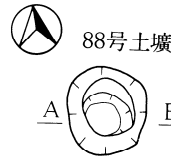
第41図 土壤平面図 (C-9、第78・80~82・128・135号)



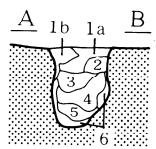
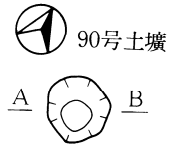
- 第84号土坑
- | | |
|------|---------------------|
| 第1a層 | 10YR 5/2, 暗褐色 |
| 1b | 10YR 5/2, 暗褐色 |
| 1c | 10YR 5/2, 褐色 |
| 2 | 10YR 5/2, 黄褐色, ローム質 |
| 3 | 10YR 5/2, 黄褐色, ローム質 |
| 4 | 10YR 5/2, 黄褐色, ローム質 |



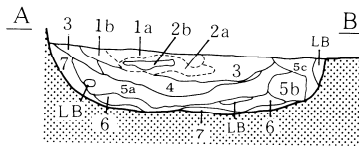
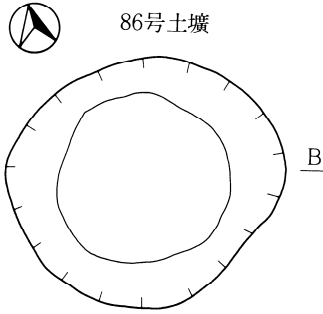
- 第85号土坑
- | | |
|-----|----------------------|
| 第1層 | 10YR 5/2, 黒褐色 |
| 2 | 10YR 5/2, 暗褐色 |
| 3 | 10YR 5/2, 黒褐色 |
| 4 | 10YR 5/2, 暗黒褐色, ローム質 |



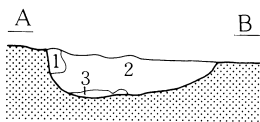
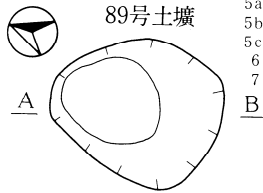
- 第88号土坑
- | | |
|-----|--------------------|
| 第1層 | 10YR 5/2, 黒褐色, シルト |
| 2 | 10YR 5/2, 黒色, シルト |
| 3 | 10YR 5/2, 暗褐色, シルト |
| 4 | 10YR 5/2, 黒色, シルト |
| 5a | 10YR 5/2, 褐色, シルト |
| 5b | 10YR 5/2, 暗褐色, シルト |
| 6 | 10YR 5/2, 褐色, シルト |
| 7a | 10YR 5/2, 褐色, シルト |
| 7b | 10YR 5/2, 黄褐色, シルト |
| 7c | 10YR 5/2, 黄褐色, シルト |



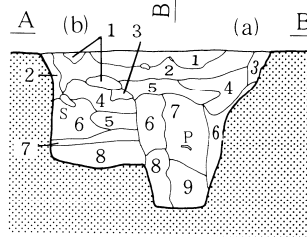
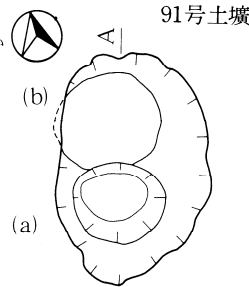
- 第90号土坑
- | | |
|------|--------------------------|
| 第1a層 | 10YR 5/2, 暗褐色, シルト |
| 1b | 10YR 5/2, 暗褐色, シルト |
| 2 | 10YR 5/2, 褐色, シルト, ローム |
| 3 | 10YR 5/2, 黄褐色, シルト, ローム |
| 4 | 10YR 5/2, 黒褐色, シルト |
| 5 | 10YR 5/2, 黄褐色, シルト |
| 6 | 10YR 5/2, 明黄褐色, シルト, ローム |



- 第86号土坑
- | | |
|------|------------------|
| 第1a層 | 10YR 5/2, 暗褐色 |
| 1b | 色調が1aよりわずかに濃い |
| 2a | 10YR 5/2, 褐色 |
| 2b | 5YR 5/2, 赤褐色 |
| 3 | 10YR 5/2, 褐色 |
| 4 | 10YR 5/2, 暗褐色 |
| 5a | 10YR 5/2, 黒褐色 |
| 5b | 10YR 5/2, にぶい黄褐色 |
| 5c | 10YR 5/2, 黒褐色 |
| 6 | 10YR 5/2, 暗褐色 |
| 7 | 10YR 5/2, 黄褐色 |



- 第89号土坑
- | | |
|-----|--------------------|
| 第1層 | 10YR 5/2, 黄褐色 |
| 2 | 10YR 5/2, 黒褐色, ローム |
| 3 | 10YR 5/2, 黄褐色, ローム |

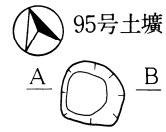
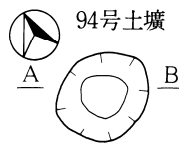
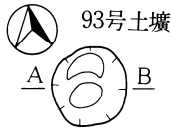
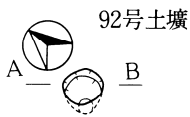


- 第91a号土坑
- | | |
|-----|---------------------|
| 第1層 | 10YR 5/2, 暗褐色 |
| 2 | 10YR 5/2, 暗褐色 |
| 3 | 10YR 5/2, 黄褐色 |
| 4 | 10YR 5/2, 褐色 |
| 5 | 10YR 5/2, 黄褐色, ローム質 |
| 6 | 10YR 5/2, 黄褐色 |
| 7 | 10YR 5/2, 褐色 |
| 8 | 10YR 5/2, 黄褐色 |
| 9 | 10YR 5/2, 黄褐色 |

- 第91b号土坑
- | | |
|-----|----------------------|
| 第1層 | 10YR 5/2, 黄褐色, ローム質 |
| 2 | 10YR 5/2, 明黄褐色, ローム質 |
| 3 | 10YR 5/2, 褐色, シルト質 |
| 4 | 10YR 5/2, 黒褐色 |
| 5 | 10YR 5/2, 赤褐色 |
| 6 | 10YR 5/2, 暗褐色 |
| 7 | 10YR 5/2, 暗褐色 |
| 8 | 10YR 5/2, 褐色 |

第42図 土坑平面図 (C-10、第84~86・88~91号)

0 2m



第92号土壌

- 第1層 10YR $\frac{7}{5}$ 、黒色、
- 2 10YR $\frac{7}{5}$ 、褐色、ローム
- 3 10YR $\frac{7}{5}$ 、黄褐色、ローム

第93号土壌

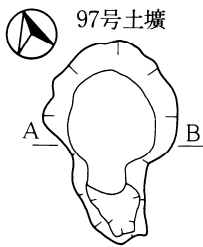
- 第1層 10YR $\frac{7}{5}$ 、暗褐色
- 2 10YR $\frac{7}{5}$ 、褐色、ローム質
- 3 10YR $\frac{7}{5}$ 、褐色、ローム質

第94号土壌

- 第1層 7.5YR $\frac{7}{5}$ 、黒褐色、シルト
- 2 7.5YR $\frac{7}{5}$ 、黒色、シルト
- 3 7.5YR $\frac{7}{5}$ 、褐色、シルト
- 4 7.5YR $\frac{7}{5}$ 、褐色、シルト
- 5 7.5YR $\frac{7}{5}$ 、明褐色、シルト

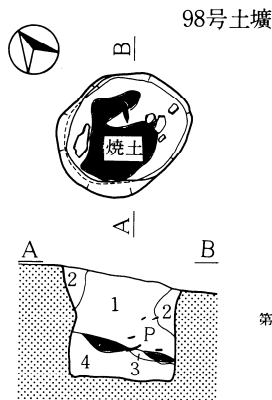
第95号土壌

- 第1層 7.5YR $\frac{7}{5}$ 、極暗褐色
- 2 7.5YR $\frac{7}{5}$ 、黒褐色



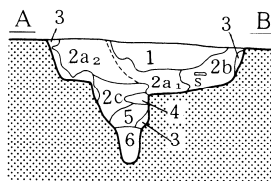
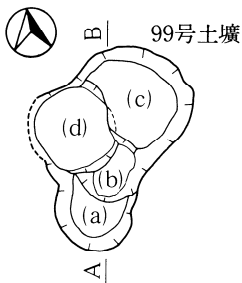
第97号土壌

- 第1層 10YR $\frac{7}{5}$ 、暗褐色、シルト
- 2 10YR $\frac{7}{5}$ 、褐色、シルト
- 3 10YR $\frac{7}{5}$ 、褐色、シルト
- 4 10YR $\frac{7}{5}$ 、黄褐色、シルト
- 5 10YR $\frac{7}{5}$ 、にぶ黄褐色、シルト
- 6 10YR $\frac{7}{5}$ 、黄褐色、シルト



第98号土壌

- 第1層 7.5YR $\frac{7}{5}$ 、黒褐色
- 2 7.5YR $\frac{7}{5}$ 、褐色
- 3
- 4

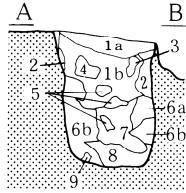
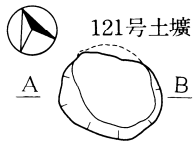


第99号土壌

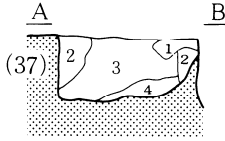
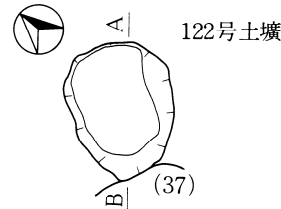
- 第1層 7.5YR $\frac{7}{5}$ 、黒色、ローム
- 2a 7.5YR $\frac{7}{5}$ 、暗褐色
- 2a₂ 7.5YR $\frac{7}{5}$ 、暗褐色
- 2b 7.5YR $\frac{7}{5}$ 、褐色
- 2c 7.5YR $\frac{7}{5}$ 、暗褐色
- 3 VI層と混合
- 4 7.5YR $\frac{7}{5}$ 、褐色
- 5 7.5YR $\frac{7}{5}$ 、明褐色
- 6 7.5YR $\frac{7}{5}$ 、褐色

0 2m

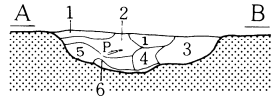
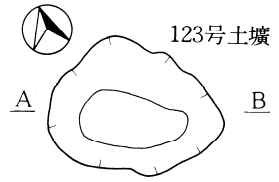
第43図 土壌平面図 (C-11、第92~95・97~99号)



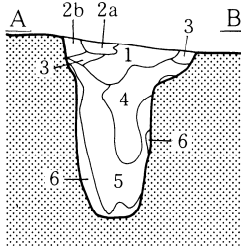
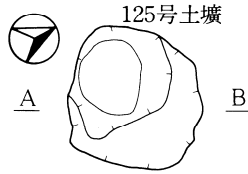
- 第121号土壌
- 第1層 10YR 5/2、暗褐色、シルト質
- 1b 1a層の色をやや薄くした色
- 2 10YR 5/4、黄褐色、シルト質
- 3 10YR 5/6、黄褐色、シルト質
- 4 10YR 5/8、暗褐色、シルト質
- 5 10YR 5/10、褐色、シルト質



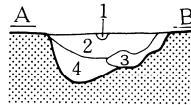
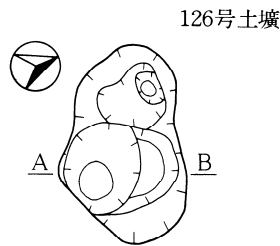
- 第122号土壌
- 第1層 10YR 5/2、褐色
- 2 10YR 5/4、褐色、ローム
- 3 10YR 5/8、暗褐色
- 4 10YR 5/10、暗褐色
- 6a 10YR 5/4、黄褐色、シルト質
- 6b 6a層と変わらない
- 7 10YR 5/8、暗褐色、シルト質
- 8 10YR 5/10、褐色、シルト質
- 9 10YR 5/12、黒褐色、シルト質



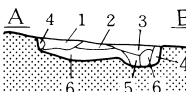
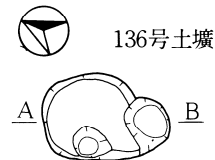
- 第123号土壌
- 第1層 10YR 5/2、暗褐色
- 2 10YR 5/4、褐色
- 3 10YR 5/6、褐色
- 4 10YR 5/8、におい、黄褐色
- 5 10YR 5/10、暗褐色
- 6 10YR 5/12、黄褐色、ローム



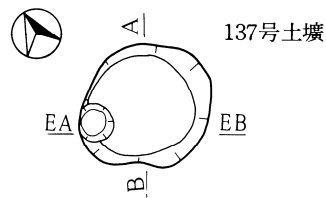
- 第125号土壌
- 第1層 10YR 5/2、暗褐色
- 2a 10YR 5/4、黒褐色
- 2b 10YR 5/8、暗褐色
- 3 10YR 5/10、褐色、ローム
- 4 10YR 5/12、褐色
- 5 10YR 5/14、黄褐色、ローム
- 6 10YR 5/16、明黄褐色、ローム



- 第126号土壌
- 第1層 10YR 5/2、暗褐色
- 2 10YR 5/4、暗褐色
- 3 10YR 5/8、暗褐色
- 4 10YR 5/10、褐色



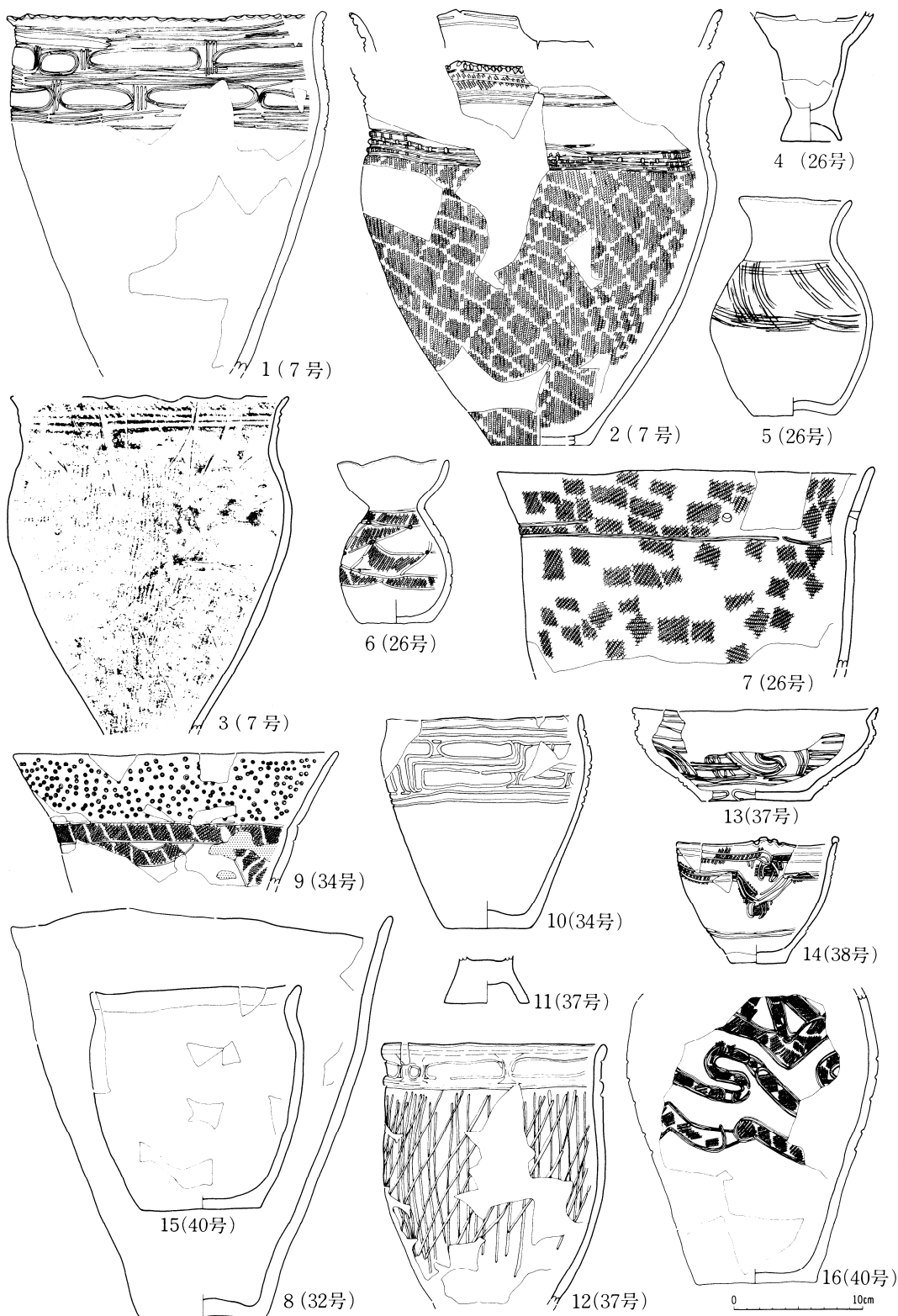
- 第136号土壌
- 第1層 10YR 5/2、暗褐色
- 2 10YR 5/4、黄褐色
- 3 10YR 5/8、黒褐色
- 4 10YR 5/10、明黄褐色
- 5 10YR 5/12、褐色
- 6 10YR 5/14、暗褐色



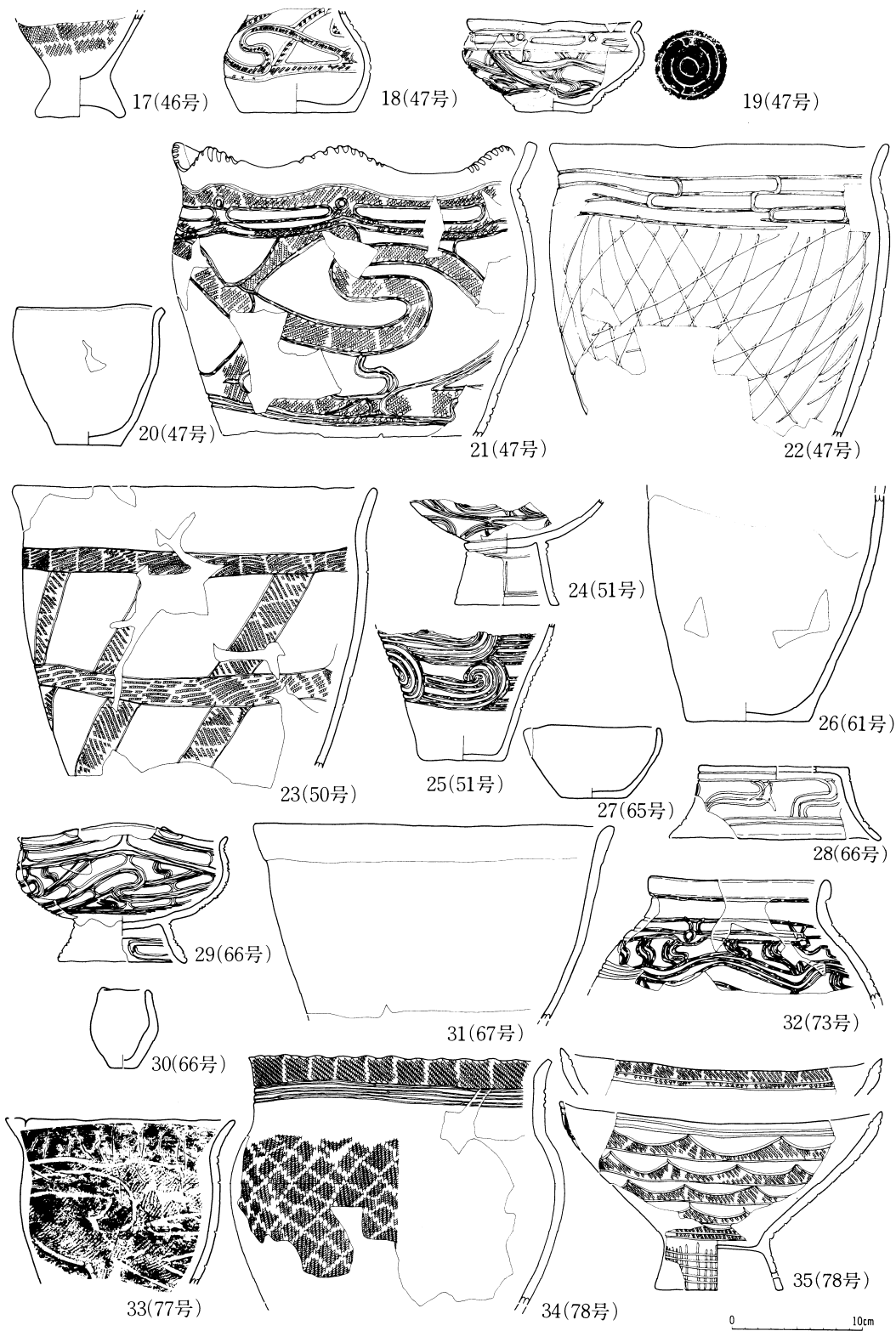
- 第137号土壌
- 第1層 10YR 5/2、暗褐色
- 2 10YR 5/4、褐色
- 3 10YR 5/8、暗褐色
- 4 10YR 5/10、黄褐色
- 5 10YR 5/12、褐色
- 6 10YR 5/14、褐色
- 7 10YR 5/16、暗褐色
- 8 10YR 5/18、黒褐色
- 9 10YR 5/20、黄褐色

0 2m

第44図 土壌平面図 (C-12、第121~123・125・126・136・137号)



第45图 IV-1区土壤内出土土器实测图一(1)



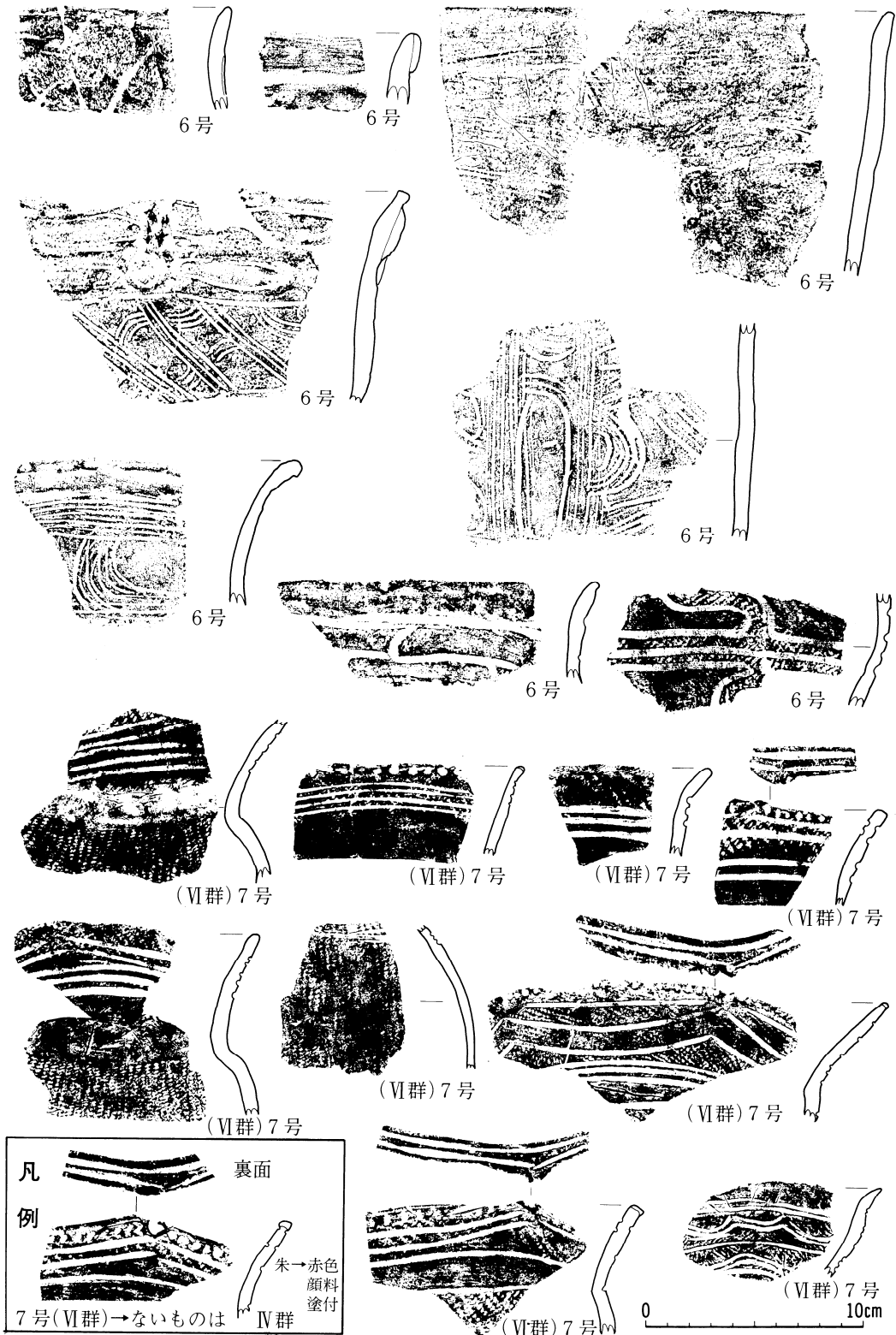
第46图 IV—1区土境内出土土器实测图—(2)



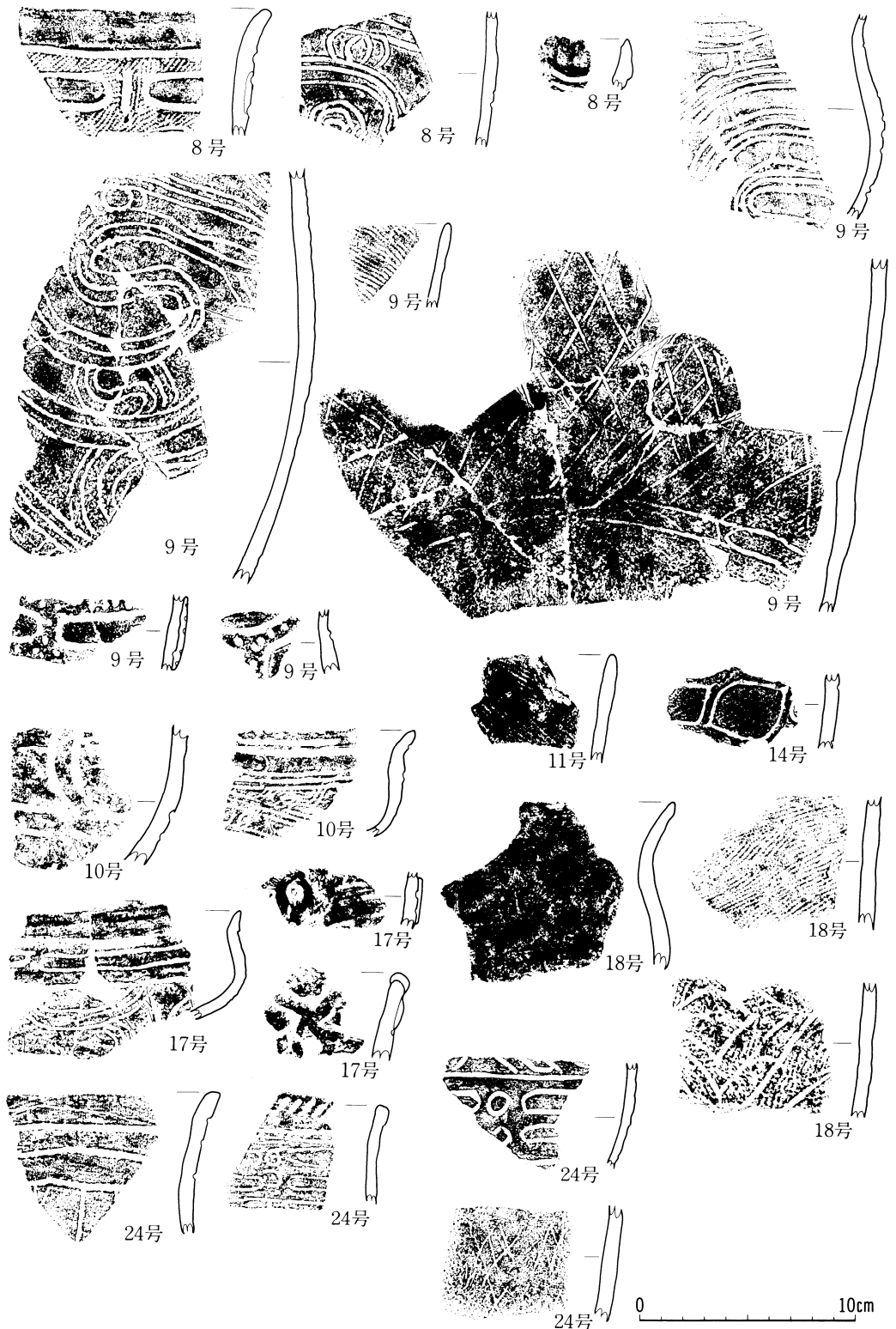
第47图 IV-1区土壤内出土土器实测图一(3)

第3表 IV-1区 土壌内出土土器（復原実測土器）観察一覧表

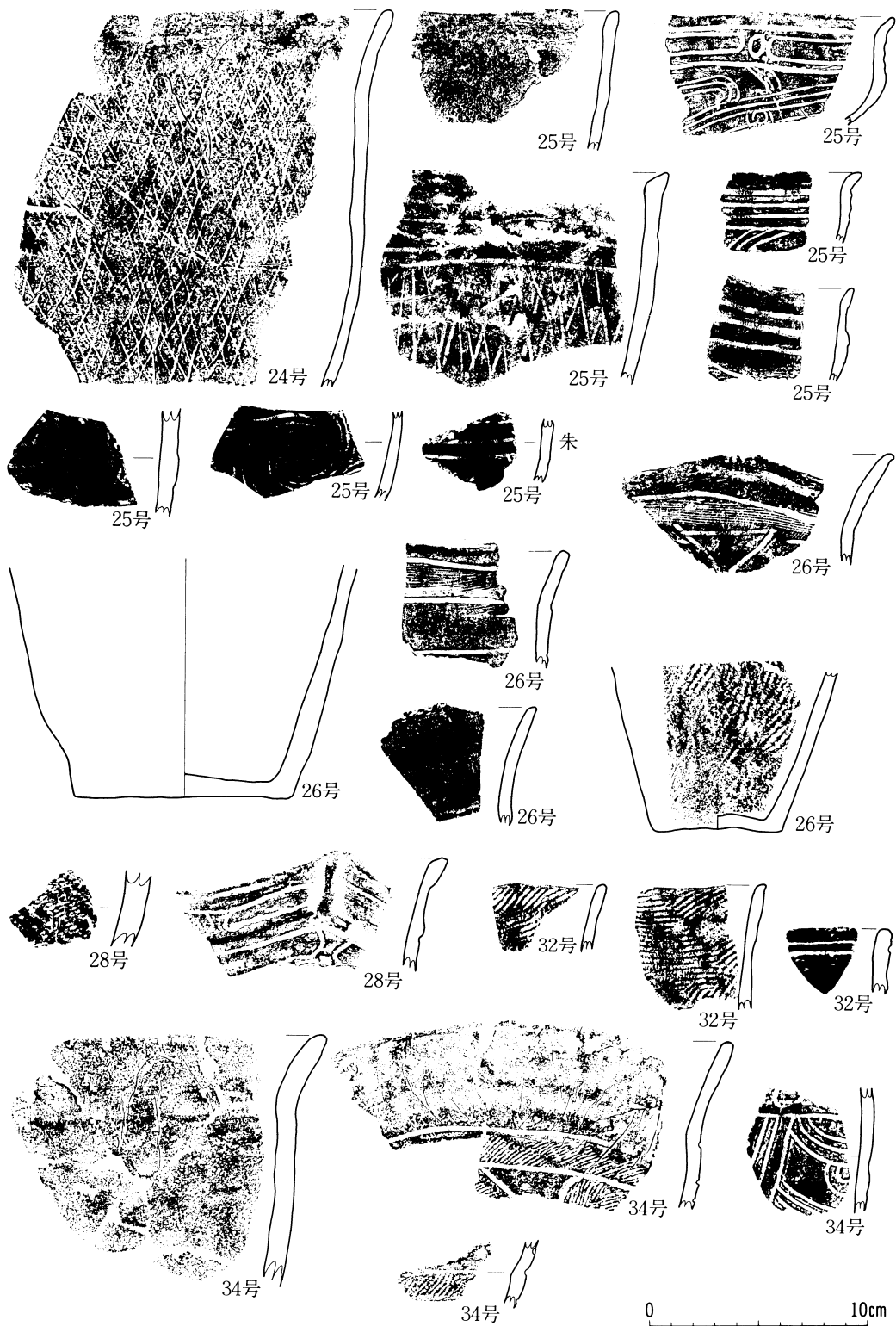
土器 番号	遺構名	層	計 測 値 (cm)			器 形	主 文 様	時 期		備 考
			口 径	底 径	器 高			大区 分	分 類	
1	7土	フク土	24.8	(-)	(28.0)	深 鉢	櫛歯状沈線文	IV 群	H-1	
2	"	フク土	29.0	7.5	30.0	深 鉢	地文縄文、沈線文	VI 群		
3	"	フク土	(21.6)	(-)	(26.5)	深 鉢	地文縄文、沈線文	"		拓影
4	26土	フク土4層	(9.4)	4.7	(10.2)	(台付?)	無 文	IV 群	A・L	
5	"	フク土4層	8.8	6.2	17.3	壺	櫛歯状沈線文	"	H-1	
6	"	フク土4層	8.8	5.5	13.0	小型壺	磨消縄文	"	F・L	
7	"	フク土4層	29.4	(-)	(16.0)	深 鉢	地文縄文	"	C-2	
8	32土	フク土	(29.6)	9.6	32.3	深 鉢	無 文	"	A-1	
9	34土	フク土	(25.4)	(-)	(10.5)	深 鉢	磨消縄文、刺突文様帯	"	L	
10	"	フク土	15.0	6.5	16.5	鉢	沈線文	"	G-1	
11	37土	フク土	(-)	6.5	(-)	台付鉢	無 文	"		台部のみ
12	"	フク土	17.2	(-)	(20.0)	深 鉢	粘土紐貼り付、沈線文	"	G-2	
13	"	フク土6層	(19.1)	8.5	7.2	浅 鉢	沈線文	"	G-1	
14	38土	フク土	12.7	(4.2)	9.9	鉢	磨消縄文	"	F-1	
15	40土	フク土1層	(16.2)	9.0	17.4	鉢	折り返し口縁、無文	"	A-1	
16	"	フク土1層	(-)	9.2	(22.5)	深 鉢	充填縄文	"	F・L	長胴
17	46土	フク土	(-)	6.8	(8.0)	台付鉢	地文縄文	"		台部
18	47土	フク土	(-)	8.8	(8.0)	壺	磨消縄文	"	F-2	燻成不良
19	"	フク土	13.3	5.7	7.1	浅 鉢	沈線文	"	G-1	
20	"	フク土	11.2	5.0	10.9	鉢	無 文	"	A-1	
21	"	フク土	27.8	(-)	(22.5)	深 鉢	磨消縄文	"	F-2	
22	"	フク土	(26.0)	(-)	(22.5)	深 鉢	沈線文	"	G-1	
23	50土	フク土	(27.8)	(-)	(23.0)	深 鉢	磨消縄文	"	F・L	
24	51土	フク土	(-)	8.0	(8.0)	台付鉢	沈線文	"	G-1	台部
25	"	底 面	(-)	6.5	(10.5)	鉢	沈線文	"	G-1	
26	61土	フク土1層	(-)	9.3	(12.5)	深 鉢	無 文	"	(A-1)	L (?)
27	65土	フク土	10.4	4.8	5.4	(浅 鉢)	無 文	"	A-1	
28	66土	フク土	16.2	11.4	5.6	浅 鉢	沈線文	"	G-1	
29	"	フク土	16.2	9.9	10.2	台付浅鉢	沈線文	"	G-1	
30	"	フク土	4.0	2.0	6.2	ミニチュア	無 文	"	ミニチュア	
31	67土	フク土	(27.5)	(-)	(14.5)	深 鉢	折り返し口縁、無文	"	A-1	
32	73土	フク土	(14.0)	(-)	(8.5)	短頸壺	沈線文	"	G-1	
33	77土	フク土	(17.7)	(-)	(12.5)	深 鉢	磨消縄文	"	F・L	拓影
34	78土	フク土	23.2	(-)	(19.0)	深 鉢	地文縄文、沈線文	VI 群		
35	"	フク土	24.6	9.8	14.5	台付浅鉢	連弧文	"		台部貫通孔 赤色顔料
36	"	フク土	(-)	7.3	(19.0)	壺	縄 文	"		
37	84土	フク土	(14.3)	5.0	8.1	浅 鉢	沈線文	IV 群	G-1	高台風底部
38	97土	フク土	23.5	(10.3)	(30.0)	深 鉢	地文縄文 (LR)	"	C	
39	98土	フク土	(-)	6.4	(14.0)	壺	無 文	"	(A)	
40	101土	フク土	27.6	9.4	35.5	深 鉢	沈線文	"	G-1	
41	112土	フク土	(-)	7.2	(18.3)	壺	刺突文、充填縄文 (無節)	"	(F-2)	L (?)
42	"	フク土	24.1	(-)	(23.0)	深 鉢	折り返し口縁、沈線文	"	G-1	
43	"	フク土	(-)	(-)	(30.5)	壺	櫛歯状沈線	"	H-1	
44	117土	フク土	(-)	(-)	10.0	鉢	地文縄文 (LR)	"		
45	119土	フク土	(-)	7.0	(7.5)	鉢	地文縄文 (RL)	"		
46	127土	フク土	(13.9)	5.5	5.9	浅 鉢	沈線文	"	G-1	高台風底部
47	131土	フク土	(18.7)	(-)	(18.0)	深 鉢	沈線文	"	G-1	拓影
48	135土	フク土	24.5	(-)	(24.5)	深 鉢	充填縄文	"	F-2	



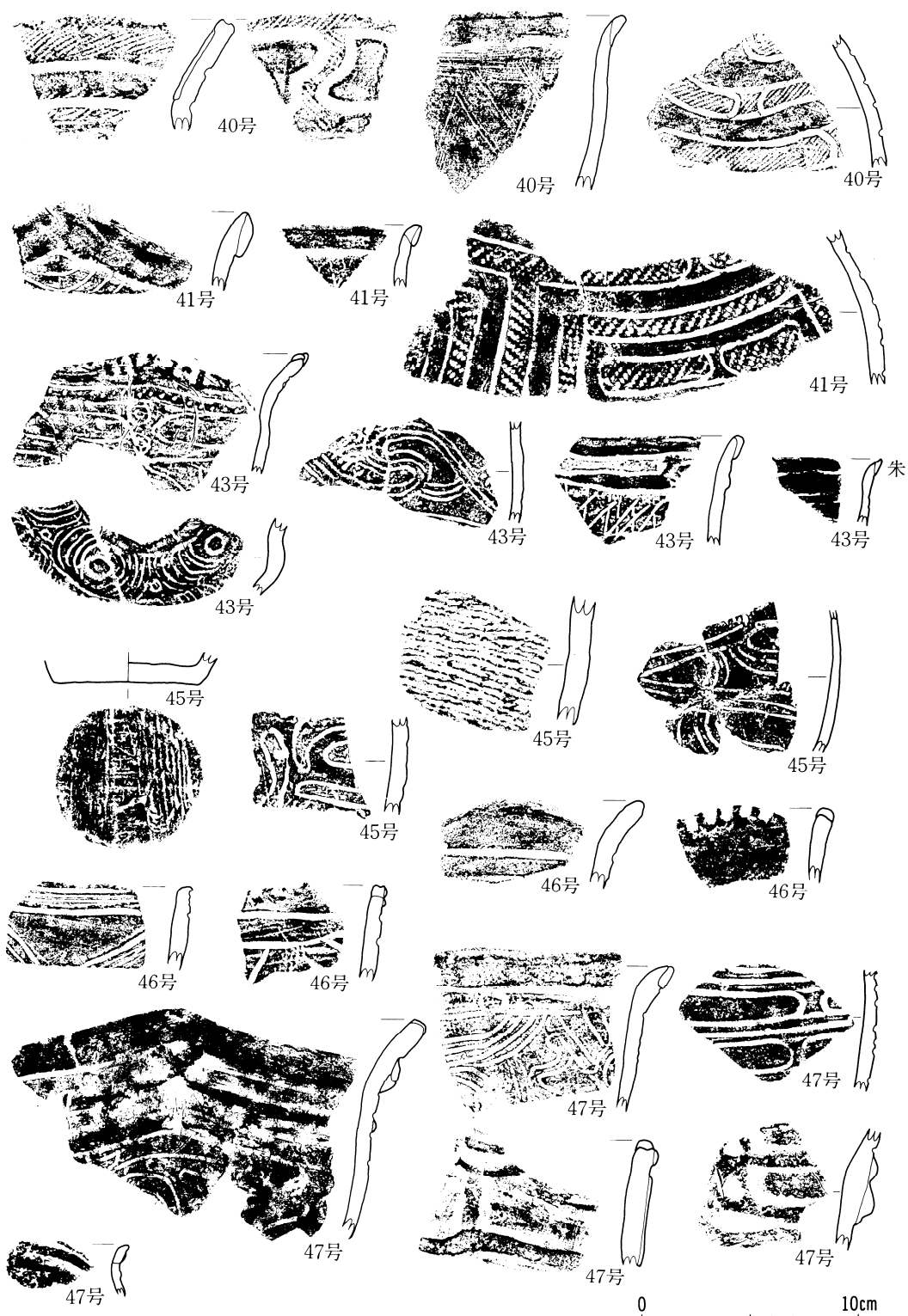
第48图 N-1区土壤内出土土器拓影图 (第6号・第7号)



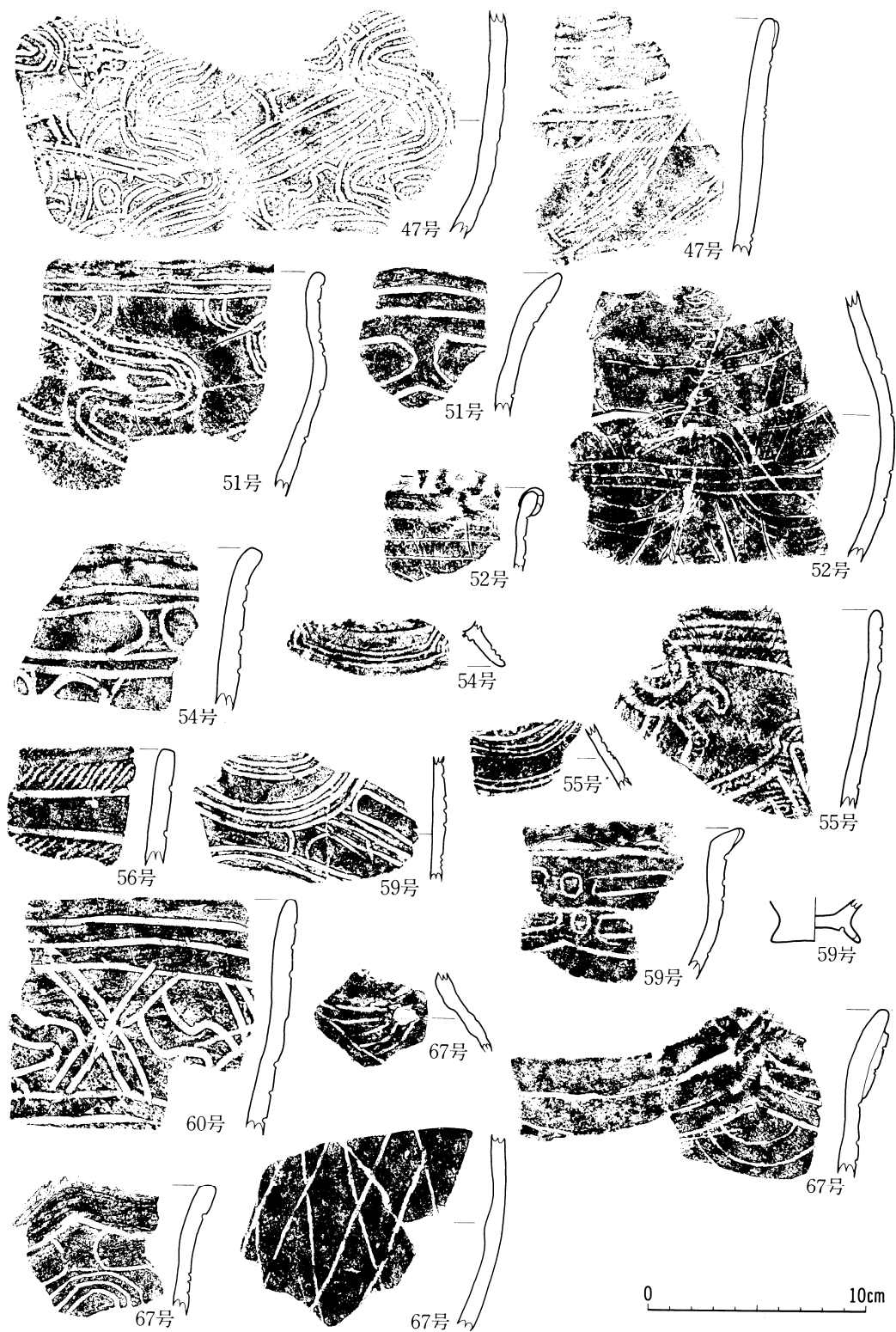
第49图 IV-1区土壤内出土土器拓影图 (第8号~第24号)



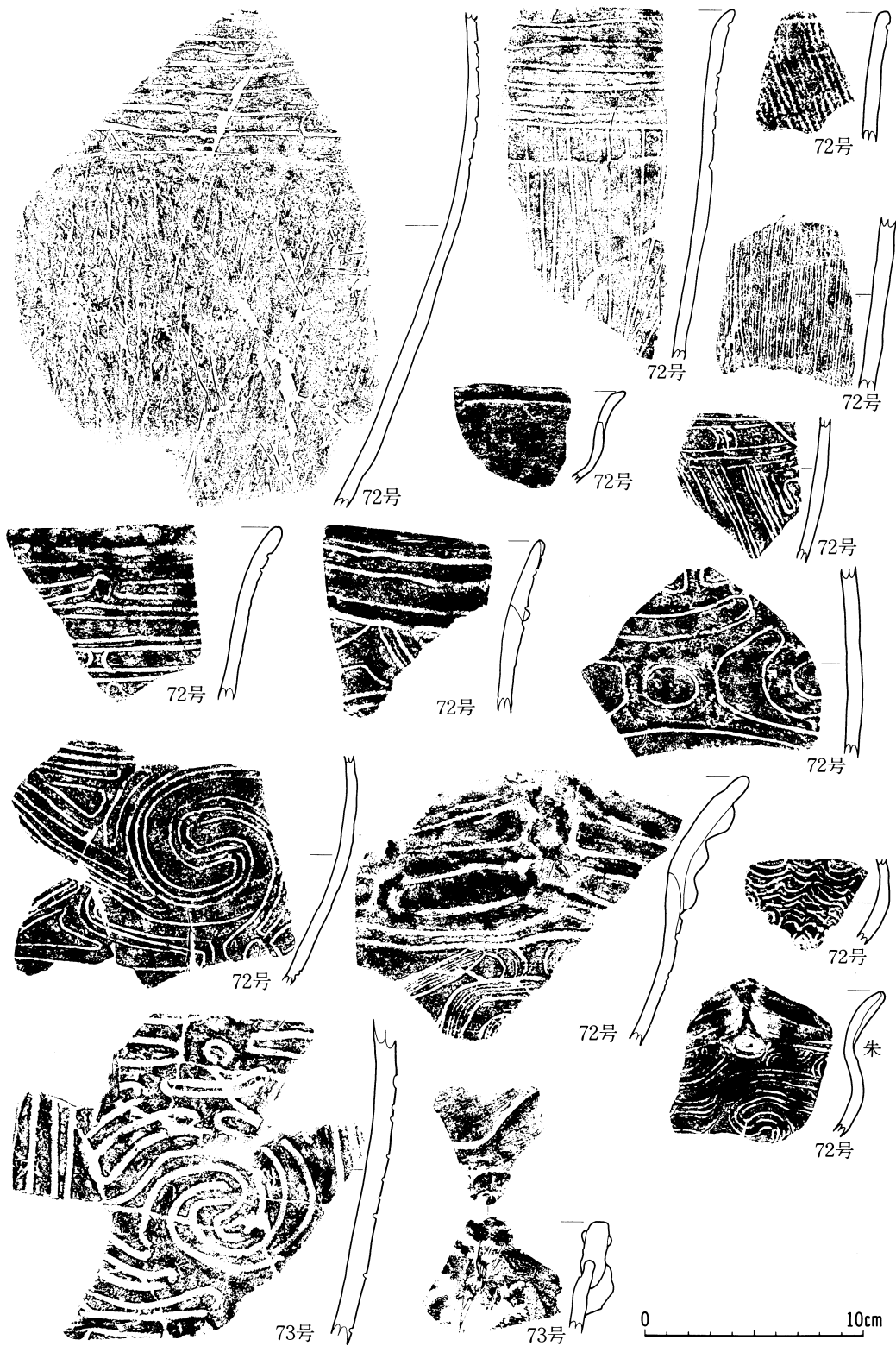
第50图 IV-1区土壤内出土土器拓影图 (第24号~第34号)



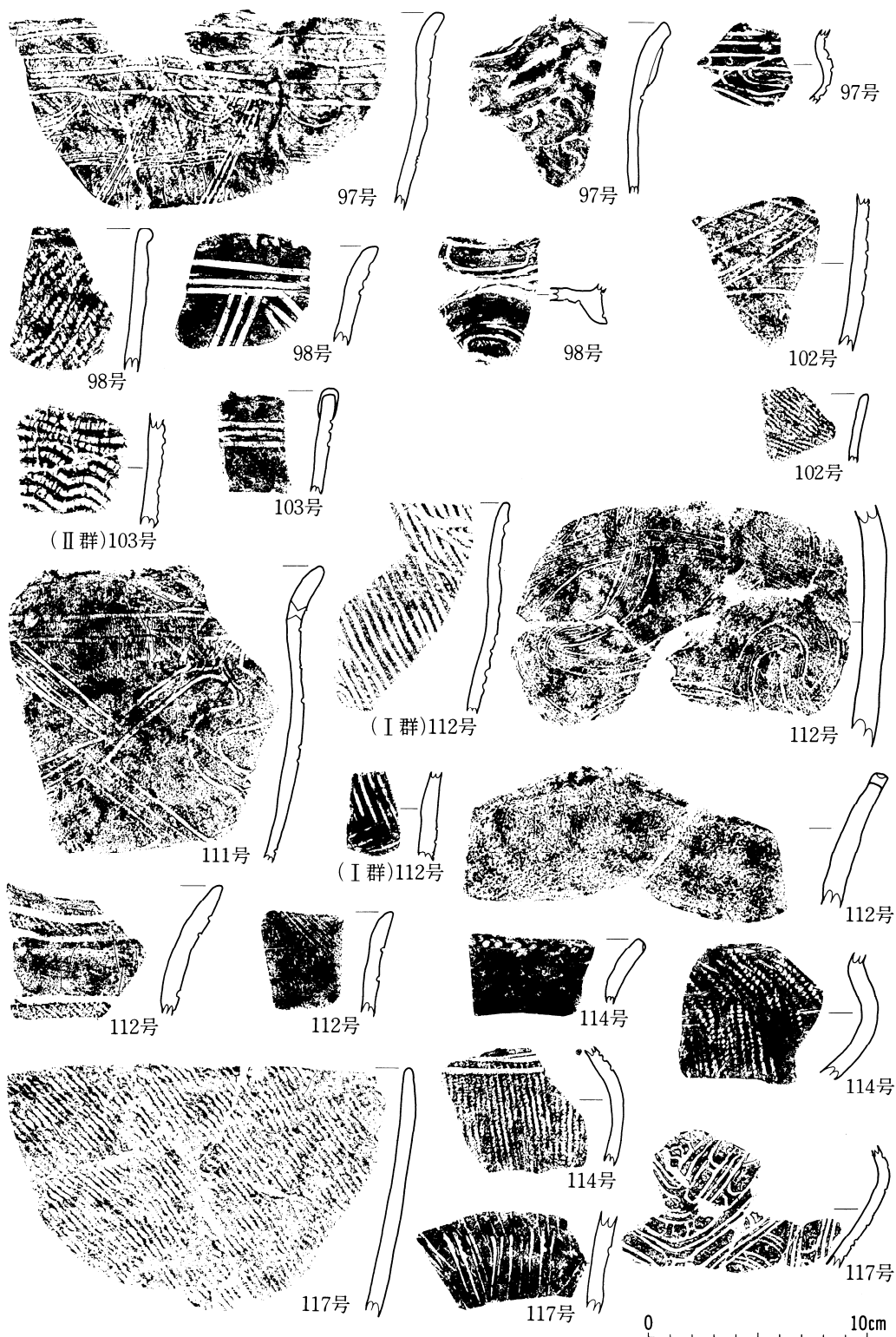
第52图 IV-1区土坑内出土土器拓影图(第40号~第47号)



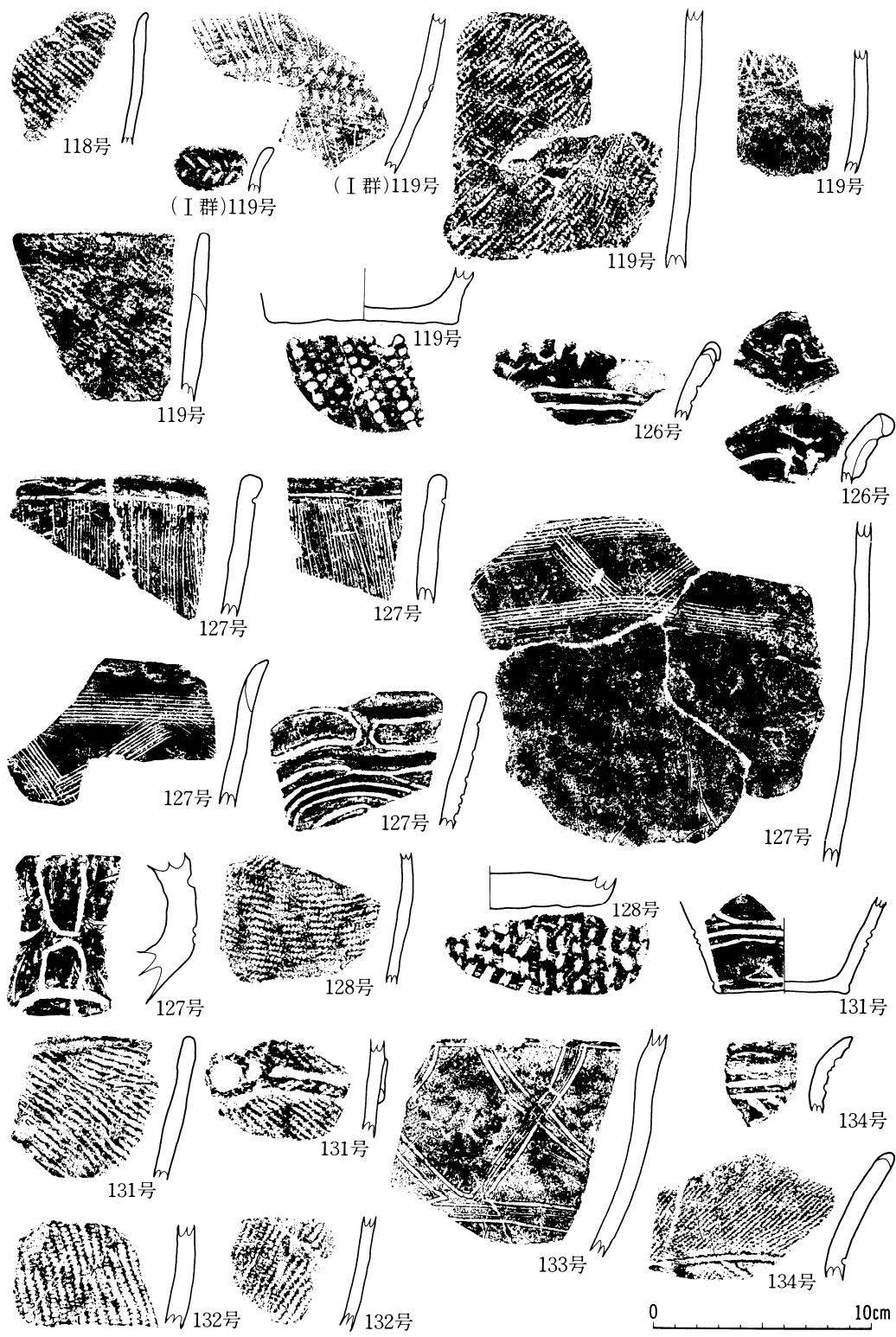
第53图 IV-1区土壤内出土土器拓影图 (第47号~第67号)



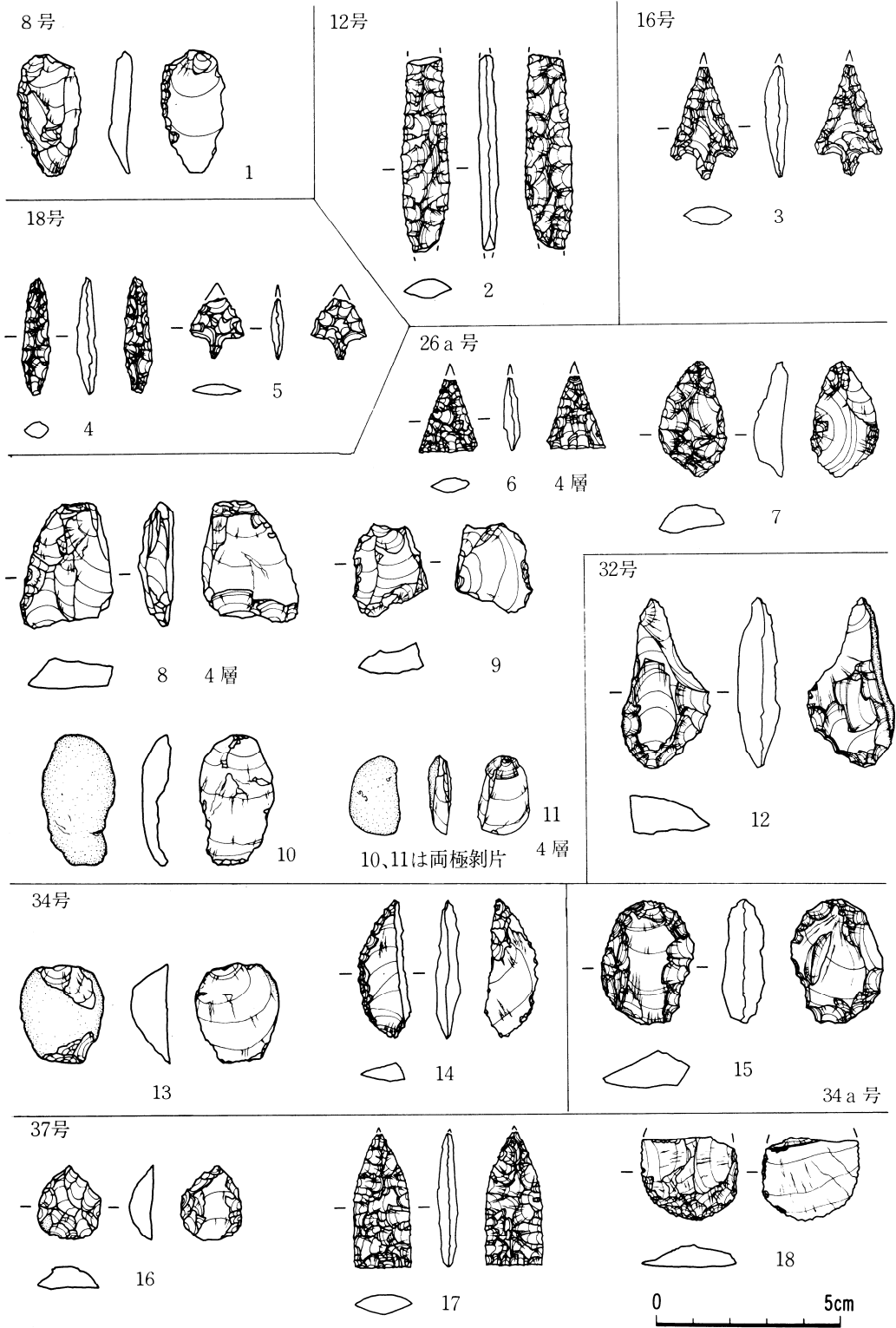
第54图 IV-1区土壤内出土土器拓影图 (第72号·第73号)



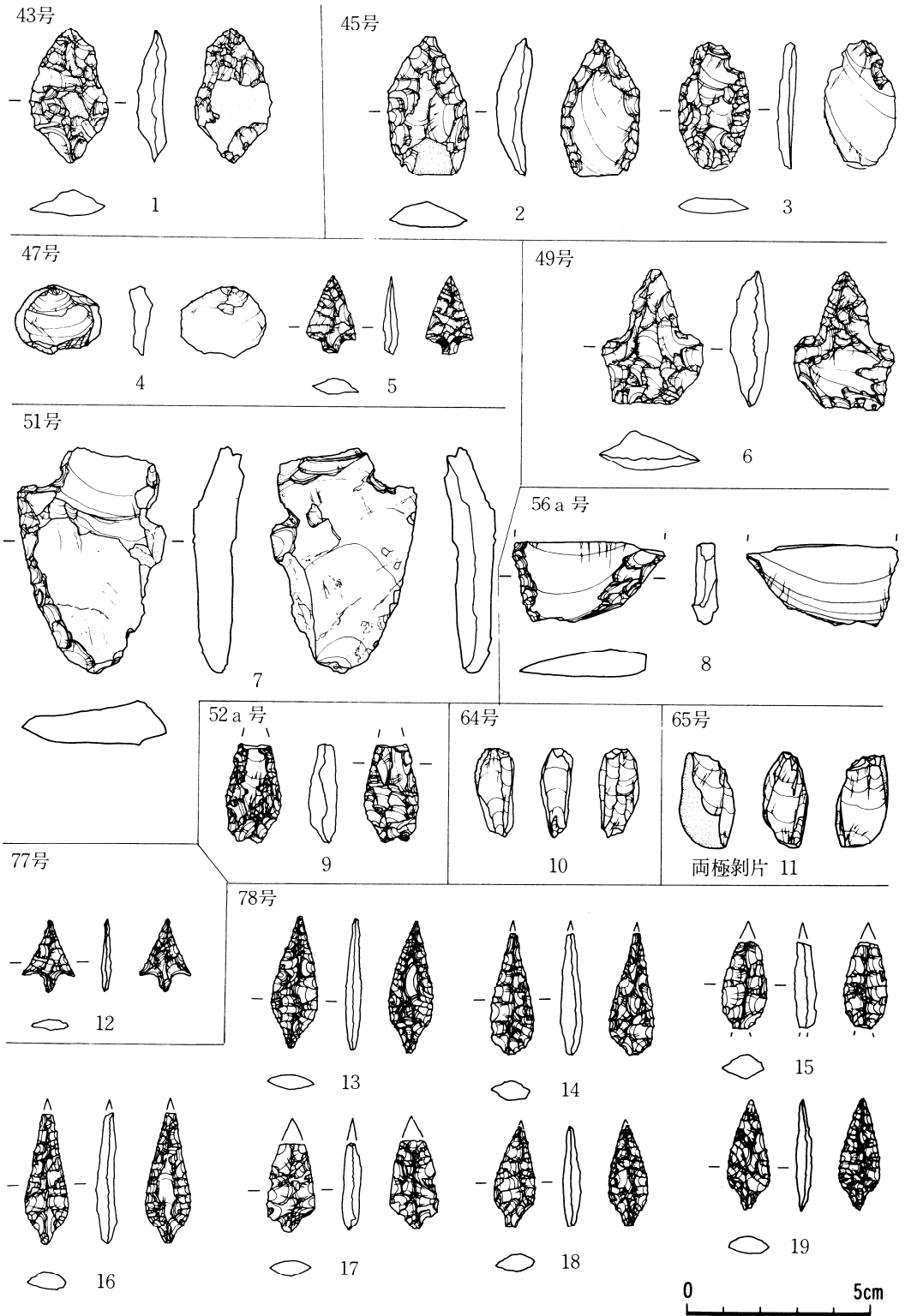
第56图 IV-1区土壤内出土土器拓影图 (第97号~第117号)



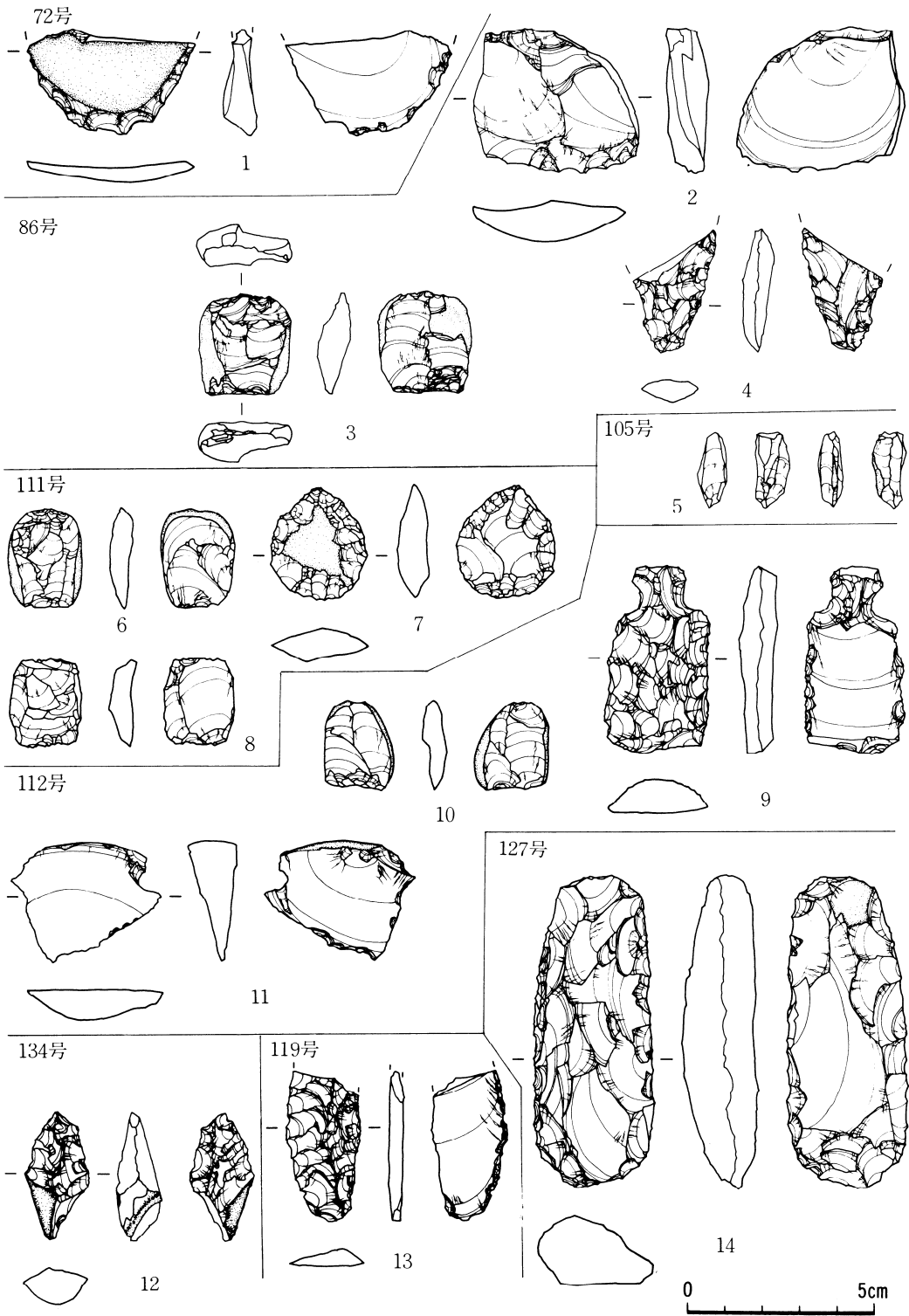
第57图 IV-1区土壤内出土土器拓影图 (第118号~第134号)



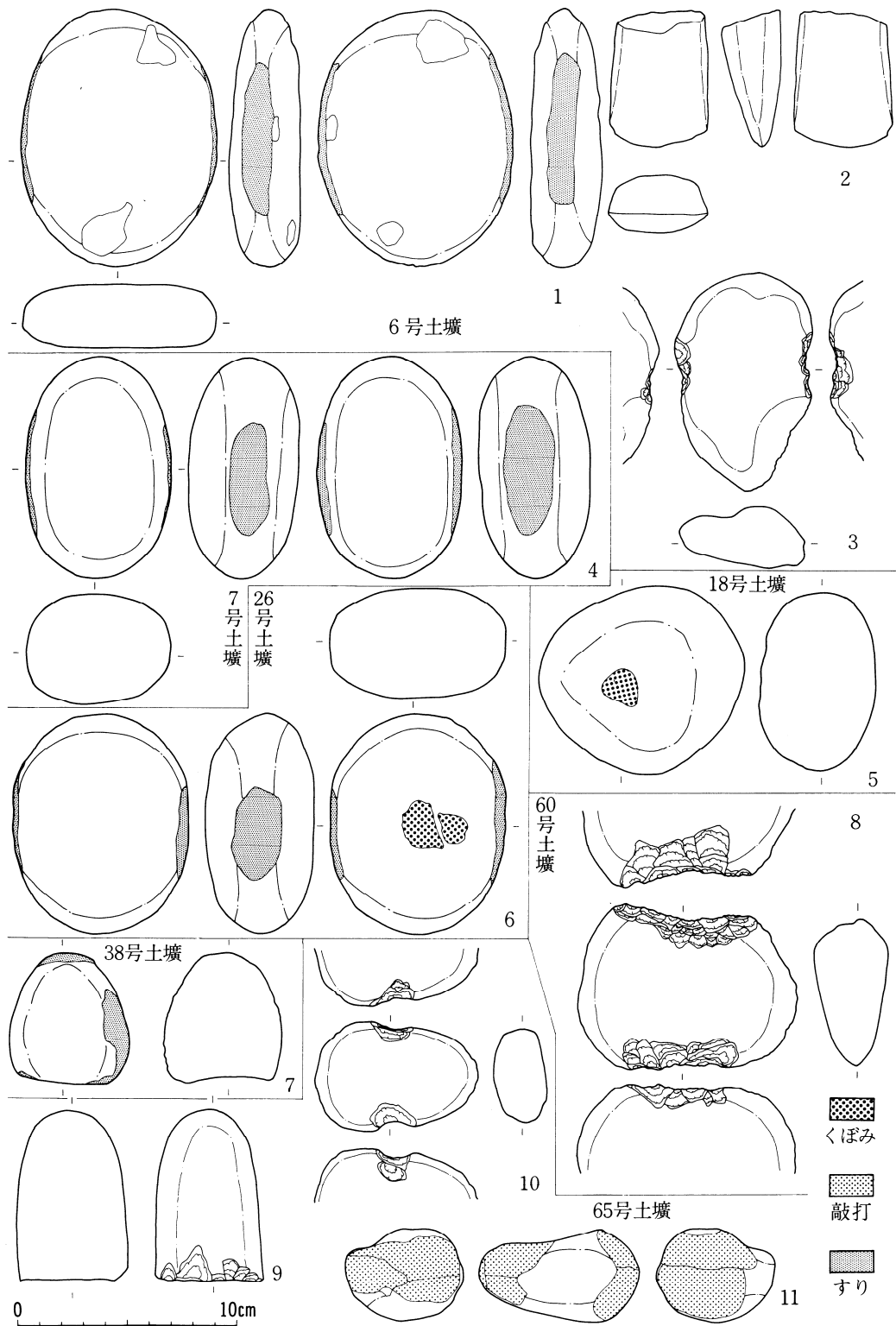
第58図 土壌内出土石器実測図(1)



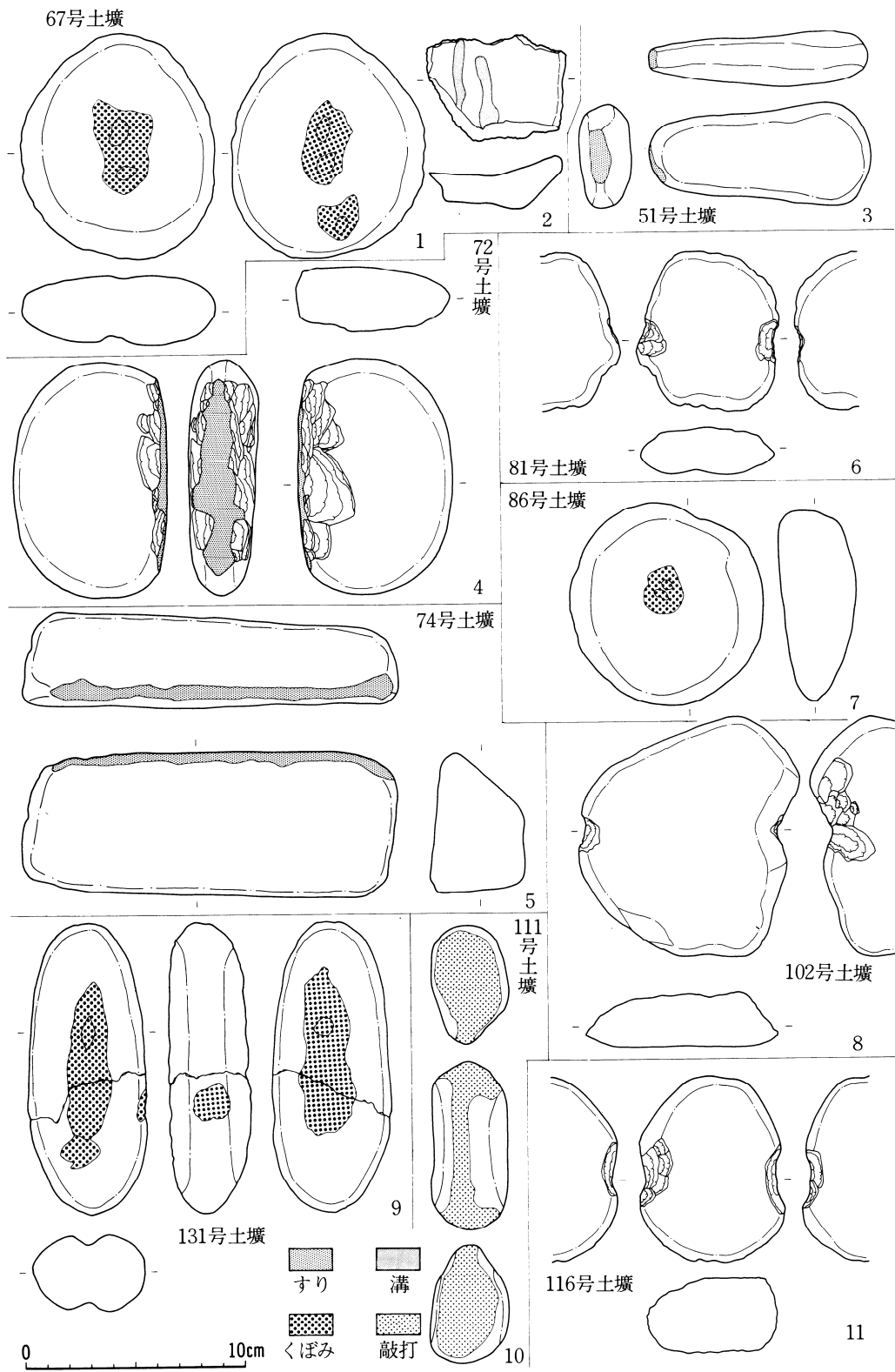
第59圖 土壤内出土石器実測圖 (2)



第60图 土壤内出土石器实测图(3)



第61図 土壌内出土石器 (4)



第62図 土壌内出土石器 (5)

IV—2区における土壌（第63図）

調査区南西側の（CP—431）グリッドを中心にした約16グリッド、面積にして約250㎡という狭少な範囲に土壌が6基隣接しあって検出された。遺構が密集しているIV—1区からは約170mも離れている。この6基付近をまだ遺構の存在する可能性が強いのではないかという予測のもとに拡張したが、その結果は、これら6基の土壌の位置から北に約30mほど離れた地点で溝状ピットが、わずか1基のみ検出されたにすぎなかった。

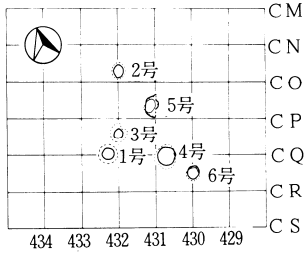
これら6基の土壌は、開口部の径が1mをこすものばかりの大規模なフラスコ状ピット（第5号については、若干疑問があり、フラスコ状よりは円筒状と表現した方が妥当かもしれない）である。

これら6基の土壌については、他の遺構密集地区から離れた位置に存在すること、6基が類似した形状だけであること、6基が隣接しあっていること、その周囲には溝状ピット1基以外に遺構が存在しないこと等を考え合わせてみた場合、それらの用途目的を追求する上で非常に興味深い事例である。まず第1に推測できることは、IV—1区の遺構群が当時の集落の中心場所であり、この6基の土壌は、故意に集落から離して構築された「貯蔵用」の穴ではないだろうかという見方である。第2には、IV—1区に存在した集落の人間の手によるものではなく、別の集落又は別の時期の人間が何らかの目的で構築したのかもしれないという見方である。

いずれにしても、その用途を決定づける大きな要因となる土壌内出土遺物については、6基とも皆無であり、現時点においては推測の域を出れないが、フラスコ状ピットという特異な形状を有する土壌の機能を考察する面からは、貴重な資料となり得ることは確かである。（遠藤）

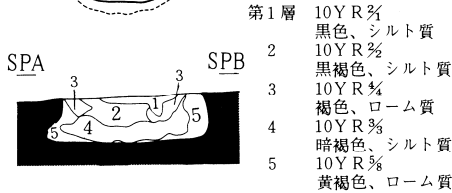
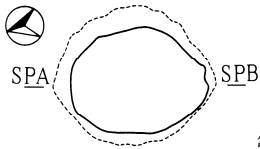
第4表 土壌観察一覧表

ピット番号	重複関係	検出グリッド	平面形	形態	計測値			出土遺物	備考
					開口部	壙底部	深さ		
1	なし	CP・Q-432	円形	フラスコ状	130	200	75	なし	
2	"	CN-431・2	楕円形	"	150×115	175×150	50	"	
3	"	CP-431・2	円形	"	115×100	195×170	100	"	
4	"	CP・Q-430	"	"	200	250×220	150	"	
5	"	CO-431	"	円筒状	125	120	130	"	
6	"	CQ-429・430	"	フラスコ状	130	140	70	"	開口部は攪乱部分があり不確定

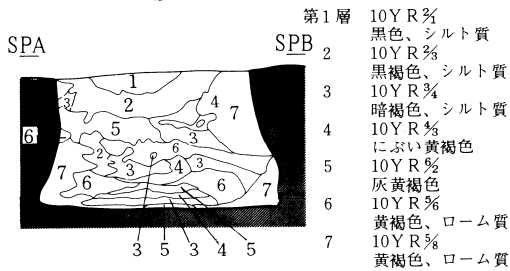
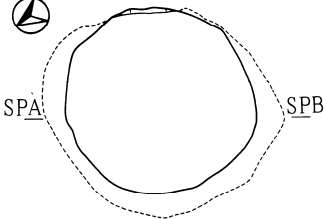


〈フラスコ状ピット配置図〉

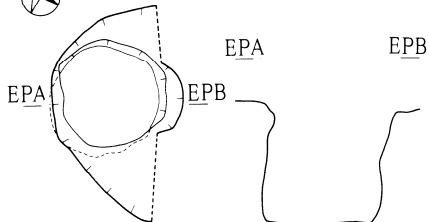
第2号フラスコ状ピット



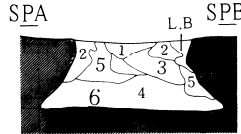
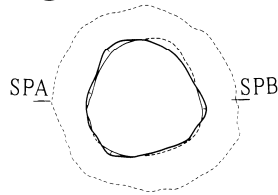
第4号フラスコ状ピット



第5号土壌

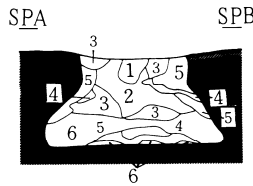
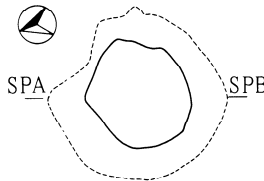


第1号フラスコ状ピット



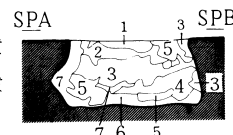
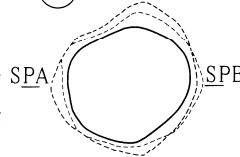
- 第1層 10Y R $\frac{2}{6}$ 黒褐色、シルト質
- 2 10Y R $\frac{2}{6}$ 褐色、ローム質
- 3 10Y R $\frac{2}{6}$ 黒褐色、シルト質
- 4 10Y R $\frac{3}{6}$ 暗褐色、シルト質
- 5 10Y R $\frac{2}{6}$ 、褐色
- 6 10Y R $\frac{2}{6}$ 褐色、ローム質

第3号フラスコ状ピット



- 第1層 7.5Y R $\frac{2}{6}$ 褐色、シルト質
- 2 10Y R $\frac{2}{6}$ 黒褐色、シルト質
- 3 7.5Y R $\frac{3}{6}$ 暗褐色、シルト質
- 4 10Y R $\frac{2}{6}$ 黒褐色、シルト質
- 5 10Y R $\frac{2}{6}$ 褐色、ローム質
- 6 10Y R $\frac{2}{6}$ 黄褐色、ローム質

第6号フラスコ状ピット



- 第1層 10Y R $\frac{2}{6}$ 黒色、シルト質
- 2 10Y R $\frac{1}{6}$ 黒色、シルト質
- 3 10Y R $\frac{3}{6}$ 暗褐色、シルト質
- 4 10Y R $\frac{2}{6}$ 黒褐色、シルト質
- 5 10Y R $\frac{2}{6}$ 、にぶい黄褐色、シルト質
- 6 10Y R $\frac{1}{6}$ 褐色、ローム質
- 7 10Y R $\frac{2}{6}$ 黄褐色、ローム質

0 2m

第63図 IV-2区検出土壌

(3) 配石 (第64図―第66図)

IV―2区のAN～A〇―421～423グリッドで、12基の配石遺構を検出した。この地点の北側は急斜面となって老部川へ至り、その向こうには吹越烏帽子岳が眺望でき、標高約60mの見晴らしの良好な丘陵上に位置している。IV―1区の湧水からは、北北西―約300m離れている。

12基の配石遺構は、第V層上面で確認されたが、その下部には土壌及び掘り方は確認できなかった。以下、各遺構の概略を記述していくが、規模の計測は、確認面における礫の外側の最大値を用いている。また、弧状や「コ」の字状のものの短軸は()をつけている。なお、配石を構成している礫の大きさは、長軸40～30cm前後、短軸30～20cm前後で、厚さ20～10cm後の扁平礫を用いているものが多く、他に長軸20～10cm、短軸10cm前後、厚さ8cm前後の楕円球状の挙大のものがある。石質は、すべて安山岩である。

第1号配石 位置・AQ―423グリッド、規模・53cm×52cm。

扁平礫4個を方形に組み、その内部に礫を置いて、「日」の字状に組んでいる。扁平礫は5個とも、ほぼ直立している。

第2号配石 位置・AP―421グリッド、規模・47cm×(46)cm。

扁平礫3個を「コ」の字状に組んでいる。3個の礫は、ほぼ直立している。

第3号配石 位置・AQ―422グリッド、規模・85cm×(50)cm。

3個の礫が南北に並列(?)しているものである。北側の礫は角柱状の割り石で、約1/2は地中―斜位―にあり、一部焼けている。

第4号配石 位置・AP―421グリッド、規模・47cm×(37)cm。

扁平礫3個を「コ」の字状に組んだものと思われるが、東西に位置する2個の礫は、内側に向かって倒れたように斜位にある。北側の礫は直立している。

第5号配石 位置・AP―421・4222グリッド、規模・53cm×41cm。

扁平礫4個を長方形に組んでいる。4個の礫のうち2個は内側に傾き、残り2個は直立している。

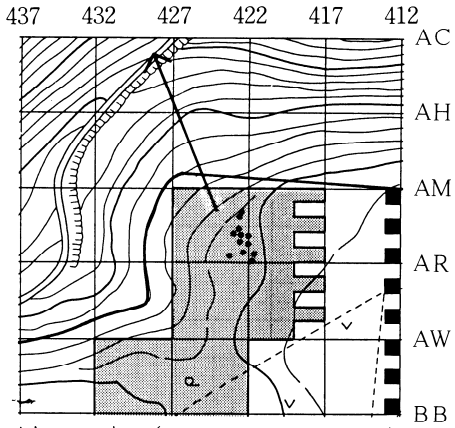
第6号配石 位置・AP―422グリッド、規模・139cm×54cm。

扁平礫と厚さ3cm前後の板状の割り石で、弧状に組んだもので、西側に開いている。扁平礫及び板状の割り石のほとんどが、内側に向かって倒れるように、斜位になっており、南端では3枚重なっている。

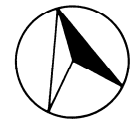
第7号配石 位置・AO・AP―422・423グリッド、規模・130cm×110cm。

一部攪乱を受け、南側の礫は動いている可能性がある。挙大の礫を、ほぼ円形に配したものと思われる。このうち、3個の礫はほぼ直立し、1個の礫は斜位にある。

第8号配石 位置・AO・AP―422グリッド、規模…103cm×86cm。



（矢印は、吹越烏帽子岳の方向を示す。）



+

AO-423

+

AO-422

12号

11号

10号

7号

8号

9号

6号

5号

+

AQ-423

+

AQ-422

3号

4号

1号

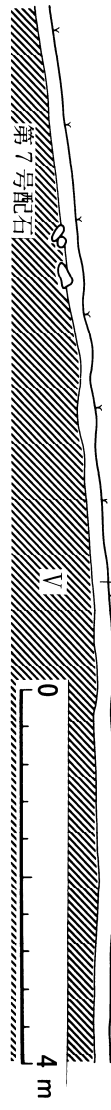
+

AR-423

+

AR-422

2号



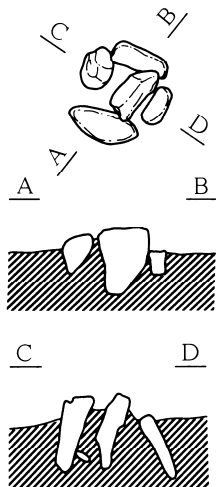
← AP-423

← AQ-423

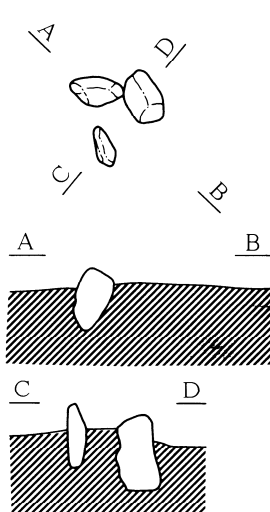
← AR-423

第64図 遺構配置図

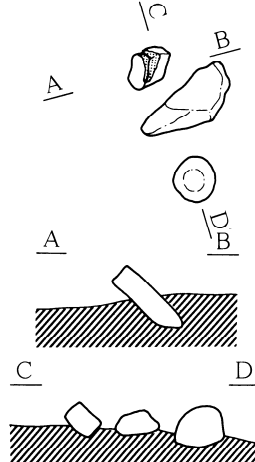
第1号配石



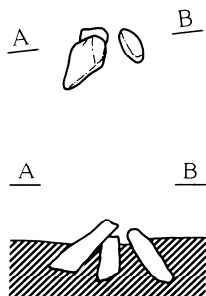
第2号配石



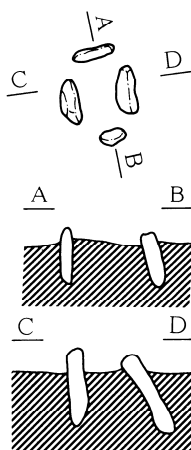
第3号配石



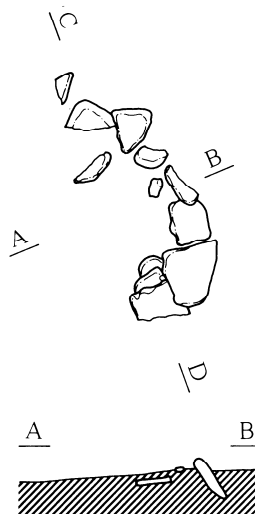
第4号配石



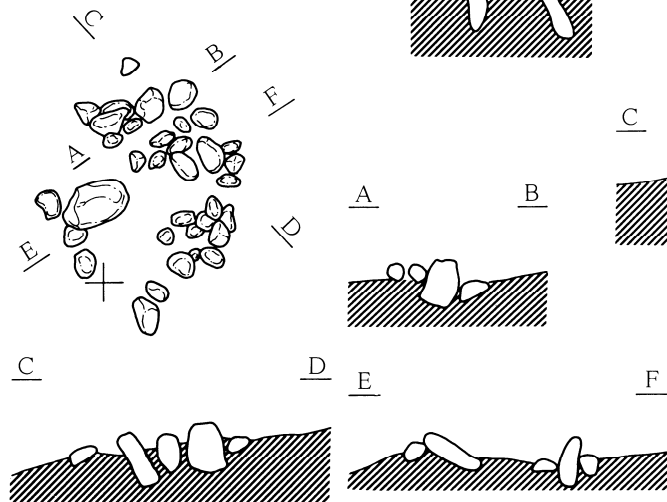
第5号配石



第6号配石



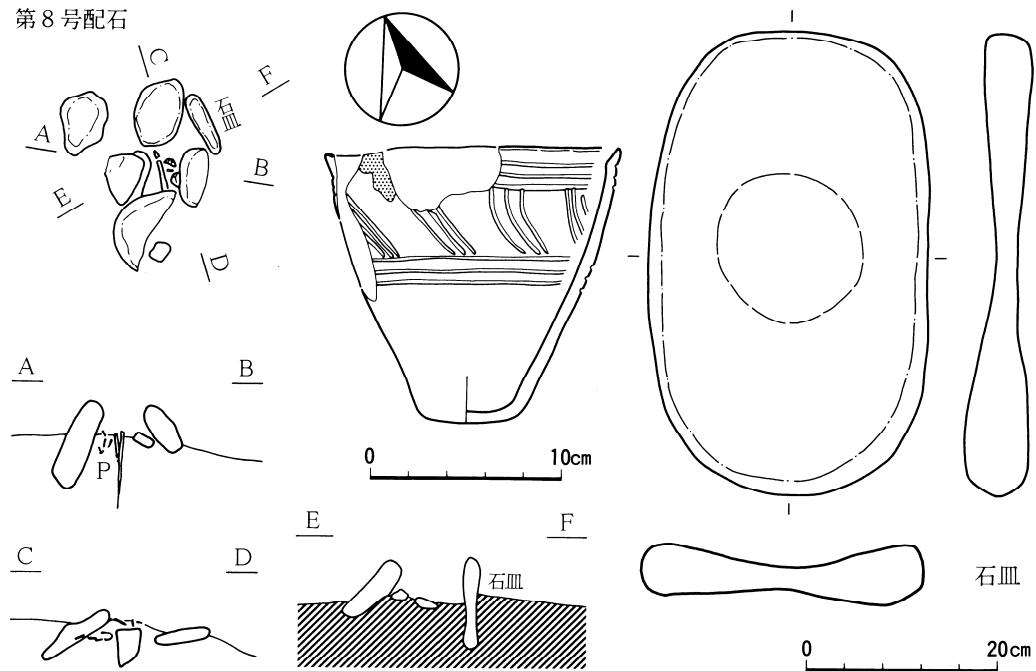
第7号配石



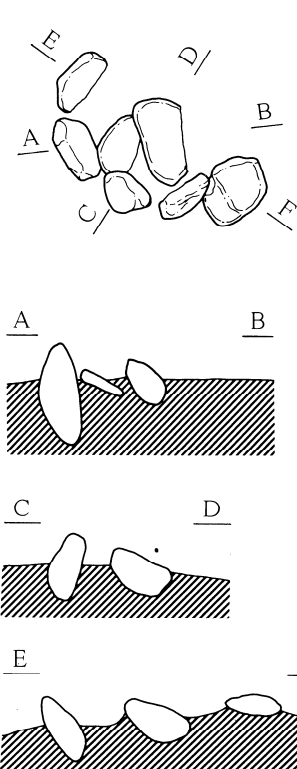
0 1 m

第65图 配石实测图 (第1号~第7号)

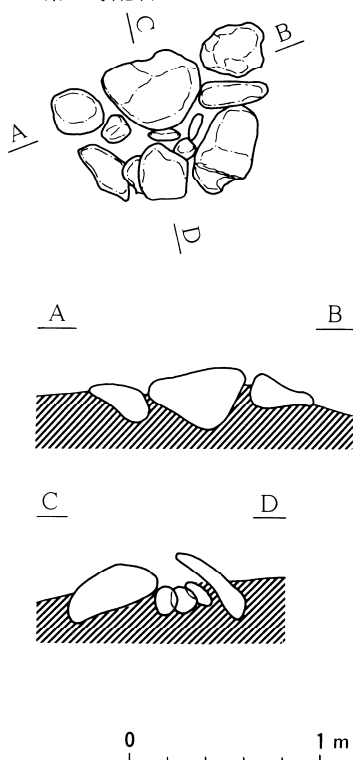
第8号配石



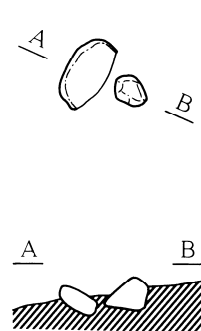
第9号配石



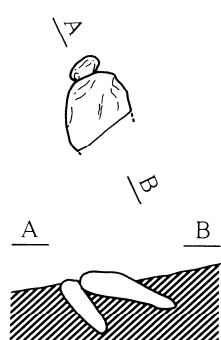
第10号配石



第11号配石



第12号配石



第66图 配石実测图 (第8号~第12号)

扁平礫4個と石皿とで、楕円形に組んだものと思われるが、見方によっては方形のものが崩れたようにも思われる。扁平礫3個は斜位に、石皿は直立していた。北側の扁平礫は横位に倒れていたが、当初は直立していた可能性が考えられる。また、内側中央には、2cm位の厚さの板状の割り石が2枚直立して地中にあり、その東側に小形の深鉢形土墓（第Ⅳ群土器）が、横位に出土している。

第9号配石 位置・AO・AP—421・4222グリッド、規模・123cm×(66)cm。

扁平礫7個で、弧状に礫を組んだもので、北東に開いている。扁平礫の3個はほぼ直立し、3個は斜位に、残り1個（南東端の礫）は横位にある。

第10号配石 位置・AO—422グリッド、規模・105cm×80cm。

扁平礫5個と厚みのある大礫2個で、楕円形に組み、その内側に扁平な中礫を斜位又は直立して配している。

第11号配石 位置・AN—422グリッド。

扁平礫と厚みのある礫2個を組んだもので、北側の礫は斜位にある。

第12号配石 位置・AN—422グリッド。

扁平礫2個を組んだもので、2個とも南側へ向き、斜位にある。

以上、配石遺構について、その概略を記述してきたが、これらは一般に、組石（又は石組）と呼ばれるものである。12基の配石は、ひとつのまとまりをもっており、全体に、吹越烏帽子岳に向かっていているようである。また、同一時期に構築された可能性が強い。構築時期は、第8号配石から出土した土器から、縄文時代後期前半—第Ⅳ群土器—である。第Ⅳ群土器は、Ⅱ～Ⅳ—1区から多量に出土し、住居跡・土壙等が多数検出され、若干の時期差・時間差はあろうが集落を形成していたことが判明している。したがって、これらの配石遺構は、そこに住んだ集団の斎場的性格をもつ場所と考えられる。 (畠山)

(4) その他の遺構

屋外炉（第67図）

3基検出した。この3基については、当初、住居跡に伴う炉の可能性も考えて、周辺の精査を行ったが、いずれも壁や柱痕を確認できなかった。

第1号屋外炉 DC—374グリッドで検出した。第8号住居跡の東側に隣接している。3個の疎（東側に石の抜取痕を確認した）をコの字状に組んだ、石囲炉と思われる。構築時期は、縄文時代後期（第Ⅳ群土器）と思われる。

第2号屋外炉 DC—378グリッドで検出した。当初、焼土遺構としていたが、確認面から10cmほど下位に、焼けた硬い面の広がり（炉底）を確認したので、地床炉として取り扱うことにした。長・短軸が50cm程の不整（円）形である。構築時期は縄文時代後期（第Ⅳ群土器）を思

われる。

第3号屋外炉 CR-383グリッドで検出した。長・短軸が60cmほどで、深さ10～15cmの掘り方に、第VI群土器の上半部を埋設したものである。

焼土遺構（第67図）

10基検出した。いわゆる焼土の堆積を確認したもので、火を燃やした痕跡が認められなかったものである。しかし、火を燃やした痕跡が認められないという理由で、これらを地床炉あるいは焚火跡までを否定するものでもない。ここでは、屋外にある場合、火を燃やした痕跡一炉底一を有するものは屋外炉（地床炉）として、それ以外は焼土遺構として取り扱った。炉壁・炉底と呼べるものをもたないが、使用された時間は短かく、屋外炉的な性格を有するものと思われる。

第6号焼土を除いた9基の焼土遺構は、暗褐色土と焼土の混じり合ったものや、焼土を多量に含む。炉壁・炉底に相当する部分は、軟弱である。第6号焼土は、焼けて、硬い部分が、広がっていた。住居跡の床面が焼けたものとも思われるが、壁・柱痕を確認できなかったので、焼土遺構に含めた。以下、位置、規模等について、第5表で記載する。

第5表 焼土遺構一覧表

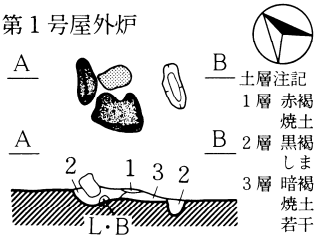
遺構番号	位置	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深厚さ(cm)	推定時期	備考
第1号	CU-382	不整楕円形	68	24	14	不明	第5号住居跡の確認面。
第2号	CX-384	不整形	34	18	5	"	
第3a号	DD-378	"	36	22	5	縄文後期	
第3b号	"	"	114	60	6	"	
第3c号	"	不整円形	44	31	9	"	
第4号	DE-379	不整形	70	50	6	"	
第5号	DE-378	"	48	38	7	"	
第6号	DA・DB-373	"	164	124	5	"	
第7号	DD-373	楕円形	97	55	14	"	第59b号に切られている。
第8号	CO-385	円形	43	43	4	不明	第1号住居跡の北東に隣接。

溝状ピット（第67図）

IV-2区のCG-431・432グリッドの平坦な場所で、1基検出した。この種の遺構が単独で存在することは、まれなことであるので、周辺を広げて調査してみたが、他に確認できなかった。

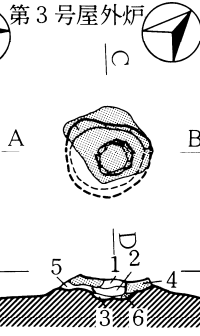
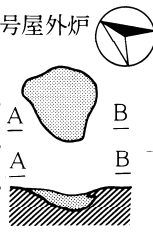
確認面（第V層）における規模は、開口部で370cm×54cmであるが、セクション図にもあるように、第IV層上位を掘り込んでいるため、構築時の規模は、これより若干プラスされる（短軸では約70cm）。また底面の規模は、342cm×16cmで、掘り込み面から約30cm下位から急に幅狭となっている。深さは138cmである。 (畠山)

第1号屋外炉



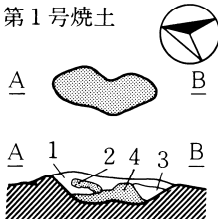
土層注記
 1層 赤褐色土。2.5 YR 5/6。
 焼土。
 2層 黒褐色土。10 YR 2/3。
 しまりある。
 3層 暗褐色土。10 YR 3/4。
 焼土粒、カーボンを若干含む。

第2号屋外炉



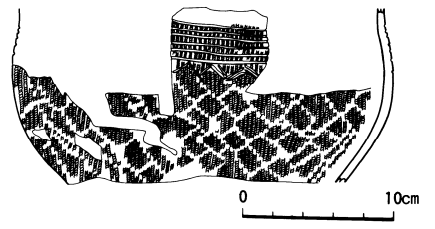
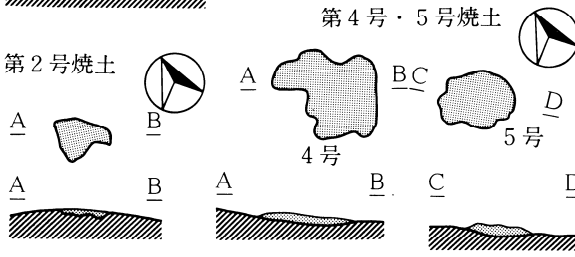
土層注記
 1層 褐色土。7.5 YR 5/6。
 焼土粒を多量に含む。
 2層 褐色土。7.5 YR 5/6。
 焼土粒を若干含む。
 3層 褐色土。7.5 YR 5/6。
 焼土粒を若干含む。
 4層 赤褐色土。2.5 YR 5/6。
 焼土。
 5層 褐色土。7.5 YR 5/6。
 焼土粒を若干含む。
 6層 赤褐色土。2.5 YR 5/6。
 焼土。

第1号焼土

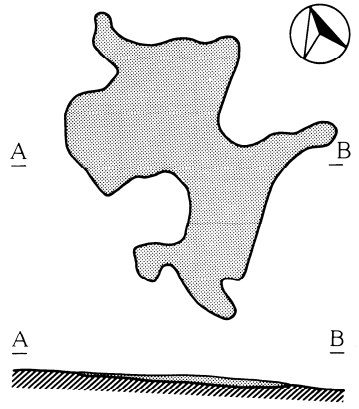
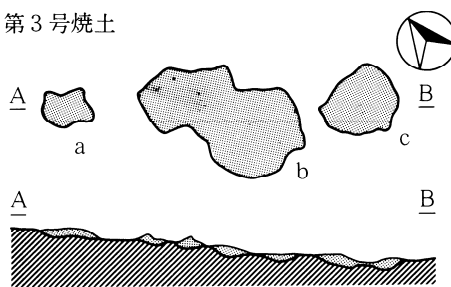


土層注記
 1層 黒色土。10 YR 2/3。
 しまり・粘性ない。
 2層 焼土ブロック。
 3層 暗赤褐色土。5 YR 3/4。
 焼土粒を若干含む。
 4層 赤褐色土。2.5 YR 5/6。
 焼土。

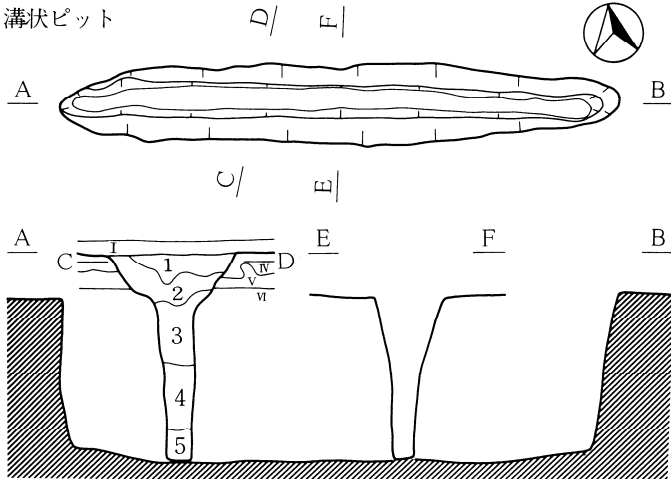
第4号・5号焼土



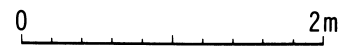
第3号焼土



溝状ピット



土層注記
 1層 黒褐色土。10 YR 2/3。
 しまり・粘性若干ある。
 2層 黒褐色土。10 YR 2/3。
 軟らかく、しまりない。
 3層 褐色土。10 YR 5/6。
 軟らかく、しまりない。
 ロームを多量に含む。
 4層 褐色土。10 YR 5/6。
 軟らかく、しまりない。
 ロームを多量に含む。
 5層 暗褐色土。10 YR 3/4。
 軟らかく、しまりない。
 ロームを多量に含む。



第67図 屋外炉跡、焼土遺構、溝状ピット実測図

2 出土遺物

(1) 土器

本項は、IV区についての記載箇所であるが、出土土器について記載する文中の初出にあたる頁でもあり、ここで、調査区全体における出土土器の概観及びそれらの記載方法についてのべる。

今回の調査で出土した土器は、ダンボール箱で約120箱分になった。出土量の面からみると、IV-1区からの土器が一番多く全体の8割ほどに相当し、次いでVII区が1割程度の量で、残り1割が、IV-2区、V区、VI区の合計分にあたる。

約120箱分の土器は、縄文時代早・前・中・後・晩期・弥生時代のものがみられ、概略的には、縄文時代から弥生時代にかけての各時期の土器が出土したといえる。

このような各時期の土器が混在しているなかで、量的にみると、圧倒的に縄文時代後期の土器が多く全体の9割にも相当する量である。残り1割の中では弥生式土器が比較的多く、縄文時代早・前・中・晩期のもは各々微量である。

このように出土土器の面から遺跡全体について推測してみると、縄文時代早期のあたりからこの地一帯に人間が住みつき、それが後期の時代に湧水の存在するIV-1区付近に大集落を構成することになり、その後も弥生時代に至るまで何らかの形で人間はこの地と関わり合いをもってきたということが考えられよう。

土器の分類については、既に第II章において年代的な面からの大区分を記載しているが、各群の細分類については、前記の項でも述べたとおり、第1次調査の際の分類基準と若干の相違が生じていることなどから、本項で各群ごとにその冒頭に記載することにし、その分類基準を以下のV・VI・VII区における出土土器にも共通させることにする。

また、土器の実測図・拓影図については、遺構内出土土器は、各時期に関係なく一括して本章各節1の検出遺構の項で取り扱うことにし、遺構外出土土器は、以下に記している(ア)から(カ)の各時期ごとに本章各節2の出土遺物(1)の各項で取り扱うという挿入箇所における区別をした。

(遠藤)

(ア) 第I群土器

第I群土器は、1～8類に分類した。以下に分類基準を示す。

1類：白浜式・小船渡平式に相当するもの

2類：寺の沢式に相当するもの

3類：吹切沢式に相当するもの

4類：早稲田2類に相当するもの

5類：物見台式に相当するもの

6類：ムシリ I 式に相当するもの

7類：早稲田 5 類に相当するもの

8類：早期の土器と思われるが、型式の特定をし得ないもの

各類の分布状況は、第132図に示した。

I 群 1 類（第68図 1～7）

白浜式、小船渡平式に相当するもので、第IV、V a 層より出土した。

(1～5) は、同一個体であるが復原し得なかった。器形は、平縁の尖底深鉢形と思われる。口縁部は直立し、口唇部にはへら状工具による刻み目が施される。

文様は、器面全体に地文として貝殻条痕を施した後に、口縁部に粘土のまくれ返りを持つ縦位の爪形文（幅約 1 cm）を平行に 3 段巡らし、更にその下に横位の爪形文を 1 段巡らしている。

内面は、口唇部より約 7 cm ほどの幅に、器面と同様の貝殻条痕が横位に整然と施され、それ以下にはへら状工具のようなもので、やや凸凹はあるが良く調整されている。胎土には、砂粒（2～3 mm の大きなものもみられる）を含むが、繊維の混入は認められない。焼成も良く硬質な感じがし、色調は、暗褐色、灰色を呈する。器厚は 7～8 mm である。

(6、7) は、口縁部及び口縁部付近の破片で、粘土のまくれ返りを持たない爪形文（爪形状のもの）が施される。

I 群 2 類（第68図 8～15）

寺の沢式に相当するもので、IV 層より 2 個体出土した。

器形は、口縁部が直立し、口唇部が外側に傾斜する平縁の尖底深鉢形と思われる。

文様は、(8～11) が、口唇部の傾斜部分に斜位の貝殻腹縁文を施し、口縁部に、横位の貝殻腹縁文が整然と施される。それ以下の胴部には、斜位の貝殻腹縁文が施される。

(12～15) は、口唇部の傾斜部分に、絡条体圧痕文 (R) 施され、口縁部、胴部には、前者同様の貝殻腹縁文が施される。

2 個体とも口縁部文様を詳しく見ると、2 種の貝殻腹縁文が認められる。隙間なく施されるものと、2～3 mm ほどの間隔を開けながら短い貝殻腹縁文が連続的に施されるものである。前者 4 段、後者 2 段で 1 単位と思われる。

内面には、貝殻条痕及びへら状工具による調整がみられ、平滑に仕上げられている。胎土には、細かな砂粒を多量に含むが、繊維の混入は認められない。焼成はあまり良くなく、全体に砂っぽい感じがする。色調は、暗褐色及びびくすんだ赤褐色を呈する。器厚は 10～11 mm である。

I 群 3 類（第69図16）

吹切沢式に相当するもので、(D A—428) グリット IV 層より 1 個体出土した。

器形は、口縁部形状は不明だが、砲弾形の尖底深鉢形を呈する。

文様は、器面に貝殻腹縁文が斜位に施されるが、施文後に調整が行われているため、潰れた形状を示している。

内面は、凹凸はあるがヘラ状工具による調整が、斜位、横位に行われている。胎土には、砂粒を含むが、繊維の混入は認められない。焼成は良く硬質な感じがし、色調は暗灰色を呈する。器厚は9～10mmである。

I 群 4 類 (第69図17～24)

早稲田 2 類に類似するもので、主にIV層より出土した。

(24) は、口縁部片で波状を呈する。外反しながら立ち上がり、口唇部は平坦に面取りされる。文様は、K字状の隆帯及び隆帯上の絡条体圧痕文(0段r)、鋸歯状沈線文、貝殻押引文が施される。内面には貝殻条痕が施され、胎土には砂粒を含み器厚は6mmほどである。

(17—23) は、同一個体と思われるが器形は不明である。文様は、竹管を押し引きながらの刺突文、隆帯及び隆帯上の絡条体圧痕文(L)、鋸歯状沈線文、貝殻押引文、やや波状の貝殻腹縁文が施される。内面には、横位の調整がみられるが、平滑な部分と面の粗い部分とがある。胎土には、多量の砂粒を含み、焼成は良く硬質の感じがする。色調は赤褐色を呈し、器厚は6mmほどと薄い。

I 群 5 類 (第69図25～40)

物見台式に相当するもので主にIV層より出土した。

復原し得たものはないが、(40) はある程度器形、文様構成を知り得るので詳しく見てみたい。

器形は、口縁が波状をなし(4波状を呈すると思われる)、口縁部が内湾しながら立ち上がり、口唇部は外側に傾斜する。口縁部と胴部の境は、逆「く」の字状に屈曲している。底部はないが、尖底と思われる。

文様は、口縁部では、沈線文による三角形、鼓状の形、入組状沈線文及び貝殻腹縁文等の組み合わせによって幾何学的文様が構成される。三角形、鼓状の形の頂点には深い刺突が施され、入組状沈線の終点には、瘤状の突起が付けられ刺突が施される。口縁部と胴部の境は、2条の沈線をやや波状に巡らし、その頂部には刺突が施される。胴部は、一部しか残っていないため明確ではないが、沈線文、貝殻腹縁文、刺突文の組合せによって幾何学的文様を構成すると思われる。沈線の中には、すべて貝殻腹縁文が充填される。また、内面の口唇部直下に1条の貝殻腹縁文が巡る。

(25～39) は、すべて破片資料である。口縁部は、内湾しながら立ち上がり、波状縁(25～28)平縁(29～31)がみられる。口唇部はすべて外側へ傾斜する。

文様は、沈線文、貝殻腹縁文、刺突文等の組合せによる幾何学的文様が施される。沈線文を

詳しく観察すると、貝殻腹縁文を沈線の中に充填するもの（26・27・32・35・38—40）沈線に沿って施すもの（25・28・30・31・36）施されないもの（29・34・37）がみられる。

内面は、すべて平滑に調整され、光沢を持つものもみられる。胎土には砂粒を含み、焼成は一般に良い。色調は、赤褐色、暗黄褐色、暗褐色を呈し、器厚は7～10mmである。

I 群 6 類（第70図41～第72図106）

ムシリ I 式に相当するもので、主にIV層より出土した。

器形を明確に知り得るものはないが、平縁の平底深鉢形土器と思われる。口縁部は、外反するものと直立するものがある。口唇部に刻み目が施されるものもある。底部資料は、1点のみだが、外周縁が外へ張り出す平底を呈する。（106）

本類は、文様により3種に分類される。沈線文のみのもの（a類）、沈線文と刺突文を組み合わせたもの（B類）、隆帯を持つもの（c類）である。

a類（41～89）沈線文のみのものは、文様構成により、更に4種に細分した。

1種：（41～48）平行沈線のみを斜位に施したものである。右下りが多い。

2種：（49～60）平行沈線文によって幾何学的文様を構成するものである。異方向の斜位平行沈線を交互に施すもの、2～3条の平行沈線によって三角形を構成するもの、1～4条の横位沈線を施し、その上下に異方向の斜位平行沈線文を施すものがみられる。

3種：（61～84）矢羽状沈線文を施したものである。同じ長さの沈線によるもの、長さの異なる沈線によって片翼状になるもの、太さの異なる（工具の違い）沈線によるものがみられる。

4種：（85～89）沈線によって格子目状の文様を構成するものである。

b類（第71図90～第72図102）

平行沈線文と刺突文とを組合せることによって文様を構成するものである。刺突文は、沈線に沿って施されるものが多い。刺突文は、半截竹管によるものと、極めて細い管状の工具によるものがみられる。また工具を粘土に刺した後にやや引きずったものは、長めの刺突文となる。

c類（第72図103～105）

隆帯が施されたもので、3点みられる。（103）は、口縁部片で、口唇部に沿って隆帯が施され、隆帯上には棒状工具による刺突文が施される。（104）は、横位の隆帯が巡り、その頂部に刺突文が施される。（105）は、平行沈線文、刺突文、隆帯の組合せによるものである。隆帯は、その残存部分及び剥げ落ちた部分の痕跡から、曲線を描くように粘土を貼り付けたと思われる。

以上、文様を見てきたが、（106）の底部片は、底面にも沈線文が施されている。また本類は器面に貝殻条痕による調整が行われた後に、沈線文、刺突文を施しているものが多い。

内面は、貝殻条痕による調整が行われているものが多い。胎土には、砂粒を含むが、繊維の

混入は認められない。焼成は良好のものが多く、色調は、赤褐色、暗褐色を呈する。器厚は、5～7mmで薄い。

I 群 7 類 (第72図107～第73図131)

早稲田 5 類に相当するもので、主にIV層より出土した。

復原し得たものはないが、器形は一般に、平縁、平底の深鉢形であるが、波状縁を呈するもの(127)もみられる。口縁部は、直立するものとやや外反するものがある。口唇部に、縄文が施されるもの(109、1112)や、ヘラ状工具による刻み目が施されるもの(127、129)がみられる。

文様が裏面にまで及ぶものもあるが、ここでは器表面の文様により4類に分類する。

a 類：(108～122) いわゆる単節斜縄文が施されるもので、0段多条の縄文原体を使用したものが多い。回転方向が一定しているものは少なく、様々な方向から回転されている。

b 類：(123) 1種が一つの原体を使用しているのに対して、撚りの方向(R L)は同じだが2種類の原体によって縄文が施文されるものである。縦位羽状を呈する。器面右側の縄文は、0段多条R Lだが、0段の撚りがr・r・1となっている。

c 類：(124～131) 綾杉状の縄文が施されるものである。撚りの異なる1段の原体を弱く撚り合せた原体が用いられる。組合せには、R・L(124～126)、R・L・L(127、129)、L・R・R(128、130、131)がみられる。

d 類：(107) 押圧による側面圧痕が施されるものである。口唇部直下に、馬蹄形状の圧痕が施される。内面の口唇直下にも同様の圧痕が認められる。

以上のように分類できるが、底部の外周縁に指頭圧痕文を施したもの(120)もある。

内面の調整は十分でなく、指頭による押圧によって凹凸がみられる。また、器面同様に縄文が施されるものがある。(109、1114、123) 胎土には、砂粒を含み、個体によって含有量の差はあるが、繊維の混入が認められる。焼成はあまり良くなく全体的にもろい。色調は、赤褐色、暗褐色、黄褐色を呈し、器厚は12～15mmで厚手である。

I 群 8 類 (第74図132～138)

縄文時代早期の土器と思われるが、型式を特定し得えないものを一括した。

a 類 (132)

口縁部片で、直立する。口唇部は平坦になっている。器形は不明である。

文様は、口唇部から1.5cmの幅で、縦位の絡条体圧痕文(良)が施され、更に、それ以下には3条の鋸歯状沈線文、貝殻押引文が施される。

内面には、横位の貝殻条痕による調整が整然と行われる。胎土には、砂粒を含み、焼成は良好である。胎土、焼成、内面の調整痕は、I 群 6 類に類似する。色調は、赤褐色を呈し、器厚は

6mmほどで薄い。

b類 (133・134)

結束しない羽状縄文（O段多条LR・RL）が施されるものである。

器形は、平縁の深鉢形であるが、底部形状は不明である。

内面は、横位、縦位の調整が施されるが、指頭による押圧のためかなり凹凸がある。胎土には、砂粒を含み、繊維の混入が認められる。内面の様子、胎土は、I群7類に類似する。色調は、赤褐色、暗褐色を呈し、器厚は13～16mmで厚手である。

c類 (135～138)

撚糸文（1段LとRを棒状のものに巻きつけての回転施文）が施されるものである。

内面は、横位調整が行われているが、凹凸がある。胎土には、砂粒を含み、繊維の混入を認められる。I群7類の胎土に類似する。色調は、明赤褐色を呈し、器厚は10～12mmである。

（I群8類について）

本類は、土器型式を特定し得ないものであるが、a～c類まであり、それぞれについて若干補足説明をしたい。

a類

本類は、絡条体圧痕文、鋸歯状沈線文、貝殻押引文が施されるものである。全体の器形は不明であるが、平縁口縁部が直立する。この種の文様は、吹切沢式、早稲田2類、螢沢AⅡ式等にみられる。（結集体圧痕文はムシリⅠ式にも存在するがやや様相を異にする）しかし、胎土、焼成、内面調整（貝殻条痕による調整が整然と行われる）は、ムシリⅠ式のそれと酷似し、器厚が薄いこと（5.5mm）も共通する。

以上のような特徴があるが、破片資料1点のため、どの土器型式に伴うかは、現時点では特定できない。

b類

本類は、結束しない羽状縄文が施されるものである。O段多条のLR・RL原体を使用して羽状縄文が構成される点は、縄文時代前期初頭の長七谷地Ⅲ群と共通する。しかし、b類の胎土及び焼成は、早稲田5類（I群7類）に類似し、内面の状態（長七谷地Ⅲ群のように平滑に調整されず、指頭による押圧のためかなり凹凸がある）も早稲田5類に近い。

b類は、数量的に少ないため断定はできないが、長七谷地Ⅲ群、早稲田5類に共通点をもつことから、早稲田5類から長七谷地Ⅲ群へ移行する時期のもの可能性がある。

c類

本類は、撚糸文が施されるものである。1段LとRの原体を、棒状のものに巻いたものを回転施文することによって、ハの字状の撚糸文を作り出している。

早稲田5類には、1本の原体を棒状のものに巻きつけて施文した撚糸文はみられるが、本類のようなものはみられない。c類と同様の文様は、北海道東釧路遺跡出土のⅢ群8類土器の中にみられ、「絡縄体圧痕文」と呼称されているものに相当する。この土器は、絡縄体圧痕文、短縄文、縄線文等を組合せて文様を構成しているが、c類にはみられず様相を異にする。

東釧路Ⅲ群8類土器との関連もあるが、c類の胎土、焼成、内面の状態が早稲田5類（I群7類）とほとんど変わらないことから、c類は、早稲田5類とほぼ併行する可能性があると思われる。

（注1）釧路市教育委員会1962東釧路貝塚発掘調査報告書「東釧路」

（イ）第Ⅱ群土器

縄文時代前期の土器群で、1～4類に分類した。以下に分類基準を示す。

- 1類：長七谷地Ⅲ群に相当するもの
- 2類：早稲田6類に相当するもの
- 3類：芦野I群・表館式に相当するもの
- 4類：綾絡文が施されるもの
- 5類：円筒下層d1式に相当するもの

各類の分布状況は、第132図に示した。

Ⅲ群1類（第74図139～142）

長七谷地Ⅲ群に相当するものであるが、器形を知り得るものはない。

結束しない羽状縄文（0段多条LR・RL）が施されるものである。（139）は、口縁部片で、口唇部がへら状工具により平坦に面取りされている。文様は、横走する縄文が施され、それ以下には、羽状縄文が施される。

内面は、横位調整によって平滑になっている。胎土には、砂粒を含み、繊維の混入が認められる。焼成は良く、色調は、暗黄褐色、黒褐色を呈する。器厚は9mmほどである。

Ⅱ群2類（第74図143～第75図181）

早稲田6類に相当するものである。主にⅣ層より出土した。

器形は、平縁及び波状縁の尖底深鉢形である。口唇部が、へら状工具により平坦に面取りされているものが多い。

文様により、更に2種類に分類できる。

a類（143～160）

口縁部及び底部に、押引沈線文が施されるものである。胴部には、ループ文、層状縄文が施されている。

b類（161～181）

縄文のみが施されるものである。0段多条の単節斜縄文、複節斜縄文、ループ文がみられる。

内面は、平滑に調整されている。胎土には、砂粒を含み、個体によって含有量に差はあるが、繊維の混入が認められる。色調は、暗褐色、黒褐色を呈し、器厚は7～10mmほどである。

Ⅱ群3類（第75図186～188）

芦野Ⅰ群・表館式に相当するものであるが、器形は不明である。

(186)は、多種の文様によって構成される。口縁部側から順に見ると、横位の刺突列2段（ヘラ状工具による）、コンパス文（半截竹管による）、円形竹管文横位の刺突列2段、コンパス文、ループ文が施される。

(188)は、半截竹管による刺突列が何段も施される。

内面は、平滑に調整されている。胎土には、砂粒を含み、繊維の混入が認められる。色調は(188)赤褐色、(186・187)黒褐色を呈する。器厚は、7mmほどである。

Ⅱ群4類（第75図182～185）

横走る綾絡文を全面に施したもので、Ⅳ層より出土した。

すべて同一個体であるが、復原し得ない。器形は、平縁の深鉢形で、底部近くの破片(185)から尖底を呈すると思われる。口唇部は、粘土がやや外側にまくれ返り、面取りを行った後にヘラ状工具により刻み目が施される。

文様は、約15～30mmの間隔を開けながら、綾絡文(L)が横位に巡らされる。底部近くには、半截竹管による押引沈線文が縦位に施される。

内面は、横位の調整が良くなされている。胎土には、砂粒を含み、やや多めの繊維の混入が認められ、繊維の走向が明瞭に観察し得る。色調は、黒褐色、暗黄褐色を呈し、器厚は10mmほどである。

Ⅱ群5類（第75図189・190）

円筒下層d1式に相当するものである。(AⅠ—392)グリットから1個体出土した。

器形は、胴部の張った円筒深鉢形で、口縁部は、外反し、波状縁を呈する。

文様は、低い隆帯によって口縁部文様帯と胴部文様帯に分けられる。前者には、撚糸圧痕文

(LR)が施され、幾何学的文様を構成する。後者には、木目状撚糸文(L・R)が施され、隆帯上には、刺突文が施される。

内面は、ヘラ状工具により平滑に調整され、光沢を持つほど良く行われている。胎土には、細かな砂粒を含み、極めて少量の繊維の混入が認められる。焼成は良く、色調は赤褐色を呈する。器厚は、口縁部7mm、胴部9mmほどである。

(Ⅱ群4類について)

本類は、器面に綾絡文のみが施され、底部近くに半截竹管による縦位の押引沈線文が施され

るものである。器形は、平縁の深鉢形で尖底を呈すると思われる。

綾絡文の施される土器は、以下の遺跡等において出土している。

表館遺跡^(注1)：Ⅱ群1類b・c（東釧路Ⅲ、Ⅳ式との関連）平縁、平底、口唇部が平坦になり刺突が加えられる。文様は綾絡文。

鷹架遺跡^(注2)：Ⅱ群B類一3（早稲田6類）尖底深鉢形、波状縁、口縁部、底部に押引沈線文、胴部は地文の羽状縄文上に1条の綾絡文。

発茶沢遺跡^(注3)：Ⅱ群7類（型式を特定せず）尖底深鉢形、底部に押引沈線文、胴部に綾絡文。

和野前山遺跡^(注3)：8群E類（早稲田6類）尖底深鉢形、平縁、地文縄文上に綾絡文。

102号遺跡^(注5)：第23図一79（大木2a式併行）平底の深鉢形、平縁、不整綾絡文。

春日町遺跡^(注6)：Ⅰ群1類A（住吉町上層式）尖底あるいは丸底の深鉢形、平縁、撚糸文と綾絡文の組合せ。

これらの中で、Ⅱ群4類は、尖底深鉢形、底部に竹管による押引沈線文、胴部に綾絡文のみを施すなどの点から、発茶沢Ⅱ群7類に最も近いと思われる。

発茶沢Ⅱ群7類を含む本類が、どの型式に伴うものであるか、綾絡文が施されるものが多くある中で、底部が尖底をなす点、底部に押引沈線文が施される点などから、早稲田6類に伴う可能性があると思われる。

（注1）青森県教育委員会 1981 表館遺跡

（注2）青森県教育委員会 1981 鷹架遺跡発掘調査報告書

（注3）青森県教育委員会 1982 発茶沢

（注4）青森県教育委員会 1984 和野前山遺跡

（注5）青森県教育委員会 1979 むつ小川原開発予定地内埋蔵文化財試掘調査概報

（注6）児玉作左エ門・大場利夫 1954 函館市春日町出土の遺物について

（ウ）Ⅲ群土器

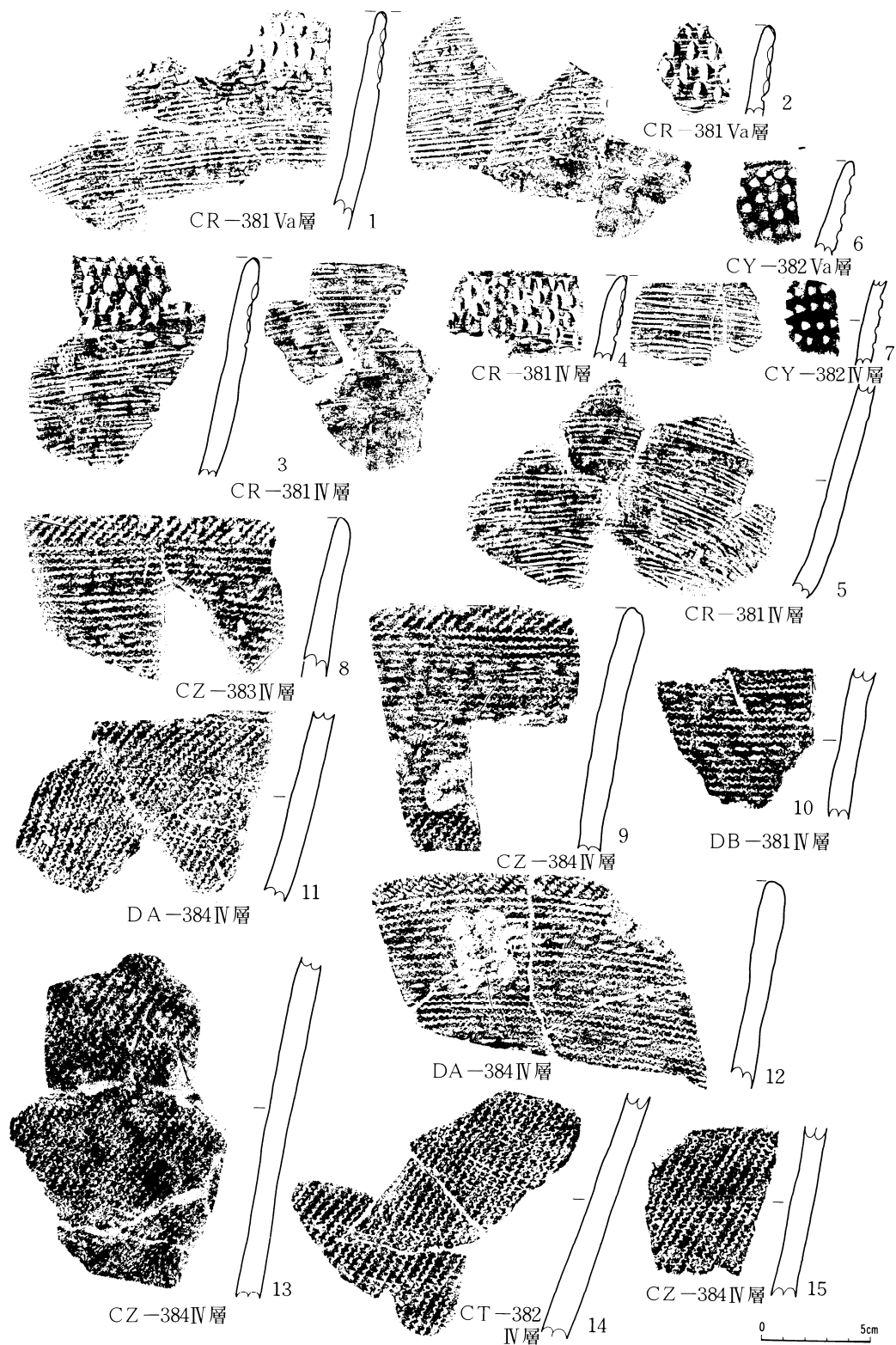
Ⅲ群土器は、Ⅳ区からは出土していないが、他の区で出土しているので、ここで分類基準を示す。

1類：円筒上層c式に相当するもの

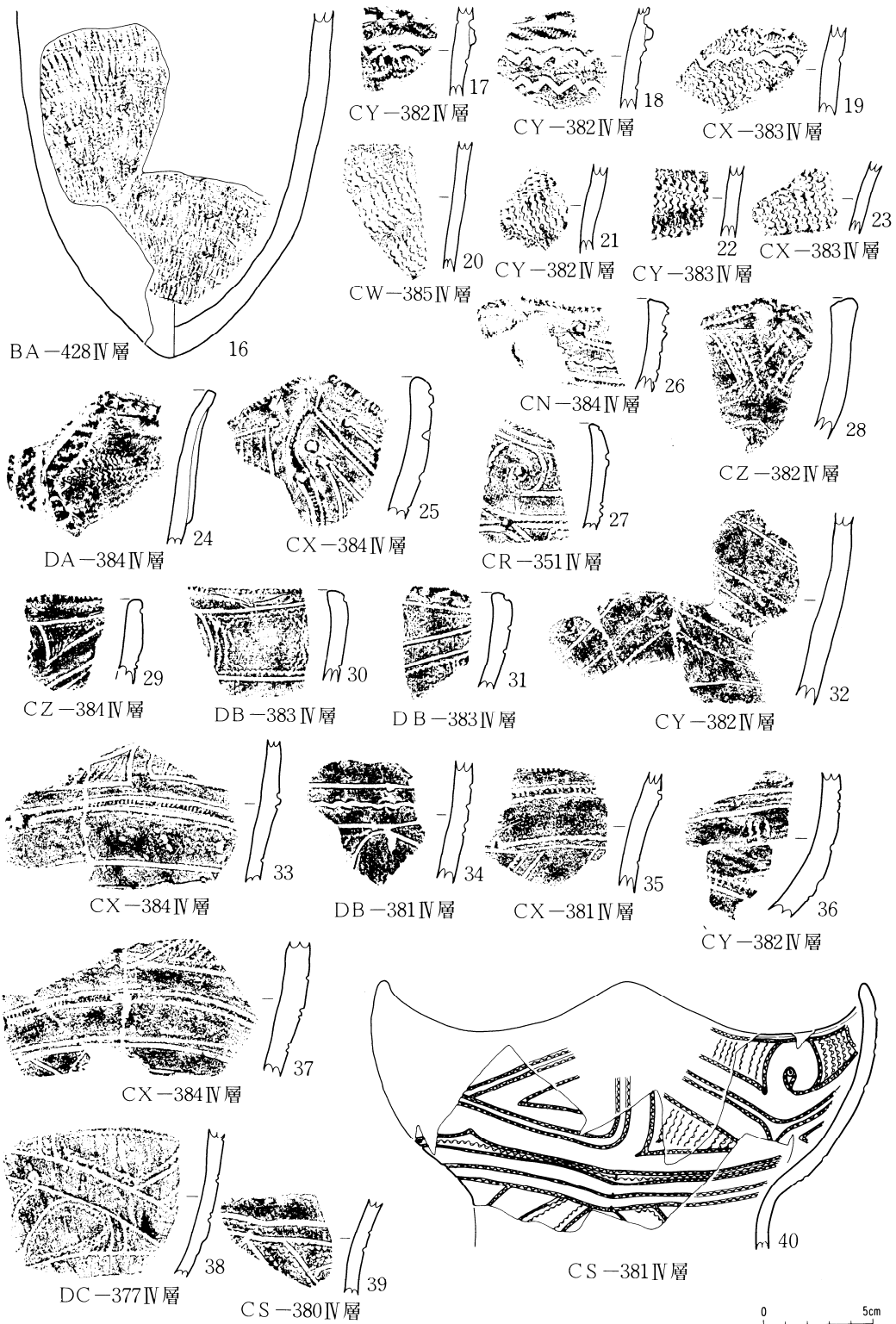
2類：円筒上層d式に相当するもの

3類：大木10式併行に相当するもの

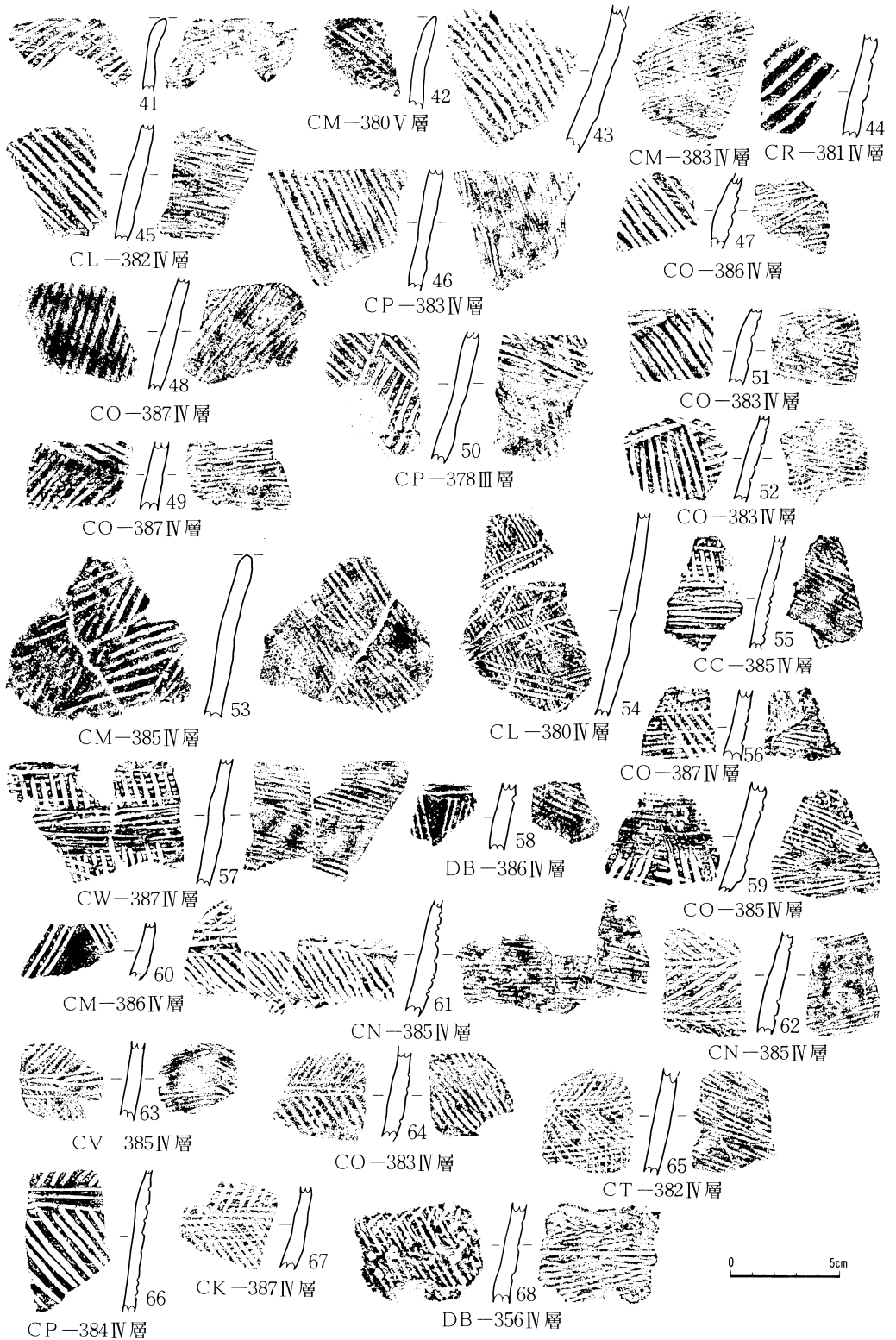
（一条）



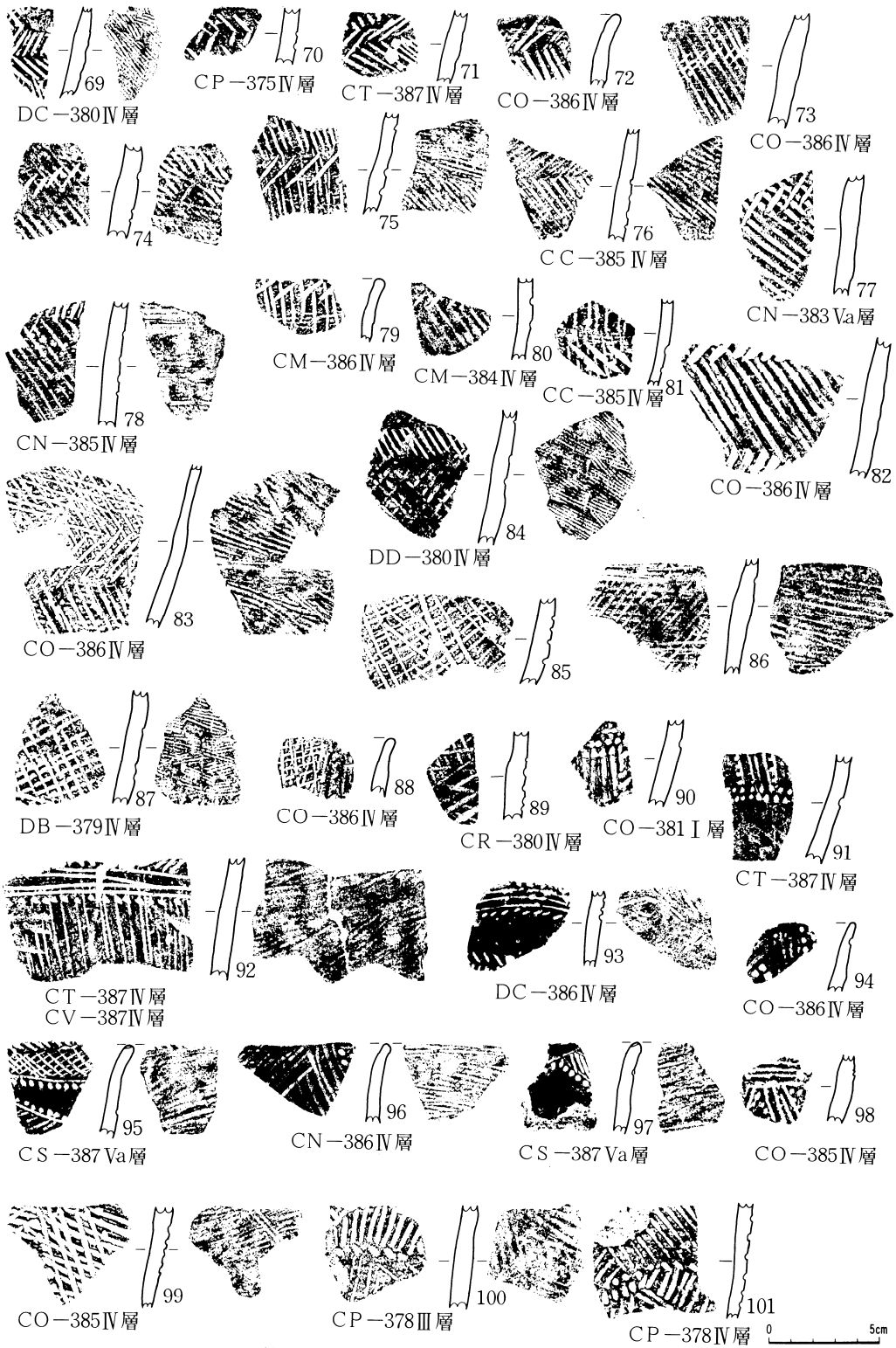
第68图 I 群土器拓影图 (I 群 1 類、2 類)



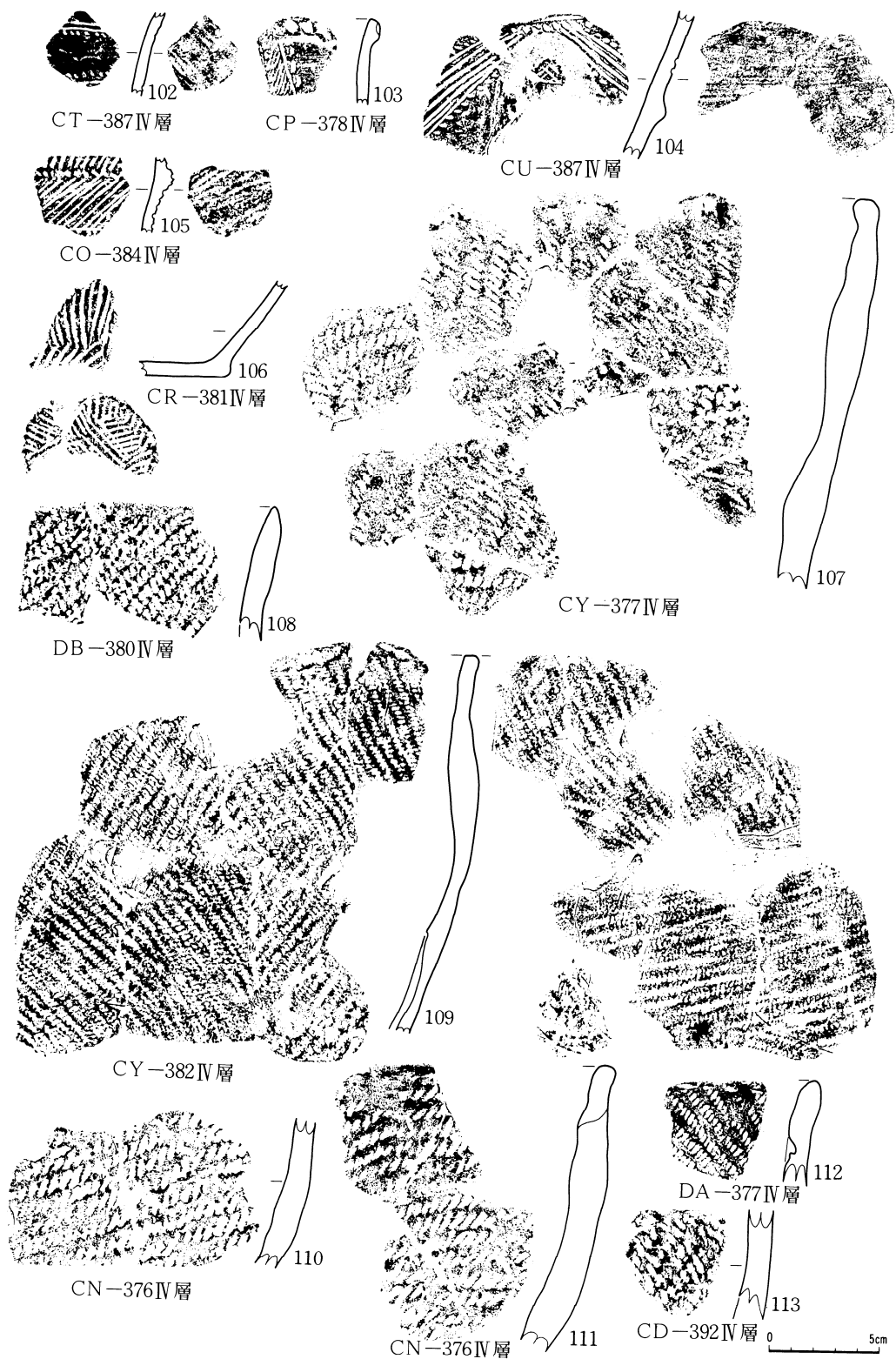
第69圖 I群土器拓影圖 (I群3類、4類、5類)



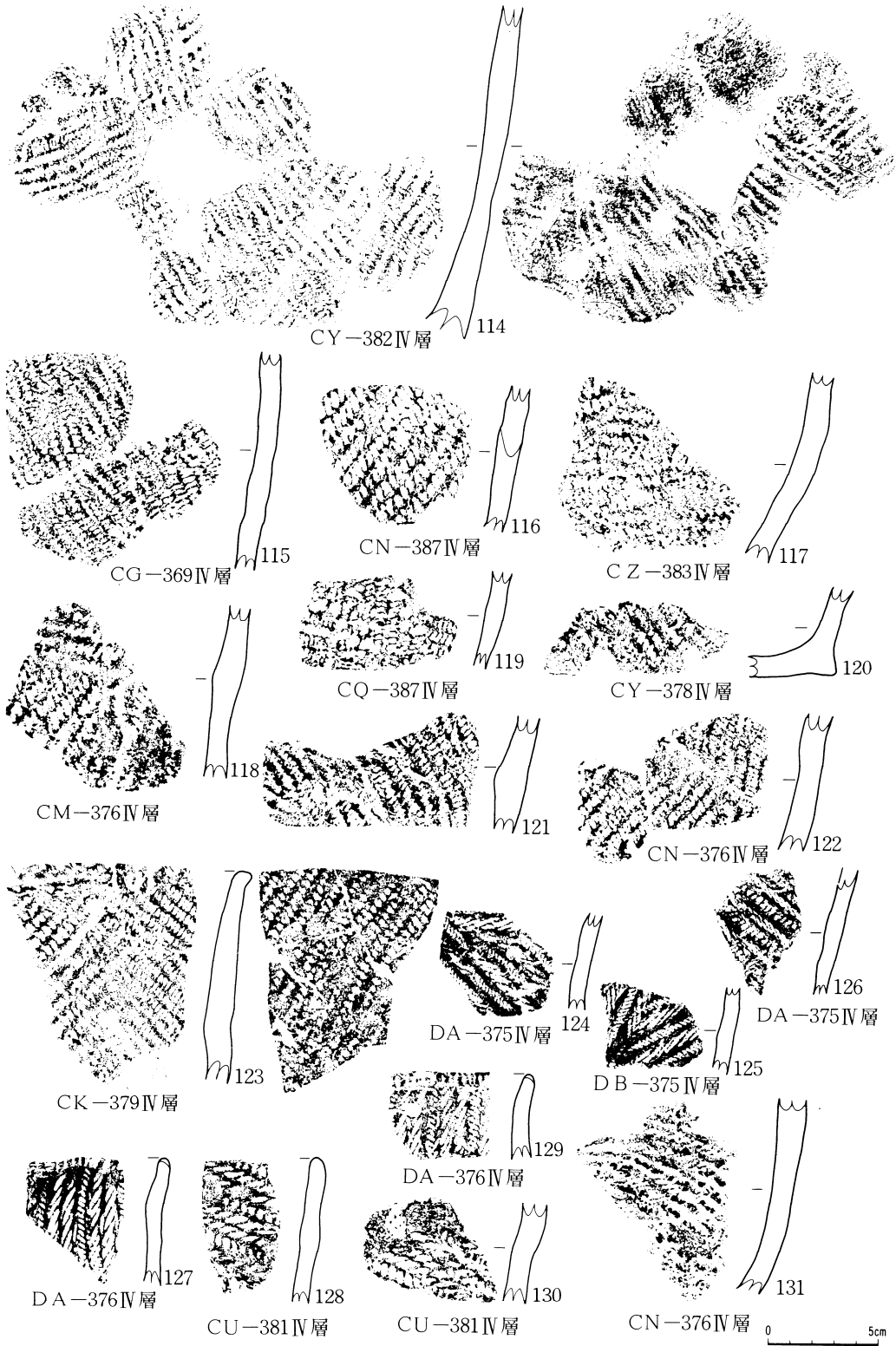
第70図 I 群土器拓影図 (I 群 6類)



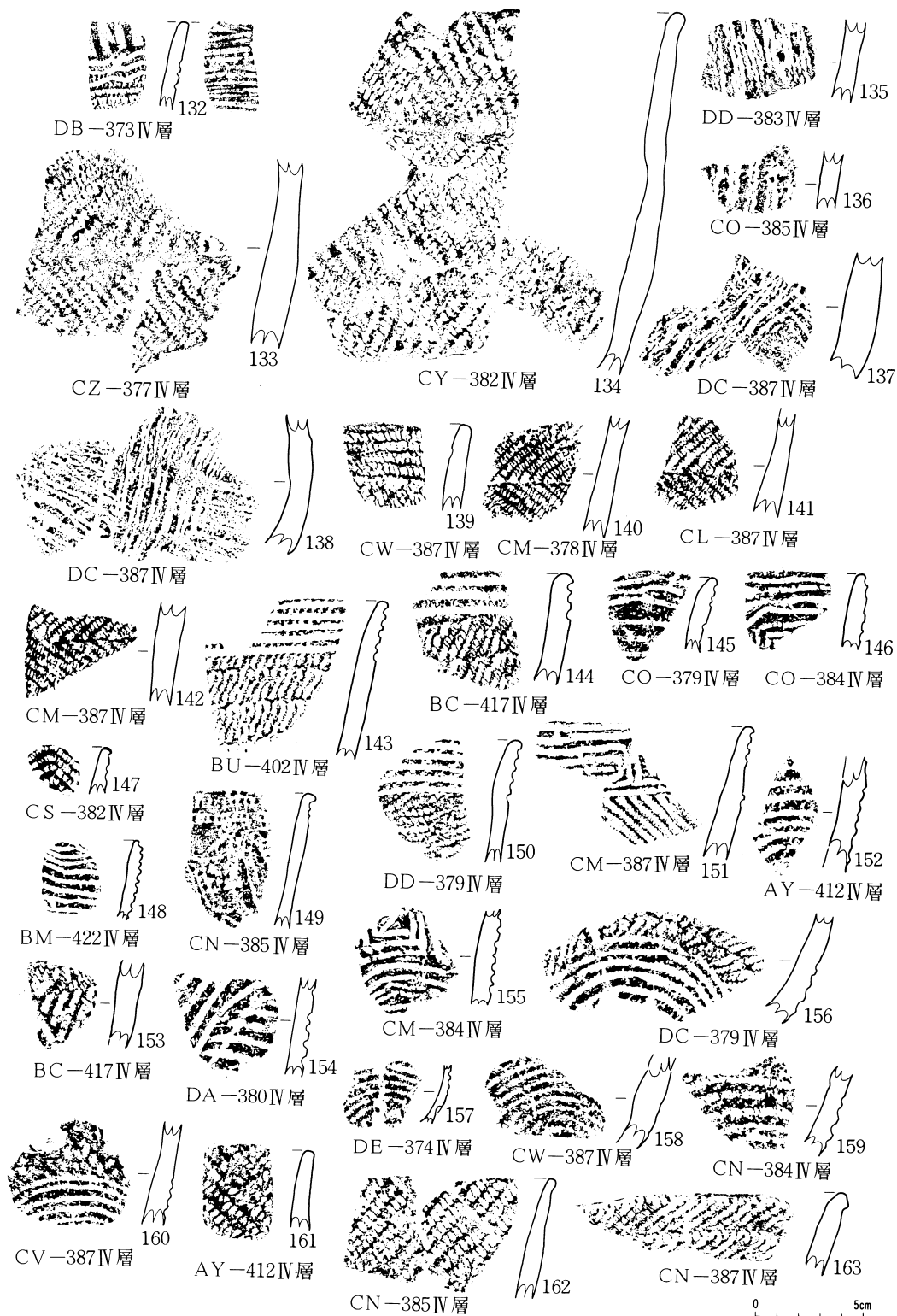
第71圖 I群土器拓影圖 (I群6類)



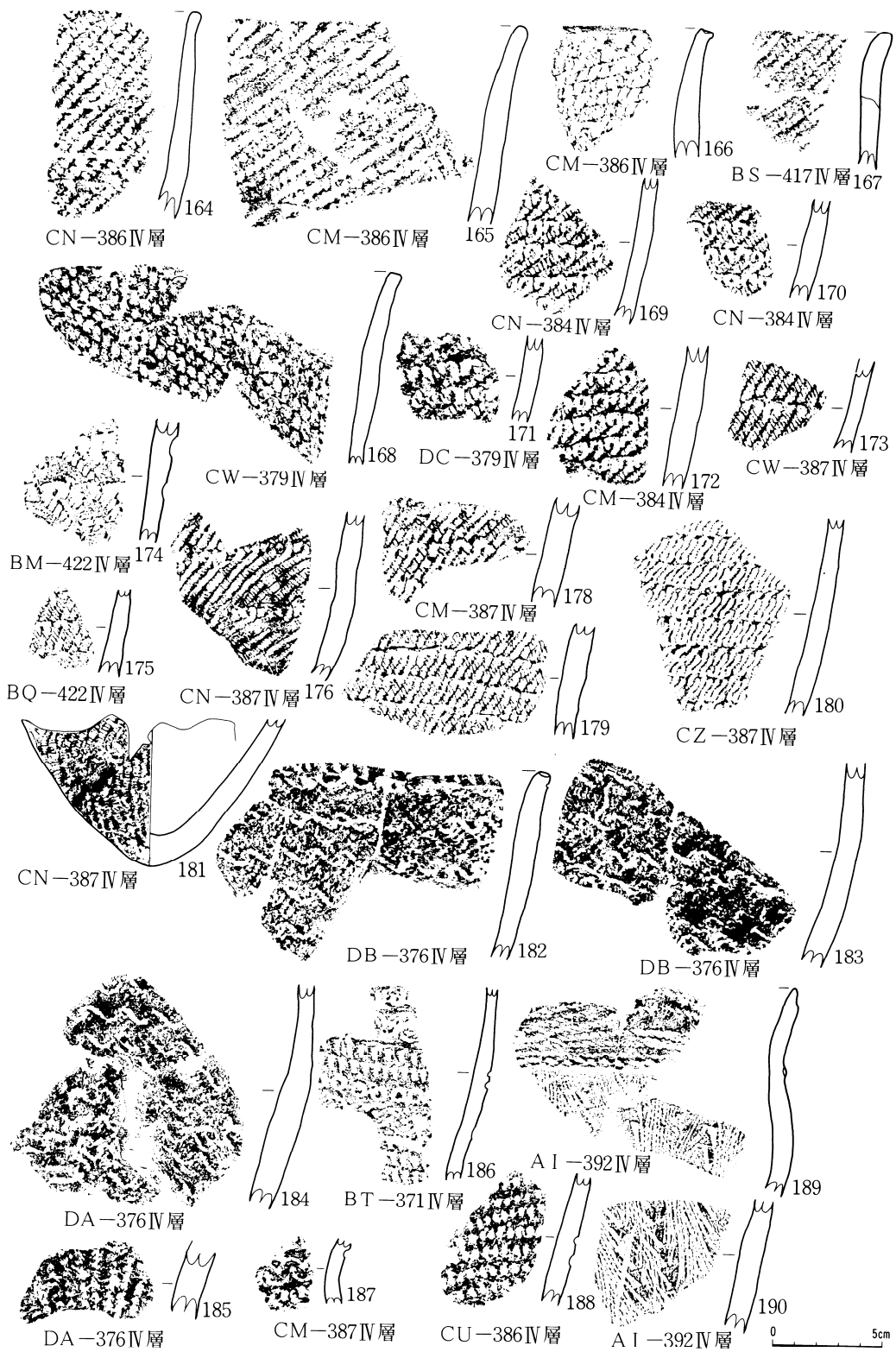
第72图 I群土器拓影图 (I群6類、7類)



第73图 I群土器拓影图 (I群7類)



第74圖 I群・II群土器拓影圖 (I群8類、II群1類、2類)



第75图 II群土器拓影图 (II群2、3、4、5類)

(エ) 第IV群土器

本群は、縄文時代後期の土器であり、その大半は、「十腰内Ⅰ群土器」に比定できる。

本群の土器は、既に何度か述べているように、今回の調査における出土土器の主体を占めている。

本群の土器の出土層位は、明確ではないがⅡ層からⅣ層にかけてであり、主としてⅣ層中位から下位にかけての面である。しかし、遺物包含層における土器の出土状況は、Ⅱ層から地山のⅤ層上面まで、浅い箇所では30cm前後の深さしかなく、平均的にみても50cm前後の深さしかない。この間に、縄文時代早期から弥生時代までの土器が混在しているという状態であった。

従って本群の土器についても、層位ごとの土器取り上げができず、多量の土器の出土をみながらも、層位ごとにおける時間差による土器の分類が出来ぬまま調査を終了した。上述のような理由から、以下に記述する本群の細分類の基準は、時間差的な面も考慮しつつも、文様・器形面の差異に、より比重をかけた判断によるものである。以下のとおり、基準の設定に際しては、観点の相異により、同一系統上に並べられない基準もでてきたが、ここでは、それらを一括して分類記号を付すことにした。

なお、本項で分類した結果は、第1次調査の分類（青埋文報第90集「大石平遺跡」15頁参照）と分類記号・順番に違いがみられる程度で、おおむね基本的には合致しているものと解釈している。

今回の調査で出土した縄文時代後期の土器を時代別区分の第IV群とし、その中で、文様・土器型式・施文工具・その他という観点から分類した。

本節2の冒頭でも述べたが、第IV群土器は、大きく遺構内出土と遺構外出土のものに分けることができる。土器の実測図・拓影図については、遺構内出土のものは各検出遺構の記載の項に、遺構外出土のものは本項の以下に各々掲載することにし、土器の事実記載説明文については、遺構の内外出土に関係なく一括した取り扱いで記述する。

A類 （第80図—1～6）

本類は、器面に文様の施文されない土器であり、折り返し口縁で無文の土器も含めた。

本類は、口縁部の作り、装飾の面から、更に四つに細分することができる。

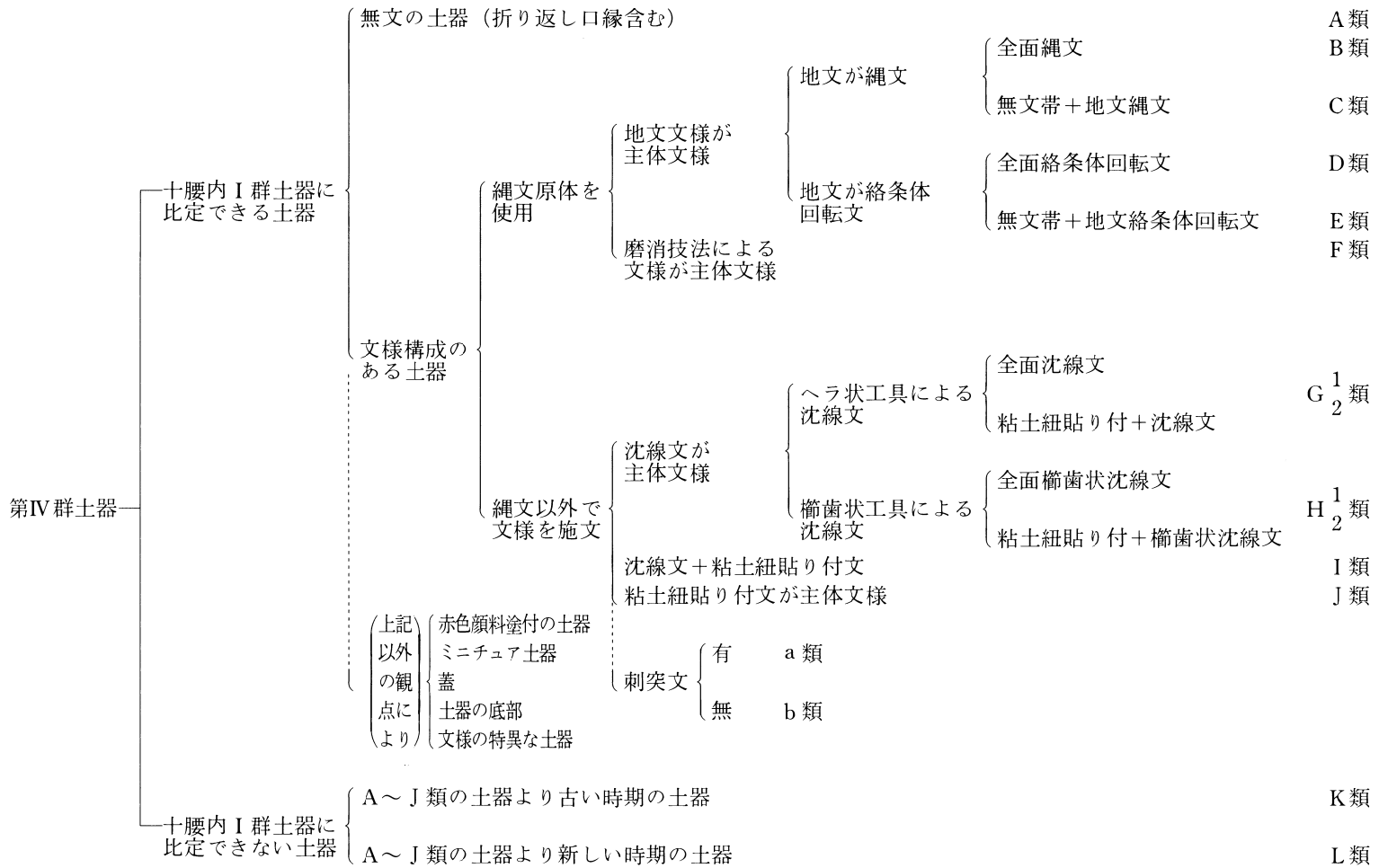
A—1類 1・2のように口唇部も含め器面に全く文様が施文されないもの。

A—2類 3のようにA—1と同様、器面に全く文様が施文されず、波状口縁のもの。

A—3類 4～6のように、折り返し口縁風の口頸部や特に肥厚した口頸部のもので、口唇部上に指頭押捺による羊肉彫的装飾がみられ、その直下の口縁部と胴部の境目付近に1条の横走る沈線のあるもの。

本類に該当する土器は、概して円筒形に近い形状を呈し、口縁部が余り外反しない直線的な

〈分類基準〉



深鉢形が多い。また、その出土量については、IV群全体の土器の中では1割弱にも相当しないほど少量である。

B類 (第80図—7・8)

本類は、器面に縄文のみを施文している地文縄文の土器である。

縄文は、無節・単節でほとんどのものが斜行縄文である。

C類 (第80図—9～16 第77図—32)

本類は、口縁部に無文帯を有するもので、その下位はB類と同じ地文縄文のみの土器である。

本類は、主体文様が地文縄文であるものの、無文帯との境に施す文様により、更に三つに細分することができる。

C—1類 9—11のように若干外反する口縁部が無文帯で、その下位の地文縄文の施文された胴部との境に撚紐の圧痕文を一巡させるもの。12は、口縁部のみの破片であり、無支帯の上下位に各々一条の結節回転文を施文している土器で本類に属すると思われる。

C—2類 13～15のようにC—1類と比較して撚紐圧痕文が沈線文に変わっただけのものである。C—1・2類とも、撚紐圧痕文や沈線は、確かに文様帯の区分をする役目は果たしているが、どちらかといえば、副次的な文様にすぎず、C—1・2類ともあくまでも地文縄文が主体文様となっている。

C—3類 16のように全面地文縄文の上に粘土紐貼り付けによる口縁部を作出しているものであり、口唇部直下に2条、粘土紐上に1条各々撚紐の圧痕文が施文されている。

D類 (第80図—17 第77図—33)

本類は、B・C類が縄文を施文した地文が主体文様であったのに対し、主体文様が絡条体回転文の土器である。

17が本類の代表的なものであり、全面に縦位の網目状撚糸文が施文されている。

E類 (第80・81図—18～21)

本類は、基本的にはB類とC類を分類したごとく、同じ文様が主体文様となっているものの、無文帯の有無にのみよりD類と切り離しただけで、無文帯と胴部文様帯の境に沈線文が一巡するか否かで細分することができる。

E—1類 18のように無文帯の口縁部と胴部の境に2条の沈線が横走しているもの。この土器の胴部文様は、原体の巻きが不整の絡条体回転文である。

E—2類 19のように無文帯の口縁部から横位の網目状撚糸文が施文されているもの。20は折り返し口縁の土器であるが本類に属して問題はないと思われる。

D・E類については、無文帯の有無を第一に取り上げて区分したが、絡条体回転文の文様により区分することも可能かつ意味あることとも考えている。すなわち、D類とE—2類を含む網目状撚糸文が地文としての意味を有する主体文様となるものと、E—1類のような、単純な絡条体回転文が主体文様となっているものの2種類である。それは、後のG・H類の中にもみられる沈線・櫛歯状工具による、やはり網目状文という文様が存在するため、特に文様による区分も考慮すべきではないかと考えたからである。

なお、21の土器については、主体文様という観点からは分類しにくい文様構成であり、本来的には、I類のごとく、沈線文と絡条体回転文の組合せによる文様構成をもつ土器と1分類設定すべきであったが、他に類例が少なく、あえてE—2類に含めた土器である。

F類 (第81・82図—22～46)

本類は、磨消縄文・充填縄文が主体文様となる土器である。

本類は、IV群の土器の中でもG・H類に次ぐ量の土器群である。

本類は、磨消技法による文様構成により大きく二つに細分することができる。

F—1類 22～34のように磨消縄文が平行線やカギ状のような直線的な文様構成をするもの。

F—2類 35～46のような磨消縄文が渦巻文・入組文・波頭状文のような曲線的な文様構成をするもの。

本類には、28・34のように、アクセント的に刺突を施すものや第76図—6のように連続して刺突文を施文する土器もみられる。

G類 (第82～85図—47～91)

本類は、IV群の土器の中で最も数量的に多く出土した土器であり、沈線文が主体文様となる土器である。

本類で表現している沈線文という文様は、いわゆる「沈線文」と呼称し通用している文様をさし、へら状工具により施文される文様のことであり、H類で使用している櫛歯状工具による「櫛歯状沈線文」と区別している。

本類は、全面に沈線文が施文されているものと、口縁部に粘土紐貼り付文等の副次的文様のみられるものとの二つに細分することができる。

G—1類 全面が沈線による文様のみのもので、文様構成から更に細分した。

(ア) 47—51のように網目状文が施文されているもので、ほとんどが口縁部文様帯を有している。

(イ) 第54図—72号のように口縁部から胴下半部まで縦位の沈線による直線文が施文されているもの。

- (ウ) 沈線の文様が52～70のように渦巻文・入組文・流水文風曲線文など比較的曲線的沈線文が主文様となっているもの。
- (エ) 沈線の文様が71～73のようにカギ状文・平行文など(ウ)と比較して直線的な沈線文が主文様となっているもの。
- (オ) 沈線の文様が74～81のように(ウ)・(エ)と比較して、三角形文・四角形文・稲妻状文・木目状文(79～81)など、余り文様に連続性のない比較的単発の文様のみられるもの。

G—2類 沈線文が主体文様であるが粘土紐貼り付文がみられるもので、G—1類と同様、粘土紐の貼り付部位等から、更に細分した。

- (ア) 82～87のように口縁部文様帯を区画するように粘土紐を横位方向に一巡させて貼り付けているもの。本類には、86のように半肉彫的技法により隆帯として表現している文様も粘土紐貼り付文様と表現結果が類似していることから含めることにした。

波状口縁の場合には、83・84のように波状突起部の頂部に指頭押捺による装飾的な粘土紐貼り付文がみられる。

- (イ) 88・89のように粘土紐貼り付文が、横位に一巡せず、波状口縁の突起部直下等に部分的にみられるもの。粘土紐貼り付文は、大半がねじりを加えた「8」字状を呈するものが多い。
- (ウ) 90・91のように(イ)の部分的な粘土紐貼り付文より更に小規模に、かつその貼り付け部位が、波状口縁の突起部の頂部にみられるもの。

本類は、小型の浅鉢形土器に多くみられ、他の器形には、ほとんどみられない。

H類 (第85図—92～106)

本類は、G類と文様的には大差ないが、沈線文を施文する工具が、G類の場合のへら状工具等であるのに対し、櫛歯状工具によるものでの櫛歯状沈線文(一度の施文で複数の平行沈線文が施文できる)を施文している土器である。

本類もまた、G類と同じ観点から二つに細分することができる。

H—1類 G—1類に対比できる土器であり、本類についても、更に文様構成から細分した。

- (ア) 92のように大柄な網目状文が施文されているもので、文様表現としては、D・E・G類に含まれている網目状文と類似している。
- (イ) 93・94のように縦・横位の櫛歯状沈線文が施文されているもの。94は胴上

半部に沈線による格子状文が施文されている土器である。

- (ウ) 櫛歯状沈線の文様が95～100のように弧状文・入組文・カニバサミ状文・波頭状文など曲線的沈線文が主文様となっているもの。
- (エ) 櫛歯状沈線の文様が101～105のように平行文など、直線的沈線文が主文様となっているもの。
- (ア)・(イ)・(ウ)は各々、文様構成の面からG—1類の(ア)・(イ)・(ウ)に対比することができ、(エ)は、G—1類の(エ)と(オ)にはほぼ類似し対比することができる。

H—2類 G—2類とその文様構成が同じで、櫛歯状沈線文が主体文様であるが、口縁部に粘土紐貼り付文のみられるものである。

106が本類に属するもので、口縁部に3条の粘土紐を横位に貼り付けている。

また、粘土紐によるボタン状の貼り付文がみられ、このボタン状貼り付文については、G—2類にはみられなかったものである。

本類は、量的に少量である。

I類 (第76図—21)

本類は、沈線文と粘土紐貼り付文との組合せによる文様構成の土器であり、本類に属する土器は、この1例のみである。G—2類の範疇に入る可能性もあり、I類とせず、G—3類とする分類方法も検討の余地がある土器である。

本土器は、小型の鉢形土器で、口縁部文様帯に平行沈線による直線的な山形文が横位に巡らされ、その文様帯の上下位に1条ずつ粘土紐が横位に貼り付けられ、2個の山形突起部直下には、ねじりを加えた懸垂状の粘土紐を貼り付け、その上下端共に各々文様帯上下の横位の粘土紐につながっている。

J類 (第86図—107～114)

本類は、器面に粘土紐を貼り付け、その貼り付文が主体文様となっている土器である。

本類の土器は、大半が器厚が厚く大型壺の器形と考えられる。

粘土紐の両側は、沈線が粘土紐に沿って施文されている。頸部には、112・113のような橋状把手がつけられるものと考えられる。

刺突文について (第86図—115～128)

ここで、これまでA・B…の分類基準の順で記述してきたが、分類一覧にも示したとおり、A・Bの分類と観点の異質な特徴を有するものについて記述する。それは、刺突文という文様であり、文様別分類の中では、縄文以外で文様を施文するものの群の細分類した沈線文・粘土紐貼り付文の同一線上に位する一群とも考えることができようが、土器の文様から類別作業を行っている段階で、意外に各種の文様の中に刺突文のあるものがみられ、刺突文が一つの文様別

分類の中の独立して分類できる文様要素とは考えられないと判断したからであり、もし分類の項目を立てるとすれば、A～J類の中で各類の細分類項目に位すると考えている。

刺突文については、その有無で分類することができ、以下、刺突文のみられる土器について記述する。

刺突文が施文されている土器をA～J類の中でみると、A類には見当らず大分類の項のうち、地文文様が主体文様となるB・C・D・E類にもほとんど見当らない。残りのF・G・H・I・J各類に刺突文はみられる。また、刺突文は、第45図―9や第86図115・126のような無文帯を有する土器のその部位に施文されるものもある。このようにみても、刺突文は、大きく分けて一つは無文帯に施文される場合と、もう一つは器面に施された文様効果が地文縄文等のような余り凹凸が目立たないものではなく、沈線文や粘土紐貼り付文のような器面に凹凸が現れる文様に施文される場合との二つの文様の場合に施文されているとみることができる。刺突文が多用される類は、F類及びI・J類である。

刺突文の施文部位は、大きく二つの部位に分けることができる。一つは、無文帯が作られる口縁部文様帯と、台付鉢等にみられる台部に施文されるものであり、この場合は、115や第45図―9のように刺突が連続して文様帯を構成している。もう一つは、117・121のように沈線文や磨消縄文の文様の交差する点等にポイント的に単独で施文されているもので、119～123のように粘土紐上に連続して施されているものもある。例外的なものとしては、126のように器内面の口唇部直下に文様帯として刺突文が施文されているものもある。これは、どちらかといえば前者の部類に属するタイプであろう。

つまり、刺突文の施文については、刺突を連続させ一つの文様を構成する場合と、他の文様との組み合わせ的な使用法、いわば付加的に刺突を施す場合とに区別することができるといえる。従って、逆に言えば粘土紐を貼り付る土器には比較的刺突文が多くみられるともいうことができよう。

現在、刺突文は、時期的区分におけるメルクマールとしての要素が弱いといえるが、現に、刺突文が施文される土器に限定が認められ、今後の資料増加によっては、その可能性がでくるとも考えられる。

赤色顔料塗付の土器について

この種の土器については、実測図・拓影図に（朱）と記載してある。

赤色顔料は、ほとんどが俗に「ベンガラ」と呼称している酸化第二鉄である。この種の土器は、大・小型壺、台付浅鉢、浅鉢の器形に比較的多くみられ、深鉢形の土器にはほとんどみられない。また、塗付部位は、全面のものと部分的なものの2種類がある。その比率は不明である。

赤色顔料を塗付した土器の量は、IV群土器全体の中では微量といえる程数が少ない。

ミニチュア土器 (第76図—25～27)

ここで取り上げる土器は、その大きさに特徴があり、形状が壺形に近い器形を呈し、日用雑器としての機能を果しにくいもので、一般にミニチュア、手捏ね、袖珍という呼称を付している小さな土器のことである。この種の土器には、概略的に器高10cm前後以下のものを含めた。その数は、破片等も含めて約20点弱である。

蓋 (第76図—28～31)

推定で土器の蓋と考えられるものは、4点出土した。すべて完形でないため、断定はできないが、形状から蓋と推定した。切断蓋付土器と呼ばれている蓋部のものとは違い、底部の作りは、製作当初から蓋という器形を作る意図のあったことを感じとれる。

土器の底部について (第87図—129～142)

(ア) 土器の底部文様について

底部には、無文のものと文様のあるものがみられる。文様は、明らかに文様として施文しているものと、土器製作時に付いたものとも解釈できる文様とがある。前者は、129～136のように沈線文の施文されたもので、中には、136や第15図—1のように底部内面にも沈線文様が施文されたものもある。後者は、137～141のように木の葉や板目及び網代状の編み物等の圧痕文がついているものである。後者の場合においては、土器製作者が文様を意図して土器製作時にそれらを敷きその上で製作したのか、あるいは偶然圧痕としてついたのかは不明である。

(イ) 土器の底部の作りについて

一般的に土器の底部は円形となっているが、130～135のように数量的には少ないものの、土器底部外周に刻目を付けたり、貫通孔を穿孔しているものがみられる。刻目や、貫通孔については、その用途が一番問題となるが、土器に何らかの意味で紐を回すための固定箇所であろうと推測しているが断定できない。紐をかけるという解釈をすれば、蓋という物の存在をこの点から推測することも可能であろう。

土器の底部文様のうち、圧痕文のついている土器は、比較的大型の土器であり、底部文様のうち沈線文を施文しているものと、刻目や貫通孔のみられるものは、133を除いて、すべて台付及び高台風の底部の器形だけである。

文様・施文部位の特異な土器について (第15図—1、第88図—143～148 第79図—下段)

この土器については、第V章に記述した。

K類 (第88図—149 172図—3)

K・L類は、縄文時代後期の土器とは考えられるが、A～J類に属する土器と若干の時間的差異が認められる土器である。A～J類の土器は、一般的に「十腰内I帯土器」としてとらえ

ることのできる土器で、K・L類はその前後期に位置する土器と考えられる。

本類は、「十腰内Ⅰ群土器」の直前に型式的編年上位置すると考えられる土器を一括した。

時期的表現としては、縄文時代後期初頭に位置する土器と言うことができよう。本類に属する土器は、量的には少量であるが「十腰内式土器」の編年及び細分類化作業の上ではL類と共に貴重な資料となり得るものと思う。

L類 (第88図—150～160 第45図—4～7・9・16 第46図—23 第76図—23・24)

本類は、「十腰内Ⅰ群土器」の直後に型式的編年上位置すると考えられる土器を一括した。

しかし、「十腰内Ⅰ群土器」の中に最終末の時期ともとらえられることができる要素も多分に含んでおり、直後の示す時期は、表現的に矛盾しているかも知れないが「十腰内Ⅰ群土器」末葉から「十腰内Ⅱ群土器」の直前に至るまでの時期と考えている。本類もK類と同様、量的に非常に少ない土器である。 (遠藤)

(オ) 第Ⅴ群土器 (第89図1～7)

縄文時代晩期の土器を一括したが、数量は少ない。

(142) は、鉢形土器の胴部片で、2条の横位沈線及び簡略化した羊歯状文が施される。色調は、黒褐色を呈し、器厚は7mmほどである。

大洞BC式に相当すると思われる。

(1・5) は、粗製の平縁の深鉢形土器である。(1) は、最大胴径14.3cm、底径5.8cm、器高12.5cm、器厚5cmである。文様は、口縁部では、口唇直下に斜縄文(RL)、それ以下には、磨きによって無支帯を作ったうえで、棒状工具による押引列点文が施される。胴部との境には、約3.5cm間隔で突起をもつ沈線一条ともたない沈線が一条巡る。胴部には、RL斜縄文が施される。色調は、黄褐色、黒褐色を呈する。

(3・4) は、皿形土器の破片である。口唇部には、斜位の沈線が施され小波状を呈する。

文様は、磨消雲形文が施され、縄文は細かいLR縄文である。また器面には、赤色顔料の塗布の痕跡が認められる。色調は、暗褐色を呈し、器厚は5cmほどで薄い。

(7) は、台付浅鉢形土器の台部である(台部下半は欠失している)。文様は二条の平行沈線が施される。また台部内面には、沈線によるX字状文が施される。また、器面に赤色顔料の塗布の痕跡が認められる。

以上は、大洞C2式に相当すると思われる。(6) は所属型式不明。 (一条)

(カ) 第Ⅵ群土器 (第89図～第94図他)

弥生時代に属する土器である。ここでは、概略を記述することにし、あえて分類は行わない。なぜなら第3次調査において、連弧文を多用する一群の土器がまとまって出土したことや、三ヶ年にわたる調査によって、時期の異なる土器が出土したことから、大石平遺跡出土の弥生時

代の土器を整理し、編年的に再構成する必要があると考えたからである。ここでは、便宜的に第1次調査における分類と、須藤隆氏の編年に従って記述することにする。

第2次調査では、弥生時代第2群土器（須藤編年の2期）が主体を占めている。IV—1区北側—2軒の竪穴住居跡（第1号・第10号）の周辺に分布しているほか、南東隅に若干分布している。このほかには、弥生時代第1群土器（須藤編年の5期）及び、連弧文を施文している土器や撚糸文を施文している土器が、それらに混在して出土している。

①弥生時代第2群土器（須藤編年の2期）（第89図～第94図他）

器形には、深鉢（甕）・鉢・浅鉢（台付も含む）・壺などがある。また、赤色顔料を塗布した土器もある。

深鉢形土器の口縁には、平口縁・波状口縁・小波状口縁がある。鉢・浅鉢形土器には、平口縁と波状口縁がある。波状口縁のものには、波状部に刻みを加えたり、粘土粒を貼り付けて、その上を更に押圧か刻みを加えている。平口縁のものは、深鉢形土器では口唇部に刻みが見られるもの、口縁に縦位に短沈線が見られるものがあり、鉢形土器では粘土粒の貼り付けが随処に見られるものがある。

主体文様は、縄文地に1～数条の平行沈線、連結沈線、波状工字文などで構成されているものが多い。縄文は、RL縄文が縦走して見られるものが圧倒的に多いが、LR縄文も若干見られる。また、横走している縄文もある。

②弥生第1群土器（須藤編年の5期）（第67図1、第90図8・9、第94図9・11・12）

第90図8は、数条の平行沈線と鋸歯文が見られる深鉢形土器、第90図9は、頸部に部分的ではあるが、横走する縄文が見られる深鉢形土器である。第67図1は炉に転用された土器で、残存部から、底径の小さい深鉢形土器と思われる。第94図16は小型の土器である。

以上の土器は、第1次調査での第1群土器と、若干の相異のみられるものもあるが、第1群土器の中でのバリエーションと考えた。

③連弧文の施文されている土器（第46図35、第90図5、第94図8・13・14）

第78号土壙出土の台付鉢は、連弧文が5段施文されており、器外面と内面の口縁（縄文施文部）には、赤色顔料が塗布されている。第94図13は、波状文とも思えるもので、胴下位には同心円状の沈線文が見られる。第94図14は、3条の沈線による、稚拙な連弧文が見られる。

前述したように、第3次調査では、連弧文を多用する一群の土器がまとまって出土している。また、第78号土壙出土の台付鉢の一部（2片）は、第3次調査で出土（第1号住居跡覆土）したものが接合したものである。したがって、総合的な考察は来年度に期待したい。

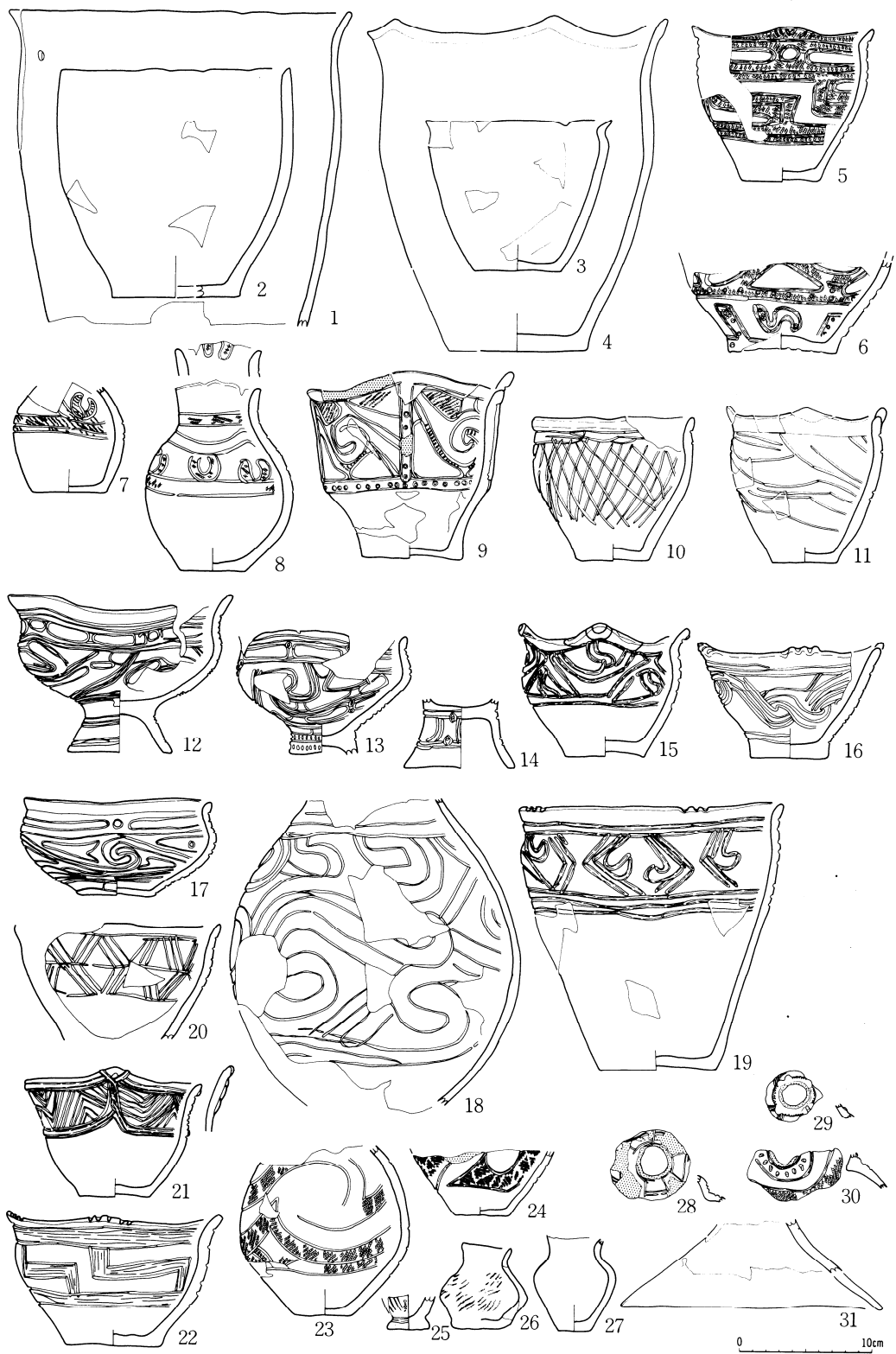
④撚糸文の施文されている土器（第16図7、第94図17～21）

第11号竪穴住居跡覆土及びその近辺から若干出土した。撚糸文（R）が施文されているもの

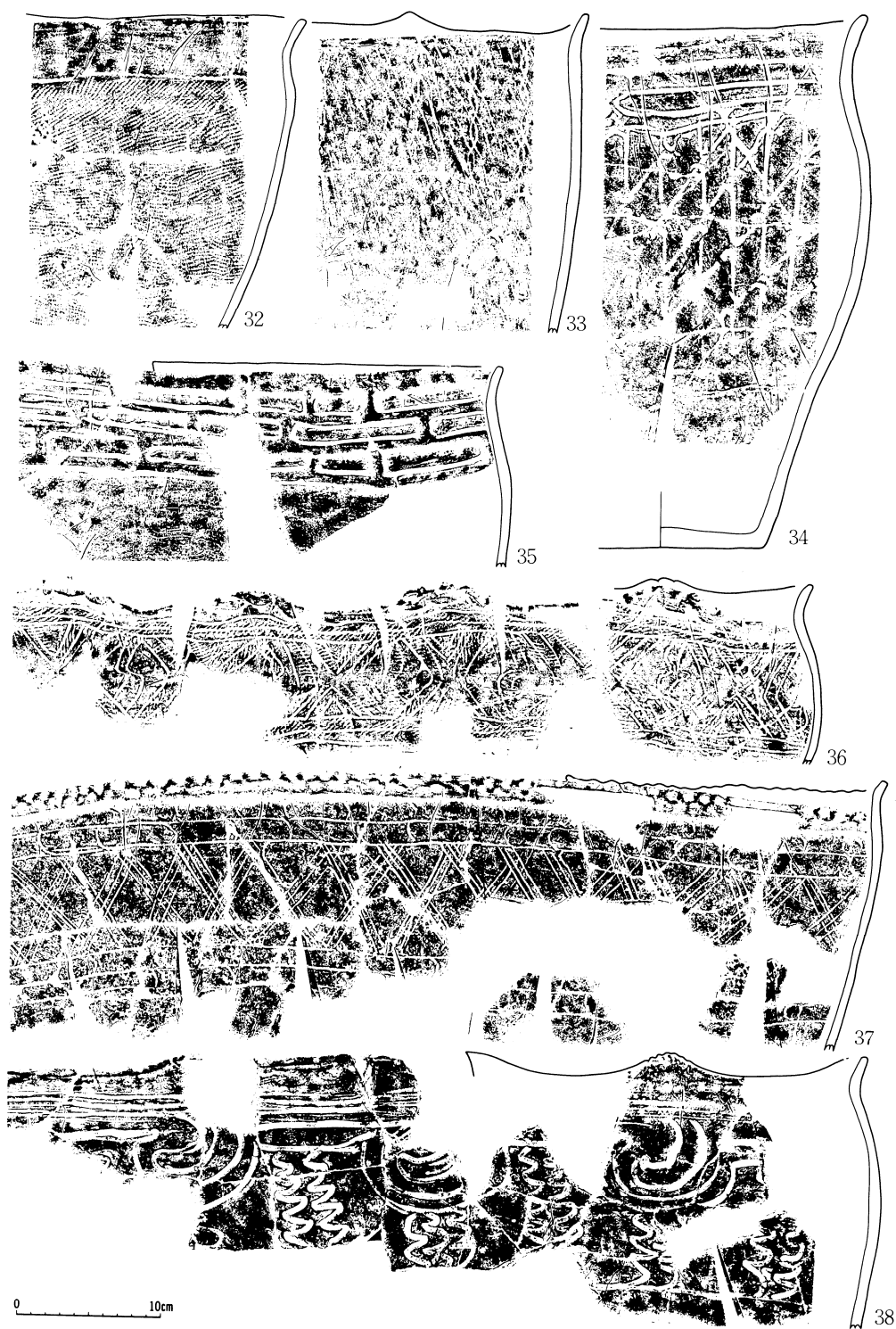
で、口唇部にはR L縄文が回転施文されている。天王山式土器との関連が考えられるが、詳細は不明である。(島山)

第6表 IV-1区 遺構外出土IV群土器(復原実測土器)観察一覧表

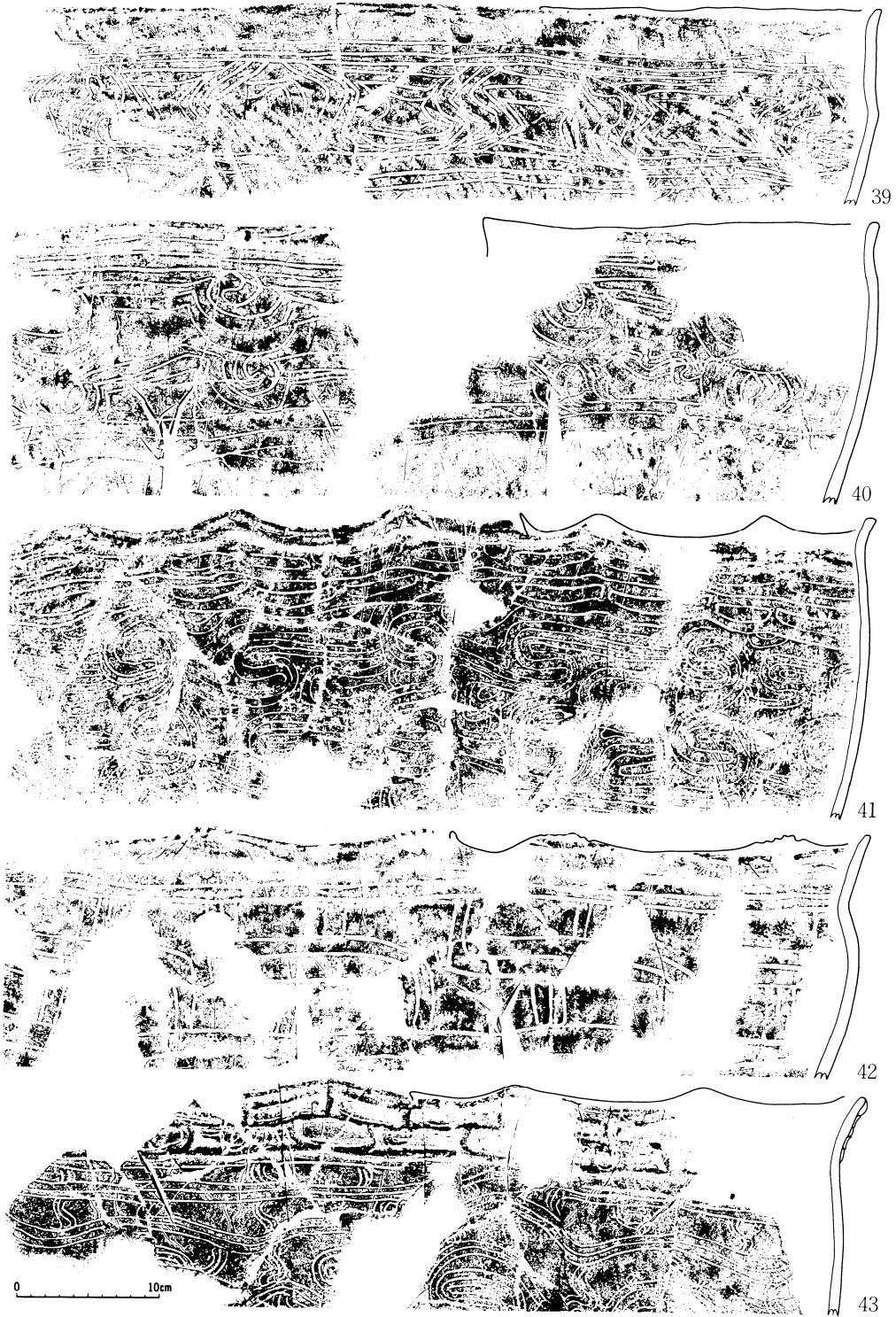
土器 番号	出土グリッド	層	計 測 値(cm)			器 形	主 文 様	分 類	備 考
			口 径	底 径	器 高				
1	DC-379	II	(26.0)	(-)	(24.0)	深鉢	無文	A-1	
2	DD-383	II	(17.4)	9.7	17.5	深鉢	無文	A-1	
3	DC-379	II	14.0	6.6	11.4	鉢	無文	A-1	
4	DC-378	IV	22.7	10.3	25.6	深鉢	折り返し口縁無文	A-2	
5	DB-377	II	13.8	5.7	11.9	鉢	充填縄文(LR)	F-1	
6	DC-378	IV	(-)	8.2	(7.0)	(深鉢)	充填縄文・刺突文	F-1	
7	DB-378	II	(-)	5.6	(8.4)	(壺)	磨消縄文(無節)	F-2	
8	DB-375	IV	(6.5)	5.0	14.7	壺	磨消縄文(LR)	F-2	
9	DB-379	II	15.6	7.6	14.4	鉢	磨消縄文 粘土紐貼り付・刺突文	F-2	
10	DC-378	II	(12.3)	5.2	11.0	鉢	網目状沈線文	G-1	
11	DC-378	II	12.1	4.7	11.9	鉢	沈線文	G-1	
12	DC-375	Va	17.0	7.8	12.2	台付鉢	沈線文	G-1	
13	DD-377	II	(12.8)	(5.1)	(9.5)	台付浅鉢	沈線文・刺突文	G-1	
14	DE-379	IV	(-)	8.4	(5.3)	(台付鉢)	沈線文	G	
15	DB-377	IV	12.9	6.0	10.2	鉢	沈線文	G-1	揚底
16	DD-378	II	13.9	5.7	8.9	鉢	沈線文	G-1	
17	DC 378	IV	14.3	5.2	7.6	浅鉢	沈線文	G-1	
18	DC-374	II	(10.5)	(10.5)	(23.5)	壺	沈線文	G-1	
19	CP-378	III	20.0	8.7	20.2	深鉢	沈線文	G-1	
20	DE-379	II	15.6	(-)	(9.0)	浅鉢	沈線文	G-1	
21	DC-378	IV	13.5	5.3	9.9	鉢	粘土紐貼り付・沈線文	I	
22	DB-375	II	16.3	7.2	10.0	浅鉢	櫛歯状沈線文	G-1	
23	DB-375	II	(8.8)	4.3	(13.0)	壺	磨消縄文	L	
24	CW-382	II	(-)	4.1	(5.0)	(鉢)	磨消縄文	L	
25	DD-378	II	(-)	3.2	(2.7)	ミニチュア	沈線文		
26	DB-377	Va	3.7	3.7	6.6	ミニチュア	地文縄文		
27	DC-377	II	4.3	2.4	7.1	ミニチュア	無文		
28	DB-377	II	(-)	(-)	(2.5)	蓋	沈線文		
29	DE-374		(-)	(-)	(1.1)	蓋	沈線文		
30	DB-378	II	(-)	(-)	(2.8)	蓋	磨消縄文・沈線文		
31	CW-386	II	(6.0)	(19.9)	(6.7)	蓋	無文		
32	DA-378	II	(29.9)	(-)	(22.5)	深鉢	地文縄文	C-1	~45 拓影展開図
33	CN-376	III	25.0	(-)	(32.0)	深鉢	絡糸体回転文	D	
34	DE-379	II・IV	28.3	14.3	37.2	深鉢	網目状沈線文	G-1	
35	DD-378	II	(23.0)	(-)	(40.5)	深鉢	櫛歯状沈線文	H-1	
36	DC-377	II	20.5	(-)	(13.2)	深鉢	磨消縄文	F-1	
37	DB-379	II	22.4	10.3	25.2	深鉢	網目状沈線文	G-1	
38	DB-378	IV	27.8	(-)	(19.0)	深鉢	沈線文	G-1	K(?)
39	DD-378	II	23.8	(-)	(20.0)	深鉢	沈線文	G-1	
40	DA-377	II	27.7	(-)	(33.3)	深鉢	沈線文	G-1	
41	DA-379	II	25.0	(-)	(28.0)	深鉢	沈線文(折り返し口縁)	G-1	
42	CO-376	III	29.5	(-)	(28.0)	深鉢	沈線文	G-1	
43	DC-379	II	(32.0)	(-)	(28.0)	深鉢	粘土紐貼り付文	G-2	
44	DD-378	II	36.3	14.5	43.0	深鉢	櫛歯状沈線文	G-1	
45	DD-378	II	23.0	(-)	(40.5)	深鉢	櫛歯状沈線文	H-1	



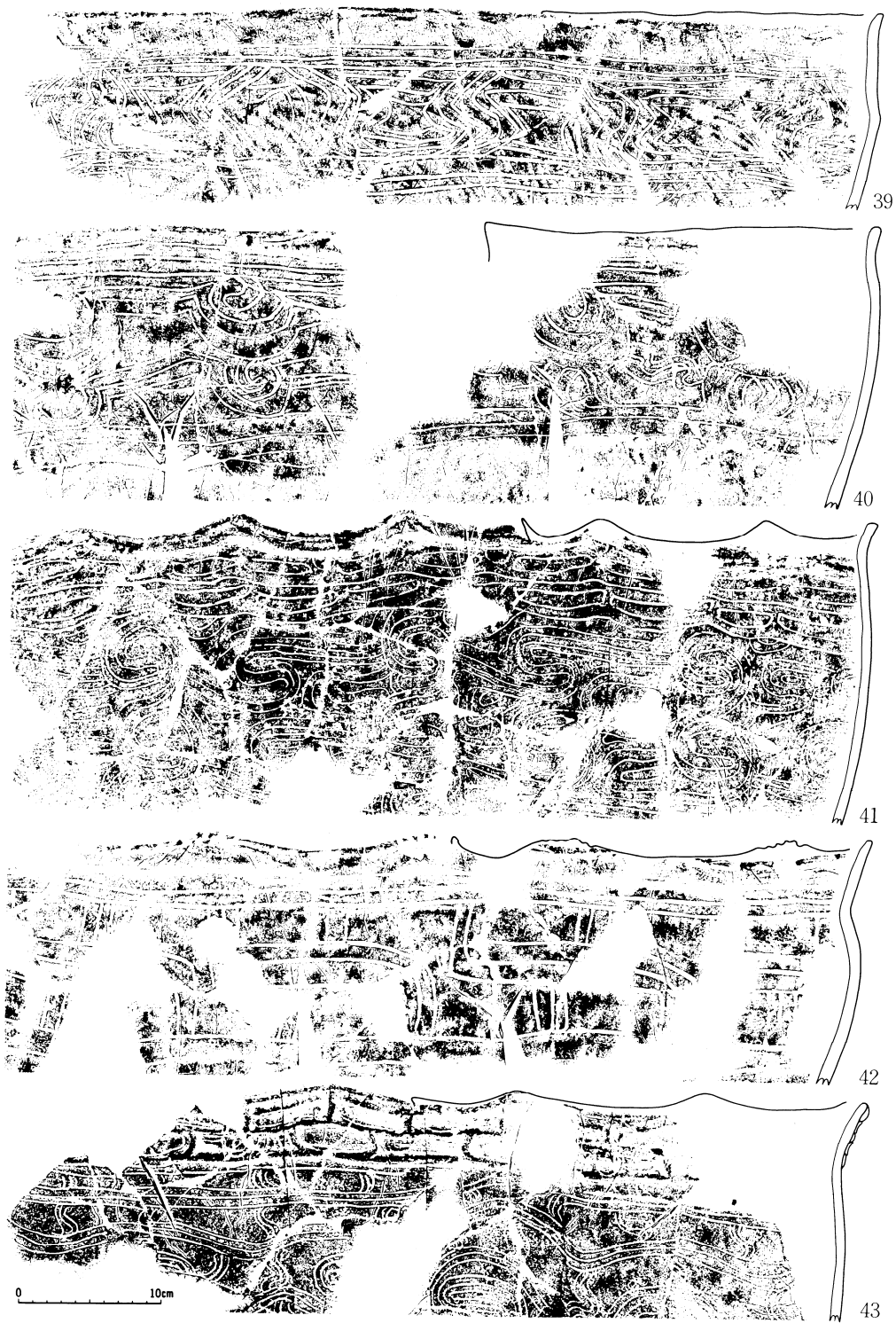
第76图 IV-1区遺構外出土IV群土器(1)——実測図



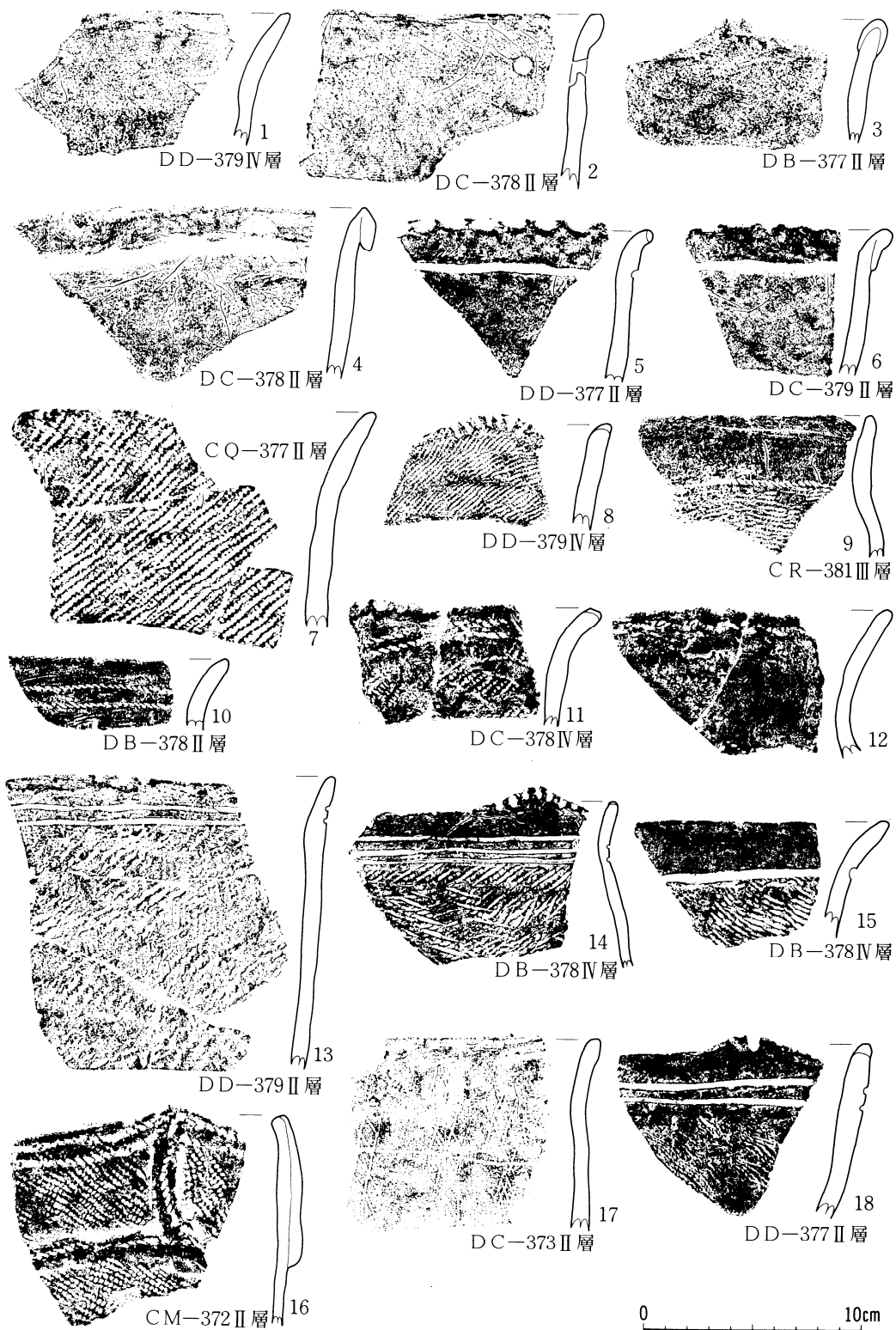
第77图 N-1区遺構外出土N群土器(2)——拓影展開図



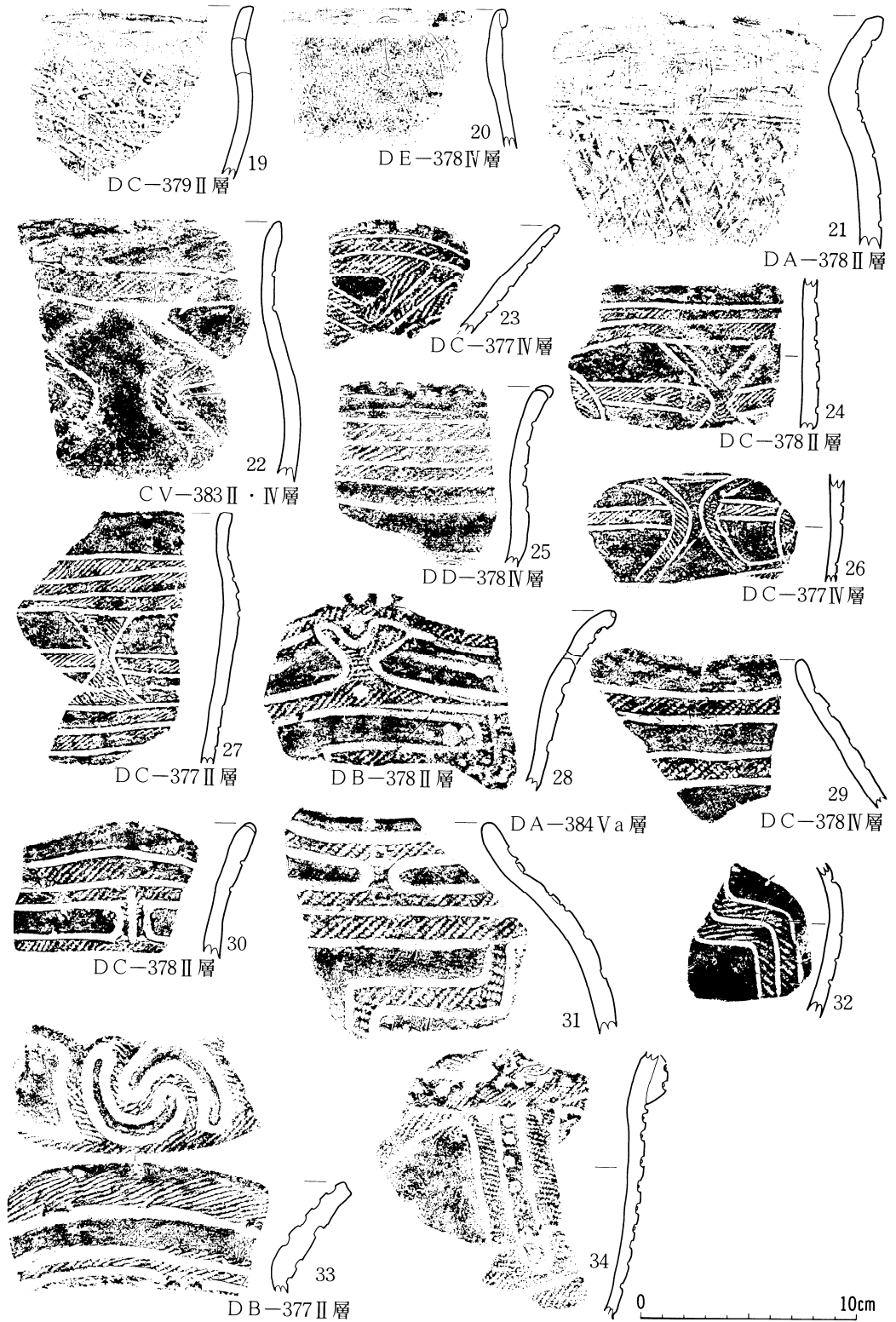
第78图 IV-1区遺構外出土IV群土器(3)——拓影展開図



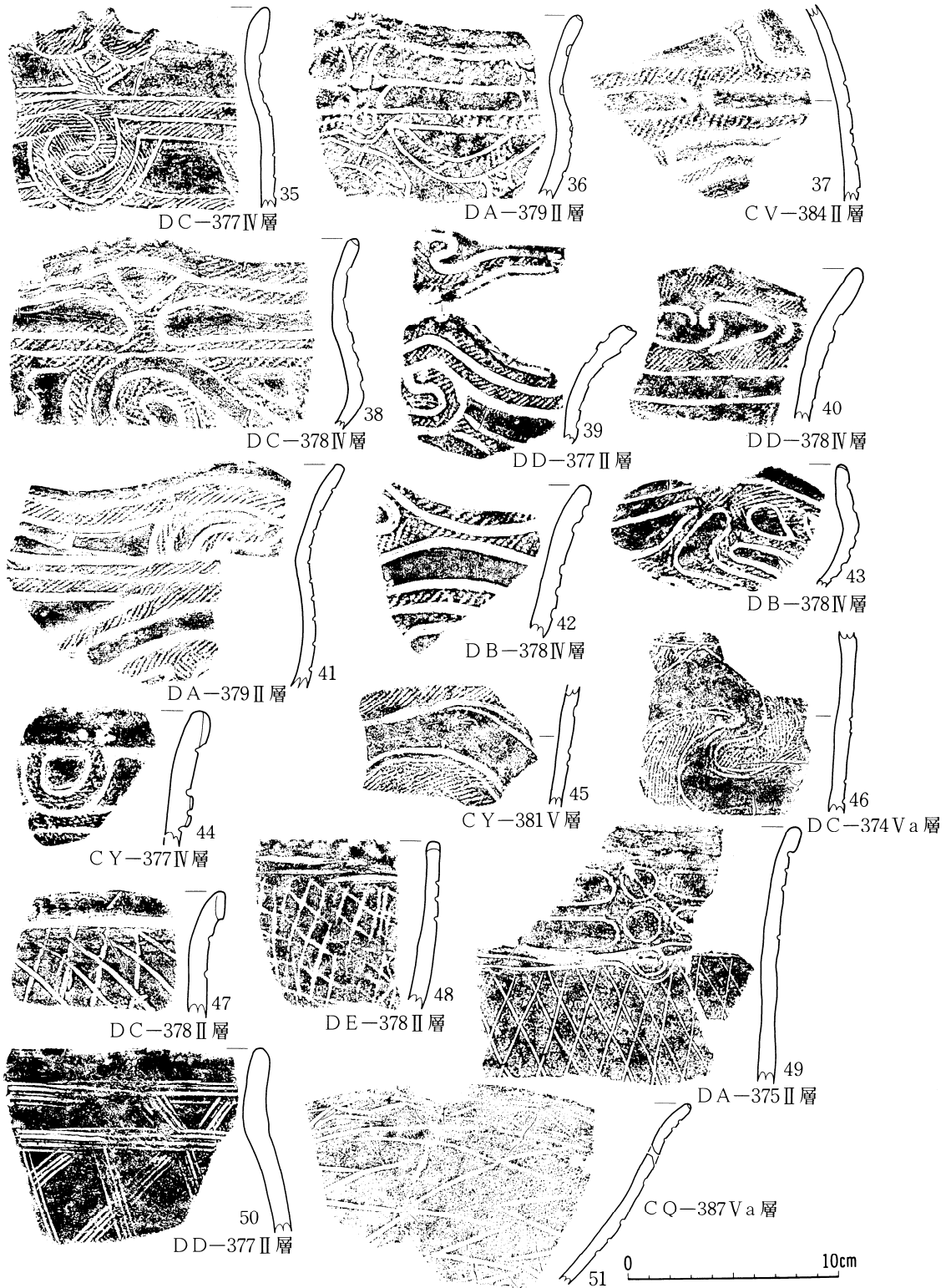
第78图 IV-1区遺構外出土IV群土器(3)——拓影展開図



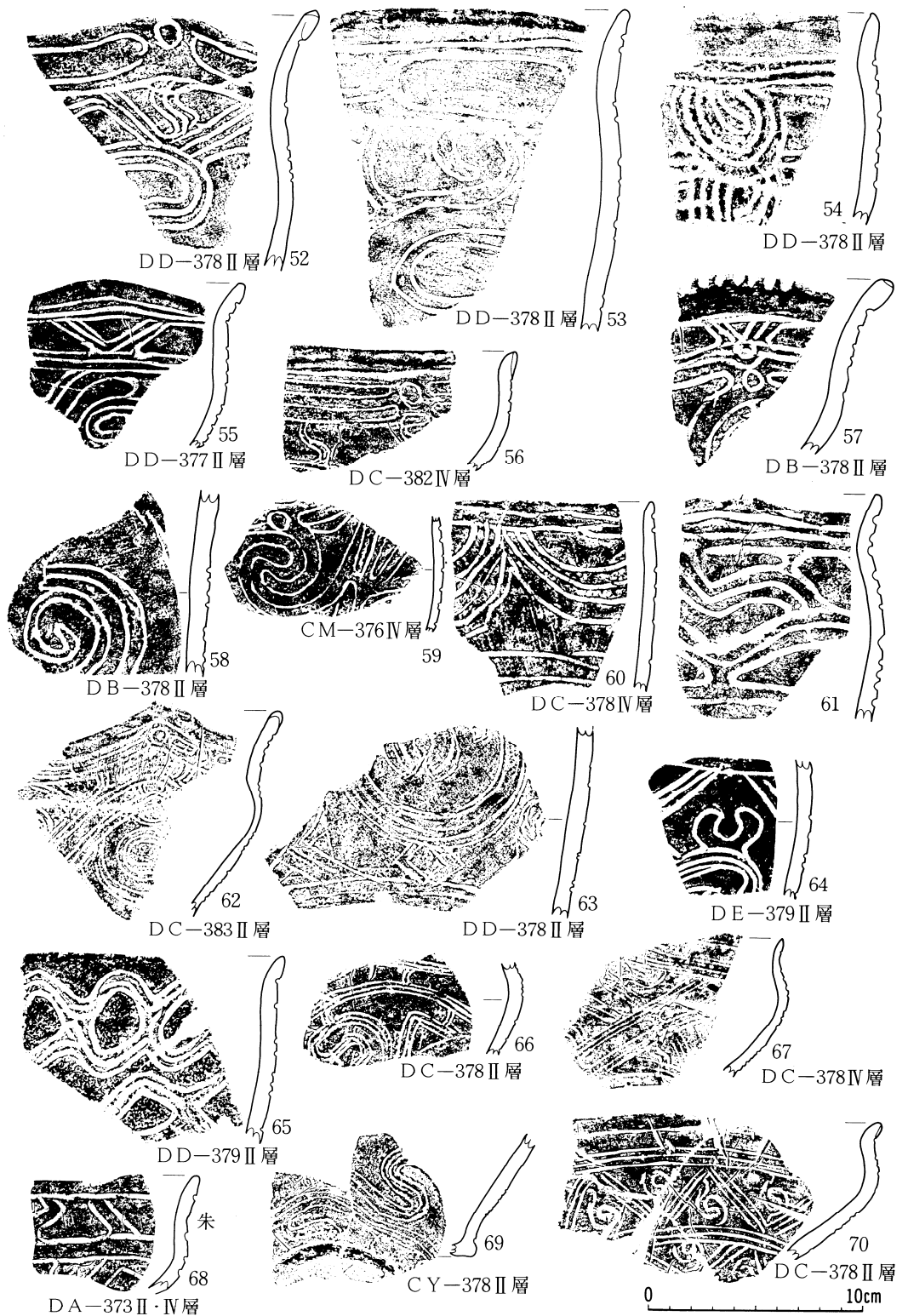
第80圖 第IV群土器拓影圖 (A類1~6、B類7・8、C類9~16、D類17、E類18)



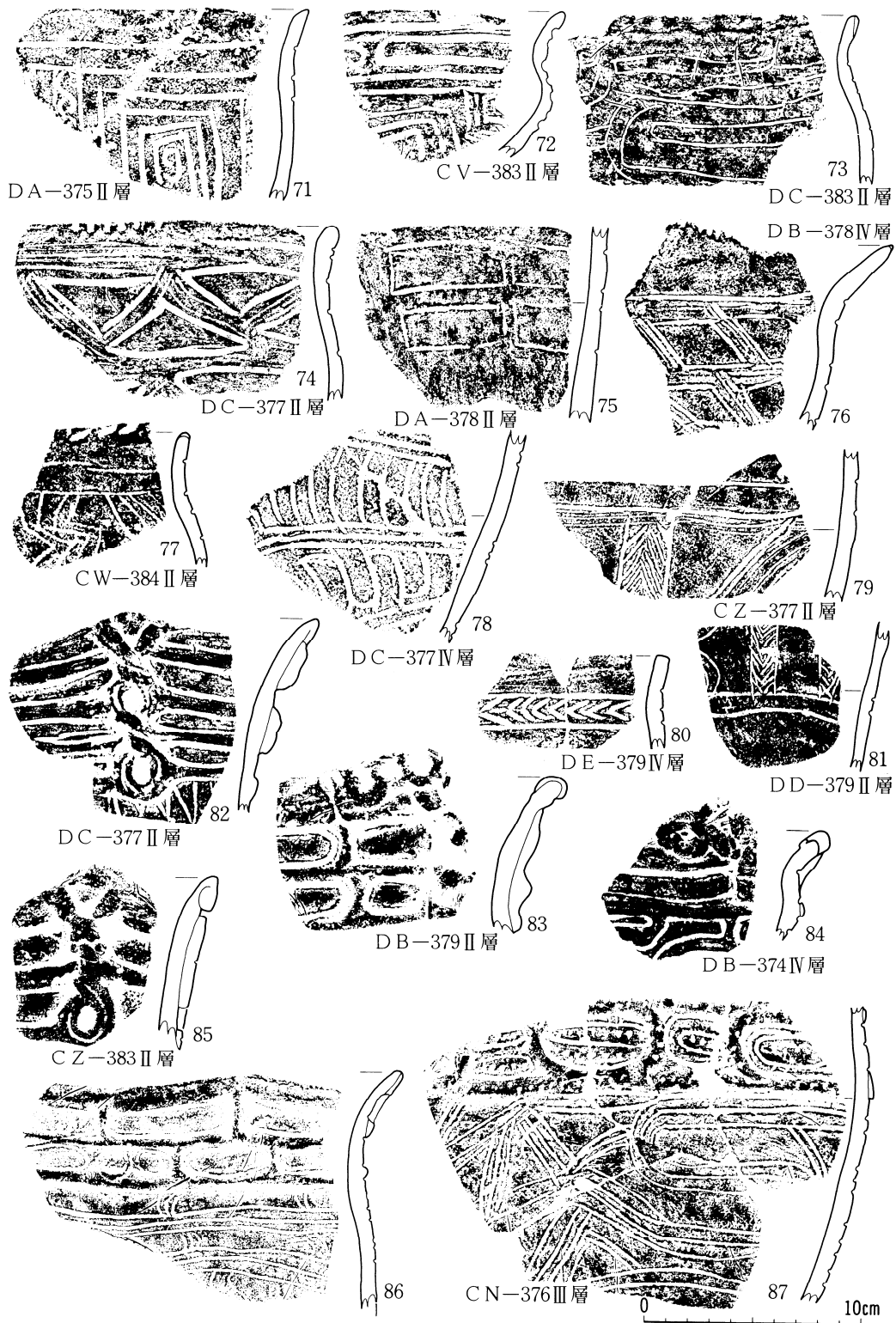
第81图 第IV群土器拓影图 (E類19~21、F類22~34)



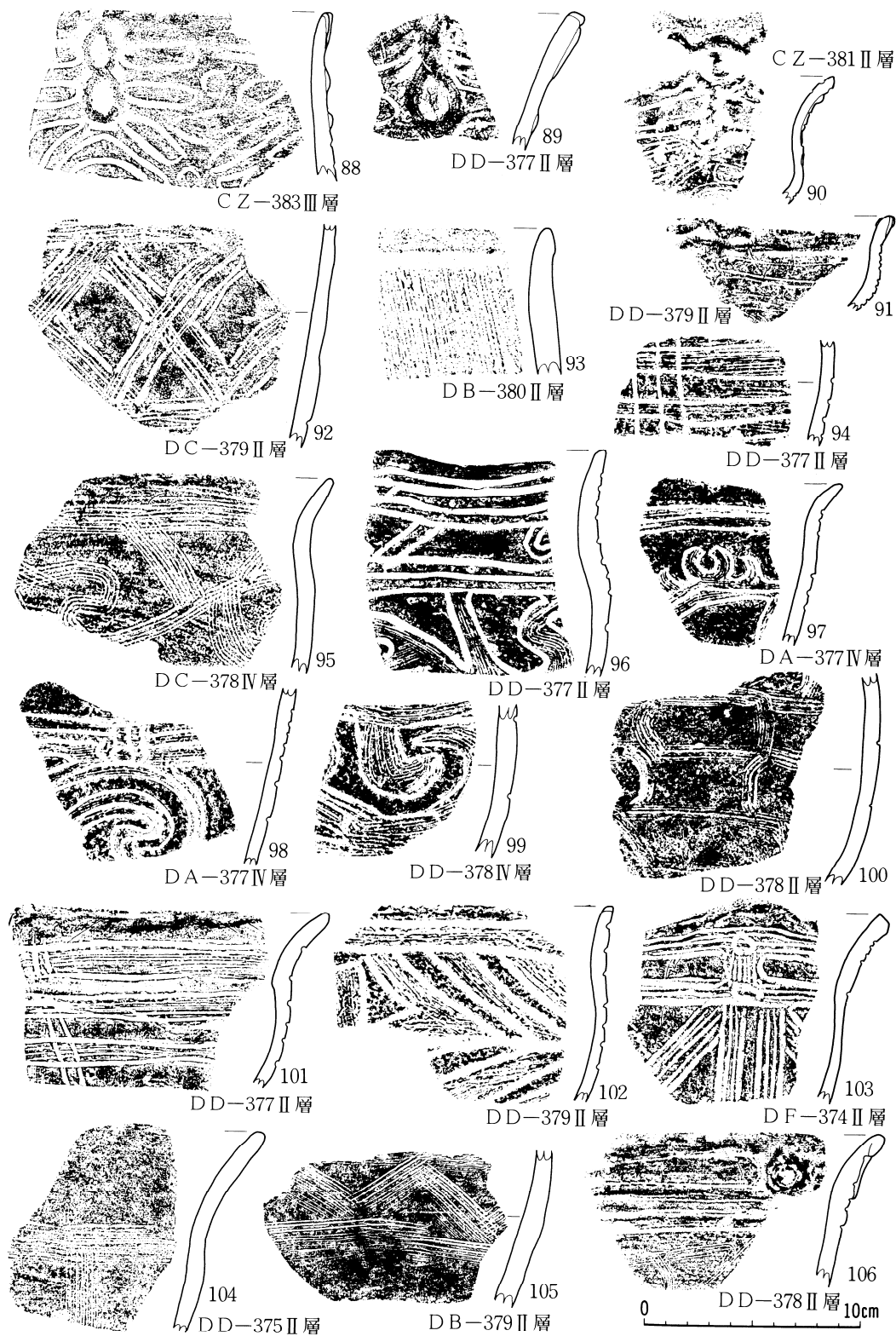
第82図 第Ⅳ群土器拓影図 (F類35~46、G-1類47~51)



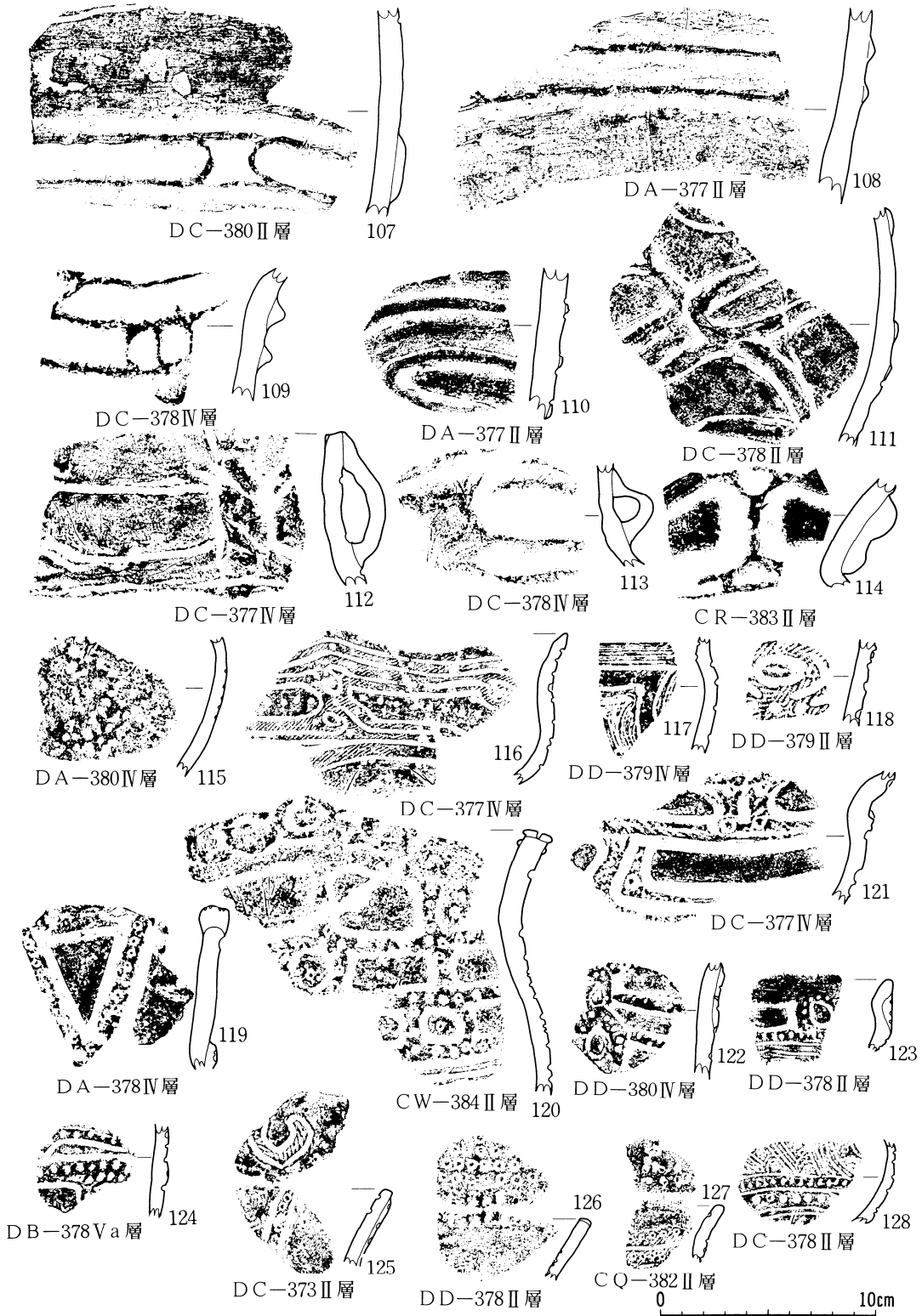
第83圖 第IV群土器拓影圖 (G-1類52~70)



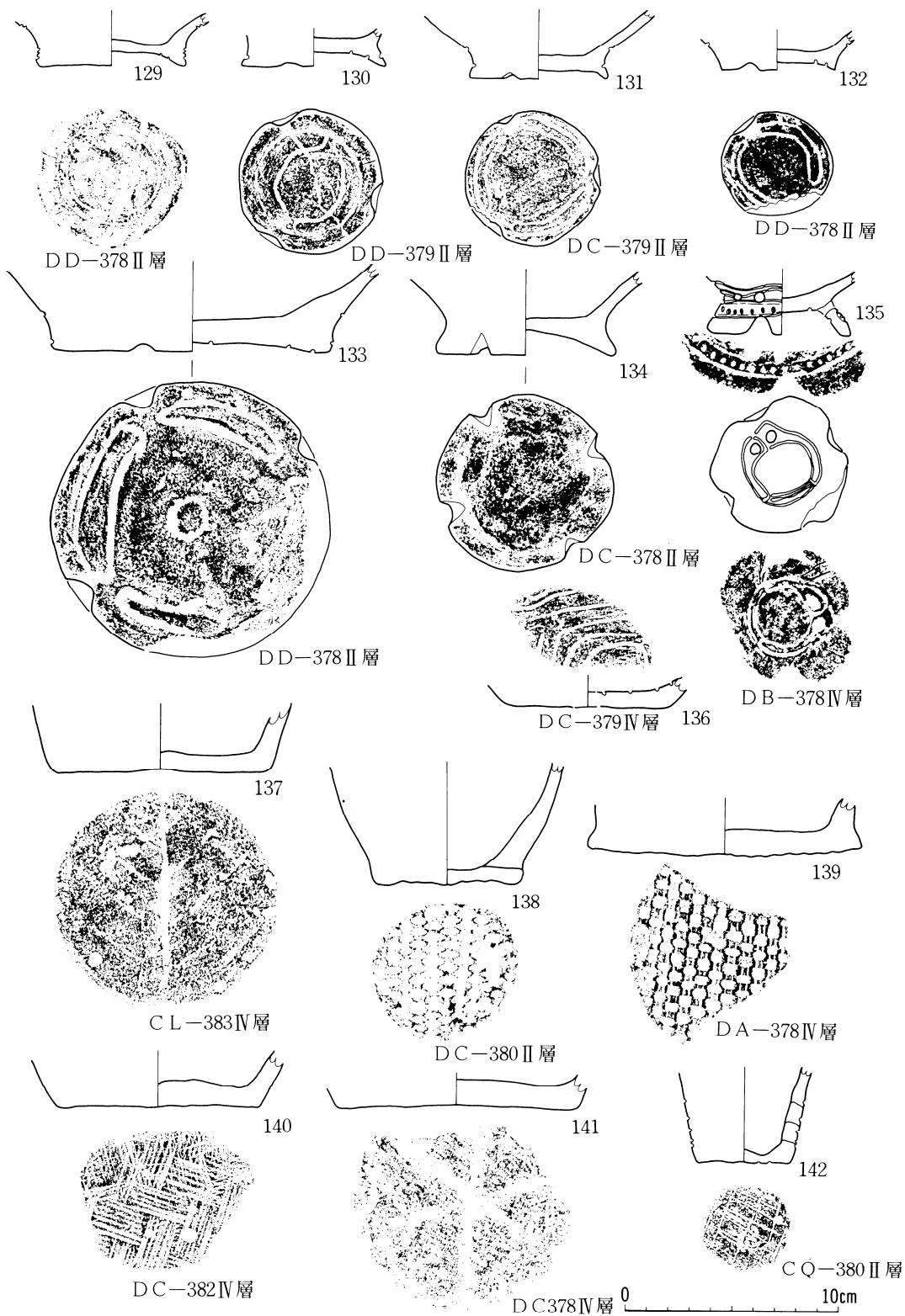
第84图 第IV群土器拓影图 (G-1類7181、G-2類82~87)



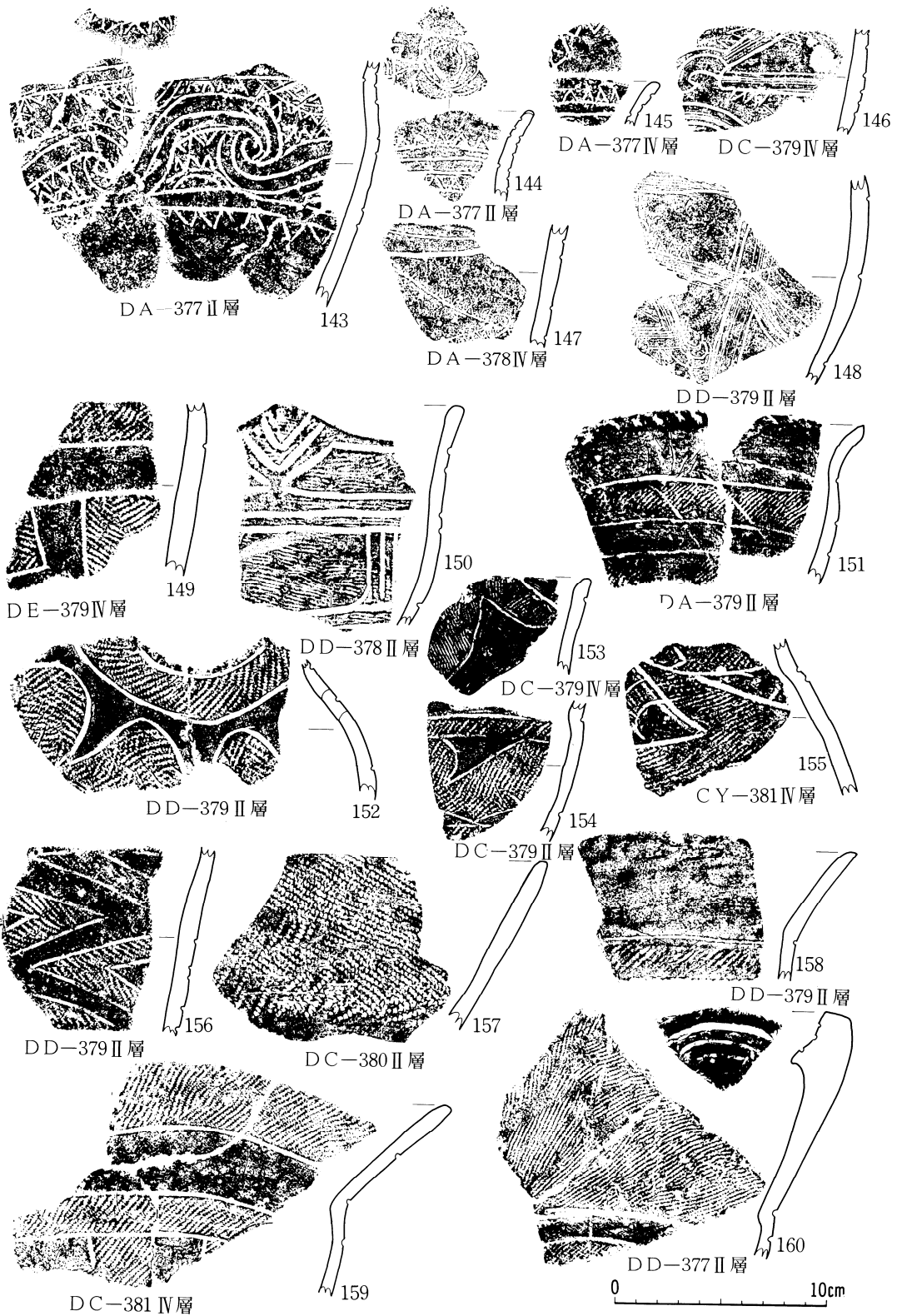
第85圖 第IV群土器拓影圖 (G-2類88~91、H類92~106)



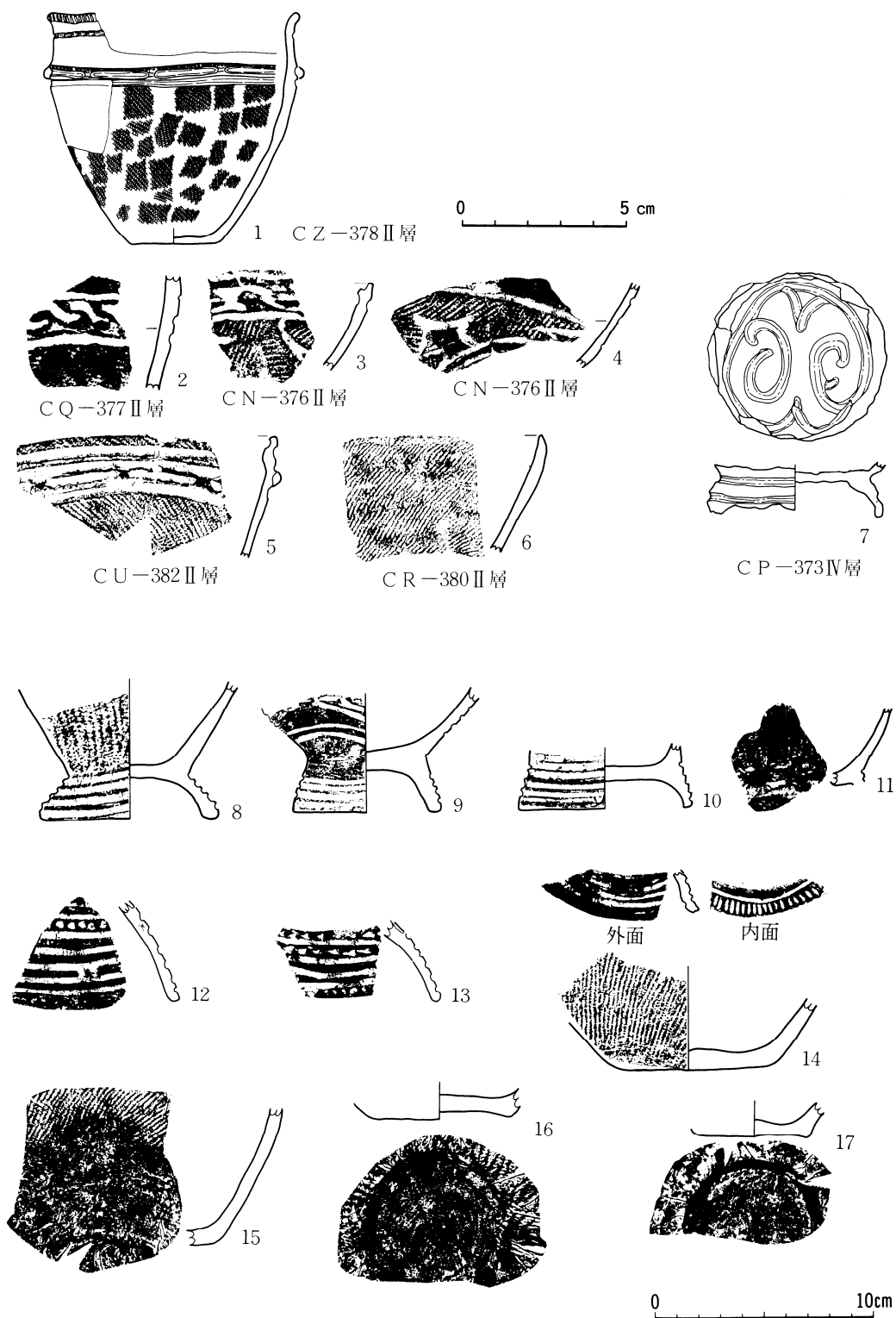
第86图 第IV群土器拓影图 (J類107~114、刺突文115~128)



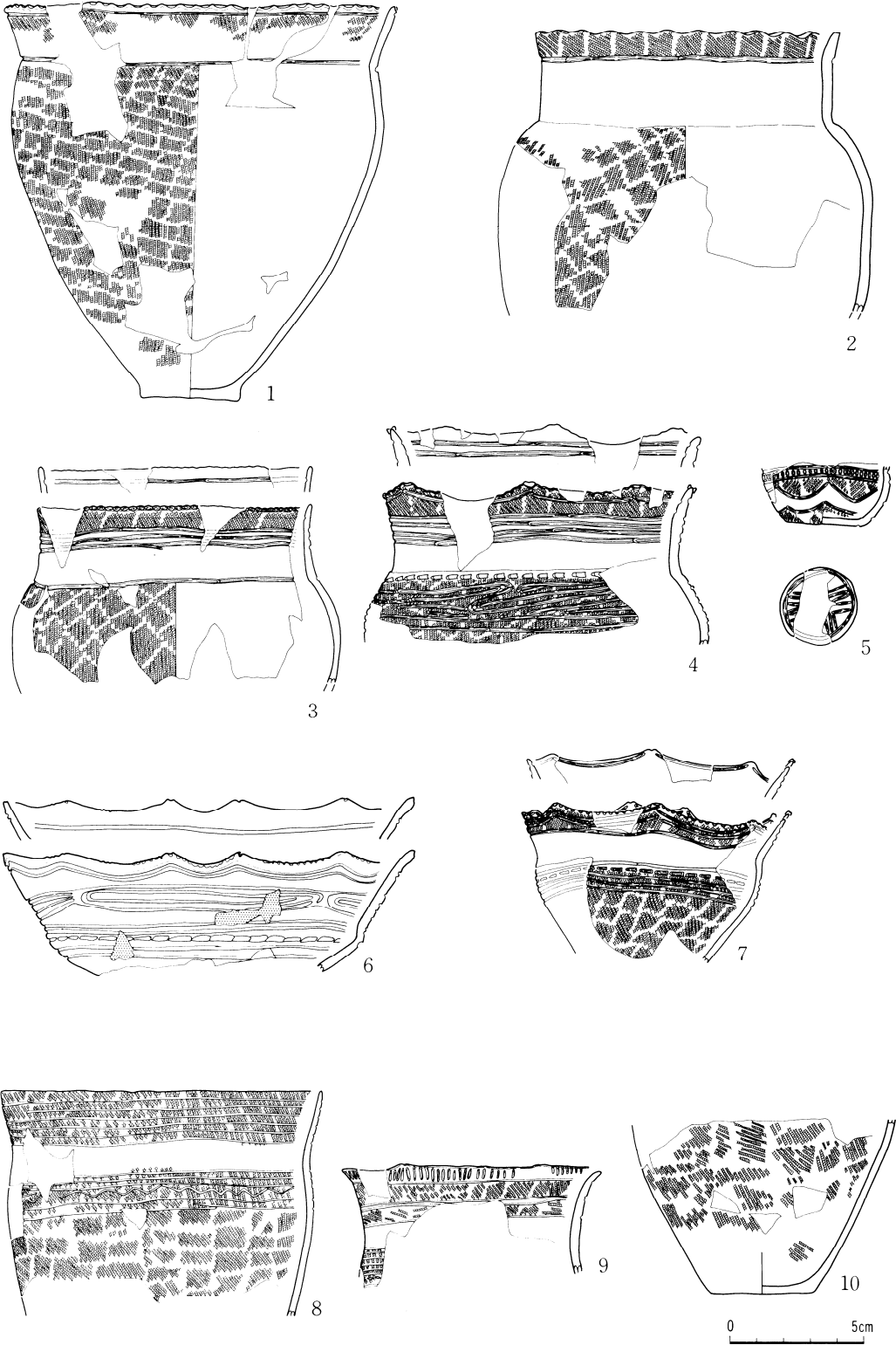
第87图 第IV群土器拓影图 (土器底部129~142)



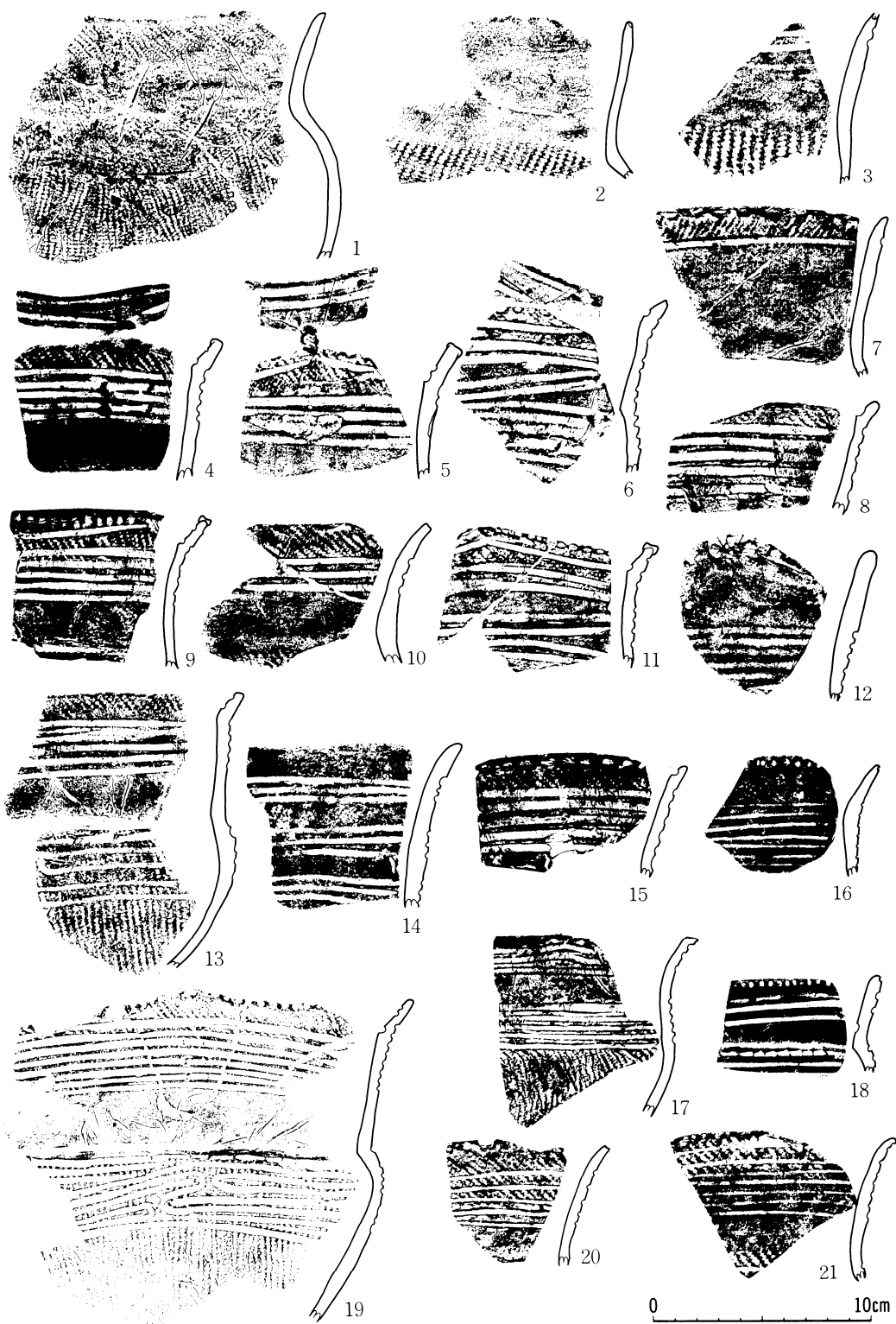
第88図 第IV群土器拓影図(特異な文様、143~148、K類149・150、L類151~160)



第89図 第V群土器(1~7)及び第VI群土器(8~17)



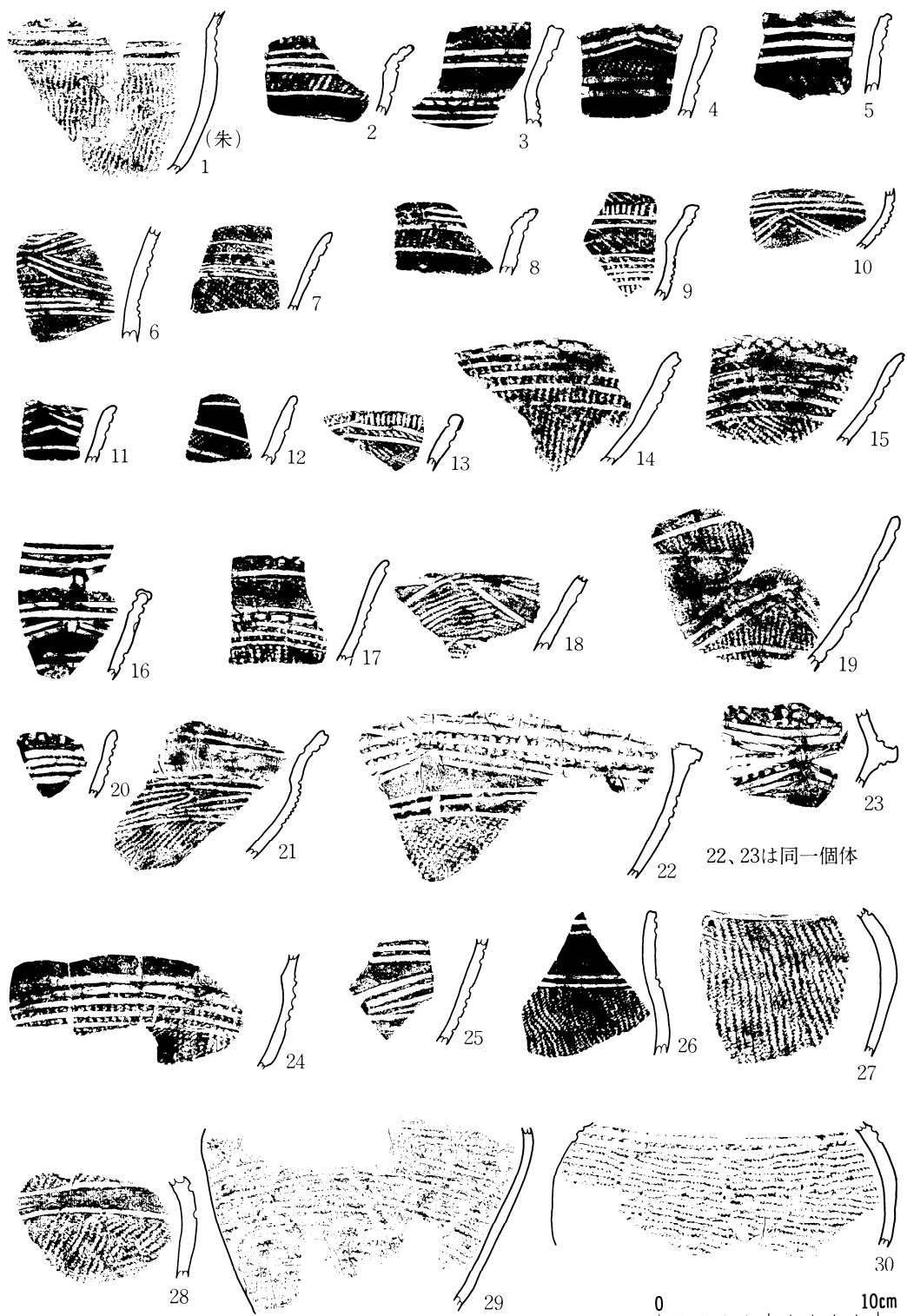
第90图 第VI群土器



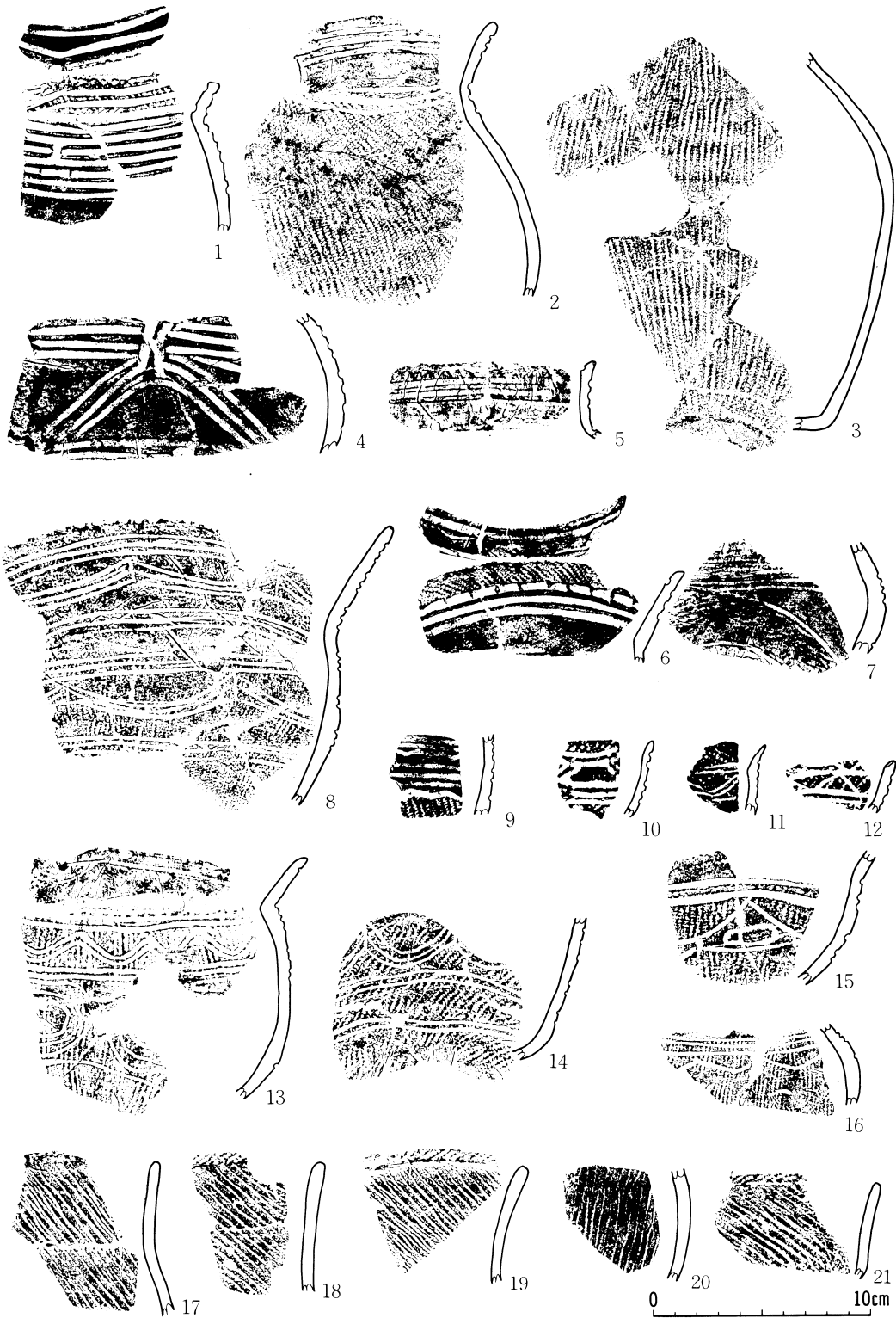
第91图 第VI群土器拓影图(3)



第92图 第VI群土器拓影图(4)



第93図 第VI群土器拓影图 (5)



第94图 第VI群土器拓影图(6)

(2) 石器

第 I 群石器 (剥片石器)

IV—1 区から661点、IV—2 区から19点出土している。ここでは、最も多量に出土したIV—1 区のものを対象とし、記述していくこととする。なお、IV—2 区からは、石鏃3点 (I a 類1、III b 類1、不明1)、石槍1点、石匙2点 (II b 類1、不明1)、不定形石器12点 (II a 類2、II b 類1、II d 類1、II i 類1、III 類4、IV 類3)、ピエス・エスキューユ1点が出土している。A 類 石鏃 (第95図、第96図他)

第1次調査では、尖基鏃と円基鏃の区別が不明瞭であるので、これをそれぞれII a 類、II b 類と細分した。他は第1次調査と同じである。A—IV 類を除くすべての類が出土している。

110点出土した。完形品62点、破損品48点である。また、遺構内からは住居跡5点、土壌20点で、特に第78号土壌からは7点の石鏃が出土している。

A—I 類 有茎鏃66点

a. 平基有茎鏃 37点。完形品24点、破損品13点。(1~28、60、第22図6、第58図5、第59図5)

尖頭部が直線状のもの26点、外湾する(外側へふくらむ)もの11点で、前者が多い。尖頭部と関部との交差する部分は角張るものが多い。調整はていねいで、両面調整(全面)が施されているものが多い。ピッチ痕の見られるもの3点、加熱による焼けはじけの痕跡が見られるものが1点ある。

b. 凹基有茎鏃 6点。完形品4点、破損品2点。(29~31、37、第59図12)

関部が凹んでいること以外、諸特徴はI a 類と同じであるが、尖頭部が内湾するものが1点(第59図12)ある。

c. 凸基有茎鏃 23点。完形品14点、破損品9点。(32~36、38~40、第59図13~19)

尖頭部が直線状のもの6点、外湾するもの17点で、後者が多く、I a 類と逆の様相を呈する。これは尖頭部と関部との交差する部分が、鈍角か、丸みをもっているものが多いことと相関関係にあることを示すものと理解される。また、35・39・41の3点は、両極剥片を素材としているもので、47はその可能性の考えられるものである。

A—II 類 尖・円基鏃 16点

a. 尖基鏃 11点 (44~47、第22図2、第59図1)

b. 円基鏃 5点 (48、第58図16、第60図7)

調整はI 類に比べて粗雑である。また片面加工、縁辺加工のものも少数ある。

A—III 類 無茎鏃 14点

a. 凹基のもの。5点。(50~52、第22図1、第59図9)

基部の挟りが浅く、平基に近いもの2点と、挟りの深いもの3点である。後者は比較的小形である。

b. 平基のもの。9点。(53・54・59、第58図6・17、第59図2)

二等辺三角形に近い形状のもの7点、五角形に近いもの2点である。第59図2は縁辺加工で、やや粗雑な調整であるが、他の4点はていねいに作出されている。

●全般に、長さが3cmで、幅2cm以下の小形のものが多い。特に、I a類では長さが2cm前後で、幅が1～1.5cmのものが多い。重量分布では、0.4～1.3gのものが多く、全体の7割強を占めている。特に、I a類は、28を除くすべてがその範囲に含まれる。石質は珪質頁岩96点（うち、玉ずい質のものは50点）、玉ずい11点、黒よう石3点（第59図3・18・19）である。

●第78号土壌から出土した7点の石鏃（第59図13～19）は、出土土器から弥生式土器に共伴したものである。完形品3点、破損品4点で、I C類に含まれる。尖頭部が長く、茎部が短く、長幅比が大きい（他の石鏃が1.5～2.0の付近に分布するのに対し、完形及び略完形品の5点は2.5～3.0の付近に分布している）という特徴を有し、規格性の強いものとなっている。

B類 石槍（第58図2、第96図61～68）

12点出土した。完形品5点、破損品7点である。基部形態には、尖基のものと円基のものがある。また、薄手のものと厚手のものがあるが、幅広のものは薄手に、細身のものは厚手の傾向があるが、第58図2は、細身であっても、薄手に作出されている。全例、珪質頁岩製である。

C類 石錐（第97図）

26点出土した。完形品18点、破損品8点である。形態差が著しく、第1次調査の分類では、該当しないものもあり、新たに、次のように分類した。

C—I類 明瞭なつまみ状の頭部をもち、錐部の長いもの。第1次調査のI類に相当する。錐部の太さによって、細いもの（a）と太いもの（b）とに細分できる。

I a類は4点出土した（69～72）。すべて破損品であり、うち1点は錐部片（72）である。全体に、入念な調整が施されている。

I b類は4点出土した（73～75）。完形品1点、破損品3点である。I a類に比べて、錐部はおよそ2倍くらい太い。また、小さめの頭部をもち、73は、頭部と錐部とが接合したもので、錐部の現存長は26mmである。75は錐部のみに調整が施され、頭部に施されていない。錐部長は16mmで、比較的短かい。

C—II類 つまみ状の頭部をもち、錐部の著しく短いもの。（76、77）

2点出土し、完形である。76は剥片の一部に調整を加えて錐部を作出したもので、錐部には磨耗痕が見られる。77は両面に残された主要剥離面の観察（とくにリングやフィッシャーの在り方）から、両極石核を素材としている可能性が強い。錐部長は、76が5mm、77が4mmである。

石質は、76が玉ずい質の珪質頁岩、77が珪質頁岩である。

C—Ⅲ類 錐部がしだいに太く広がり、錐部との境が不明瞭なもの。(78～85)

8点出土し、すべて完形である。78・84は剥片の一部(尖った部分)に、簡単な調整を加えて錐部を作出したもので、錐部には磨耗痕が見られる。石質は、珪質頁岩である。

80～83は、小形のもので、次のⅣ類にも似る。長さが2～3.5cmの小さな剥片を素材として、錐部を作出している。79～82は片面、83は両面加工である。79・82は両極石核・剥片を素材としたもので、80・81・83もその可能性が高い。石質は、珪質頁岩が1点、他は玉ずい質の珪質頁岩である。

C—Ⅳ類 棒状のもの(85～91)

8点出土し、すべて完形である。85～88は長さが2～3cm前後の小形のものである。85・86は錐部のみ、87・88は錐部以外の側縁にも調整が加えられている。85・86は両極剥片を素材とし、88にもその可能性がある。89・第58図4も以上に述べた小形のものであるが、全面調整が加えられているものである。ここでは石錐に含めたが、石鎌との類別に問題が残るものである。

90・91はやや大形のもので、全面調整が加えられているものである。錐部には磨耗痕が顕著に見られ、石槍からの転用品と考えられる。

石質は、90・第58図4が珪質頁岩で、他は玉ずい質の珪質頁岩である。

D類 石匙(第97図～第99図他)

第1次調査の分類とほぼ同じであるが、Ⅱ類の縦形石匙を末端の形状により3つに細分した。32点出土し、うち4点は土壌からのものである。

D—Ⅰ類 横形石匙 5点

a. つまみ部が中央に位置するもの。4点。(93・94、第60図11)

すべて完形である。いずれも素材とした剥片の形状を変えないで、刃部やつまみ部を作出しただけの、粗雑なつくりである。94はその中でも、比較的ていねいなつくりである。

b. つまみ部が左右いずれかに片寄るもの。1点。(92)

腹面右側縁に打撃方向が見られるが、その部分の調整は入念で、バルブは除去されている。またつまみ部や刃部の調整も入念である。

D—Ⅱ類 縦形石匙 27点。

a. 先端が平坦か斜行するもの。10点。(95～101、103・107・109・111)

先端が平坦なもの、斜行するもの各5点ずつある。先端部に調整が加えられて、いわゆる刃部を作出しているものが6点ある(95・96・99～101・107)。打面方向は、つまみ部方向に位置しているものが多いが、99は腹面右側縁に見られ、打面をそのまま残している。

b. 先端部が丸みをもつもの。5点。(105・108)

細身のもの2点、幅広のもの3点である。また打面方向がつまみ部に位置するもの2点、先端部に位置するもの3点である。

c. 先端部がしだいに幅狭となり、尖頭状を呈するもの。6点。(110・112、第59図3・7)

先端部が幾分丸みをもつものや、小さな平坦面となるもの、とがるもの等があり、各々2点ずつある。第59図3は先端部をわずかに欠くが、110と同様先端部がとがるものと思われ、小形の部類に属する。112は先端部が両面加工となっている。つまみ部と刃部との関係からいえば、I類との中間(斜形)の形態である。第59図7は幅広のつまみ部をもつもので、背面左側縁に縁辺加工が見られ、右側縁には原石面あるいは風化した部分をそのまま残している。また、背面には広く油脂状の物質が付着し、光沢がある。

以上の石匙の他に、先端部を欠損して、類別できないものが7点ある。113には加熱によってはじけとんだ痕跡が見られる。113は両面加工のものである。116・第60図9は折損面に再調整が加えられている。

石質は、すべて珪質頁岩であるが、そのうち2点は玉ずい質のものである。

E類 石篋(第99図～第101図)

E-I類

20点出土した。うち土壌からは1点の出土である。形状のわかる19点を対象にすると、

形態A 基部が幅狭で、三角形～台形状のもの…16点

B 長形状のもの……………3点

となり、形態Aが優勢である。その中でも、台形状のものが多い。

形態Aには、㊸両面とも全面調整のもの2点(120・128)、㊹背面が全面調整で、腹面が縁辺調整のもの5点(119・121・123・124・126)、㊺背面が全面調整で、腹面は無調整に近いもの2点、㊻背面が縁辺調整で、腹面は無調整に近いもの3点(116～118)となっている。しかし、刃部調整だけをみると、両面調整のものは4点のみ(114・120・126・128)で、他は片面調整である。

つまり、両面加工・半両面加工のものでも、刃部まで両面加工するものは少なく、したがって片刃のものが多いことを示す。

形態Bには、㊼が1点(127)、㊽が1点で、125は㊾背面が全面に近い調整で、腹面は刃部のみの調整となっている。

刃部角についてみると、45°～80°に分布し、65°付近に多い。

E-II類

つまみ状の頭部、あるいは柄と考えられる部分(以下、基部と呼ぶ)を有する小形の石器である。22点出土し、そのうち土壌内出土のものは1点である。

〈形態〉体部が楕円形か円形に近い形状のものと、台形か方形に近い形状のものとに大別される。前者は円刃（弧刃）となり、後者は直刃となる。また刃部には、両面加工のもの（両刃）と片面加工のもの（片刃）がある。以上のことから、次の4タイプに細分できる。

- a 1. 円刃で両刃のもの。9点。(133～139)
- a 2. 円刃で片刃のもの。6点。(129～132)
- b 1. 直刃で両刃のもの。6点。(140～144、第59図6)
- b 2. 直刃で片刃のもの。0点。

(このうち、b 2類は、第1次調査でも出土していないものの、第3次調査の分が未確認であるため、分類項目に入れておく)

なお、129はE-II類の中で最も大きく、いわゆる横形石匙に近い（というよりは、横形石匙か？）もので、130は、刃部が斜めに作出されているものである。また、基部のみの破片が1点ある。

〈調整〉全般に入念な調整が施されている。a 2類は片面加工のものであるが、調整が全面に施されているものと、主要剥離面や原石面を残しているものがある。裏面は、平坦か、若干湾曲しており、基部のみに調整が施されているもの、刃部にも部分的に施されているもの、全く調整が施されないもの等がある。

a 1類及びb 1類は両面加工のものであるが、大部分のものは、両面とも全面調整が施され、主要剥離面を残しているものは少ない。

基部の調整は、石匙のようにノッチ状に施されるものと、やや尖頭状に作出されているものがあり、前者が多い。

刃部の調整は、フルーティング様の細長い平行した剥離が施されているものが一般的である。

a 2類は、急斜度調整が施されている。

〈刃部角〉40°～70°に分布し、60°のものが多い。

〈大きさ・重量〉大部分のものは、長さ2～4cm、幅1.5～3cm、厚さ0.5～1.0cm前後に分布している。重量分布では、10g以内に含まれ、特に2～4gに多い。

〈その他〉144は両面に光沢痕が見られた。138は焼けはじけの痕跡が両面に見られた。

〈石質〉玉ずいが1点、珪質頁岩が9点、玉ずい質の珪質頁岩が12点である。

F類 不定形石器（第101図～第106図）

第1次調査では、A～E類以外の不整な剥片石器を「F類 スクレイパー」として分類している。また、A～G類に該当しない石器を「H類 異形石器」としている。ここでは、両者を一括して、不定形石器として取り扱うことにし、新たに細分することにした。また、整理の段階で、彫器と思われる石器や、両極技法によって生産された石核・剥片と共にピエス・エスキ

ユーユ（楔形石器）の存在することを知った。そこで、彫器と思われる石器は不定形石器の中に含めてその中で細分し、ピエス・エスキューユをH類として報告することにした。

F—I類 彫器（145～149、第58図12）

彫器としての概念及び認定基準は、高橋文夫氏（1982）^{註1}によるところが大きい。不整な剥片の一部に、使用痕や加工痕と思われる微細な剥離痕や光沢痕が観察されるもので、9点出土した。折断面を有するものは3点で、折断面と剥離面とが交差する部分を利用している。また、側縁の一部に刃こぼれやリタッチが施されているものもあり、いわゆるR—フレイクやU—フレイクの転用例あるいは複合形態としての特徴を合わせもっている。石質は、すべて珪質頁岩である。

F—III類 連続した調整が加えられているもので、いわゆるスクレイパー類。調整される部位によって、次の9種類に細分する。

a. 縦長剥片の側縁から末端にかけて調整が加えられているもの。19点。（150～158）

片面の縁辺のみに調整が加えられている縁部調整のもの（13点）や、両面の刃部のみに調整が加えられている刃部両面調整のもの（5点）、背面が片面全面調整で、腹面が縁部調整のもの（2点）がある。150は背面の左側縁下部から右側縁上部にかけて急斜度調整が加えられているもので、腹面左側縁にも調整が加えられている。156は背面の一部と腹面の全周に縁部調整のもの、第58図15は刃部両面加工のもの、151・152・157は片面に縁部調整が加えられているものである。また、両極石核や剥片を素材としているものが3点（153・154・157）あり、154は片面に縁部調整が加えられている。157・第58図15は剥離面やバルブの状況から両極石核や剥片を素材としている可能性が考えられる。

石質は、珪質頁岩が14点、玉ずい質の珪質頁岩が5点である。

b. 縦長剥片の側縁に調整が加えられているもの。20点。（159～161・163～168）

両側縁に調整が加えられているもの（7点）と、片側縁にのみ調整が加えられているもの（13点）がある。

両側縁に調整が加えられているもののうち、168は片面全面調整のもので、他は縁辺部のみを加工している。

片側縁に調整が加えられるものは、刃部両面調整のものが1点で、他は片縁調整のものである。160・161・165・167は右側縁に急斜度調整、164は緩斜度調整が加えられている。160・161は両極石核を素材としたものである。また、164は上下端にダメージ痕が見られ、両極剥片の可能性が考えられる。

（この他にIV—2区出土の232は、背面右側縁に、急斜度調整によるノッチが加えられていて、II b類とII h類の要素を合わせもつものである。）

石質は、珪質頁岩が13点、玉ずい質の珪質頁岩が7点である。

c. 縦長剥片の末端に調整が加えられているもの。7点。(162・169～171・173)

片面縁部調整が加えられている。急斜度調整のもの5点、緩斜度調整のもの2点である。170の刃部腹面には光沢痕が見られる。

石質は、珪質頁岩が6点、玉ずい質の珪質頁岩が1点である。

d. 横長剥片を素材とするもの。15点。(172・174～177)

刃部両面調整のもの4点、片面縁部調整11点である。厚みのある剥片を素材としているものが多いため、急斜度調整のものが多い。横長剥片の末端に調整するものが11点で、175は両極剥片を素材としているものと思われ、側縁から末端にかけて調整がみられる。

石質は、珪質頁岩が11点、玉ずい質の珪質頁岩が3点、玉ずいが1点である。

e. 尖頭状のもの。14点。(178～186、第58図7)

大部分のものは縦長剥片を素材とし、剥片の末端を尖頭状に調整を施している。剥片の基端を尖頭状に調整を施しているものは1点である。186は簡単な縁部調整のもの、179は片面の全面を調整しているもの、181は両面とも入念な縁部調整のものである。184・185・第58図7は、両極石核を素材としているもので、184・185は尖刃搔器であり、第58図7は刺突的機能をもつものと思われる。また180も刺突的機能をもつが、その先端部には磨耗痕が見られることから、石錐として転用された可能性が考えられる。

石質は珪質頁岩が9点、玉ずい質の珪質頁岩が5点である。

f. 半円状のもの。8点。(187・188・194、第22図5、第58図14、第60図1)

切断や折損の結果として、半円形を呈するものを一括したが、a～e類に含まれると思われる破損品については除外し、それぞれに含めている。

187・第22図5、第58図14は切断技法によるものと思われ、第58図14は折断面の両端に、第22図5は折断面の全面に調整が施されている。また、これら3点の石器は、両極石核・剥片を素材としている可能性が強い。

石質は、珪質頁岩が6点、玉ずい質の珪質頁岩が2点である。

g. 両面調整が施された(楕)円形のもの。7点。(189・191・192)

2～4cm前後の小形の石器で、両面とも全面調整が施されているものである。楕円形状を呈するものには、一端が幅狭となるものがあって、石鏃(円基)に似るものがある(191・192)。石質は、すべて玉ずい質の珪質頁岩である。

h. 剥片の一部に、ノッチ状の調整が施されているもの。4点。(194)

石質は、すべて珪質頁岩である。

i. a～h類の破損品及び定形石器の破損品を一括した。44点。(195～204)

この中には、折断又は折損して、三角形・四角形を呈する形状のものがあり、いわゆる折断

調整石器と思われるものも含んでいる（計測表の備考欄に折と記載、200～204）。折断調整石器と思われるものは15点出土し、三角形に近い形状を呈するものが多い。折断（折損）は調整が施された後に行われ、折断（折損）面に調整は施されない。石質は、すべて珪質頁岩である。

また、定形石器の破損品と考えられるものは17点ある（備考欄に想定される器種名を記載、195～199）。しかし、残存部の形状・調整痕から、複数の器種が想定されるものや、a～h類の破損品とも考えられるものがあって、その認定は困難である。

石質は、珪質頁岩が22点、玉ずい質の珪質頁岩が7点である。

FⅢ類 定形的な刃部をもたないものや連続しない刃部調整のもの及び連続するが2mm前後の極浅形調整が見られるものなどを一括する。

96点出土した（205～229）。縦長剥片を素材とするものが多く、約7割を占める。また、両極石核・剥片を素材とするものは25点で、側縁を調整するものが多い。

2mm前後の極浅形調整が見られるものは30点で、そのうちの10点は、両極石核・剥片を素材としている。

石質は、珪質頁岩が63点、玉ずい質の珪質頁岩が33点である。

FⅣ類 使用痕の見られる剥片を一括する。57点の出土である（233～235）。縦長剥片を素材とするものは約7割を占める。また、両極石核・剥片を素材としているものは2点である。

石質は、珪質頁岩が49点、玉ずい質の珪質頁岩が8点である。

G類 靴形石筥（第99図115）

北海道の続縄文時代に特有の石器で、1点のみの出土である。千代 肇氏の分類のA類に相当する。両面に見られる主要剥離面は、比較的大きなもので、本石器を製作する前段階において、薄手のものとなるように意図されて、調整が施されたものと考えられる。縁辺の調整は、小さな平行細部調整が、入念に施されている。長さ9.9cm、幅5.0cm、厚さ0.7cm、重さ48.7gで、刃部角は60°（平均）である。石質は珪質頁岩である。

H類 ピエス・エスキューユ（第106図、第107図他）

「向かい合った二辺ないしは四辺の縁辺部に、階段状の剥離痕・つぶれが認められるもの」（岡村：1976, 1983）^{注2}をピエス・エスキューユとした。138点出土した。大部分のものは両極剥離痕と2個一対の刃部をもつが、4個二対の刃部をもつものや、一边が平坦面をもつものもある。一边が平坦面をもつものは、平坦面の縁部に、階段状の剥離痕やつぶれ（ダメージ痕）が見られ、対辺の刃部の状況が他のものと同じであることから、本石器に含めたものである。また、ピエス・エスキューユが両極技法で製作され、両極技法と同じような状況下で使用されたものとする、上記の分類基準では両極石核との区別の問題が残り、ここでは多分にそれらを含んでいる可能性が高い。

以上のことをふまえて、原石面の残存状況からⅠ～Ⅳ類に、剥離痕の観察から a・b 種に分類する。

H—Ⅰ類 原石面を広く残すもの a 種 上下方向の剥離痕のみのもの

Ⅱ類 原石面を両側縁に残すもの b 種 a 種以外のもの

Ⅲ類 原石面を一側縁に残すもの

Ⅳ類 全面、剥離されているもの

H—Ⅰ類 23点

原石面を広く残しているため、石核に最も近い。

I a 類 13点 (236・238～242、第58図13)

刃部の二辺が、両面とも剥離痕で構成されるもの（以下、両面剥離痕と呼ぶ）が4点、一辺が両面剥離痕による刃部で、対辺が原石面と剥離痕とで構成されるもの（以下、片面剥離痕と呼ぶ）が9点である。しかし、対辺が片面剥離痕によるものは、刃部としては疑わしい。(238・241) は細長い剥離痕が上下端に走って見られる。

I b 類 10点 (237・240)

上下方向のほかに、左右方向の打撃痕・剥離痕が見られるものである。刃部が二辺とも両面剥離痕のものは少ない。一辺が両面剥離痕による刃部で、対辺が片面剥離痕のものや平坦（原石面）なもの、三辺が片面剥離痕のものがある。(237) は、細部調整が施され、R—フレイク（F—Ⅲ類）とも考えられる。

H—Ⅱ類 33点

I 類より剥離が進行したもので、刃部は二辺とも両面剥離痕によるものが多い。また、I 類が全体に塊状のものが多いのに対し、Ⅱ類は全体に薄手で、剥離面は1～2面程度の平板的なものが多い。

Ⅱ a 類 24点 (243～249・251、第60図3・6・10)

大部分のものが、二辺とも両面剥離痕による刃部をもつ。247は対辺が平坦（剥離面）なものである。また、この一辺には、細部調整が施されている。

Ⅱ b 類 9点 (252～255)

253は、対辺が平坦（原石面）で、左側縁に細部調整が施されている。

H—Ⅲ類 38点

全般に、Ⅱ類のものに似ており、剥離痕は平板的である。また、切断面（裁断面）の見られるものもある。

Ⅲ a 類 32点 (250・256～258、第22図4、第59図10)

第22図4は、一辺がやや平坦である。258は一辺に細部調整が施されている。第59図10は破

片と思われ、角柱状である。

Ⅲb類 6点(260・261)

260・261には細部調整が施されている。

H-Ⅳ類 44点

原石面が痕跡として残っているものはここに含めた。両極石核以外に、調整剥片を素材としているものが7点ある。また、切断面や縦走する剥離痕の見られるものが、Ⅰ～Ⅲ類に比べて多い。

Ⅳa類 30点(262～266、60図5・8)

表面には、縦走する剥離痕が数面見られ、裏面は平坦な剥離痕であるものが多い。264・265は小形のもので、両側縁に切断面の見られるものである。262・第60図5は破損品と思われる。

Ⅳb類 14点(267～270)

調整剥片を素材としているものが、7点ある。271はラウンド・スクレイパー様のものを素材としているもので、267は一边が細部調整が施され、他辺は平坦面(剥離面)をもつものである。270は側縁の一部に細部調整が施され、R-フレイク(F-Ⅲ類)とも考えられる。

分類基準から、剥離作業はおおむねⅠ類からⅣ類に進行している。重量分布を見ると、Ⅰ類からⅣ類につれて、やや軽量となる傾向が見られる。全体として、2～4g前後のものが6割強を占め、10g以下では9割を占めている。

大きさは、長さ・幅ともに3cm以下のものが多く、大きくとも、5cm前後に含まれる。

石質は、玉ずい質の珪質頁岩が87点、珪質頁岩47点、玉ずい3点であり、特に玉ずい質の珪質頁岩が多数を占めている。

(畠山)

注1. 高橋文夫; 1982「縄文時代の彫器」『紀要Ⅱ』(財)岩手県埋蔵文化財センター。

注2. 岡村道雄; 1976「ピエス・エスキューユについて」『東北考古学の諸問題』東北考古学会編 東山版
寧楽社

1983「ピエス・エスキューユ、楔形石器」『縄文文化の研究7』一道具と技術一 雄山閣

第Ⅱ群石器

Ⅰ類 磨製石斧

99点出土した。遺構内出土4点(うち欠損品4点)・遺構外出土91点(うち欠損品77点)・Ⅰ-2区出土4点(うち欠損品2点)である。文中の番号は整理番号である。

第1次調査の報告では、残存部位についての分類が主体であるために斧自体の性格付けに不明な点が多い。このため新たに分類した。また欠損品については表中に残存部位・欠失部位を記載した。本文中の斧番号は整理番号である。

Ⅰ-Ⅰ類 擦切磨製石斧 擦切痕の残存するものだけをこの類とした。

Ⅱ類 局部磨製石斧

Ⅲ類 その他

I類 6点出土した。68は8号住居跡出土のものであり刃部から器体中央部まで残存している。13はIV—2区出土で、頭頂部と片面の鑄部分に敲打痕を残す。表裏面の各々3分の1ほどと1側縁に擦切痕が認められる。3は小型の石斧で、刃部端に微小な刃こぼれと、細い擦痕が認められる。40は基部で、折断面の端部に敲打痕が認められる。敲き石に転用したものか、再加工途中のものかは不明である。97は刃部片で、裏面が中央側から破損しているが、刃部先端は両面とも残存している。99は刃部片である。

擦切痕の残存しないものをこの類から除いたが、本来、擦切技法に因っても、研磨等で、その痕跡が磨消しているものもある。特に小型のものや緑色凝灰岩及び輝線凝灰岩製のものは、この類の可能性が高い。

Ⅱ類 1点出土した。扁平な長楕円形で、刃部と側縁部の一部を研磨によって作出している。頭頂部を除く全面に擦痕が認められるが、ほとんど自然面として残存しているため、この類とした。刃部端に微小な刃こぼれが認められる。(斧番号62)

Ⅲ類 完形品及び器体の全体像を把握できるものを中心に、器体整形の特徴により細分した。

A—全面研磨のもので剥離・敲打の痕跡を完全に磨消しているもの

B—全面研磨のもので剥離・敲打の痕跡を磨消し切っていないもの

C—全面研磨に至っていないもの

D—欠損品で細分できないもの

なお、器体の基部側が半分以上残存しているもので、全面研磨のものは、A類とした。これは、通常、刃部側の整形が基部側より丹念に行われていることによる。

A類 形状的には、台形状を呈するもの（定角式に類似）と器体中央付近に最大幅をもつ、曲線的なもの（乳棒状とは異なる）がある。また、側縁が平坦面を構成するものと、面として形成されていないものが認められる。

B類 研磨の省力化によるものと思われるが、全体にざらつく程度のもものと、面単位で研磨の度合の異なるもの・両面の研磨に比して側縁の研磨が雑なものなどがある。

9は、片面・両側縁が非常に良く研磨されているのに対して、片面と頭頂部は、軽い研磨が成されているだけである。93は、両側面の敲打（潰し整形）が非常に雑であることから研磨が及んでいない部分が認められる。23・55は、刃部だけが丹念に研磨されている。

C類 研磨が全面に及んでいないものと、研磨後に敲打を行っているものがある。

20は、刃部片の再加工品で、研磨された刃部を除いて器体部分を敲打により整形したものである。85は、片面全面と他面の刃部寄りの一部及び両側面の3分の2ほどを敲打によって整形している。敲打痕は研磨より新しいものである。この斧は刃部が鋭利であるのに対して刃部角

が鈍角であることから、刃部先端の欠損後に再加工したものと思われる。

D類 刃部片の数量に対し、基部片の数量が多い傾向を示す。また、刃部片は器体の2分の1以上残存するものがほとんどで、基部端だけ欠失しているものが多い。これに対して、基部片は器体の3分の1以下のものが非常に多い。これは、器体の破損がおおむね、この部位で起ったことを示唆するものであるが、欠損品全体の出現率の中で、基部片が多く認められることが注目される。105は基部片であり、炭化物が付着している。

接合 第1次調査の刃部片と51・29と50・11と12が接合した。前2者は、約60m離れたものが接合したもので、ともに再加工及び転用はされていない。

使用痕跡 18・23・86・109は刃部先端が潰れている。75は小さいささくれ状の痕跡を有する。刃部の両側端に小さい剥離を有するものが多い。

基部端に敲打痕を有するものが16点ある。敲打により小剥離を有するものが多く、ほとんどが頭頂部のやや横に痕跡が認められる。頭頂部中央に敲打痕が認められるものは103の1点だけである。

折損 器体の2分の1から基部寄りの3分の2程度で折損しているものが多い。折断面は、長軸・短軸上ともに斜めのものが多い。

再利用・転用20・85が再加工して使用されている。23・59は基部端に剥離と敲打の痕跡を有する。ともに刃部を有していることから基部の再加工と思われる。59は縦割れをしている。

転用しているものは、15・19・31・33・40・56・67・84・93の9点であり、31が最も使用頻度が高い。33・40・84は、折損端に敲打及び擦りの痕跡を有するもので、再加工の可能性も考えられる。19は折断面を刃部側から剥離し、刃部を作出している。礫器的な使用も考えられる。15・56・67・93はⅠ-II類（敲き石）に転用している。いずれも折損による剥離の他に19の剥離のような痕跡を有する。また、敲打による小剥離も考えられる。

J類 打製石斧

5点出土した。すべて遺構外出土である。完形品4点・欠損品1点である。

J-I類 片面加工

II類 両面加工

I類 32・63・74の3点である。円礫を打ち欠いて作成している。いずれも片面は自然面である。32は基部端が欠失している。63はチャートを素材としており、自然面側に使用による剥離が観察される。74は刃部欠損後に再加工した可能性も考えられる。

II類 72・73の2点である。72は、つるはし状の形態をしており、器体中央が分厚く、片面に若干の自然面を残す。両端ともに刃部の可能性が考えられる。73は、基部破片で、両面に自然面を残し、偏平な礫を素材としたものと考えられる。

石質は32・74が輝緑岩・63がチャート・72が頁岩・73が砂岩であり、磨製石斧が閃緑岩を中心素材としているのに対し、1点も出土しないことが注目される。

環状石斧

石器分類中に項目がないため、第Ⅱ群石器の末項に記載する。

1点の出土である。C O—374グリッドからの出土で欠損品である。輝緑岩を素材としており、ほぼ全面研磨によると思われる。孔部は敲打による潰しの痕跡が顕著に認められるが、孔の中心位（最小径を有する部分）に、軽い研磨様の擦れた痕跡が認められる。刃部に使用によるものと思われる剥離及び潰れが認められる。

第Ⅲ群石器

K類 石錘

143点出土した。遺構内出土9点（うち欠損品1点）・遺構外出土129点（うち欠損品22点）Ⅳ—2区出土55点（うち欠損品1点）である。文中の番号は整理番号である。

第1次調査の報告では、抉りの部位等についての分類が多岐にわたり、繁雑な部分が認められるため、これらを整理し、抉りの数及び位置により再分類した。

また、第1次調査におけるK—Ⅳ類d種（礫の形態そのものが抉り状を呈するもの）は、錘としての可能性が考えられるだけであり、形状の類似性だけで本類とすることに疑問が感じられるために、これを除外した。

K—I類 抉りが1箇所のもの（第1次調査のK—Ⅳ類にほぼ相当する）

Ⅱ類 抉りが2箇所のもの

A—素材の長軸線上に抉りをもつもの（同K—I類に相当）

B—素材の短軸線上に抉りをもつもの（同K—Ⅴ類に相当）

Ⅲ類 抉りが3箇所以上のも（同K—Ⅱ～Ⅳ類に相当）

また、抉りの作出方法は、片面からのもの・両面からのもの・敲打によるもの（剥離後に潰し成形をしたものか、敲打だけによるものかは、素材が軟質のため判然としない）がある。

I類 5点出土した。相対する側縁に抉り状の自然面をもつものは1点であるが、非常に小さい凹みである。

ⅡA類 12点出土した。このうち抉りが、素材のほぼ中軸線上に位置するものは8点で、小判形等の左右対称形のものも多く、素材は他の類に比しておおむね硬質である。11・12は大形のものである。

ⅡB類 119点出土した。形状は小判形・楕円形・長方形が多く、長幅指数で6～8に集中する縦長の素材が多く用いられている。厚さは均一なものが多いが、断面三角形を呈する分厚いものがある。

抉りは、作出方法の組合せから数種類のものが認められる。a 両方片面のもの16点・b 一方が片面からで、他方が両面からのもの23点・c 両方とも両面からのもの59点であり、c 種がもっとも多い。不明のもの21点である。

Ⅲ類 7点出土した。長楕円形の分厚いものが多く、他の類に比してやや大型である。

〈長さ〉最大13cm・最小4.5cmで、6cm～10cmに集中し、特に8.5cm～10cm・6.5cm～8.5cmの2ブロックに集中する。

〈幅〉最大9.5cm・最小3cmで、5cm～7.5cmに集中する。

〈厚さ〉最大4.8cm・最小1cmで、1.5cm～3cmに集中する。

〈重量〉最大495g・最小17gで、60g～270gに集中し、特に100g～250gに集中する。

〈石質〉安山岩が主であり、凝灰岩・チャートが数点ある。素材は、チャートとⅡA類を除いて軟質のものが多い。

〈抉りの長さ〉抉りの長さを、抉りをもつ軸線の長さ（長軸に抉りをもつものは最大長・短軸に抉りをもつものは最大幅）で割った値（抉り度）をみると、ⅡA類の小判形などのものが、10点中6点が9.9～9.4に集中するのに対し、ⅡB類は9.5～8.5を中心とする。点数に大きな差があることから、即断はできないが、ⅡB類はⅡA類に比して抉りが深いことが理解される。

L類 敲磨器類

第1次調査の分類では、各種の使用痕跡の類別が多岐にわたるものと、不足の部分があることから、主要痕跡により再分類した。これらの痕跡は、使用によるもの・器体整形に伴うもの・機能面作出によるものがあるが、使用による痕跡に主眼をおいた。

L-I類 主要痕跡がスリによるもの（第1次調査Ⅰ～Ⅶ類に相当）

Ⅱ類 主要痕跡が敲打によるもの（同L-Ⅷ～Ⅹ類に相当）

Ⅲ類 主要痕跡が凹みのも（同L-Ⅰ類に相当）

Ⅳ類 複合痕跡を有するもの

V類 器体整形及び機能面を作出しているもの

Ⅵ類 痕跡の不明瞭なもの（搬入礫硬等）

V類は、本来、利器として分類すべき礫器等を含むが、第1次調査の分類において、本類で扱ったことから、これに準じた。

使用面・形状等については、各類ごとに細分した。（本文中の番号は整理番号である。）

L-I類 主要痕跡がスリによるもの

形状により細分し、さらに使用面等により分類した。

A-断面が三角形のもの（いわゆる三角柱状磨石）

B-小判形及び楕円形のもの

C一棒状のもの

D一球状のもの

E一卵形及び回転楕円体のもの

F一その他

A類 遺構内出土2点・遺構外出土41点・IV一2区出土5点である。(うち欠損品24点)

1稜を使用のもの19点、うち使用面に剥離痕を有するもの6点・剥離痕のないもの13点である。剥離はほとんど両面からのものであるが、45は片面からだけのものである。

2稜を使用のもの4点、2稜ともに剥離痕のあるものは皆無であり、1稜だけに認められるもの2点である。

3稜を使用のもの1点、3稜ともに剥離が認められるが、主使用面は1稜で、1稜には、擦り痕がほとんど認められない。

面に片減りが認められるものが7点ある。また、他の類に比して破損率が高い。

B類 遺構内出土6点・遺構外出土40点・IV一2区出土3点である。(欠損品9点)

a種 1側縁だけ使用のもの

8点出土した。

b種 使用面に剥離痕を有するもの

9点出土した。すべて偏平礫を素材とし、使用面は三角柱状磨石に類似する。

2側縁に剥離痕を有するものと、1側縁だけのものが認められる。前者の1側縁は、若干擦った程度の痕跡であるが、33は両側縁ともに使用頻度が高く、1側縁は片減りしている。

c種 2側縁を使用しているもので、使用頻度の差により、1側縁が他方よりも素材の丸みを残しているもの

11点出土した。11・26は、両平坦面を研磨したような痕跡が認められる。

d種 2側縁を使用しているもので、両側縁とも、ほぼ同じ磨滅が認められるもの

(b種のさらに使用したものの可能性がある。)

10点出土した。13・17・20・25は全面研磨の可能性はある。52・53は大型のものである。

両側縁ともに直線的であり、両平坦面ともに、平滑な感じである。

e種 3面以上使用しているもの

2点出土した。4は両側縁と両端部に擦り痕が認められる。15は両側縁と平坦面を使用している。L一IV類に形状及び使用状況が類似しているが、擦りの痕跡だけのため、この種とした。

C類 遺構内出土4点・遺構外出土12点・IV一2区出土2点である。

素材は、偏平なものやや肉厚のものがあり、108は円柱状のものを使用している。端部に擦り痕を有するものであり、一端・両端使用の2種がある。擦り痕は、端部中央を境に左右から

の擦りが認められる（三角形）のものと、ほぼ平坦なもの、素材の丸みに沿った使用面を構成するものが特徴的であり、大半は端部中央を中心とした三角形状を呈するものである。108は端部中央を中心として円錐状の擦り痕が認められる。

100・107は、棒状ではないが、この類に含めた。101は平坦面に敲打痕が認められる。

D類 遺構内出土5点・遺構外出土25点・IV—2区出土0点である。

全面研磨によるが、球状の転石の一部分に擦り痕を有するものもある。また、自然礫と区別し得ないものもある。素材及び擦る対象物により、表面がざらつくものと光沢のあるものがあるが、前者が多い。8号住居跡出土の221は、溝状の擦痕と一端に擦りが認められる。

E類 遺構内出土4点・遺構外出土8点・IV—2区出土0点である。

素材は断面形状が円を呈するもので、1～数箇所に擦りの痕跡が認められる。

9・56・68は、擦りにより平坦面を構成している。70・71は端部に擦り痕が認められる。69は器体中央部に平坦面が構成され、更に両端部に擦り痕が認められる。やや偏平なものは側縁に痕跡が認められる。

L—II類 主要痕跡が敲打によるもの

素材の形状・痕跡の位置等で細分した。また平坦面に、凹みまで至らない器面の荒れを有するものもこの類とした。

A—偏平なもの

B—球状・卵状のもの

C—若干細長いもの

A類 遺構内出土2点・遺構外出土1点である。

75は、端部に敲打痕を有し、剥離も認められる。他は平坦面に敲打痕を有する。

B類 遺構内出土3点・遺構外出土8点・IV—2区出土1点である。

角ばっているものは、その突端部を使用しており、器体がなめらかなものは周縁等を使用している。ほとんどがチャートであるが、安山岩が4点あり、これらは、平坦面及び端部を使用している。

C類 遺構内出土5点・遺構外出土8点である。

端部に使用痕を有し、一端のみ使用のものと、両端使用のものがある。111号土壙出土の267は、一側縁部を使用している。

本類のほとんどはチャートを素材としており、使用痕跡も敲打だけではなく、擦りの痕跡を合わせもっている。いわゆる敲き擦りの用具として用いられている。（欠損品1点）

L—III類 主要痕跡が凹みのもの

129点出土した。遺構内6点・遺構外118点・IV—2区5点である。うち欠損品は38点である。

(文中番号は整理番号である)

使用面の数により細分した。使用面としたのは、明瞭な凹みを有するもので、器面の荒れだけのもは除いた。また欠損品は分類の対象から除いた。

A—1面使用のもの

B—2面使用のもの

C—3面以上使用のもの(この類中、断面形状が円等の幅厚差の少ないものは、使用部分の数により判断した。)

A類 遺構内2点・遺構外27点・IV—2区1点の出土である。

B類 遺構内2点・遺構外54点・IV—2区1点の出土である。A類に比して小型のものが多く、全体の半数量を越す。63は石皿の破片の転用である。56は扁平で硬質の素材を利用しており、端部に剥離が認められる。

C類 遺構内2点・遺構外15点・IV—2区2点の出土である。

各類とも形状は多岐にわたるが、楕円形及び円形のもが主体である。また、小型のものは扁平なものが多く、大形のもの分厚いものが多い。大形のもの分厚いものは台石としての分類も可能であるが、主たる痕跡が凹みで、他の痕跡がほとんど認められないものは、この類とした。

IV類 複合痕跡を有するもの

スリ(擦り・研磨)・敲打・凹みのうち2種以上を合わせもつものを一括した。(器体に細かい荒れを有するものは除いた)

複合痕跡の種類と部位から細分した。

A—1側縁にスリ・平坦面に凹み・端部に敲打の痕跡を有するもの

B—2側縁にスリ・平坦面にスリと凹みの痕跡を有するもの

C—端部に敲打とB類の痕跡を有するもの

D—その他

A類の50・61は、分厚い素材を用いており、側縁の使用面は片減りしている。

C類の1は、この類の代表的なもので、器体全面に何らかの痕跡を有している。平坦面は研磨と凹み・側縁は擦り及び研磨・端部は敲打痕を有する。平坦面の凹み(敲打痕)と研磨は、研磨が後に行われており、端部の敲打が最も新しい。敲打痕は潰し整形様の痕跡である。

2は、1に最も近いものであるが、端部の敲打が側縁まで達していない。

6は分厚い素材で、側縁にも凹みを有する。

B類はC類の前段階的様相を呈する。

D類 275は全面研磨によるものと思われる球状の礫で側縁の一部とやや平坦な面に敲打痕を有する。

A～C類とも凹みは浅い。

V類 器体整形及び機能面を作出しているもの

84は、半円球状の素材の下端の周縁3分の2ほどに帯状の擦りの痕跡を有する。器体表面は研磨によるものか、光沢が認められる。

87は、円錐形を呈しており、下端が凸の曲面をもつ。器体は敲打及び研磨によって整形されている。使用面は下端部である。

243は、87と類似するが、使用面を有していない。器体は敲打によって整形されているが、頭頂部と体部に自然面を残す。下端部は、自然面を残し、若干の擦りは認められるが、機能面としては構成されておらず、凹の曲面を呈する。

250は、棒状の礫の折断面に剥離痕を有する。剥離は折断面の端部に認められるが、一周していない。いわゆるスタンプ状石器の加工途中の様相を呈する。使用の痕跡は認められない。

501は、片面全面に自然面を残す。周縁を剥離により加工しているが、刃部を形成するには至っていない。形状は打製石斧に類似する。

502は、両面のほとんどが自然面で、側縁に剥離が認められる。一部両面からの剥離である。

278は、円盤状の襟を側縁の2点？からの加撃によって、厚さをほぼ半分に減じている。刃部は、両面からの剥離によるが、2箇所パンチ痕と思われる痕跡が認められる。

279は、側縁の一部を両面から打ち欠いて刃部を作出している。残りの周縁は平坦に加工されている。

760は、側縁に平坦面を構成し、一側縁を打ち欠いて刃部としている。2箇所にパンチ痕が認められる。

VI類 痕跡の不明なもの（搬入礫等）

研磨等の痕跡が不明瞭で、自然礫と区別し難い礫を一括した。円盤状・小判形・楕円形等の形状を呈するものが多い。

特に、IV—2区B I—428グリッドからは、形状の類似する円盤状の礫が8点一括して出土した。いずれも全面研磨が施されているようであるが、断定はし得ない。

この形状の礫は、L—V類の礫器とした278・279の素材として使われている。

これらは、礫石器の素材として搬入されたものか、又は何らかの用途を有していたものと考えられる。

M類 石皿・台石・砥石

第1次調査の報告では、側縁の高まりを作出しているものを除いて、石皿と台石の区分が不明瞭である。このため、分類の困難なものもあるが、分別できるものは極力分別した。

I類 石皿

A一面の側縁に高まりを作出しているもの（第1次調査M—IV類に相当）

B—擦りによって内湾しているもの（同M—III類に相当）

C—擦りによる面をもつが、内湾まで至っていないもの

II類 台石

A—1面が平坦なもの（同M—I類に相当）

B—2面が平坦なもの（同M—II類に相当）

C—素材自体の節理により、A・Bに分類できないもの

III類 砥石

IV類 分類し得ないもの・大型の礫

※敲打による凹みが顕著な大型のものは、この類としたが、手による運動が可能な中型のものはL—III類の凹み石として扱った。

I—A類 7点出土した。遺構内出土0点・遺構外出土7点・IV—2区出土0点で、すべて欠損品である。

側縁の高まりが非常に明瞭なものと、若干の高まりだけのものが認められるが、ほとんどのものが高まりの直下に沈線状の整形痕が認められる。4は側縁に一条の浅い溝が作出されている。

I—B類 17点出土した。遺構内出土4点・遺構外出土12点・IV—2区出土1点である。

862は、IV—2区の配石遺構（第66図）の立石として使用されていたもので、大型の完形品であり、安山岩を素材としている。

8は欠損品であるが、側縁に湾曲面が認められ、砥石として使用された可能性もある。また、側縁端が2cmほどの厚さを有するのに対し、破断面は～4mmの厚さである。

I—C類 4点出土した。遺構内出土1点・遺構外出土3点・IV—2区出土0点で、軟質の石材を用いているものが多い。安山岩を素材としたものは、不明のものが多いため、IV類としたものが多い。

II—A類 12点出土した。遺構内出土2点・遺構外出土10点・IV—2区出土0点である。

21は、両面に多数の凹みを有するものである。

平坦面は、平滑なものも見られるが、おおむね素材の細かい起伏が残存している。

II—B類 16点出土した。遺構内出土1点・遺構外出土12点・IV—2区出土3点である。

平坦面はII—A類同様の様相を呈するものが多く、板状節理による素材を用いたものがほとんどである。

II—C類 71点出土した。遺構内出土1点・遺構外出土63点・IV—2区出土7点で、総点数の半ばを占める。また、小破片に分割されたものが多いのが特徴である。

II類は、主要面に擦り及び敲打による荒れが認められるが、擦りが面全体に及んでいるもの

は少ない。Ⅱ—B類は主使用面が不明なものが多い。

Ⅲ類 砥石（有溝砥石）

1点出土した。欠損品である。器体は、両面及び両側面とも中央に向かって大きく凹んでいる石皿様のもので、正面8本・左側面3本・裏面6本の計17本の溝を有する。溝は、断面形が葉研状を呈し、長軸断面上では端部が浅く、中央部が深いものである。

器体の大きな湾曲は擦りによるもので、溝より古いものと思われる。石質は砂岩である。

Ⅳ類 分類し得ないもの

大形の礫で、一部に擦り等の痕跡を有するが、Ⅰ・Ⅱ類に分類し得なかったものも含む。

遺構内出土のものも多く、円礫等が多い。

Ⅰ類は、砂岩・凝灰岩を素材としたものが多く、Ⅱ類は、安山岩を素材としたものが主体を占める。これは主要使用目的の差異によるものと思われる。

Ⅲ類の有溝砥石の痕跡ほどではないが、Ⅰ—A・B類の4・5・8・10・13・15の6点にも溝状の擦痕が認められる。このうち明瞭な溝は、4—裏面に8本・5—表面に4本・8—両面使用のうち片面に1本・10—裏面に3本・13—主使用面に2本、うち1本は高まりを作出したもののか？・15—両面使用のうち片面に1本である。（主使用面とは2面使用のうち、より凹んでいる面）

これらの溝は、ほぼ同様な断面形状及び深さを有している。また、破損前からの痕跡と思われる、平滑な面及び曲面における擦り潰し等の作業とは異質の作業が同時に行われていたことが示唆される。これらの石皿片は有溝砥面同様に石皿として使用頻度の高いものである。

使用としては、溝の形状から骨角器・玉などの作出が考えられるが、今回の調査では、非常に小型の玉が出土しただけで、これらの溝とは合致しない。また、使用具の再研磨も考えられる。（破損前からの使用と考えたが、破損後、この溝状の痕跡の残る作業を行い、この過程で再度破損した可能性も考えられることを追記したい。）（白鳥）

第Ⅳ群 石器

本群は、いわゆる石製品を一括した。N類：軽石は第1次調査において、軽石製品として第Ⅲ群石器の中で取り扱っていたが、本報告では石製品として第Ⅳ群石器として取り扱う。

N類軽石（第126図1—12）

軽石は、遺構内7点・遺構外11点、計18点出土した。個々の計測値は付表に示した。

本類は、更に5種類に細分した。

Ⅰ類（1）

擦り面と思われる平坦な部分をもつものである。形態は、断面形・正面形ともに隅丸長方形をなす。両側面に平坦な擦り面が観察される。一部に、火を受け焦げた痕跡がみられる。

Ⅱ類 (2・3)

貫通孔をもつものである。

(2)は、2個の貫通孔及び貫通孔であったと思われる痕跡が4個みられる。

(3)は、正面形が台形、断面形が長方形をなし、上底側に1個の貫通孔をもつ。

Ⅲ類 (4～9・11・12)

加工により形を整えているもので、正面形には台形・楕円形・隅丸長方形がみられる。

Ⅳ類 (10)

凹みのあるものである。正面及び側面に1個ずつ凹みがみられる。

Ⅴ類 (実測図・写真なし)

加工の痕跡の認められないものである。

○類 円盤状石製品 (第127図2)

表採品である。石を円形に打ち欠き、周縁を擦って整形しているが十分でない。

大きさは、径4.7×4.4cm、厚さ1.3cm、重さ48gである。石質は安山岩である。

P類 有孔石製品 (第127図3～20)

(3)は、67号土壌覆土1 a層より出土した。球状の石に盲孔が認められ、穿孔途中の未整品と思われる。孔周辺部に潰れが見られ、不明瞭であるが孔中央に螺旋状の条痕が認められる。大きさは、2.2×2.1×2.2cm、重さ12gである。石質は、玉ずいである。

(4～20)は、4号土壌覆土より17点出土した。個々の計測値は、第7表に示した。

正面形は、円形ないしは楕円形をなし、断面形は、長方形をなすものが多いが、台形状をなすものもある。貫通孔は両側から穿孔され、中はすぼむ。石質は緑色凝灰岩でややもろい。

4号土壌は、他の伴出遺物がないため断定はできないが、囲りから弥生時代の土器が出土していることから弥生時代の可能性がある。(一条)

R類 石棒 (第126図14～16)

3点出土した。すべて欠損品である。

14. CW—382グリッドからの出土である。円柱状を呈し、先端部は丸い。折損部付近に擦りによると思われる平坦面が構成されている。また、全面に焼化を受けている。

15. DB—378グリッドからの出土である。両端及び裏面半分を欠失している。表面に煤状の炭化物が付着しており、焼化を受けたものと思われる。推定径14cmの大型のものと思われる。

16. 表採資料である。先端部だけ残存しており、先端面中央に、若干の高まりが認められるが、自然面か意図的なものなのかは不明である。焼化を受けている。

※ 第18号土壌の確認面で検出した1点は、擦り・敲打等の痕跡が認められない角柱状の石材で、土壌構築時に立石としていたものが、横倒しになった可能性が考えられる。(白鳥)

S類 石刀（石剣） （第127図1）

（DA—379）グリッドIV層より1点出土した。石刀の破片と思われ、裏面を欠失している。粘板岩を擦って整形しており、擦りの痕跡が明瞭に観察し得る。背部は、平坦に整形されている。長さ5.8cm、幅2.1～2.6cm、厚さ1cm、重さ22gである。

U類 その他の石製品 （第126図13）

（BA—427）グリッドI層から出土した。両側縁に3個ずつ計6個の抉りを作出している。抉りは敲击潰しによるもので、ほぼ左右対称である。長さ10.4cm、幅7.1cm、厚さ2.5cm、重量310gである。石質は、安山岩である。

石錘とも考えられるが、抉りの作出がていねいであることなどから石製品として取り扱った。

（一条）

(3) 土製品

IV—1区から出土した土製品は、遺構内・遺構外を含めて円盤状土製品85点、三角形土製品4点、鐔形土製品18点、靴形土製品1点、茸形土製品1点、三角柱状土製品3点、土偶1点、環状土製品3点、土器片錘10点、計126点である。

各土製品の分布状況は、第132図に示した。

(ア) 円盤状土製品 （第128図～129図）

本土製品は、遺構内11点、遺構外74点、計85点出土した。個々の計測値は付表に示した。

土器の胴部片を円形に打ち欠いてから周縁を擦って整形している。形態は、名称のとおりほぼ円形をなすものもあるが、不整円形になるものが多い。また、胴部片を利用しているため、文様の有無を問わず多少湾曲する。大きさは、径3.5～4cm、厚さ7～8mmのものが一般的である。重量は、かなりばらつきがある。

文様は、無文のもの（24点）、有文のもの（61点）があり、有文のものには、沈線文（1～45）、格子目状沈線文（46～51）、刺突文的な短沈線文（52）、縄文（53～55）、撚糸文（59・60・85）がみられる。

本土製品の使用目的、用途は現在のところ明確ではない。

縄文時代後期の十腰内I式の土器片を利用していると思われる。

(イ) 三角形土製品 （第129図86～89）

遺構内1点、遺構外3点、計4点出土した。個々の計測値は付表に示した。

本土製品は、三角形板状土製品・三角形土板・三角形土製品などと呼称されているが、ここでは三角形土製品の名称を用いる。

土器の胴部片を三角形に打ち欠いた後、周縁を擦り二等辺三角形に加工している。胴部片のため湾曲する。文様は、沈線文（87）、縄文（86・888）、網目状撚糸文（89）が見られる。

縄文時代後期初頭の土器片を利用して製作されている。

(ウ) 鐸形土製品 (第130図)

遺構外より18点出土した。本土製品の名称は、鈴形土製品、土製垂飾、鐸形土製品、鐸形土器などと呼称されるが、第1次調査にならって、鐸形土製品の名称を用いる。個々の計測値は付表に示した。

文様は、無文のもの、有文のものがある。有文のものには、沈線文のみのもの、沈線文と刺突文を組合わせたものがある。

また、貫通孔の有無及びその方向により、4種に分類することができる。

1種：貫通孔をもち、つまみ出し部分の長軸方向と平行するもの(1～10)

2種：貫通孔をもち、つまみ出し部分の短軸方向と平行するもの(11・12)

3種：貫通孔をもち、垂直に穴があくもの(13)

4種：貫通孔がなく、つまみ出し部分がくびれるもの(14・15)

となる。

本土製品の時期は、文様及び施文技法、過去の出土例から、縄文時代後期初頭のものと思われる。

(エ) 靴形土製品 (第131図1)

111号土壌の覆土中より1点出土した。口縁部の一部とつま先部分を欠損している。

大きさは、高さ3.2cm、口縁部長径3.3cm、短径2.6cm、底面最大幅3.5cm、残部長さ4.8cmである。底面はやや張り出しており、安定があまり良くない。

文様は、極めて細い(0.5mmほど)沈線が多数、底面以外の部分に雑に施される。胎土には、やや多めの砂粒を含み、色調は黒褐色を呈する。

(オ) 茸形土製品 (第131図2)

51号土壌の覆土中より1点出土した。カサの縁、茎の一部が欠損している。

全体の大きさは不明であるが、カサの最大径5.5cm、茎の径2.2cm～3.3cm、残部高さ3.4cmである。カサは、内側に反り返り、茎は先細りの様相を示す。

文様は施されない。胎土には、多量の砂粒を含み、色調は明赤褐色を呈する。

(カ) 三角柱状土製品 (第1図3～5)

遺構外のIV層より3個体出土した。すべて欠損品である。

本土製品の名称については、立体土製品・三角壻形土製品・石冠状土製品などとも呼称されるが、第1次調査にならって、三角柱状土製品の名称を用いる。

(3)は(CY-381)グリッドより出土した。2分の1以上を欠損している。

形態は、正面形が背部が弧状をなす長方形で、側面形が隅丸の三角形である。底面は、長辺

部分が弧状をなす長方形に近い形である。また、底面は内側に反り返り、中央部分に円形の凹をもつ。

文様は、正面側の底面からの立ち上がり部分及び側面との稜線部分に、円形竹管による2列の刺突文が施される。他の部分は無文である。

(4)は、(DE—378)グリッドより出土した。上半部のほとんどを欠損している。全体の形態は不明だが、底面は長方形をなし、やや内側に反り、隅が幾分張り出す。文様は、極めて細い沈線文及び磨消縄文が施される。

(5)は(DC—378)グリッドより出土した。一部分しか残っておらず、全体の形態は不明である。文様は、沈線文及び磨消縄文が施される。

3個体は、いずれも胎土に多量の砂粒を含む。焼成はあまり良くなく、ややもろい。色調は赤褐色(3、5)、黒褐色(4)を呈する。

文様及び施文技法から縄文時代後期初頭のものと思われる。

(キ) 土偶 (第131図6)

(CS—386)グリッドより1点出土した。両手、両足、顔は欠損して、ない。

大きさは、残部高7.7cm、最大幅7.5cm、最大厚4.1cmである。顔の部分はないが、側面形から、顔が前に突き出すと思われる。

文様は、首、肩から胸付近までに表裏面とも円形竹管による刺突が多数施され、表の胸の中心から胴部下半まで同様の刺突が1列垂下する。

胎土には、多量の砂粒を含む。作りはやや雑で、焼成もあまり良くない。

形態、文様、施文技法から、縄文時代後期初頭のものと思われる。

(ク) 環状土製品 (第131図7～9)

遺構外より3点出土した。すべて欠損品である。

(9)は(DA—382)グリッドより出土した。全体の大きさは不明である。螺線状の沈線が施される。

(7、8)は、表採で、文様はない。

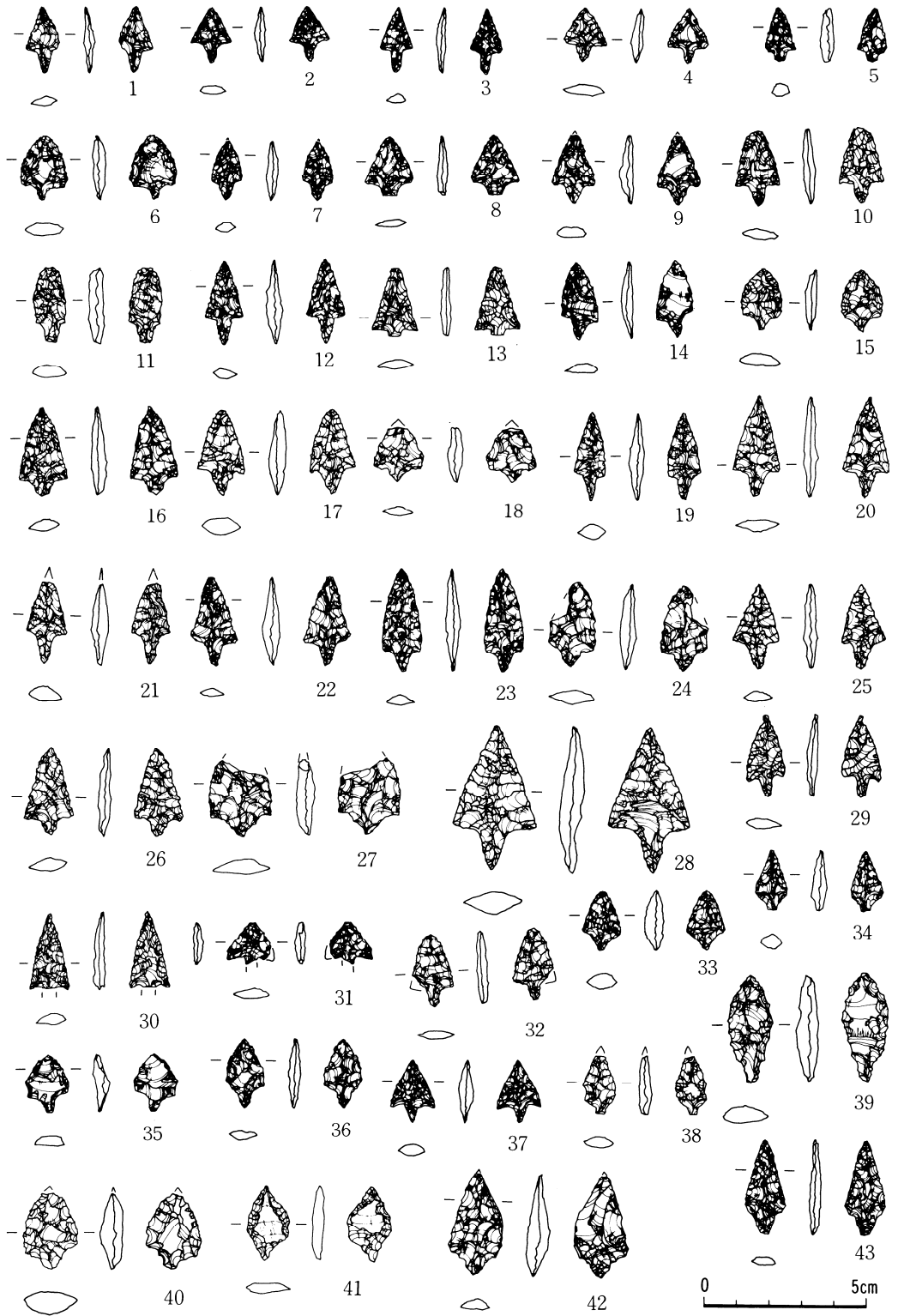
(ケ) 土器片錘 (第131図10～19)

遺構外より10点出土した。個々の計測値は付表に示した。

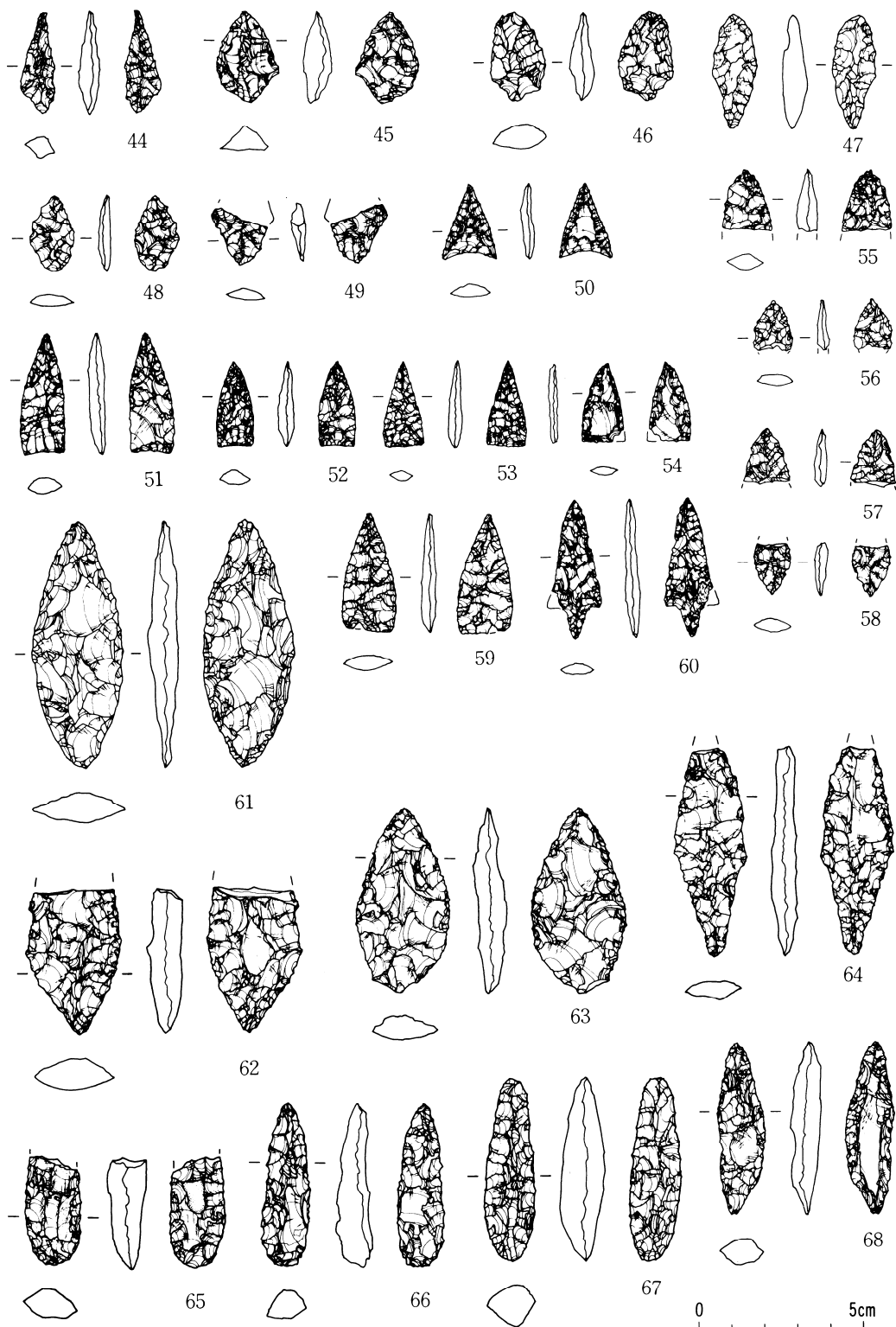
土器片を長方形に打ち欠いた後、周縁を擦り形を整え、その長軸の両端に切り込みを施したものである。口縁部片を利用したもの(10～13)、胴部片を利用したもの(14～19)がある。

用途は、漁網錘と思われる。

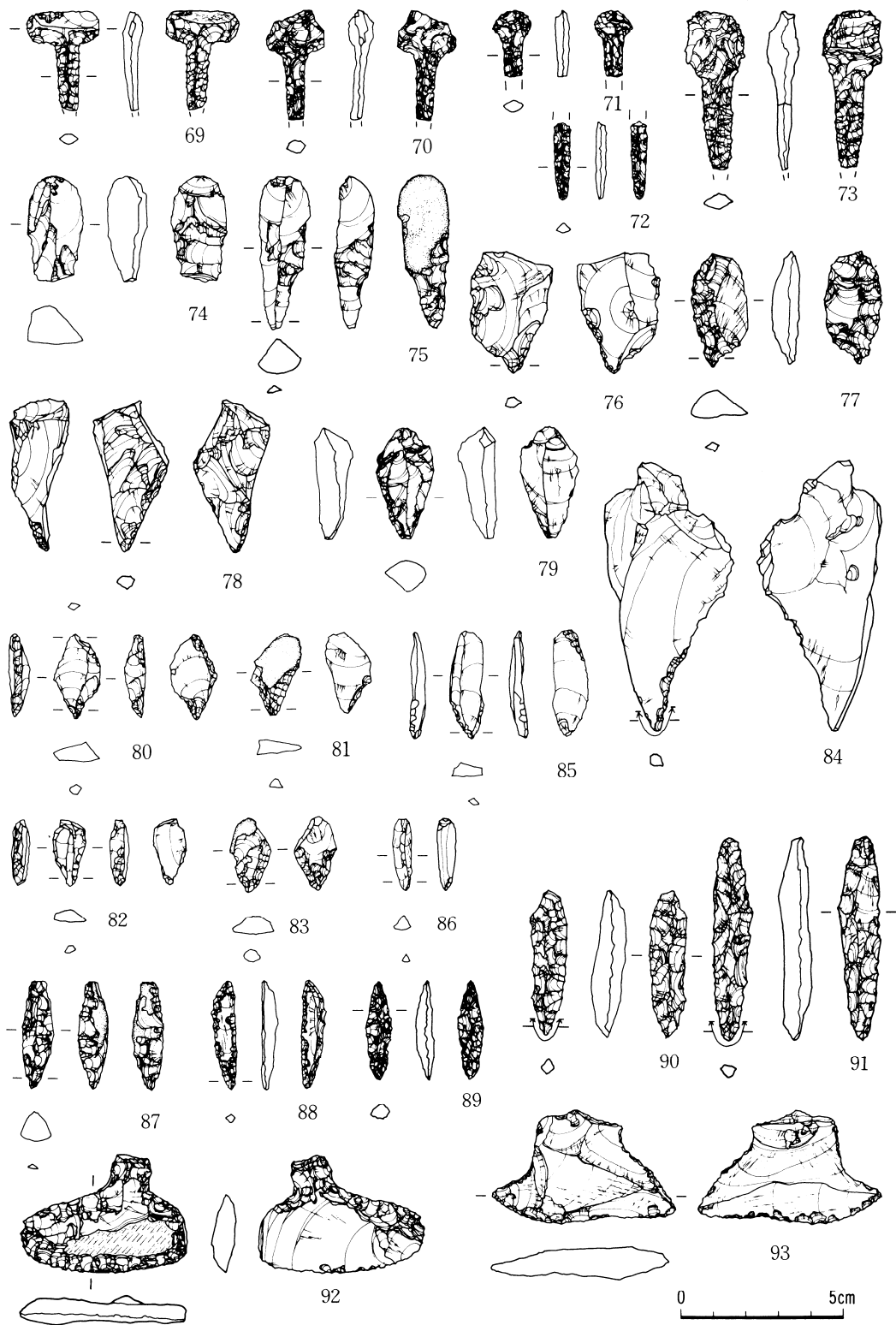
縄文時代前期初頭の早稲田6類の土器片を利用していると思われる。(一条)



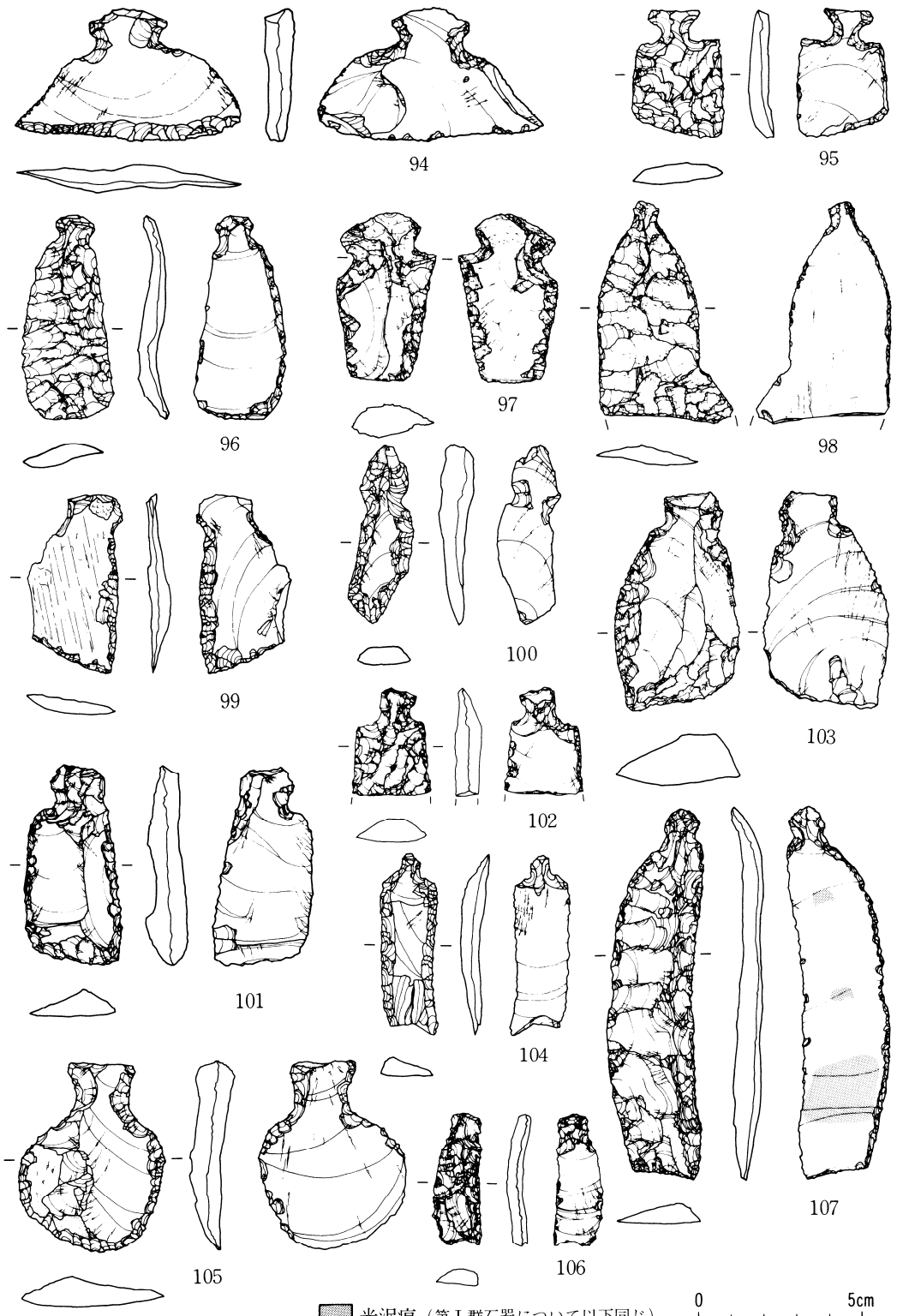
第95圖 石器(1)、A類



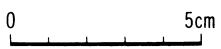
第96図 石器(2)、A類(59・60・68はⅣ-2区出土)・B類



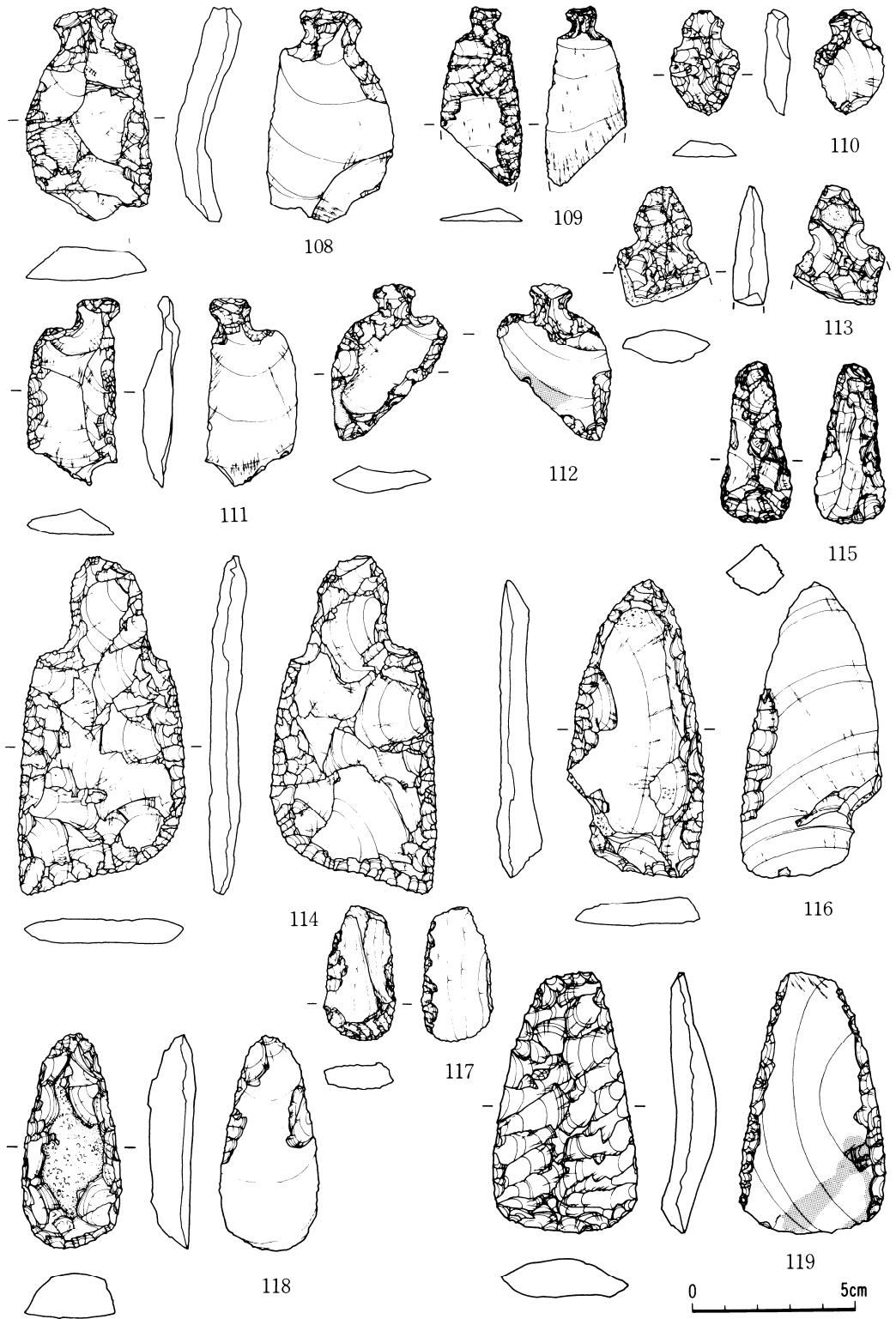
第97図 石器(3)、C類、D類



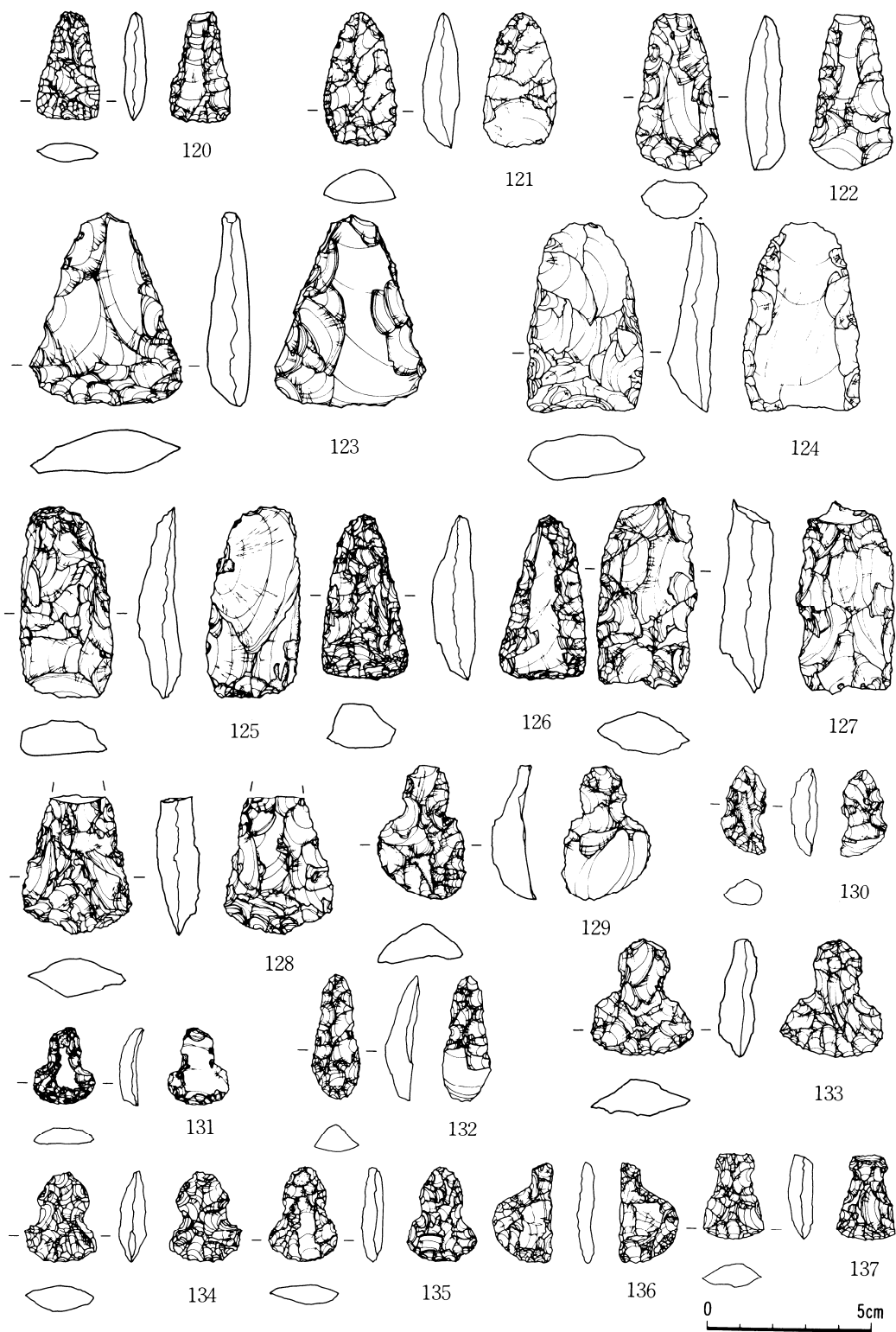
■ 光沢痕 (第I群石器について以下同じ)



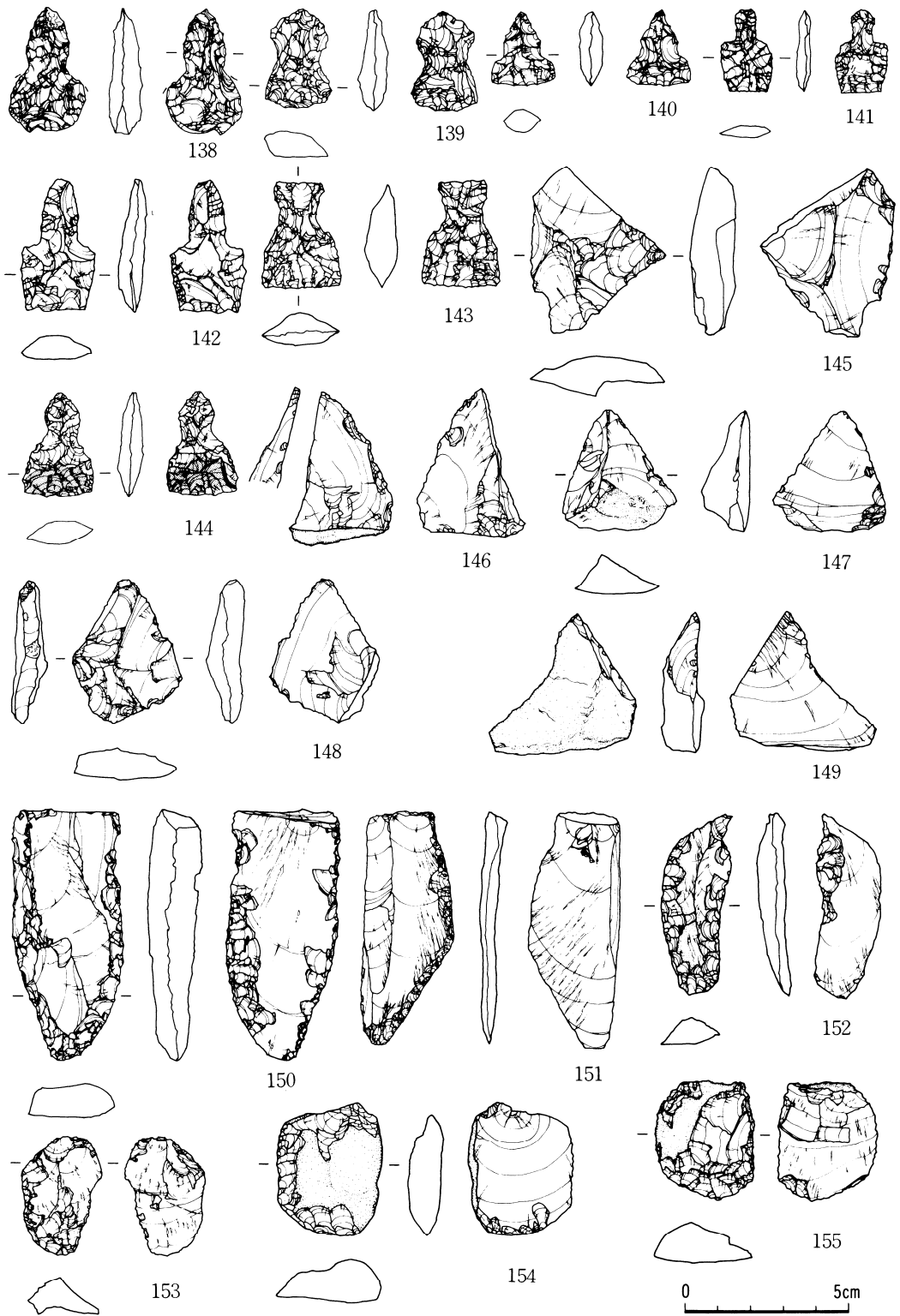
第98図 石器(4)、D類 (102・103はⅣ-2区出土)



第99図 石器(5)、D類、E類、G類(115)



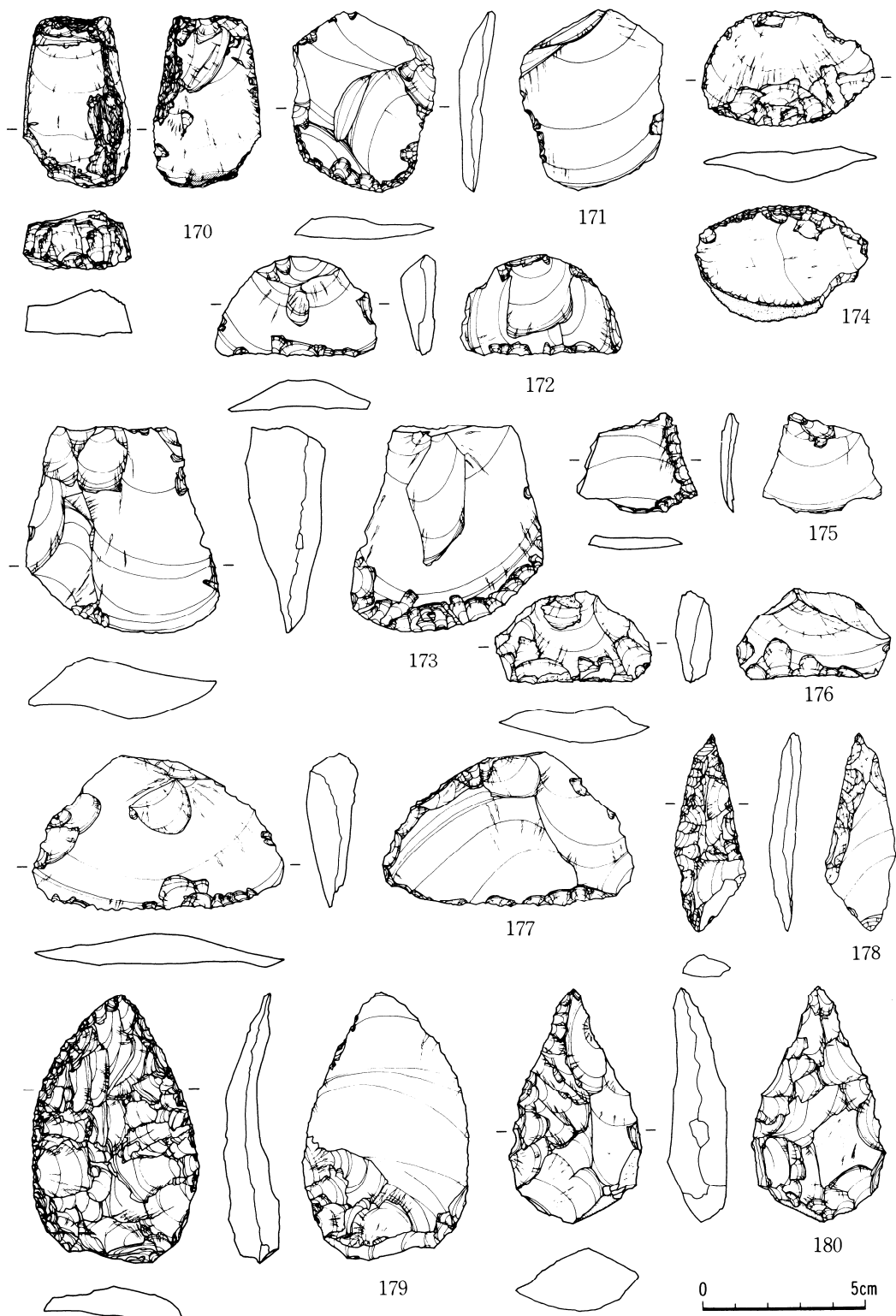
第100図 石器(6)、E類



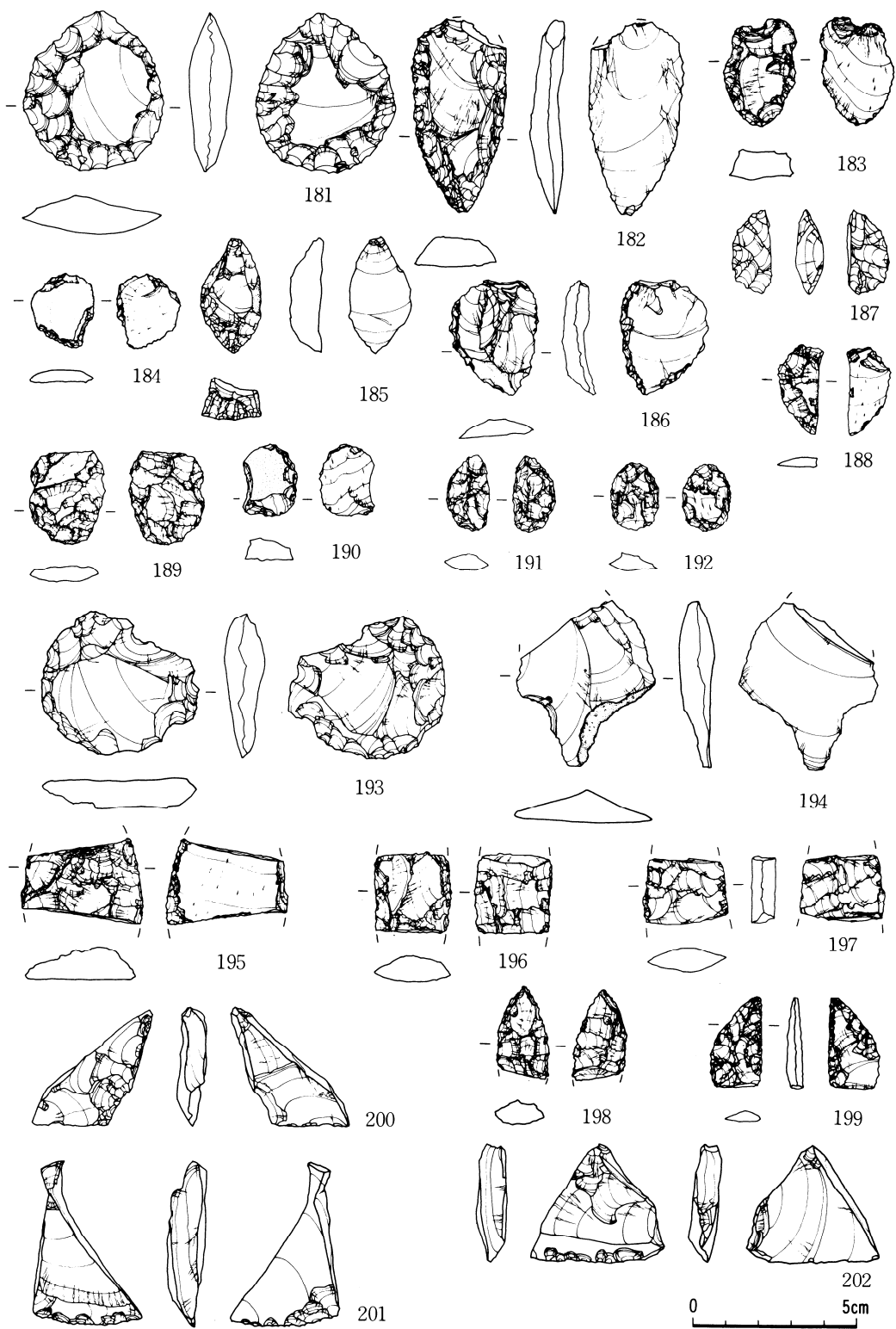
第101図 石器(7)、E類、F類(149はIV-2区出土)



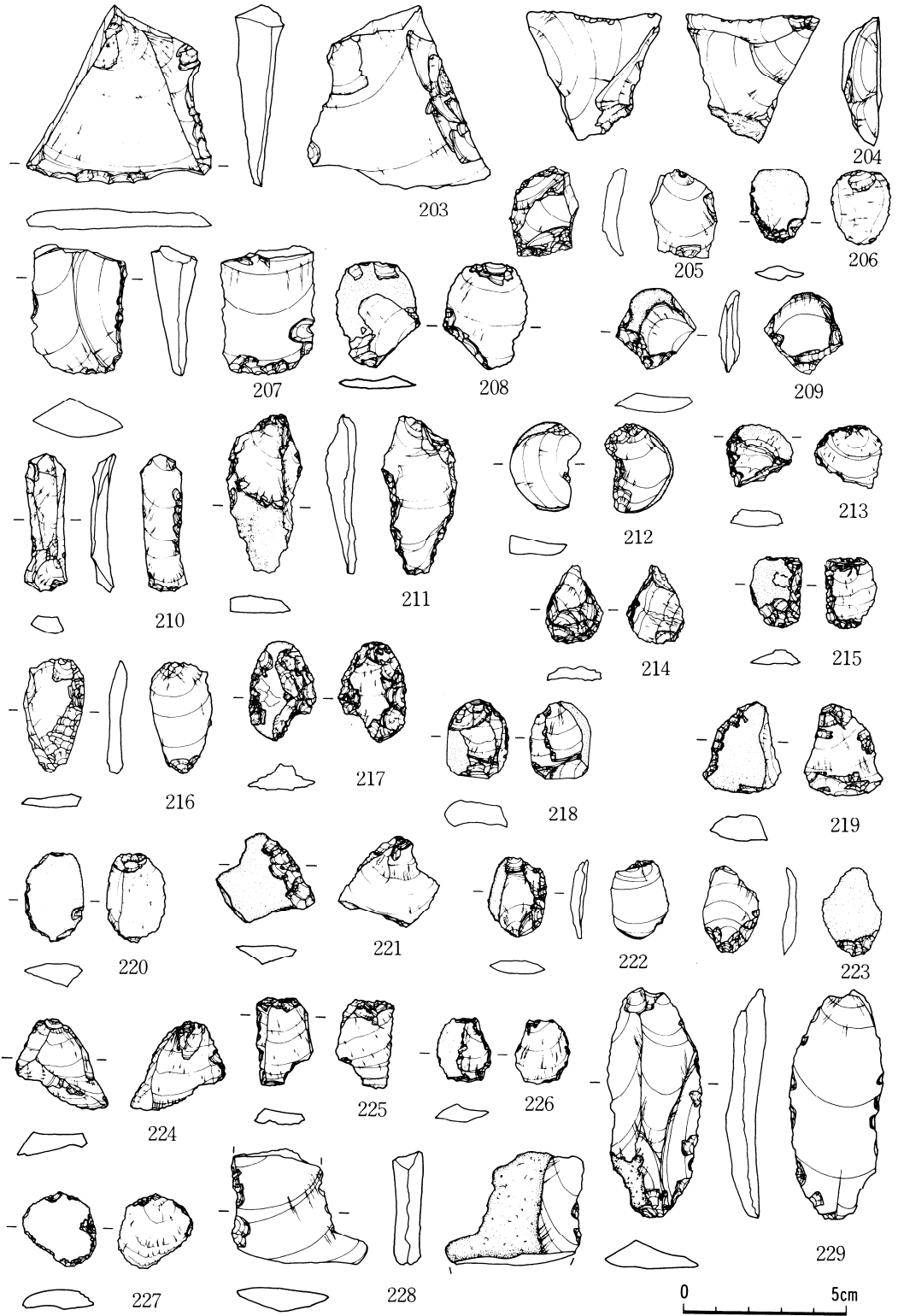
第102図 石器(8)、F類



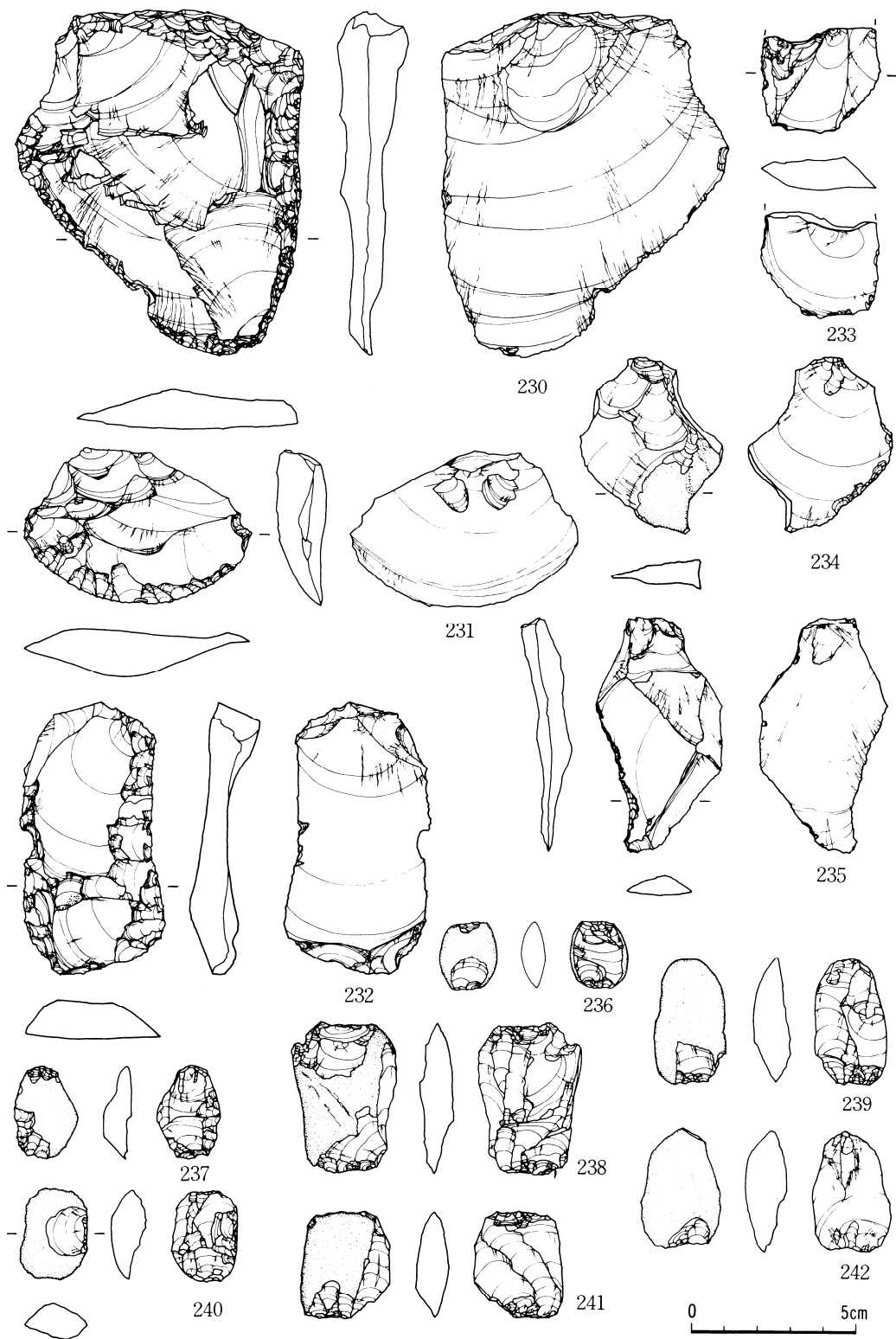
第103図 石器(9)、F類



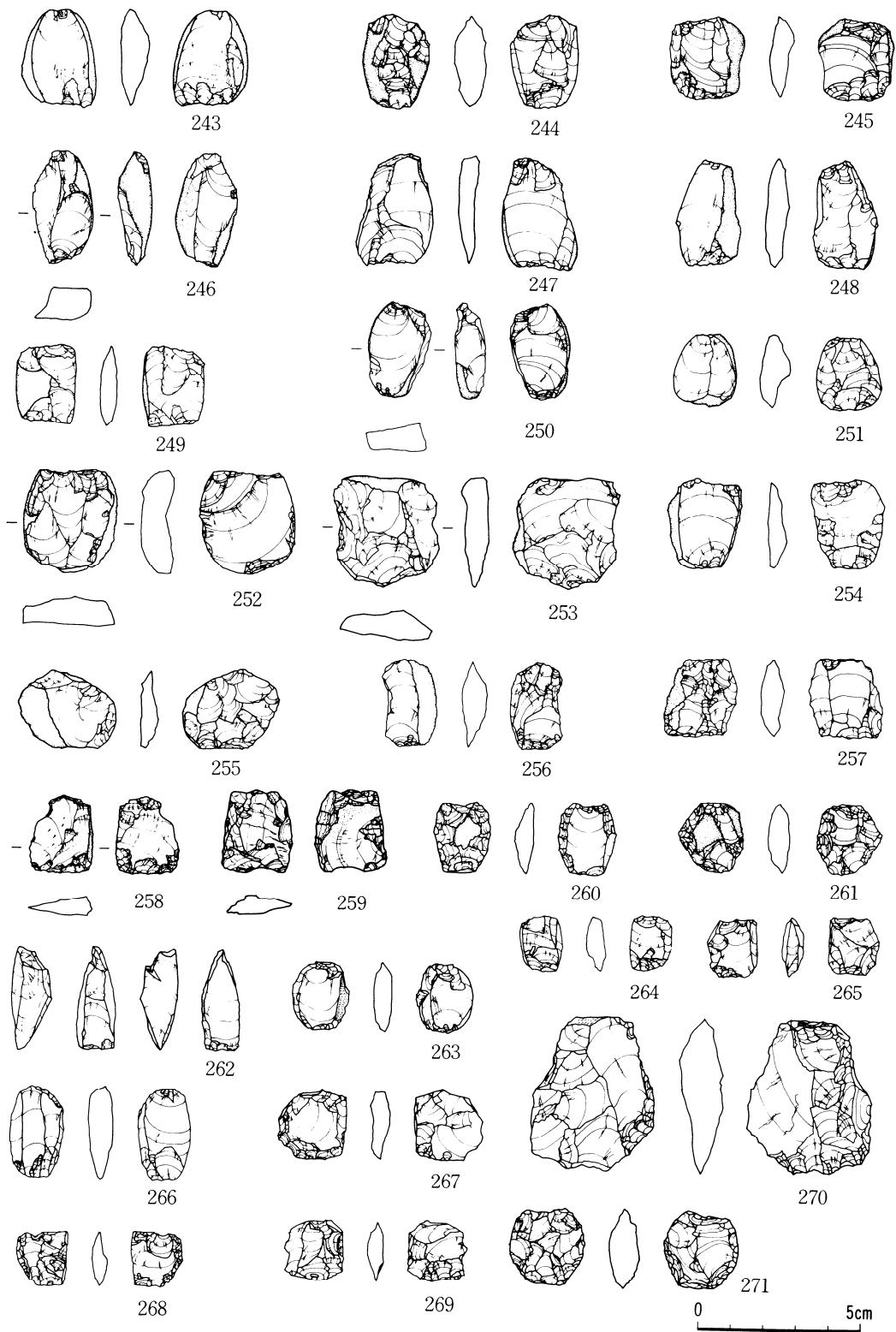
第104图 石器(10)、F類



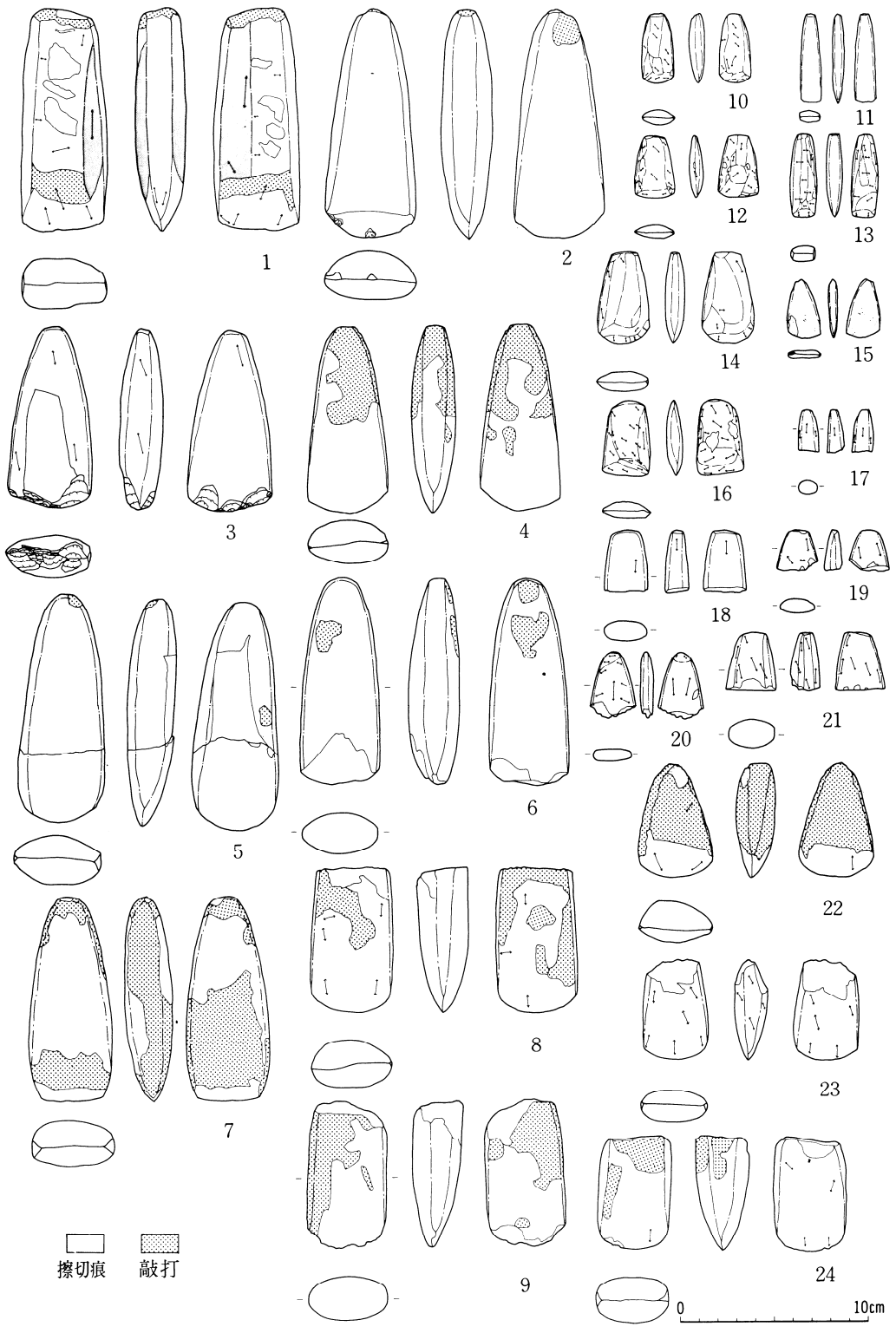
第105図 石器(11)、F類



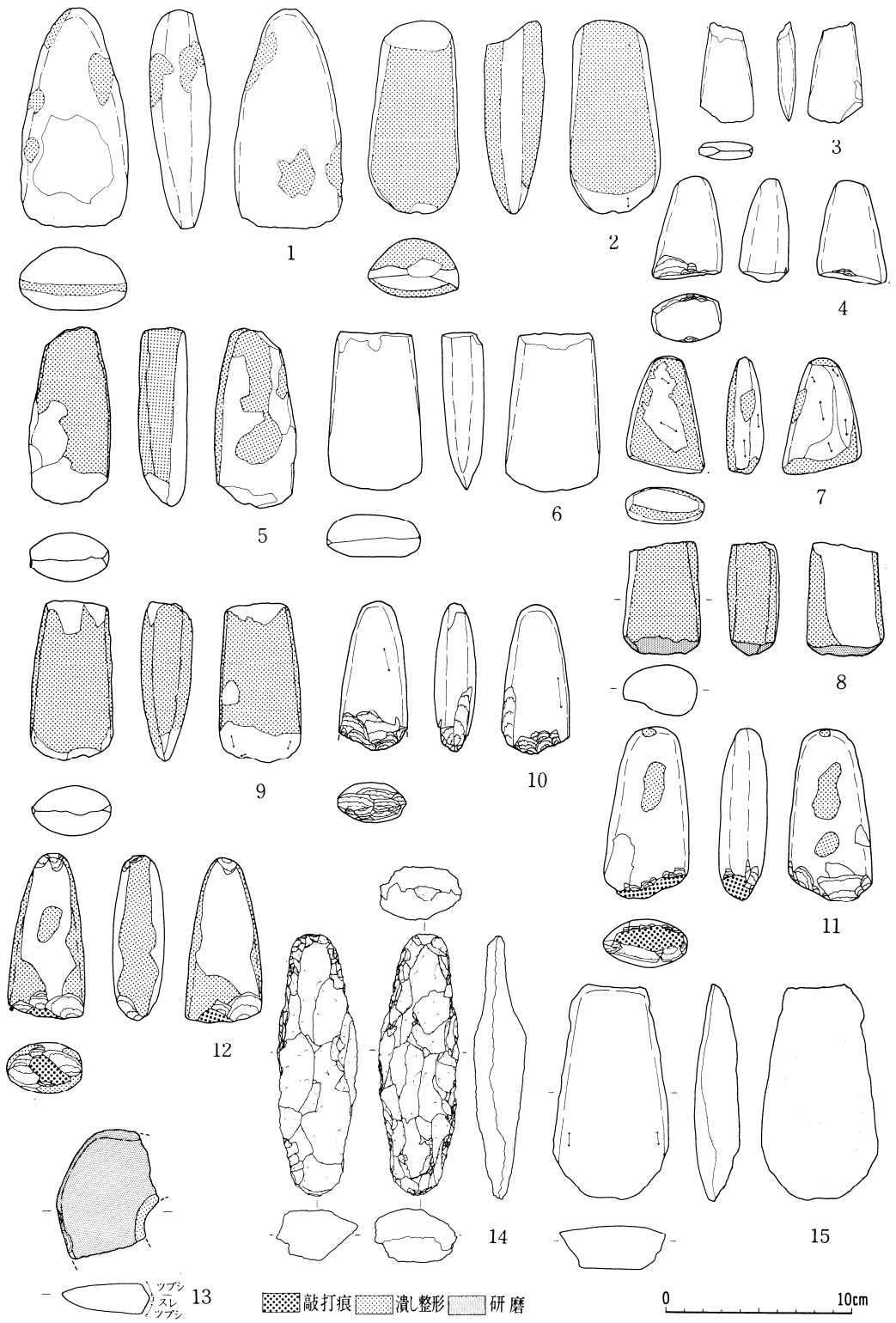
第106図 石器(12)、F類(140~142はⅣ-2区出土)、H類



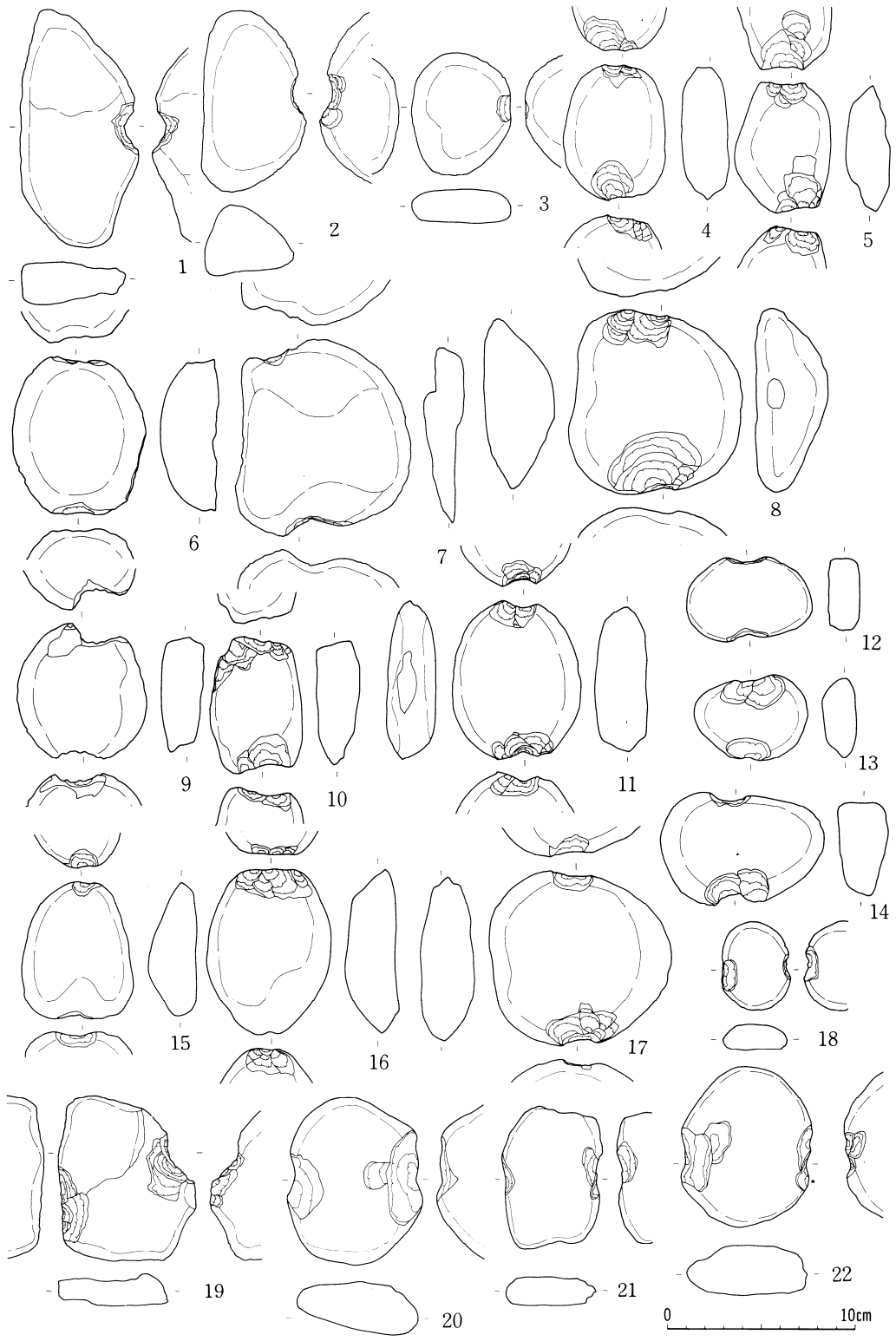
第107图 石器(13)、H類



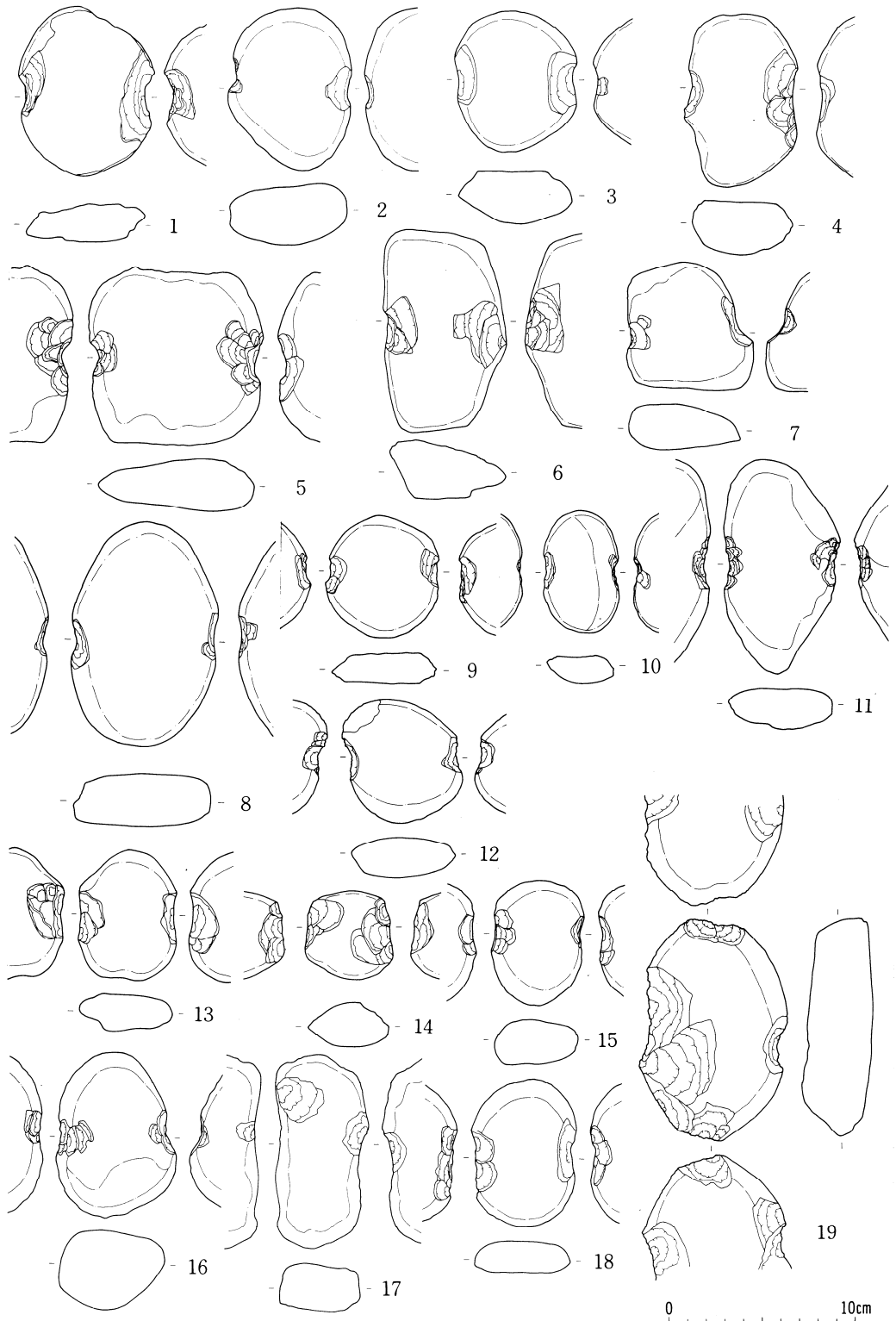
第108图 石器(14)、I類



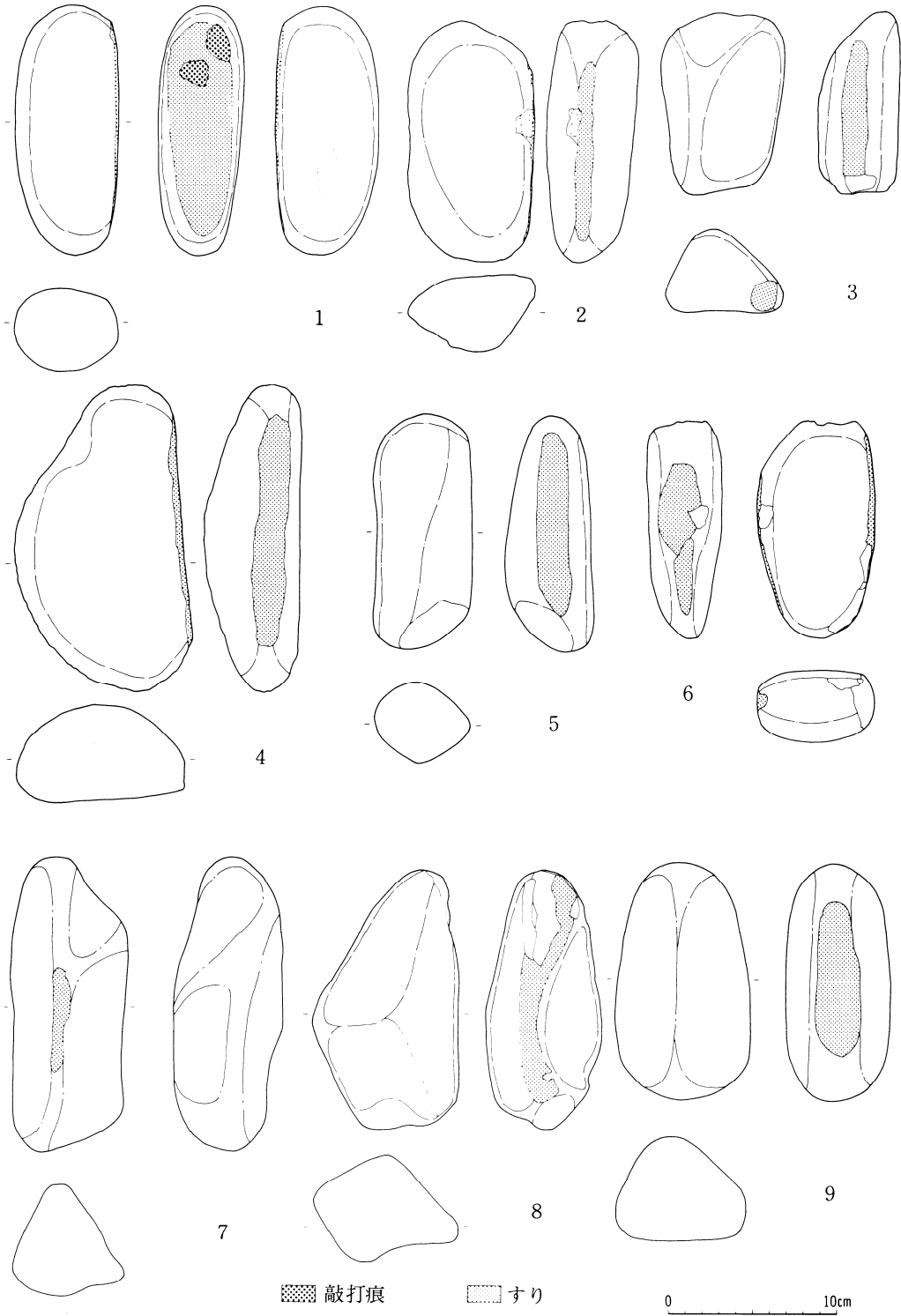
第109図 石器 (15)、I類・J類



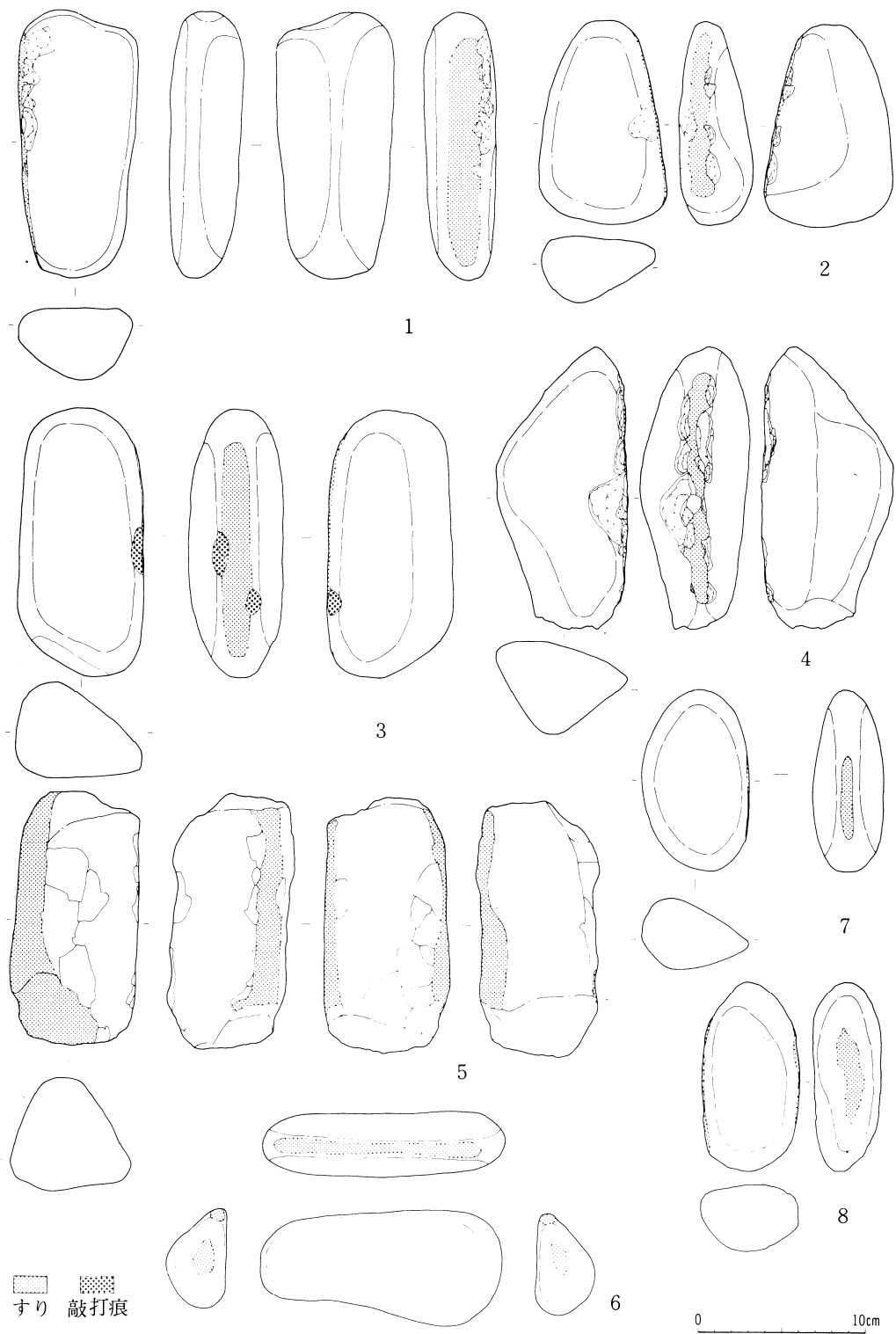
第110图 石器(16)、K類



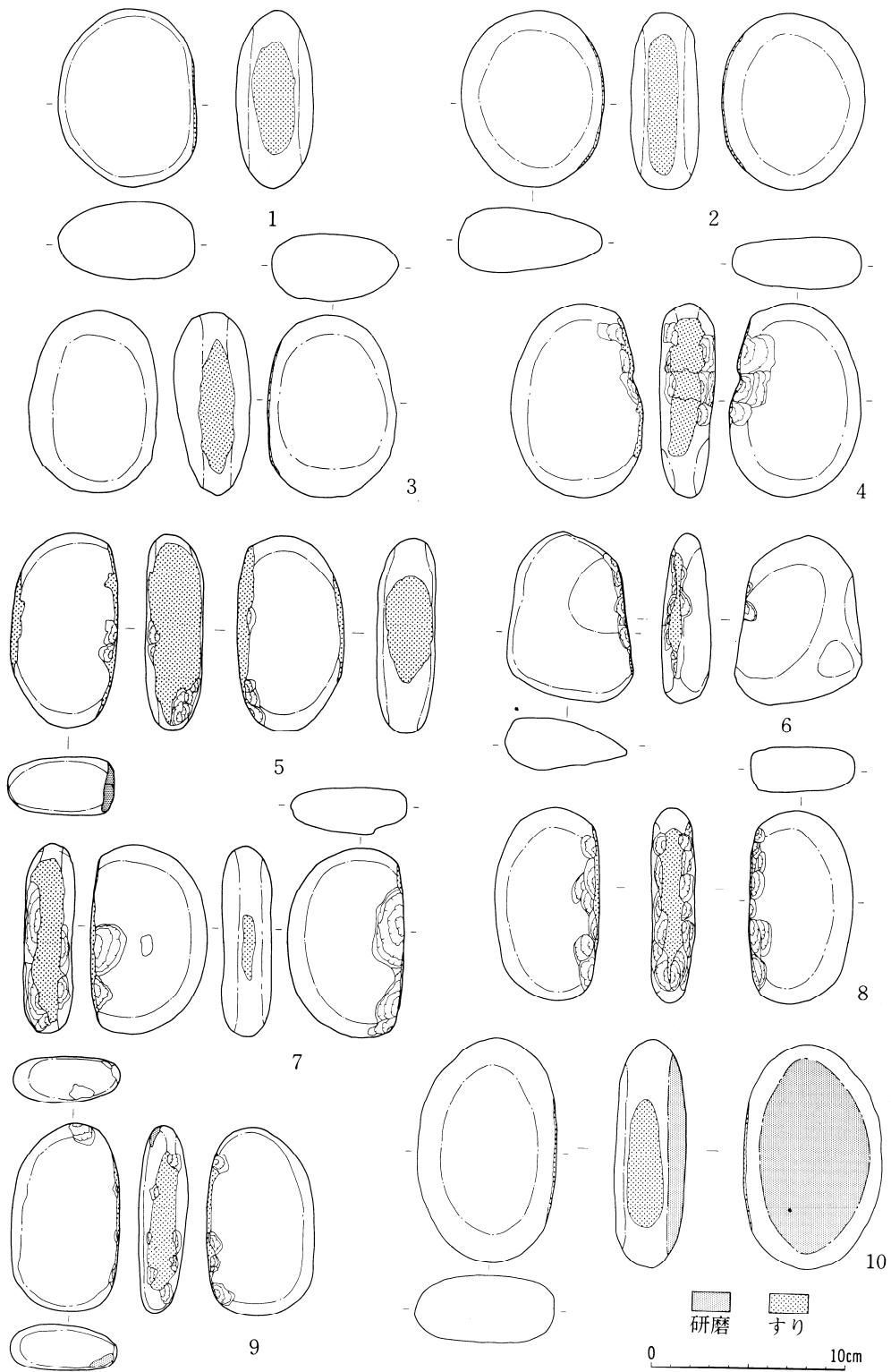
第111図 石器(17)、K類



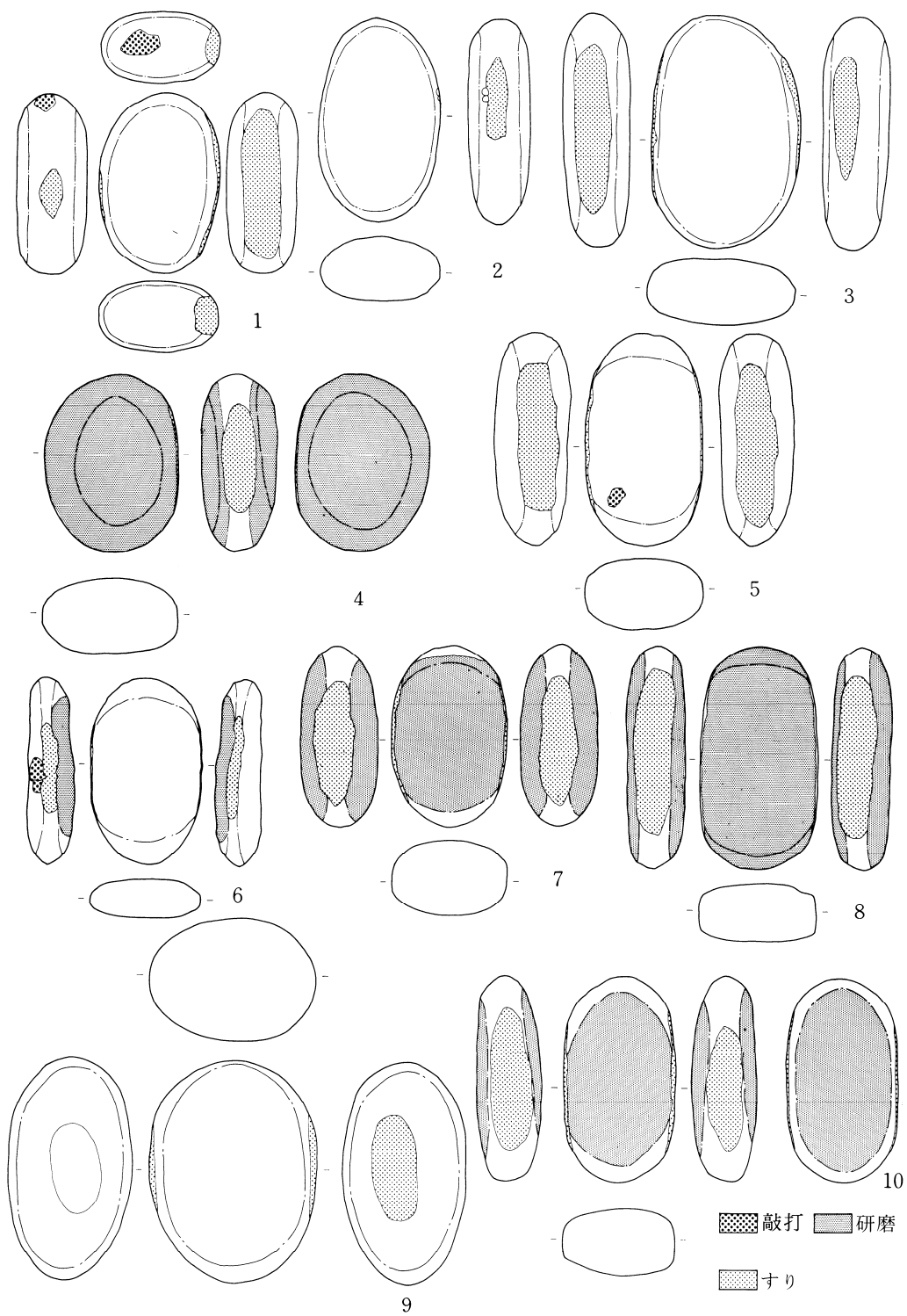
第112図 石器(18)、L-I A類



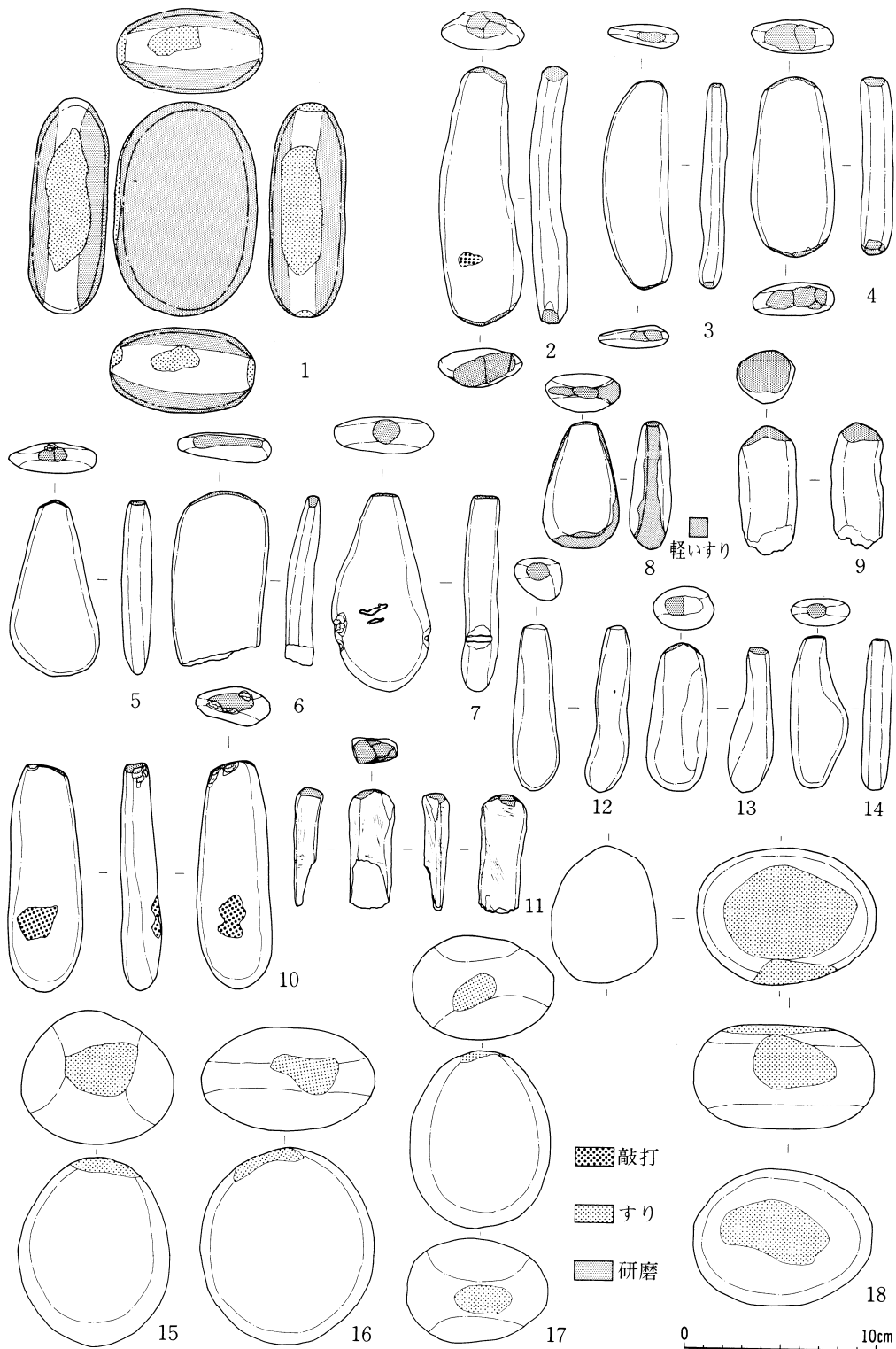
第113図 石器(19)、L-I A類



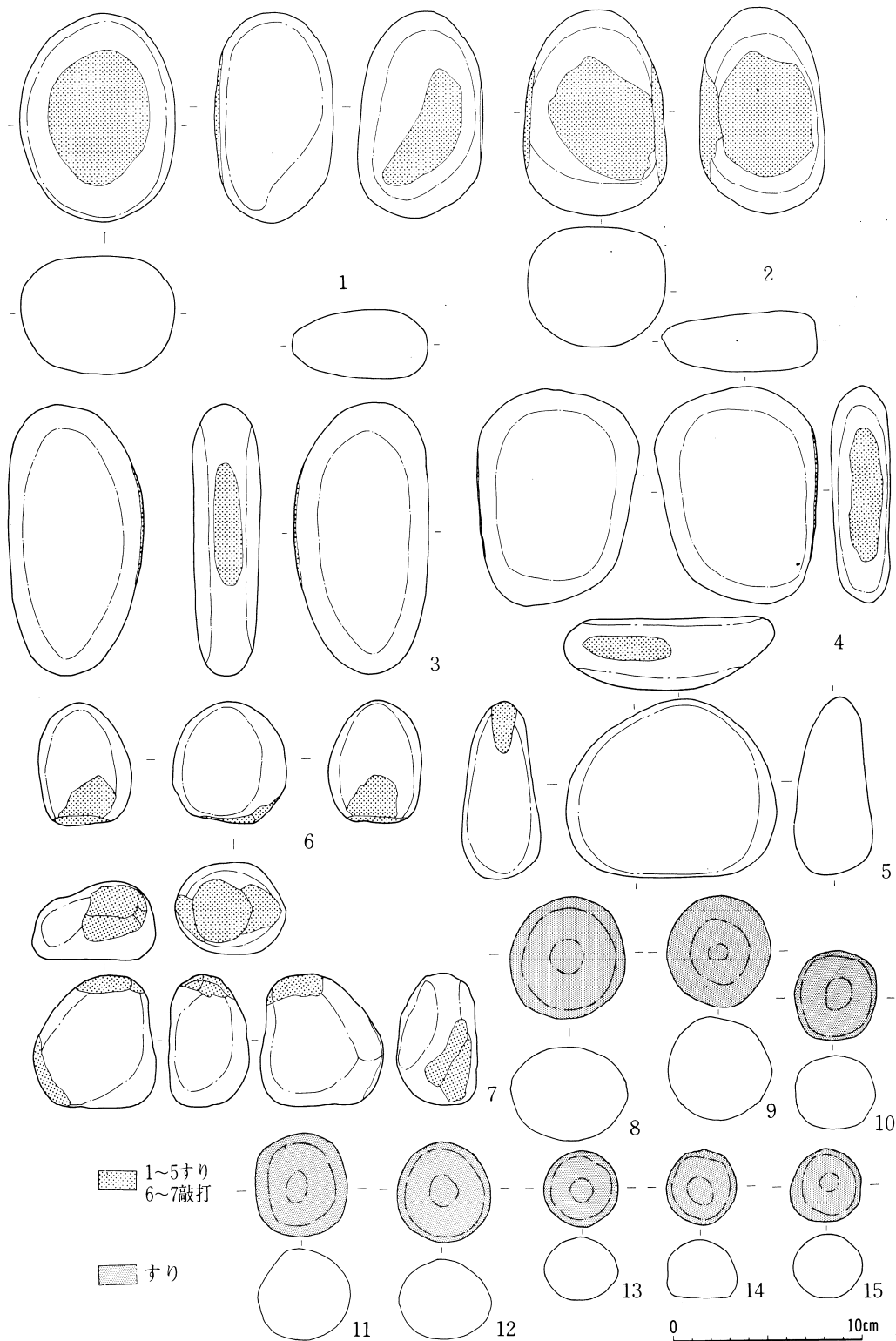
第114図 石器(20)、L-I B a~B c類



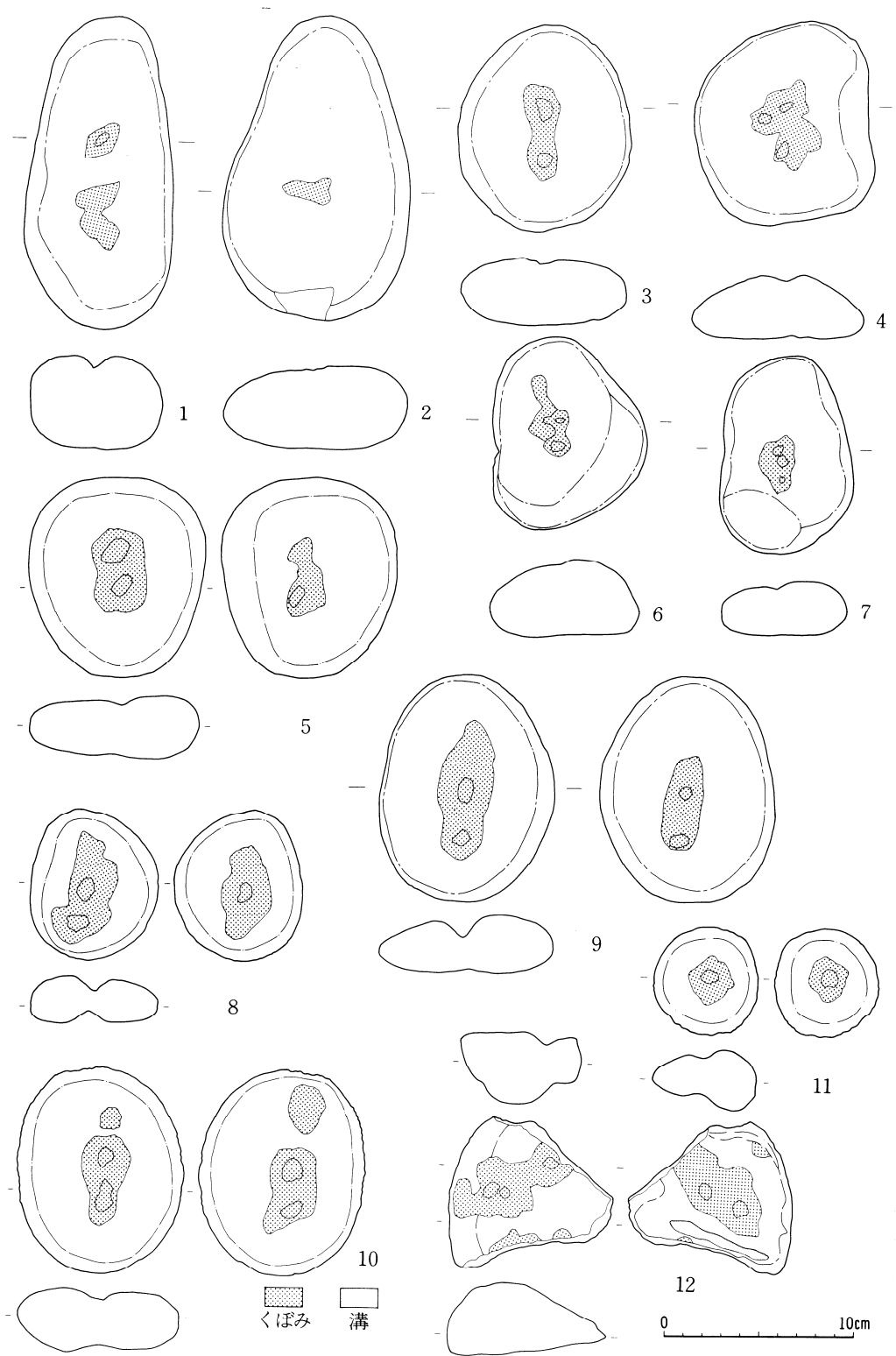
第115図 石器(21)、L-I Bc~Bd類



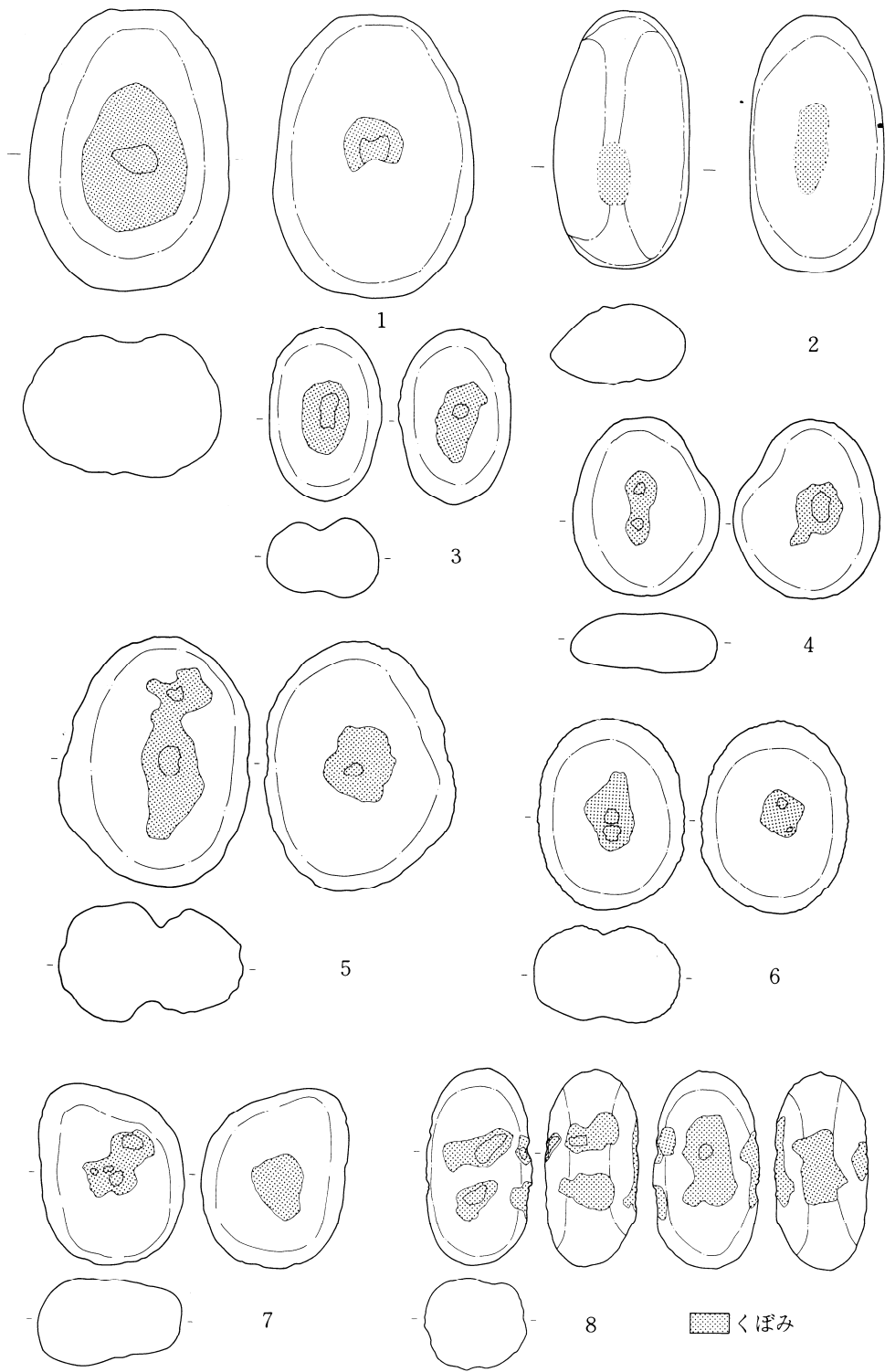
第116図 石器(22)、L-B e · L-I C · L-I E類



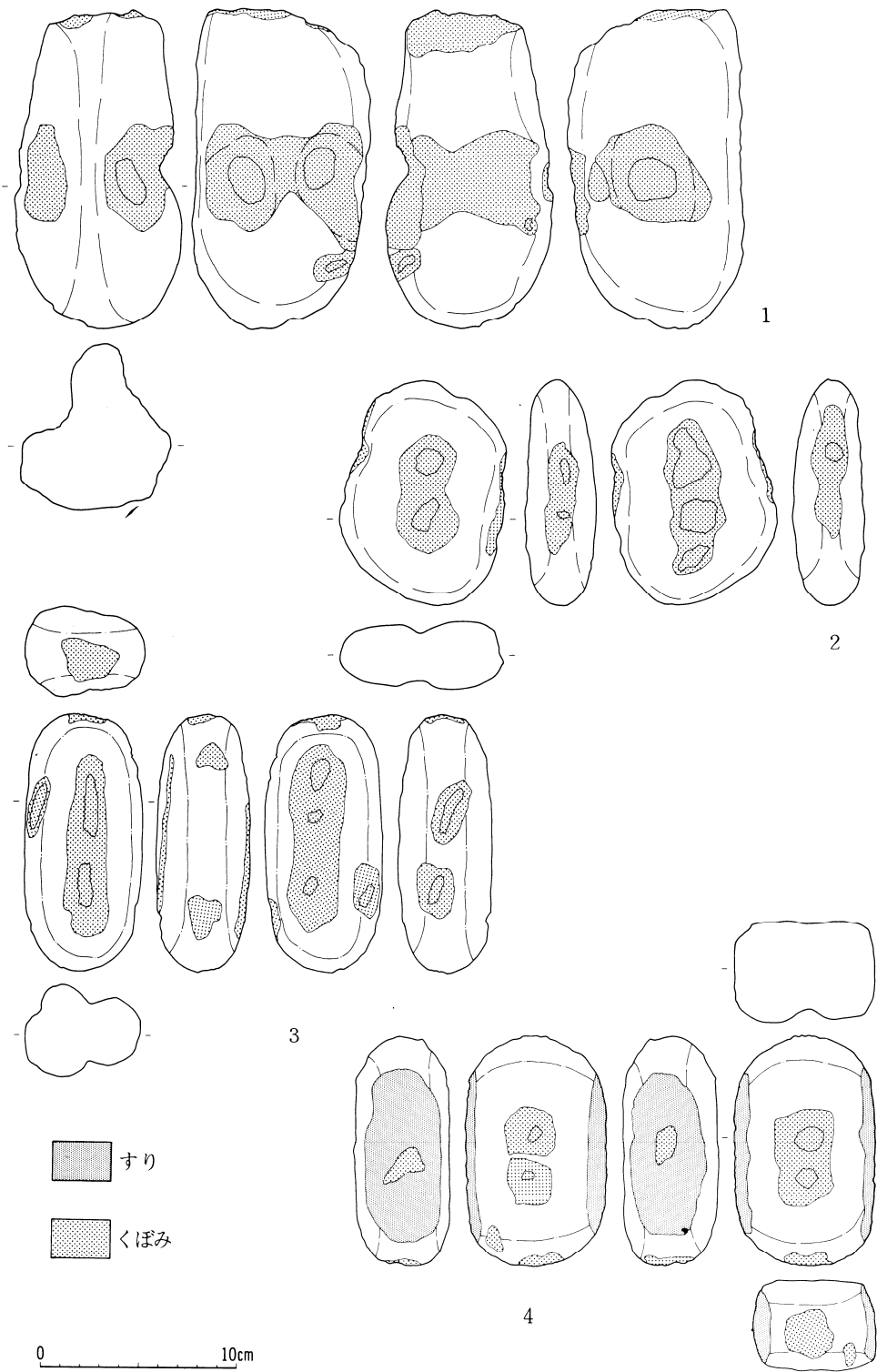
第117図 石器 (23)、L-I D・L-I E・L-I F・L-II類



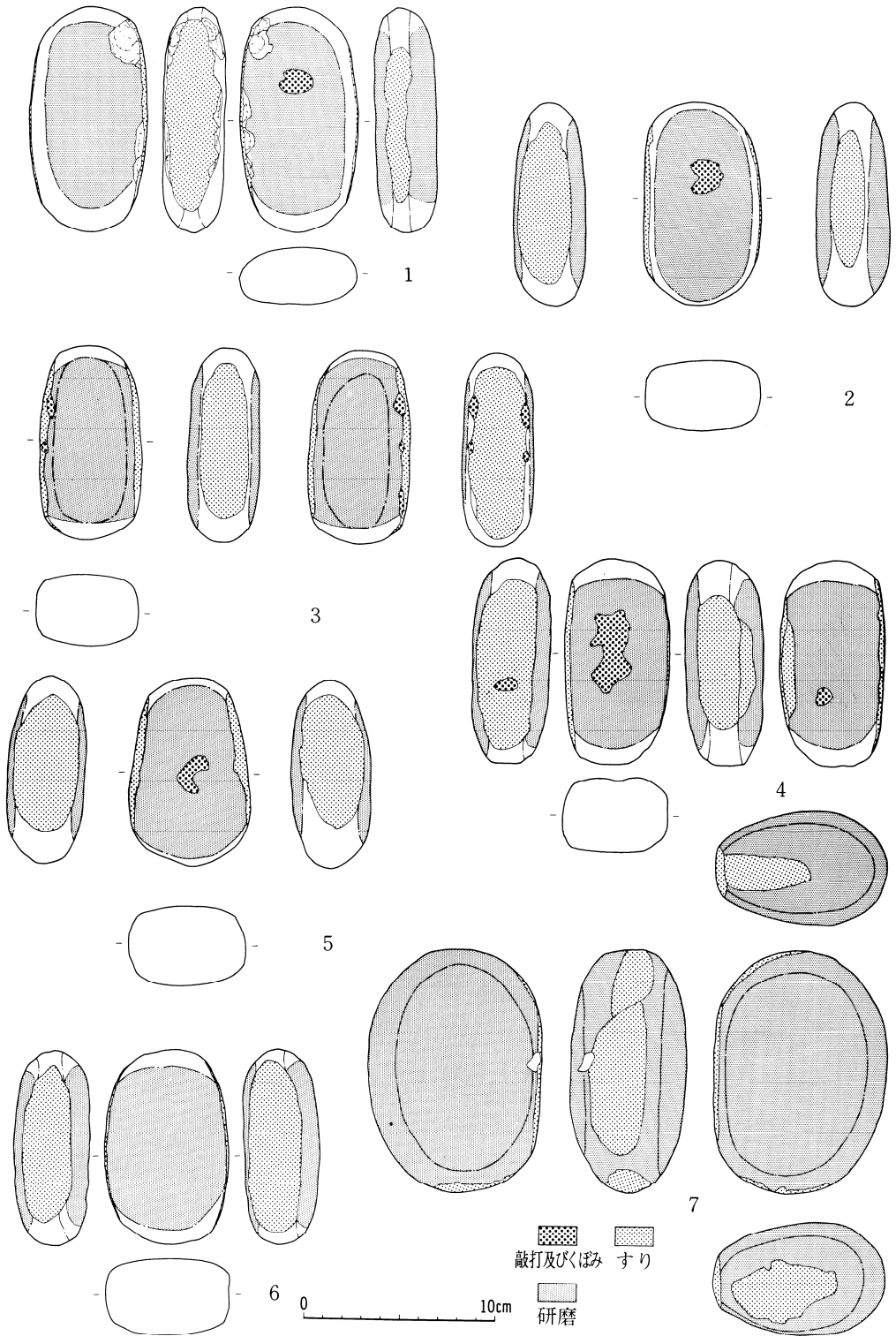
第118図 石器 (24)、L-Ⅲ類



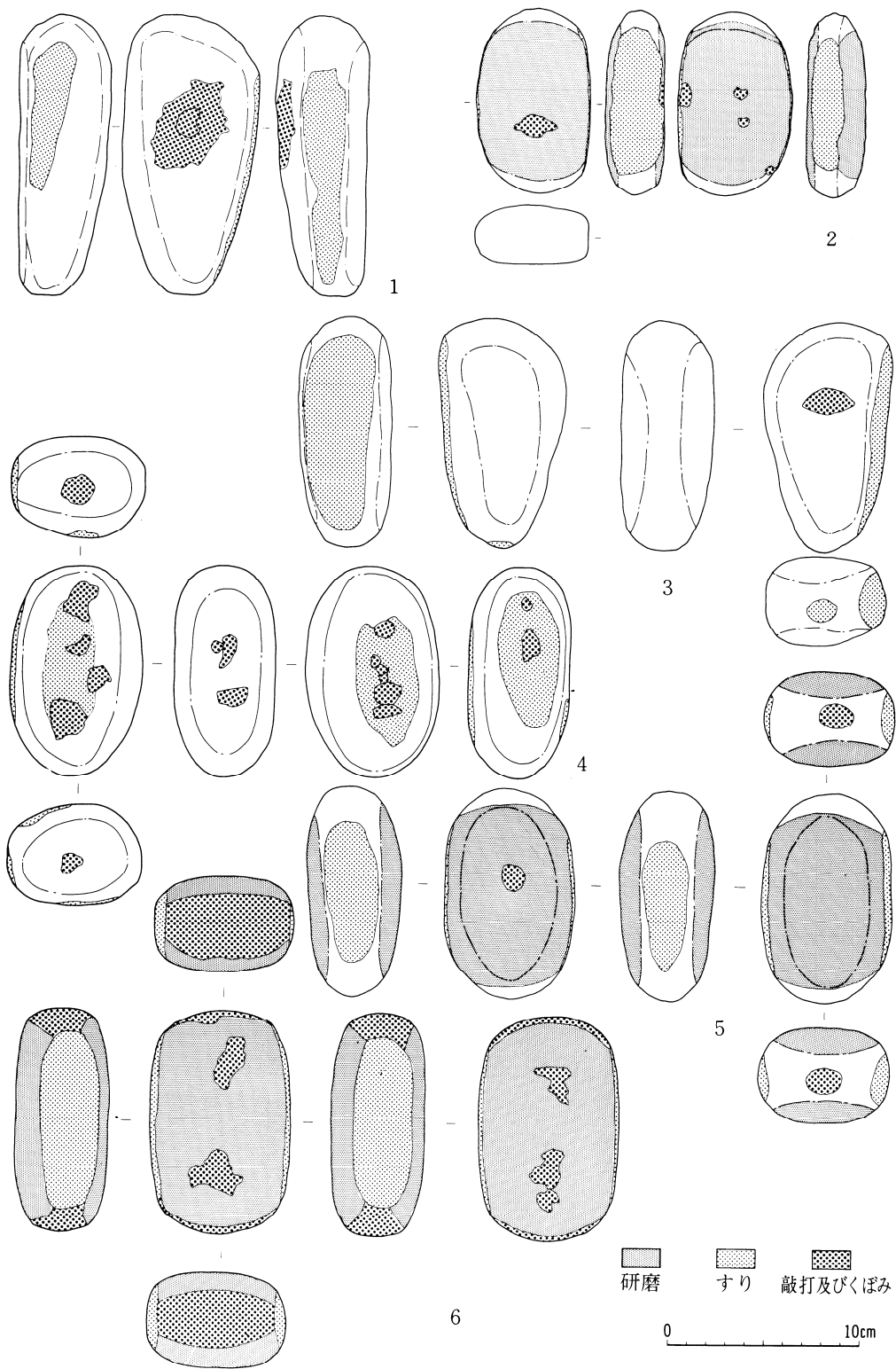
第119図 石器(25)、L-Ⅲ類



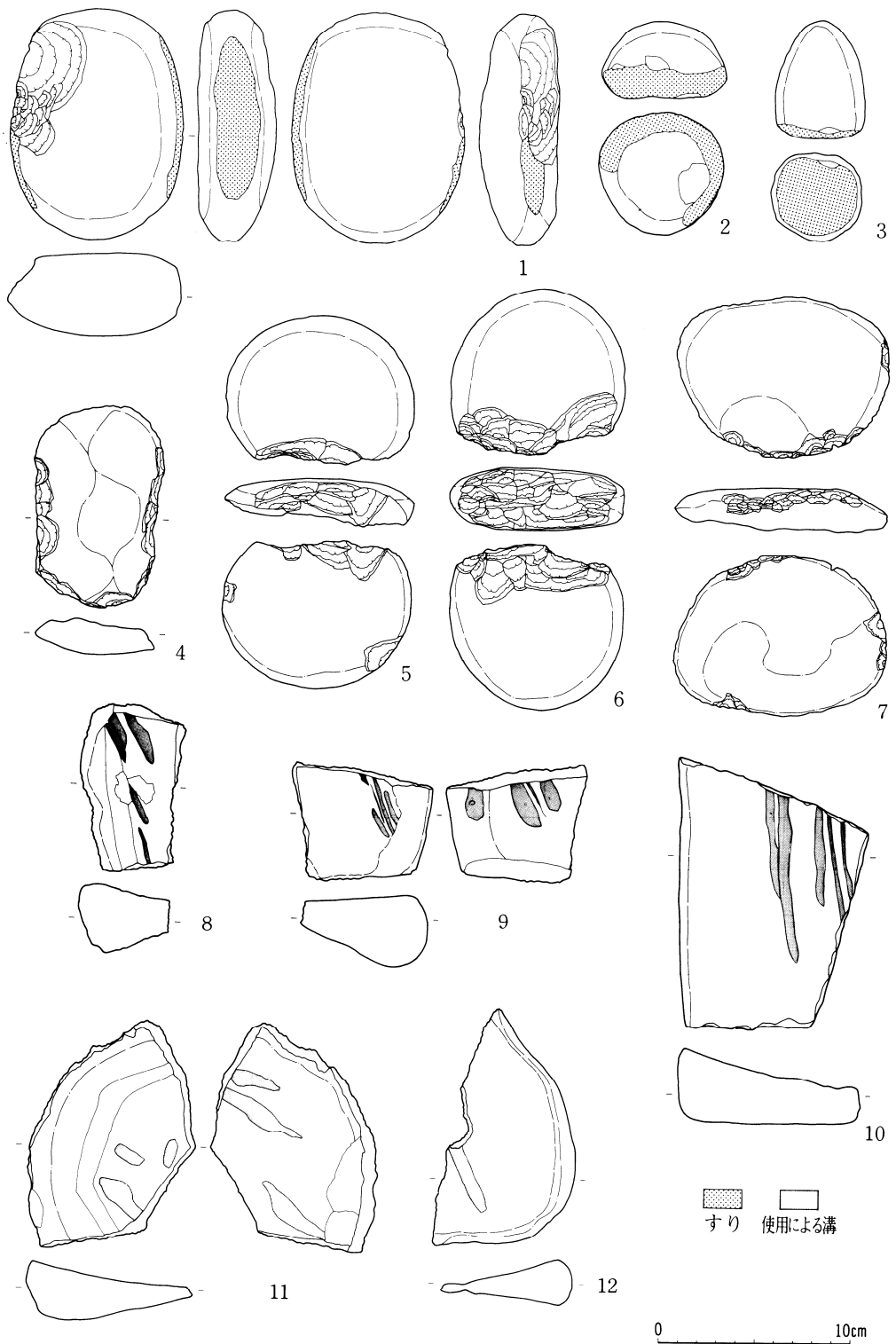
第120図 石器(26)、L-Ⅲ類



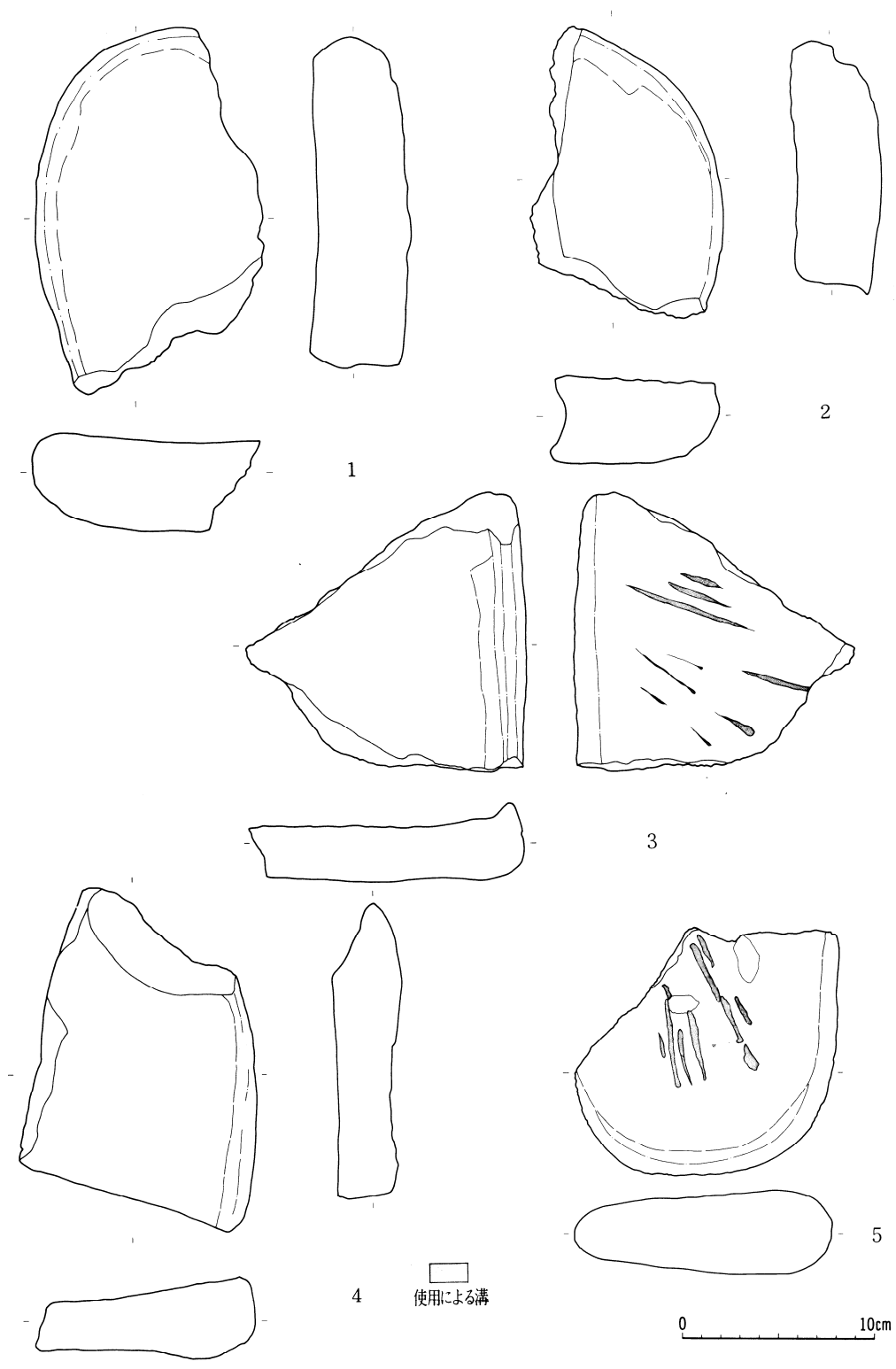
第121図 石器(27)、L—Ⅳ類



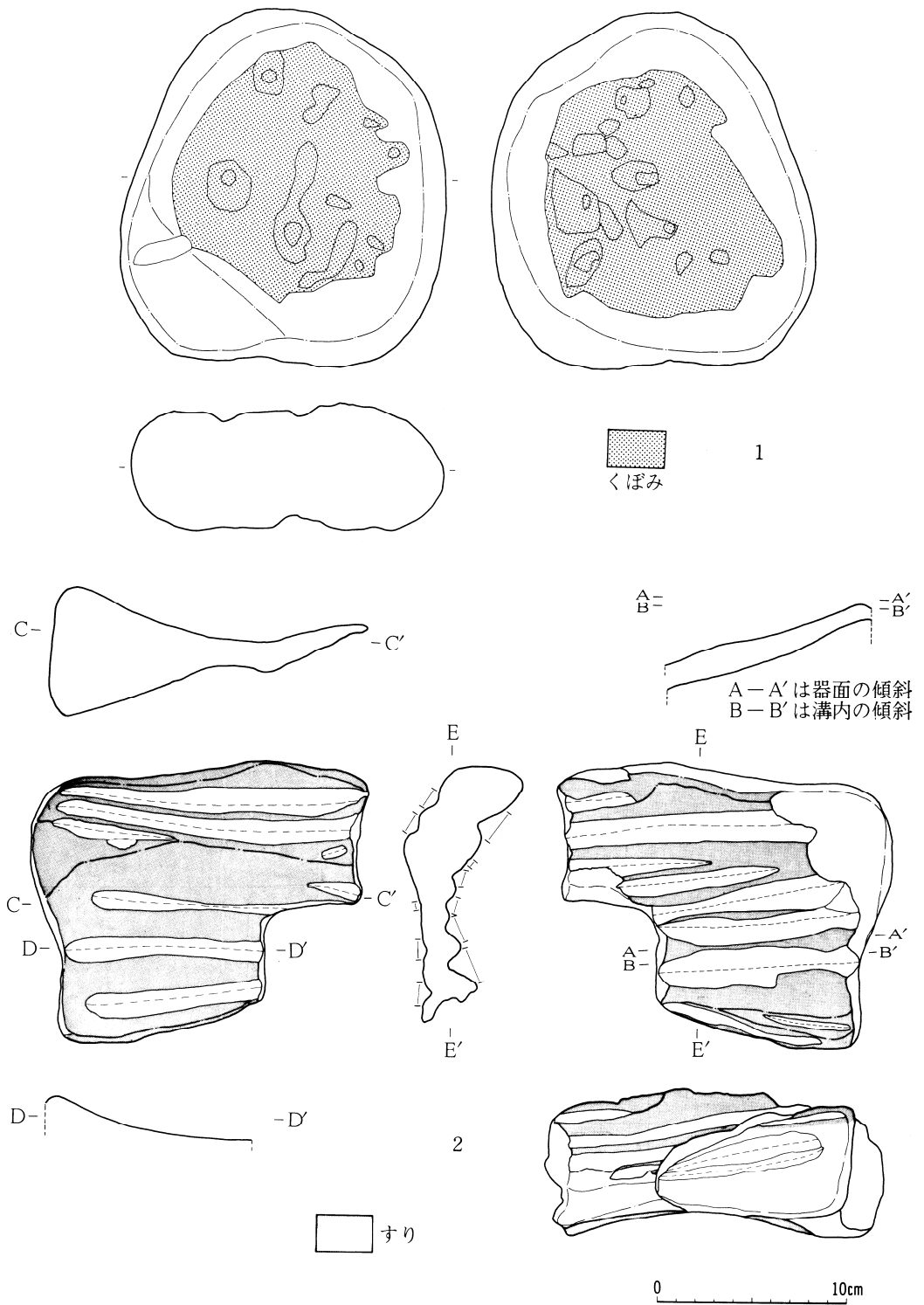
第122図 石器(28)、L-IV類



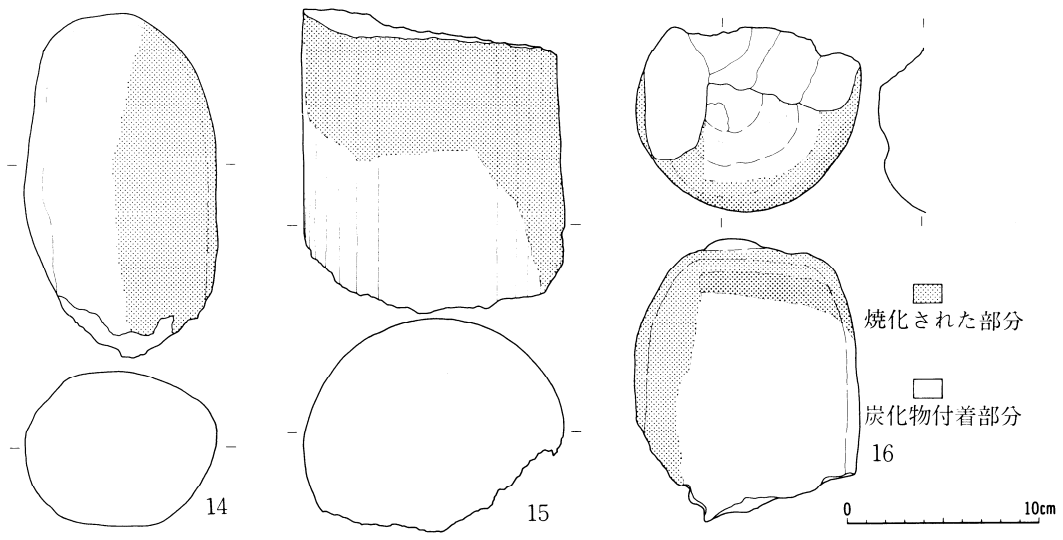
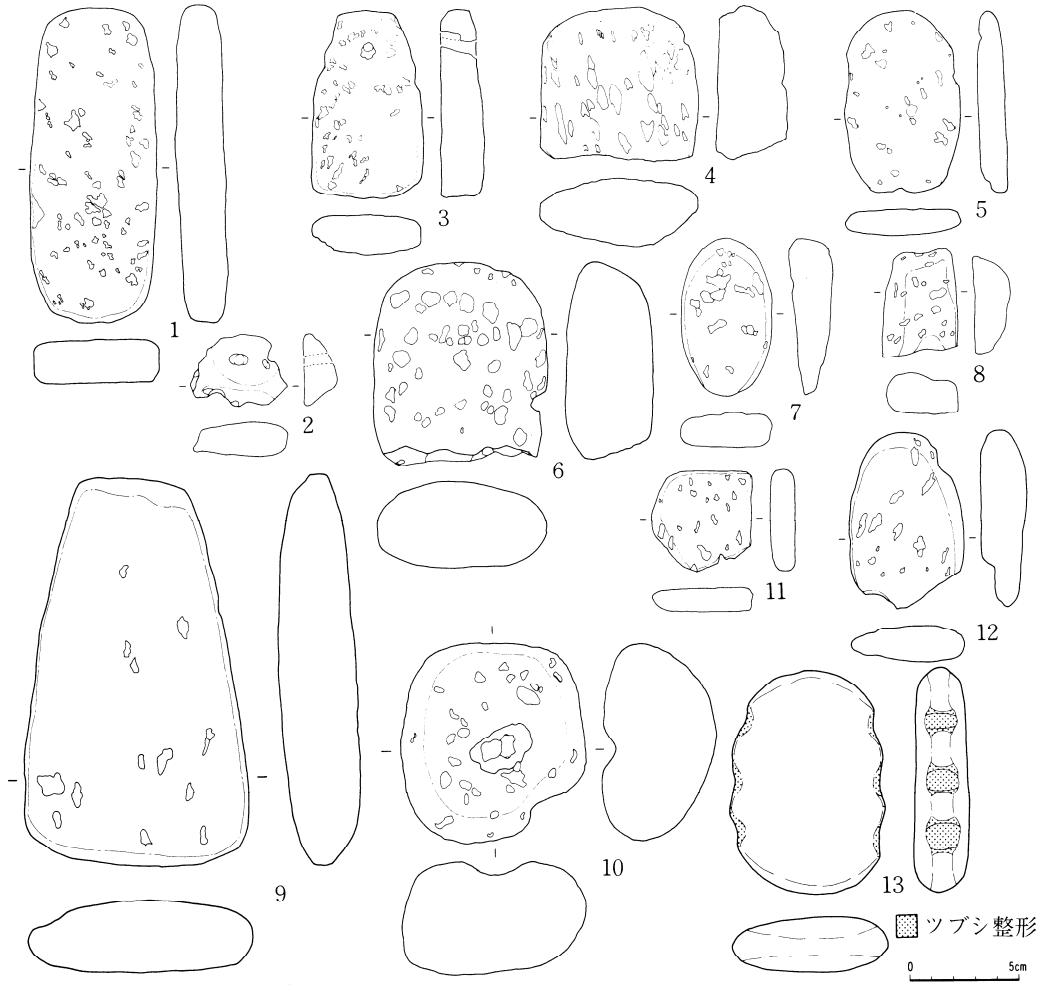
第123図 石器 (29)、L-V類・M類



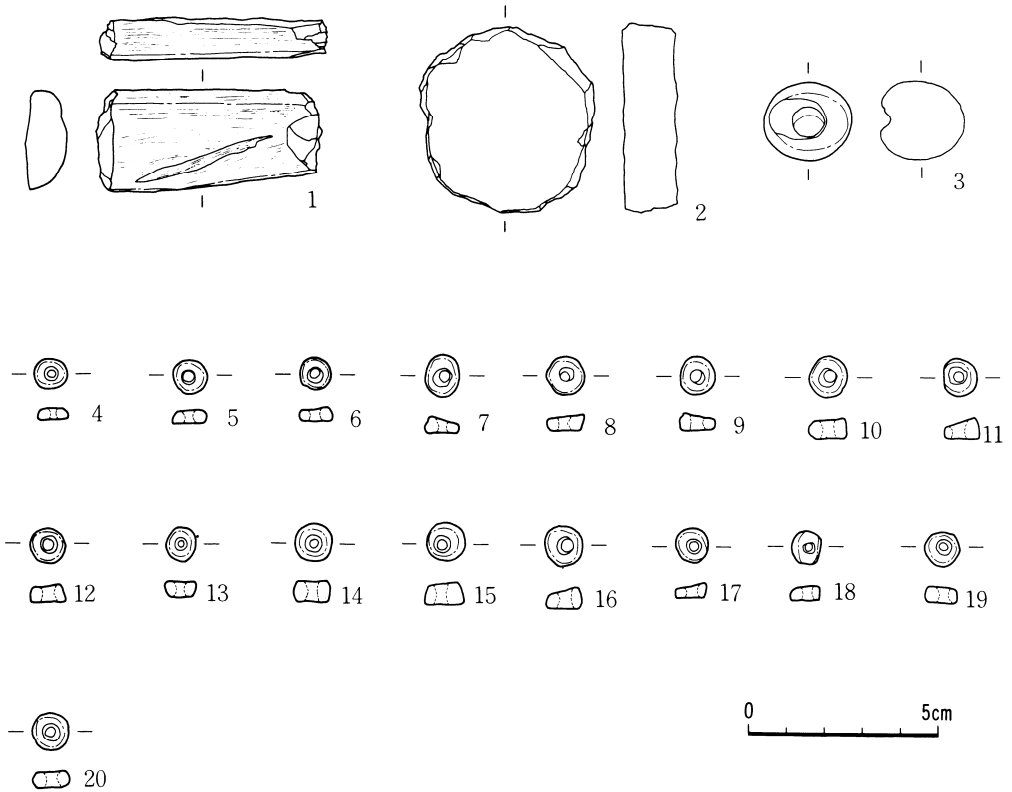
第124図 石器 (30)、M類



第125図 石器(31)、M類



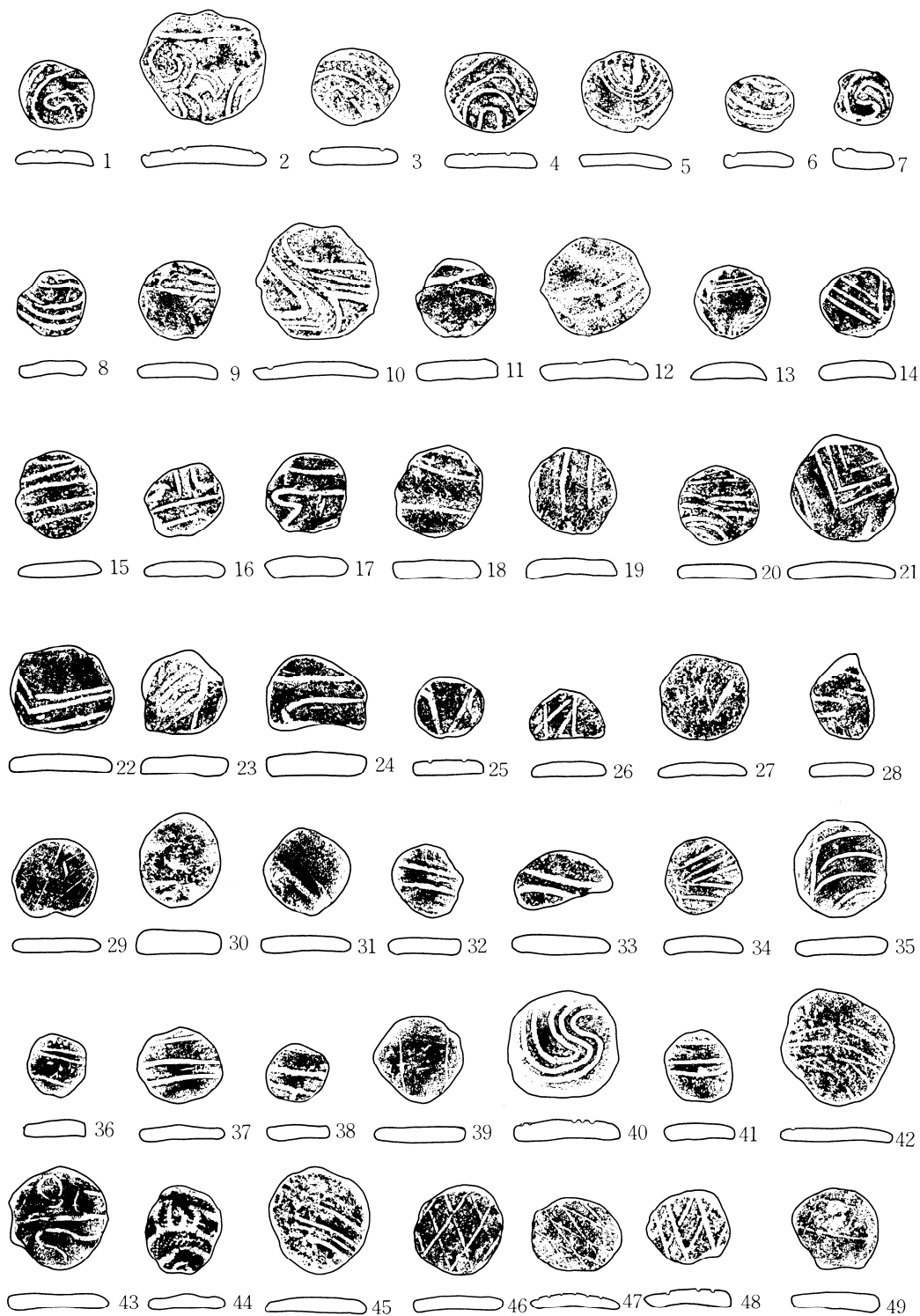
第126図 石製品実測図(1)



第127図 石製品実測図（2）

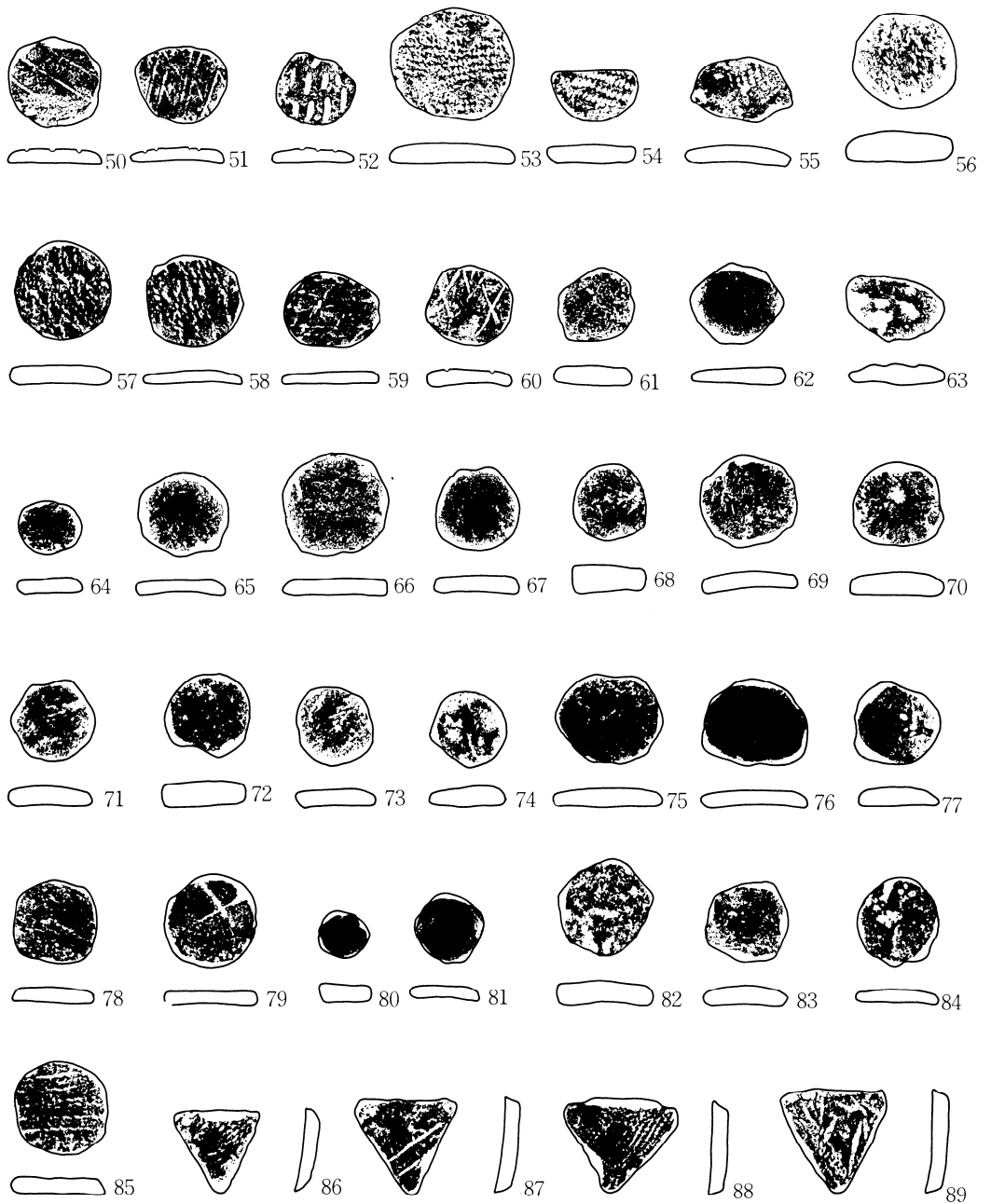
第7表 4号土壌出土有孔石製品（玉）計測表

整理番号	挿図No.	外 径mm		穿口径mm		厚さmm	重量g
		長径×短径	外	内			
1	127図-4	9 × 7.5	4	2.5	3	0.20	
2	5	8.5 × 8.5	3.5	3	3.5	0.25	
3	6	8 × 8	4	2.5	3.5	0.20	
4	7	11 × 9	5	2.5	4	0.41	
5	8	10 × 10	3.5	2.5	4	0.35	
6	9	10 × 9	4	3	4	0.32	
7	10	10.5 × 10	5	3.5	5	0.47	
8	11	10 × 9	5	2.5	5.5	0.42	
9	12	9 × 7.5	4.5	3	4.5	0.32	
10	13	8.5 × 7.5	3	1.5	4	0.25	
11	14	10 × 9.5	4.5	2.5	5	0.55	
12	15	10 × 10	4.5	2.5	6	0.55	
13	16	10.5 × 9.5	4.5	2.5	5	0.46	
14	17	8.5 × 8	4	2.5	3.5	0.25	
15	18	8.5 × 7.5	3	2	4	0.28	
16	19	9 × 9	4	2.5	4	0.32	
17	20	9.5 × 9.5	4.5	3	4	0.38	



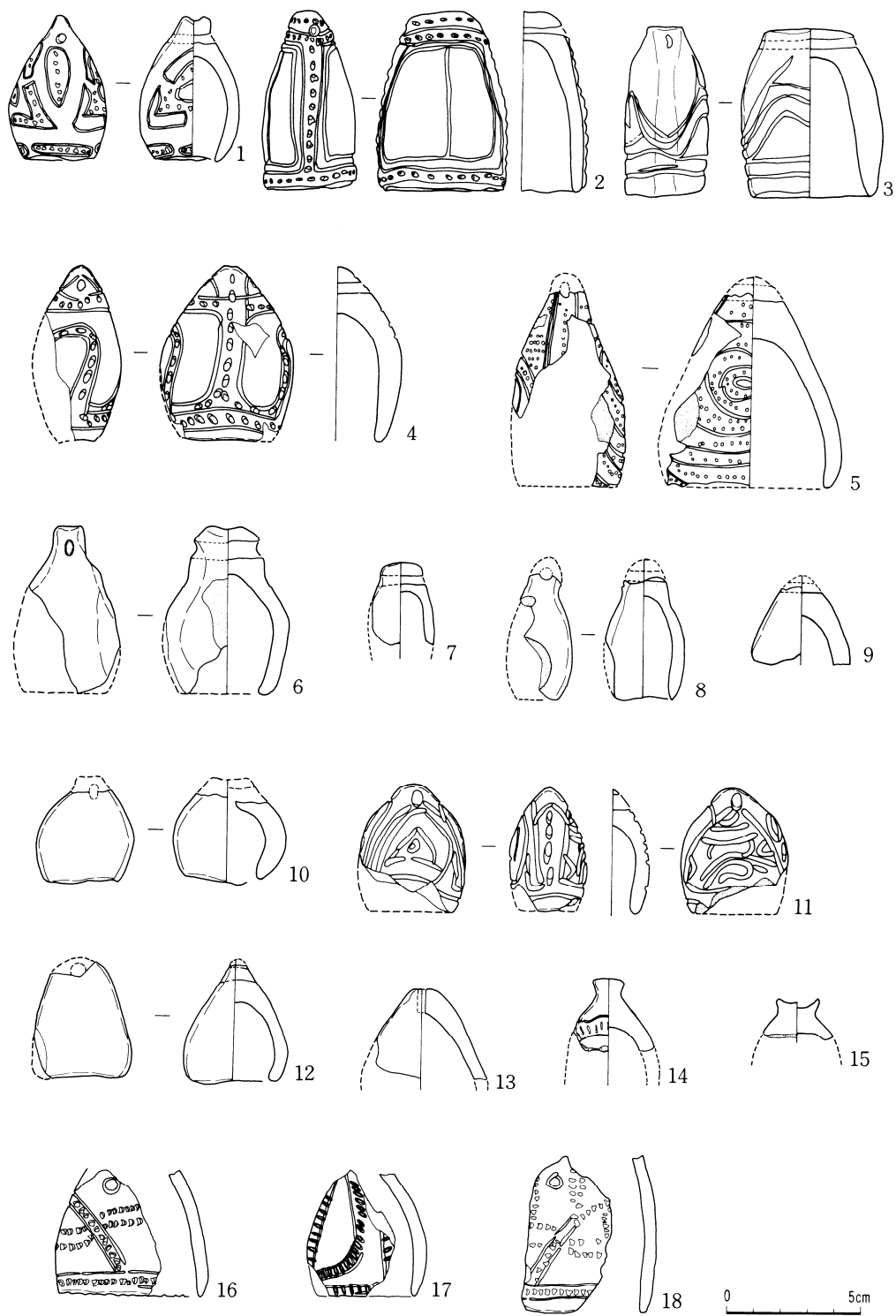
0 5cm

第128図 土製品実測図 (1)

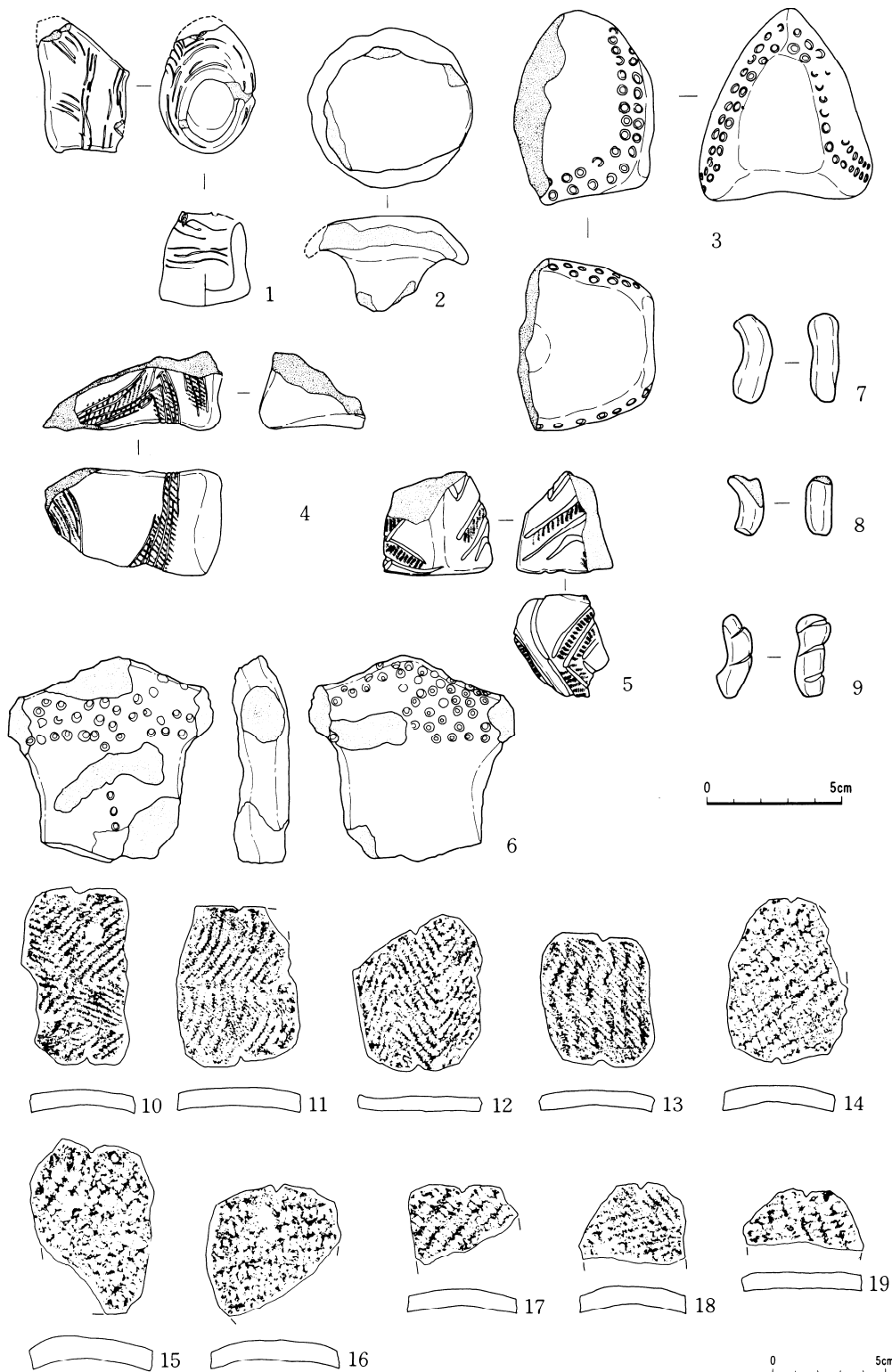


0 5cm

第129図 土製品実測図 (2)

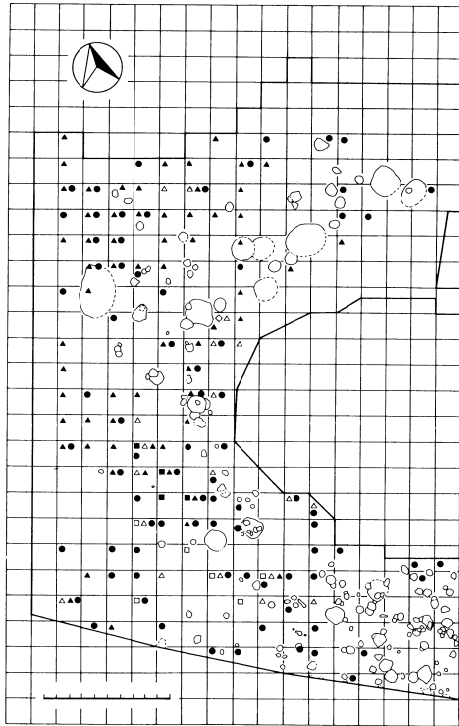


第130图 土製品実測图 (3)



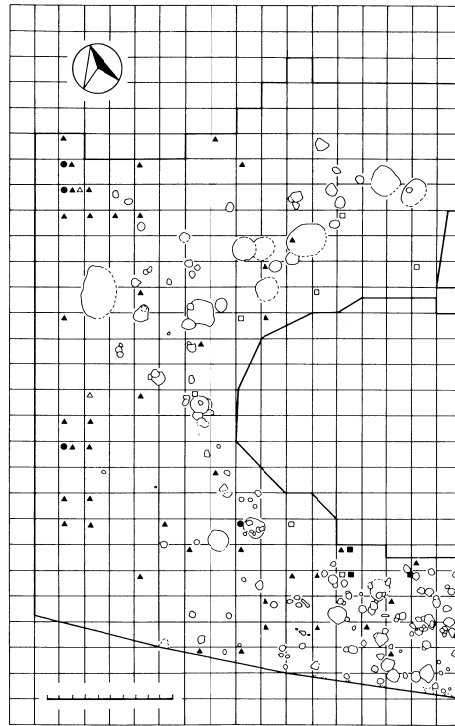
第131图 土製品実測図(4)

IV-1区 I群土器分布図



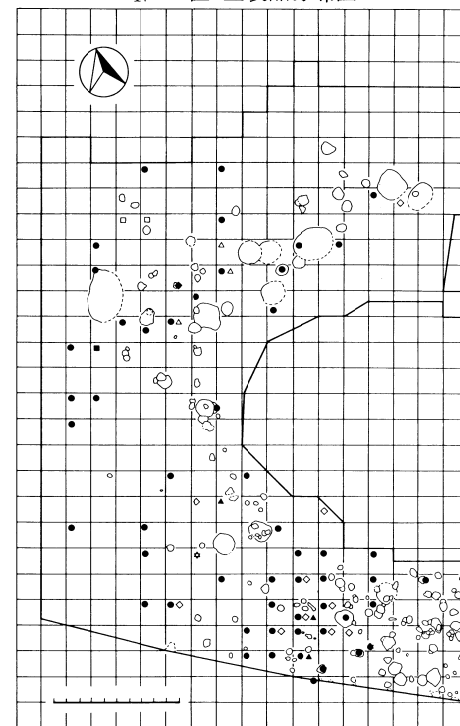
- ◇ I群1類 △ I群5類
- I群2類 ▲ I群6類
- I群4類 ● I群7類

IV-1区 II群・V群土器分布図



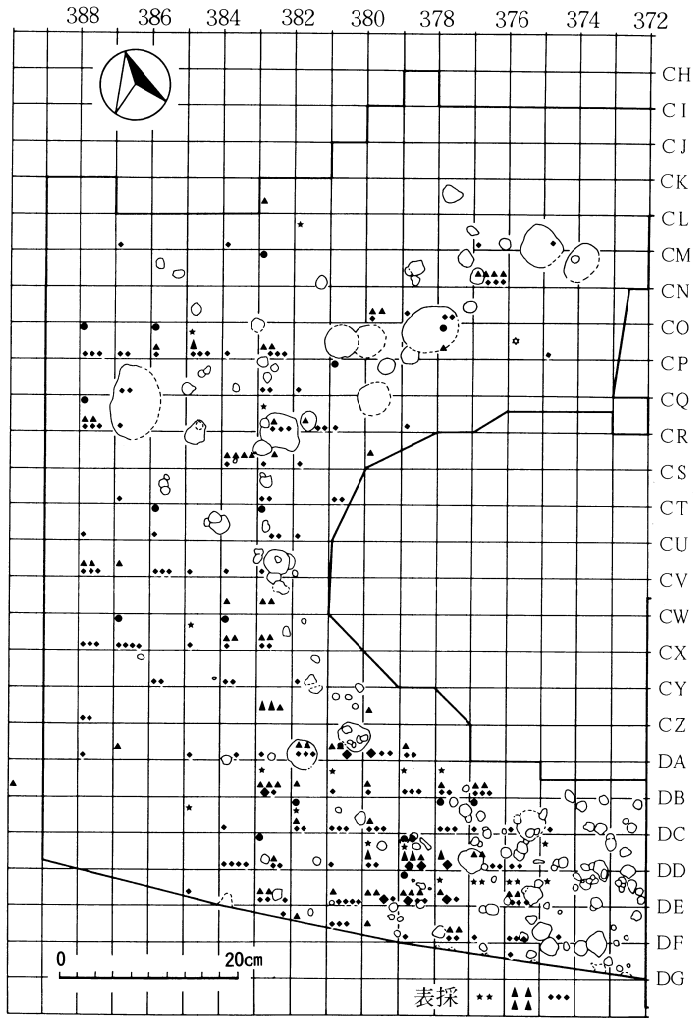
- II群1類 ■ II群4類
- ▲ II群2類 □ V群
- △ II群3類

IV-1区 土製品分布図

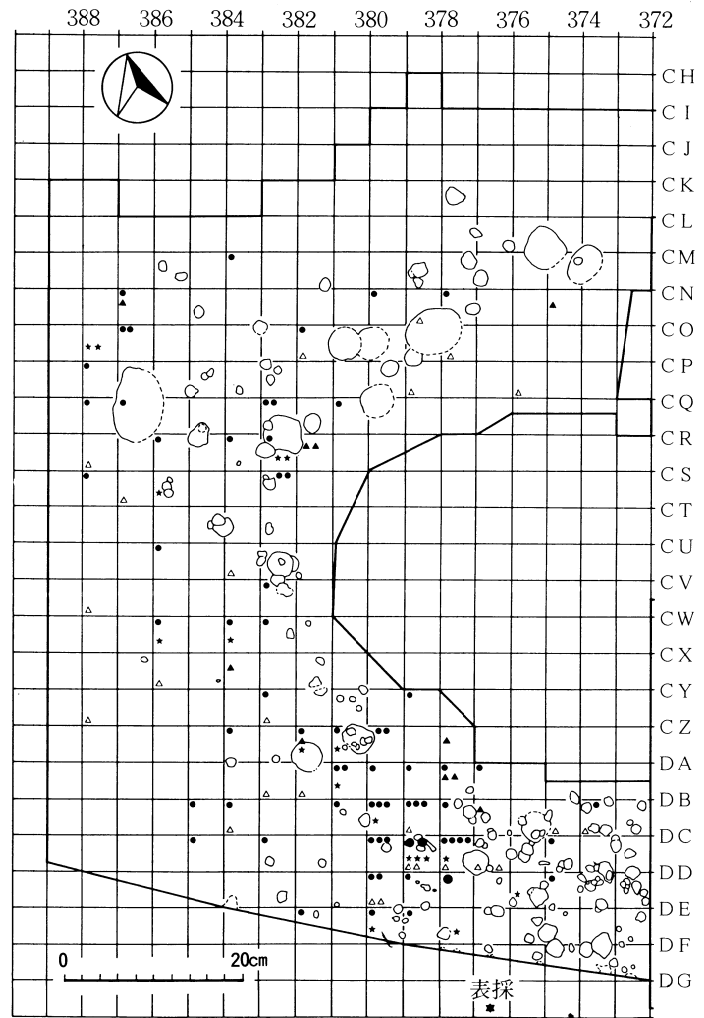


- 円盤状土製品 ▲ 三角柱状土製品
- △ 三角形土製品 ■ 土偶
- ◇ 鐸形土製品 ☆ 環状土製品
- ★ 葎形土製品 □ 土器片
- ◆ 靴形土製品

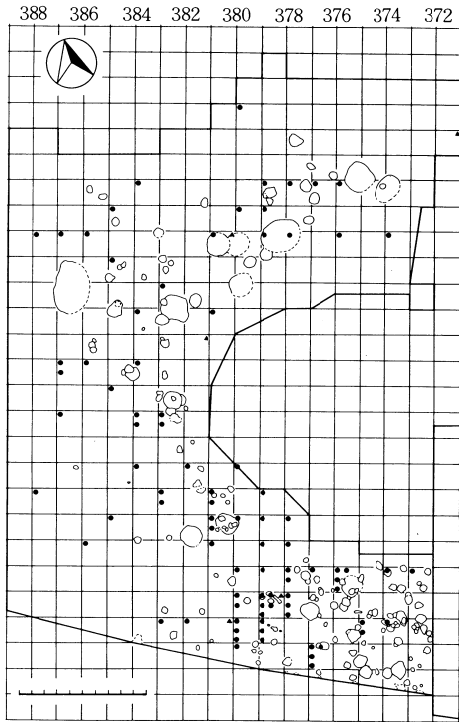
第132図 第I群・II群・V群土器及び土製品の分布図



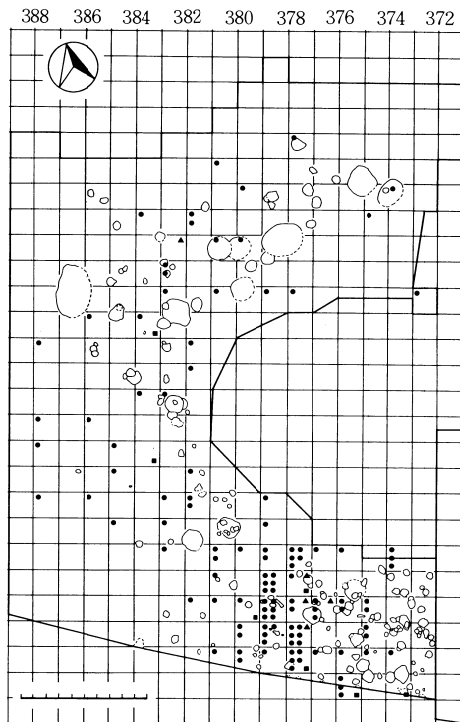
- E-I類
 - E-II類
 - G類
 - ▲ H類(1点)
 - △ (5点)
 - ◆ F類(1点)
 - ◇ (5点)
-
- A類(1点)
 - (5点)
 - ▲ B類
 - * C類(1点)
 - * (5点)
 - △ D類



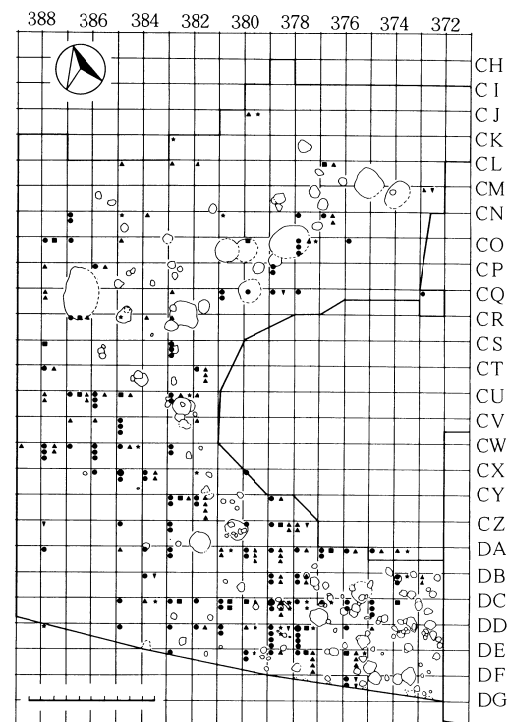
第133図 遺構外出土石器(A類~H類)分布図



- I類
- ▲ J類

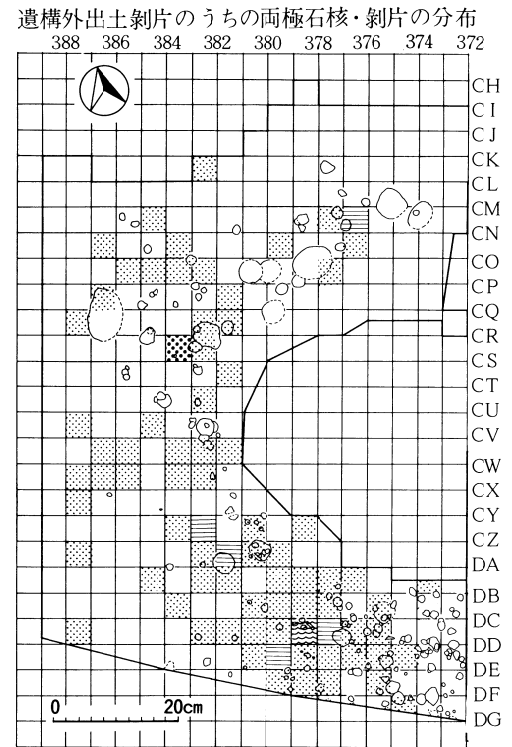
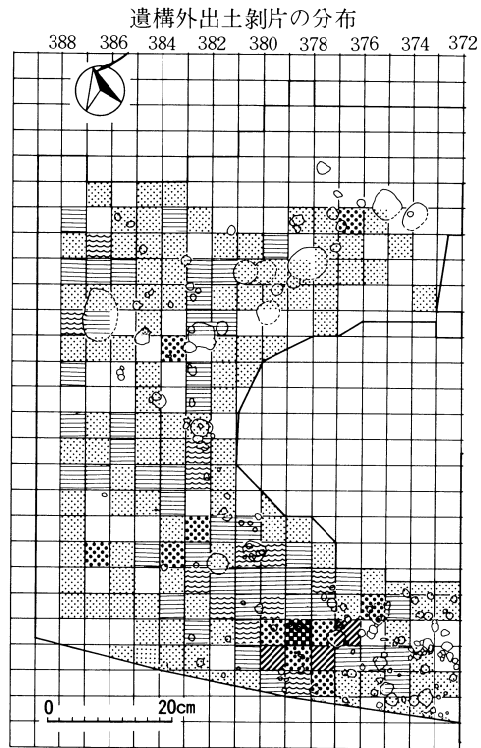
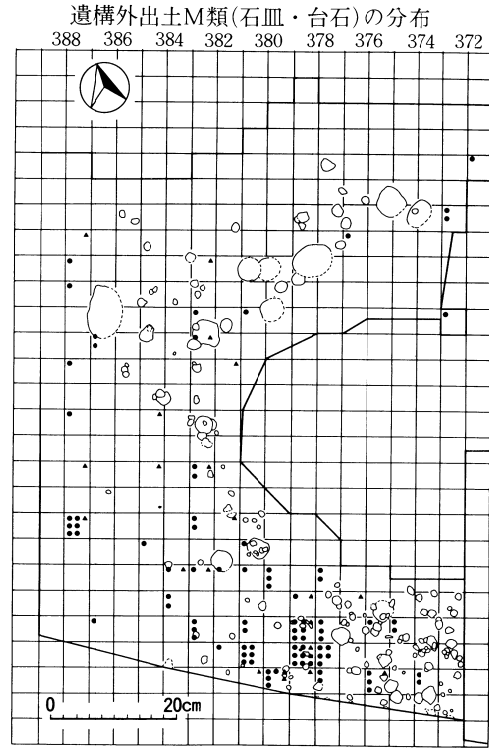


- ▲ K-I類
- K-II類
- K-III類



- 5点 L-I類
- 1点 L-I類
- ▲ 5点 L-III類
- ▲ 1点 L-III類
- 1点 L-II類
- ★ 1点 L-IV類
- ▼ 1点 L-V、VI類

第134図 遺構外出土石器 (I類~L類) 分布図



● I類(石皿)

▲ II類(台石)

9点以下

~29点

~49点

~99点

~199点

200点以上

第135図 遺構外出土石器(M類)及び剥片分布図

第2節 V区

1. 検出遺構

(1) 溝状ピット

V-4区で11基検出した。各溝状ピット（以下ピットという）の位置及び計測値は一覧表にまとめた。（第8表）

〈平面形状〉

溝状を呈し、幅が狭く細長いもの・葉巻形のもの・やや幅広のずんぐりしたものがある。

〈断面形状〉

長軸上では、開口部が底面より長いもの・短いもの・ほぼ同一なものがある。壁面の形状は、垂直なもの、一様な傾斜をもつもの、袋状のものがある。

短軸上では、Y字状・V字状等の形態がある。

〈検出層位〉

第3・4号ピットは試掘トレンチの断面から第Ⅲ層を掘り込んでいることを確認した。他のピットはすべて地山面での確認であり、掘り込まれた層位は不明である。

〈重複〉

第7・8号ピットは、約45°の角度で重複しており、8号が新しい。

〈長軸方向〉

方向に規則性は認められないが、第8号ピットが等高線に直行しているのを除くと、おおむね等高線に平行である。

(2) 土壌

B C-254グリッドに位置する。直径40cm・深さ45cmの柱穴状の土壌である。周囲を拡幅したが、ほかには確認されず、単独での存在である。（一条）

第8表 溝状ピット計測表

番号	グリッド	長 (cm)			幅 (cm)			深さ (cm)	長軸方位	備考
		上	中	下	上	中	下			
1	YS169	333	303	252	83	32	17	83~102	N-2.5°-E	
2	YS・YT174	310	318	335	121	49	32	128	N-15.5°-W	
3	ZK・ZL170	—	—	—	18	—	9	—	N-35.0°-E	
4	ZK・ZL166	—	—	—	21	—	15	131	N-23.5°-E	
5	AB・AC158・9	382	357	359	100	26	14	153	N-55.0°-E	
6	AJ163	385	372	371	66	23	16	122~130	N-58.0°-E	
7	ZW・ZX155	—	408	448	54	24	23	80~117	N-21.0°-E	旧
8	ZX・ZY155・6	320	312	366	76	32	24	94~134	N-66.5°-E	新
9	AH147・8	366	345	324	83	25	14	132	N-60.5°-E	
10	AL・AM152	394	382	356	82	24	16	145	N-15.0°-E	
11	ZN・ZO176	406	369	367	50	14	11	123	N-79.0°-E	

2. 出土遺物

(1) 土器 (第140図～第141図)

(ア) I群土器

I群1類 (5)

(AH-148) グリッドより1点出土した。表裏面に貝殻条痕が施される。

I群6類 (6～9)

(ZH-264) グリッドより4点出土した。器面に沈線文が施され、内面には貝殻条痕が施される。

I群7類 (10)

(BD-157) グリッドより出土した。単節斜縄文(LR)が施される。胎土には、繊維の混入が認められる。

(イ) III群土器

II群5類 (11)

(ZX-214) グリッドより1点出土した。胴部片で、木目状擦糸文が施される。胎土には、細かな砂粒を含み、少量の繊維の混入が認められる。

(ウ) III群土器

III群3類 (12～23)

V-2区より主に出土した。V区出土器の中では最も多い。

器形は、やや胴部が張り、口縁部が外反しながら立ち上がる深鉢形である。平縁(14、15、17、20、21)と波状縁(18、19)がみられるが、波状縁のものは口唇部近くでやや内湾する。底部片が2点(22、23)あるが、外周縁がやや外へ張り出す。

文様は、口縁部から胴部付近までの文様から5類に分類できる。

a類：(1、12～14) 地文の斜縄文を施した後に、沈線文を施すものである。(1)は、いわゆる波頭状文をなす。

b類：(15～17) 地文の斜縄文を施した後に沈線文を施し、沈線で区画した内側、又は外側を磨消縄文の技法により磨り消すものである。沈線文には、破片のため明確ではないが、U字状文、∩状文、波頭状文と思われるものがみられる。

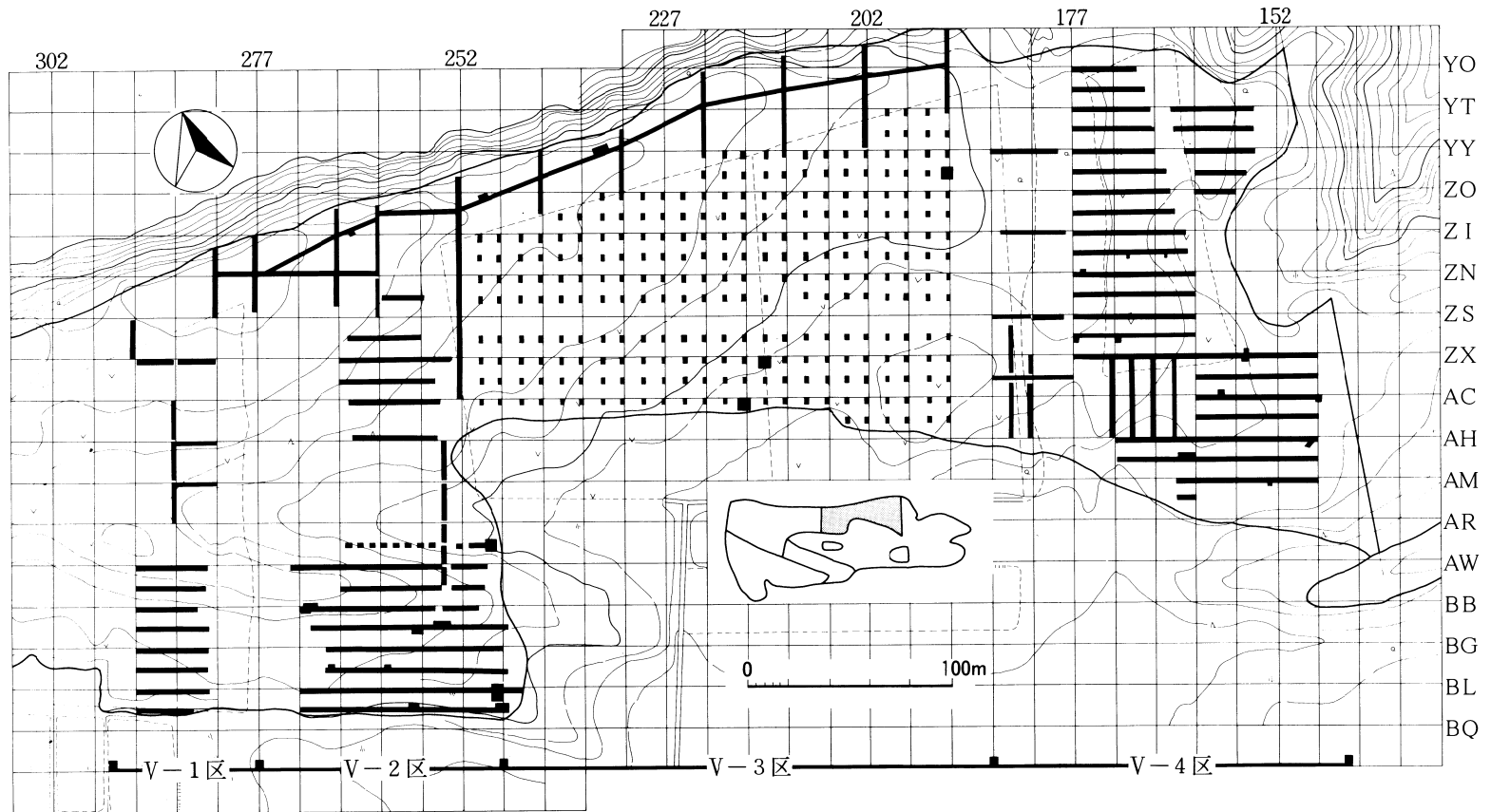
c類：(2)は、沈線文で区画した中に、縄文が充填されるものである。

d類：(18、19) 沈線文、隆帯文、刺突文、ボタン状突起が施されるものである。

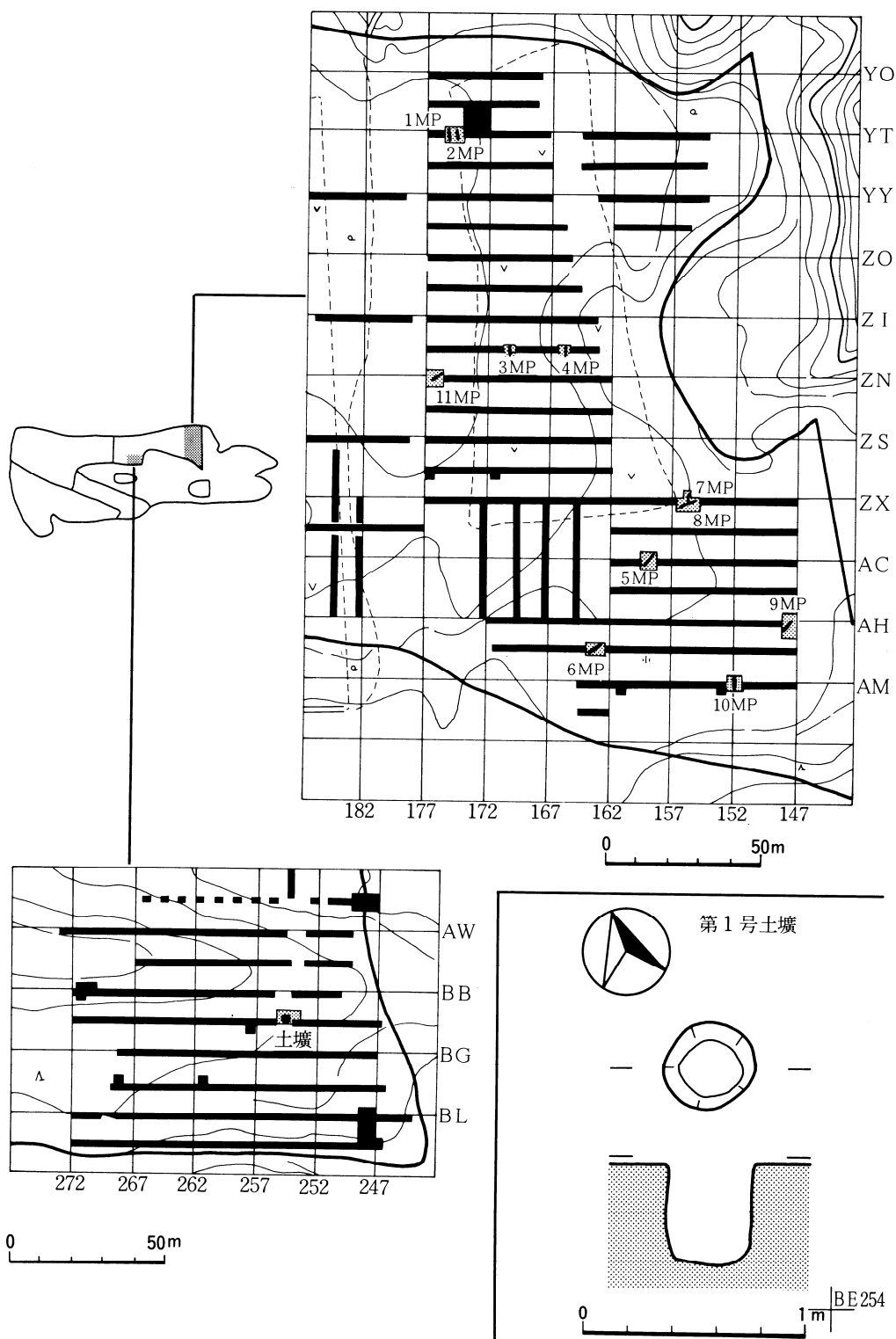
e類：(20、21) 器面に斜縄文のみを施すものである。

以上、5類に分類したが、地文の縄文には、LR、RL共にみられ、縦位回転によるものが多い。また、底面には網代痕がみられる。

内面は、平滑に調整されている。胎土には、多量の砂粒を含む。色調は、暗褐色、黒褐色を



第136図 V区グリッド配置図



第137图 V区遺構配置図

呈し、器厚は9～11mmである。

(エ) IV群土器 (第140図3、第141図25～31)

完形品1個体と破片が少量出土した。(3)は、胴部がやや張り、口縁部が外反する深鉢形土器である。口唇直下に2条の沈線が巡り、それ以下の胴部は無文で、器面はよく磨かれている。胎土には、砂粒を含む。(口径21.2cm、底径8.5cm、器高26.4cm)

(25～31)は破片で、文様には沈線文、隆帯文がみられる。

(オ) V群土器 (第141図32～34)

(32、33)は、(ZD—249)グリッドより出土したが同一個体である。口唇部にB字状突起をもつ、粗製の深鉢形土器で、口唇部には刻み目が施される。

文様は、口縁部に5条の平行沈線文が施されるが、1条目の沈線は、B字状突起部分で山形状をなす。更に、1条目と2条目、3条目と4条目の間には、連続刺突文が施される。胴部には、単節斜縄文(O段多条LR)が施される。

胎土には、少量の砂粒を含む。色調は暗褐色を呈し、器厚は5mmほどである。

大洞C1式に相当するものと思われる。

(34)は、(YQ—222)グリッドより出土した。胴部上端から内側に屈曲し、口縁部が内側に傾斜しながら立ち上がり、口唇部付近が外反する粗製の深鉢形土器である。

文様は、口縁部に6条の平行沈線文が施され、胴部には斜縄文(RL)が施される。口唇部近くの内面にも1条の沈線が巡る。

胎土には、細かい砂粒を含む。色調は暗褐色を呈し、器厚は7mmほどである。

縄文時代晩期後半の土器と思われる。

(カ) 第VI群土器 (第140図4)

(AT—249)グリッドより、逆さのまま潰れた状態で出土した。器形は、平縁の台付浅鉢形で、口縁部と胴部の境に段をもつ。口径21.1cm、器高11.6cm、台部径8.6cm、台部高2cm、器厚5mmとなる。

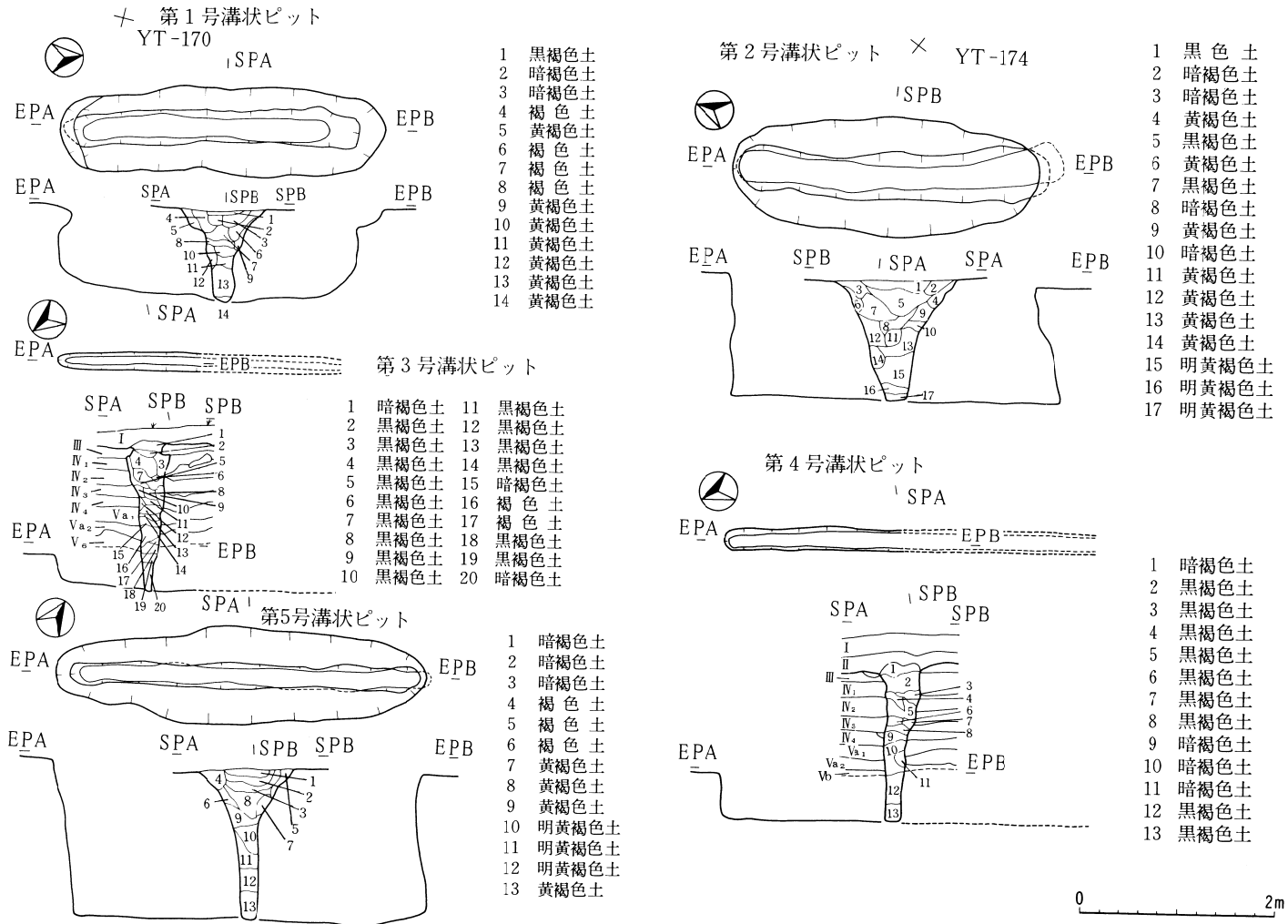
文様は、口縁部には変形エ字文(4単位)が2段巡り、口縁部と胴部との境には、列点文1段、沈線2条が巡る。胴部には沈線文が施されるが、磨耗により文様構成は不明である。

内面は、横位調整により平滑になっている。胎土には、砂粒を含む。焼成はあまり良くなく全体的にもろい。色調は、暗黄褐色を呈する。

弥生時代の二枚橋式に相当すると思われる。(一条)

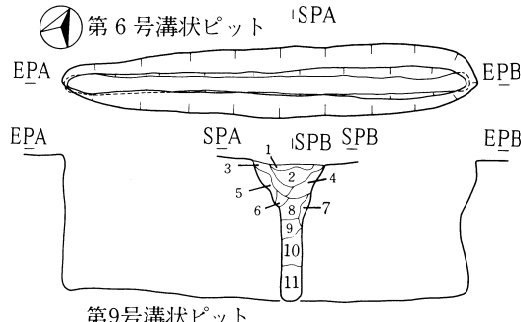
(2) 石器

フレーク3片と、礫46点が出土した。石器はK類(石錘)1点・L—I類(スリ石)2点でいずれも散発的な出土であった。(白鳥)



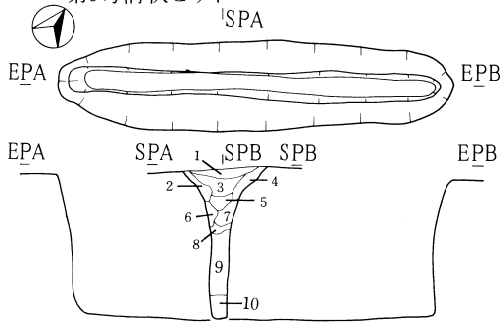
第138図 V区溝状ピット実測図(1)

0 2m



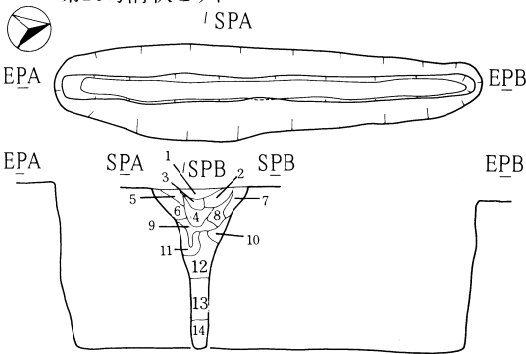
- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 褐色土
- 4 褐色土
- 5 黄褐色土
- 6 褐色土
- 7 黄褐色土
- 8 黄褐色土
- 9 黄褐色土
- 10 黄褐色土
- 11 黄褐色土

第9号溝状ピット

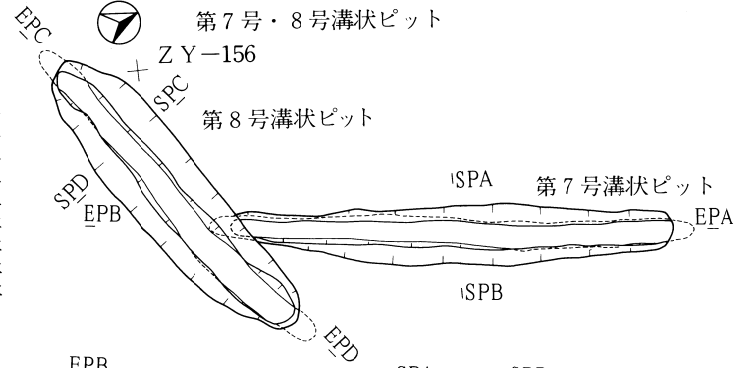


- 1 黒褐色土
- 2 褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 黄褐色土
- 7 黄褐色土
- 8 黄褐色土
- 9 褐色土
- 10 褐色土

第10号溝状ピット



- 1 黒褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 褐色土
- 7 黄褐色土
- 8 褐色土
- 9 黄褐色土
- 10 黄褐色土
- 11 黄褐色土
- 12 黄褐色土
- 13 黄褐色土
- 14 褐色土



第7号・8号溝状ピット

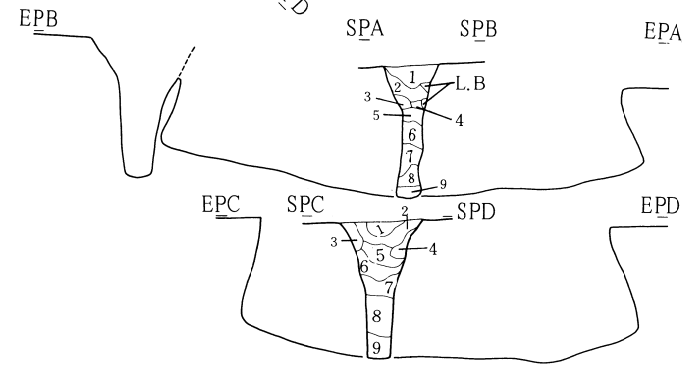
ZY-156

第8号溝状ピット

第7号溝状ピット

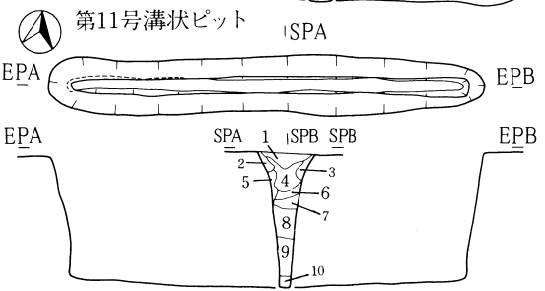
第7号溝状ピット

- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 黄褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 暗褐色土
- 7 暗褐色土
- 8 暗褐色土
- 9 暗黄褐色土



第8号溝状ピット

- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 褐色土
- 4 黄褐色土
- 5 褐色土
- 6 褐色土
- 7 暗黄褐色土
- 8 暗黄褐色土
- 9 暗黄褐色土

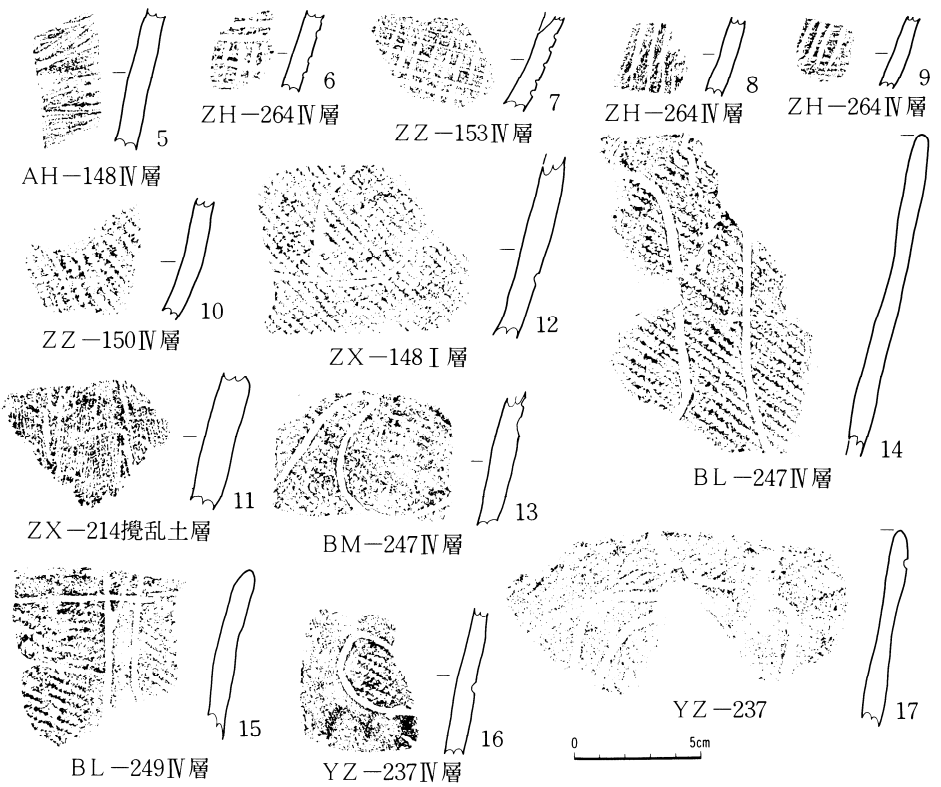
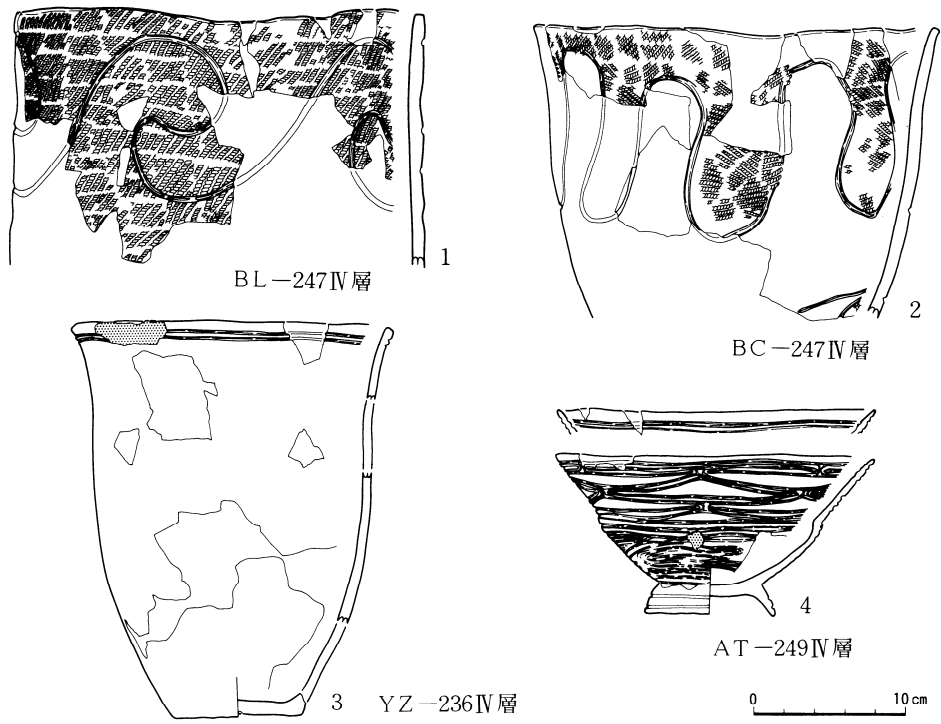


第11号溝状ピット

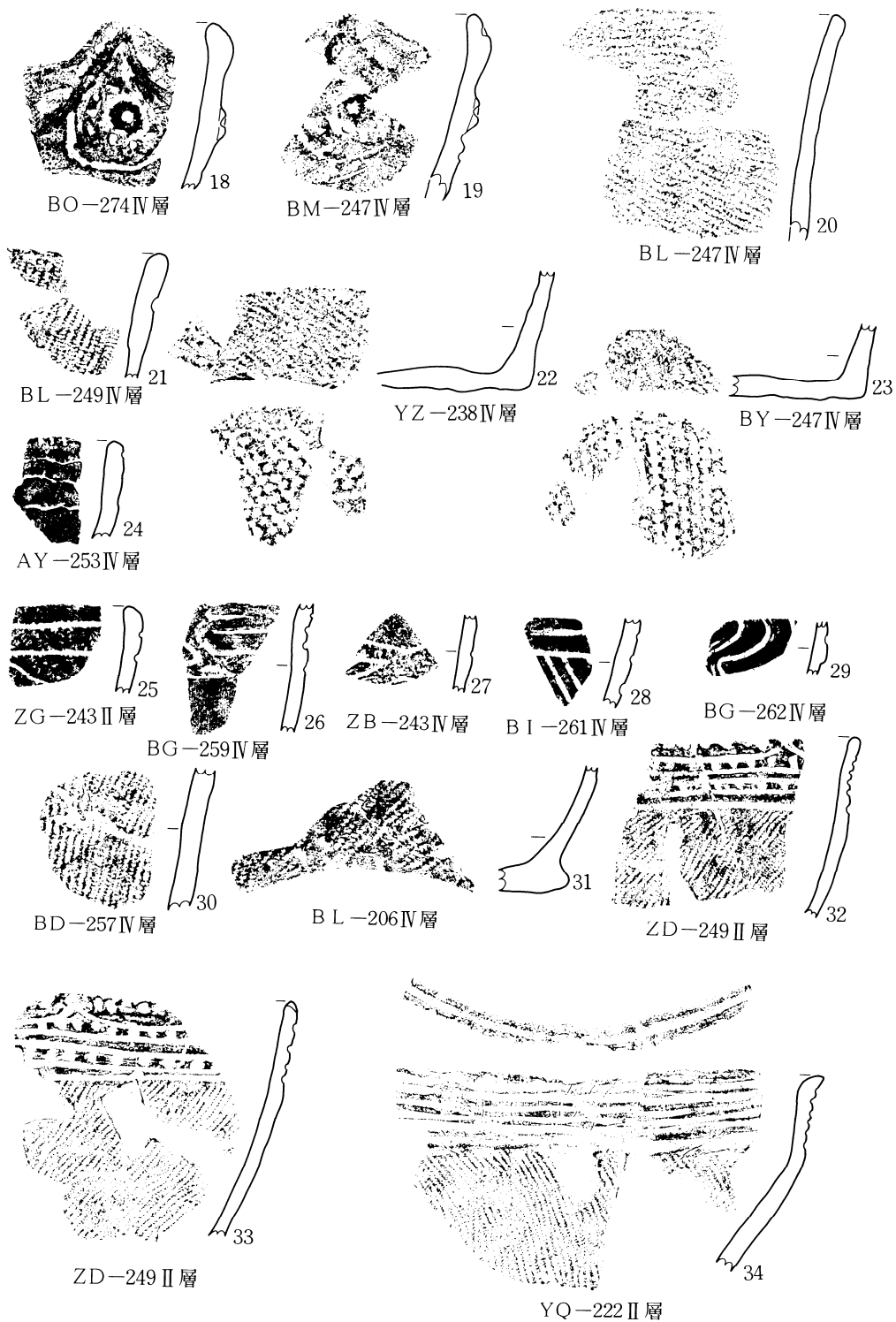
- 1 黒褐色土
- 2 褐色土
- 3 褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 黄褐色土
- 6 褐色土
- 7 褐色土
- 8 黄褐色土
- 9 黄褐色土
- 10 黄褐色土



第139図 V区溝状ピット実測図(2)



第140图 V区出土土器实测图·拓影图



第141图 V区出土土器拓影图

第3節 VI区

1. 検出遺構

(1) 溝状ピット

4基検出した。各溝状ピット（以下ピットという）の位置及び計測値は一覧表にまとめた。

〈平面形状〉

溝状を呈し、幅が狭く細長いものとやや幅広のずんぐりしたものがある。

〈断面形状〉

長軸上では、開口部が底面よりも長く、壁面の形状は、ほぼ垂直なものと同様な傾斜をもつものがある。

短軸上では、Y字状・V字状等の形態がある。

〈検出層位〉

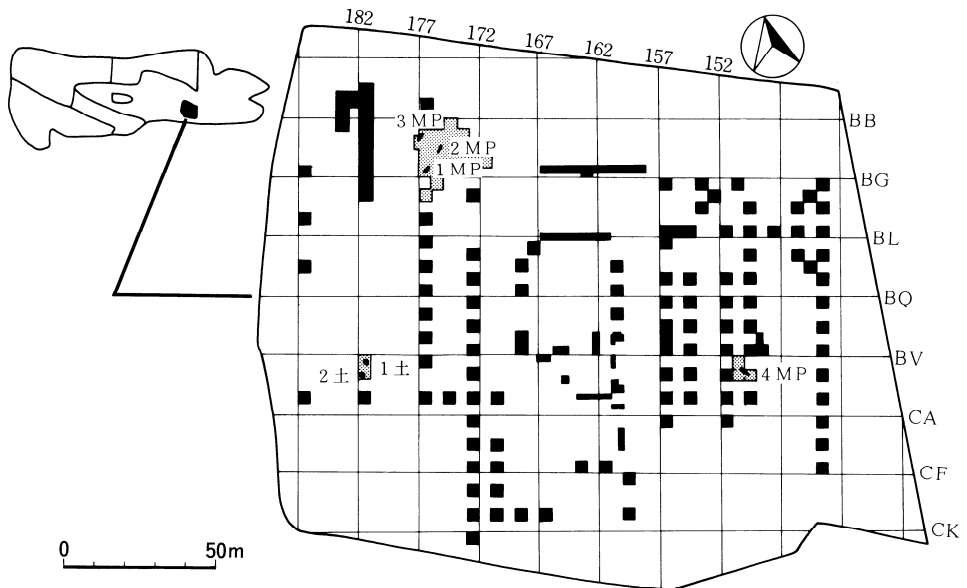
第1号ピットは第Ⅲ層を掘り込んでいるが、掘り込み面は不明である。他のピットはすべて地山面での確認である。

〈長軸方向〉

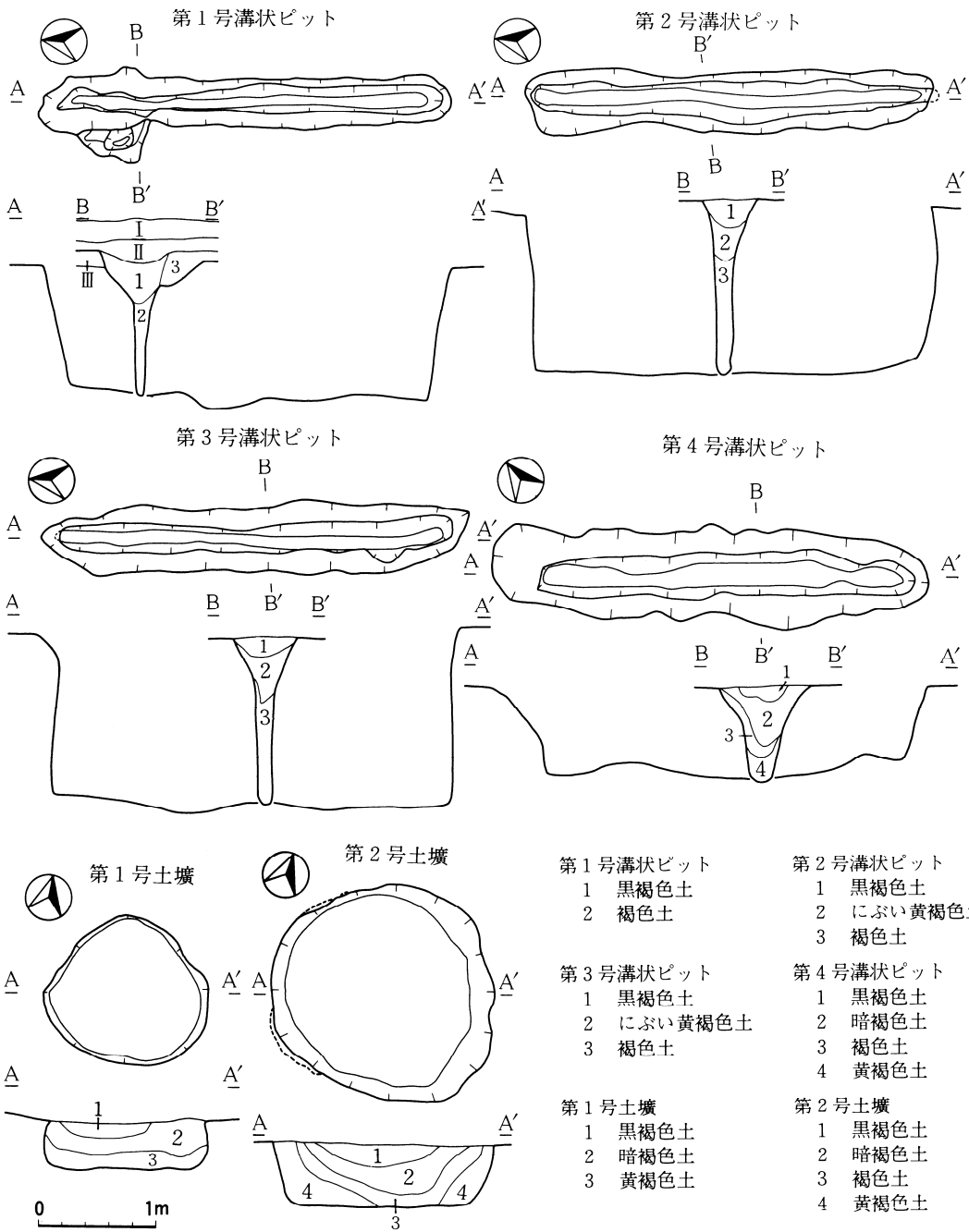
南北方向に向くものがほとんどである。また、平坦面に構築されているため、等高線との関係は不明である。

(2) 土壇

4基検出した。平面形は円形のプランを呈する。径は1.5m前後で、ほぼ垂直に掘り込まれている。出土遺物なし。時期は不明である。(赤平)



第142図 VI区グリッド・遺構配置図



第143図 遺構平面図

	グリッド	開口部	壙底部	深さ	長軸方向		グリッド	開口部	壙底部	深さ	長軸方向
1号溝状ピット	B F-176	350×48	305×11	126	N-4°-W	4号溝状ピット	B W-147	371×85	305×22	81	N-50°-W
2号溝状ピット	B D-174	346×55	343×12	146	N-5°-E	1号土壌	B N-181	143×128		43	
3号溝状ピット	B C-176	365×65	331×10	156	N-2°-E	2号土壌	B W-181	183×180		55	

第9表 計測表 単位(cm)

2. 出土遺物

(1) 土器

縄文時代早期、前期、中期の土器が出土した。

(ア) I群土器

I群1類 (第144図～第146図)

第VI区では最も多く出土した。器形は、平縁の尖底深鉢形で、口縁部は直立するもの、外反するもの、やや内湾するものがみられる。口唇部は、内側が傾斜をもち口端がやや薄くなる。特に、(33)はその度合が大きく口端の幅が1mmほどしかない。

文様は、口縁部から胴部にかけての文様により5種類に分類できる。

a類：(1、5～13) 地文として貝殻条痕を施した後に爪形文が施されるものである。爪形文は、(8)を除いてすべて粘土のまくれ返りをもつ。また、縦位の爪形文が一般的だが、(9)のように横位のものも見られる。文様構成では、2～4段の連続爪形文を巡らすもの、横2縦3列の爪形文を約5cm間隔で巡らすもの(5、6)、横3個の爪形文を、上下(上下差約4cm)交互に施するもの(1)などが見られる。

b類：(14) 横位の貝殻腹縁文が施されるものである。

c類：(15) 器面全体に貝殻条痕のみが施されるものである。

d類：(28～36) 縄文及び撚糸文が施されるものである。(28、29)は、地文に単節斜縄文(LR)が施され、粘土のまくれ返りをもつ爪形文が2段巡るが、斜縄文の施文はかなり浅い。また(30)は、口唇部より2cmほどの幅を無文帯とし、それ以下に単節斜縄文(LR)が施される。

(32～36)は、撚糸文(極めて細いLRの縄文原体を棒に巻きつけた絡条体回転文)が施されるが、施文は浅い。

e類：(2) 文様を有せず、器面を平滑に調整しているものである。光沢をもつほどよく磨かれている。

以上は、口縁部から胴部の文様で分類したが(19、20、25)は底部片で、貝殻条痕が施されるもの、無文のものが見られる。

本類の内面は、横位の調整が良く行われおおむね平滑になっている。中には光沢をもつほど良く行われているものもみられる。胎土には、砂粒を含み、(9)を除いては繊維の混入は認められない。焼成は良く、色調は赤褐色、暗褐色、黒褐色、灰褐色を呈する。器厚は、8～10mmである。

I群5類

(BU-149) グリッドより1点出土した。器形は不明。器面に貝殻条痕を施した後に貝殻

腹縁文が施される。内面は平滑に調整され、胎土には細かな砂粒を含む。器厚は6mmほどである。

I 群 7 類

(47) は胴部片で、単節斜縄文 (LR) が施される。胎土には、少量の砂粒を含む。また、多量の繊維を混入するため、かなり軽い。器厚は10mmほどである。

(イ) II 群土器

II 群 2 類 (第146図39～46)

器形は、平縁の尖底深鉢形と思われる。口唇部は平坦に面取りされている。

文様は、単節斜縄文 (LR、RL)、複節斜縄文 (RLR)、縄文原体 (LR) の回転方向を変えることによる羽状縄文、ループ文 (RL) + 竹管押引沈線文がみられる。(45) には、ループ部分の圧痕がみられる。

内面は、横位の調整が良く行われている。胎土には砂粒を含み、繊維の混入も認められる。

II 群 3 類 (第146図48～第147図61)

器形は、平縁、平底の深鉢形と思われる。口縁部は、直立するものとやや外反するものがあり、口唇部は平坦に面取りされている。

文様には、刺突文、沈線文、ループ文、コンパス文がみられる。(48、49、51、57) は、同一個体で、ある程度文様構成を知り得る。口唇部直下に半截竹管による刺突列が2段巡り、それ以下の胴部には2～3cm幅のループ文 (O段多条RL) が施される。

(55) は、沈線によって区画された中にヘラ状工具による刺突列が施され、更に、下位に刺突列が横位に施される。

(56) は、胴部から底部にかけてのものだが、胴部側には爪形状の刺突列、底部側にはヘラ状工具による刺突列が見られる。底面にも、刺突列が円を描くように施される。

内面は、良く調整されており、胎土には砂粒を含み、個体によって量の差はあるが繊維の混入が認められる。焼成はやや良く、色調は赤褐色、暗褐色を呈する。器厚は9mmほどである。

(ウ) III 群土器

III 群 1 類 (第144図3)

(BT-156) グリッドより1個体出土した。大きく外反する4つの扇状突起をもつ円筒深鉢形土器である。口径27.1cm、最大胴径21.9cm、残部器高25.4cm、器厚7mmとなる。

文様を見ると、胴部上半から上に上部文様帯を構成している。口唇部には、鋸歯状の隆帯が施され、それ以下には、横位、縦位、斜位、弧状の隆帯及びO段rの太い原体を使用した馬蹄形状の圧痕により文様が構成される。隆帯上にはすべて捺糸圧痕文 (L) が施される。上部文様帯以下には、結束1種羽状縄文が施される。

内面は、横位の調整が行われるが、雑で、全体の作りも粗雑である。胎土には砂粒を多く含

むが、繊維の混入は認められない。

Ⅲ群 2類 (第144図 4)

(B T—156) グリッドより 1 個体出土した。口縁部が外反し、4 つの山形突起をもつ円筒深鉢形土器である。口径32.7cm、最大胴径27.4cm、残部器高35.1cm、器厚 9mmである。

文様を見ると、胴部中位から上に上部文様帯を構成する。口唇部にそって隆帯が施され、隆帯上には、2 方向からの捺糸圧痕文 (L) が施される。各山形突起の直下には、隆帯を施した山形状の把手がつけられる。地文としての結束 1 種羽状縄文を施した後に、各把手部分から垂下する 2 本の隆帯が施され器面を 4 区分する。更に、その区分の中に弧状隆帯、横位隆帯が施される。また、山形突起の内面側にも 2 本の横位隆帯が施される (隆帯の幅は 4mm前後)。

上部文様帯以下には、地文としての結束 1 種羽状縄文が施されている。

隆帯は、貼り付け後、その側縁をヘラ状工具によってはがれ落ちないように調整されているが、充分でなく剥落している部分が多く見られる。

内面は、良く調整されているが、土器自体はやや粗雑な作りになっている。胎土には、砂粒を含むが繊維の混入は認められない。色調は、暗褐色、暗赤褐色を呈する。

(Ⅰ群 1類土器について)

本類は、前述で文様により a～e 類まで細分したが、d 類について補足したい。

d 類は、器面に縄文あるいは捺糸文が施されるものである。器形は、平縁の尖底深鉢形と思われる。文様構成には、爪形文+縄文、無文帯+捺糸文、縄文のみ、捺糸文のみ、などがみられる。捺糸文の存在は、白浜遺跡で指摘され^(注1)、少量ながらも館平、下松苗場、千歳 (13)、吹切沢、新納屋 (1)、売場遺跡等でも、縄文あるいは捺糸文が施されたものが出土している。また、県外においても、爪形文、縄文及び捺糸文、沈線文 (d 類には存在しない) を文様要素とすると土器が、岩手県蛇王洞洞穴 (蛇王洞Ⅱ式)、北海道西股遺跡 (ノダップⅠ式) で出土している。蛇王洞Ⅱ式、ノダップⅠ式では、縄文及び捺糸文が、爪形文、沈線文とともに主要文様要素としてとらえられているが、d 類をⅠ群 1類土器の中で同様にとらえてよいものかは、断定し得ない。(a～c、e 類に比較して d 類は極めて少量である。)

縄文及び捺糸文が、主要文様要素となり得るかどうかを別にすると、d 類は、器形、文様構成 (爪形文+縄文) において、蛇王洞Ⅱ式、ノダップⅠ式に類似するが、前者が横走縄文が主体をなし、後者が斜縄文であることから、よりノダップⅠ式に近いものと思われる。

d 類をⅠ群Ⅰ類 (白浜式・小般渡平式に相当するもの) の中でとらえるかどうかであるが d 類が、a～c、e 類とともに出土していること、口唇部の刻み目の存在、爪形文の形態及び施文技法、胎土、焼成が、縄文及び捺糸文の存在をぬきにすれば、a～c、e 類と酷似することから、一応現時点では、d 類をⅠ群Ⅰ類の中でとらえたい。 (一条)

(注1) 江坂輝爾 1955 白浜遺跡 日本考古学年報4号

(注2) 芹沢長介・林謙作 1965 岩手県蛇王洞穴 石器時代7号

(注3) 北海道第4紀研究会 1974 函館市宇紅葉山西股遺跡発掘調査報告書 「西股」

(2) 石器

第Ⅰ群石器

8点出土した。F-Ⅱb類1点、F-Ⅲ類4点、F-Ⅳ類3点である。石質はすべて珪質頁岩である。 (島山)

第Ⅱ群石器

I類 磨製石斧 1点出土した。擦切磨製石斧の欠損品で、基部端・刃部を欠失している。両側縁に擦切痕が若干残っている。正面は潰し整形後、研磨を行っているが、敲打痕を多く残す。裏面は、横位及び縦位方向に無数の擦痕が観察される。欠損後、正面刃部側及び基部側の折損端に潰しがなされ、更に基部側より剥離が行われている。潰しと剥離の新旧は不明の部分が多く、併行して行われた可能性も考えられる。基部側の端部に表裏面から2箇所ずつパンチ痕が認められる。石斧として再加工したものかは不明である。

第Ⅲ群石器

K類 石錘 5点出土した。抉りは148図-2を除いて長軸の中軸線上に作出されている。抉りの作出は、両方とも両面からのもの2点・一方が両面からで他方が片面からのもの2点・一方が両面からで他方が自然面のもの1点である。

L類 敲磨器類 L-Ⅰ類スリ石14点(うち欠損品8点)・L-Ⅱ類敲き石1点(欠損品)が出土した。L-Ⅰ類は14点中11点が三角柱状磨石で、小型の4点と大型の1点を除いて欠損品(器体のほぼ半分が欠失)である。

第10表 土器片錘計測表

挿図番号	出土グリッド	層位	大きさ mm		重さ(g)	部位	文様	備考
			長軸×短軸	厚さ				
147図-64	BT-157	IV	(35)×48	10	20	胴部	斜縄文	破損品
65	BT-156	"	(37)×44	7	11	"	"	"
62	BT-157	"	66×44	9	38	"	"	"
63	BS-157	"	68×55	7	30	"	"	"

() は残部計測値

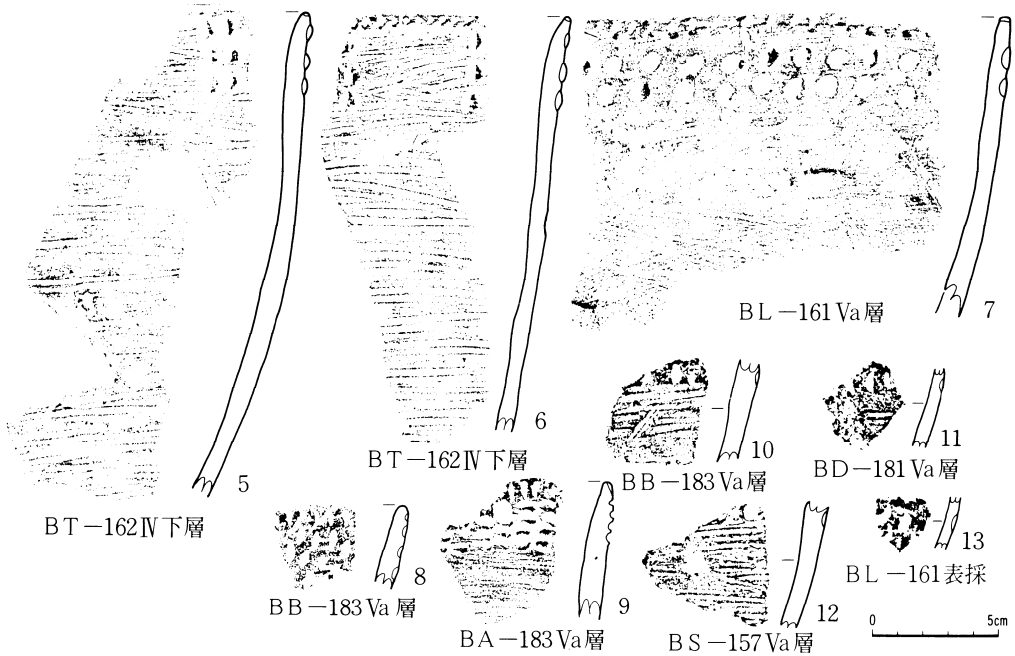
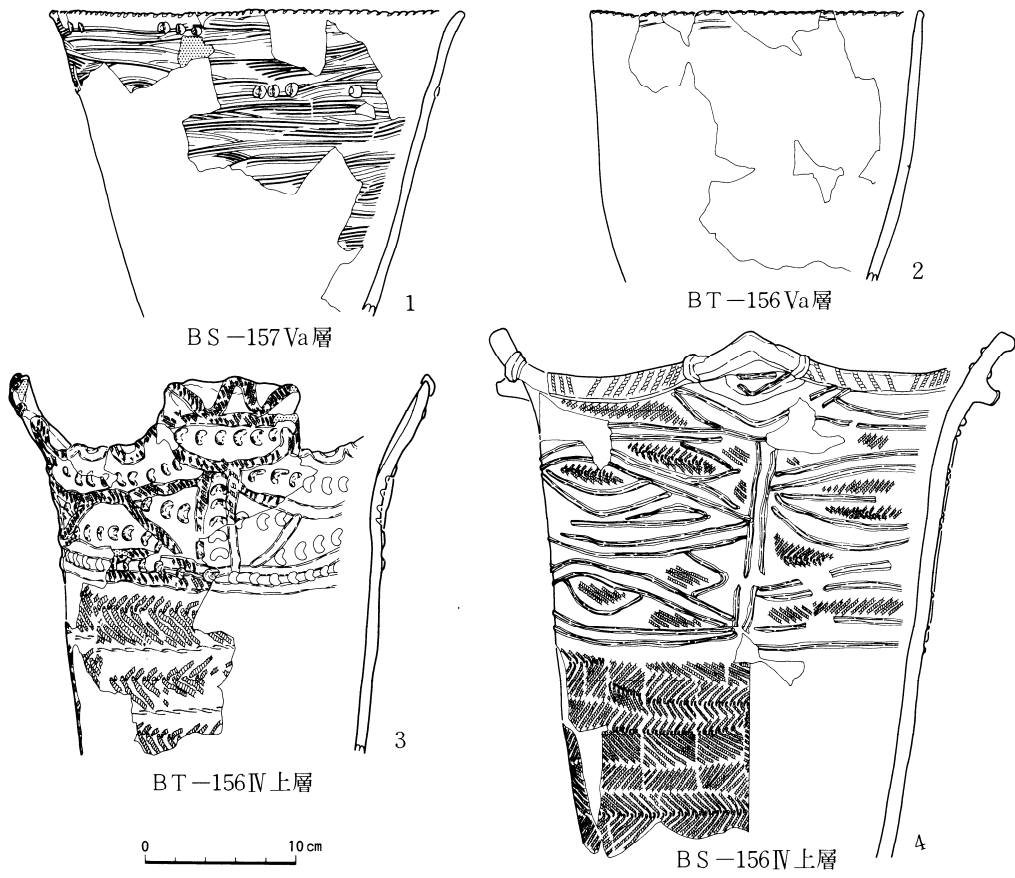
M類 台石 数点出土した。すべて欠損品である。

※本区出土土器は、縄文時代早期～中期の土器で、主体は早期前半と前期前半である。他地区の主体が縄文時代後期・弥生時代であるのに対して、時期的な特徴を有する。疎石器の面からは、石錘がⅡA類（長軸上に抉りを作出）だけであることと、スリ石のほとんどが三角柱状磨石であることが特徴的である。 (白鳥)

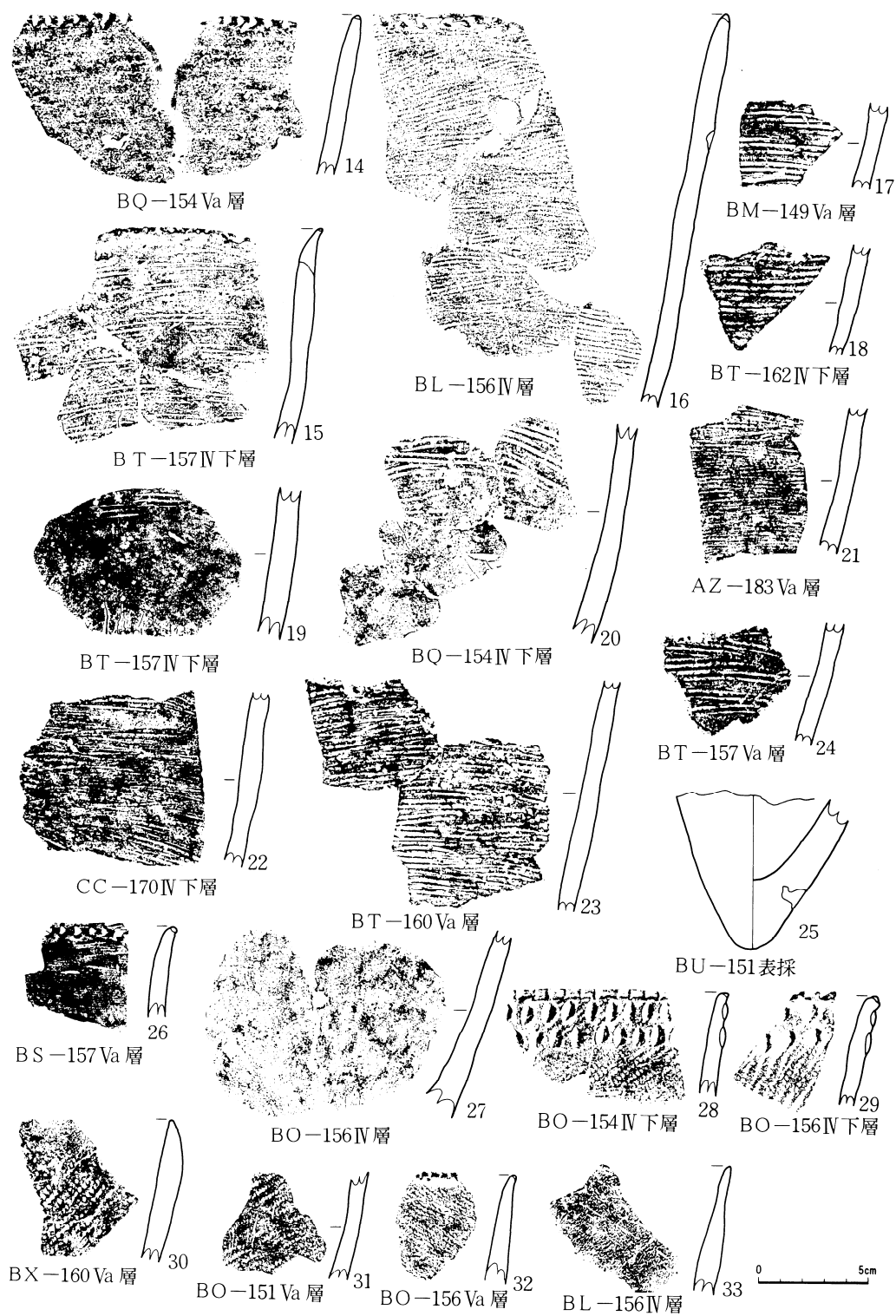
(3) その他の遺物

土器片錘 (第147図62～65)

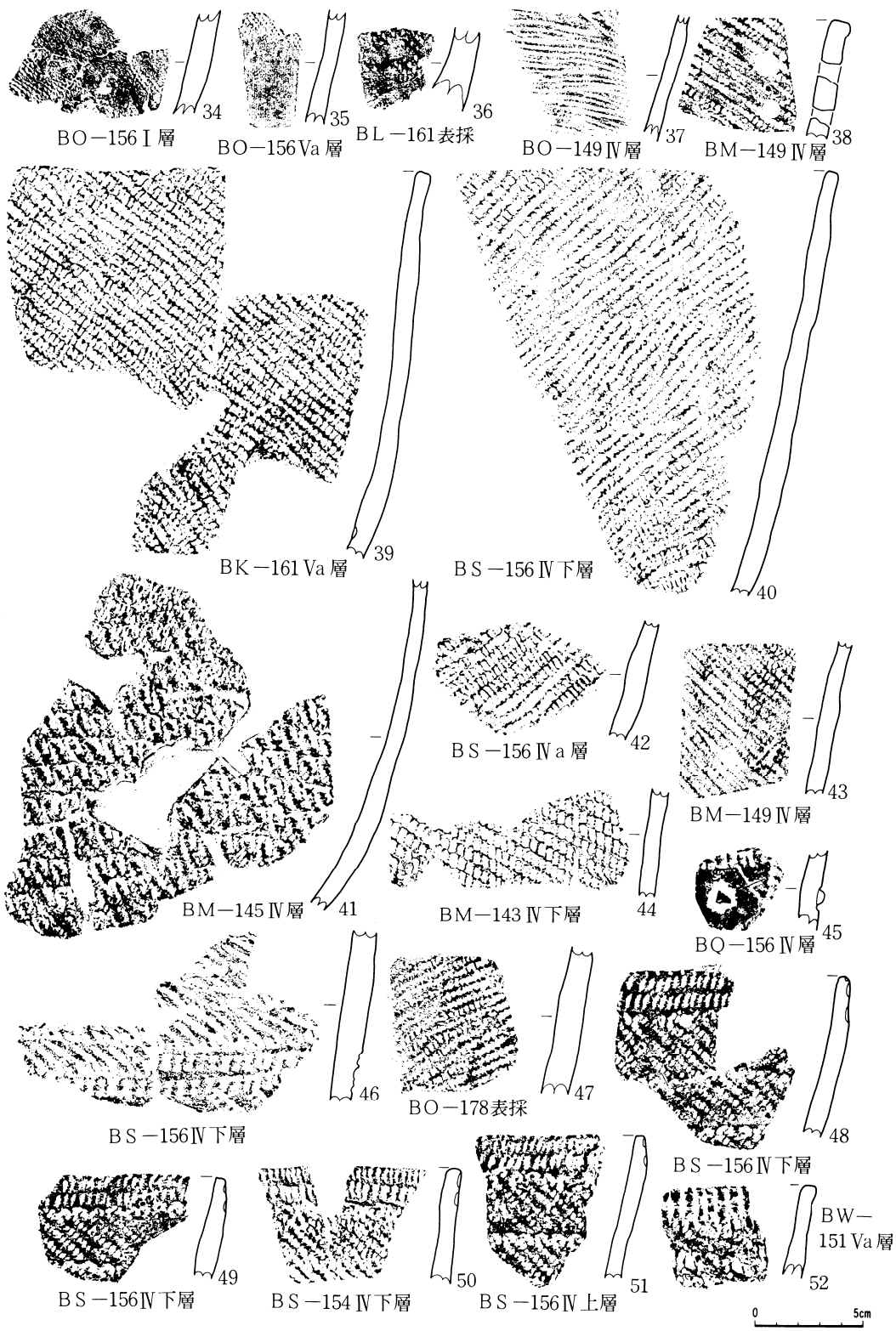
4点出土した。個々の計測値は第10表に示す。縄文時代前期初頭の早稲田6類土器を利用して作られている。 (一条)



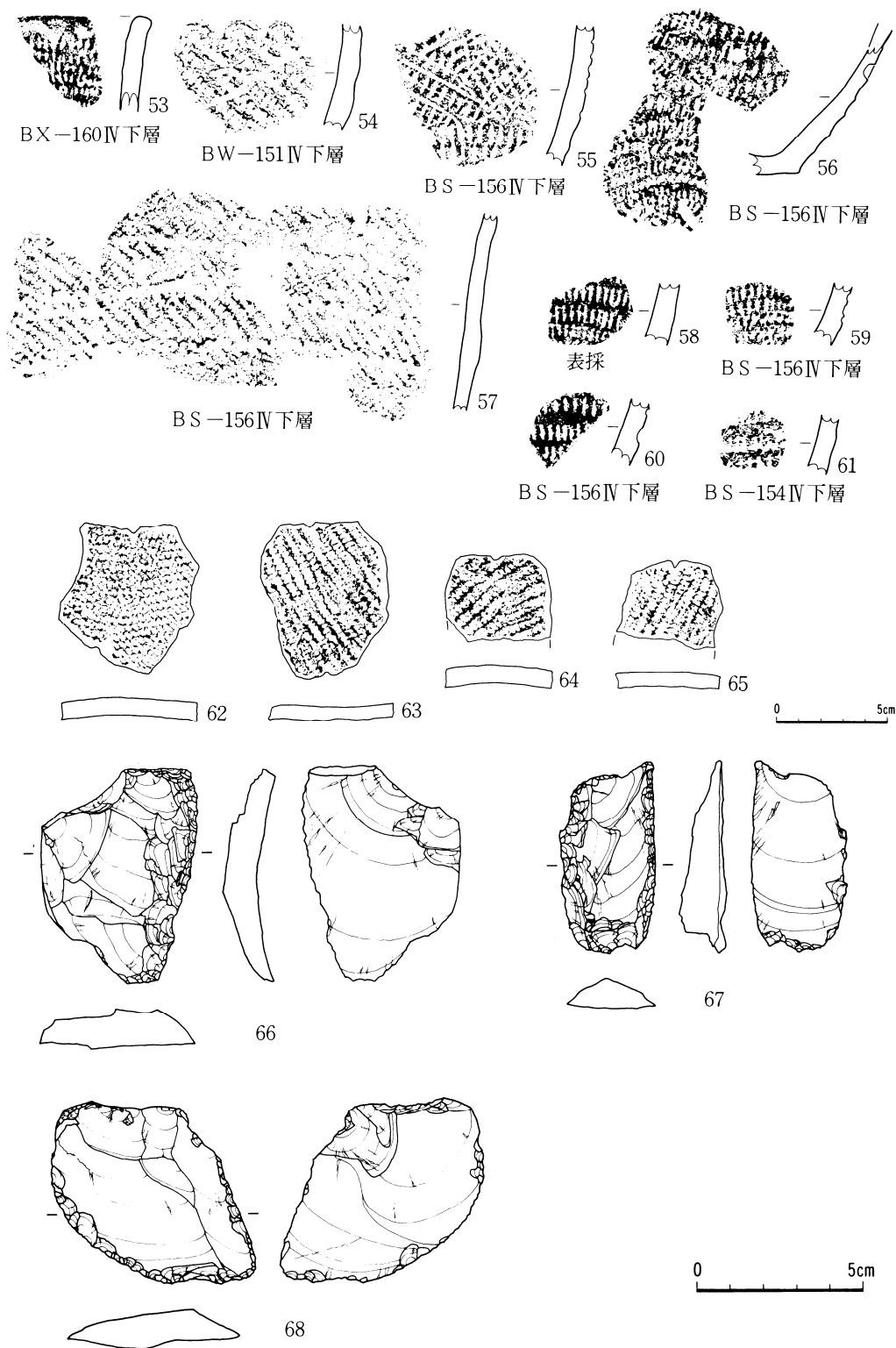
第144圖 VI区出土土器拓影圖 (I群1類)



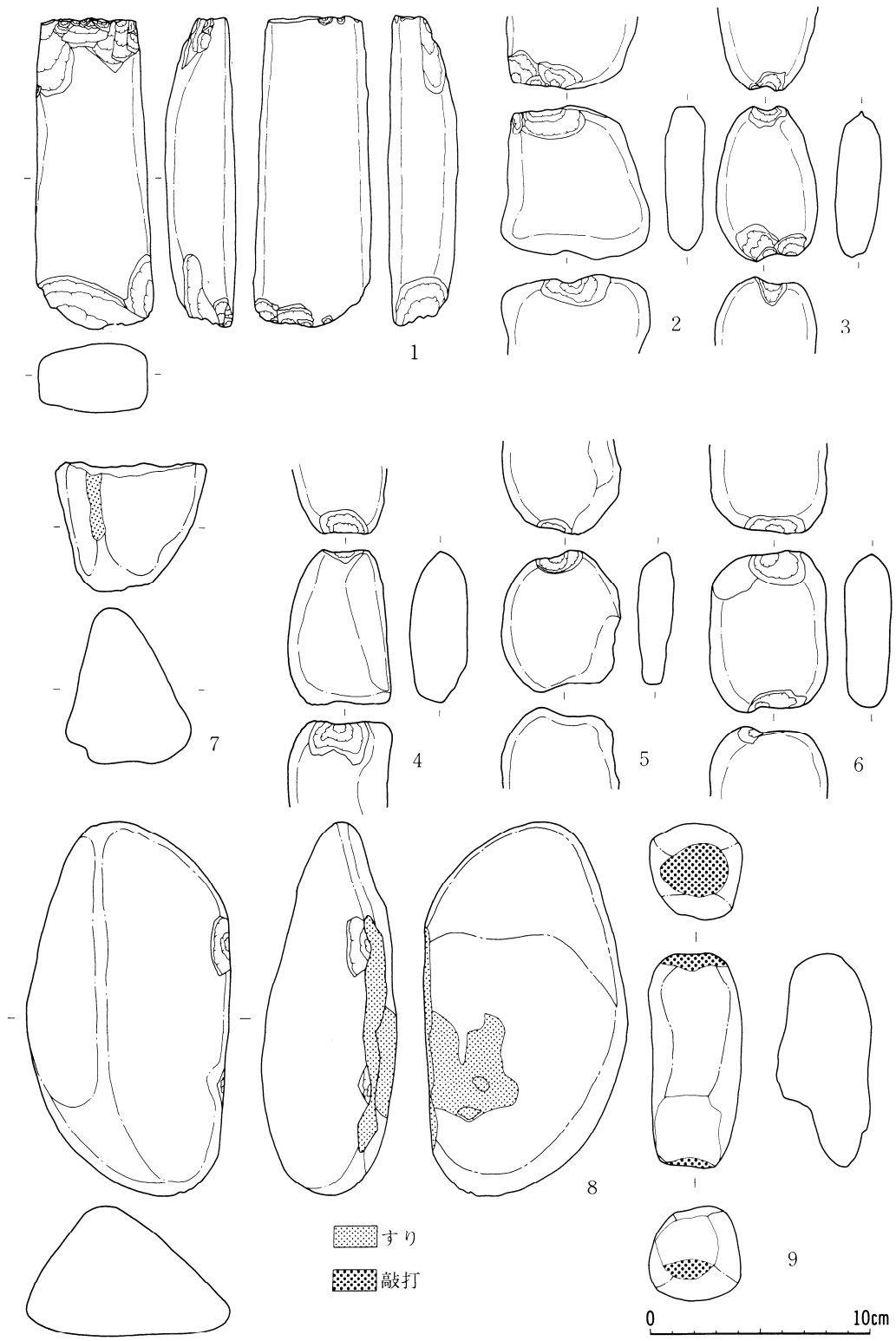
第145图 VI区出土土器拓影图 (I群1類)



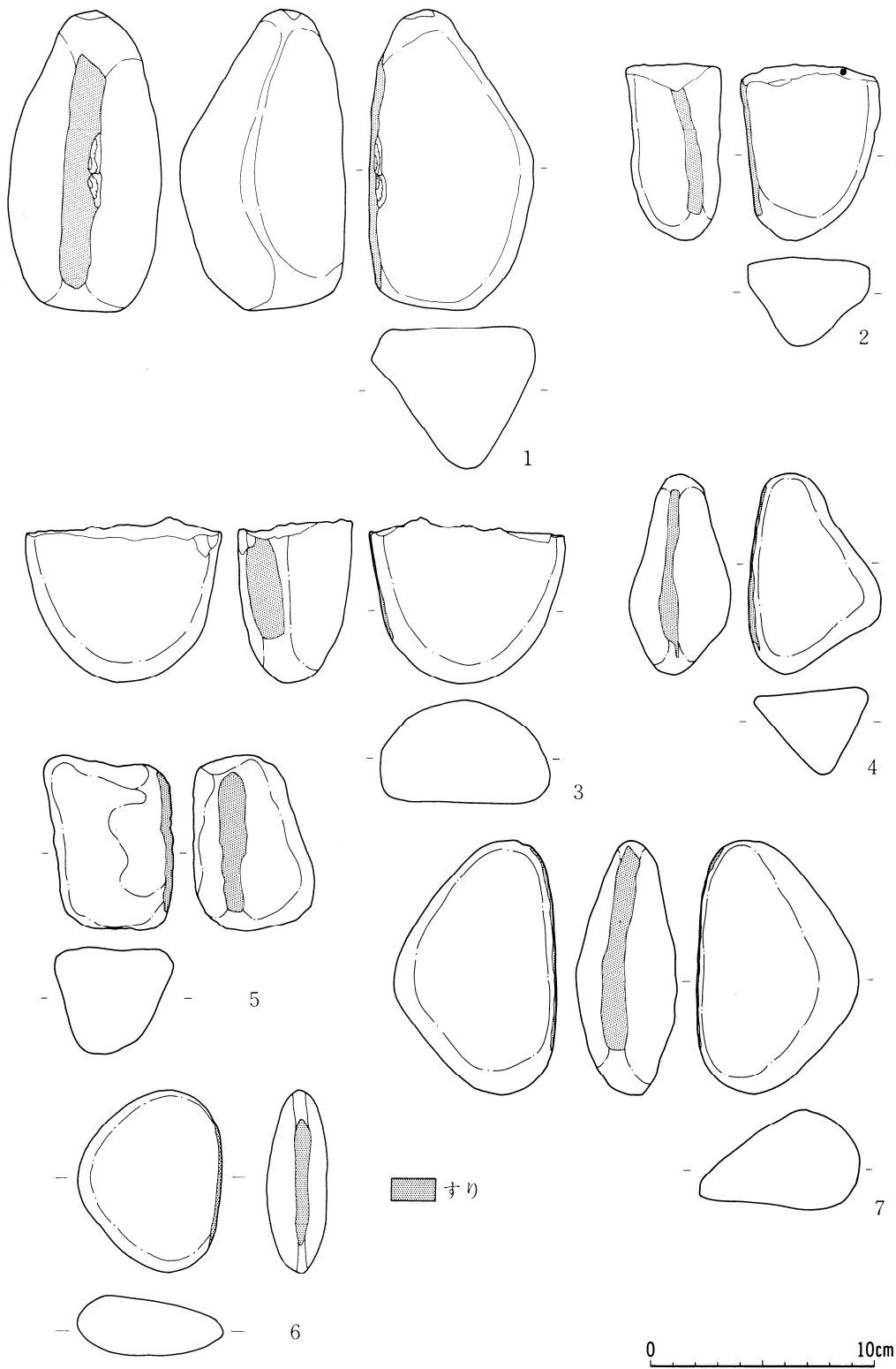
第146图 VI区出土土器拓影图 (I群1類、II群2類、3類)



第147图 VI区出土土器拓影图·土製品·石器実測图



第148図 第VI区出土石器 (1)



第149図 第VI区出土石器 (2)

第4節 VII区

本地区は調査時点で「大石平遺跡中の島地区」と呼称されていた地点である。本地区の地形は、IV区の湧水地を水源とする小沢の北側に位置する東西120m、南北40mの馬背状を呈した小孤立丘である。この台地の最高位の標高は42.3m、周囲の低湿地は約39mで、比高差は3m程である。

このような台地上に、竪穴住居跡16軒、土壇18基、土器埋設遺構2基が検出された。各遺構及び遺構外からの出土土器は大木10式併行期、十腰内I式の2型式である。以下に、各遺構の概要と、遺構内からの遺物の出土状況について述べる。

1. 検出遺構

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡

〔位置と確認〕 調査区ⅡC～ⅡD—107～109に位置する。馬背状台地の南西斜面で傾斜が最も緩やかな地点である。基本層序第V a層上面で黒褐色の円形の落ち込みとして確認した。本住居跡中央部付近は、風倒木による攪乱(3.5×3.2m)を受け、小マウンドを形成している。

〔重複〕 なし

〔平面形・規模〕 南西壁は削平されており、また一部調査区外に位置するため、全容は把握できなかった。残存部から推定して、長径5.6m、短径5.4mの楕円形のプランを呈すると思われる。床面積は20㎡で、調査区内では最大規模と推定される。

〔壁〕 残存している北、東壁は、基本層序第IV層をほぼ垂直に掘り込んで壁面としている。壁高は、北壁33cm、東壁20cmである。

〔床〕 基本層序第V b層を掘り込んで床面としている。風倒木の影響で1/2が破壊されているため、壁際の床面のみ確認できた。比較的堅緻である。

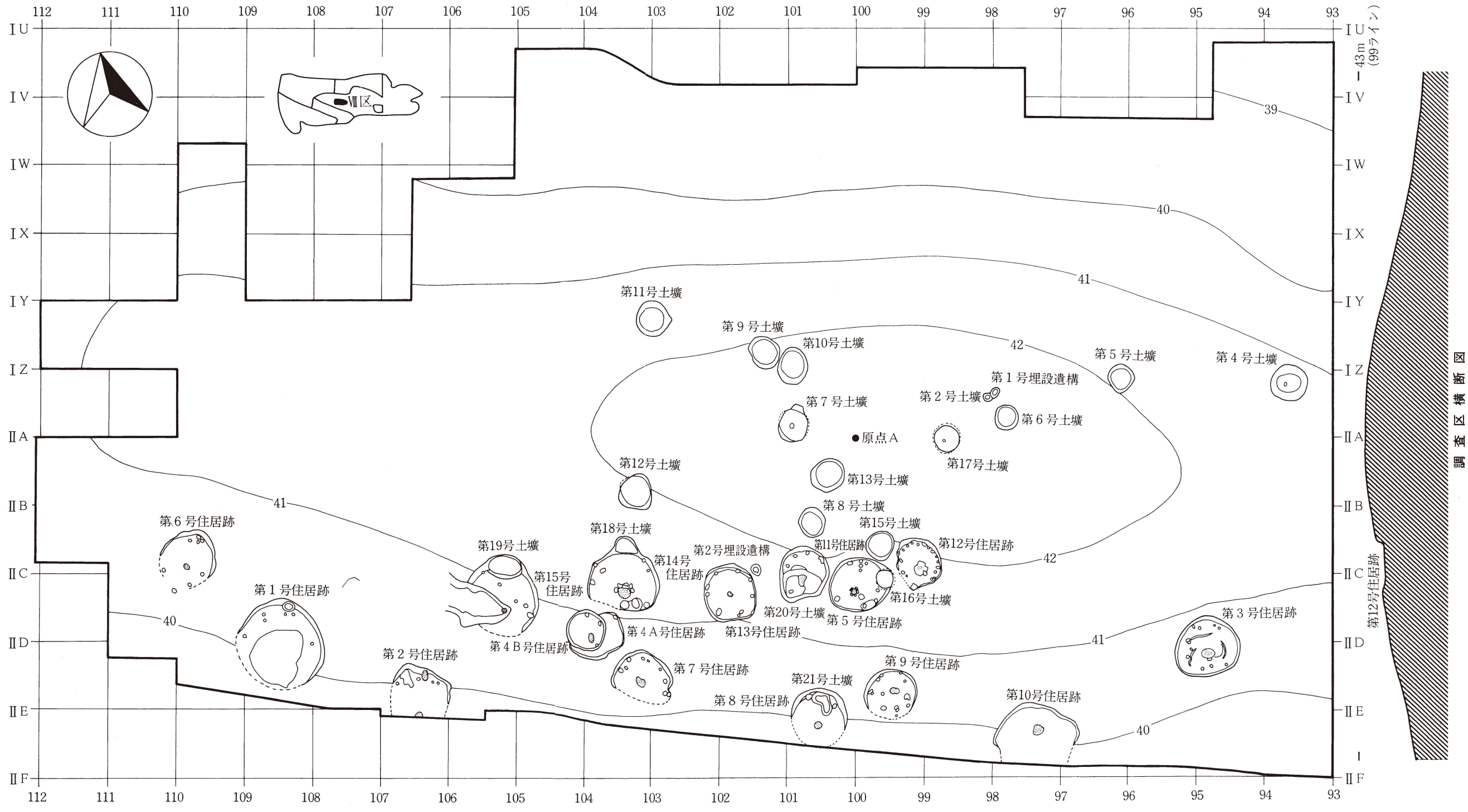
〔柱穴〕 竪穴内より6個のピットを検出した。このうち、規模、深さからみてp i t 1・2・3・5・6(未検出)が主柱穴で、六角形の柱配置と考えられる。

No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)
1	32×27	45	2	23×16	48	3	23×14	36	4	17×13	34
5	22×21	42	6	21×18	55	7	16×16	28			

〔炉〕 風倒木によって形成された小マウンド上に、40cm×38cmの範囲で焼土が確認された。本住居跡中央付近に位置することから、炉として使用された可能性がある。

〔付属施設〕 竪穴北側で80cm×65cm、深さ14cmの小竪穴を検出した。本住居跡に伴うものであるが、出土遺物はなかった。

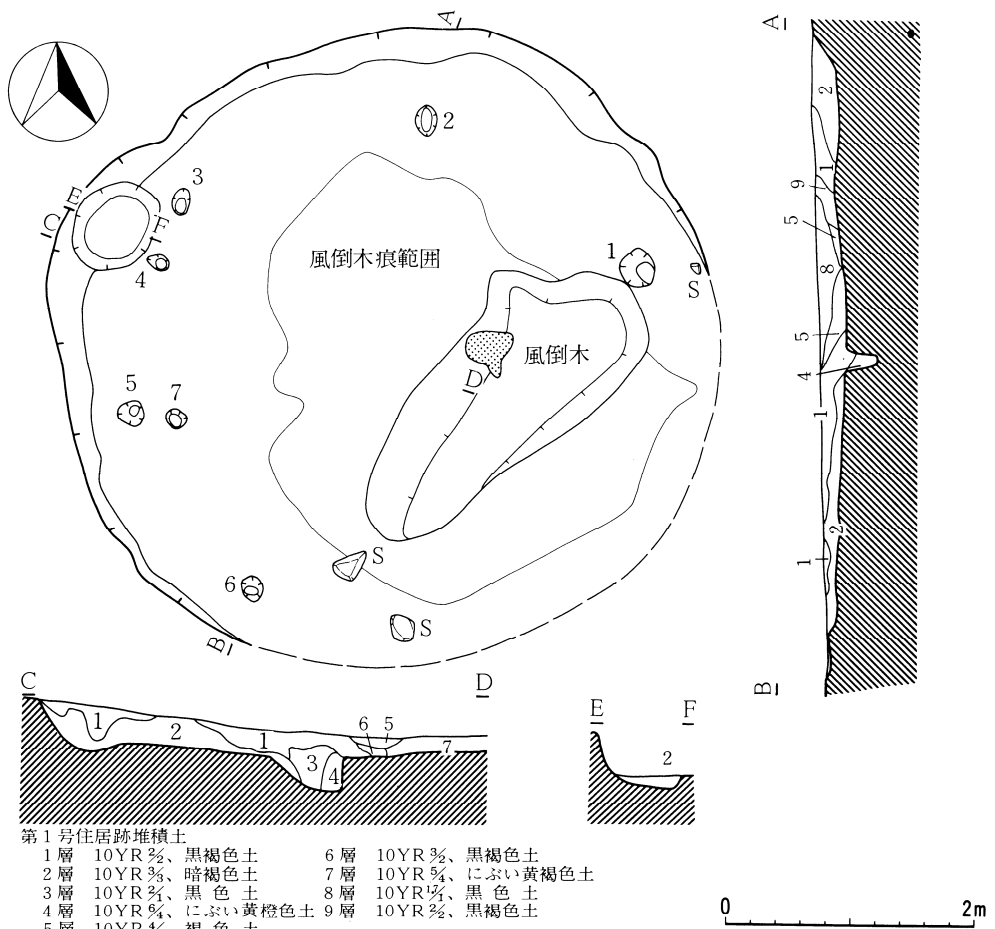
〔堆積土〕 2層に区分できた。ローム粒を含む暗褐色又は黒褐色シルト質土層で、人為堆積と考えられ。



(原点Aは、大石平全体区ではCH-300に相当する)



第150図 VII区遺構配置図



第151図 第1号住居跡

〔出土遺物〕 破片資料30片と台石が出土した。図173—1は初期堆積土中より、図173—2は風倒木痕中より出土した。いずれも十腰内I式である。

第2号住居跡

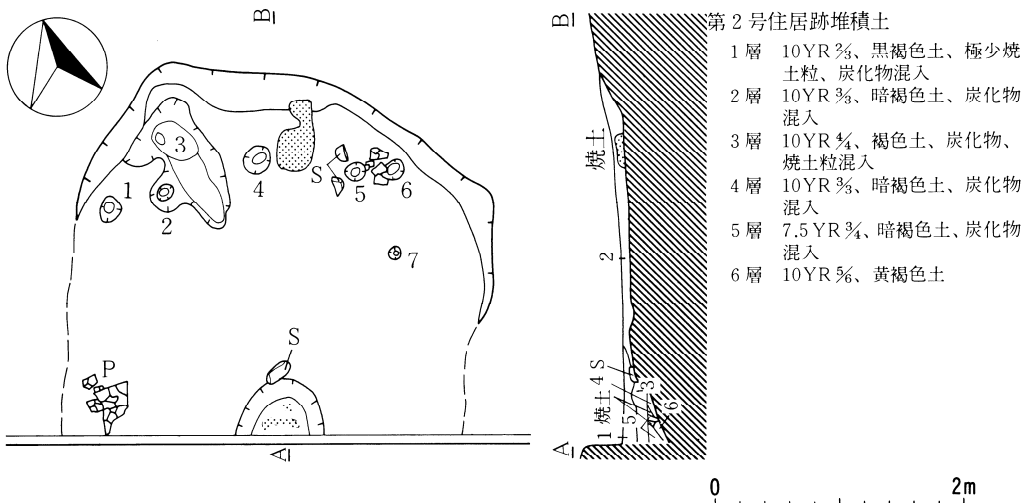
〔位置と確認〕 調査区ⅡD—106に位置し、基本層序第V a層上面で黒褐色の落ち込みとして確認した。馬背状台地の最低位の斜面上である。南側約半分は調査区外のため未発掘である。

〔重複〕 なし

〔平面形・規模〕 残存部が少ないためプランの全容は把握できなかった。残存部の床面積は、7.9㎡である。

〔壁〕 北壁のみ確認できた。基本層序第V a層を緩やかに掘り込み壁面としている。壁高は20cmである。

〔床〕 基本層序第V b層を掘り込んで床面としている。用水路に近接するため床面を覆う土



第152図 第2号住居跡

層は湿性が多く、軟弱である。

〔柱穴〕 堅穴内より7個のピットを検出した。このうち、規模、深さからpit 2、4、5が支柱穴の可能性はある。

No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)
1	22×17	41	2	27×27	45	3	36×26	37	4	23×23	17
5	17×15	46	6	18×15	24	7	11×10	16			

〔炉〕 南側の用水路との境界で、70cm×(90)cm、深さ最大7cmの規模の掘り込みと23cm大の炉石1個を検出した。掘り込みの底面は堅く締っていて、全面焼土化していることから、石囲炉の可能性はある。

〔堆積土〕 黒褐色シルト質土の単一層で、自然堆積と思われる。

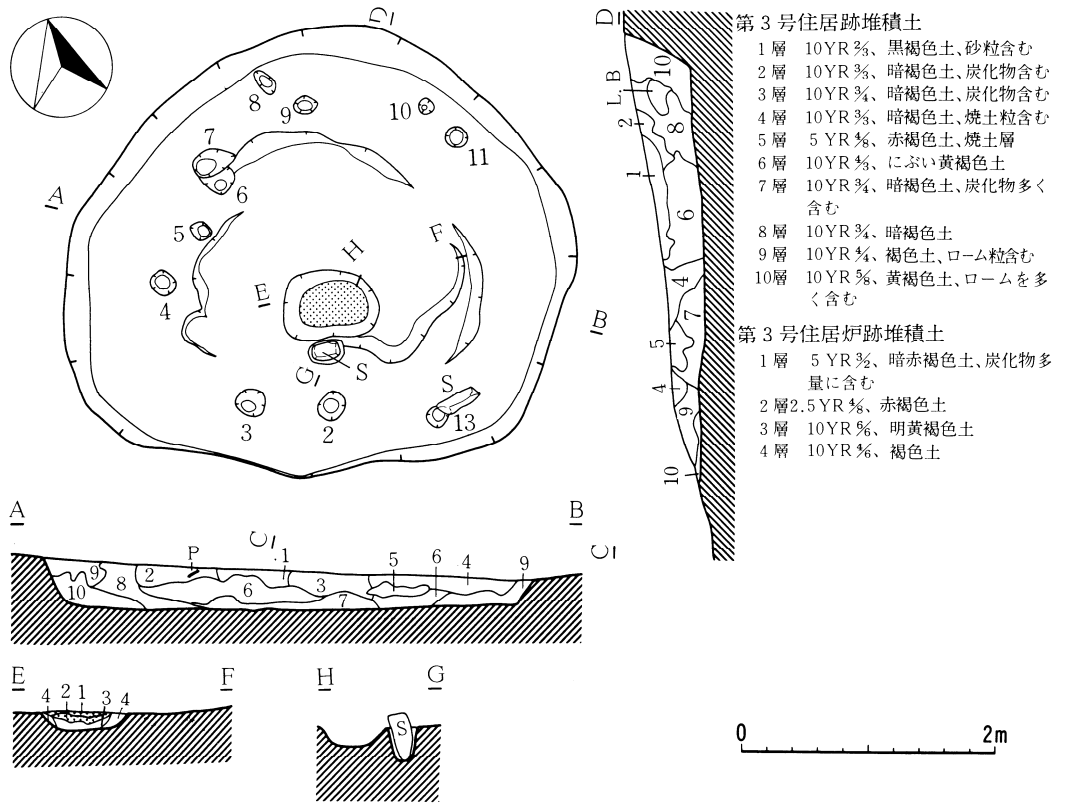
〔出土遺物〕 破片資料が多数と石9点が出土した。図170—1、2は床面直上、図173—3、4は堆積土中からの出土で大木10式期である。また、図176—2は石皿、図176—3は敲石である。

第3号住居跡

〔位置と確認〕 調査区ⅡC—94～ⅡD—94・95に位置する東南の緩斜面に、基本層序Ⅳ層中に黒褐色の円形の落ち込みを確認した。

〔重複〕 他の遺構との重複はなく、隣接する遺構もない単独の住居跡である。約7m南西側に、第10号住居跡がある。

〔平面形・規模〕 平面形は北側が弧状になり、南側は歪んだ不整な円形状を呈する。長径を東西にもち約4m、短径は3.5mを計る。床面積は、9.5㎡である。



第153図 第3号住居跡

〔壁〕 基本層序第V a層を壁面としている。斜面に位置しているため、南側の壁高は不明であるが、他の壁は遺存状態は良好である。全ての壁は緩傾斜し、堅微である。壁高は、北壁55cm、西壁40cm、東壁20cmである。

〔床〕 基本層序第V b層を床面としている。床面は、段状施設が構築され、中央部が凹んだ状態にある。段状施設の構築は、住居南側を除き、弧状に巡らされているが、粗雑な構築のためか所々で、途切れている。床面と段状施設の比高差は2cm～8cmである。

〔柱穴〕 本住居跡内から13個のピットが検出された。ほとんどのピットが、段状施設を巡る様に位置しており、住居の西側寄りから多く検出された。ピット1、2、4、6、7、13が主柱穴になると思われるが、ピットを検出できなかった部分があり、柱穴の配列は把握できない。

No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)
1	23×20	38	2	24×24	47	3	25×24	8	4	20×20	23
5	17×14	16	6	23×16	38	7	33×21	24	8	22×12	41
9	19×15	10	10	14×13	15	11	19×18	40.4	12	20×20	
13	17×16	23									

〔炉〕 炉は、住居のほぼ中央部に位置し、長径75cm、短径52cmの不整楕円形である。炉の南側に、炉石が1個埋設されている。炉石の掘り方は、20×30×25cmで長径40cmの礫が埋め込まれている。

〔堆積土〕 堆積土は12層に分層される。第1～3層は砂粒を多く含む土層であり、第2層、第5層には炭化物が混入する。第8層は焼土層である。

〔出土遺物〕 住居床面からは、口縁部を半分欠失した略完形土器が、北西の壁際から倒立した状態で出土した。(図170—3) 堆積土第1層中より復元可能な土器(図170—4)、第2層から土器片(図170—5)が出土した。土器は全て、十腰内I式土器である。

第4A号住居跡

〔位置と確認〕 調査区II D—103の基本層序V a層で確認された。

〔重複〕 第4B号住居跡を切って構築している。

〔平面形・規模〕 長径3.4m、短径2.6mの不整な楕円形である。西壁の一部が確認できなかったが、推定床面積は6.1㎡である。

〔壁〕 基本層序第V a層を壁面としているが、第14B号住居跡と重複している部分ではその堆積土である暗褐色シルト層を使用している。

〔床面〕 壁と同様に基本層序第V b層を床としているが、第14B号と重複している部分では、その堆積土を踏み固めて床としている。全体に軟弱である。

〔柱穴〕 本住居に伴出するピットは1個より検出できなかった。第14B号住居跡の堆積土を床面としているため、見逃した可能性がある。ピット1は29cm×18cm、深さは30cmである。

〔炉〕 検出できなかった。

〔堆積土〕 4層に細分される。1層が黒色腐植土であり、他はローム粒及びそのブロックを多量に含む。

〔出土遺物〕 図170—6～7や多量の細片及び図175—1～3の不定形石器が覆土中より出土した。

第4B号住居跡

〔位置と確認〕 調査区II D—103の基本層序V a層で確認された。

〔重複〕 第4A号住居跡に上部を削平されている。

〔平面形・規模〕 直径約2.4mの円形プランで床面積は3㎡である。

〔壁〕 基本層序第V a層を壁面としている。壁高は北壁約50cm、南壁15cmである。

〔床〕 他の住居跡と異なり、掘り込みが深く、堅穴底面は砂礫層に達している。この層を削平し、床面としている。

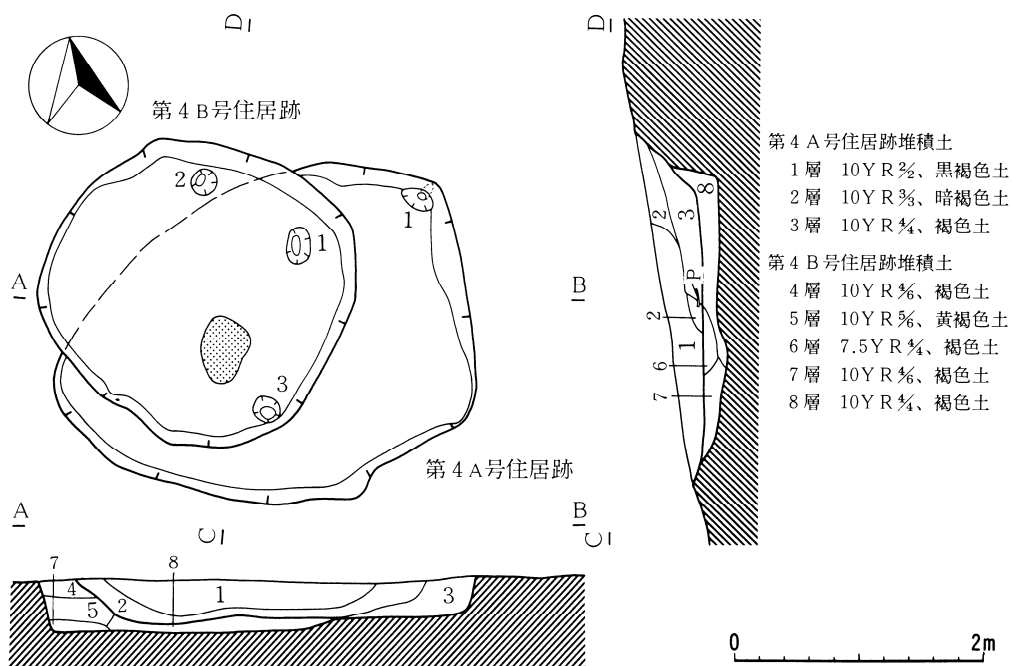
〔柱穴〕 本住居跡に伴出するピットは3個検出された。いずれも小規模で浅い。

No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)
1	30×18	17	2	22×22	16	3	24×20	18			

〔炉〕 竪穴中央部からやや南東壁寄りに偏在して地床炉を検出した。焼土は極めて薄い。焼土の分布範囲は28cm×20cmの楕円形である。

〔堆積土〕 堆積土の上部は第14A号住居跡の構築時に削平されており、残存する下部の堆積土は2層に細分される。いずれもローム粒を多量に含み、少量の焼土粒、炭化物粒を混入する。

〔出土遺物〕 なし



第154図 第4A号住居跡・第4B号住居跡

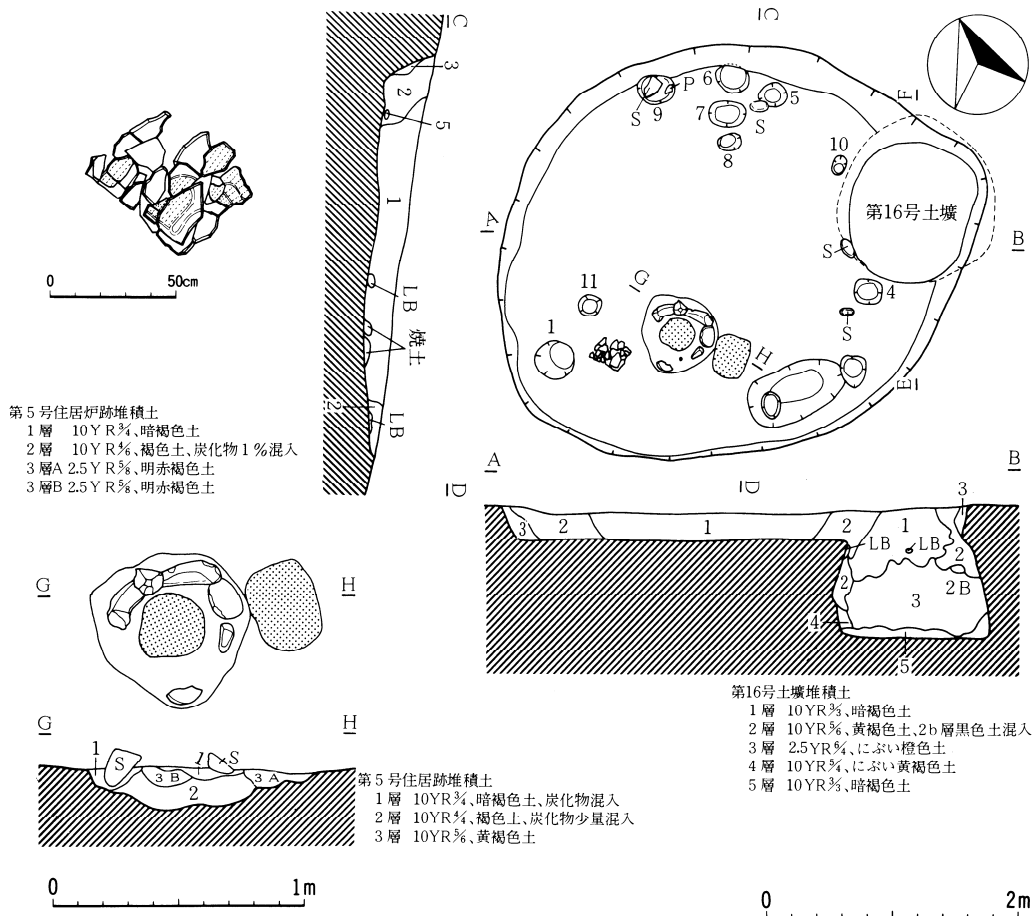
第5号住居跡

〔位置と確認〕 小丘陵の頂上部近く、標高42m程の緩斜面ⅡC—99～100に位置する。基本層序第Ⅴa層上面で、暗褐色の円形状の落ち込みを確認した。

〔重複〕 第16号プラスチック状土壌と重複する。住居の東側部分で、第1号土壌と重複しており、第16号土壌の方が新しい。

〔平面形・規模〕 平面形は、東西にやや長い楕円形である。規模は、長径3.75m、短径3.5mを計る。面積は、7.8㎡（推定で8.3）を計る。

〔壁〕 砂層を壁面としている。全ての壁が緩傾斜しており、砂層を壁面としているためか、軟質であるが、遺存状態は良好である。壁高は、北側40cm～5cmを計る。



第155図 第5号住居跡

〔床〕 基本層序第V b層を床面としている。住居北側には小さな起伏がみられ、中央部へ向かってゆるやかに傾斜する。南側も中央部に向かって傾斜するがほぼ平坦である。炉近くの一部を除いて、壁と同様に軟質である。

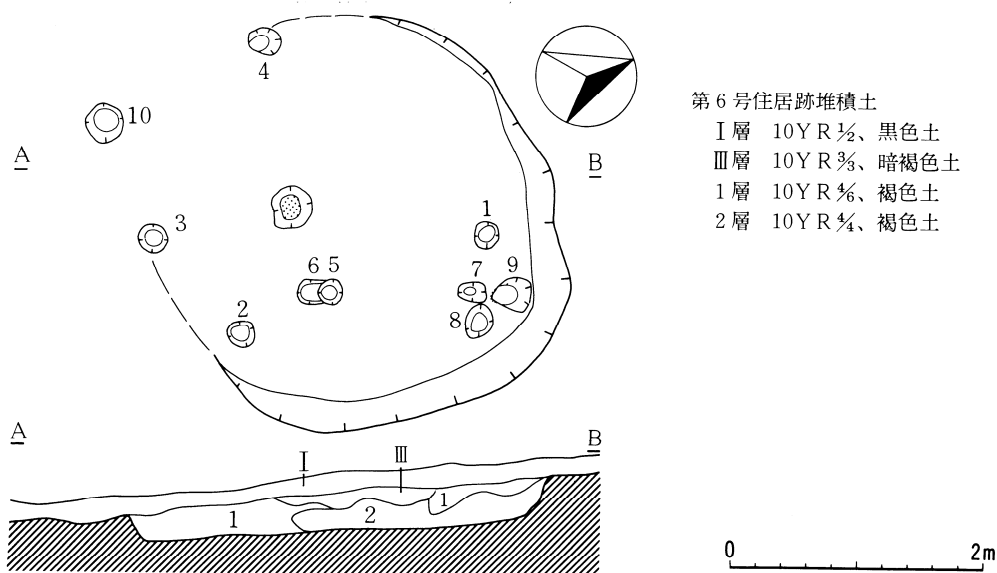
〔柱穴〕 住居内から11個のピットが検出された。住居東側を第16号土壇に切られ、北西側にもピットを検出できなかったため、柱穴の配列は不明である。

No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)
1	32×31	35	2	21×16	20	3	26×22	31	4	22×21	16
5	23×20	39	6	26×22	57	7	29×20	48	8	18×14	23
9	30×23	21	10	17×12	15	11	31×31	17			

〔炉〕 炉は、中央部からやや南西側に位置する石囲炉である。炉石は、浅く掘り込まれた後に南西側に開放する様に、礫が5個「コ」状に配列されている。炉石Bは、石皿の転用である。石囲炉のすぐ傍には焼土があり、地床炉として使用されたものと思われる。炉の深さは約35cmで、15cm程の厚さで焼成を受けている。地床炉の横に、80cm×45cmの範囲で、浅く凹んだ堅い床面がある。炉の前庭部の可能性もある。

〔堆積土〕 堆積土は、3層に分層される。第1、2層は、炭化物を含む砂質土であり、第3層は、多量のロームを含む。

〔出土遺物〕 床面より、底部を欠失する大木10式土器（図170—8）が、石囲炉の傍から出土した。また、スリ石が2点（図176—4・5）の他、剥片が床面から出土した。



第156図 第6号住居跡

第6号住居跡

〔位置と確認〕 調査区ⅡB～ⅡC—109～110区、馬背状台地の南西斜面に位置する。標高は41cmである。この付近は、開墾時に削平されており、遺存状態は極めて悪い。

〔重複〕 なし

〔平面形・規模〕 竪穴の壁を確認できたのは、北東側約半分である。したがって、プランの全容は不明であるが、残存部から推定して、径3.2m程の不整な円形を呈するものと思われる。

〔壁〕 台地斜面に構築されており、しかも一部削平されているため、斜面高位の北東壁より残存しない。この北東壁では約10cmの壁高がある。壁面は基本層序第Ⅴa層である。

〔床面〕 基本層序第Ⅴb層を床面としている。全体に汚れが少なく、しかも極めて軟弱であり、長期間使用された床とは思われない。

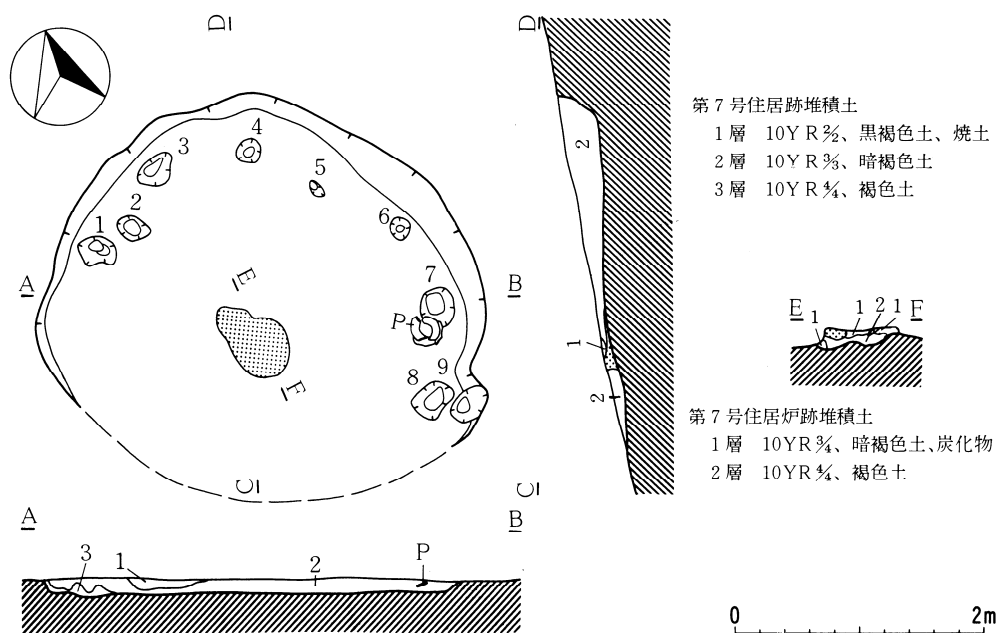
〔柱穴〕 竪穴内及びその周辺で検出できたピットは10個である。いずれも柱痕跡を確認できなかった。ピットの配置からはp i t 1～4が主柱穴の可能性はある。

No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)
1	21×18	16	2	23×20	13	3	24×22	13	4	25×20	22
5	20×20	26	6	19×16	13.3	7	22×17	10	8	28×22	14
9	30×25	23	10	31×30	21						

〔炉〕 竪穴の中央からやや南側に偏在した床面上に炉を検出した。掘り込みや、石の抜き取り痕等が検出されないことから、床面を直接利用した地床炉であろう。焼土の範囲は直径が20cm前後で、厚さは5cm程である。

〔堆積土〕 竪穴内の堆積土は2層に細分されるが、いずれも地山のロームが多量に混入する層である。人為的に埋戻された可能性がある。

〔出土遺物〕 なし



第157図 第7号住居跡

第7号住居跡

〔位置と確認〕 調査区ⅡD—103～104に位置し、基本層序第V a層上面で半円形の暗褐色の落ち込みを確認した。

〔重複〕 なし

〔平面形・規模〕 南側半分が削平により破壊されており、全容はつかめなかった。残存部から推定して、長径3.6m、短径3.3mの楕円形のプランを呈するものと思われる。

〔壁〕 基本層序第V a層をほぼ垂直に掘り込んで壁面としている。壁高は、東壁15cm、西壁12cm、北側32cmである。

〔床〕 基本層序第V b層を掘り込んで床面としている。床面はほぼ平坦で、炉周囲がやや堅く締まっている。

〔柱穴〕 竪穴内より9個のピットを検出した。このうち規模、深さからpit 1、3、4、

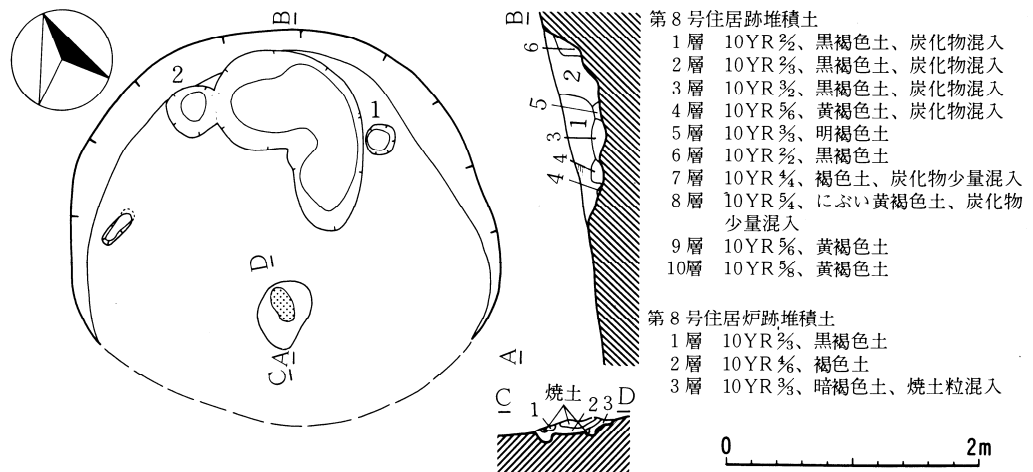
6、7、8が支柱穴の可能性はある。

No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)
1	33×22	34	2	27×18	14	3	35×22	26	4	20×19	18
5	16×9	16	6	19×17	17	7	33×17	32	8	32×22	22
9	34×24	25									

〔炉〕 竪穴中央部で70cm×43cm、厚さ35cmの規模で、焼土がブロック状に堆積していた。堆積状況から見て、地床炉が廃棄されたものと思われる。

〔堆積土〕 暗褐色の単一層であり、自然堆積と思われる。

〔出土遺物〕 破片資料6点、石6点が出土した。図170—9は、第4号住居跡堆積土中の破片と接合した壺形土器、図173—7は床面直上出土でいずれも十腰内I式である。磨石が1点出土した。



第158図 第8号住居跡

第8号住居跡

〔位置と確認〕 調査区ⅡE—100の基本層序第V a層上面で落ち込みを確認した。この位置は第2号住居跡、第10号住居跡と同様、馬背状台地の最低位の斜面上である。

〔重複〕 不整形円形の性格不明な小竪穴と重複している。本住居はこの小竪穴を削平して構築されている。

〔平面形・規模〕 南側半分が検出できなかったが、直径3.3m程の円形と推定される。

〔壁〕 基本層序第V a層を壁面としている。北側の壁高は約30cmもあるが、南側は削平され、残存しない。

〔床面〕 基本層序第V b層を直接床面としている。また小竪穴と重複している部分では小竪穴の堆積土をそのまま踏み固めて床面としている。汚れや凹凸も少なく全体的に軟質である。

〔柱穴〕 竪穴内で検出できたピットは3個である。このうち、pit 1～2が柱痕跡を検

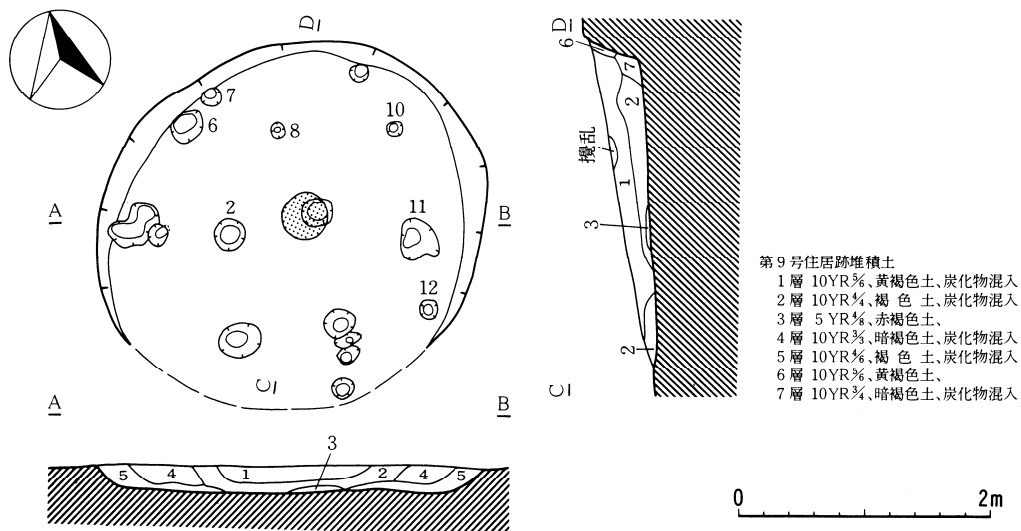
出できなかったものの規模、深さからみて支柱穴の可能性はある。

No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)
1	40×38	25	2	25×24	52						

〔炉〕 竪穴のほぼ中央部に地床炉を検出した。焼土の範囲は直径40cmの円形である。また、厚さは6cm程ある。

〔堆積土〕 1～6層に細分される。1～3層は黒色系の腐植土、4～6層はロームが多く混入する層である。

〔出土遺物〕 破片資料が19片と、図176—6の凹石が出土した。破片資料の大部分は初期堆積土中のものである。いずれも十腰内I式であり、他の時期のものは混在していない。



第159図 第9号住居跡

第9号住居跡

〔位置と確認〕 調査区II D～II E—99に位置し、基本層序第V a層上面で暗褐色の円形の落ち込みを確認した。

〔重複〕 なし

〔平面形・規模〕 削平により南壁は確認できなかったが、直径約3mの円形と推定される。残存部床面積は6.3㎡である。

〔壁〕 基本層序第V a層を壁面としている。北壁はほぼ垂直に掘り込まれ、壁高40cm、東、西壁は緩やかに掘り込まれ、壁高は18～20cmである。

〔床〕 基本層序第V b層を掘り込んで床面としている。床の硬さは炉の周囲が比較的堅く締まっているが、壁際にかけては軟弱である。

〔柱穴〕 竪穴内より16個のピットを検出した。このうち、規模、深さからpit 3、6、

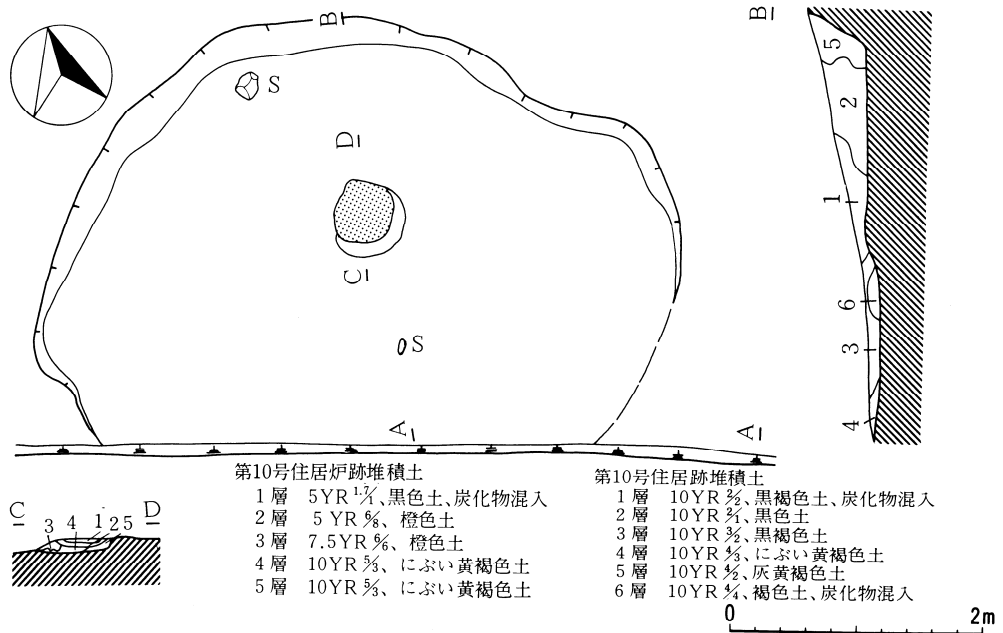
9、11が支柱穴の可能性がある。

No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)
1	26×22	6	2	26×24	13	3	34×27	32	4	16×15	17
5	40×32	13	6	25×23	35	7	16×15	24	8	13×11	10
9	16×14	26	10	12×12	9	11	32×31	30	12	16×13	9
13	26×24	24	14	20×10	23	15	18×11	23	16	16×16	17

〔炉〕 竪穴のほぼ中央部で地床炉を検出した。焼土の範囲は直径約40cmの円形で、最大8cmの厚さである。

〔堆積土〕 7層に区分できた。炉直上の3層を除き、ローム粒が多く混入する土層で人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 破片資料が48点、石が4点出土した。床直の細片や堆積土中より出土した土器は全て十腰内I式期である。また、図176—8は磨石である。



第160図 第10号住居跡

第10号住居跡

〔位置と確認〕 調査区ⅡE—97の基本層序第V a層上面で落ち込みを確認した。この位置は馬背状台地南斜面の最も低い面である。本住居の南側は低湿地となり、竪穴が構築される可能性がほとんどである。

〔重複〕 なし

〔平面形・規模〕 竪穴の壁及び床面を確認できたのは、北側約半分である。したがって、プランの全容は不明であるが、残存する壁の状況から推定して径4.5m程の不整円形であろう。

〔壁〕 比較的急な斜面に構築され、しかも竪穴が浅いため、竪穴の南半分は削平され残存

しない。北側は基本層序第V a層を壁面としている。壁高は最も高い地点で約40cmある。

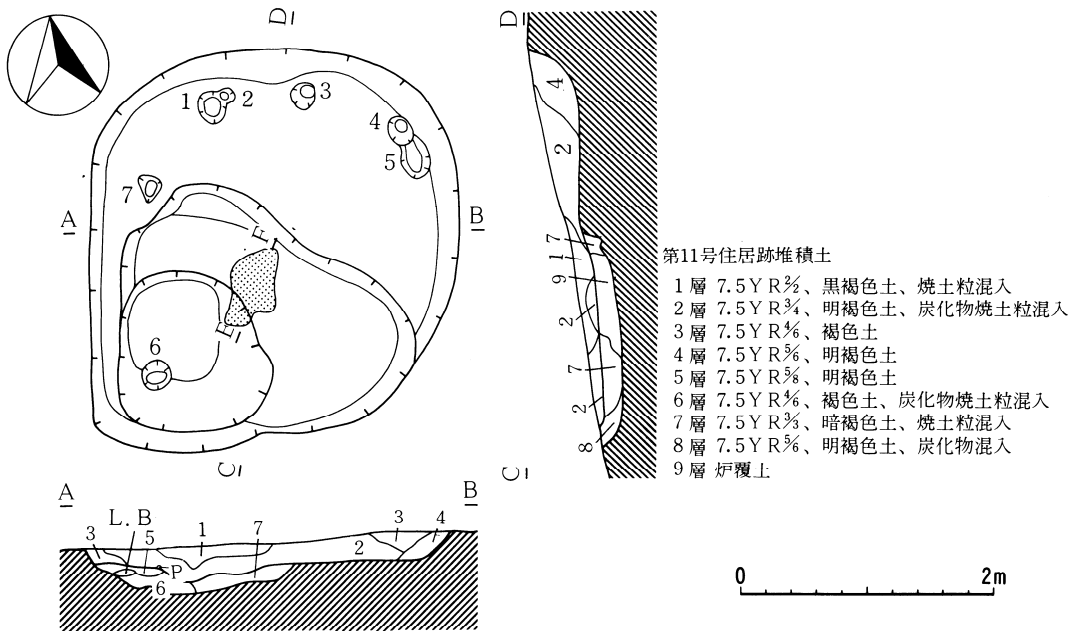
〔床面〕 基本層序第V b層を削平し床面としている。炉の周囲が比較的堅緻であるが、全体に軟質である。

〔柱穴〕 堅穴内外でピットは検出されなかった。

〔炉〕 堅穴の中央部から北壁寄りに偏在して地床炉が検出された。焼土は40cm×46cmの楕円形の範囲に分布する。厚さは中央部で約5cmである。

〔堆積土〕 6層に細分される。1～3層は黒色系の腐植土、4～6層は黄褐色ローム質土が多量に混入する層である。

〔出土遺物〕 床面出土の遺物はない。堅穴の初期堆積土中から土器の細片が、また図176—9の磨石が出土したにすぎない。図170—10は十腰内I式である。



第161図 第11号住居跡

第11号住居跡

〔位置と確認〕 調査区II C—100に位置する。この位置は第12号住居跡と同様、標高42mの最高位である。

〔重複〕 長径1.5m、短径1m程の第20号土壇と重複している。この土壇の堆積土を削平し、床面と炉を構築している。

〔平面形・規模〕 堅穴は直径約3mの不整形である。特に小堅穴と重複する南西壁が張り出している。炉を含む床面は6.53㎡である。

〔壁〕 基本層序第V a層を壁面としている。検出できた壁高は北壁で23.0cm、南壁で5cmである。

〔床面〕 基本層序第V b層を削平して床面としているが、性格不明の小竪穴と重複している部分では、その堆積土である暗褐色土層を直接踏み固めて使用している。床面は全体に軟質である。

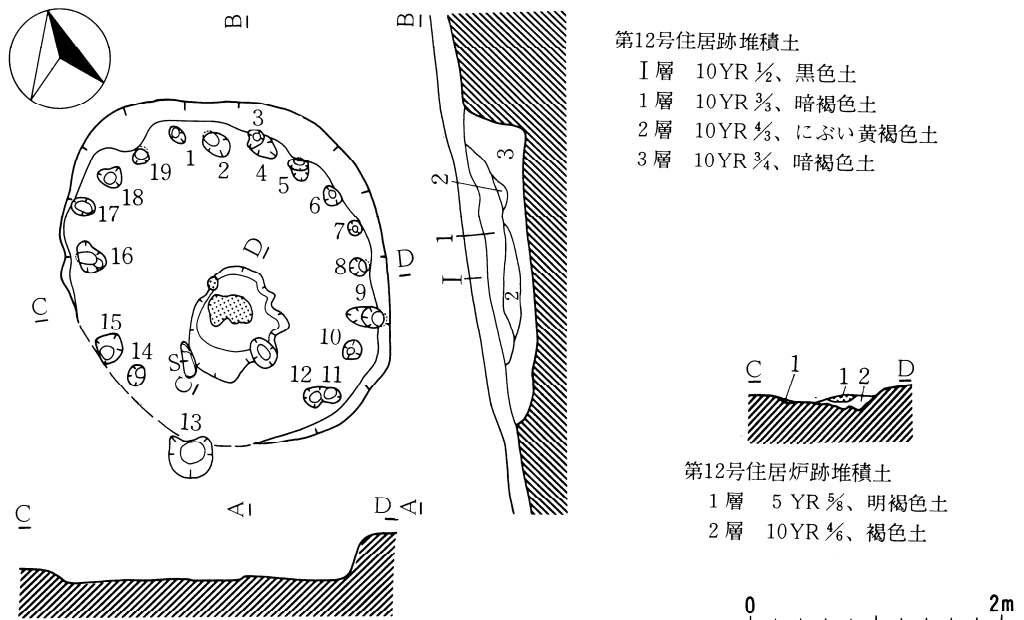
〔柱穴〕 竪穴内で検出できたピットは7個である。いずれも壁直下に位置する。

No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)
1	26×20	28	2	7×6	11	3	22×18	28	4	22×18	41
5	31×22	18	6	24×23	15	7	21×18	12			

〔炉〕 竪穴中央部からやや南側に偏在して地床炉が検出された。炉の位置する場所は第20号土壌上面である。焼土の範囲は50cm×30cmである。

〔堆積土〕 竪穴内の堆積土は4層に細分される。第2層は床面のほぼ全体を覆うもので、炭化物粒、焼土粒が混入する。第4層は壁直下に分布するもので、壁の崩落土を主休とする可能性が高い。

〔出土遺物〕 十腰内I式期の細片と不定形石器1点が堆積土中から出土しただけである。



第162図 第12号住居跡

第12号住居跡

〔位置と確認〕 調査区II C-99で検出された。この位置は馬背状台地中央部の南斜面であり、また標高は42mで、住居跡群中最も高位である。

〔重複〕 なし

〔平面形・規模〕 長径2.9m、短径2.4mの不整楕円形である。炉を含む床面積は4.9㎡である。

〔壁〕 砂層を壁面としている。したがって、崩落が激しい。

〔床面〕 砂層を掘り込み、その上に薄く黄褐色ローム質土を貼って床面としている。炉の周辺と竪穴中央部がやや堅緻である。

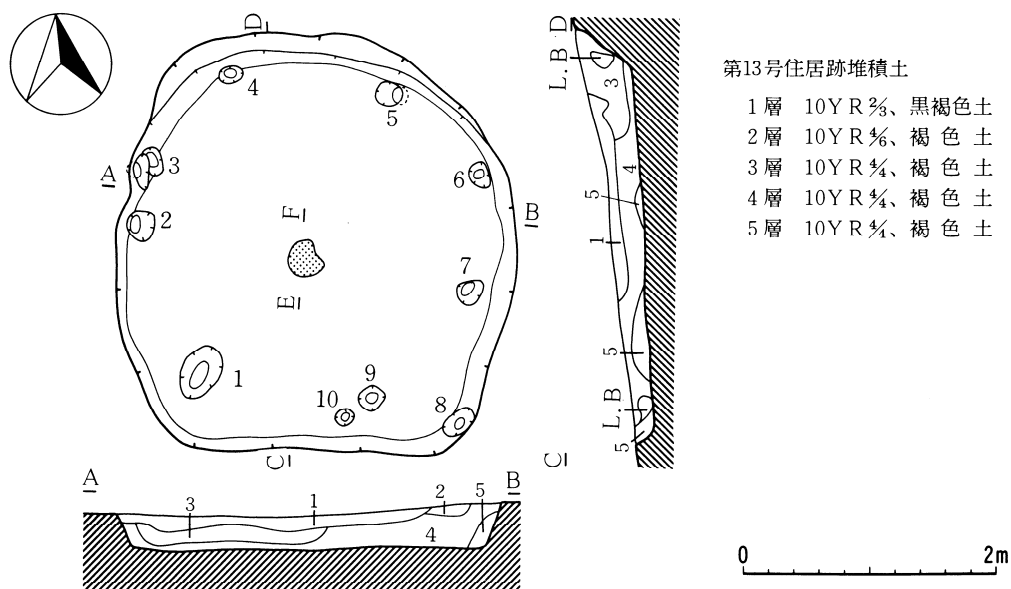
〔柱穴〕 竪穴内で検出できたピットは19個である。p i t 13を除き、いずれも小規模で、壁直下を一巡する。上屋を支えた支柱穴か、砂層である竪穴壁の土留用の柱穴が推定される。

No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)
1	15×12	16	2	22×20	25	3	15×13	25	4	17×15	14
5	20×15	19	6	18×13	19	7	11×10	15	8	15×15	24
9	32×22	25	10	15×15	12	11	15×11	29	12	16×15	30
13	36×30	20	14	16×12	22	15	22×20	16	16	30×17	28
17	20×13	19	18	20×16	18	19	13×12	17			

〔炉〕 竪穴の中央部から南壁寄りにやや偏在して検出された。長径約80cm、短径約50cmの不整な小竪穴であるが、壁際に石の抜取痕と推定される小穴や壁のみだれがあることから、本来は石囲炉の可能性が高い。炉底は薄く焼土化している。

〔堆積土〕 3層に細分される。ローム粒、砂粒を多く含む全体に砂質の度合いが強い。

〔出土遺物〕 十勝内I式の細片が堆積土中から出土したにすぎない。



第163図 第13号住居跡

第13号住居跡

〔位置と確認〕 調査区ⅡB～ⅡC—101～102に位置し、基本層序第V a層上面で落ち込みを

確認した。

〔重複〕 なし

〔平面形・規模〕 遺存状態は極めて良好である。直径3.2mの不整円形であり、床面積は7.4㎡である。

〔壁〕 基本層序第V a層を垂直に掘り込んで壁面としている。壁高は、東壁37cm、西壁33cm、南壁14cm、北壁48cmである。

〔床〕 基本層序第V b層を床面としている。北から南へ20cm傾斜している。床面は砂質で全体的に軟弱である。

〔柱穴〕 竪穴内より10個のピットを検出した。このうち、ピット配置からみてp i t 1、3、4、5、7、9が主柱穴の可能性がある。

No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)
1	45×30	24	2	23×22		3	32×22	35	4	18×15	
5	21×20		6	21×16	11	7	22×18	18	8	29×16	9
9	20×19	18	10	15×13	15						

〔炉〕 竪穴のほぼ中央部で地床炉を検出した。直径30cmの円形プランを呈し、最大4cmの厚さで焼土化している。

〔堆積土〕 6層に区分できた。いずれも黄褐色のローム粒が混入しており、人為堆積と思われる。

〔出土遺物〕 破片資料34点、石3点が出土した。図171—12は堆積土上面から出土した略完形の深鉢形土器、図170—11は初期堆積土中から出土した壺形土器で、いずれも十腰内I式期である。

第14号住居跡

〔位置と確認〕 調査区ⅡB～ⅡC—103に位置し、基本層序第V a層上面で暗褐色の二重の落ち込みを確認した。

〔重複〕 本住居跡北側で第18号土壇と重複しており、本住居跡が古い。

〔平面形・規模〕 南壁側が削平されているため、全容は把握できなかった。残存部から推定して、長径4.3m、短径3.6mの不整楕円形を呈するものと思われる。

〔壁〕 基本層序第V a層をほぼ垂直に掘り込んで壁面としている。壁高は、東壁で17～20cm西壁で20cm、南壁で4～5cm、北壁は推定で40cmである。

〔床〕 基本層序第V b層を床面としている。床の硬さは、炉周辺及び壁より80cm中央寄り
が堅く締っている。

〔柱穴〕 竪穴内より6個のピットを検出した。

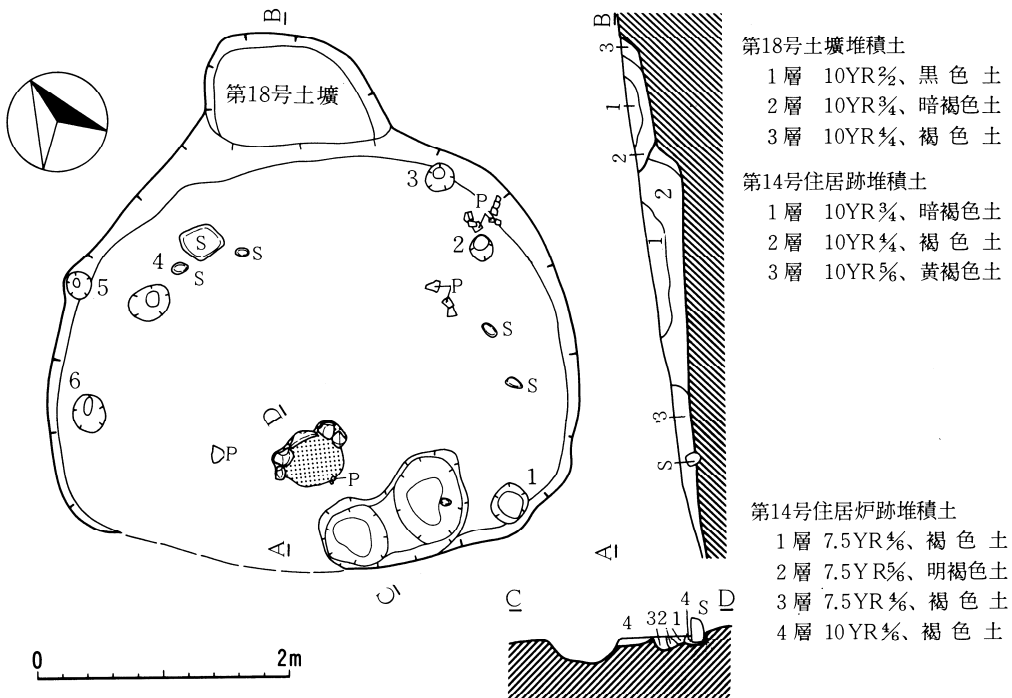
No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)
1	31×27	13	2	22×18	13	3	23×22	16	4	33×27	20
5	22×18	7	6	30×26	14						

〔炉〕 本住居跡中央部よりやや南壁寄りに偏在して石囲炉を検出した。石囲部は、11cm～25cm大の5個の河原石が残存していたが、炉石の抜き取り痕が連続して確認されたことから、構築時は楕円形に一巡して配置されていたと思われる。炉石は掘り方をもつ。炉内は65cm×55cmの範囲で焼土化している。

〔付属施設〕 炉の中軸線延長上で南壁際に2基の連続する掘り込みを検出した。西側は、60cm×50cm、深さ24cm、東側は、80cm×55cm、深さ20cmの規模で掘り込まれている。共に底面は堅緻で、使用頻度が高かったものと推定される。出入口として使用された可能性がある。

〔堆積土〕 3層に区分できた。いずれも褐色系のシルト質土層で人為堆積と思われる。

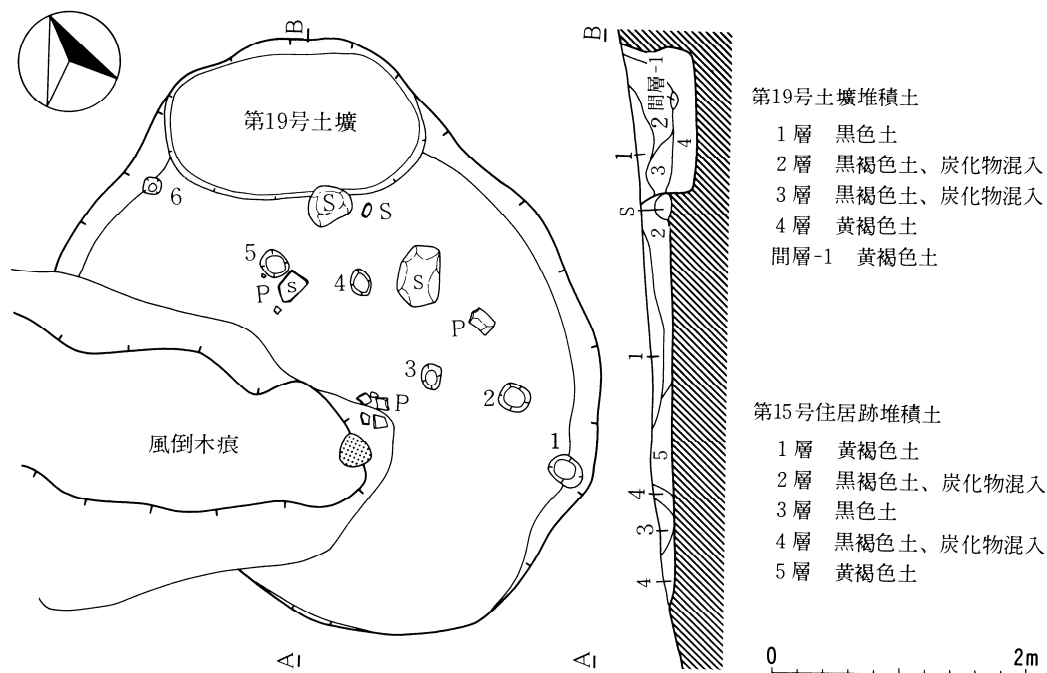
〔出土遺物〕 破片資料が14点、石が12点出土した。図171—13は床面直上、図173—12は壁面から出土し大木10式期である。図173—17は堆積土中で十腰内I式期である。図176—10・12・13は磨石である。



第164図 第14号住居跡

第15号住居跡

〔位置と確認〕 調査区ⅡB～ⅡC—104～105に位置し、基本層序第V a層上面で確認した。馬背状台地の南西斜面で標高41m付近である。



第165図 第15号住居跡

〔重複〕 北側で第19号土壇と重複しており、本住居跡が古い。また、西側約3分の1は風倒木により破壊されている。

〔平面形・規模〕 南壁が削平され全容はつかめなかったが、残存部から長径4.5m、短径3.8mの楕円形と推定される。

〔壁〕 東壁及び北西壁が確認された。基本層序第V a層を壁面としており、壁高は東壁で38cm～41cm、北西壁で20cmである。共に緩やかに立ち上がる。

〔床〕 基本層序第V b層を掘り込んで床面としている。床面には砂粒が多く混入しているため軟弱である。

〔柱穴〕 本住居跡内より6個のピットを検出した。このうち、規模、深さからpit 2、5が支柱穴の可能性がある。

No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)	No.	規模(cm)	深さ(cm)
1	28×21	16	2	24×22	15	3	20×16	9	4	21×15	11
5	22×21	26	6	15×13	8						

〔炉〕 竪穴中央部よりやや南壁寄りに位置し、風倒木により約20cm程度盛上りがあって焼土が確認された。規模は27cm×25cmの範囲で焼土化しており、地床炉の可能性はある。

〔堆積土〕 3層に区分できた。黄褐色及び暗褐色シルト質土層でいずれも自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 細片が比較的多く出土した。図171—14は床面から、図173—14～15は堆積土中から出土した。十腰内I式期である。図176—11は磨石である。 (三浦・赤平・小田川)

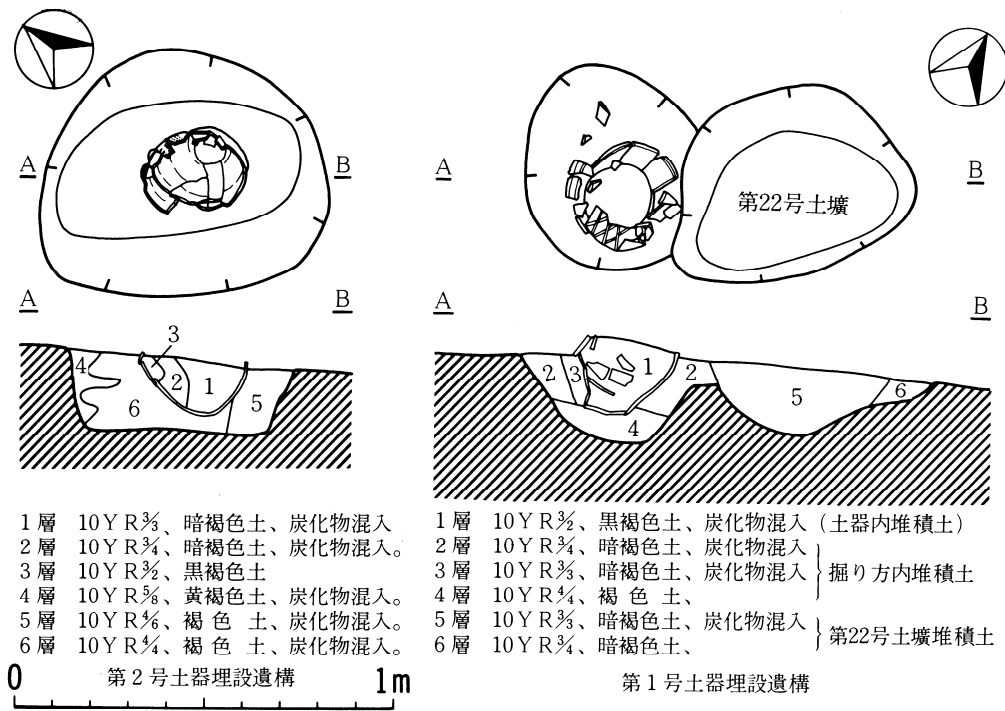
(2) 土器埋設遺構

第1号土器埋設遺構 図171—15

調査区 I Z—98に位置する。馬背状台地の最高位の地点であり、周辺土壌群が密集する特殊な地域である。本遺構は、北東側で第22号土壙と重複しており、本遺構が古い。土器上面の確認は基本層序第IV層中である。埋設の方法は正立埋設であるが、土器は北方に約20度傾斜している。掘り方は55cm×50cmの楕円形のプランを呈し、遺構確認面からの掘り込みは25cmである。土器内の堆積土は単一層で炭化物、ローム粒が若干混入する他には遺物はない。土器は、口径25.5cm、推定器高32cmの深鉢型土器である。波状口縁で、器面には2条の格子目状沈線文が施されており、十腰内 I 式期に位置づけられる。

第2号土器埋設遺構 図171—16

調査区 II B—101に位置し、基本層序第IV層上面で確認した。周囲には、第11号及び第13号住居跡が近接する。埋設の方法は正立埋設であるが、土器は北方へ約35度傾斜して検出された。掘り方は、75cm×65cmの楕円形で、遺構確認面からの掘り込みは20cmである。堆積土はいずれも褐色系のシルト質土層で炭化物が微量に混入している。土器内の堆積土は3層に区分でき、この中にも炭化物粒の混入がみられる。土器は、最大胴径24.7cmの深鉢型土器で、LRの地文縄文が施されており、十腰内 I 式期に位置づけられる。 (赤平)



第166図 土器埋設遺構

(3) 土 壤

Ⅶ区で検出された土壌は、総数18基である。土壌は、低湿地に囲まれる馬背状台地の頂上部付近（標高41m）から、頂上部緩斜面（標高42m）に構築されている。住居跡群が南斜面に位置するのに対し、土壌は頂上部から北側に位置する。

土壌の形態は、平面形で円形（不整円含む）楕円形（不整楕円含む）不整形に、断面形では円筒状・ナベ底状（舟底状含む）フラスコ状・不整形に分けられる。概して、円筒状とフラスコ状のものは深く大型であるが、ナベ底状のものは前者に比べ浅く小型である。第7号土壌はフラスコ状土壌であるが、中場の一部に張り出し状の掘り込みをもつ特異の形態である。また、壙底内に小ピットを設けるものが4基ある。

土壌内より遺物が出土するものが、半数以上であり、堆積土中よりも壙底からの完形品の出土がめだつ。第5・7・9・13号土壌からは、完形及び復原可能な土器が壙底より出土している。いずれも十腰内Ⅰ式期のものである。

土壌の配列としては、円筒状のものが東と西へ弧状に並ぶのに対し、ナベ底状のものは、東西にほぼ直線的に並ぶ。フラスコ状はほぼ中央に位置する。他調査区の土壌が高密度で密集するのに対し、大型のものが、点在するのが特徴である。住居跡と重複するものが5基あるが土壌同志の重複はみられない。

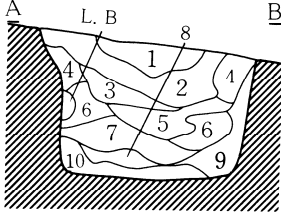
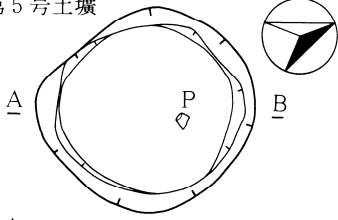
類似土壌の機能については、貯蔵穴、土壌墓等の諸説があるが、本地区で検出されたものについて主機能を特定するに至らなかった。しかし、大型の円筒形土壌の完形土器や大礫は、「副葬品」、「抱き石」と考えることも可能であろう。

(三浦)

第11表 Ⅶ区 土壌観察一覧表（第167～169図）

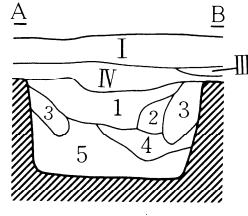
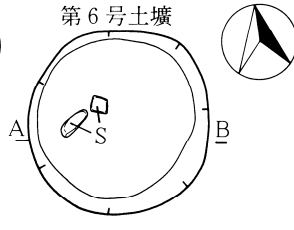
土壌番号	検出グリッド	重複関係	平面形	形態	計測値（単位cm）			出土遺物				土壌の時期	
					開口部	壙底部	深さ	土器 有無	石器 個数	土製品 刻片	土製品 礫		土製品 有無
5	I Z-9 6		不整円形	円筒状	(174)×164	136×132	120	○	1				十腰内Ⅰ
6	I Z-9 7		円形	円筒状	154×144	128×122	80			○			
7	I Z-100～I Z-101		不整円形	フラスコ	222×172	184×174	160	○	1		○		十腰内Ⅰ
8	ⅡB-1 0 0		円形	舟底状	180×160	130×120	50	○	○			○	〃
9	I Y-1 0 1		不整楕円	円筒状	198×178	156×160	140		1				〃
10	I Y-100～I Y-101		楕円形	フラスコ	228×190	180×144	150						
11	I Y-102～I Y-103		不整円	不整形	220×200	159×148	115				○		
12	ⅡA-1 0 3		不整円形	円筒状	214×204	192×168	125				○		
13	ⅡA-1 0 0		不整円形	円筒状	216×194	166×158	120	○	2		○		十腰内Ⅰ
14	I Z-9 3		円形	すり鉢状	232×212	174×138	110	○					〃
15	ⅡB-9 9		不整円形	舟底状	192×174	166×154	60						
16	ⅡC-9 9	>5H	円形	フラスコ	112×100	135×125	115						
17	ⅣI Z-98～ⅡA-98		円形	フラスコ	152×148	180×160	100				○		
18	ⅡB-1 0 3	>14H	不整形	舟底状	140×110	120×75	20						
19	ⅡB-1 0 5	>15H	楕円形	円筒状	210×130	195×110	60						
20	ⅡC-1 0 0	<11H	不整形	舟底状	250×190	220×130	40	○	1				十腰内Ⅰ
21	ⅡD-100～ⅡE-100	>8H	不整形	不整形	150×(110/60)	120×(40/60)	60						
22	I Z-9 7	>第1号土器埋設	不整形	ナベ底状	130×100		50						

第5号土壤



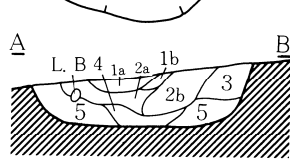
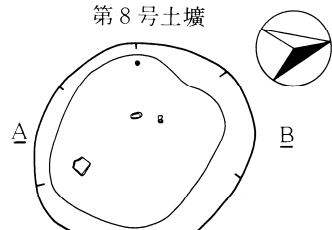
- 1層 10YR 5/1、黑色土、炭化物微量混入
- 2層 10YR 5/2、黑褐色土、炭化物微量混入
- 3層 10YR 5/3、黑褐色土、炭化物混入
- 4層 10YR 5/4、黄褐色土
- 5層 10YR 5/5、暗褐色土
- 6層 10YR 5/6、褐色土
- 7層 10YR 5/7、暗褐色土
- 8層 10YR 5/8、暗褐色土
- 9層 10YR 5/9、明黄褐色土
- 10層 10YR 5/10、褐色土

第6号土壤



- 1層 10YR 5/1、褐色土
- 2層 10YR 5/2、黄褐色土
- 3層 10YR 5/3、明黄褐色土
- 4層 10YR 5/4、にぶい黄褐色土
- 5層 10YR 5/5、褐色土

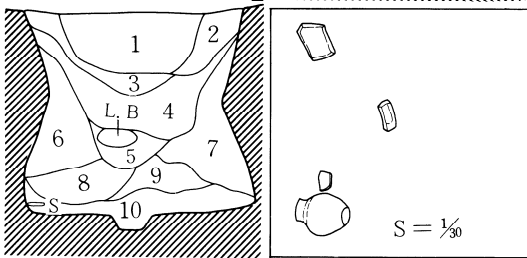
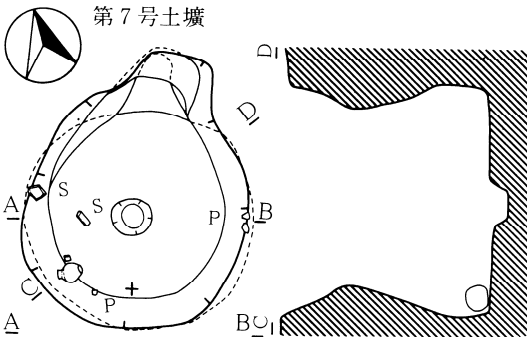
第8号土壤



- 1a層 10YR 5/1、黑褐色土
- 1b層 10YR 5/2、黑褐色土
- 2a層 10YR 5/3、褐色土
- 2b層 10YR 5/4、暗褐色土
- 3層 10YR 5/5、褐色土
- 4層 10YR 5/6、褐色土
- 5層 10YR 5/7、褐色土

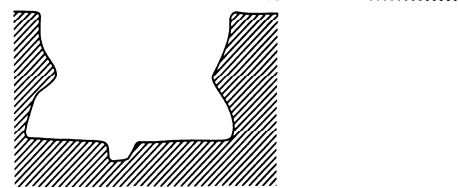
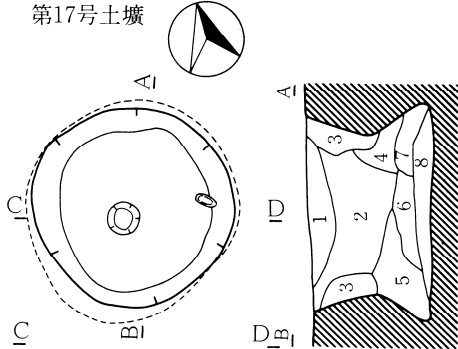
0 2m

第7号土壤



- 1層 10YR 5/1、黑色土
- 2層 10YR 5/2、黑褐色土
- 3層 10YR 5/3、暗褐色土
- 4層 10YR 5/4、褐色土
- 5層 10YR 5/5、褐色土
- 6層 10YR 5/6、黄褐色土
- 7層 10YR 5/7、明黄褐色土
- 8層 10YR 5/8、褐色土
- 9層 10YR 5/9、明黄褐色土
- 10層 10YR 5/10、暗褐色土、炭化物微量混入

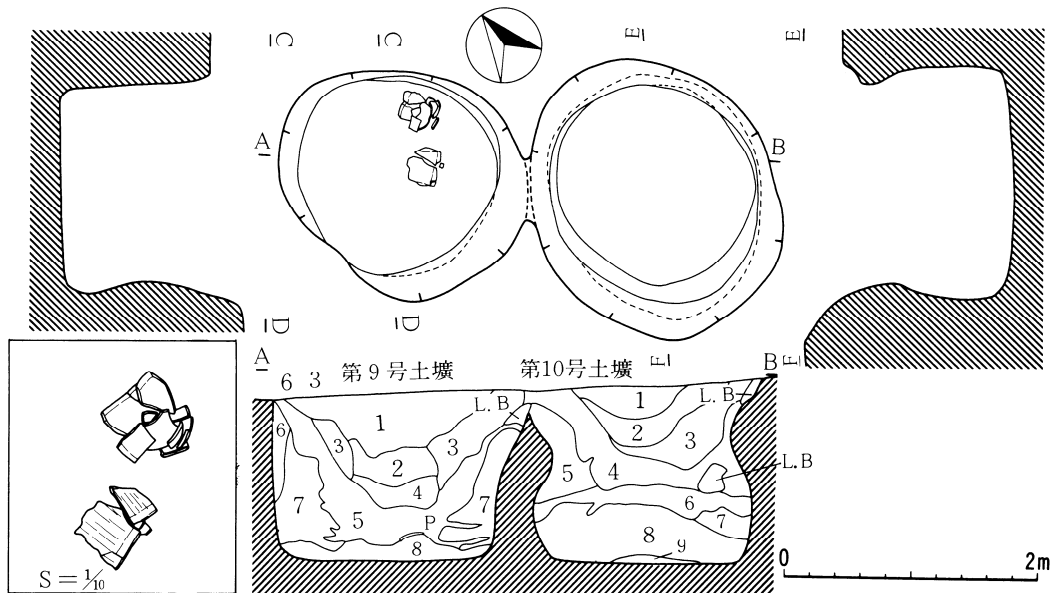
第17号土壤



- 1層 10YR 5/1、黑褐色土、炭化物微量混入
- 2層 10YR 5/2、暗褐色土、炭化物微量混入
- 3層 10YR 5/3、黄褐色土
- 4層 10YR 5/4、褐色土、炭化物微量混入
- 5層 10YR 5/5、暗褐色土、炭化物微量混入
- 6層 10YR 5/6、黑褐色土、炭化物微量混入
- 7層 10YR 5/7、褐色土
- 8層 10YR 5/8、明黄褐色土

0 2m

第167图 土壤(1)

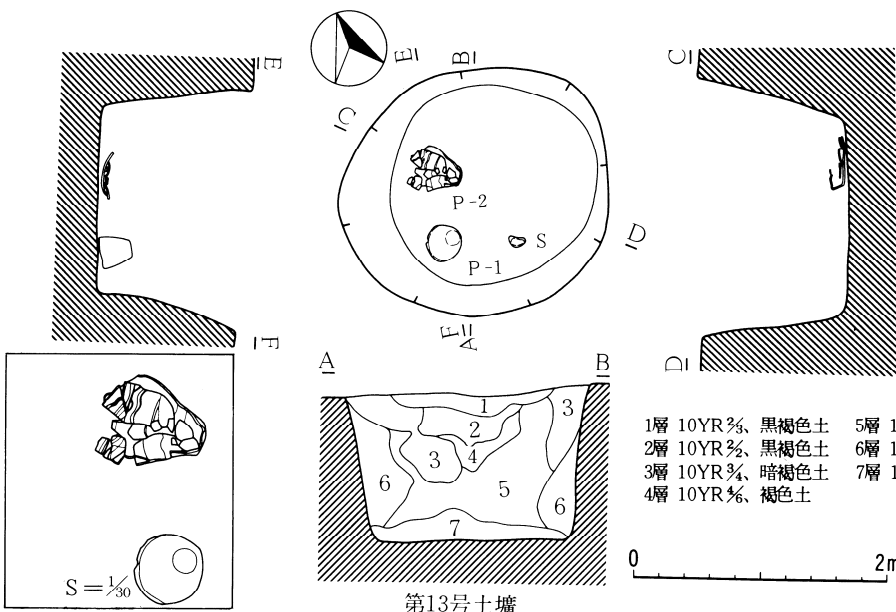


第9号土壤

- | | |
|--|--|
| 1層 10YR ¹ / ₂ 、黑色土 | 5層 10YR ⁶ / ₆ 、褐色土、炭化物混入 |
| 2層 10YR ² / ₂ 、黑褐色土 | 6層 10YR ⁶ / ₆ 、明黃褐色土 |
| 3層 10YR ² / ₂ 、黑褐色土
炭化物微量混入 | 7層 10YR ² / ₂ 、黑褐色土
炭化物微量混入 |
| 4層 10YR ² / ₂ 、黑褐色土
炭化物微量混入 | 8層 10YR ² / ₂ 、黑褐色土
炭化物微量混入 |

第10号土壤

- | | |
|--|--|
| 1層 10YR ¹ / ₂ 、黑色土 | 5層 10YR ⁶ / ₆ 、明黃褐色土 |
| 2層 10YR ² / ₂ 、黑色土、炭化物微量混入 | 6層 10YR ⁴ / ₄ 、暗褐色土 |
| 3層 10YR ² / ₂ 、黑褐色土
炭化物微量混入 | 7層 10YR ⁶ / ₆ 、褐色土 |
| 4層 10YR ⁴ / ₄ 、暗褐色土
炭化物微量混入 | 8層 10YR ⁶ / ₆ 、明黃褐色土 |
| | 9層 10YR ² / ₂ 、暗褐色土 |

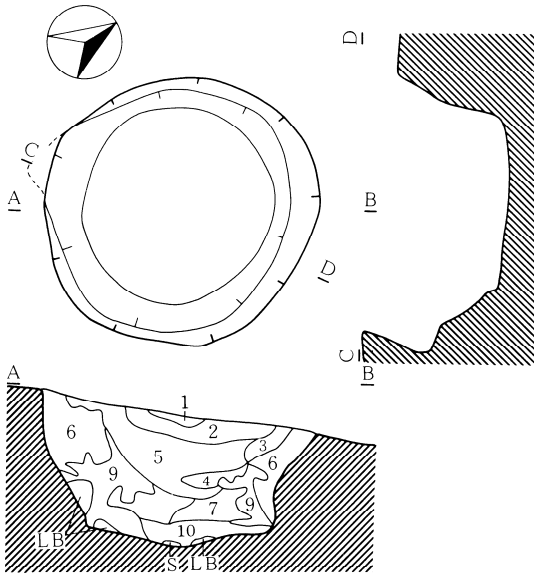


第13号土壤

- | | |
|---|---|
| 1層 10YR ² / ₂ 、黑褐色土 | 5層 10YR ⁶ / ₆ 、褐色土 |
| 2層 10YR ² / ₂ 、黑褐色土 | 6層 10YR ⁶ / ₆ 、黃褐色土 |
| 3層 10YR ⁴ / ₄ 、暗褐色土 | 7層 10YR ⁶ / ₆ 、褐色土 |
| 4層 10YR ⁶ / ₆ 、褐色土 | |

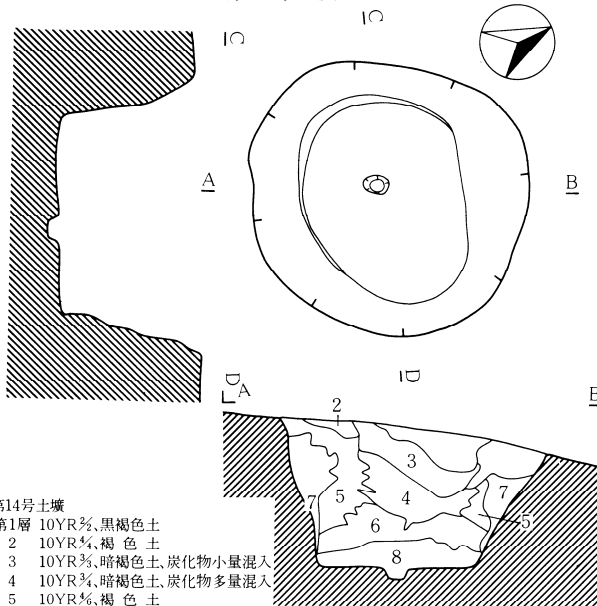
第168圖 土壤(2)

第11号土坑



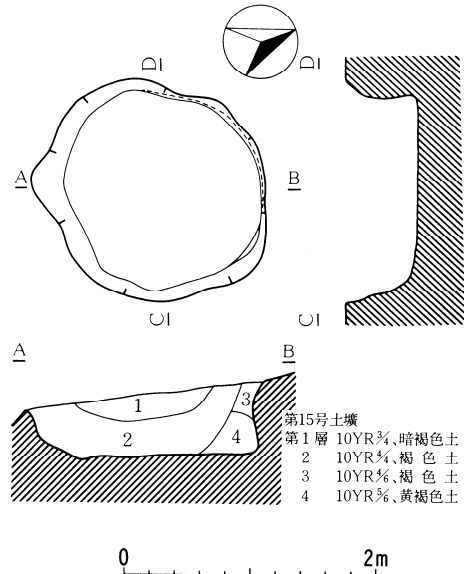
- 第11号土坑
- | | |
|-------------------|--------------------|
| 第1層 10YR 5/1, 黑色土 | 6層 10YR 5/6, 黄褐色土 |
| 2 10YR 5/2, 黑褐色土 | 7層 10YR 5/3, 褐色土 |
| 3 10YR 5/4, 暗褐色土 | 8層 10YR 5/4, 暗褐色土 |
| 4 10YR 5/1, 黑色土 | 9層 10YR 5/1, 黑色土 |
| 5 10YR 5/4, 暗褐色土 | 10層 10YR 5/2, 暗褐色土 |

第14号土坑



- 第14号土坑
- | | |
|---------------------------|------------------|
| 第1層 10YR 5/1, 黑褐色土 | 6 10YR 5/3, 暗褐色土 |
| 2 10YR 5/3, 褐色土 | 7 10YR 5/2, 黑褐色土 |
| 3 10YR 5/4, 暗褐色土, 炭化物少量混入 | 8 10YR 5/3, 暗褐色土 |
| 4 10YR 5/4, 暗褐色土, 炭化物多量混入 | 9 10YR 5/1, 黑色土 |
| 5 10YR 5/3, 褐色土 | |
| 6 10YR 5/3, 褐色土, 炭化物多量混入 | |
| 7 10YR 5/6, 明黄褐色土 | |
| 8 10YR 5/2, 暗褐色土 | |

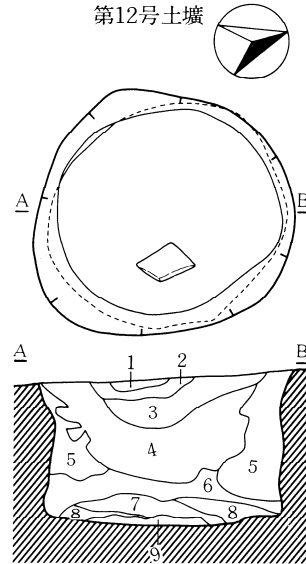
第15号土坑



- 第15号土坑
- | |
|--------------------|
| 第1層 10YR 5/4, 暗褐色土 |
| 2 10YR 5/3, 褐色土 |
| 3 10YR 5/3, 褐色土 |
| 4 10YR 5/6, 黄褐色土 |

0 2m

第12号土坑



- 第12号土坑
- | | |
|-------------------|------------------|
| 第1層 10YR 5/1, 黑色土 | 6 10YR 5/4, 暗褐色土 |
| 2 10YR 5/1, 黑色土 | 7 10YR 5/2, 黑褐色土 |
| 3 10YR 5/4, 暗褐色土 | 8 10YR 5/3, 褐色土 |
| 4 10YR 5/4, 暗褐色土 | 9 10YR 5/1, 黑色土 |
| 5 10YR 5/3, 褐色土 | |

0 2m

第169图 土坑 (3)

2. 出土遺物

(1) 土器 (第170～174図)

Ⅶ区では、縄文時代中期、後期の土器が出土したが、Ⅶ区が以前、重機により周囲から土が盛られ、遺物包含層が攪乱されていることから、遺構内以外の出土遺物が以前からⅦ区に存在したのか判別ができない。そのことから、Ⅶ区の状況、性格を知る上での資料価値は低くなる。したがって、Ⅶ区では、遺構外出土土器については、実測図及び拓影図を掲載するにとどめた。

(ア) Ⅲ群土器

Ⅲ群3類

縄文時代中期末の大木10式に併行すると思われるもので、8個体出土した。いずれも住居跡より出土している。(170図1、2・173図4) — 2号住居跡、(173図6) — 4a号住居跡、(170図8) — 5号住居跡、(170図13、173図12・13) — 14号住居跡である。

器形を知り得るものは以下に記す。

(170図8)は、胴部がやや張り、口縁部が外反する深鉢形土器である。口縁に3個(2個は破損によりない)の山形突起を有すると思われる。(口径18.6cm、最大胴径16.4cm、残部器高20.1cm、器厚5～6mm)。


(170図13)は、4波状縁を呈し、胴部が張り、口縁部が外反しながら立ち上がり、口唇部近くで内湾する深鉢形土器である。(口径18.5cm、底径8.4cm、最大胴径13.5cm、器高29.5cm、器厚5～6mm)。

(170図1、2)は、やや胴部がはり、口縁部が外反する平縁の深鉢形土器である。推定口径は(1)15cm、(2)20.5cmである。

(173図6)は、(170図13)と同様の器形を呈すると思われ、波状縁の頂部には刻み目が施される。

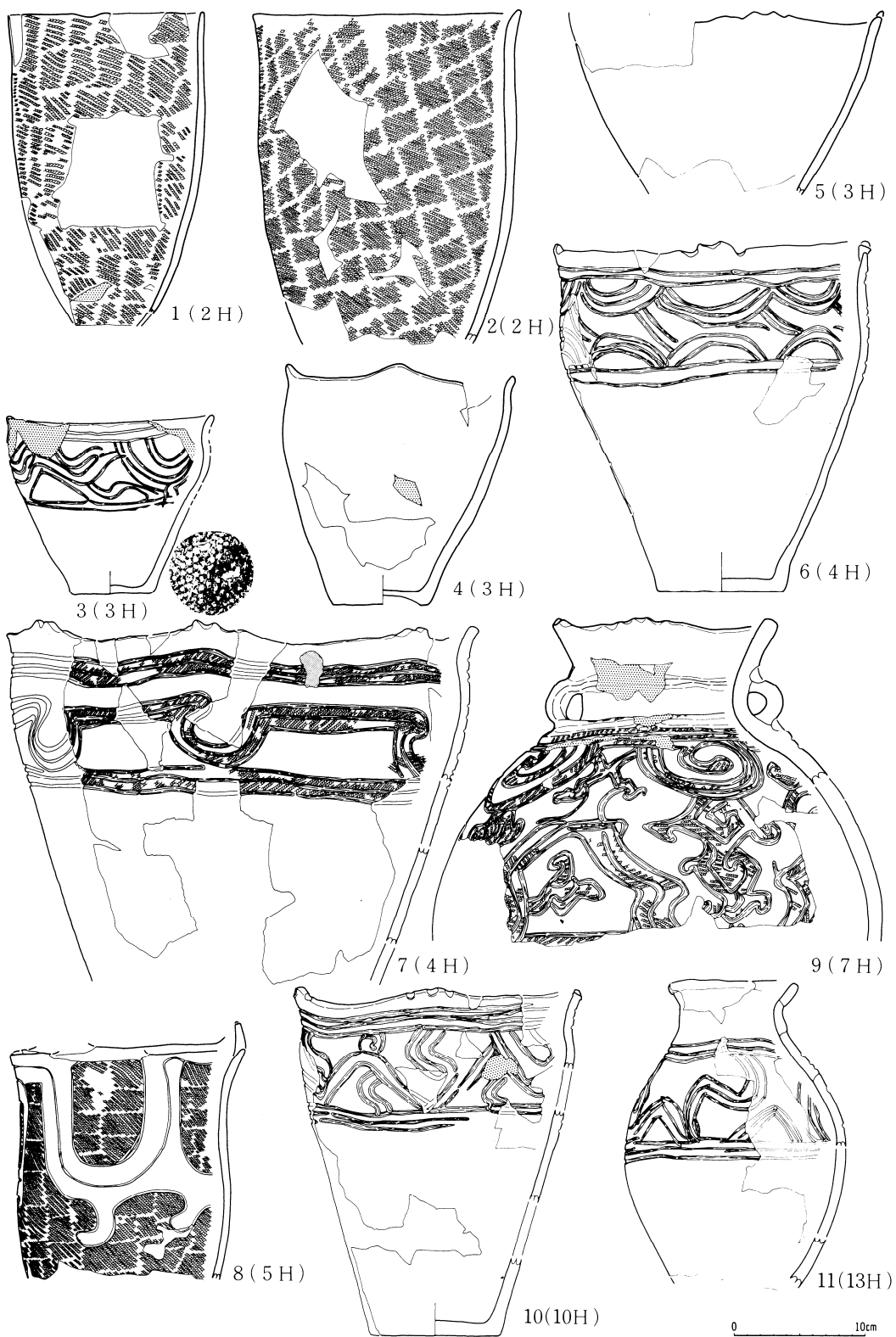
文様を個々について見てみると、以下のとおりになる。

(170図8)は、地文に単節斜縄文(LR)を施した後に、沈線文によるU字状文、コ状文、波頭状文が施され、更に充填縄文の技法が用いられる。

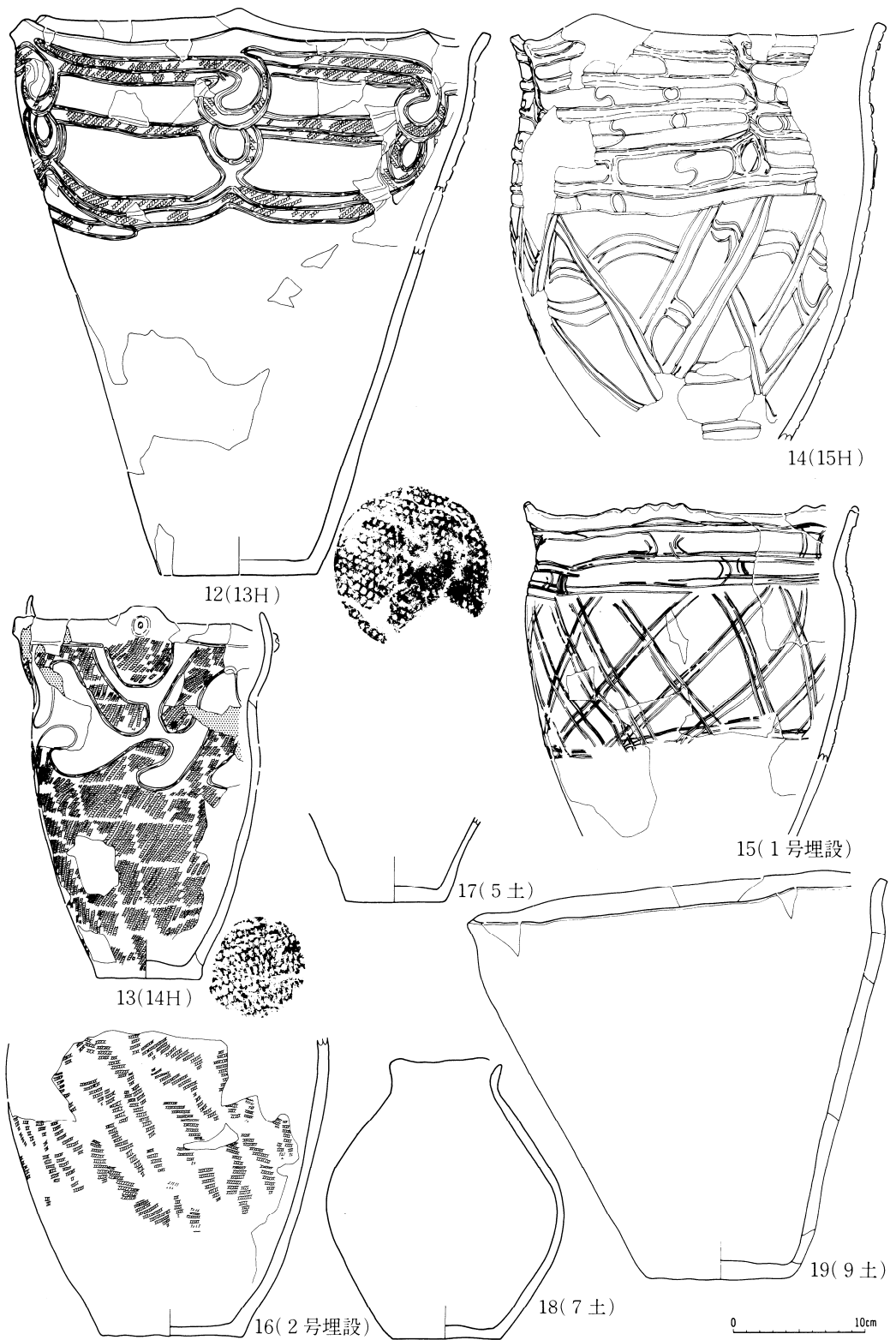
(170図13)は、地文に単節斜縄文(LR)を施した後に、状の沈線文、波頭状文が施され、更に磨消縄文の技法が用いられる。4個の波状縁部分には、粘土の貼り付けによるボタン状突起が、1個ずつ配される。

(173図12)は、地文に単節斜縄文(LR)を施した後に、波頭状文が施され、更に充填縄文の技法が用いられる。

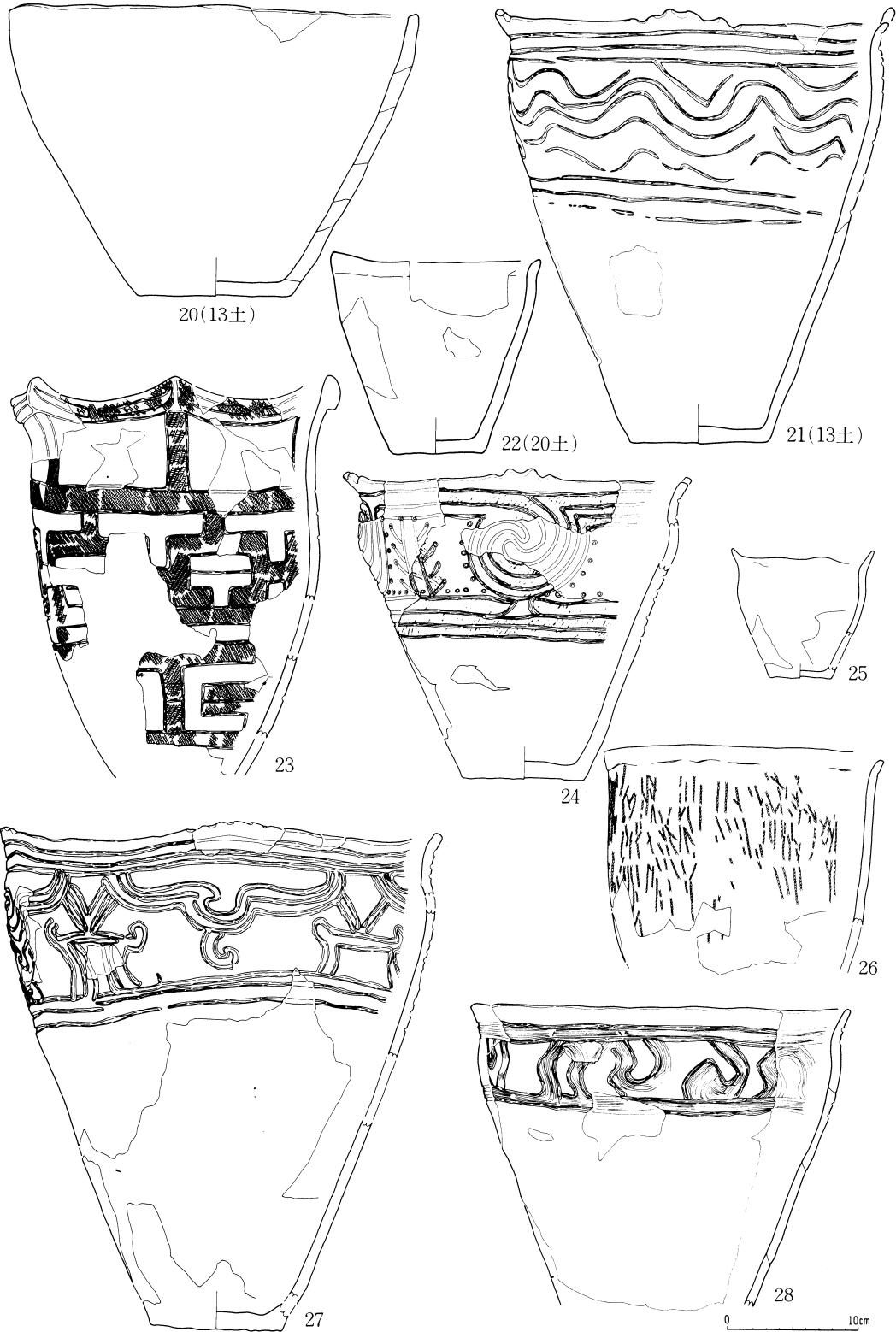
(170図1・2、173図6)は、全面に単節斜縄文、(173図13)は、全面に無節斜縄文が施される。内面は、いずれも良く調整され平滑になっている。光沢をもつものもみられる。胎土に



第170图 VII区出土土器实测图(1) ——住居跡出土(1~11)



第171図 VII区出土土器実測図(2) —— 住居跡出土(12~14)・土器埋設遺構(15、16)
 土壇出土(17~19)



第172図 VII区出土土器実測図(3) —— 土壙出土(20~22)・グリッドー括(23~28)

は、砂粒を含み、焼成は良い。色調は、赤褐色、暗褐色、黒褐色を呈する。 (一条)

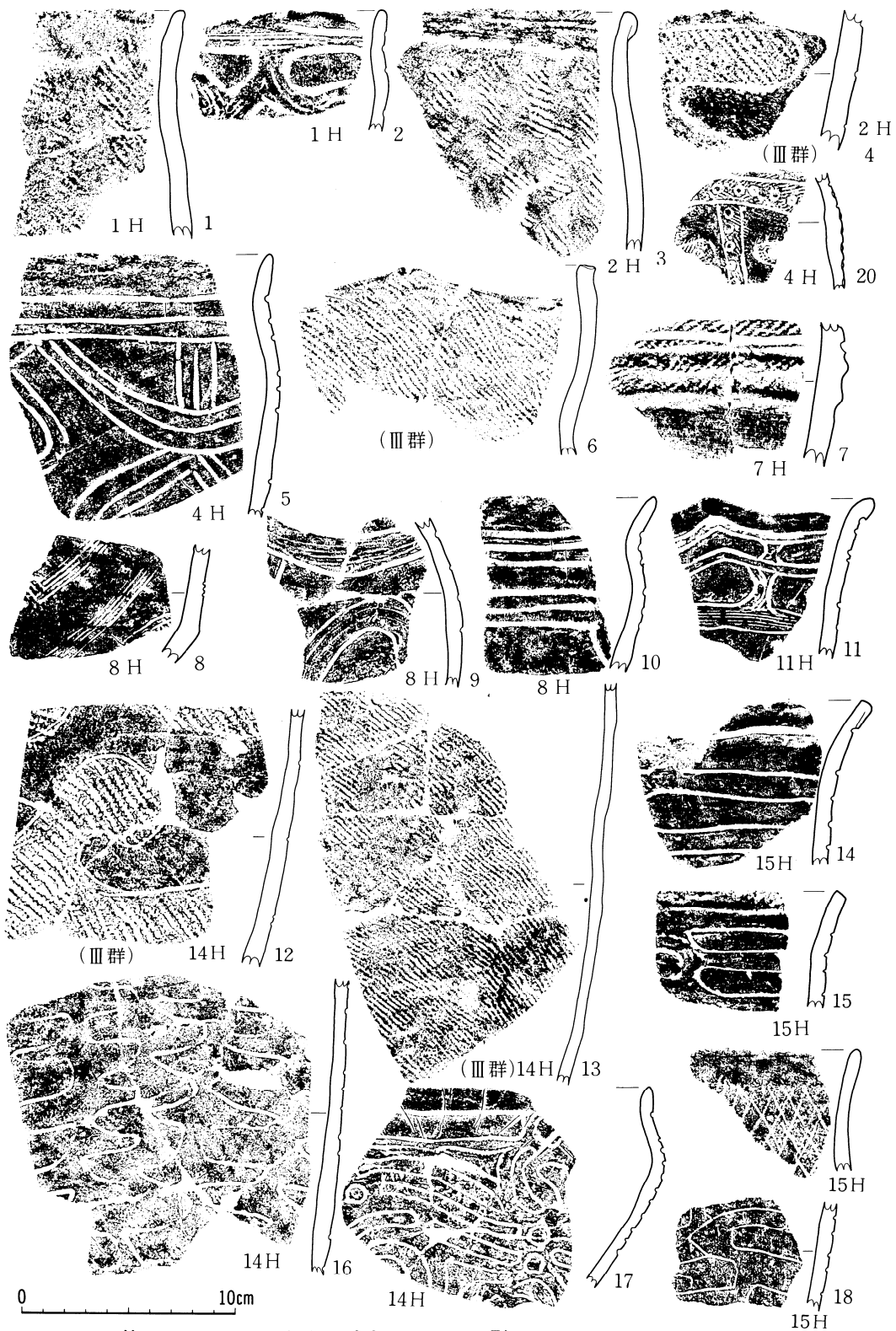
(イ) 第IV群土器

本地区から出土した第IV群土器の総量は、ダンボール箱で約8箱分であった。そのうち、遺構外から出土したものは約5箱分に相当する。5箱分の土器のほとんどが、本区南斜面から出土している。ただし、遺構外出土土器については、前述しているとおり、本区が過去に重機による盛土作業が実施されていることから、遺構外出土土器とはいえ、一般的にグリッド一括等で取り上げる遺構外出土土器という取り扱いと同一視はできず、現に5箱分の土器についても破片がほとんど接合できない状況であり、挿図に拓影図を掲示するにとどめた。

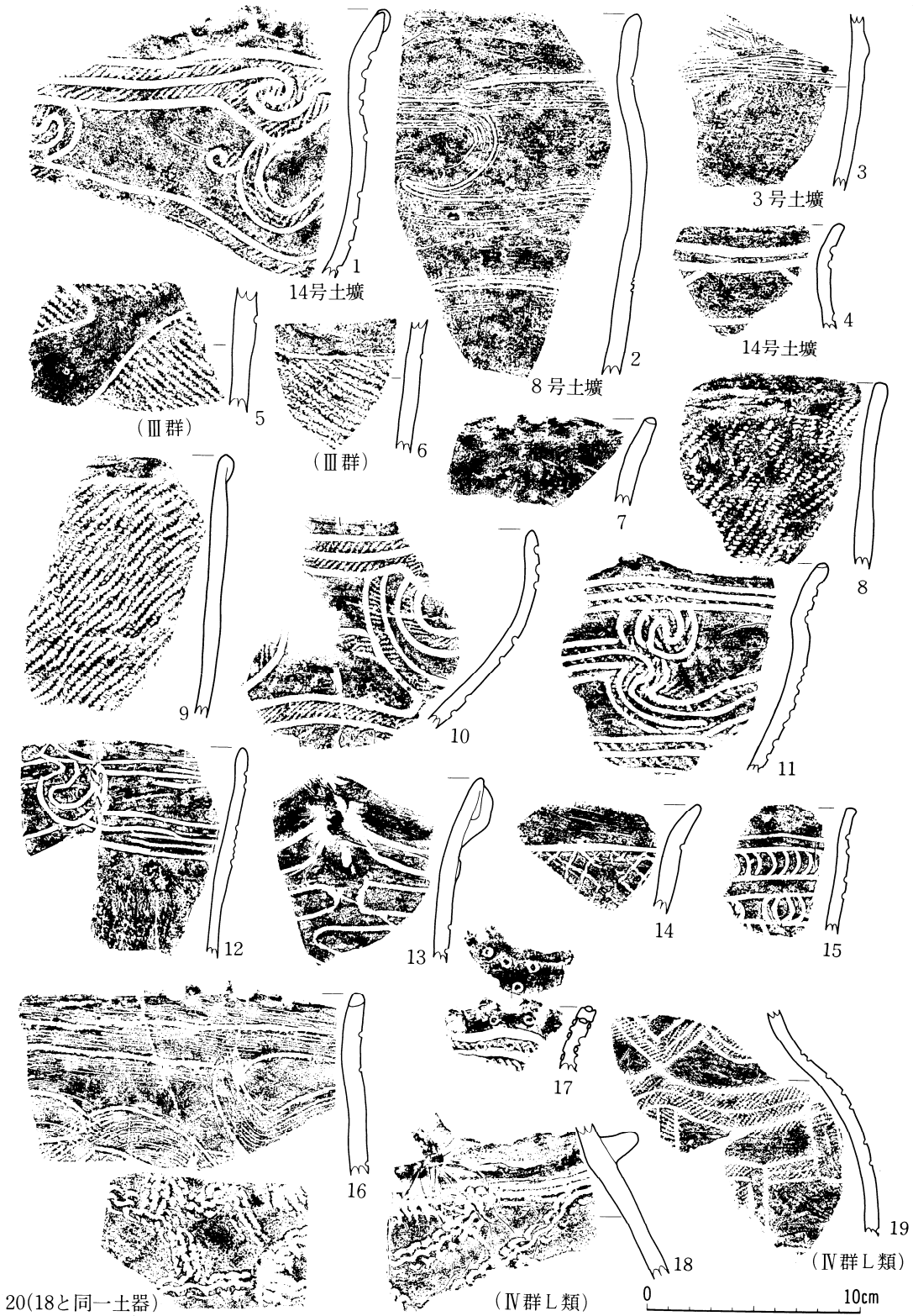
資料的価値は、このような状況下の土器であるため、大分低下しているが、それでも他の時期の出土土器に比較すれば一番量的に多く、本区出土土器の中で第IV群土器が9割強を占めている。 (遠藤)

第12表 VII区 出土土器(復原実測土器) 観察一覧表

土器 番号	出 土 地 点	層	計 測 値(cm)			器 形	主 文 様	時 期		備 考
			口 径	底 径	器 高			大区分	分 類	
1	2H	床 面	(15.0)	(—)	(24.0)	鉢	地文縄文(LR)	III群		
2	"	床 面	(20.6)	(—)	(25.0)	鉢	地文縄文(LR)	III群		
3	3H	床 面	(16.0)	6.3	13.6	鉢	沈線文	IV群	G-1	
4	"	フク土	17.5	7.3	18.6	深鉢	無文	IV群	A-1	
5	"	フク土3層	(24.0)	(—)	(14.0)	鉢	無文	IV群	A-1	
6	4H	フク土3層	24.7	9.6	26.9	深鉢	沈線文	IV群	G-1	
7	"	フク土3層	(—)	(—)	(28.0)	深鉢	充填縄文	IV群	F-2	
8	5H	床 面	18.1	(—)	(20.0)	深鉢	地文縄文、沈線文	III群		大木10式併行期
9	7H	フク土	17.3	(—)	(25.0)	壺	充填縄文	IV群	F-2	橋状把手
10	10H	フク土	22.0	9.7	26.9	深鉢	沈線文	IV群	G-1	
11	13H	フク土	9.9	(—)	(23.8)	壺	沈線文	IV群	G-1	
12	"	フク土	36.5	12.0	43.5	深鉢	磨消縄文	IV群	F-2	
13	14H	床 面	18.8	8.0	29.5	深鉢	地文縄文、沈線文	III群		大木10式併行期
14	15H	床 面	(28.6)	(—)	(32.7)	深鉢	粘土紐貼り付、沈線文	IV群	G-2	
15	埋設1		25.5	(—)	(20.0)	深鉢	平行沈線文	IV群	G-1	
16	埋設2		(—)	11.0	(23.5)	深鉢	地文縄文(LR)	IV群	(B)	
17	5土	底 面	(12.8)	7.8	(7.0)	(深鉢)		IV群	(G)	底辺部
18	7土	底 面	8.7	8.3	21.6	壺	無文	IV群	A-1	
19	9土	底 面	32.0	11.5	31.4	鉢	無文	IV群	A-1	
20	13土	底 面	31.1	11.6	22.2	鉢	無文	IV群	A-1	
21	"	フク土	30.5	10.7	33.3	深鉢	沈線文	IV群	G-1	
22	20土	フク土	16.0	7.1	15.5	鉢	折り返し口縁、無文	IV群	A-1	
23	グリッド一括		23.6	(—)	(30.7)	深鉢	充填縄文	IV群	K	
24	"		26.6	9.5	23.9	深鉢	刺突文、地文縄文	IV群	F(?)	
25	"		10.8	4.5	9.9	小形鉢	無文	IV群	A-1	
26	"		21.4	(—)	(17.5)	深鉢	絡糸体回転文	IV群	D	
27	"		33.7	10.0	39.0	深鉢	沈線文	IV群	G-1	
28	"		(24.6)	(—)	(22.0)	深鉢	櫛歯状沈線文	IV群	H-1	



第173図 VII区竖穴住居跡内出土土器拓影図 (群名のないものはIV群土器)



第174図 VI区土壙内出土(1~4)・遺構外出土(5~20)土器拓影図

(2) 石器

第Ⅰ群石器（第175図1～10）

竪穴住居跡（第2・4・11・14号）から、F—Ⅱ類2点、F—Ⅲ類2点、F—Ⅳ類1点出土しているほか、両極石核が1点（4号）出土している。

遺構外からは、A—Ⅲ類の石鏟1点、F—Ⅰ類1点、F—Ⅱ類2点、F—Ⅲ類3点、F—Ⅳ類1点が出土したほか、両極石核が1点出土している。すべて、南斜面上からの出土である。

2は、石匙の破片とも思えるものである。

9は、尖頭状を呈する部分に、彫刀面が作出されている。

石質は、珪質頁岩6点、玉ずい質の珪質頁岩5点、チャート1点である。（白山）

第Ⅱ群石器

I類 7号住居跡から1点（整理番号77）・遺構外から3点出土した（同78・80・409）。409は基部欠損後、折断面を敲き石に転用している。

第Ⅲ群石器

K類 II B c類が2点出土した。遺構外出土である。

L類 2H—2点・5H—2点・7H—1点・8H—1点・9H—1点・10H—1点・14H—4点・15H—1点・6土—1点・17土—1点・遺構外4点の出土である。

10H（十腰内I式期の住居跡）出土の316は、IV—1区出土の1に類以するが、1端部に敲打による剥離が認められる。

6号土壙出土の325は、片面にスリの痕跡有するもので中央部が内湾している。

IV—1区のL—Ⅰ類に比して分厚い素材を使用しているものが多い。

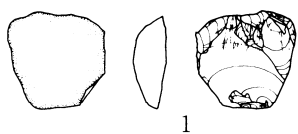
M類 1—H3点・2H—4点・3H—1点・5H—1点・7H—1点・13H—1点・14H—1点・6土—1点・遺構外3点の出土である。全体に大型の礫が多く、床面等出土のものは大型の自然礫の一部を使用している。（白鳥）

(3) その他の遺物（第175図11、12）

靴形土製品が2点出土した。(11)は、8号土壙覆土から出土した。大きさは、高さ3.3cm、口径1.8cm、底面長径4.4cm、短径4.2cmで、文様は平行沈線文が施される。色調は暗赤褐色を呈する。(12)は、底面及び側面を欠損している。大きさは、高さ2.3cm口径1.3cm（推定）で、底面長径、短径は計測不能である。文様は、平行沈線文、入組状沈線文が施される。色調は、黒褐色を呈する。2点ともにつま先部分に貫通孔がみられる。また(11)の内面には、黒い物質が付着しており、中に何かを入れていたと思われる。

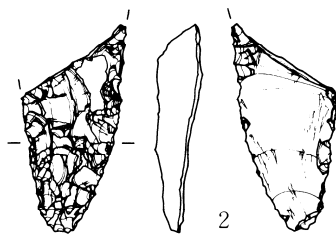
（一条）

4 A号住居跡

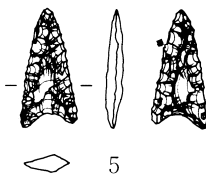


1

3層(両極石核)



2

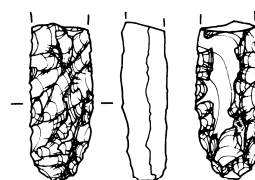


5



3

3層



6

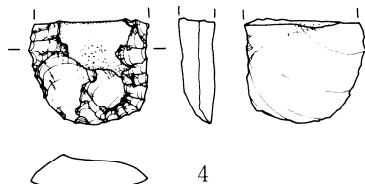


3層

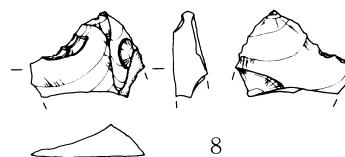


7

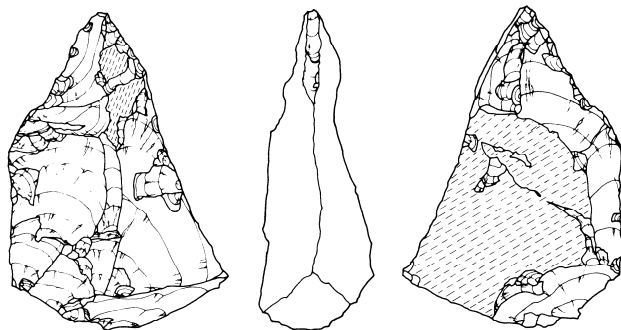
11号住居跡(4)



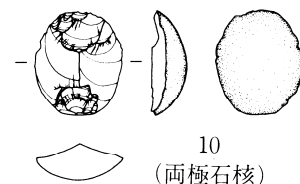
4



8



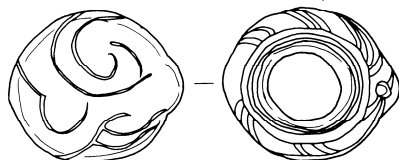
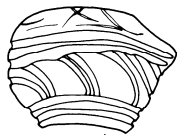
9



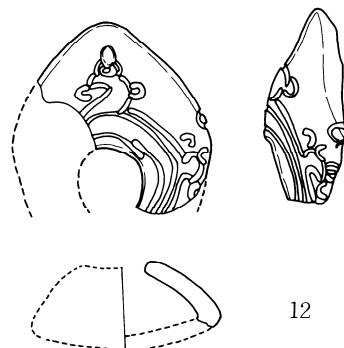
10

(両極石核)

8号土壙(11)



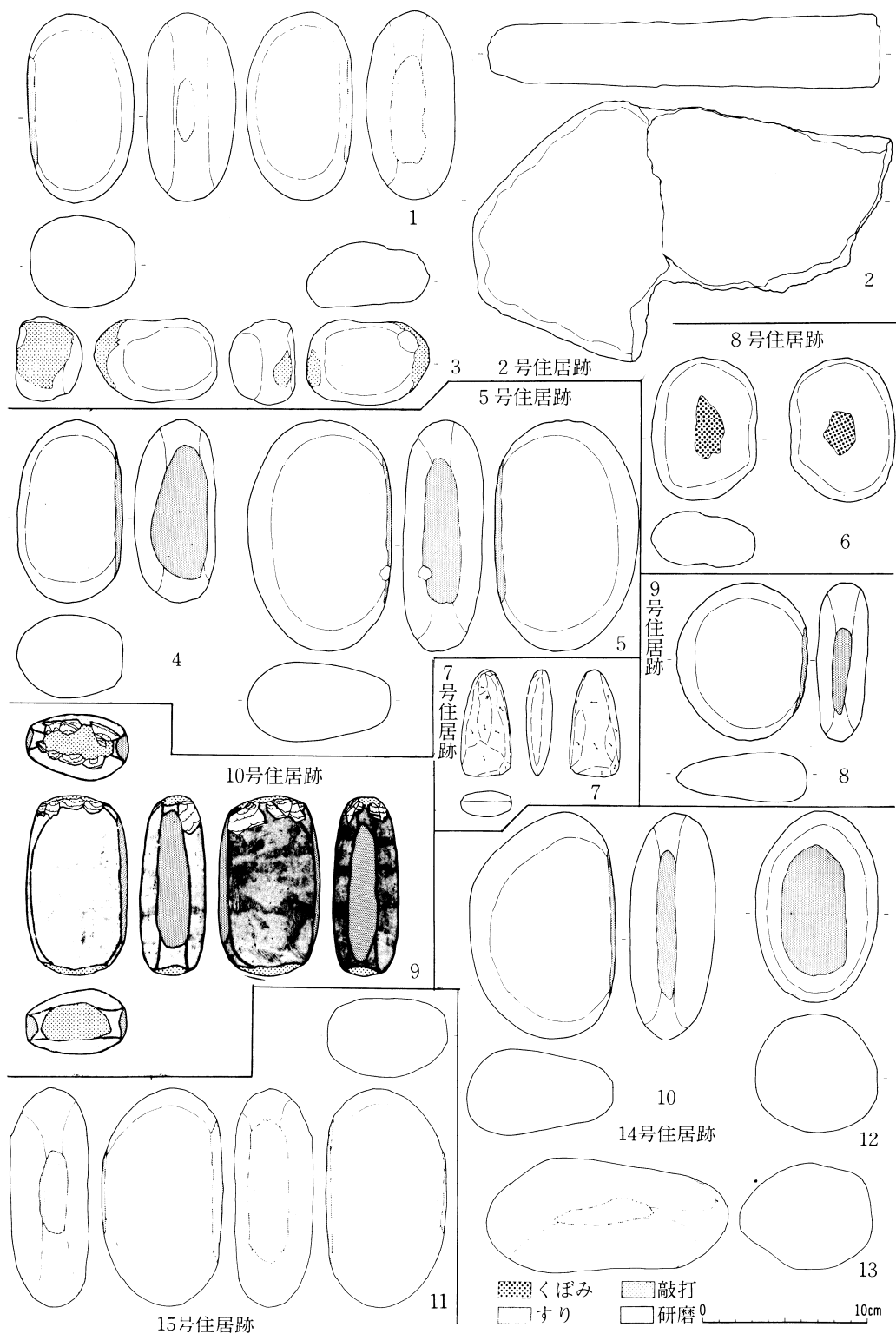
11



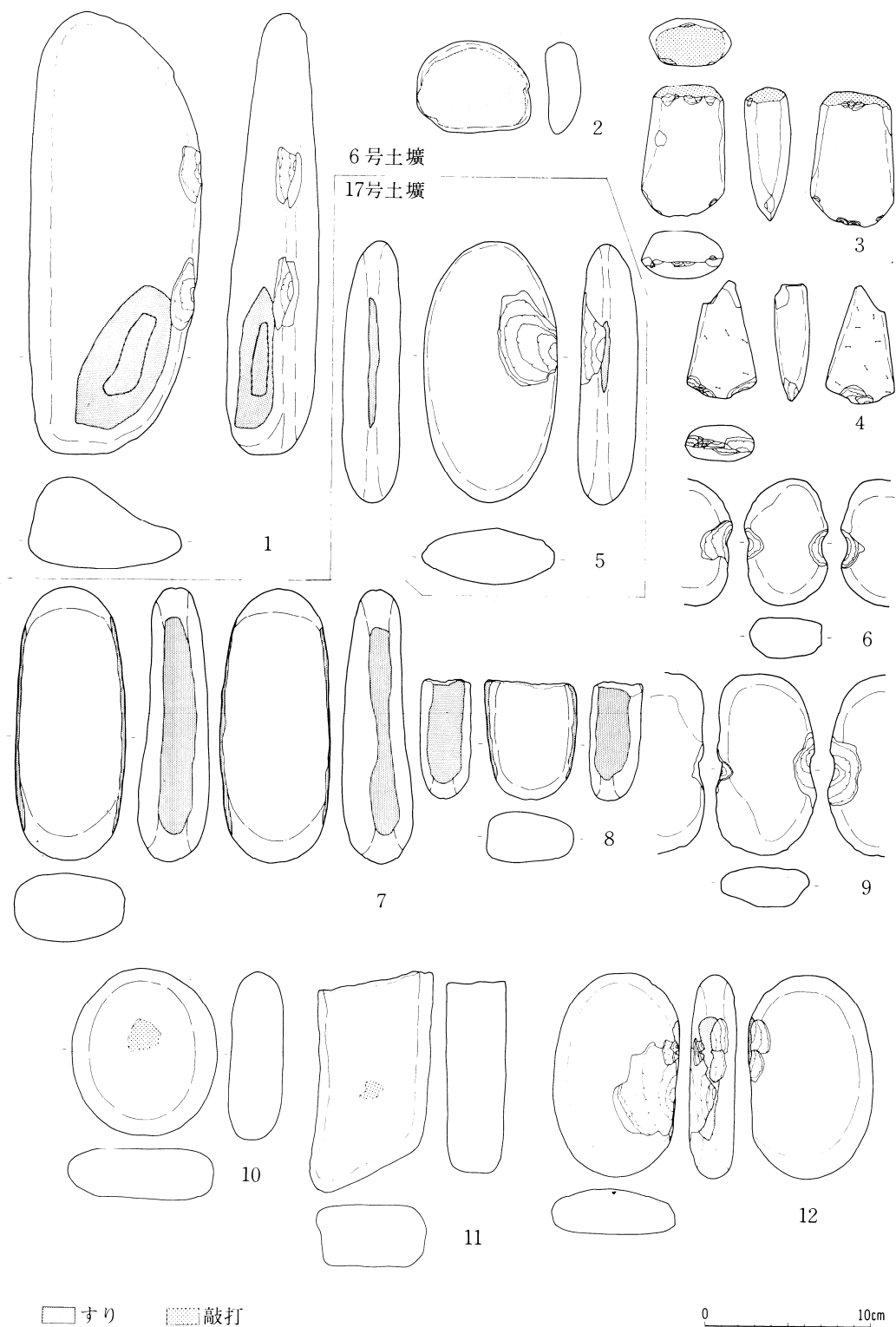
12

0 5cm

第175図 VII区出土の石器と土製品



第176図 第Ⅶ区出土石器 (1)



第177図 第Ⅶ区出土石器(2)

小 結

これまで本地区の検出遺構の概要を述べてきたが、次に各遺構の台地上の占地の有り方や、各時期の集落構成について簡単に分析を加えたいと思う。

〔大木10式併行期〕

大木10式併行期の土器は極めて少ない。その中でも第5号住居跡、第14号住居跡、第2号住居跡の床面及び床面直上の土器が主体で、遺構外からのものは数片程度である。上記3軒のうち、第5号住居跡及び第14号住居跡床面出土の図170—8・171—13は、ボタン状粘土粒貼付や、充填縄文による「U」状、弧状、方形区画文等の文様帯が横位に展開する文様を特徴とする土器群である。これらの特徴は大木10式併行期の中でも終末期に位置づけることが可能であろう。また、第2号住居跡出土の図170—1、2は地文縄文だけであるが、細片資料は大木10式期であるので、本住居跡も前二者に伴出する可能性が極めて高い。なお、該期に直接後続する型式期の遺物は出土していない。

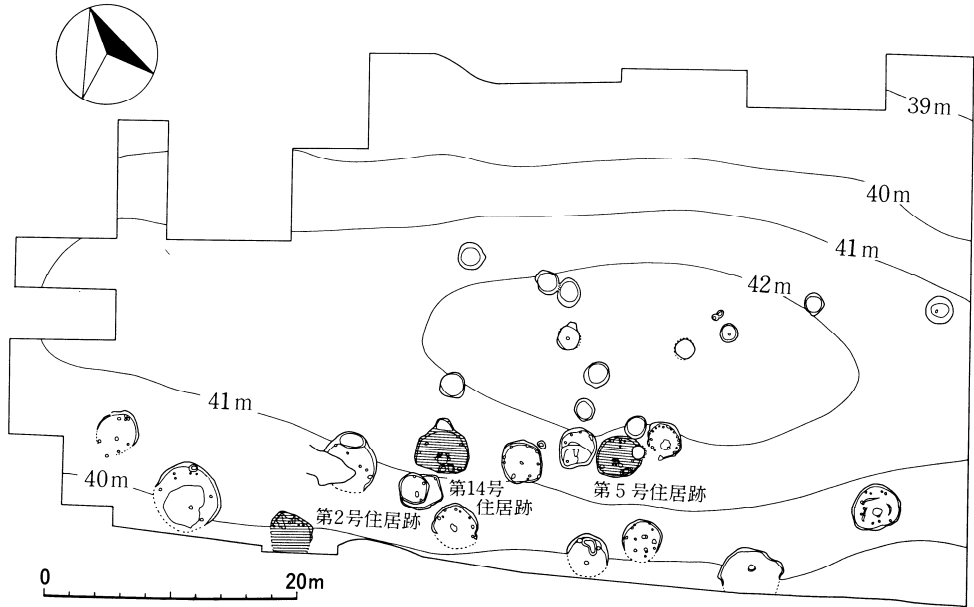
この3軒の台地上の占地の有り方を図178でみると、いずれも馬背状台地の南斜面に構築され、しかも、各住居間は8.5m程の等距離である。全体に弧状配置となる。また、第2号住居跡の南側は直接低湿地に連なることから、これ以外の住居跡の存在は考えられない。したがって、大木10式併行終末期に3軒の竪穴住居で構成される小さな集落が本台地の南斜面に形成されていたが、その集落は短期間営まれていただけで廃絶したものと考えられる。

〔十腰内I式期〕

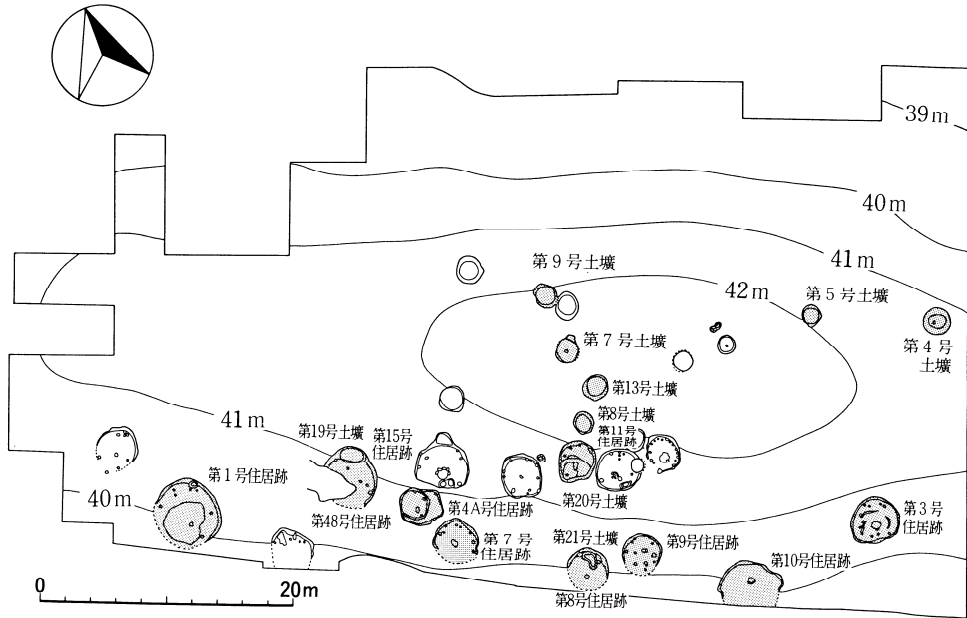
出土土器からみて十腰内I式期と推定される遺構は、竪穴住居跡13軒、土器埋設遺構2基、土壇13基である。地形上での占地をみると、各住居跡は馬背状台地の南斜面に、また、土壇は台地の頂部にそれぞれ配置されている。台地頂部に配された土壇は、大型の円筒形土壇がほとんどである。

南斜面に構築された該期の住居ノ群は、出土土器で少なくとも二大別が可能である。これは、第15号住居跡出土の土器（図171—14）群のグループ（A期）、第3号住居跡、第10号住居跡出土の土器（図170—3、4、10）を中心とするグループ（B期）である。前者は十腰内I式の前葉期を担う土器であり、後者は十腰内I式の全盛期（中葉期）のものとして位置づけることが可能である。したがって、第15号住居跡を中心とする集落と、第3号住居跡を中心とする集落の2時期が考えられる。しかし、住居の営まれた時期を推定する主要な要素である床面出土等の遺物が極めて少ないことから、該期の多くの住居の時期決定に明確さを欠く。本稿では、少なくともA期、B期の2時期の存在を指摘する程度にとどめ、詳細な分析とその結果については本遺跡に係る調査が終了した後の報告に譲る。

（三浦）



(1) 縄文時代中期(大木10式併行期)遺構分布 (大木10式併行終末期の1時期で構成される。)



(2) 縄文時代後期(十腰内I式期)遺構分布 (十腰内I式期の2~3時期で構成される。(1)及び(2)のスクリーン・トーンで図示した以外は時期不詳)

第178図 VI区時期別遺構分布図

第V章 調査の成果

本報告書は、例言にも記述したとおり、今回の調査のメインであったIV—1区が第1次調査及び昭和60年度に発掘調査を実施した区域と各々隣接し合っているということから、一つの遺跡の調査における中間発表的意味を含んでいる内容であるといえる。

このような点をふまえ、本報告書に記述した内容は、あくまでも資料公表が第一であるという共通理解のもとに、事実記載に重きをおいたものである。

したがって遺跡（第1次調査…昭和58年度・第2次調査…昭和59年度・第3次最終調査…昭和60年度）・遺構・遺物という巨視的な見地からのとらえ方はしなかった。それは、昭和61年度に刊行予定の調査報告書が、遺跡の中心部と思われるIV—1区を含めた「大石平遺跡」の最終調査報告書になるからであり、その中で「大石平遺跡」の遺構・遺物を総合的に考察しようと考えたからである。

そこで、本稿では、昭和59年度の発掘調査における成果と問題提起という観点から、いくつかの項目を取り上げ、それについて記述することにした。 (遠藤)

〈堅穴住居跡について〉

第2次調査で検出したIV—1区の13軒の住居跡について、構築年代、平面形、規模、炉等を簡単にまとめ、考察にかえることとする。

13軒の住居跡のうち、床面・ピットからの出土土器及び炉に転用した土器から、構築年代を決定できるものは、第1号・第5号・第8号～第10号住居跡の5軒である。このうち、第1号及び第10号住居跡は弥生時代に属し、他の3軒は、縄文時代に属する。また、以上の5軒を除いた8軒の住居跡について、床面直上及び覆土中の土器や出土状況から推定すると、縄文時代に属すると思われる。以下、時代別に記述する。

縄文時代の堅穴住居跡は、11軒である。いずれも、後期前半に属するものと思われる。これを第1次調査に当てはめて考えると、第Ⅱ期（後期初頭～前半）に相当すると思われるのは第11号住居跡、第Ⅲ期（十腰内Ⅰ式）に相当するものと思われるのは、第5号・第8号・第9号住居跡である。残りの6軒については、良好な土器が出土しておらず、不明であるが、多くはⅢ期に属する可能性がある。

平面形は、形状のわかるものでは、円形・楕円形・不整形なものが、各2軒ずつある。

規模についてみると、最大は長径4.7mの第13号住居跡、最小は長径2.9mの第5号住居跡である。長径4.5m・短径4m以内のBグループ（第1次調査での分類）に属するものが4軒で最も多く、長径4.5mで短径4m以内のAグループに属するもの2軒、長径5.5mで短径5m以内のCグループは1軒である。

炉についてみると、地床炉4軒、石組炉5軒、単独礫炉1軒となっている。

弥生時代の竪穴住居跡は、第1号住居跡と第10号住居跡の2軒である。編年的には出土土器から、須藤隆氏編年の2期（第1次調査での弥生第2群土器）にほぼ相当する。いずれも、完全な形で検出されなかったが、前述の縄文時代後期前半のものより大きく、第1号は長径8.0m、第10号は推定ではあるが6.5mである。いずれも、平面形は楕円形を呈するものと思われる。

炉は、第1号跡が土器埋設炉で、第10号跡が土器埋設石囲炉である。但し、第10号跡の場合、当初は地床炉（この可能性の方が強い）か土器埋設炉として使用し、建て替えによって土器埋設石囲炉に変えた可能性が考えられる。

柱穴は、4本柱を基本とし、壁際に支柱を巡らしたものと考えられる。第10号跡では主柱穴と考えられるピットが二重（うち1個は未検出）に検出され、柱の建て替えが行われたものと考えられ、その時に、炉も改造されたのであろう。なお、住居跡の改造が、原位置のままで、柱のみを移動させたものか、増築されたものかは把握できなかった。

〈IV-1区における土壌の時期について〉

(1) 土壌の確認状況からみた場合

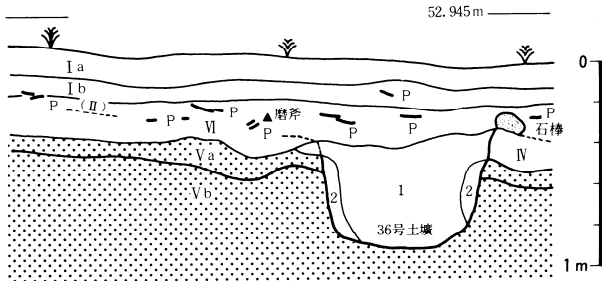
IV-1区における土層は、遺跡全体の基本層序に準じてみると、基本的には、上位からI層（表土）II層、III層、IV層、V層（ローム層、地山）の順となっているが、III層は部分的にしち認められず、間層的な扱いをされている層となっている。このIII層欠如という状況が、両者共に暗褐色を呈するII層とIV層の識別をほとんど不可能にしてしまう事態へ直面させることになった。

このことは、遺構精査時における土層からみた遺構構築面の観察に大きな障害となったことはいままでもないことである。それに加えて、遺構確認作業の段階では、土層観察用のベルトセクションも除去していくわけで、構築面の確認が困難であることはなおさらである。

結果的には、160基の土壌のうち、ほとんどの土壌は、このような状況下で構築面を確認することができなかったが、幸いにも160基中第36・39号の二つの土壌の構築面が残しておいたベルトセクションの壁面に明瞭に現われた。

この2例についてみると、第179図のごとく土壌の構築面は、第II層が人為的に動かされていないとすれば（動いていないと調査時に判断した）確実に第IV層中にあることがわかる。

全体の1割にも満たない2例で、160基全体を予測することは非常に困難であるが、あえて予測すれば、160基の大半は、時代差があるにせよ第IV層中であろうと考えている。第IV層は、比較的層厚が厚く、弥生式土器及び後期を中心とした縄文式土器が混在している層である。



第179図 土壌構築面

(2) 土壌内出土土器からみた場合

土壌の時期を決定し得る最大の要素として、土壌から出土した土器を挙ることができる。ただし、その出土土器もある程度、土壌底面から出土していなければ時期決定をするには至らず、覆土中の出土土器では余り信憑性がないといえる。

以上の点をふまえ、160基の土壌を調べると次のようになる。

遺物が出土しない土壌		33基
遺物が出土した土壌	{ 土器は出土せず石器のみ 土壌の時期を把握できるに至らない 出土状況及び少量の土器出土 ある程度土壌の時期を把握できるよ うな土器出土	3基
		約80基
		約45基

土壌内出土土器からみた土壌の時期については、全体の約3分の1に相当する約45基の土壌について把握することができた。(第IV章の土壌観察一覧表に記載)。

それらをまとめると、45基のうち、大半が縄文時代後期のもので42基あり、残り3基は弥生時代である。縄文時代早・前・中・晩期の土壌は認められなかった。これらのことから、160基の土壌の帰属時期を予測すると、縄文時代後期と弥生時代であり、その中でも縄文時代後期(十腰内I群期)が主体であろうと考えられる。(遠藤)

〈「内外面連続山形文」土器について〉

本土器は、第15・79・88図に掲示した土器である。この土器を本項で取り上げ記述することにしたのは、小さな連続した鋸歯状の山形文それ自体と、内面全面にも文様を施文していること等、極めて類例の少ない特異な土器だからである。この種の土器は、第15図—1の復原できた1個体のほか、第88図に示した破片約40片である。

連続した山形文を有する縄文時代後期の土器は余り出土例がなく、第1次調査で器外面のみこの文様の施文された土器が復原可能な状態で1個のみ出土している。内面に部分的に文様が施文されている土器はそれほど珍らしくはないが、このように全面に施文されている土器の出土例はほとんどみられない。なお、約40片の破片の内面については、部分的に連続した山形文が施文されているものが数片みられるだけである。従って、表題に付したような内外面全面

に文様が施文されている土器は、この土器1点だけである。以下、この土器について記述する。

本土器は、IV—1区第9号竪穴住居跡の床面からつぶれた状態で出土した。

器形は、口縁に1個（当初は対で2個あったと思われる。）の小突起を有する小波状口縁の小型の鉢形を呈する。計測値は、口径14.5cm、底径4.3cm、器高10.0cm、器厚0.3～0.5cmである。胎土は細砂粒を多く含んでいるが、焼成は堅くしまり良好である。

文様は、器外面には胴上半部にRLの単節で施文された地文縄文の上に沈線による渦巻文、連続する山形文、カニバサミ状文の組み合わせによる文様構成がされており、器内面は、無文の面に沈線で外面と同じ文様が施文されている。器内外面とも、沈線による文様の描き方は、粗雑で、施文当初に綿密な文様構成が組み立てられないままに施文したようにも感じ取られる。

本土器の帰属時期は、共伴する土器や個々の沈線文様、器形等から判断して、縄文時代後期前葉と考えられ、型式名的には「十腰内I群土器」の範疇の土器ととらえることができる。

本土器については、その特異性から、調査指導員を含めた関係者一同で討議の結果、『内外面連続山形文』という名称を付すことにした。

用途については、現在のところ不明としかいえない。それは、土器の沈線文様の箇所や器面全体を観察すると、摩滅している箇所がほとんどなく、日常雑器として頻繁に使用された器ではないと思われるからである。推測するとすれば、祭事的な場合にのみ使用するために作られた器ではないかと考えられる。

本土器についての考察は、今後この種の資料の増加に期待し、研究課題としたい。（遠藤）

<両極石核・剥片と、それらを素材とする石器について>

IV—1区からは、661点の剥片石器と約3,600点の剥片が出土した。その中には、両極技法によって生産された石核や剥片のほかに、それらを素材としている石器が数多く見られたのもこのことについて、まとめてみたい。

両極技法によって生産された石核・剥片は、確認できたものだけでも、剥片全体の約1割を占めている。石質は、玉ずい質の珪質頁岩が約7割、珪質頁岩が約3割で、他に玉ずいが若干ある。しかし、剥片全体の石質は、6割強が玉ずい質の珪質頁岩であるため、両極技法によるものと認定できなかった剥片の中にも、両極石核・剥片が多数含まれているものと思われる。

両極石核・剥片を素材としている石器には、ピエス・エスキューユ、石鏃、石錐、不定形スクレイパー（F—II類）、R—フレイク（F—III類）がある。

ピエス・エスキューユは、第IV章第1節において記述したように、本書における分類基準から、両極石核との区別の問題があり、両極石核を多分に含んでいるものと思われる。

石鏃は、細部調整が両面に施され主要剥離面が広く残されているものが少ないために、確認できたものは3点しかない。いずれも、玉ずい質の珪質頁岩を素材としているもので、Ic類

に含まれるものである。

石錐は、Ⅲ類・Ⅳ類に数点見られ、Ⅱ類にも、両極石核を素材としている可能性が考えられるものがある。両極技法によって生産された角柱状の剥片の一部に細部調整を施したものは、その特徴を最も明瞭に現している。

不定形スクレーパー（F—Ⅱ類）では、両極石核・剥片の側線や末端に細部調整を施したものがあ。片面縁部加工のものがほとんどで、裏面は平坦な剥離面が1面見られるものが多い。また、Ⅱ—f類の第22図5・第58図14は截断面に細部調整を施したものと思われる。

以上のほかに、両極石核・剥片の一部に細部調整を施しただけの、いわゆるR—フレイクが25点ある。また、確認できなかったが、その可能性の考えられるものが、これらのほかにも多数ある。したがって、岡村氏（1983）の言うように、両極技法は扁平な小円礫を打割するには有効な手段であり、それによって生産された両極石核・剥片を素材として、前述したような小形の石器を製作したものであろう。

これらの石器や石核・剥片類の所属時期は、①縄文時代後期前半（十腰内Ⅰ式期）の遺構から出土している例や、②分布状況から、縄文時代後期前半の土器が多量に出土した地域（DC～DE—377～379グリッド）に濃密に分布すること、③弥生時代の第3号屋外炉の近辺（CR—383グリッド）にも濃密に分布していること、④前年度の報告で、弥生時代の第16号堅穴遺構の記述の中に、両極石核（？）が出土していることなどから、縄文時代後期前半と弥生時代の両方が考えられる。

注 岡村道雄 1983「ピエス・エスキューユ、楔形石器」『縄文文化の研究7』雄山閣

<L—Ⅳ類（複合痕跡を有する敲磨器）について>

第122図—6は、本類の中で最も特徴的な石器である。L—Ⅳ類の項でも述べたが、更に特徴を細かく記述し、この観察結果から考察を試みた。

平坦面 研磨と浅い凹みの痕跡を有する。全体が研磨によって構成された面で、凹みよりも新しい痕跡である。凹みはL—Ⅲ類（凹石）の痕跡より相当に浅いもので、磨消されかかっているものもある。これは、本来、浅い凹み又は強い器面の荒れが、研磨によって更に浅くなったものと考えられる。

側縁部（面） 擦り及び研磨による面である。部分的に敲打によるものと思われる痕跡も有する。擦りの後に研磨がなされたもので、ややざらつく部分と光沢のある部分がある。また一方が直線的で他方はやや短く、曲線的である。

端部（面） 敲打痕を有し、更に軽い研磨がなされている。敲打は、L—Ⅱ類（敲石）とは異なるもので、潰し整形様のものである。敲打痕は側線の研磨面まで及んでいる。

これらの諸特徴から、この石器を使用による痕跡の集合体として位置付けることに疑問がも

たれ、使用痕跡というよりは、磨製石斧等の器体整形に近いものと考えられる。

調理具・加工具としての石器とするよりは、より製品化されたものとしての性格が強い。

この石器は、L—IV類としたが、本来、最終的に研磨がなされていることからL—I類に包含されるべき器種と思われる。また、各種の痕跡はL—I—B類としたものと類似点が非常に多いため本石器の成立過程の再検討を試みた。この中には、第1次調査の報文中で坂本が、定型化された敲磨器としたものを含む。

L—I—B類をふまえた成立過程は、次のとおりである。(模式図参照)

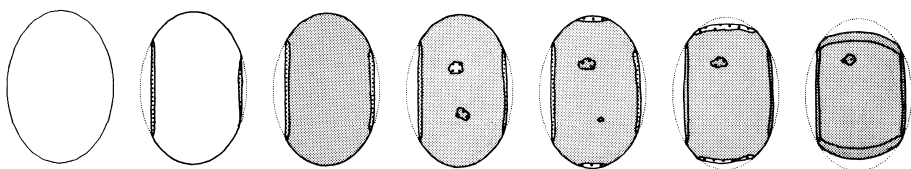
1. 小判形の礫を素材とする。小型の扁平なものから、本石器のようにやや大きめの分厚いものがある。
2. 素材の左側縁が、ある程度使用された(擦り減った)段階で右側縁を使用する。(同時使用でも左方に主機能面の性格がある。)
3. 平坦形上において、左側縁が直線的となる。右側縁は曲線的で、おおむね短い。平坦面に研磨が認められるものもあるが、器体中央がやや厚いものが多いようである。
4. 平坦面に敲打痕が認められる。器面の荒れ程度のもので浅い凹みのものが認められるが、研磨によって磨消されかけているものもある。研磨と敲打の順序は特定し得ない。
5. 右側縁がより直線的となるが、左方に比してやや短く、まだ曲線的である。側縁の擦り面は、素材が扁平なものはほぼ平坦面を呈しているが、肉厚のものは緩い弧状を呈する。

この段階で、端部に敲打痕もしくは擦り敵き痕が認められるが、機能面は小規模である。

6. 端部の敲打による範囲が広くなり、形状もより緩い弧状を呈する。平坦面・側線の研磨も同時進行する。
7. 本石器の端部敲打痕(潰し整形)は、平坦面・側線端に接している。
8. すべての面に研磨がなされる。(端部は軽い研磨)
9. この後の段階は不明であるが、全面にいい研磨が行われるものと思われる。

使用痕跡が、器体整形となるものか、またある段階から意図的に整形を行ったものかは不明であるが、最終的に磨消される凹みを有することなどから、最終段階として製品化され得たものと推察される。また、この形態が何らかの用途をもった用具として存在した可能性も考えられる。

模 式 図



ただ、すべてのL—I—B類とした石器が、この形態となり得るとは思われず、ごく一部のものに可能性がある程度であろう。第1次・2次の調査においても、この1点だけの出土であるという特殊性に意味があるものと思われる。

現段階では、石製品として把握するには無理があり、前述のとおり何らかの機能をもつ用具の可能性もあるため、単に観察結果から示唆するにとどめる。今後の調査で、この種の石器の報告を待ちたい。

(白鳥)

〈土製品の分布について〉

IV—1区の土製品の分布状況は第132図に示したが、やや特徴がみられる。湧水の南西側区域に主に分布しており、数量的にも多い。(円盤状土製品はIV—1区全般に分布するが、数量的には南西側区域に6割近く集中する)この区域では、円盤状土製品、鐸形土製品、三角柱状土製品、環状土製品が出土しており、石製品の石刀、石棒も出土している。

また、この区域では、その東側に多くの土壌が集中するにもかかわらず、かなり土壌が少なくなり、土壌からの出土遺物が全くないか、微量であるという特徴をもつ。このことや土製品の出土が多いことは、この区域が何らかの意味をもつ特徴な区域であった可能性を示唆しているのではないだろうか。第1次調査において、北林氏は、III区から、日常生活に使用しない土製品や道具がまとまって出土したことから、III区を、「ある時期においては、特殊な道具、土製品を使用した神聖な場所、換言すると祭祀、儀式、呪術、埋葬、祈願などの原始信仰、風習、行事などが取り行われた領域(場所)でもあったと考えられる。」としているが、IV—1区の土製品の多い区域も、それと類似の領域(場所)と考えることができるかもしれない。しかし、この区域は、土器及び石器の出土量も多く、やや捨て場の様相をもつことや、呪術的要素の強い土偶が1点も出土していないこと、(かなり離れたCS—386グリッドからは1点出土している)などから、現時点では特殊な領域と断定するには至らない。

昭和60年度も引き続き、IV—1区南側部分を発掘調査しており、その結果を加えることにより、より状況が明確になると考える。したがって本報告では、特殊な領域(神聖な場所)としての可能性をもつということに留めたい。

これまで後期初頭の土製品の分布について述べたが、前期初頭の土器を利用した土器片錘がまとまって出土していること(CN—385グリッド9点、CN—384グリッド1点)を付け加えておく。

(一条)

まとめ

昭和59年度においても、縄文時代後期を中心に早期から弥生時代にわたる遺物や遺構が多量に検出され、第1次調査の成果も合せて、様々な観点から検討・考察が加えられた。その間、型式・分類の見直しや年代・時期の修正等が行われ、“大石平原始文化”の編年も徐々に具現化されつつある。特に、この遺跡から、昨年度来弥生時代の集落が確認されていることは、今日でさえ厳しい自然条件をもつ当地区において環境に対する受動的な生活から、環境を積極的に開拓・活用していった定住型生活圏の存在も考えられる画期的な発見となった。

本調査の大きな特徴は、大規模な平面調査が実施され、各期の文化圏が重層的に確認できたことである。このことから、断片的な遺物や遺構の検出に留まらざるを得ない点・線の調査では、考究の難しい集落の構造等、資料の体系づけが可能になると思われる。

本報告に、今年度（60年度）の成果が更に加えられることにより、大石平遺跡の性格がより明確なものになることが期待できる。

（山田）

〈遺構・遺物の一覧〉

遺構

遺構名	地区名		V 区	VI 区	VII 区	計
	IV - 1 区	IV - 2 区				
竪穴住居跡	13軒	縄文(後期) 11 ・ 弥生 2	—	—	16軒 { 縄文(中期末) 3 縄文(後期) 13	29 軒
土 壙	160基	6 基	1 基	2 基	18基	187基
溝状ピット	—	1 基	11基	4 基	—	16基
配石遺構	—	12基	—	—	—	12基
土器埋設遺構	—	—	—	—	2 基	2 基
屋 外 炉	3 基	—	—	—	—	3 基
焼土状遺構	10基	—	—	—	—	10基

第13表 検出遺構一覧表

遺物

遺物名	地区名		V 区	VI 区	VII 区	計		
	IV - 1 区	IV - 2 区						
土器	総量	105箱	5 箱	1 箱	2 箱	8 箱	ダンボール箱で約121箱分	
	縄文時代	早期	○	○	×	○	×	・主体土器(◎)
		前期	○	○	×	○	×	
		中期	×	×	○(大木10式併行)	○(円筒上層)	◎(大木10式併行)	後期
	後期	◎(十腰内1群)	○	○	×	◎(十腰内1群)	弥生式土器	
	晩期	○	×	○	×	×	・復原土器	
	弥生時代	◎	×	○	×	×	約250個体分	
石器	総量	40箱	2 箱	微量	半箱	3 箱	ダンボール箱で約45箱分	
	剥片	661点	19点	×	8 点	12点	700点	
	礫	735点	50点	3 点	21点	41点	850点	
土・石製品	148点	×	×	4 点	2 点	154点		

第14表 出土遺物一覧表

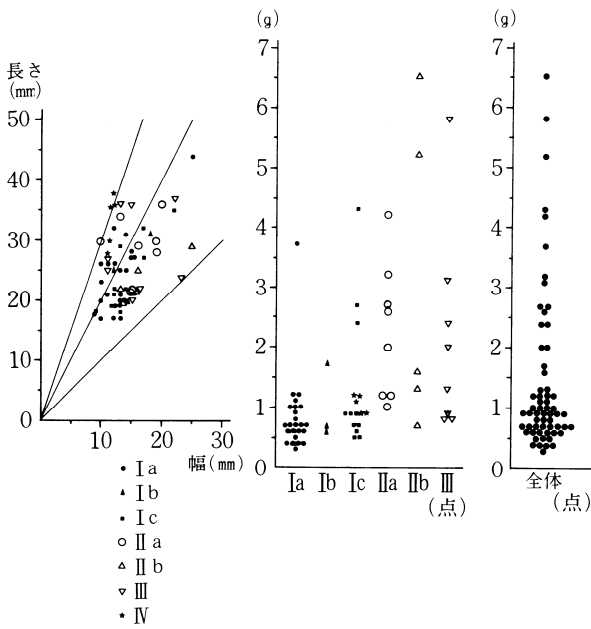
石器一覽表

()内は破損品

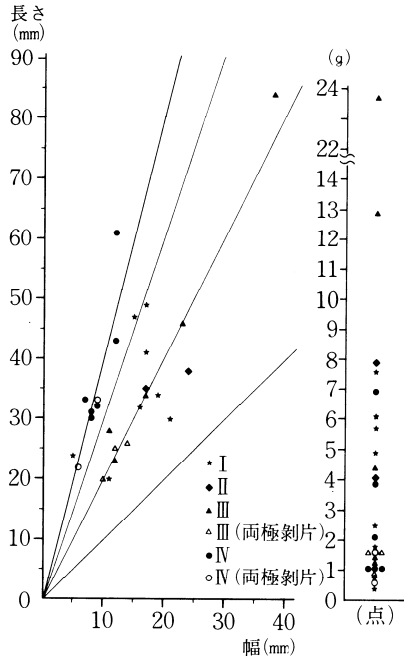
分類	IV-1			IV-2	VI		VI			小計
	遺構内		遺構外		遺構内	遺構外	遺構内		遺構外	
	住居跡	土 壙					住居跡	土 壙		
A	1(4)	10(10)	51(34)	(3)					1	114
B		(1)	5(5)	1						13
C		1	18(7)							26
D		3(1)	22(6)	1(1)						34
E-I		1	14(5)							20
E-II		1	18(3)							22
F-I		1	8					1	10	
F-II	3(1)	7(4)	97(26)	5		1	2		2	148
F-III	3(1)	5	82(5)	4		4	2		2	108
F-IV	2	3	49(3)	3		3	1		1	65
G			1							1
H	6	9	123	1						139
小計	21	57	583	19		8	5		7	700
I-I	(1)		1(2)	1(1)		1				7
I-II			1							1
I-III A			6(9)	1			1		(1)	18
I-III B	(1)		3(27)						1(1)	33
I-III C			3							3
I-III D	(1)	(1)	(39)	(1)						42
小計	3	1	91	4		1	1		3	104
J-I			3							3
J-II			1(1)							2
小計			5							5
環 斧			(1)							1
K-I			5							5
K-II A	(1)		11			5				17
K-II Ba		1	14	1						16
K-II Bb		1	21	1						23
K-II Bc	2	4	51	2					2	61
K-II B			(20)	(1)						21
K-III			5(2)							7
小計	3	6	129	5		5			2	150
L-I A		1(1)	19(22)	1(4)		5(6)				59
L-I Ba	(1)		3(3)	1			4			12

分類	IV-1			IV-2	VI		VI			小計
	遺構内		遺構外		遺構内	遺構外	遺構内		遺構外	
	住居跡	土 壙					住居跡	土 壙		
L-I Bb		1	8						1	10
L-I Bc		1(2)	8					3	1	15
L-I Bd	1		8	1						10
L-I Be			1	1						2
L-I B			(9)							9
L-I C	3	1	10(2)	1(1)						18
L-I D			25							30
L-I E	1(1)	1(1)	8				(1)	1		14
L-I F			3				1(1)	1(1)	1	8
L-II A	1	1	1							3
L-II B	2	1	8	1						12
L-II C	1	4	6(2)				(1)	1		16
L-II			(1)							1
L-III A	1	1	19(8)	1						30
L-III B			2	49(5)	1			1		58
L-III C		1(1)	14(1)	2						19
L-III			(22)	(1)						23
L-IV	1(1)	1(1)	17(8)	1				1	1(1)	33
L-V		1(1)	3(4)							9
L-IV			(1)	10					1	12
小計	19	24	298	28		15		13	2	403
M-I A		(7)								7
M-I B	(2)	1(1)	1(11)	(1)					(1)	18
M-I C	(1)	(3)								4
M-I	(1)		(1)							2
M-II A	(1)	1	1(9)					(1)	(1)	14
M-II B		(1)	1(11)	(3)				(3)		19
M-II C		(1)	(63)	(7)				(2)		73
M-II	(2)	(1)		(1)						4
M-III			(1)							1
M-IV	1(6)	2(1)	1(19)	(1)				(6)	(1)	39
小計	13	10	129	13				12	1	181
R			(3)							3

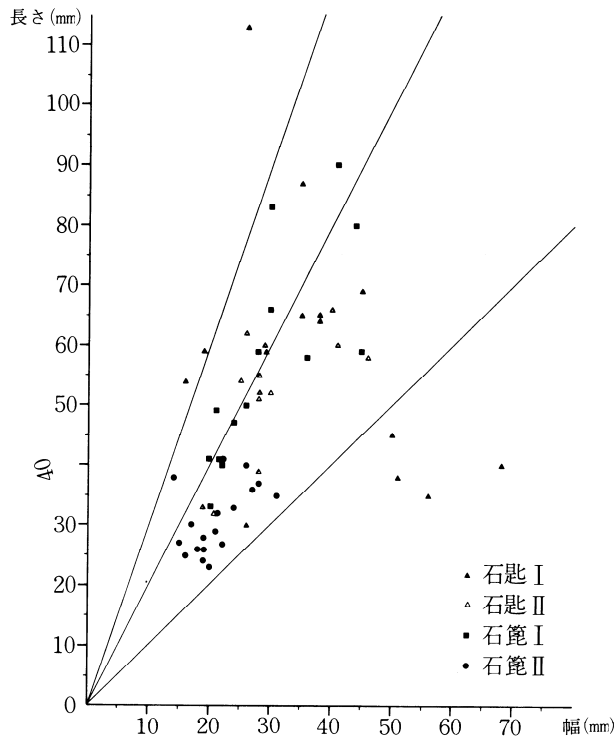
1. 石鏃の長幅相関図・重量分布図



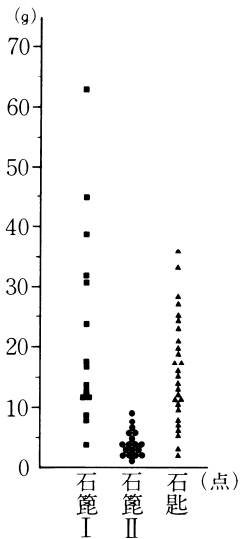
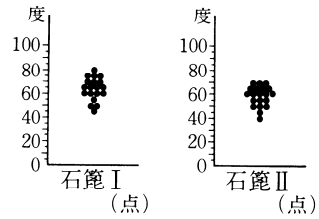
2. 石錐の長幅相関図・重量分布図



3. 石匙・石籠の長幅相関図・重量分布図・刃部角

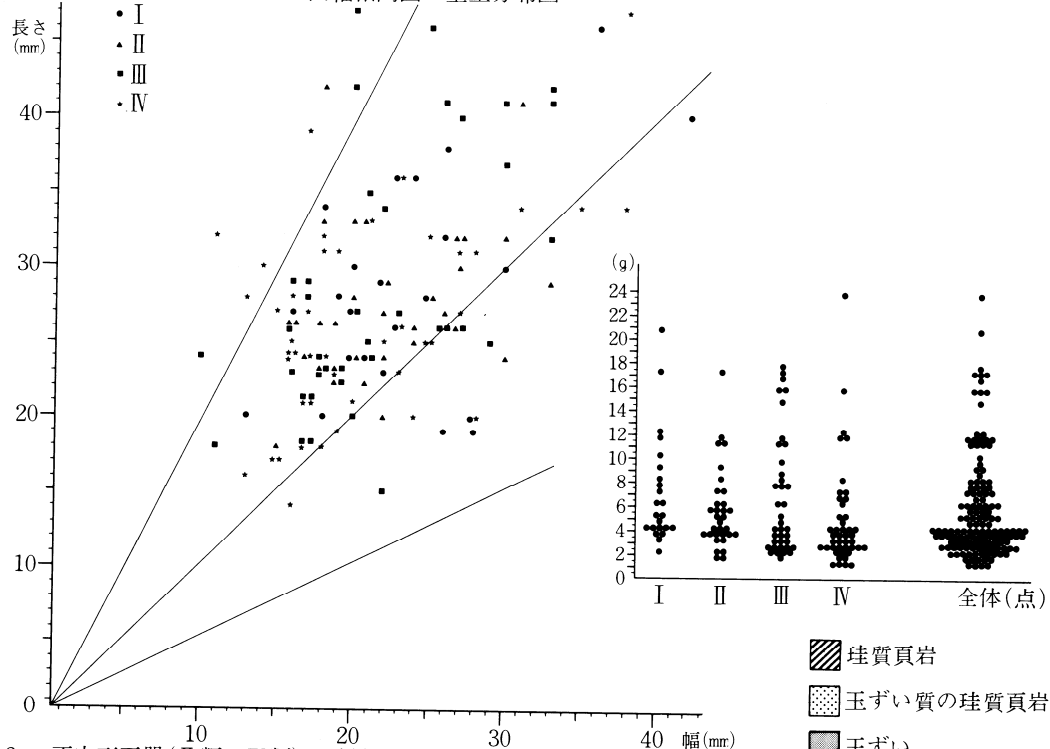


石籠の刃部角

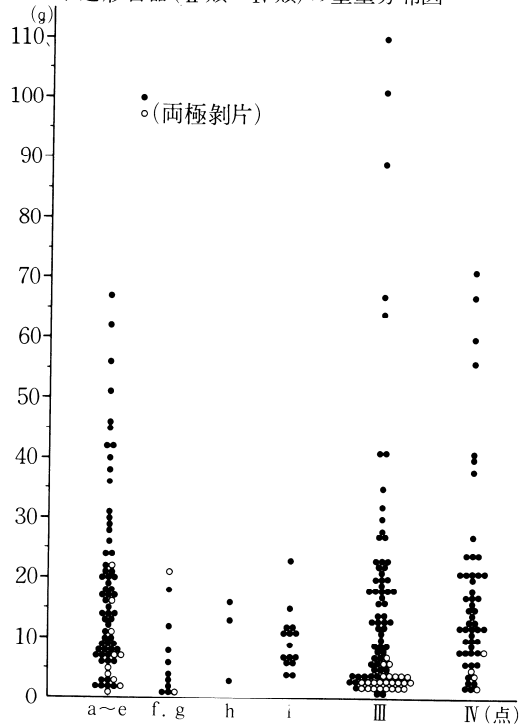


付図一 第I群石器計測グラフ

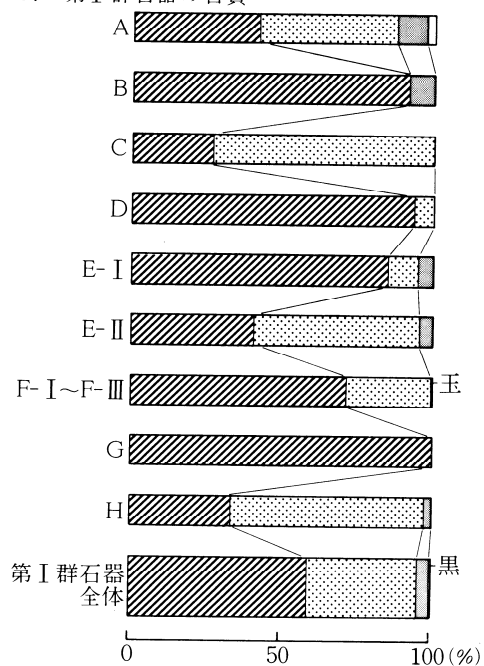
1. ピエス・エスキューユの長幅相関図・重量分布図



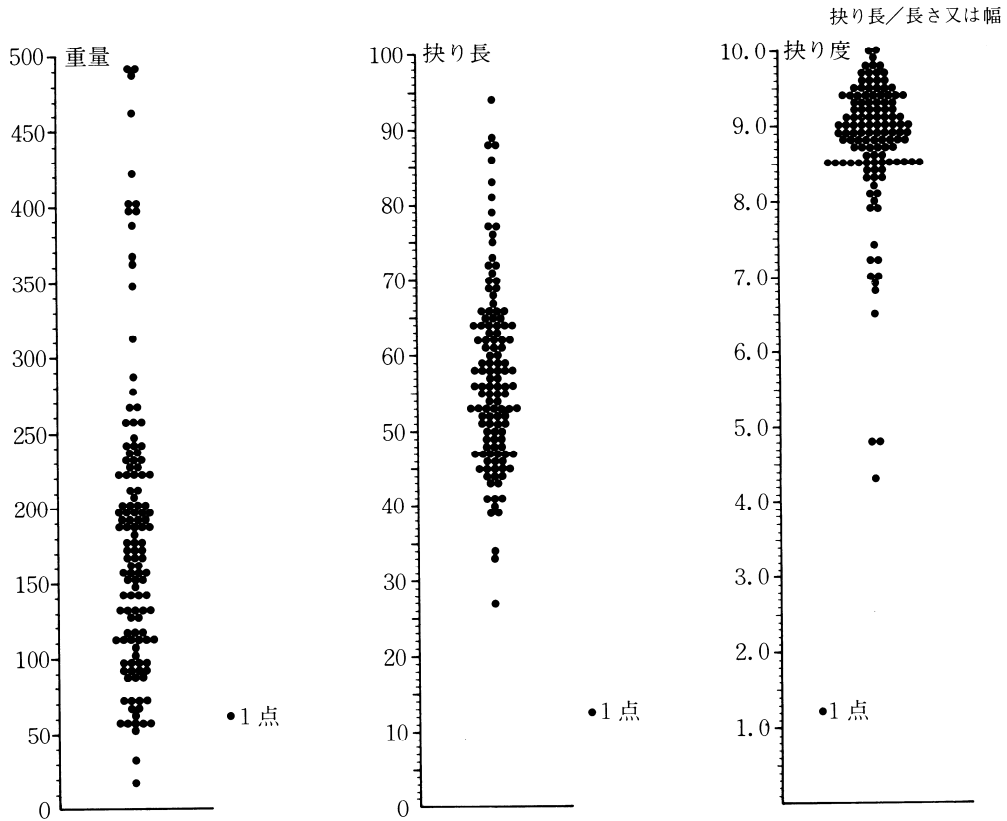
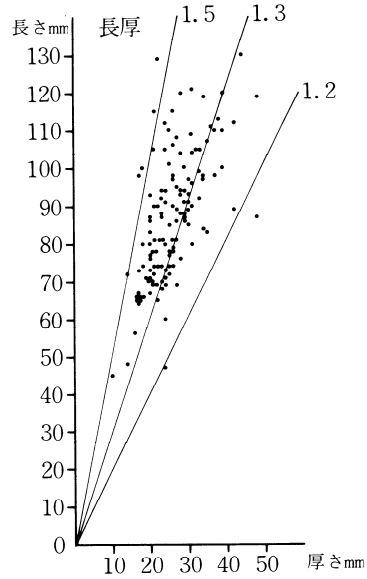
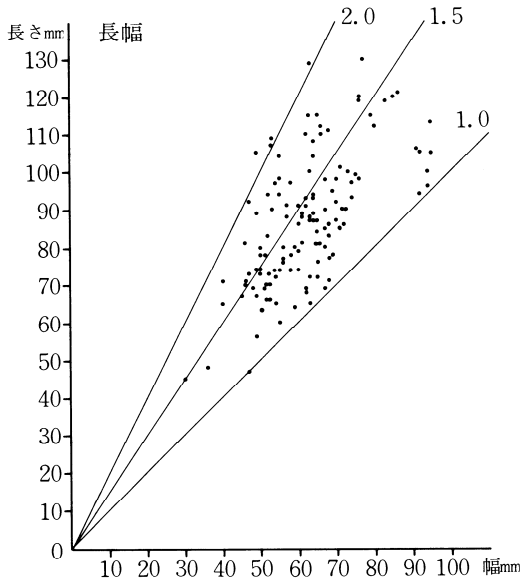
2. 不定形石器(Ⅱ類～Ⅳ類)の重量分布図



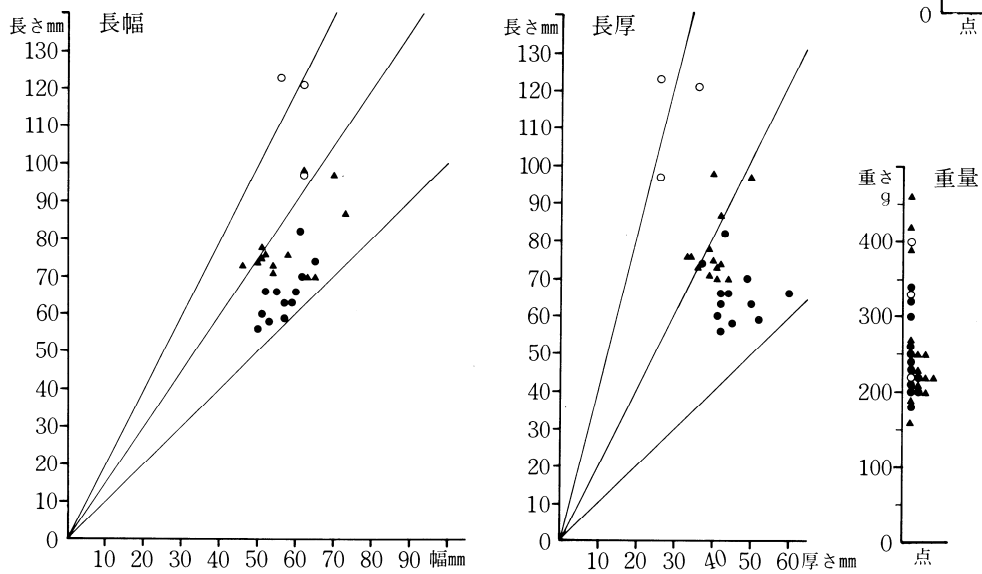
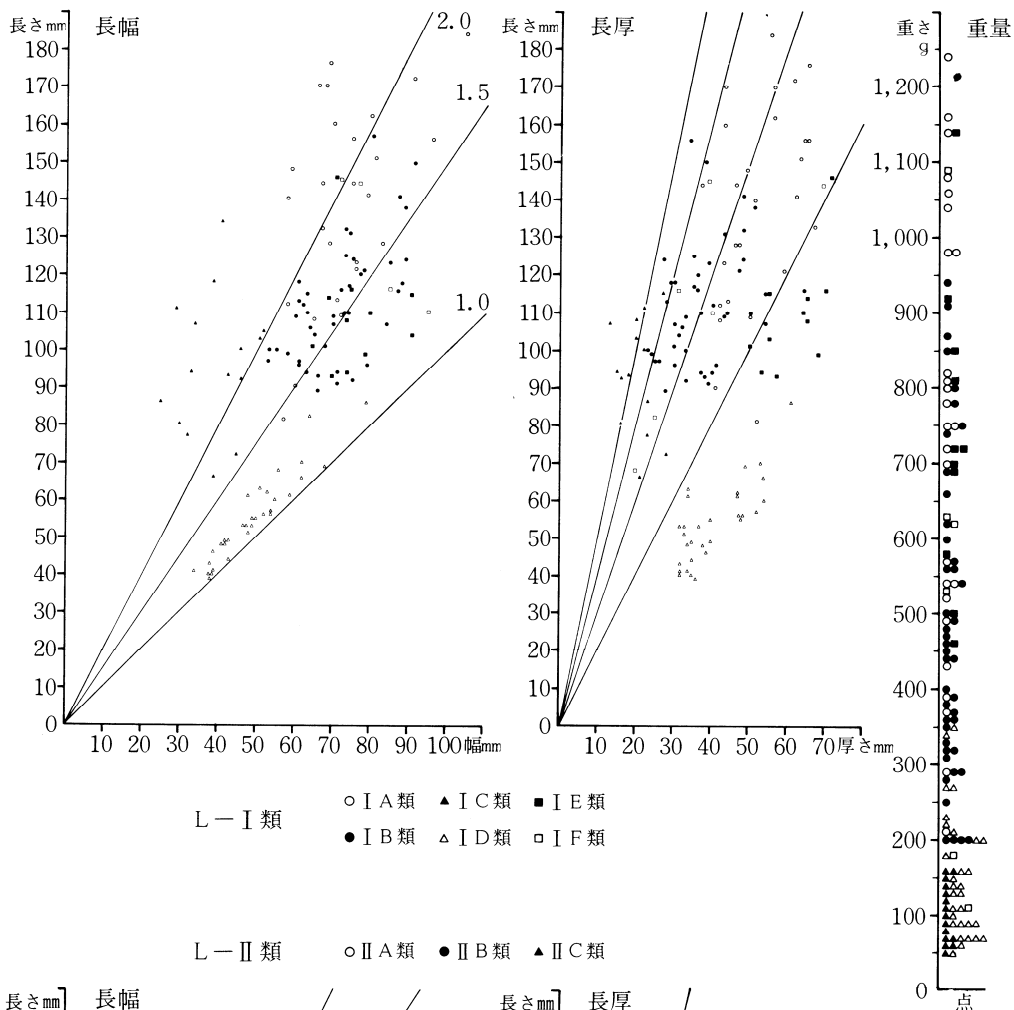
3. 第Ⅰ群石器の石質



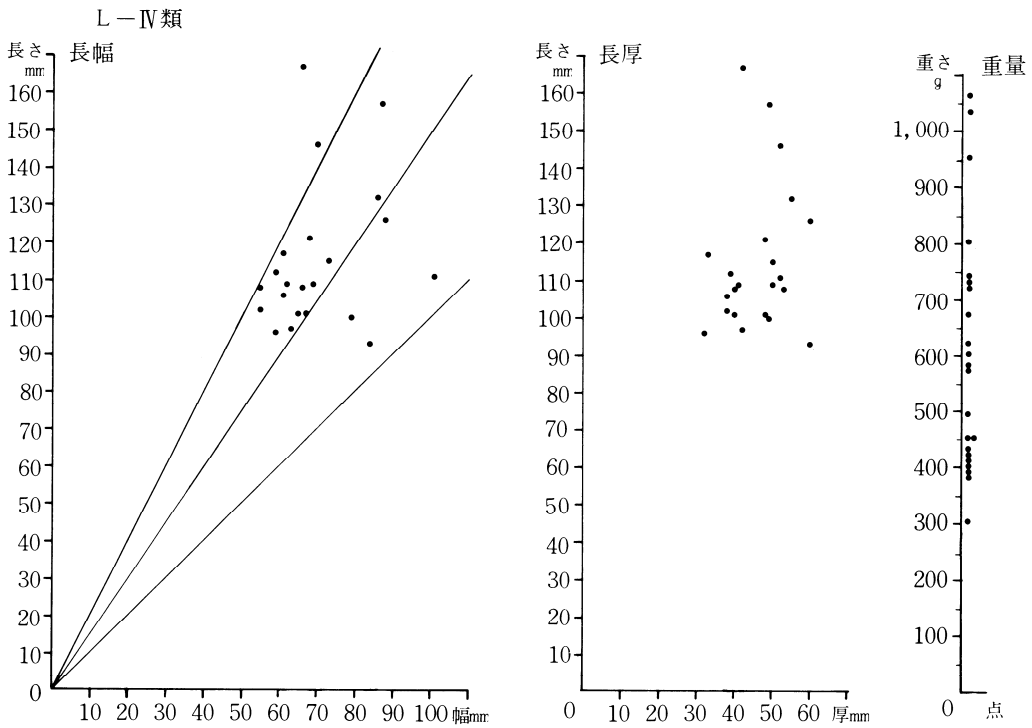
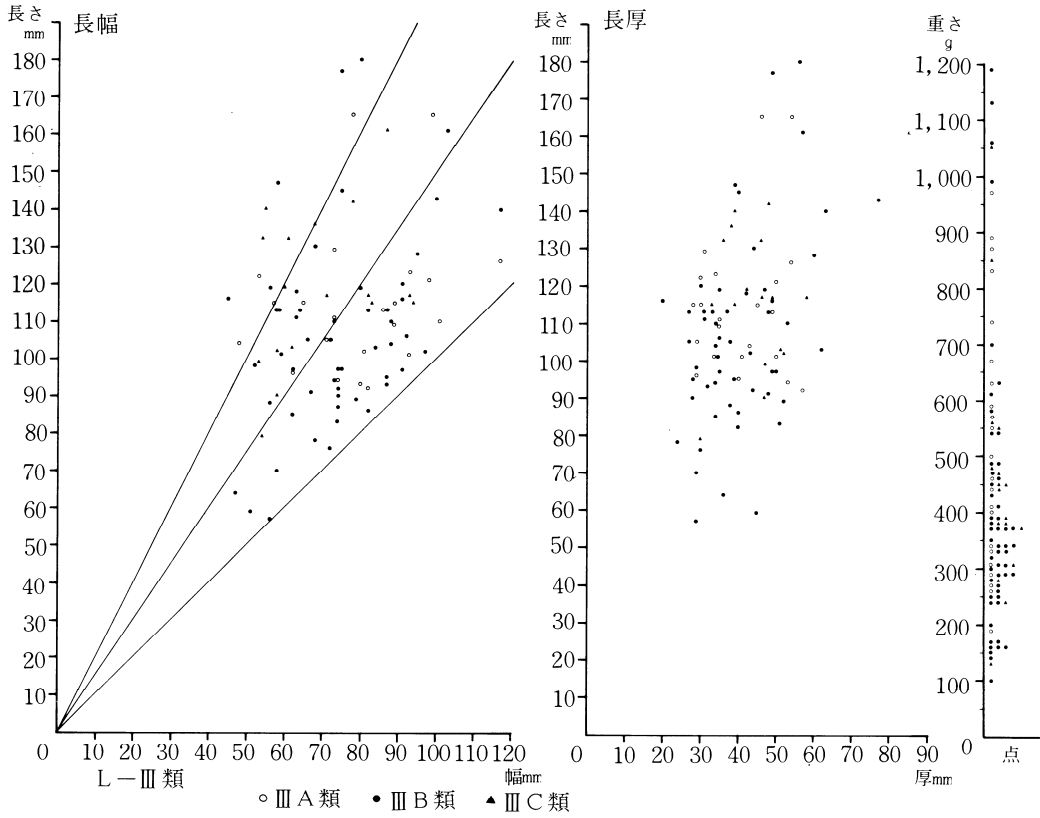
付図一 2 第Ⅰ群石器計測グラフ



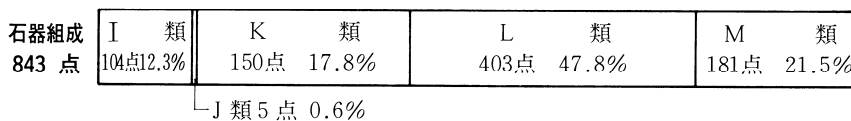
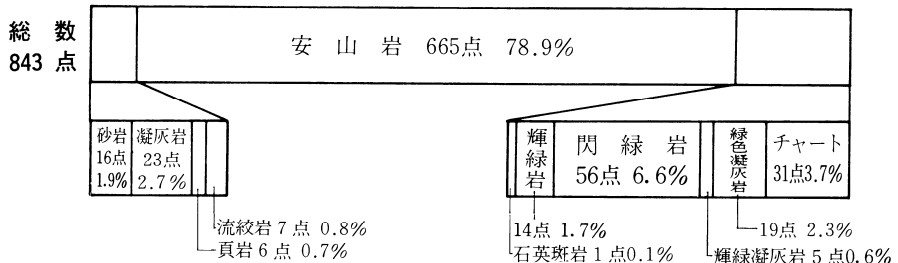
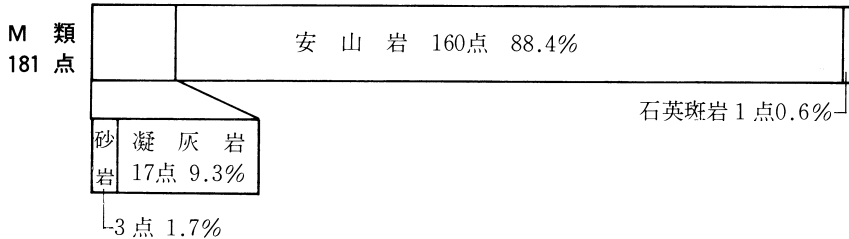
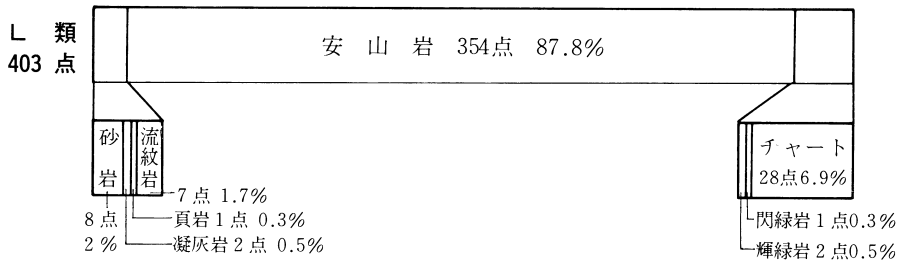
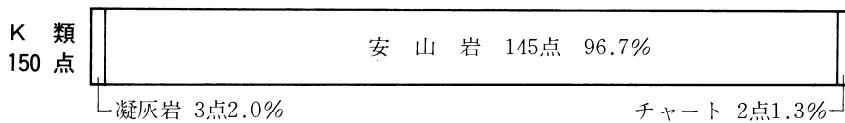
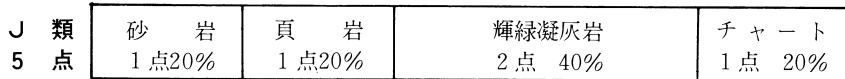
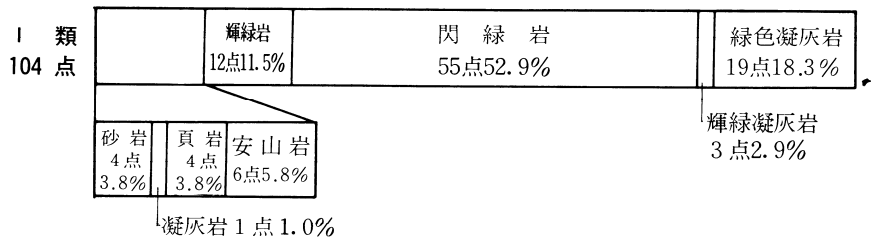
付図-3 K類 (石鍾)



付図-4 L-I 類(スリ石)・L-II 類(敲き石)



付図-5 L-III類(凹み石)・L-IV類



付図-6 第Ⅱ・Ⅲ群石器組成

石器計測表

(凡例)	玉	—	玉髓	粘	—	粘板岩
	頁	—	頁岩	砂	—	砂岩
	珪	—	珪質頁岩	流	—	流紋岩
	玉珪	—	玉髓質の珪質頁岩	安	—	安山岩
	黒	—	黒曜石	輝	—	輝緑岩
	石	—	石英	閃	—	閃緑岩
	凝	—	凝灰岩	チャ	—	チャート
	輝凝	—	輝緑凝灰岩	鉄石	—	鉄石英
	緑凝	—	緑色凝灰岩	軽	—	軽石

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
A類 石鏃										
22-1	1住	確	21	(12)	4	(0.5)	珪	Ⅲa	41	
22-2	"	床下	29	16	5	2.0	"	Ⅱa	52	
22-6	3住	フ	(18)	15	3	(0.6)	"	I a	44	
22-7	5住	床	(23)	13	4	(1.2)	"	—	58	
22-8	8住		(17)	14	4	(0.9)	玉珪	—	101	
58-3	16土	1	31	18	5	1.7	"	I b	75	
58-5	18土	フ	(17)	15	3	(0.4)	珪	I a	72	
58-6	26土	4	(20)	16	4	(0.5)	"	Ⅲb	77	
59-2	45土	1	37	22	7	5.8	"	"	74	最重量
59-5	47土	1	(21)	13	4	(0.7)	玉珪	I a	71	ビッチ付着
59-12	77土	フ	(20)	14	2	(0.3)	玉	I b	76	
59-18	78土	フ	28	11	4	0.9	黒	I c	64	弥生
59-15	"	"	(24)	12	6	(1.1)	珪	"	65	同一母岩
59-16	"	"	(36)	12	5	(1.2)	"	"	66	"
59-17	"	"	(24)	12	5	(0.9)	"	"	67	"
59-14	"	"	(34)	12	5	(1.2)	"	"	68	"
59-19	"	"	30	11	4	0.9	黒	"	69	"
59-13	"	"	36	12	4	1.1	"	"	70	"
	112土	"	20	16	3	(0.6)	珪	I a	73	焼ケハジケ
	114土	"	30	19	5	2.6	"	Ⅱa	96	
59-9	52土a	"	(27)	14	8	(3.0)	"	Ⅲa	46	石鏃?
59-1	43土	"	36	20	7	4.2	"	Ⅱa	104	焼ケハジケあり
58-17	37土	"	36	15	5	2.4	"	Ⅲb	112	
95-14	DA379	IV	26	11	3	0.6	玉珪	I a	1	
	DC378	"	17	12	3	0.4	玉	"	2	
	CN377	V a	20	14	3	1.0	珪	"	3	
	DC375	IV	17	10	4	0.5	"	"	5	
	DD379	"	20	10	3	0.3	玉珪	"	6	

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
17	CW385	"	25	14	5	1.1	"	"	10	
25	DA377	"	25	13	4	0.6	珪	"	14	
19	DC378	"	26	10	3	0.6	玉	"	15	
28	CO381	"	44	25	6	3.7	珪	"	17	最大
15	DD377	"	19	13	4	0.7	玉珪	"	19	
11	CR385	"	23	10	4	1.0	"	"	21	
26	CZ383	IV	27	15	4	0.9	玉珪	I a	22	
16	DC378	"	27	15	4	1.2	"	"	24	
23	CQ380	"	32	12	5	1.2	"	"	25	
12	DD377	I	26	12	5	0.7	"	"	26	
	CW383	IV	19	12	4	0.6	"	"	29	ビッチ付着
22	CO386	I	28	15	5	1.0	珪	"	53	
1	DB377	IV	21	11	4	0.4	玉珪	"	54	
9	DB378	"	21	13	4	0.7	"	"	59	
7	DC378	"	18	9	4	0.4	"	"	61	
4	DC377	"	17	13	3	0.4	"	"	79	
20	DC378	"	31	14	4	0.8	"	"	81	
	DB379	"	20	13	5	0.7	"	"	98	ビッチ付着
	CQ386	"	21	15	4	0.7	珪	"	107	
13	DD374	Ⅱ	(21)	14	3	(0.7)	玉	"	12	
21	DD377	"	(25)	16	5	(0.8)	玉珪	"	16	
24	CO386	I	26	15	5	(1.1)	"	"	27	
27	DB378	IV	(24)	20	5	(1.8)	珪	"	40	
10	CQ382	"	(23)	14	3	(0.7)	玉珪	"	47	
8	DC377	V a	(18)	18	3	(0.6)	"	"	55	
18	DC379	IV	(17)	15	4	(0.8)	玉	"	63	
	CN386	"	16	(10)	3	(0.4)	玉珪	"	106	
	DD378	"	(22)	18	4	(1.0)	"	"	108	
29	DC382	"	25	12	3	0.7	"	I b	11	
37	DC378	"	20	14	4	0.6	"	"	62	
30	CS387	V a	(23)	12	4	(0.7)	"	"	20	
31	DD379	IV	(13)	14	3	(0.4)	"	"	31	
34	CQ382	"	18	9	4	0.5	珪	I c	4	
33	DB379	"	19	12	6	0.9	玉珪	"	33	
36	DB373	"	21	12	3	0.5	"	"	36	
43	DB378	"	29	13	4	0.9	"	"	56	
42	DB383	"	32	17	6	2.4	"	"	57	
35	DA380	"	18	13	4	0.7	"	"	60	両極剥片を素材とする
32	DC377	"	22	12	3.2	0.6	"	"	80	
	表採	"	27	18	7	2.7	珪	"	93	
	CZ379	Ⅱ	35	22	10	4.3	玉珪	"	95	未製品?

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
96-49	DC378	IV	(14)	(14)	(3)	(0.6)	玉珪	I c	37	
95-39	DB380	IV	33	14	(5)	(2.1)	"	"	39	両極剥片素材 II a ?
40	DC378	"	(22)	17	7	(2.3)	珪	"	50	
38	DB379	"	(18)	10	4	(0.5)	玉珪	"	51	
	DD377	II	21	15	4	0.9	"	"	89	
	DA380	IV	(24)	19	5	(1.8)	玉	"	97	
96-44	CS382	"	30	10	6	1.2	玉珪	II a	30	石雑?
47	DA376	II	34	13	8	2.7	珪	"	85	"、I C類にも似る
48	CQ387	V	22	13	3	0.7	"	II b	13	
	DE378	IV	22	15	5	1.2	"	II a	28	
58	DC379	"	(15)	12	(4)	(0.6)	玉珪	"	38	
45	CY382	II	28	19	9	3.2	"	"	45	
	CZ380	"	22	14	3	0.7	玉	I c	84	両極剥片素材
95-41	CR382	"	(31)	16	6	(2.7)	珪	II a	88	
	DA378	"	(25)	19	9	(3.5)	玉	"	102	
	CZ379	IV	21	15	4	1.0	珪	"	105	
	DD377	"	22	15	5	1.3	"	II b	82	
	CY378	II	(17)	6	(2.4)	玉	"	"	103	
	DC378	"	25	16	5	5.2	玉珪	"	111	
96-51	CS382	IV	36	13	5	2.0	珪	III a	9	
50	DC374	II	22	16	4	0.8	"	"	91	
	CM383	"	(16)	15	4	(0.7)	"	"	86	
53	DE381	IV	26	12	4	0.8	"	III b	8	
52	CU385	I	25	11	5	1.3	玉	"	23	
54	DB384	IV	24	(13)	3	(0.8)	珪	"	32	
	CR383	"	20	15	5	0.9	"	"	100	
	CN379	I	(25)	(12)	(5)	(1.0)	"	"	34	
57	CP387	"	(16)	(14)	(3)	(0.6)	玉珪	"	35	
	表採		(19)	(15)	5	(1.2)	"	"	42	
	DC377	IV	(21)	(18)	(4.0)	(0.8)	珪	"	48	
	DC384	"	(31)	12	(5.6)	(1.7)	玉珪	"	49	
	表採		(14)	(17)	5	(1.1)	珪	"	87	
55	DC379	IV	(17)	(15)	6	(1.2)	"	"	90	
	表採		(29)	(19)	4.3	(1.7)	"	"	92	
	CZ381	IV	(21)	(11)	3	(0.6)	珪	"	94	
	CW382	II	(16)	(13)	(3)	(0.7)	玉珪	"	99	
	CV382	"	(23)	18	7	(1.7)	玉	"	109	
	DC378	IV	(17)	(17)	(4)	(1.1)	玉珪	"	110	
58-16	37土	フ	20	18	5	1.6	"	II b	Ⓔ280	
	CR382	II	24	23	6	3.1	珪	III b	Ⓔ193	
60-7	111土	フ	29	25	9	6.5	"	II b	Ⓔ282	

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
96-60	BC402	I	42	(15)	(4)	(1.1)	"	I a	7	IV-2区
59	BE417	IV	35	16	4	(2.2)	玉珪	III b	18	"
56	CD378	"	(15)	11	3	(0.4)	珪	—	83	"
175-5	111土近辺	IV	29	14	4	1.2	"	III a	113	VI区
B類 石槍										
52-2	12土	フ	(53)	13	7	4.1	珪		10	細身
96-61	CX383	IV	75	27	9	15.9	"		1	
63	CN374	II	56	29	8	10.6	"		4	
66	DB376	IV	50	15	10	7.8	玉		5	
64	CK382	"	(63)	21	8	(9.3)	珪		2	
	CZ377	"	68	18	13	16.5	"		6	
67	DA377	"	55	16	12	11.2	"		11	
62	CR381	V a	(43)	29	10	(12.4)	"		3	
	CN386	I	(24)	(24)	(7)	(2.7)	"		8	
	CR381	II	(60)	(25)	13	(15.9)	"		9	
	DA377	IV	(57)	(34)	(11)	(19.0)	"		12	
65	CZ381	"	(33)	(17)	(11)	(6.2)	"		13	
68	BI412	I	52	14	8	6.2	"		7	IV-2地区
C類 石雜										
97-69	CZ380	IV	(30)	22	5	(1.8)	玉珪	I a	1	
70	DD375	"	(34)	18	7	(2.5)	珪	"	10	
71	CW385	"	(20)	12	4	(0.8)	玉珪	"	11	
72	CW382	"	(24)	5	3	(0.4)	"	"	12	錐部片
75	CR382	II	47	15	10	6.1	"	I b	4	錐部のみ加工
	DC378	"	(41)	17	14	(7.6)	"	"	5	
74	"	"	(32)	16	11	(5.7)	"	"	7	
73	DA380	IV	(49)	17	10	(4.9)	"	"	9	頭部、接合
	CZ381	"	"	"	"	"	"	"	"	錐部
77	CY377	"	35	17	7	4.0	"	II	13	
76	CW383	II	38	24	8	7.9	珪	"	16	錐部マモウ
79	CO387	I	34	17	11	4.4	玉珪	III	6	
	CQ386	II	28	11	5	1.5	珪	"	8	
78	CR382	"	46	23	18	12.9	"	"	17	錐部マモウ
80	DC377	I	26	14	6	1.6	玉珪	"	18	両極剥片を利用
83	表採		23	12	5	1.3	"	"	20	
81	"		25	12	5	1.6	"	"	21	両極剥片を利用?
82	"		20	10	5	0.9	"	"	22	"
84	CO387	V b	84	38	14	23.7	珪	"	24	錐部マモウ
88	DC378	II	33	7	5	1.0	玉珪	IV	2	
87	表採		32	9	8	2.1	"	"	3	
91	DE377	II	61	12	10	6.9	珪	"	14	錐部マモウ

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
90	C S385	IV	43	12	8	3.9	玉珪	"	15	"
85	DB379	II	33	9	4	1.6	"	"	19	両極削片を利用
86	表採	"	22	6	5	0.6	"	"	23	"
89	DE379	IV	30	8	5	1.0	"	"	43	全面調整
58-4	18土	フ	32	8	5	1.0	珪	"	78	"
D類 石七										
59-3	45土	フ	33	19	4	2.5	珪	II c	23	小形
59-7	51土	フ	60	41	11	27	"	"	25	"
60-9	112土	フ	51	28	9	15.6	"	II	22	折損部に調整痕
60-11	"	"	30	26	10	10.7	"	I a	33	"
97-93	DC378	IV	35	56	10	15.4	"	"	20	"
98-94	DD379	"	40	68	7	17.2	"	"	17	"
97-92	DB378	"	38	51	8	12.3	"	I b	18	"
	CY387	I	45	50	13	19.8	"	I a	35	"
98-98	DB383	II	66	40	6	13.7	"	II a	4	"
106	CU383	V a	(40)	15	5	(3.5)	"	II	5	長大
107	CK381	IV	113	26	7	24.6	"	II a	8	"
100	CY382	"	54	16	9	6.5	"	"	9	"
101	DC377	"	60	29	12	17.2	"	"	12	"
95	DA381	"	39	28	5	6.4	"	"	13	"
99-111	CP378	"	(5.7)	28	8	(11.2)	"	"	14	"
98-99	DA382	"	55	28	6	8.5	"	"	19	"
96	"	I	62	26	6	11.1	"	"	24	"
99-109	CO377	IV	54	25	4	5.7	"	"	28	"
98-97	DC378	"	52	28	9	12.7	"	"	31	"
	CN378	V a	59	29	13	18.9	玉珪	II b	6	"
105	DB374	IV	58	46	8	20.7	珪	"	11	"
	CX385	II	59	19	8	10.4	"	"	21	"
	DB373	V	69	45	10	33.3	"	"	30	"
	C Z383	II	65	35	12	23.3	"	II c	2	"
	DC376	"	87	35	9	24.4	"	"	3	"
99-112	CR387	IV	52	30	8	11.1	"	"	27	"
110	CO381	"	32	21	6	3.5	"	"	34	小形
108	CS386	"	65	38	12	28.5	玉珪	II b	16	"
98-104	CP375	"	(55)	17	7	(6.4)	珪	II	1	"
	CV387	II	(35)	(24)	(8)	(8.1)	"	"	7	ハジケ
99-113	DC376	IV	(36)	(27)	(10)	(8.6)	"	"	29	両面加工、ハジケ
	DD379	"	(27)	(18)	(7)	(2.4)	"	"	32	"
98-102	B I 412	I	(33)	(24)	(8)	(6.3)	"	"	10	IV-2地区
103	B I 427	"	64	38	15	35.8	"	II a	15	"

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
E-I類 石篋										
60-14	127土	フ	83	30	19	63	珪	"	16	"
100-120	DC378	IV	33	20	6	3.9	"	"	2	両面加工
	128 CW383	"	(42)	33	13	(16.6)	"	"	14	基部破損
127	CO387	I	(56)	30	13	(26.5)	"	"	15	"
123	CW386	II	59	45	13	30.6	"	"	3	"
124	CM382	I	58	36	13	17.4	"	"	5	"
	126 CU382	IV	50	26	13	16.8	"	"	12	"
99-116	CT385	"	90	41	11	38.8	"	"	18	"
100-121	DB377	"	40	22	11	8.9	"	"	1	"
	122 CO377	II	47	24	10	13.1	"	"	4	"
99-119	"	I	80	44	11	44.8	"	"	11	"
	CO385	II	(50)	35	9	(18.0)	"	"	7	"
	115 DB378	IV	49	21	16	12.1	玉珪	"	19	"
100-125	CP380	"	59	28	11	23.9	珪	"	13	"
	CT382	II	(46)	38	15	(33.1)	"	"	6	基部破損
99-117	CQ387	"	41	22	7	7.6	玉	"	8	"
	DC378	IV	41	20	14	12.8	玉珪	"	10	"
118	DC382	II	49	21	16	12.1	珪	"	20	"
	DD378	"	66	30	14	31.7	"	"	9	"
	DB381	IV	(39)	(26)	(11)	(12.4)	"	"	17	基部・刃部破損
E-II類										
59-6	49土	フ	37	28	9	6.9	珪	b1	13	"
100-132	DD377	IV	38	14	8	3.1	玉珪	a2	1	"
134	DC379	IV	27	22	8	3.7	"	a1	5	"
133	CO384	II	35	31	10	6.4	珪	"	6	"
	DD374	"	26	19	7	3.6	"	a2	8	"
129	DB384	"	40	26	11	9.5	"	"	9	横形石七に似る
130	表採	"	27	15	8	2.2	玉珪	"	10	形がいびつ
131	"	"	24	19	5	2.2	珪	"	20	"
	CW384	IV	28	19	8	3.8	玉珪	"	22	"
135	DD375	V a	29	21	6	3.3	"	a1	3	"
101-139	DC374	IV	31	(20)	8	(4.4)	"	"	4	"
	DA377	II	(19)	28	7	(2.3)	"	"	11	刃部破片
100-136	DA378	"	30	17	5	2.5	"	"	12	"
101-138	DD376	IV	(39)	(23)	10	(7.0)	珪	"	15	焼けによるハジケ
	DC378	"	36	27	8	7.3	"	"	21	"
100-137	DA380	"	26	18	8	3.2	玉珪	"	2	"
101-143	DA382	"	33	24	10	6.1	"	b1	7	"
141	DD376	"	25	16	4	1.2	珪	"	14	"
140	CQ382	"	23	20	7	2.2	"	"	16	"

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
144	DD375	"	32	21	8	3.9	玉	"	18	光沢痕
142	CL381	I	41	22	7	5.5	玉珪	"	19	
	DB381	IV	(20)	(13)	(6.0)	(1.5)	"	—	23	頭部破片
F類 不定型石器										
58-12	32土	フ	45	23	10	9.3	珪	I	172	
101-147	CZ379	IV	37	34	15	12.7	珪	"	118	
148	DE380	II	3.0	39	10	11.4	珪	I	102	
	DD377	II	45	33	12	11.7	珪	I	91	
145	CU385	IV	52	41	12	18.3	珪	I	18	
	CO387	I	47	25	14	15.2	"	"	134	
	DD379	II	29	57	8	10.8	"	"	297	
	CS382	"	63	27	6	9.3	"	"	298	
	CZ380	"	39	31	10	8.0	"	"	299	
22-3	1住	床直	30	26	9	8.3	"	II d	266	
22-5	2住	床	44	15	6	5.6	"	II f	216	
	3住	フ	22	(18)	10	(6.1)	"	III d	267	
22-11	8住	フ	33	39	11	20.1	"	"	165	
22-9	"	"	49	45	12	20.4	"	"	166	焼けハジケ
22-10	"	"	(20)	(17)	11	(3.8)	"	II i	167	
	"	"	35	17	6	2.9	"	IV	270	
	10住	"	47	40	12	26.5	"	III c	268	
	"	"	21	34	4	3.3	"	IV	269	
	3土	I	25	27	6	3.1	"	II d	277	
58-1	8土	フ	33	17	6	3.1	"	II b	278	ハ
58-7	26土	フ	17	31	7	3.2	玉珪	II e	171	両(両極剝片素材)
58-9	"	"	20	25	9	4.3	"	III d	272	両ハ、S-5
58-8	"	4	32	25	10	7.9	"	IV	273	両 S-17
	"	"	43	40	12	23.6	珪	"	274	S-13
58-15	34土	フ	33	24	10	7.5	"	II a	148	
58-18	37土	"	(21)	26	7	(4.2)	"	II c	279	
	40土	"	31	20	10	5.6	玉珪	IV	281	
59-4	47土	"	18	23	5	2.4	"	III d	276	
59-8	56a土	"	40	22	6	6.4	珪	II i	151	折(折断石器?)
	58土	"	64	42	12	34.8	"	III b	275	
60-1	72土	"	24	44	8	7.5	"	II f	158	
60-2	86土	"	36	45	10	17.8	"	II d	147	
60-4	"	"	(22)	(20)	(7)	(3.4)	"	II i	153	石槍?
	114土	"	32	18	5	2.3	"	III b	283	両?
	"	"	17	25	5	2.2	"	III d	284	
60-13	119土	フ	(39)	(20)	4	(3.4)	珪	II i	149	石匕?
60-12	134土	"	(34)	16	10	(4.4)	"	II i	223	石錐?

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
101-150	CU387	V b	78	32	16	45.3	"	II a	9	
152	DB380	IV	54	20	9	8.6	"	"	15	
151	CO382	V a	72	28	8	15.6	"	"	16	
102-156	DD378	II	60	41	8	23.7	"	"	34	
	DC375	II	56	53	18	62	"	"	40	
	DD379	"	46	26	13	18.1	"	"	53	
101-155	CZ384	"	35	29	12	15.2	玉珪	"	57	
	DD378	"	46	33	11	20.4	珪	"	58	
102-157	CZ379	"	51	30	10	15.9	"	"	59	両・両縁加工
103-175	"	"	28	35	4	4.0	玉珪	II d	61	両
	DC375	"	28	25	8	6.4	珪	II a	94	
	DE382	"	38	43	15	19.5	玉珪	II d	110	
	DC379	"	50	38	14	31.4	珪	II a	180	
	DC378	IV	31	30	11	9.3	玉珪	"	202	
	CP382	II	37	16	3	2.7	珪	"	240	
	CQ382	"	42	46	10	21.7	珪	"	251	ピエス?
	DB383	"	16	16	4	1.4	"	"	312	両・ハ・ピエス?
101-153	CW386	"	35	23	12	6.5	玉珪	"	314	両・片面加工
	DC383	"	(26)	(19)	9	(4.0)	"	"	323	両
	CQ382	IV	32	28	9	9.5	珪	II b	4	
102-165	DA382	V b	81	34	14	41.8	玉珪	"	7	
168	DB380	IV	(52)	32	9	(18.5)	珪	"	14	
161	DC378	II	48	20	10	10.9	玉珪	"	27	両
167	CU385	"	68	36	8	37.7	珪	"	30	
164	CO387	"	73	37	16	56.2	"	"	32	
163	CX385	II	42	37	9	25.5	"	"	33	
	CW384	"	33	38	9	13.7	"	"	42	
	DC377	IV	53	29	15	21.4	玉珪	"	45	
166	CW386	II	51	16	6	5.9	珪	"	66	
160	表採	"	35	19	7	4.9	"	"	105	両
	DD377	II	76	24	15	19.8	"	"	173	
	CW386	"	64	40	11	28.2	"	"	175	
	DA376	"	40	41	11	15.9	"	"	182	
	DA382	II	38	24	7	9.8	玉珪	II b	185	
	DB381	IV	46	30	6	9.3	珪	"	199	
	CX383	"	64	23	9	12.6	"	"	204	
102-159	表採	"	36	14	4	1.6	"	"	208	
	CQ382	IV	(28)	35	9	(9.4)	"	"	256	
	CN377	II	50	45	8	18.5	"	II c	22	
103-170	DD375	IV	53	32	14	36.2	"	"	65	
173	DC378	"	63	59	19	67	"	"	143	

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
102-169	DC378	II	27	13	5	1.8	玉珪	"	183	
	DA376	V a	28	25	9	7.0	"	"	186	
162	CY382	I	34	30	10	11.4	"	"	313	
103-176	DC380	IV	27	46	10	13.4	珪	II d	3	
	CN377	"	(40)	(26)	7	(8.0)	"	"	24	
172	CW387	II	30	49	8	11.6	"	"	25	
174	DD378	"	36	53	9	21.1	"	"	28	
	CS382	V a	37	52	16	30.0	玉珪	"	38	
	DE380	II	39	50	17	29.0	玉	"	39	
	CN378	"	46	63	16	46.0	珪	"	54	
177	CS380	"	45	77	14	40.5	"	"	55	
	CQ378	"	43	92	16	42	"	"	163	
	CY378	"	31	39	6	7.4	"	"	238	
104-186	CO386	I	35	26	6	7.0	"	II e	1	
182	DA382	IV	59	29	9	17.4	"	"	2	
103-179	DA382	"	78	50	14	51.1	"	"	11	
104-181	DB375	"	49	41	13	23.7	"	"	23	
	DA378	"	51	30	10	14.1	"	"	50	
	DD375	II	47	34	12	16.7	"	"	63	
	DA379	"	31	38	8	8.4	玉珪	"	79	
	表採	"	24	20	6	1.8	珪	"	138	
103-178	CR381	IV	60	20	8	7.9	"	"	155	
104-185	DB377	"	35	18	11	6.9	玉珪	"	168	両
184	DC383	"	22	20	5	2.2	"	"	304	両
183	DC378	"	30	22	8	6.1	"	"	311	
58-14	34土	フ	37	13	6	2.6	珪	II f	8	
	DC378	II	40	28	9	12.0	"	"	133	
104-190	DC382	II	21	(16)	7	(3.0)	玉珪	II f	194	
	CW382	"	(27)	17	8	(2.6)	珪	"	228	
187	DD378	II	26	12	8	2.3	玉珪	"	296	
188	DC377	"	27	12	3	1.1	"	"	309	両
193	C Z387	"	47	46	9	17.7	珪	II g	17	
189	DA378	"	22	28	6	4.3	玉珪	"	74	
	DC377	"	38	40	13	20.8	"	"	89	両
191	C Z379	"	21	15	5	1.3	"	"	122	
	DD377	"	(26)	(19)	10	(5.5)	"	"	126	
192	C Z379	"	23	13	5	1.3	"	"	220	
	表採	"	(22)	(19)	6	(2.2)	"	"	324	両
194	CL386	II	37	41	9	13.1	珪	II h	71	
	CL376	IV	(42)	34	15	(16.5)	"	"	97	
	DD379	II	28	47	13	18.5	"	"	254	

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
	CO382	"	42	17	4	3.0	"	"	263	
	CQ386	V a	(40)	35	10	(11.0)	"	II i	51	
195	CP381	IV	(26)	37	11	(12.0)	"	"	52	
	CS380	II	36	26	6	5.7	"	"	68	
	CL374	"	(24)	33	9	(6.9)	"	"	69	
	DD382	"	(33)	23	5	(4.0)	"	"	70	
	CP382	"	(25)	(20)	9	(4.0)	"	"	72	
	CU383	IV	(19)	28	8	(5.3)	"	"	73	
	CY387	II	(16)	(21)	6	1.4	玉珪	"	99	
	表採	"	(11)	30	5	(1.6)	"	"	104	
200	CW387	II	31	23	7	7.0	珪	"	116	折
	CY387	"	23	16	7	2.4	玉珪	"	123	両
	DE377	"	(15)	(21)	7	(1.8)	珪	"	127	
	表採	"	(18)	(14)	9	(3.0)	"	"	128	石ビ?
	DC377	IV	42	23	11	12.4	"	"	142	折
197	CO387	I	(20)	26	7	(4.9)	"	"	156	石槍? 石篋?
196	C Z380	IV	(23)	23	10	(7.0)	"	"	164	石槍?
	DC378	II	(22)	32	9	(11.9)	"	"	176	両端折損
	CT381	IV	(35)	20	17	8.5	"	"	200	折
	CX383	"	39	38	8	10.6	"	"	205	折
104-199	CO386	I	(27)	15	5.0	(1.7)	珪	II i	219	
	C Z380	V a	(22)	(20)	5	(1.9)	玉珪	"	224	円、石鎌?
	DG375	"	(24)	17	6	(1.9)	珪	"	226	尖
198	CX381	"	(26)	(16)	7	(2.6)	玉珪	"	227	石槍?
	DB377	"	(26)	17	5	1.4	珪	"	230	石鎌?
	DD377	"	(27)	(21)	8	3.1	玉珪	"	231	"
	表採	"	(21)	(19)	4	1.3	珪	"	232	円、 "
	DB374	IV	(39)	(28)	9	(6.0)	"	"	245	石槍?
	CT382	II	(19)	26	9	5.0	"	"	285	
	CU382	"	33	20	11	7.1	"	"	286	折
	DD380	II	40	28	10	10.9	"	"	288	折
	DA377	"	35	24	7	5.7	"	"	289	折
	C Z379	"	34	24	18	23.1	"	"	291	折
	CW387	I	40	20	14	12.2	"	"	292	折
	CW382	"	35	28	6	6.9	"	"	293	折
	DE375	II	34	16	8	3.9	"	"	294	折
	CU384	"	28	19	5	3.5	"	"	295	折
	CO383	IV	92	39	27	89	"	III a	20	
	DD378	II	42	68	13	40.6	"	III d	31	
	DD380	"	55	41	13	23.2	"	III a	36	
	CQ387	V a	35	60	7	22.4	"	III d	47	

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
105-207	DD379	II	33	24	9	6.1	玉珪	III a	82	
	CX385	"	38	29	13	11.7	珪	"	85	ハ(ビ細刻離)
214	CP386	"	28	26	8	6.0	"	"	95	ハ
	CZ380	"	25	17	5	1.9	玉珪	"	124	両ハ
215	DA376	"	(20)	(25)	5	(1.9)	珪	"	181	ハ
206	表採		21	15	4	1.4	玉珪	"	306	両ハ両加
211	DC383	II	22	18	5	1.8	"	"	310	両
	CY378	"	29	10	9	2.5	"	"	315	両
229	DE374	IV	49	22	8	7.7	珪	III b	12	ハ
	DB379	II	71	28	8	17.7	"	"	29	ハ
105-208	CO375	III	52	26	10	14.0	"	"	41	ハ
	DE377	IV	43	28	9	12.7	"	"	43	ハ
228	CY381	II	75	42	7	32.0	"	"	56	ハ
	CZ380	V a	36	26	12	13.1	"	"	64	ハ
209	CQ387	V a	43	33	14	18.6	珪	III b	67	ハ
	CY382	II	33	20	7	3.8	"	"	83	ハ
222	CQ380	"	56	35	10	17.7	"	"	92	ハ
	DC382	"	55	41	13	23.4	"	"	93	ハ
209	DE375	I	24	21	6	3.2	"	"	98	ハ
	DA382	"	32	25	5	3.6	玉珪	"	103	両ハ
228	CP386	II	82	53	22	67	珪	"	107	両
	CO385	"	33	42	8	9.6	"	III d	108	両
209	DB379	I	40	40	10	18.7	"	III b	109	両
	DC376	II	21	21	5	2.8	玉珪	"	112	両
222	DB379	"	26	18	6	3.0	"	"	113	両
	DE376	"	25	17	3	1.5	珪	"	114	両
212	DC379	"	36	29	10	11.4	玉珪	"	136	両
	DD384	"	32	22	7	5.2	珪	"	160	ハ
212	CQ381	IV	44	46	12	17.9	"	III d	161	ハ
	DA380	"	44	46	11	17.7	"	"	169	ハ
212	CT382	II	34	38	7	6.6	"	"	174	ハ
	CU387	"	41	34	19	27.9	"	III b	177	ハ
212	DC376	"	45	23	9	8.9	玉珪	"	178	ハ
	DD379	"	36	26	9	8.3	珪	"	184	ハ
212	CM376	"	27	22	6	3.7	玉珪	"	188	両
	DD375	V a	(11)	(11)	6	(1.5)	"	"	192	両
212	DB381	IV	20	19	9	3.3	珪	"	197	両ハ
	CQ387	"	33	33	13	13.7	"	"	203	両
216	表採		17	33	10	3.8	玉珪	III d	207	両
	CZ397	IV	29	19	7.5	3.9	珪	III b	218	両
216	DD378	II	34	17	3	2.4	玉珪	"	221	両

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
105-219	DC383		39	32	10	12.4	珪	"	237	ハ
	DA378	II	38	22	5	3.7	"	"	242	ハ
227	CU385	"	28	45	12	16.6	"	III d	247	ハ
	DD380	"	37	39	17	27.6	"	"	265	ハ
220	DA377	"	19	23	6	3.0	玉珪	"	303	両ハ
221	DB380	"	26	17	7	3.5	"	III b	307	両ハ
	DD378	II	27	18	6	2.7	"	"	308	両
223	DC377	"	25	23	6	3.4	"	"	316	両
	DA382	II	27	23	8	5.8	玉珪	III b	320	両ハ
213	CZ381	"	20	19	5	1.7	"	"	321	両ハ
	CZ381	IV	57	54	14	29.5	珪	III c	6	ハ
223	DB377	"	33	40	7	13.3	玉珪	"	46	ハ
	CL383	"	(26)	29	5	(4.6)	珪	"	80	ハ
223	表採		45	35	12	22.0	"	"	131	ハ
	DA375	IV	55	30	11	21.3	玉珪	"	146	ハ
226	CR383	"	26	18	4	1.6	珪	"	209	両
	CO382	IV	21	27	8	3.6	"	"	241	両
217	DB376	IV	38	16	10	6.8	玉珪	"	300	両ハ
	DC378	II	29	15	7	3.0	珪	"	301	両ハ
217	CZ382	"	19	16	5	1.7	玉珪	"	302	両ハ
	CN379	II	30	20	7	4.5	"	"	317	両
217	CZ383	"	29	15	6	2.7	"	"	318	両
	DC378	IV	45	40	18	40.5	珪	III c	44	ハ
217	CM376	II	50	46	7	16.5	"	"	48	ハ
	DA378	"	38	51	12	19.7	"	III d	75	ハ
217	CO384	"	26	32	11	9.2	"	"	76	ハ
	CU387	"	26	40	14	12.5	玉珪	"	78	ハ
217	CY378	"	25	30	7	5.0	珪	"	235	ハ
	DD377	II	41	26	14	14.0	玉珪	III g	100	両ハ
217	DD380	"	(22)	(14)	8	(2.2)	珪	III i	187	両ハ
	CQ381	V a	35	42	6	7.3	珪	III d	190	ハ
217	CO384	II	61	15	12	8.7	玉珪	III	62	コア?
	CM376	IV	58	55	18	64	珪	"	139	ハ
217	DE380	II	64	57	23	101	"	"	140	ハ
	DD377	"	55	28	18	23.4	"	"	252	ハ
217	CQ382	IV	71	39	9	24.3	"	IV	5	ハ
	CZ379	II	44	45	12	20.9	"	"	35	ハ
217	CP378	"	70	56	17	71	"	"	37	ハ
	DB383	"	67	54	14	55.2	"	"	77	ハ
217	CZ378	"	57	35	10	21.0	"	"	84	ハ
	DB375	"	36	55	11	17.3	"	"	86	ハ

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
	CM382	I	25	15	4	1.6	"	"	87	
	DA378	II	34	23	10	5.5	玉珪	IV	88	
	DA378	"	58	46	12	38.1	珪	"	101	
	DB378	IV	41	39	8	15.0	"	"	106	
	CQ387	II	33	26	8	9.5	"	"	111	
	DC377	"	53	(16)	13	(7.5)	"	"	115	
	CF381	"	29	35	11	12.3	"	"	117	
	DB380	"	62	32	22	40.9	"	"	119	
	CO387	I	40	32	13	16.4	"	"	120	
	CW383	II	32	35	8	10.4	"	"	125	
	DC378	"	(25)	(21)	6	(2.2)	"	"	129	
	DA378	"	34	28	9	2.3	"	"	130	
106-233	DC384	"	26	35	13	11.6	"	"	137	
	DC378	IV	37	33	12	18.4	"	"	144	
234			56	42	12	20.6	"	"	157	
	DE379	II	41	53	16	40.4	"	"	159	
	DC375	"	37	38	14	15.1	"	"	162	
	CO385	"	75	55	16	67	"	"	179	
	DC378	"	37	25	9	8.7	"	"	189	
	CZ381	IV	32	32	12	11.8	玉珪	"	195	
	CZ381	"	34	23	7	6.9	珪	"	198	
	DD379	II	26	47	12	20.5	"	"	213	
	CR380	"	30	35	11	13.3	"	"	214	
	DE378	"	28	47	13	17.3	玉珪	"	222	
	CO384	"	37	25	8	8.3	珪	"	236	
	DC378	"	27	30	12	8.2	"	"	239	
	DC378	"	45	40	9	11.6	"	"	243	
	CW384	IV	63	30	15	26.9	"	"	244	
	DC378	II	47	38	9	19.5	"	"	246	
	表採		31	37	10	12.1	"	"	248	
	CZ383	II	36	31	9	8.0	"	"	249	
	CZ379	"	37	30	16	20.8	"	"	250	
	DE378	I	43	33	7	10.6	"	"	253	
	DA382	II	58	26	13	14.3	"	"	255	
	DE375	"	28	21	10	4.2	"	"	257	
	DF376	Va	35	35	8	12.7	"	"	258	
	DE377	II	39	34	13	23.8	珪	IV	259	
	CT382	"	54	52	16	60.0	"	"	260	
	CZ379	"	39	35	11	16.8	"	"	261	
	DC378	"	38	32	9	10.4	"	"	262	
	CT382	"	24	25	13	5.9	"	"	264	

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
	CO385		29	14	6	2.1	"	"	290	折
105-224	DD379	II	26	22	7	4.3	玉珪	"	319	両
	225 表採		26	16	5	2.1	"	"	325	両
	218 DB375	I	24	19	9	4.5	"	"	326	両
101-154	DD382	Va	41	32	15	22.3	"	II a	211	両
104-201	CT387	II	51	32	11	11.4	珪	II i	49	折
105-204	CO384	IV	39	40	12	15.5	"	"	96	折
	CZ381	"	22	(15)	9	(2.8)	玉珪	"	196	
	DC378	II	51	29	7	15.6	珪	III b	90	
	CR382	"	24	23	6	3.1	片磐	"	193	
	DD379	"	19	27	7	3.8	珪	"	234	両ハ
	CZ378	IV	35	20	8	6.1	玉珪	III c	206	両
	DD382		60	13	19	110	珪	III d	210	
	CW386	II	15	22	4	1.1	"	III i	191	ハ
	DE378	(19)	17	6	(2.1)	"	"	"	229	石叢?
	表採	(20)	14	3	(0.6)	"	"	IV	225	
	DB375	IV	49	41	13	23.7	"	II e	23	
106-231	BC432	II	43	68	12	40.6	珪	II d	141	IV-2区
232	BY432	IV	81	42	15	53.8	"	II b	145	"
230	BW382	"	15	89	16	138	"	II a	10	"
	BK427	I	53	55	25	75	玉珪	III b	60	"
	BA412	I	27	21	9	5.5	珪	II i	287	折
	BC412	"	24	19	9	4.5	"	III b	327	"
	BI427	"	30	40	11	10.5	"	III i	328	折
	"	"	53	32	13	29.7	"	II a	332	"
	AW412	Va	30	25	4	2.7	"	IV	330	"
	"	"	44	42	10	26.2	"	"	331	"
	表採		18	15	7	2.2	"	"	329	"
	BE427		41	13	6	3.6	"	III b	13	"
147-66	BO156	II	65	45	12	34.0	珪	II b	4	IV区
	BB182	III	27	37	7	9.5	"	III a	1	"
68	BL156	II	59	45	15	37.9	"	III e	3	"
	BS157	III	57	29	11	17.4	"	III b	8	"
67	BW151	III	52	28	12	18.5	"	"	11	"
	BQ156	II	47	42	12	25.0	"	IV	5	"
	BQ154	III	47	39	13	20.6	"	"	6	"
	BS156	"	40	42	13	23.9	"	"	7	"
175-2	2住	1	48	69	16	62	子	III b		VII区
4	4住	3	(41)	(26)	10	(10.7)	玉珪	II e		"
3	"	"	36	35	7	9.3	"	III a		"
4	11住	7	(26)	30	8	(7.6)	珪	II a		"

図版	出地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
	14住	2	32	18	10	4.1	玉珪	IV	"	
9	南斜面	1	85	54	31	94	"	I	"	
"	"	"	36	40	14	19.0	珪	III	"	
6	"	"	(40)	46	11	(10.4)	玉珪	II b	"	
"	"	"	38	24	11	11.0	珪	III	"	
7	"	"	35	21	10	7.0	"	II g	"	
G類 靴形石籠										
99-115	C O 375	I	99	50	7	48.7	珪		1	
H類 ビエス・エスキューユ										
22-4	1 H	フ	18	15	5	1.5	珪	II a	72	
"	"	"	32	33	8	11.1	"	III a	78	
"	10 H	"	30	27	8	9.0	"	II b	74	
"	14 H	"	47	20	10	8.6	玉珪	III a	108	
"	7 土	"	27	26	7	5.9	珪	II a	79	
"	30 土	"	28	17	7	3.5	玉珪	III a	96	
58-13	34 土	"	26	23	8	5.4	"	I a	75	
59-10	64 土	"	24	10	8	2.1	"	III a	99	
60-3	86 土	"	28	25	10	7.0	珪	II a	23	
60-5	105 土	"	20	8	7	1.3	玉珪	IV a	100	
60-8	111 土	"	23	19	7	3.3	珪	IV a	70	
60-10	112 土	"	23	19	7	3.4	"	II a	73	
	D A 389	II	46	36	14	20.6	玉珪	I a	7	
107-245	D B 381	IV	32	26	10	12.1	"	"	18	
	C O 384	II	38	26	10	10.4	珪	"	26	
106-238	表採		24	21	12	7.0	玉珪	"	28	
241	C O 377	IV	29	22	13	8.3	"	"	86	
239	C V 382	V a	27	16	7	4.0	珪	"	87	
	表採		27	20	8	4.5	玉珪	"	94	
	C Q 381	IV	20	28	7	4.3	"	"	95	
	表採		20	13	10	2.4	"	"	102	
	C Z 381	II	30	30	9	3.5	珪	I b	3	
	C R 383	IV	23	22	8	4.4	"	"	38	
	C R 383	"	28	25	11	7.7	"	"	66	
	D C 378	II	28	19	8	4.3	玉珪	"	91	
	D B 398	IV	40	42	7	17.0	珪	"	12	
	C O 382	"	19	26	6	3.2	"	"	60	
	D A 376	"	34	18	6	4.2	"	"	67	
	C V 383	II	19	28	9	6.3	玉珪	"	76	
	表採		24	22	8	5.0	"	II a	2	

図版	出地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
	C V 387	I	41	31	12	17.3	"	"	15	
	C V 382	II	25	24	7	5.9	珪	"	17	
240	C O 384	"	33	21	5	5.5	玉珪	"	21	
	D C 378	"	26	18	5	2.4	"	"	24	
	C Z 386	"	33	20	6	4.7	珪	"	25	
107-251	C R 383	IV	22	19	8	3.8	玉珪	II a	29	
	C Y 382	II	22	21	10	4.3	"	"	30	
243	D D 379	"	29	22	8	8.4	"	"	32	
249	D C 378	"	23	18	8	3.5	"	"	44	
	D C 377	"	26	16	6	3.3	珪	"	54	
	C Q 387	I	32	30	10	11.5	"	"	57	
	表採		20	22	8	3.9	玉珪	"	61	
253	表採		29	33	9	1.9	"	II b	37	
255	D E 377	IV	24	30	7	5.3	珪	"	36	
	C R 379	II	26	16	8	3.6	玉珪	"	40	
	D C 379	IV	26	27	10	6.1	珪	"	68	
244	D A 376	IV	27	20	10	7.7	玉珪	III a	6	
250	D C 379	I	29	16	8	4.3	珪	"	8	
257	C O 384	II	24	21	7	4.1	玉珪	"	10	
	D D 378	"	23	16	10	4.4	"	"	19	
	D E 379	"	34	22	8	6.0	珪	"	27	
	D E 377	"	22	19	6	2.6	玉珪	"	33	
256	D B 379	"	26	16	8	3.6	"	"	39	
	D D 379	IV	42	20	15	16.5	珪	"	41	
	表採		18	17	6	2.0	玉珪	"	46	
	"		23	18	9	3.3	"	"	48	
258	"		23	19	6	2.5	"	"	51	
	"		26	26	10	7.6	珪	"	55	
	"		21	17	6	2.6	"	"	58	
	C Q 387	IV	25	29	8	5.1	"	"	59	
	表採		18	11	7	1.7	玉珪	"	65	
	D D 375	II	35	21	12	7.8	珪	"	97	
	C Y 382	IV	42	33	12	14.8	"	"	107	
	C N 379	II	23	18	7	2.3	"	"	109	
	表採		15	22	7	2.0	玉珪	III b	31	
	"		18	17	8	3.0	"	"	77	
259	C W 382	II	25	21	7	3.8	"	"	11	
260	D C 377	"	21	17	7	2.5	"	"	14	
261	表採		20	20	7	2.8	"	"	102	
	D C 379	IV	26	27	9	8.0	珪	"	104	
	C Y 382	II	24	18	7	4.0	玉珪	IV a	9	

一部調整痕

一辺に調整剝離

破片?

調整剝離

調整やや粗い

調整粗い

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考	
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)					
107-266	DD377	"	25	22	9	5.2	"	"	13		
	DC379	"	25	25	7	3.5	"	"	16		
	CM376	IV	36	23	10	11.8	玉	"	20		
	DC378	II	27	17	8	3.7	玉珪	"	22		
	表採		18	18	6	2.2	珪	"	42		
	DC376	II	28	13	7	2.6	玉珪	"	43		
	CW382	"	24	16	8	3.0	"	"	47		
	263 DA382	IV	21	17	7	2.5	"	"	49		
	DC378	"	19	19	6	2.2	"	"	50		
	265 DA381	"	17	15	7	2.1	"	"	63		
CU386	II	31	19	9	6.1	"	"	69			
CG382	IV	32	25	7	6.7	珪	"	80			
DC378	"	33	21	9	7.0	玉珪	"	82			
DD378	"	20	24	5	2.5	"	"	84			
DC378	"	30	14	8	3.3	"	"	88	一辺に調整剝離?		
264	DA377	II	16	13	6	1.4	玉	"	89		
	CO385	IV	21	17	8	3.0	玉珪	"	92		
	CO384	IV	32	18	8	4.0	"	"	98		
	DC377	II	34	38	8	12.0	珪	"	106		
269	CZ380	"	18	17	6	1.7	玉珪	IVb1	45		
	CZ381	IV	24	16	7	2.5	"	v1	52		
	表採		14	16	6	1.0	"	v2	83		
	DA382	II	24	16	8	2.7	"	v1	85		
271	表採		28	16	7	2.6	"	v2	90	調整	
	DC382	II	23	23	9	5.4	珪	IVc2	5	全面調整剝離片	
	CM376	IV	34	35	8	11.5	"	v1	56		
	CO382	IV	26	23	6	4.2	"	v1	62		
267 CN379	"	21	20	6	2.9	"	v2	81	一部調整剝離		
270 DA382	II	47	38	14	23.7	玉珪	"	105			
268	CZ380	IV	17	15	5	1.2	"	"	103		
	4H	フ	26	24	10	7.3	玉珪	II a	131		
106-236	CM376	II	36	23	11	11.9	玉	I a	114		
	DD380	IV	20	18	8	3.7	玉珪	"	117		
106-242	CM376	II	36	24	11	9.2	珪	I a	139		
	CY382	"	24	20	10	6.0	玉珪	I b	135		
	CY382	"	26	19	11	5.8	"	II a	112		
	DD382	"	42	28	10	11.0	"	"	123		
	CK382	"	24	17	5	2.1	"	"	125		
	CZ378	"	32	27	12	11.0	"	"	126		
	107-246	DC379	"	33	18	11	6.0	珪	"	138	
		CY379	IV	46	25	12	17.3	玉珪	III a	110	

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
	DD378	II	41	26	10	11.4	"	"	111	
	CY382	"	27	23	9	6.3	"	"	113	
	表採		24	18	7	3.0	"	"	115	
	DC378	II	26	26	14	9.5	珪	"	120	
	CY382	"	37	30	10	11.6	玉珪	"	121	
	"	IV	41	30	13	17.5	"	"	122	
	DA379	"	40	27	11	15.6	珪	"	124	
	CU387	II	29	17	8	4.7	玉珪	"	130	
	DC377	IV	41	33	13	15.9	珪	"	141	一端が平坦、石核?
	CY382	II	39	17	13	8.0	玉珪	IV a	116	
	CO384	"	31	28	7	3.5	"	"	118	破片?
	DC378	"	27	15	9	2.9	"	"	132	
	"	"	31	27	8	4.3	"	"	133	
	"	"	24	17	5	1.8	"	"	134	破片?
	CR382	"	31	18	9	4.5	"	"	136	
	CY382	"	25	25	8	6.8	"	"	137	一端が平坦
	"	"	27	27	9	7.0	"	IV b	119	
	CQ382	II	25	16	11	4.2	珪	"	140	一端が平坦、石核?
	表採		30	20	6	5.2	"	I b	4	
	254 DC377	II	27	22	6	3.9	玉珪	II b	53	
252	DE381	IV	32	27	7	3.7	"	"	1	
	CR383	"	24	20	6	4.1	珪	"	34	
DD375	V a	28	20	6	4.7	玉珪	"	35		
CW383	IV	34	31	11	15.6	"	IV b		不201	
262 DC381	II	32	11	10	3.7	"	IV a		破片不341	
60-6	111土	フ	26	20	8	4.7	珪	II a	20	
BA428	I	40	26	12	13.5	玉珪	I a		IV-2区	
I類 磨製石斧										
14-1	8H	フク	(81)	43	26	(151)	緑凝	I	68	刃
14-2	"	"	(100)	(45)	30	(213)	閃	III B	67	刃欠基
"	"	"	(43)	31	23	(41)	輝	III D	69	基
61-2	6土	"	(61)	45	(26)	(106)	輝凝	"	70	刃
108-16	CO387	IIIV	40	25	8	12	"	I	3	
109-7	DB378	"	(63)	(41)	(19)	(74)	緑凝	"	40	基、再利用
	DA380	"	(57)	59	(14)	(75)	"	"	97	刃部、スリ切り
CV382	V a	52	19	10	16	眞	II	62		
108-10	CY382	IIIV	37	16	7	7	緑凝	III A	1	
108-12	DE376	"	32	20	7	7	"	"	2	
108-14	DC379	"	48	26	10	21	"	"	4	

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
108-4	CM378	IV	100	42	23	144	閃	"	10	完
108-15	CY380	IIIV	32	17	5	6	緑凝	"	95	基欠
108-11	CZ378	"	47	11	6	4	"	"	96	完
108-17	DD378	"	(22)	(11)	(8)	(3)	"	"	6	基
108-19	CU384	II	(21)	(22)	(9)	(6)	頁	"	7	基
108-20	DC377	IIIV	(36)	(23)	(7)	(7)	"	"	8	基
108-3	CX379	Va	96	44	(23)	(145)	輝	"	15	刃欠
109-10	CR383	IIIV	(79)	(36)	22	(93)	閃	"	19	刃欠
	CY382	Va	(49)	(36)	(20)	(47)	緑凝	"	33	基
109-11	CN379	I	(92)	(45)	26	(168)	閃	"	56	刃欠基
	CO375	III	(33)	26	(0.6)	(8)	輝凝	"	64	刃
109-3	DB377	IIIV	(54)	(48)	10	(23)	緑凝	"	94	基欠
108-2	CX383	"	121	48	26	222	閃	III B	9	完
	CN384	II	92	36	22	104	"	"	55	完
	CZ377	"	151	47	32	358	"	"	75	完
108-5	CM376	"	(86)	(43)	(24)	(149)	"	"	11	接合、基刃
	DC379	"	(50)	45	(24)	(69)	"	"	12	
			123	45	(25)	(218)	"	"		
108-6	DD382	IIIV	(110)	42	26	(206)	"	"	14	刃欠
	DA377	IIIV	(90)	(45)	24	(53)	安	"	16	基
109-5	CV386	"	(95)	43	26	(177)	閃	"	17	刃欠
109-2	DD378	IV	(103)	48	31	(236)	"	"	18	頭欠
108-9	DD374	"	(77)	(42)	(27)	(143)	"	"	21	基欠
108-8	DD378	IIIV	(77)	43	(26)	(145)	"	"	22	基欠
109-9	CV382	IIIV	(86)	44	(23)	(172)	閃	III B	23	基欠
	CO378	IIIV	(38)	(40)	(24)	(47)	"	"	29	接 刃基
	CO377	II	(87)	(45)	(28)	(184)	"	"	50	
			115	—	—	—	"	"		
	CM377	Va	(145)	(53)	(31)	(418)	"	"	30	刃欠
109-8	CP379	III	(59)	41	28	(127)	"	"	31	基欠 再利用
	DD381	Va	(93)	(47)	(31)	(165)	"	"	39	刃欠基
	DE376	II	(88)	(49)	(31)	(162)	"	"	51	接 基
	CX361	—	—	—	—	—	"	"		
			153	49	28	333	"	"		
	DD379	"	100	(41)	23	(153)	"	"	54	刃欠
	DE376	II	(99)	—	(33)	(214)	"	"	59	刃、縦割
	CX381	"	(86)	52	(31)	(211)	"	"	76	刃
109-4	DC378	"	(56)	(37)	(25)	(72)	輝	"	84	基 蔽転用
	CZ380	IIIV	(98)	(43)	26	(152)	"	"	87	刃欠
	DB375	"	(127)	(48)	32	(314)	閃	"	88	刃欠
	DB377	"	(112)	(49)	(29)	(224)	"	"	89	刃欠

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
109-6	CT385	"	(85)	49	(22)	(179)	輝	"	90	基欠、蔽転か?
	CT386	I	(95)	(51)	(29)	(221)	閃	"	91	基欠
	CZ379	IIIV	(91)	(45)	(27)	(170)	"	"	92	基欠
109-12	CY380	"	(88)	(41)	27	(151)	"	"	93	刃基欠
		表	(86)	(66)	(37)	(303)	安	"	109	
108-22	DD374	IIIV	60	39	20	55	閃	III C	20	完、再加工
108-7	CZ380	"	109	44	24	190	"	"	85	完
109-1	CT383	"	118	57	33	329	"	"	86	完
108-24	CO373	II	(59)	38	(25)	(98)	"	III D	24	基欠
	CZ384	IIIV	(60)	42	(30)	(106)	"	"	25	刃
	DA385	"	(39)	(48)	(19)	(47)	"	"	26	刃
108-23	DB372	"	(53)	34	(17)	(46)	輝	"	27	刃
	DD379	"	(54)	37	(20)	(50)	"	"	28	刃
	DC378	"	(62)	(37)	(24)	(92)	"	"	34	基
	CV383	"	(42)	(36)	(24)	(48)	閃	"	35	基
	CO385	"	(53)	(35)	(24)	(60)	砂	"	36	基
	CO380	"	(66)	(45)	(30)	(106)	"	"	37	基
	CY387	"	(57)	(35)	(28)	(80)	閃	"	38	基
	DE379	"	(58)	(41)	(27)	(97)	"	"	41	基
	CY378	IIIV	(66)	(42)	(30)	(119)	輝	III D	42	基
	DC377	"	(39)	(35)	(22)	(37)	閃	"	43	基
108-18	DC378	II	(32)	(23)	(13)	(15)	輝	"	44	基
108-21	DA378	IIIV	(30)	(26)	(15)	(19)	緑凝	"	45	基
	DD379	II	(38)	(32)	(22)	(37)	輝	"	46	基
		表	(37)	(32)	(26)	(33)	凝	"	47	基
	DE376	Va	(74)	(48)	(30)	(154)	閃	"	48	中
	DC378	IIIV	(53)	(48)	(31)	(134)	"	"	49	中
	CR380	II	(32)	—	(25)	(44)	"	"	52	刃
	CM375	"	(96)	(50)	(33)	(259)	"	"	53	刃欠基
	CJ379	II	(57)	(39)	(26)	(83)	輝	"	57	基
	CF375	I	(51)	(38)	(30)	(78)	閃	"	58	基
	CP384	II	(43)	41	9	(26)	砂	"	60	刃
	DD373	"	(21)	(48)	(15)	(14)	緑凝	"	65	刃一部
	DC377	"	(13)	(29)	0.7	(2)	"	"	66	刃一部
	DB379	"	(68)	(38)	(27)	(88)	閃	"	79	基
	CQ382	"	(52)	(35)	(26)	(48)	砂	"	81	基
	DC378	"	(50)	(30)	(23)	(54)	安	"	82	基
	DB376	IIIV	(40)	(42)	(27)	(79)	閃	"	98	胴
	DB375	"	(40)	(34)	(23)	(37)	安	"	100	基
	CT386	I	(78)	(45)	(26)	(147)	閃	"	101	基
	DB375	IIIV	(72)	(41)	(29)	(123)	"	"	102	基

図版	出地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
	CO386	"	(65)	(37)	(24)	(89)	"	"	103	基
	DB375	"	(55)	(42)	(28)	(94)	"	"	104	基
	CV383	"	(55)	(48)	(24)	(72)	"	"	105	基
	DB373	"	(45)	(34)	(14)	(51)	"	"	106	基
	CM383	II	(39)	(25)	(4)	(6)	安	"	107	刀
	CN378	"	(59)	(38)	(25)	(65)	"	"	108	基
108- 1	BO442	IV	114	45	25	278	緑凝	I	13	完擦切、IV-2区
	CB375	IV	(52)	(36)	(22)	(63)	"	"	99	基
108-13	BO472	I	44	13	8	9	"	III A	5	
	BI427	"	(82)	(44)	(29)	(163)	閃	III D	83	基
148- 1			141	53	32	453	頁	I	D6	VII区
176- 7	7H	フ	65	31	15	49	緑凝	III A	77	完
177- 4	南		(71)	42	(20)	(84)	緑凝	III A	78	刀基欠
177- 3	南		81	49	27	172	閃	III B	409	
	南(30)	I	(84)	(48)	(34)	(191)	"	"	80	基
J類 打製石斧										
109- 15	CO380	IIIV	115	61	24	216	輝	I	32	基欠
	CS381	II	60	37	11	31	千ヤ	"	63	
	CK371	"	91	62	23	159	輝	"	74	完
109-14	DC378	"	142	41	28	155	頁	II	72	完
	DD380	"	(58)	(54)	(21)	(85)	砂	"	73	
環状石斧										
109- 13	CO374	IIIV	(75)	(50)	(16)	(81)	輝		71	
K類 石錘										
図版	出地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
14- 5	8H	フ	67	49	20	45	68	安	II Bc	209
	"	"	(60)	(59)	(25)	(82)	(82)	"	II A	211
16-13	11H	"	112	66	24	58	229	"	II Bc	225
61-10	6土	"	74	50	23	43	88	"	"	251
61- 3	"	"	100	63	29	58	152	"	II Bb	253
61- 8	60土	III	99	75	33	66	287	"	II Bc	249
62- 6	81土	フ	72	63	21	58	119	"	"	261
62- 8	102土	"	113	95	38	86	425	"	II Ba	265
62-11	116土	"	84	65	34	58	221	"	II Bc	271
110- 3	DC377	II	66	52	17	52	58	"	I	1
110- 2	DC376	"	97	54	34	47	244	"	"	2
110- 1	CO382	"	129	63	22	55	193	"	"	3
	DD377	"	77	56	25	53	170	"	"	4

図版	出地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
	DB377	"	71	40	20	34	87	"	"	5
110- 9	CO379	"	78	69	21	62	141	"	II A	7
110-15	CB37?	?	74	58	26	71	119	"	"	8
110- 4	DC380	II	72	54	25	70	157	"	"	9
110- 6	CV387	"	85	71	30	81	235	"	"	10
110- 8	DF375	"	100	94	39	94	493	"	"	11
110- 7	DC379	"	105	92	21	89	266	"	"	12
110-16	DC378	"	89	61	30	88	236	"	"	13
110- 5	DE375	"	70	52	23	66	89	"	"	14
110-11	CK377	II	95	69	27	77	232	"	"	15
110-10	CT381	"	74	49	21	66	108	"	"	16
	CX384	"	56	49	16	50	58	"	"	133
	DC377	"	92	47	23	39	127	"	II Ba	17
	DC378	"	112	80	42	75	462	"	"	22
	DD379	"	93	74	20	69	189	"	"	26
110-12	CQ372	"	67	45	17	39	57	"	"	27
	CP382	"	88	63	28	61	229	"	"	29
	DD377	"	69	48	21	45	97	"	"	30
	DA382	"	86	68	20	48	143	"	"	33
	CW387	"	73	52	20	51	134	"	"	36
	DF377	"	107	53	35	46	214	"	"	37
	DA377	"	110	66	37	56	360	"	"	38
110-14	DE374	II	88	61	29	52	205	"	II Ba	39
110-13	DA373	"	60	55	24	41	50	"	"	40
	DD378	"	89	49	27	49	169	"	"	42
	CR383	"	72	65	14	47	71	"	"	98
110-17	DF375	"	96	94	31	88	397	"	II Bb	6
110-22	DE380	I	86	72	27	63	211	"	"	21
111- 4	DD378	II	93	62	28	53	187	"	"	23
	DA378	"	88	57	23	48	156	"	"	24
111- 3	DD377	"	76	65	28	60	199	"	"	25
110-20	DE379	I	90	72	26	64	230	"	"	31
	DA377	II	90	67	31	56	185	"	"	34
	DC378	"	73	50	17	41	72	"	"	35
111- 6	DD374	"	111	68	36	65	366	"	"	43
110-19	DC378	"	98	76	17	62	134	"	"	44
110-21	DA380	"	74	55	18	47	110	"	"	46
111- 7	DB378	"	69	67	24	57	156	"	"	47
	DC376	"	94	52	24	52	164	"	"	48
110-18	CS387	I	48	36	14	33	30	"	"	49
	CN383	V a	98	55	34	50	237	"	"	58

図版	出土地点	層	最大計測値					石質	分類	整理番号	備考	
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	袂(mm)	重(g)					
111-1	C Z 378	II	90	72	21	64	179	"	"	61		
	C P 382	"	85	67	25	48	158	"	"	84		
	D C 377	"	97	74	26	69	198	"	"	89		
	D E 379	"	109	53	31	46	192	"	"	111		
	D C 376	"	66	52	18	45	75	"	"	124		
	表採		87	63	23	53	141	"	"	132		
111-17	D A 377	II	105	49	24	43	200	"	II Bc	19		
111-10	C N 381		65	40	17	36	57	"	凝	41		
	D A 377	II	80	50	24	40	119	"	安	51		
	C Q 378		101	71	25	64	190	"	"	53		
	D B 378	IV	78	58	26	55	131	"	"	54		
111-5	C Y 381	II	78	50	21	44	66	"	"	55		
	C Q 380	"	94	92	28	83	347	"	"	56		
	111-8	D C 378	"	120	76	28	73	396	"	"	57	
		D A 377	"	86	60	29	51	174	"	"	59	
		D A 373	"	98	67	37	62	224	"	"	60	
D C 375	II	121	86	31	76	388	"	II Bc	63			
111-15	CM 373	"	91	57	24	53	170	"	"	64		
	DB 378	"	74	60	25	51	140	"	"	65		
	DE 377	"	73	47	24	45	96	"	"	66		
	CO 380	"	104	64	28	61	186	"	"	67		
	CU 382	V a	120	85	39	79	402	"	"	68		
	CL 380	II	87	70	48	64	257	"	"	69		
	DB 377	"	89	64	42	56	257	"	"	70		
	111-16	C Z 382	"	70	52	20	49	93	"	"	71	
	111-13	表		47	47	24	44	71	"	チヤ	72	
				45	30	10	27	17	"	安	73	
DE 373		"	104	55	31	47	223	"	"	74		
CM 379		"	108	64	27	57	209	"	"	75		
DD 379		"	105	65	32	58	256	"	"	76		
D C 374		"	90	53	22	52	154	"	"	77		
D C 381		"	92	70	33	63	245	"	"	78		
C N 374		"	69	51	27	47	114	"	"	79		
?			81	65	26	64	195	"	"	80		
DD 377		II	83	68	35	61	247	"	"	81		
DA 375		"	69	62	21	53	127	"	"	82		
DE 377		"	83	52	20	46	115	"	"	83		
111-9		C Y 385	"	64	59	17	56	98	"	"	85	
		C V 385	"	81	65	27	55	189	"	"	86	
	DB 378	"	76	56	20	47	80	"	"	87		
	CR 385	"	91	60	30	58	199	"	"	88		

図版	出土地点	層	最大計測値					石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	袂(mm)	重(g)				
111-18	D A 379	IV	81	46	23	41	98	"	"	90	
	D C 375	II	94	64	29	53	189	"	"	91	
	D F 375	"	80	56	18	51	94	"	"	92	
	D C 374	"	87	65	20	59	176	"	"	93	
	C N 381	"	79	60	26	54	153	"	"	94	
	D A 380	II	68	62	23	56	104	"	"	95	
	C Q 382	"	100	73	18	64	199	"	"	96	
	C U 383	"	105	95	33	62	276	"	"	97	
	D D 377	"	93	64	30	45	202	"	"	99	
	C Y 381	"	94	55	23	49	167	"	"	100	
	D E 377	"	80	59	31	50	175	"	"	101	
	D D 378	"	91	62	29	60	242	"	"	102	
	D A 376	"	81	61	21	54	147	"	"	103	
	111-11	C Y 382	"	115	63	26	56	198	"	"	110
D D 374		"	80	67	20	59	110	"	"	117	
D D 378		"	119	83	48	77	489	"	凝	131	
D B 378		"	(89)	(70)	(23)	(313)	"	安	II B	106	
C Y 387		"	(99)	(80)	(27)	(374)	"	"	"	107	
D E 376		V a	113	(64)	(39)	(150)	"	"	"	108	
D A 377		II	91	(60)	(24)	(155)	"	"	"	109	
D A 377		"	74	(55)	25	(86)	"	"	"	112	
D E 377		"	(72)	42	(17)	(225)	"	"	"	113	
C Q 377		"	(100)	(71)	(25)	(72)	"	"	"	114	
DD 377		"	(72)	(42)	(19)	(301)	"	"	"	115	
C X 381		"	98	(57)	38	(77)	"	"	"	116	
D C 378		"	(43)	(60)	25	(219)	"	"	"	118	
C Y 378		"	83	(62)	31	(158)	"	"	"	119	
D C 376		"	(63)	(79)	25	(75)	"	"	"	120	
DB 378		"	68	(48)	(19)	(151)	"	"	"	121	
			(85)	74	(19)	(102)	"	"	"	123	
CW 384		II	(71)	(48)	(21)	(165)	"	"	"	125	
	表採	(88)	(49)	(32)	(91)	"	"	"	126		
DB 380	II	78	(56)	(18)	(224)	"	"	"	127		
C S 381	"	(99)	(70)	(27)	(106)	"	"	"	128		
C Z 384	"	(70)	(57)	(18)	(78)	"	"	"	129		
DE 378	"	(65)	(58)	(17)	(205)	"	"	III	130		
DE 377	"	98	70	26	495	"	"	"	18		
DF 373	"	130	77	44	66	222	"	"	28		
CW 383	"	97	58	30	87	"	"	"	32		
DB 377	"	77	68	20	62	162	"	"	50		
111-19	CR 383	"	119	76	34	68	402	"	"	104	

図版	出土地点	層	最大計測値					石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	塊(mm)	重(g)				
111-2	DF375	"	119	(94)	(39)		(671)	"	"	105	
	DC379	"	(58)	(53)	22		(79)	"	"	122	
	CG374	I	106	91	26	72	310	"	II B a	20	
	CD377	II	87	65	29	59	168	"	II B b	45	
	CJ386	I	115	79	21	72	269	安	II B c	52	
111-12	CD373	II	65	63	22	55	94	"	"	62	
	BE432	"	(70)	69	21		(125)	"	II B 試1		IV-2区
148-2	BW149	III	71	68	19	65	135	"	II A	D 1	VI区
148-4	"	"	71	46	24	67	110	"	"	D 3	
148-3	BH144	"	70	46	20	65	93	チャ	"	18	
148-6	BV143	II	74	54	22	70	114	安	"	21	
148-5	V143	"	65	54	17	59	64	"	"	22	
177-9	南㊟	表	110	62	25	53	223	"	II B c	406	MI区
177-6	南㊟	I	78	51	25	44	59	凝	"	407	

L類 敲磨器

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	機能面		整理番号	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)		痕跡	面			
8-10	1H	床直	111	29	22	101	安			203	I C	
8-11	"	"	94	33	15	67	"			204	"	
8-12	"	"	123	56	26	328	"			201	II A	
9-11	2H	床下	150	81	38	807	"	スリ	1	79×12	I B d	
10-7	3H	"	115	63	30	343	"	クボミ	1	18×17	III A	
14-4	8H	フ	115	52	27	157	"			213	I C	
14-3	"	"	63	57	42	201	チャ			210	II B	
16-11	9H	pit2	82	61	43	304	"			218	"	
	"	"	87	73	42	419	安			220	II C	
16-12	"	"	101	67	48	498	"	スリ	2	77×41 60×32	IV	
								タタキ	2	26×13 23×16		
								凹	2	54×25 56×27		
18-17	10H	"	(73)	(69)	(48)	(374)	"			223	I B a	
18-18	"	"	70	62	53	273	"	スリ	1	36×13	I D	
	11H	フ	48	41	34	91	"			719	"	
	12H	"	53	47	37	113	"			720	"	
19-17	"	"	61	59	47	153	"			226	"	
19-18	"	"	44	43	35	93	"			228	"	
19-16	"	"	(102)	(77)	(60)	(733)	"			227	I E	
21-10	13H	"	146	71	67	1138	"	スリ	2	92×25 85×31	230	"
	14H	"	(114)	(68)	(63)	(376)	"			231	IV	
61-1	6土	"	118	88	29	447	"	スリ	2	67×14 69×15	233	I B c
61-4	7土	"	100	79	49	574	"	スリ	2	44×23 58×25	235	IV
61-5	18土	フ	92	82	57	589	"	凹	1	20×18	237	III A

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	機能面		整理番号	分類	備考	
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)		痕跡	面				
61-6	26土	IV	101	65	50	506	"	スリ	2	58×24 50×19	239	I E	
	"	"	(139)	78	55	(901)	"	スリ	1	74×12		238	IV
61-7	38土	I b	62	53	51	228	"				243	V	
	50土	フ	(76)	(75)	(57)	(159)	"				245	III C	
62-3	51土	100	46	22	157	"					246	I C	
	52土	"	56	50	42	320	チャ				247	II B	
	53土	II	112	(58)	26	(301)	安	スリ	2	82×18 (44×19)	248	I B c	
61-11	65土	"	74	50	42	209	チャ				252	II C	
61-9	"	"	(77)	(47)	(50)	(270)	安				250	V	
	67土	フ	(106)	(91)	(62)	(654)	"				255	I A	
	"	"	121	62	36	404	"				258	II A	
62-1	67土	フ	104	88	34	330	安	凹	2	43×25 39×20	254	III B	
										19×18			
62-4	72土	"	107	70	30	379	"	スリ	1	90×24	259	I B b	
62-5	74土	フ	170	66	43	805	"	スリ	1	157×11	260	I A	
62-7	86土	"	93	87	32	351	"	凹	1	22×19	263	III B	
62-10	111土	"	76	52	34	217	チャ				266	II C	
	"	"	98	62	40	387	"				267	"	
	"	"	71	54	39	195	"				268	"	
	119土	"	(48)	(63)	(47)	(212)	安				273	I B c	
	"	フ	(56)	(69)	(67)	(464)	"				272	I E	
62-9	131土	"	132	54	36	279	"	クボミ	2	73×23 18×15	274	III C	
										75×25			
112-4	CX383	II	184	105	55	1240	"	スリ	1	136×21	38	I A	
112-8	CW385	"	156	96	65	985	"	スリ	1	134×15	42	"	
113-6	DE377	"	144	67	37	515	"	スリ	1	125×11	44	"	
								タタキ	2	21×13 19×9		"	
112-9	DB378	"	141	79	62	1063	"	スリ	1	96×38	46	"	
112-1	CY378	"	148	59	49	718	"	スリ	1	128×34	47	"	
112-5	CC377	"	140	58	51	537	"	スリ	1	111×22	48	"	
	CO386	"	128	83	46	704	"	スリ	1	71×10	49	"	
	CQ380	"	121	76	59	747	"	スリ	1	49×16	51	"	
112-3	CZ382	"	109	72	50	567	"	スリ	1	80×15	52	"	
112-7	DA382	"	176	69	65	1043	"	スリ	1	64×12	72	"	
113-2	CZ379	"	123	76	43	495	"	スリ	1	105×13	31	1稜割	
	CP378	III	170	68	56	824	"	スリ	1	153×26	39	"	
113-3	DC384	II	162	80	56	1082	砂	スリ	1	127×15	40	"	
113-1	DE379	"	160	70	43	785	安	スリ	1	140×21	41	"	
112-2	DB373	"	144	75	46	813	"	スリ	1	107×11	45	"	
113-4	DA374	IV	156	75	64	982	"	スリ	1	132×13	74	"	
112-6	DF375	II	128	69	47	537	"	スリ	2	112×32 55×24	54	2稜以上	

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	機能面		整理番号	分類	備考	
			長(■)	幅(■)	厚(■)	重(k)		痕跡	面				
113- 7	DD377	"	108	65	41	386	"	スリ	2	53×7 38×9	57	"	"
113- 8	CU385	"	112	58	41	366	"	スリ	2	58×14 78×14	60	"	"
113- 5	DA379	"	151	81	63	1159	"	スリ	2	119×19 118×19	73	"	"
	DA376	V	(94)	(86)	(42)	(454)	"				120	"	"
	CZ378	II	(143)	87	62	(1073)	凝				125	"	"
	C0377	II	(150)	85	55	(898)	安				126	I A	"
	DD380	"	(113)	75	(55)	(631)	"				127	"	"
	C0387	"	(100)	72	(56)	(418)	"				128	"	"
	381	"	(103)	(77)	(48)	(459)	"				129	"	"
	CX385	"	(90)	(65)	(49)	(428)	"				130	"	"
	CU382	"	(86)	(68)	(60)	(405)	"				131	"	"
	CN386	"	(93)	(82)	(65)	(676)	"				132	"	"
	CX379	"	(80)	(93)	(47)	(381)	"				134	"	"
	CU385	I	(75)	(75)	(48)	(400)	"				135	"	"
	CY384	II	(68)	(80)	(52)	(317)	"				136	"	"
	CZ384	"	(65)	(77)	(50)	(322)	"				137	"	"
	CD375	"	(68)	(69)	(47)	(272)	"				138	"	"
	CW382	"	(77)	(74)	(43)	(278)	"				139	"	"
	CI369	"	(60)	(65)	(52)	(236)	"				140	"	"
	CT381	"	(61)	(65)	(62)	(241)	"				142	"	"
	CN386	"	(85)	(60)	(33)	(256)	"				143	"	"
	CW387	"	(81)	(64)	(57)	(245)	"				144	"	"
	CS382	"	(61)	(71)	(40)	(203)	"				145	"	"
	DA382	"	(124)	50	39	(320)	"				146	"	"
	CN377	"	(82)	(70)	(58)	(338)	"				147	"	"
	DC377	"	(96)	(68)	(48)	(310)	"				148	"	"
	DE379	"	(58)	(62)	(29)	(173)	"				149	"	"
114- 2	DD377	"	92	75	33	346	"	スリ	1	68×13	27	I Ba	"
114- 3	CY384	"	93	66	38	291	"	スリ	1	69×20	29	"	"
							"	凹	1	19×10		"	"
114- 1	DA37?	"	91	71	39	395	"	スリ	1	59×23	66	"	"
	DC378	"	(61)	(55)	(25)	(128)	"				114	"	"
	DC378	"	(113)	93	36	(581)	"				123	"	"
	CW382	"	(72)	(77)	28	(184)	"				124	"	"
	DC374	"	125	73	35	489	"	スリ	1	98×15	30	I Bb	"
114- 4	DC378	"	101	68	30	295	"	スリ	1	70×19	32	"	"
114- 5	DB378	"	100	53	33	279	"	スリ	2	92×30 55×25	33	"	"
114- 8	CW386	"	100	55	23	205	"	スリ	2	82×15 43×6	34	"	"
114- 9	CR386	"	97	53	26	197	"	スリ	1	71×13	35	"	"
114- 7	DD375	"	97	61	25	253	"	スリ	2	81×17 30×7	36	"	"
114- 6	DD378	II	89	66	28	204	安	スリ	2	56×8 41×15	37	I Bb	"

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	機能面		整理番号	分類	備考	
			長(■)	幅(■)	厚(■)	重(k)		痕跡	面				
	CU384	"	113	61	28	306	"	スリ	2	67×8 91×16	91	"	"
115- 1	DD377	"	94	63	37	318	"	スリ	2	80×23 26×13	10	I Bc	"
	DC374	"	121	78	47	740	"	スリ	2	81×30 77×20	11	"	"
115- 3	DA379	"	120	77	36	577	"	スリ	2	85×20 63×14	12	"	"
114- 10	DC380	"	116	72	36	499	"	スリ	2	65×17 37×8	23	"	"
115- 2	DD378	"	106	64	32	324	"	スリ	2	37×5 42×11	24	"	"
115- 4	DD377	"	94	71	40	401	"	スリ	2	52×17 28×9	26	"	"
	CY382	"	123	85	39	597	"	スリ	2	68×13 96×35	67	"	"
	DC375	"	104	65	31	330	"	スリ	2	54×7 32×4	92	"	"
115- 8	DB398	IV	118	61	30	436	閃	スリ	2	88×21 89×20	13	I Bd	"
115- 5	CQ377	II	112	62	40	478	安	スリ	2	88×22 77×23	16	"	"
115- 10	DB377	"	109	60	33	360	"	スリ	2	69×19 62×18	17	"	"
115- 7	DF375	"	96	61	41	367	"	スリ	2	58×20 61×21	20	"	"
115- 6	CQ380	"	99	58	24	203	"	スリ	2	48×7 44×10	25	"	"
	DB377	"	124	89	48	851	"	スリ	2	48×17 71×21	53	"	"
115- 9	CU382	V a	116	87	64	939	"	スリ	2	54×26 49×27	55	"	"
	CO375	?	110	73	37	463	"	スリ	2	50×7 55×11	58	"	"
	DA376	?	109	70	43	544	"	スリ	2	72×28 78×28	59	"	"
116- 1	CJ314	II	110	74	44	566	"	スリ	2	70×23 74×22	4	I Bc	"
							"	タタキ	2	26×14 25×14		"	"
	CX383	II	107	84	54	783	"	スリ	2	58×27 53×31	15	"	"
	CY381	"	118	59	(35)	(325)	"	"			110	I B	"
	CW387	"	(81)	(56)	(37)	(286)	"	"			111	"	"
	CW387	I	(74)	(55)	(30)	(222)	"	"			112	"	"
	DC382	II	(48)	(56)	(41)	(173)	"	"			115	"	"
	CQ372	I	(112)	74	40	(558)	"	"			116	"	"
	CY382	"	(107)	66	(35)	(365)	"	"			117	"	"
	DC374	II	(121)	84	34	(587)	"	"			119	"	"
	DD380	"	112	59	(33)	(306)	"	"			121	"	"
	DB373	"	(54)	(66)	(30)	(150)	"	"			122	"	"
116- 2	DD378	"	135	41	19	147	"	"			96	I C	"
116- 3	CN378	"	107	34	13	80	"	"			97	"	"
116- 4	DD382	"	93	43	18	114	"	"			98	"	"
	DA398	"	72	45	28	116	"	"			100	"	"
116- 10	CP385	II	118	39	20	128	安	"			101	I C	"
116- 7	DA387	I	103	51	20	138	"	"			102	"	"
116- 5	DC378	II	92	46	16	87	"	"			103	"	"
116- 12	CS382	V a	86	25	23	60	流	"			104	"	"
116- 14	DA377	II	80	30	16	52	安	"			105	"	"
116- 13	CW384	II V	77	32	23	65	チャ	"			106	"	"
116- 8	DD377	II	66	39	21	75	安	"			107	"	"

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	機能面			整理番号	分類	備考
			長(㎜)	幅(㎜)	厚(㎜)	重(g)		痕跡	面	長×幅(㎜)			
116- 6	DB398	IV	(92)	(49)	(16)	(114)	"			99	"		
116- 9	DC378	II	(66)	(30)	(28)	(71)	"			108	"		
116-11	DD378	"	(63)	(23)	(14)	(26)	頁			109	"		
117- 9	DA375	V a	60	55	54	226	安			701	I D		
	DC381	"	57	54	52	219	"			702	"		
	CX384	II	56	54	48	201	"			703	"		
117-11	CO377	"	55	50	48	177	"			704	"		
	CP378	III	55	49	40	143	"			705	"		
117-12	CY381	II	53	49	43	159	"			706	"		
	DD384	"	53	47	42	127	"			707	"		
	DB383	"	51	48	43	135	"			708	"		
117-10	DD377	"	49	42	40	110	"			709	"		
	DD377	"	49	43	35	94	"			710	"		
	CX384	"	46	39	39	88	"			711	"		
	DA383	"	48	42	38	97	"			712	"		
	DD377	"	43	38	32	69	"			713	"		
117-15	CX384	"	40	38	35	69	"			714	"		
117-13	CX384	"	41	39	34	72	"			715	"		
	?	?	41	34	32	52	"			716	"		
117-14	DC380	I	40	38	32	63	"			717	"		
	CU385	"	39	38	36	68	"			718	"		
	CX384	II	56	52	48	196	"			721	"		
	DA378	"	61	48	34	136	"			722	"		
	DE382	"	63	51	34	163	"			723	"		
	CT387	I	62	53	47	209	"			724	"		
117- 8	378	II	66	62	54	268	"			725	"		
	CQ379	"	69	68	49	345	"			726	"		
	DE378	I	86	79	61	355	"			727	"		
116-18	CW385	II	93	70	57	460	安	スリ	2	67×50 57×32	9	I E	
117- 2	DD381	V a	108	74	65	688	"	スリ	3	64×49 68×57 64×48	56	"	
117- 1	CO377	II	110	80	64	809	"	スリ	1	72×55	68	"	
	DC378	"	114	69	65	724	"	スリ	1	56×39	69	"	
								タタキ	2	22×21 30×27	70	"	
116-15	CS382	"	99	79	68	706	砂	タタキ	1	39×29	70	"	
116-17	CZ382	"	94	74	53	581	安	タタキ	2	29×17 27×20	71	"	
	CW385	"	115	91	55	919	"	スリ	2	44×14 38×12	89	"	
116-16	CU386	"	103	91	55	745	"	タタキ	2	27×18 25×12	90	"	
117- 4	DC375	"	116	85	31	532	"	スリ	1	70×17	22	I F	
117- 3	CQ378	"	145	72	39	622	"	スリ	2	60×13 24×14	62	"	
117- 5	CX384	"	110	95	40	627	"	スリ	1	58×15	65	"	

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	機能面			整理番号	分類	備考
			長(㎜)	幅(㎜)	厚(㎜)	重(g)		痕跡	面	長×幅(㎜)			
117- 6	CR386	"	97	62	26	224	チャ					75	II A
	CR373	III	59	57	52	246	"					81	II B
	CZ378	II	63	59	50	265	砂					85	"
	DE375	"	74	65	37	238	安					94	"
	CY382	"	70	62	49	217	"					95	"
	DE377	"	66	60	60	343	チャ					149	"
	DA376	V a	66	55	42	228	"					150	"
	DD377	II	58	53	45	205	"					151	"
	DC373	"	60	51	41	184	"					152	"
	CO387	I	66	52	44	215	"					"	"
	CU384	II	76	58	34	200	"					77	II C
	CG382	"	78	51	39	250	"					78	"
	CS387	I	73	46	31	157	"					79	"
	CU386	II	73	54	36	219	"					80	"
117- 7	DC382	"	70	65	41	270	"					82	"
	CL376	V a	70	63	44	249	"					83	"
	DC380	II	97	70	50	463	"					93	"
	CO379	"	(83)	(68)	(19)	(151)	"					76	"
	DC380	I	(76)	(41)	(28)	(113)	"					"	"
	DC379	II	(60)	(57)	(43)	(191)	安					86	II
118- 2	DA379	"	165	99	46	828	"					1	III A
	CT381	"	126	117	54	971	"					2	"
	DE377	II	111	93	50	569	安					3	III A
	CL382	"	123	93	34	634	"					4	"
	DE377	"	121	98	50	886	"					5	"
	DA378	V a	115	89	45	672	"					6	"
118- 4	CT381	II	110	101	34	414	"					8	"
	DC378	"	129	73	31	458	"					9	"
118- 3	CR383	"	109	89	35	442	"					10	"
118- 7	CM372	"	105	71	29	271	"					11	"
118- 6	CU386	"	102	81	41	502	"					12	"
	CW387	V a	95	74	40	293	"					13	"
	CU386	II	111	73	35	400	"					14	"
	DC378	"	122	53	30	313	"					15	"
	DA373	"	115	57	28	191	"					16	"
	DA380	"	104	48	43	330	"					17	"
	CZ377	"	96	62	29	264	"					18	"
118- 1	CG369	"	165	78	54	958	"					114	"
	DE378	I	113	86	49	739	"					115	"
	DD379	II	94	80	53	553	"					116	"
	378	"	(111)	(85)	(39)	(345)	砂					77	"

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	機能面			整理番号	分類	備考
			長(→)	幅(→)	厚(→)	重(k)		痕跡	面	長×幅(→)			
	DA375	"	(90)	(79)	(64)	(611)	安				78	"	
	CR382	"	(101)	(73)	(34)	(346)	"				79	"	
	CY382	"	(106)	(80)	(40)	(399)	"				88	"	
	CZ378	"	(78)	(49)	(18)	(90)	"				89	"	
	DE375	"	(105)	(64)	(44)	(275)	"				91	"	
	CT387	I	(73)	(59)	(44)	(221)	"				127	"	
	CU381	II	218	(97)	(53)	(1320)	"				761	"	
	DB378	"	161	103	57	1194	"				19	III B	
119-1	CO377	"	143	100	77	1081	"				20	"	
119-5	DB378	"	128	95	60	636	"				21	"	
	DA380	"	102	97	43	614	"				22	"	
118-9	CW387	"	120	91	30	369	"				23	"	
	DC383	"	113	82	37	435	"				24	"	
118-5			106	92	35	374	"				25	"	
118-10	DB372	II	110	88	34	330	霰				26	"	
	CN376	"	116	91	49	580	安				27	"	
	CL376	II	119	80	35	325	"				28	III B	
	CO	I	110	73	53	466	"				29	"	
	DD381	Va	103	84	67	537	"				30	"	
	DA	II	105	72	38	262	"				31	"	
	DE377	"	95	87	28	344	"				32	"	
	CJ379	"	97	91	39	495	"				33	"	
119-6	DC378	"	97	74	49	407	"				34	"	
	DA379	"	113	87	31	373	"				35	"	
119-7	DA374	"	92	74	44	388	"				36	"	
	DB377	"	97	75	50	382	"				37	"	
	DA378	"	94	73	34	297	"				38	"	
119-4	CY381	"	90	74	28	279	"				39	"	
	DC378	"	89	79	52	336	"				40	"	
	CL381	"	82	74	40	251	"				41	"	
	CV386	"	76	72	30	196	"				42	"	
118-8	CU382	Va	78	68	24	156	"				43	"	
	CY381	II	70	58	29	150	"				44	"	
	DE375	"	64	47	36	144	"				45	"	
	CV385	I	59	51	45	163	"				46	"	
	CP385	II	180	80	56	1130	"				47	"	
	CT381	"	177	75	49	982	チャ				48	"	
	CR386	"	147	58	39	541	安				49	"	
119-2	DE377	"	130	68	44	492	"				50	"	
	CR389	"	118	63	42	311	"				51	"	
	CQ387	"	113	58	33	369	"				52	"	

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	機能面			整理番号	分類	備考			
			長(→)	幅(→)	厚(→)	重(k)		痕跡	面	長×幅(→)						
	CX383	"	113	64	27	277	"						53	"		
	CP387	Va	113	58	48	459	"							54	"	
	CQ382	II	119	56	47	336	"							55	"	
	DE375	"	116	45	20	165	"							56	"	
	CY381	"	111	63	31	166	"							57	"	
	CZ377	"	105	66	27	239	"							58	"	
	CN383	"	101	59	34	313	"							59	"	
	CW384	"	98	52	29	170	"							60	"	
	CZ377	"	97	62	35	272	"							61	"	
119-3	DB377	"	88	56	38	241	"							62	"	
118-12	CQ387	II	86	82	40	252	砂							63	III B	
	DC376	"	140	117	63	1065	安							117	"	
	DC378	IIIV	145	75	40	698	"							118	"	
	DC378	II	91	67	48	449	"							119	"	
	CU385	I	83	74	51	389	"							120	"	
118-11	CO384	II	57	56	29	105	"							276	"	
	CV381	"	(110)	(90)	(29)	(325)	"							75	"	
	DC378	"	(97)	(73)	(33)	(308)	"							81	"	
	DC379	"	(93)	(77)	(33)	(287)	"							83	"	
	CN376	"	(80)	(73)	(31)	(216)	"							90	"	
	DA378	"	(67)	(50)	(22)	(68)	"							106	"	
120-1	DA384	"	161	87	85	1053	"							64	III C	
	CY381	"	140	55	39	392	"							65	"	
	CU387	"	136	68	38	379	"							66	"	
	CW388	I	115	94	39	451	"							67	"	
120-2	DA377	II	115	83	33	478	"							68	"	
	CU384	"	92	78	48	452	"							69	"	
	CU387	"	102	58	62	469	"							70	"	
119-8	CX383	"	99	53	47	311	"							71	"	
	CY378	"	90	58	47	237	"							73	"	
	CZ378	"	117	82	58	853	"							121	"	
120-4	DD374	"	117	71	49	559	"							122	"	
120-3	DB372	Va	132	61	46	444	"							123	"	
	CL384	II	117	93	46	553	"							124	"	
	表採		79	54	30	134	"							128	"	
	DA379	II	(87)	(75)	(59)	(461)	"							82	"	
	CW387	Va	117	(99)	(39)	(507)	"							74	III	
	DC379	I	(94)	(90)	(66)	(544)	"							76	"	
	DC378		(138)	(65)	(29)	(320)	"							80	"	
	DF373	II	(93)	(57)	(33)	(257)	"							84	"	
	DC377	"	(82)	(57)	(32)	(152)	"							92	"	

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	機能面			整理番号	分類	備考	
			長(㎝)	幅(㎝)	厚(㎝)	重(g)		痕跡	面	長×幅(㎝)				
	CT387	"	(93)	(59)	(26)	(243)	"			93	"			
	CL381	"	(83)	(56)	(32)	(207)	"			95	"			
	CX380	"	(76)	(57)	(31)	(135)	"			96	"			
	DC383	"	(78)	(60)	(42)	(273)	"			97	"			
	DB378	II	(65)	(57)	(29)	(140)	安			98	III			
	CZ380	"	(83)	(46)	(29)	(167)	"			99	"			
	DA378	"	(60)	(56)	(32)	(129)	"			100	"			
	DD378	"	(68)	(44)	(30)	(98)	"			101	"			
	DE377	"	(100)	(54)	(29)	(166)	"			102	"			
	CP383	V a	(90)	(51)	(32)	(210)	"			103	"			
	DB380	II	(50)	(66)	(27)	(87)	"			104	"			
	CV384	"	(65)	(53)	(25)	(71)	"			107	"			
	DA381	"	(85)	(59)	(35)	(215)	"			108	"			
	CR386	"	(90)	(45)	(28)	(112)	"			109	"			
	DD380	"	(44)	(56)	(26)	(63)	"			110	"			
	DC380	"	(67)	(46)	(25)	(108)	"			111	"			
	DE374	"	(54)	(56)	(18)	(47)	砂			112	"			
122-6	DD378	"	115	73	50	746	"	スリ	2	82×32	87×33	1	IV	
							"	タタキ	2	61×34	61×32			
							"	凹	2	28×20	27×16			
							"			33×18	19×16			
	DC377	II	112	59	39	457	"	スリ	2	94×33	88×28	2	"	
							"	タタキ	2	42×16	37×16			
							"	凹	2	30×27	23×21			
							"			47×19				
121-4	DC378	II	108	55	40	423	"	スリ	2	91×32	69×25	3	"	
							"	凹	1	43×19				
122-5	DD378	II	109	69	50	601	安	スリ	2	70×26	69×25	5	"	
							"	タタキ	2	22×13	17×12			
							"	凹	1	16×9				
122-4	CN380	II	108	66	53	587	"	スリ	2	69×31	58×28	6	"	
							"	タタキ	2	20×13	16×14			
							"	凹	1	33×15				
121-3	DC376	II	102	55	38	386	"	スリ	2	89×31	78×28	7	"	
							"	凹	1	25×15				
121-5	DC377	II	97	63	42	409	"	スリ	1	73×34	69×32	8	"	
							"	凹	1	20×17				
121-1	DD379	II	117	61	33	411	"	スリ	2	102×23	82×15	14	"	
							"	凹	1	16×12				
121-2	CX381	II	106	61	38	396	安	スリ	2	86×28	69×20	18	IV	
							"	凹	1	18×16				

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	機能面			整理番号	分類	備考	
			長(㎝)	幅(㎝)	厚(㎝)	重(g)		痕跡	面	長×幅(㎝)				
121-6	CJ379	II	101	65	40	493	"	スリ	2	89×30	80×28	19	"	
							"	凹	1	22×9				
122-2	DE375	II	96	59	32	304	"	スリ	2	62×23	67×18	21	"	
							"	凹	1	20×13				
122-1	CU382	V a	146	70	52	734	"	スリ	2	93×42	113×42	43	"	
122-3	DB373	II	121	68	48	626	"	スリ	1	103×33		50	"	
							"	タタキ	1	15×12				
							"	凹	1	22×16				
	CN384	II	132	86	55	959	"	スリ	1	114×37		61	"	
							"	タタキ	1	23×14				
							"	凹	1	26×26				
121-7	DD377	II	126	88	60	1035	"	スリ	1	81×31		63	"	
							"	タタキ	2	53×35	52×21			
							"	凹	1	44×12				
	CR384	II	93	84	60	723	"					275	"	
	CO377	"	157	87	49	1063	"					752	"	
	DE379	"	(69)	(64)	(48)	(347)	"					113	"	
	CW384	"	(98)	(77)	(32)	(430)	"					118	"	
	CK382	"	(80)	(72)	(52)	(370)	"					753	"	
	DC378	"	(81)	(76)	(45)	(435)	"					754	"	
	DA373	"	(123)	(84)	(64)	(880)	"					755	IV	
	DA380	"	(125)	77	(55)	(774)	"					756	"	
	DD378	"	(87)	(50)	(31)	(145)	"					757	"	
	DC383	"	(88)	(60)	(31)	(273)	"					758	"	
123-2	DB383	"	64	64	41	238	チャ					84	V	
123-3	DD378	"	62	47	44	164	安					87	"	
123-5	CZ387	"	98	(79)	(28)	(203)	"					278	"	
123-6	CZ377	"	(87)	(90)	31	(366)	"					279	"	
123-4	DF375	"	(105)	(68)	(18)	(195)	"					501	"	
123-7	DF375	"	112	83	(27)	(250)	"					502	"	
123-1	CQ378	"	121	90	40	640	"					760	"	
	CM372	II	(83)	(60)	(51)	(348)	"					141	VI	
	CE372	"	(139)	(92)	(51)	(908)	"					試5	I A	IV-2区
	BY377	I	(77)	(78)	(51)	(364)	砂					133	I A	
	BG427	"	117	74	35	473	流					132	I Ba	
	BG412	V a	119	60	42	377	安					3	III C	
	BA425	I	103	62	51	371	"					72	"	
	AW400	I	(56)	(47)	35	(73)	砂					105	III	
	BA477	"	111	101	52	805	"					751	IV	
	BI423	II	87	78	24	240	流					713	VI	
	"	"	100	89	26	380	"					714	"	

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	機能面			整理番号	分類	備考	
			長(㎜)	幅(㎜)	厚(㎜)	重(g)		痕跡	面	長×幅(㎜)				
			93	78	23	279				715	"			
			87	69	22	196				716	"			
			91	79	24	257				717	"			
			79	71	19	175	安			718	"			
			91	87	32	386				719	"			
			76	68	20	171				720	"			
			81	65	20	154				721	"			
			98	77	25	291				試2	"			
149-7	BH144		90	60	41	207	安	スリ	1	95×11	19	I A	Ⅵ区	
149-4	"		113	71	44	431	"	スリ	1	61×7	20	"		
149-5	B T160	Ⅳ上	81	57	52	290	"	スリ	1	60×13	23	"		
148-7	B F162	Ⅱ	(76)	(60)	(67)	(340)	"				24	"		
	表採		(115)	(81)	(54)	(589)	"	スリ	1	100×27	"	"		
	B S156	Ⅲ下	(86)	(68)	(45)	(393)	"					D 2	"	
149-1	B J156	Ⅲ上	133	67	67	748	"	スリ	1	106×17		D 4	"	
								タタキ	1	19×14			"	
149-2	B S156	Ⅲ下	(79)	(62)	(43)	(251)	"					D 5	"	
148-8	B S156	表採	172	91	61	1143	"	スリ	1	113×11		"	"	
	B Q154	Ⅱ上	(99)	(68)	(57)	(460)	"					"	"	
149-3	B S156	表採	(99)	(60)	(34)	(261)	輝					"	"	
	B D181		(83)	(58)	(49)	(381)	安					I E	"	
149-6	B K156	Ⅱ	82	64	25	181	"	スリ	1	51×6		I F	"	
	B O156	Ⅱ	(79)	(71)	(34)	(216)	"					"	"	
148-9	B S157	Ⅳ上	(97)	42	41	250	チャ					Ⅱ C	"	
176-1	2 H	フ	115	63	54	625	安	スリ	2	66×36 39×13	302	I Bc	Ⅶ区	
176-3	"	床直	75	51	40	232	チャ	タタキ	1	40×19	307	Ⅱ C	"	
176-5	5 H	床直	141	87	48	914	安	スリ	1	88×24	308	I Ba	"	
176-4	5 H	床直	110	63	50	562	安	スリ	1	80×39	309	I Ba	"	
	7 H	フ	(128)	91	26	(458)	輝				312	I F	"	
176-6	8 H		85	62	34	289	安	凹	1	40×19	314	Ⅲ B	"	
176-8	9 H	ビ1	96	79	30	357	"	スリ	1	52×13	315	I Ba	"	
176-9	10 H	フ	109	62	41	455	"	スリ	2	85×19 89×21	316	Ⅳ	"	
								タタキ	2	43×25 39×27			"	
176-10	14 H	床直	138	89	51	871	"	スリ	1	89×12	318	I Ba	"	
	"	床直	131	74	43	694	"	スリ	1	90×29	319	I Bc	"	
176-12	"	床直	116	75	70	852	"	スリ	1	80×41	322	I E	"	
176-13	"		144	77	69	1092	"	スリ	1	64×14	320	I F	"	
176-11	15 H	床面	132	73	48	748	"	スリ	2	50×18 85×26	323	I Bc	"	
177-2	6 土	床直	68	56	20	106	"	スリ	1	65×49	325	I F	"	
177-5	17 土	フ	157	80	34	658	"	スリ	2	74×8 44×26	326	I Bc	"	
177-12	南①	I	124	75	27	444	"	スリ	2	75×14 44×8	404	I Bb	"	

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	機能面			整理番号	分類	備考
			長(㎜)	幅(㎜)	厚(㎜)	重(g)		痕跡	面	長×幅(㎜)			
177-7	南②	表	167	66	42	671	"	スリ	2	125×19 132×21	402	Ⅳ	
177-8	南②	I	(73)	(56)	(31)	(229)	"				408	"	
177-10	南①	表	101	88	32	464	"	凹	1	21×21	405	Ⅵ	

M類石皿・台石

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(㎜)	幅(㎜)	厚(㎜)	重(g)				
	1 H	床直	(121)	(51)	(37)	(186)	安	I	205	
	"	床面	(155)	(131)	(106)	(3100)	"	Ⅳ	838	ヤケ
	"	"	(197)	(145)	(118)	(3300)	"	"	839	
	2 H	"	228	(100)	(119)	(3900)	"	Ⅱ A	834	両面平坦
	"	床直	209	195	121	6700	"	Ⅳ	835	
10-8	3 H	"	(139)	(120)	(30)	(454)	凝	I B	208	
	"	Ⅲ	(268)	(146)	(122)	(4900)	安	Ⅳ	850	
	4 H	フ	(191)	(207)	(158)	(7600)	"	"	851	
	5 H	床面	(326)	(240)	(93)	(9400)	"	"	833	両面平坦、ヤケ?
	8 H	フ	(181)	(140)	(57)	(2100)	"	I B	212	
	9 H	フ	(150)	(84)	(73)	(1129)	"	Ⅳ	219	
	10 H		(98)	(72)	(19)	(191)	"	Ⅱ	222	
	13 H	床直	(120)	(100)	(37)	(453)	"	"	229	
	18 土	フ	361	114	87	6000	"	Ⅳ	852	
62-2	43 土	"	(97)	(72)	(17)	(175)	"	Ⅱ	244	
	67 土	"	(62)	(47)	(16)	(51)	"	I B	256	
	70 土	I	258	179	107	5500	"	Ⅱ A	831	片面平坦
	82 土 b	フ	274	228	75	5500	"	I B	832	片面凸
	"	"	(122)	(163)	(85)	(2200)	"	Ⅱ B	837	
	82 土	"	(94)	(59)	(80)	(756)	"	Ⅱ C	262	
	82 土 b	"	214	136	142	5000	"	Ⅳ	836	
	91 土	"	(161)	(112)	(49)	(1300)	"	I C	264	
	"	"	(416)	(158)	(90)	(8000)	"	Ⅳ	830	
	DE375	Ⅱ	(69)	(59)	(21)	(68)	"	I	277	
124-4	DE378	V a	(181)	(124)	(42)	(573)	凝	I A	2	
123-10	DE379	Ⅱ	(141)	(99)	(37)	(490)	"	"	5	表面に溝
	DA382	"	(140)	(79)	(36)	(367)	"	"	6	
	DC378	"	(122)	(79)	(24)	(174)	"	"	7	
	CU384	"	(93)	(84)	(33)	(249)	"	"	12	
	DD378	"	(80)	(66)	(34)	(158)	"	"	14	
	DB376	"	(55)	(57)	(20)	(63)	"	"	23	
66	8 配		486	291	69	13300	安	I B	862	
124-1	DB378	Ⅱ	(193)	(119)	(51)	(1146)	"	"	1	
123-12	C N387	"	(126)	(67)	(23)	(157)	砂	"	8	有溝
	DE379	"	(123)	(80)	(45)	(369)	凝	"	9	表面有溝

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
123-11	CR382	II	(128)	(80)	(25)	(251)	凝	I B	10	
123-8	DE383	"	(89)	(54)	(32)	(189)	"	"	13	有溝
123-9	DE380	I	(75)	(59)	(34)	(171)	砂	"	15	有溝
	CW387	Va	(81)	(53)	(25)	(81)	"	"	17	
	CY387	II	(157)	(88)	(57)	(810)	安	"	803	
	DD378	"	(173)	(146)	(51)	(1960)	"	"	805	
	CW384	"	(110)	(103)	(35)	(390)	"	"	809	
	CS381	"	(179)	(128)	(57)	(1630)	"	"	816	
124-3	CY381	カズラン	(147)	(146)	(40)	(692)	凝	I c	4	有溝
	CD382	IV	(81)	(80)	(28)	(249)	"	"	11	
	CW382	II	(102)	(98)	(36)	(660)	安	"	807	
	DD378	"	(142)	(123)	(28)	(720)	"	II A	810	
	DD381	"	(171)	(107)	(94)	(1940)	"	"	825	
	DA377	"	(181)	(118)	(50)	(1550)	"	"	829	
	CY382	II IV	320	246	95	3600	"	"	840	
	DA382	"	(271)	(241)	(126)	(11200)	"	"	841	
	DD378	"	(427)	(264)	(67)	(10200)	"	"	842	
	DD378	"	(265)	(169)	(82)	(5200)	"	"	844	
	CW382	II	(130)	(116)	(102)	(2050)	"	"	855	
	DA379	II IV	(142)	(163)	(104)	(2800)	"	"	856	
	DC380	I	(228)	(117)	(215)	(7500)	"	"	858	
125-1	CQ380	II	(193)	(169)	(69)	(2670)	"	II B	21	両面凹多数
	DD377	"	(224)	(164)	(52)	(2340)	"	"	20	凹
124-5	DA383	"	(130)	(133)	(44)	(811)	"	"	22	有溝
	DC378	"	(138)	(105)	(37)	(820)	"	"	802	
	DC378	"	(229)	(111)	(65)	(1700)	"	"	817	
	CR386	"	(124)	(117)	(46)	(980)	"	"	820	
	DA377	"	(238)	(141)	(50)	(1110)	"	"	822	
	DC377	II	(136)	(115)	(73)	(1600)	"	"	824	
	DD378	"	(282)	(118)	(32)	(1780)	"	"	827	
	DD377	"	(107)	(100)	(39)	(660)	"	"	828	
	DD377	II IV	247	234	76	7600	"	"	845	両面平坦片面スリ
	DD380	"	(194)	(127)	(93)	(2000)	"	"	859	
125-2	DD373	II	(175)	(152)	(77)	(1400)	"	III		
	DC377	"	(107)	(75)	(40)	(245)	凝	IV	16	
	DE377	II	(68)	(59)	(47)	(162)	凝	IV	18	
	CO373	"	(57)	(32)	(24)	(24)	"	"	19	
	DC374	"	(94)	(76)	(38)	(250)	安	"	801	
	DA378	II	(134)	(115)	(55)	(1380)	"	"	804	
	DC380	I	(147)	(122)	(56)	(1450)	"	"	806	
	DA382	"	(143)	(99)	(50)	(930)	"	"	808	

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
	CW382	"	(132)	(117)	(50)	(1120)	"	"	812	
	CW382	"	(102)	(100)	(58)	(690)	"	"	813	
	DC377	II	(139)	(98)	(78)	(1480)	"	"	814	
	CU381	"	(133)	(130)	(57)	(1460)	"	"	815	
	DD377	"	(119)	(58)	(118)	(1100)	"	"	818	
	CT383	III	(109)	(106)	(46)	(750)	"	"	819	
	DC378	II	(132)	(119)	(66)	(1290)	"	"	821	
	CY382	"	(190)	(188)	(78)	(4000)	"	"	823	
	CY382	"	(149)	(91)	(58)	(1060)	"	"	826	
	DA372	"	(249)	(185)	(92)	(4900)	"	"	843	
	CW382	II IV	(183)	(103)	(85)	(2040)	"	"	853	
	DD377	"	(156)	(124)	(105)	(3000)	"	"	860	
	CP378	III	324	121	96	4800	"	"	861	
124-2	BA425	I	(154)	(101)	(43)	(795)	"	I B	3	
	BC387	"	(146)	(90)	(63)	(730)	"	II	試4	
	BY377	II	(132)	(81)	(42)	(632)	"	II B	#6	
	C?374	"	(206)	(106)	(46)	(1390)	"	"	#7	
	AQ377	IV	(242)	(195)	(53)	3140	"	"	#12	
	CE370	II	(52)	(48)	(18)	(72)	"	II C	#8	
	CE370	"	(50)	(29)	(16)	(33)	"	"	#9	
	BY382	"	(33)	(29)	(30)	(46)	凝	"	#10	
	BA424	"	(167)	(118)	(36)	(820)	安	IV	811	
176-2	1H	"	(265)	(224)	(129)	(8500)	"	II A	847	
	2H	垂直	(247)	(158)	(44)	(4400)	"	II B	303	
	2H	I	(79)	(56)	(76)	(710)	"	"	305	
	13H	"	(323)	(108)	(74)	(2500)	"	"	317	
	2H	I	(85)	(54)	(22)	(103)	"	II C	306	
	14H	II	(64)	(56)	(19)	(95)	"	"	321	
	1H	床下	(122)	(122)	(58)	(1079)	"	IV	301	
	1H	床面	(268)	(198)	(110)	(79)	安	IV	846	
	2H	床直	(153)	(93)	(65)	(1096)	"	"	304	ヤケ
	3H	"	(335)	(154)	(153)	(8600)	"	"	848	炉石、ヤケ
	5H	"	(272)	(170)	(93)	(5600)	"	"	310	
	7H	フ	(89)	(83)	(22)	(93)	"	"	311	
177-1	6土	床直	(268)	(101)	(53)	(1900)	"	"	324	
	南◎	"	(298)	(193)	(57)	(4300)	石斑	I B	410	
	南◎	表	(222)	(167)	(43)	(2380)	安	II A	401	
177-11	北◎	"	(146)	(69)	(37)	(677)	"	IV	403	

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)				
6点	DD380	CY387								
4 "	DC378	DE379								
3 "	DC382	DD378 DE375								
2 "	CM372	DA379 DB383 DC374 DC377 DD377 DE313 DE377 CK370								
1 "	CN376	CO387 CP387 CQ372 CQ382 CR382 CR386 CS387 CU387								
	CW382	CY382 CZ380 CZ384 DA380 DA381 DB378 DC375 DC386 CG371 CK371								

N類 軽石

—1	DB373	IV	147	58	22	114	軽	I	1	
3	CW382	"	88	51	20	27	"	II	2	
2	CO375	"	33	45	15	9	"	II	3	
7	26土	フ	73	42	20	15	"	III	4	
4	CV387	IV	70	73	32	32	"	III	5	破損品
12	6土	フ	81	53	21	16	"	III	6	"
5	7土	"	53	83	12	13	"	III	7	
9	26土	"	180	103	36	89	"	III	8	
6	DC379	IV	89	80	40	55	"	III	9	破損品
11	DA378	IV	47	46	12	7	"	III	10	"
8	37土	フ	47	35	16	8	"	III	11	"
10	DC376	IV	95	84	50	54	"	IV	12	
	11土	フ	54	85	29	22	"	V	13	
	CR382	IV	126	65	41	55	"	III	14	
	DD383	IV	82	37	20	13	"	III	15	
	10H	フ	66	55	28	18	"	V	16	
	CX381	IV	43	71	24	12	"	III	17	
	DC380	IV	69	64	19	20	"	V	18	

O類 円盤状石製品

図版	出土地点	層	最大計測値			石質	整理番号	備考
			長径×短径(mm)	厚(mm)	重(g)			
図一	表深		47×44		13	48	安	18

P類 有孔石製品

図版	出土地点	層	最大計測値		石質	整理番号	備考
			径(mm)	重(g)			
図一	67土	覆土	22×21×22		玉	1	

R類 石棒

	表深		(147)	(118)	(97)	(1800)	安	R	849
	CW382	II V	(171)	138	84	(2200)	"	"	854
	DB378	II	(163)	(149)	(128)	(3040)	"	"	857

S類 石刀(石剣)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	整理番号	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
図一	DA379	IV	58	21~26	10	22	粘	1	
U類 その他の石製品									
図一	BA427	I	104	71	25	310	安	1	

石器一覧表の()内は破損品

円盤状土製品 ()は残部計測値

整理番号	図版	グリッド	層位	大きさ mm		重量 g	備考
				長径×短径	厚さ		
1	128図-1	DC 383	IV	33×30	5	7.5	
2	-2	DD380	"	57×50	7	26	
3	-3	DA384	"	39×34	7	12.5	
4	-4	CS387	"	41×34	6	11	
5	-5	DC383	"	41×36	5	9	
6	-6	表採		31×24	5.5	5.5	
7	-7	DC378	IV	25×25	7~9	7.5	
8	-8	DB377	"	32×27	5	7	
9	-9	DC378	"	37×34	6	10.5	
10	-10	DC378	"	52×50	6	23	
11	-11	DC378	"	35×33	8	12.5	
12	-12	DB375	"	43×43	8	17.5	
13	-13	DB377	"	33×32	6	7.5	
14	-14	DC375	"	32×31	7	9	
15	-15	DC378	"	39×36	6.5	11	
16	-16	CZ379	"	33×31	7	9	
17	-17	DC378	"	36×35	8	15	
18	-18	DD378	"	41×37	8	17.5	
19	-19	CO378	"	38×37	6	14	
20	-20	CZ387	"	36×34	6	10	
21	-21	DD380	"	48×45	6	20	
22	-22	DD380	"	45×37	7	17	
23	-23	DC383	"	37×37	9	16	
24	-24	DC383	"	46×34	9	19	
25	-25	表採		30×(28)	7	8	破損品
26	-26	DA375	Va	32×(22)	7	7.5	"
27	-27	DA375	IV	39×37	7	13	
28	-28	表採		38×(26)	7.5	10.5	破損品
87	-29	CR383	IV	39×37	6	10	
48	-30	DC378	"	43×36	9	20	
51	-31	DF378	"	36×34	7	13	
57	-32	127土	フク土	34×27	7	9	
58	-33	"	"	43×(24)	8	10	破損品
60	-34	25土	"	34×32	8	11	
61	-35	40土	"	42×42	7	18	

整理番号	図版	グリッド	層位	大きさ mm		重量 g	備考
				長径×短径	厚さ		
62	128図-36	DB381	IV	27×27	6	5.5	
63	-37	98土	フク土	36×33	6	9	
64	-38	114土	"	30×28	7	7	
65	-39	52土	"	38×38	7	13	
67	-40	CN382	IV	49×48	7	24	
69	-41	DB378	"	32×31	7	7	
70	-42	DC379	"	54×49	6	19	
71	-43	CZ384	"	46×42	6.5	17	
77	-44	DA378	"	37×35	6	9.5	
80	-45	CR383	"	47×45	7	17	
29	-46	CP386	"	41×38	5	13	
30	-47	DE380	"	37×32	6	11	
32	-48	CS387	"	36×34	6	10	
33	-49	DC378	IV	38×37	7	10	
31	129図-50	CU387	Va	41×37	7	13	
78	-51	CL384	IV	39×34	5.5	9	
34	-52	DD379	"	33×28	5	7	
54	-53	CQ382	"	52×45	7	25	
55	-54	CM375	"	36×(22)	7	7	破損品
56	-55	CO387	"	43×(26)	8	11	"
59	-56	127土	フク土	44×40	13	18.5	
35	-57	CO377	IV	42×41	8	19	
36	-58	CX383	"	42×39	4.5	10	
37	-59	DE379	"	41×31	5	10	
38	-60	CR385	"	34×34	5.5	10	
43	-61	DB378	"	33×32	7.5	11	
39	-62	DB379	"	38×33	6.5	11	
40	-63	CZ379	"	41×(27)	7.5	11	破損品
41	-64	表採		26×21	5	4.5	
42	-65	DE378	IV	37×32	6	10.5	
44	-66	DD377	"	45×42	7	19	
45	-67	DA377	"	35×35	9	14	
46	-68	3H	フク土	32×31	12.5	16	
47	-69	DD377	IV	41×37	7	14	
49	-70	CU386	"	38×36	10	18.5	
50	-71	DB378	"	34×33	7	11	
52	-72	DC378	"	34×34	11	17.5	

整理番号	図版	グリッド	層位	大きさ mm		重量 g	備考
				長径×短径	厚さ		
53	129図-73	DF 379	IV	32×32	8	10	破損品
66	-74	30土	フク土	31×30	8	9	
73	-75	DC377	IV	46×38	7.5	16.5	
74	-76	CL381	"	44×(35)	6	14	
75	-77	CP381	"	36×35	7	11	
76	-78	CV387	Va	34×34	7	11	
79	-79	DC384	IV	40×39	5	11.5	
81	-80	表採		21×18	7.5	4	
82	-81	CO377	IV	28×27	5.5	5	
83	-82	CX380	Va	41×38	11	15.5	
84	-83	CK369	IV	35×34	8	11	
85	-84	CR384	"	36×34	6	8	
86	-85	117土	フク土	37×37	6	12	

三角形土製品

整理番号	図版	グリッド	層位	大きさ mm		重量 g	備考
				3辺の長さ	厚さ		
103	129図-86	CO 380	IV	37×35×36	6	5	
100	-87	CR383	"	46×44×47	7	12	
101	-88	CP381	"	41×47×40	8	10	
102	-89	11H	フク土	43×43×37	7	8	

鐔形土製品

整理番号	図版	グリッド	層位	大きさ mm		重量 g	備考
				長径×短径	高さ		
6	130図-1	DC377	IV	26×25	54	32	破損品
8	-2	DC378	IV	44×32	68	51	
9	-3	DB378	IV	46×29	64	70	
10	-4	DC378	IV	(35)×(13)	63	46	
5	-5	DC383	IV	(58)×(36)			
13	-6	CM374	IV	(33)×(30)	63	20	
14	-7	DD377	IV			5	
18	-8	DD377	IV	(21)×(17)		10	
15	-9	表採				23	
17	-10	DD376	IV	30×27		34	
7	-11	DC378	IV	(30)×(21)	48	24	
1	-12	CY377	IV	32×30		23	

整理番号	図版	グリッド	層位	大きさ mm		重量 g	備考	
				長径×短径	高さ			
12	130図-13	DC378	IV			14	破損品	
4	-14	DD379	IV			5	"	
11	-15	DA375	IV			10	"	
16	-16	DC378	IV			(53)	11	"
3	-17	CY382	IV			(37)	10	"
2	-18	DC378	IV				10	"

土器片鏝

図版	出土グリッド	層位	大きさ mm		重量 g	部位	備考
			長軸×短軸	厚さ			
131図-10	CN385	IV	78×45	9	33	口縁部	羽状縄文
-11	CN384	I	71×51	10	41	"	"
-12	CN385	IV	67×54	9	30	"	結束1種 羽状縄文
-13	CN385	"	57×47	10	30	"	"
-14	CN385	"	72×52	10	33	胴部	斜縄文
-15	CN385	"	75×52	9	34	"	"
-16	CN385	"	(53)×56	10	25	"	"
-17	CN385	"	(34)×47	9	10	"	"
-18	CN385	"	(36)×47	9	12	"	羽状縄文
-19	CN385	"	(25)×53	8	8	"	斜縄文

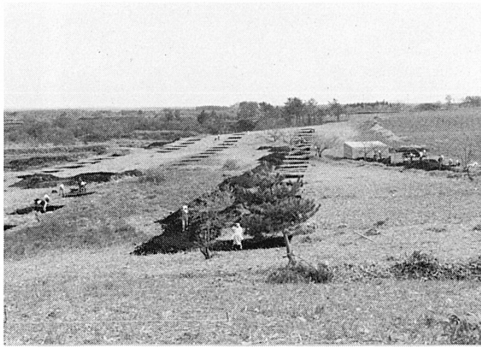
写 真 图 版



IV区遠景(西→東)



IV-1区近景



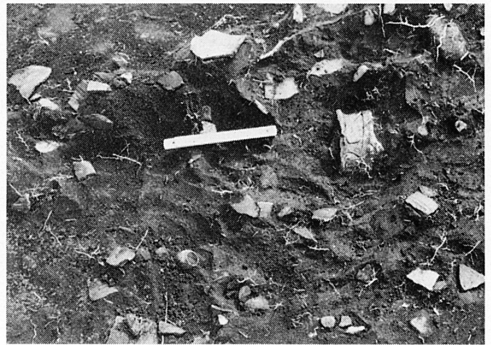
IV-2区近景(北→南)



IV-1区作業風景



IV-1区遺物出土状況



IV-1区遺物出土状況



IV-1区遺物出土状況(第179図参照)



IV-1区遺物出土状況

PL. 1/ IV区



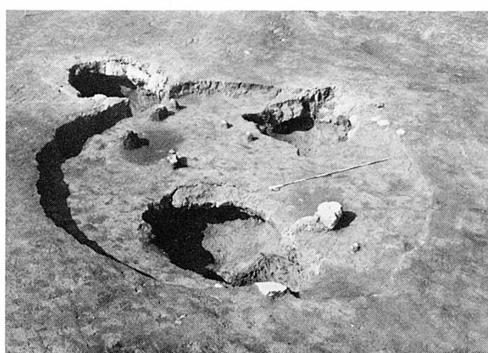
1号住居跡



1号住居跡炉



2号住居跡

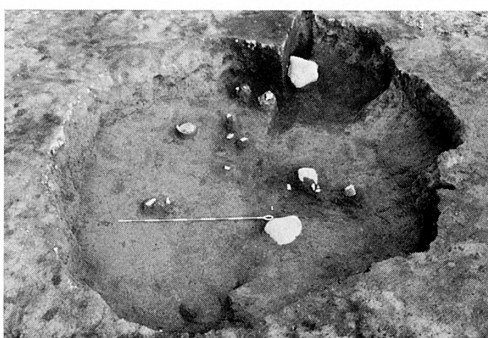


4号住居跡

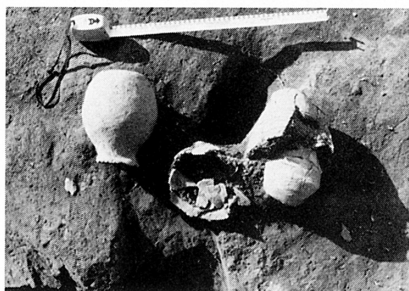


11号住居跡

9号住居跡



5号住居跡

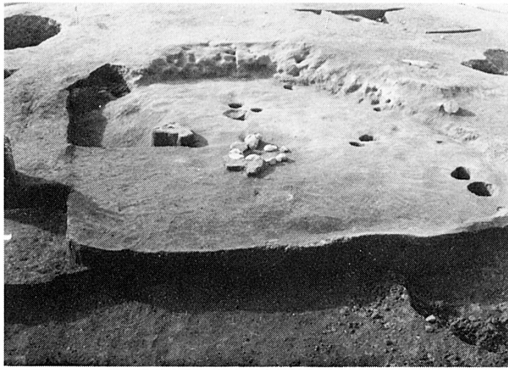


9号住居跡遺物出土状況



13号住居跡

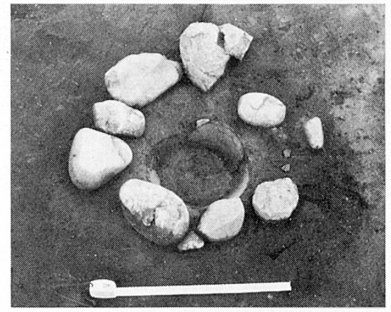
PL. 2 IV-1区 検出遺構



10号住居跡(左上)

同 炉(右上)

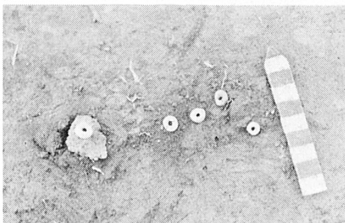
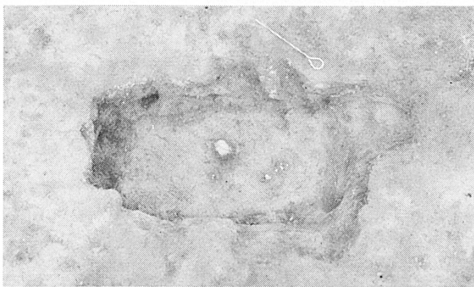
同 出器出土状況(右下)



IV-1区検出遺構群(東→西)



IV-1区検出遺構群(西→東)



4号土壇(上)、遺物出土状況(下)

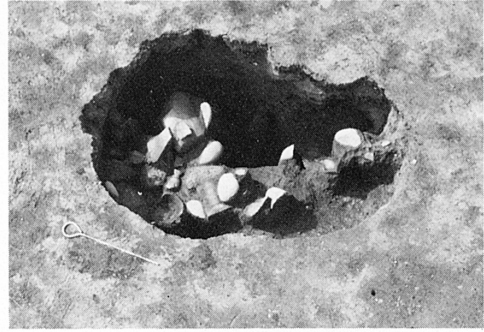


7号(上)・8号(下)土壇

PL. 3 IV-1区 検出遺構



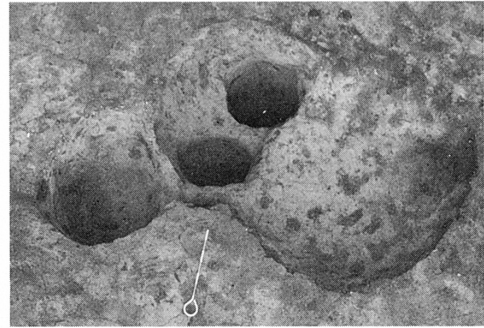
18(a-右,b-左)号土坑



26号土坑



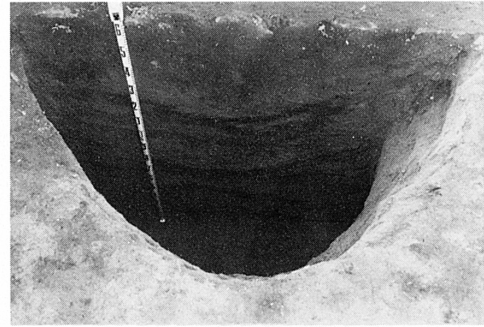
26号土坑



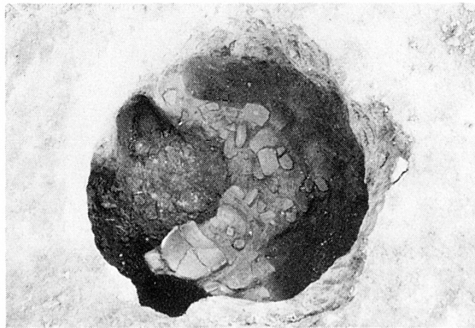
53号土坑



67号土坑



68号土坑(セクション)

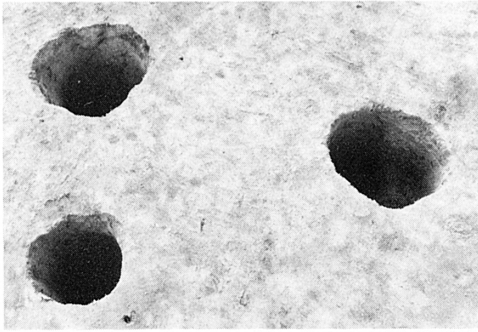


73号土坑



78(右)・86(左)号土坑

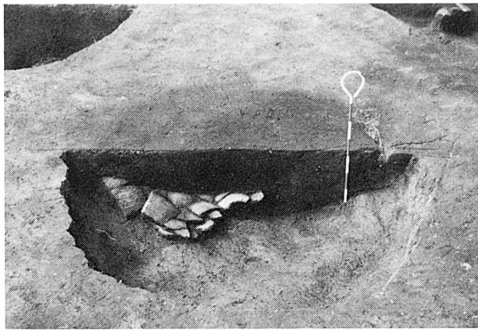
PL. 4 IV-1区 検出土坑



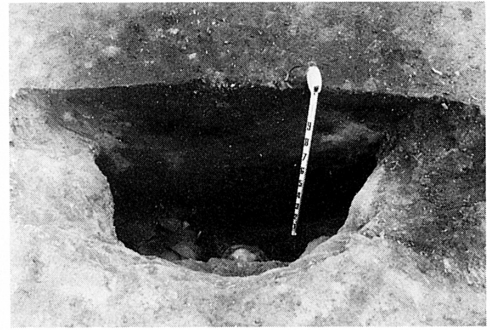
88(左上)・90(左下)・93(右)号土壙



97号土壙



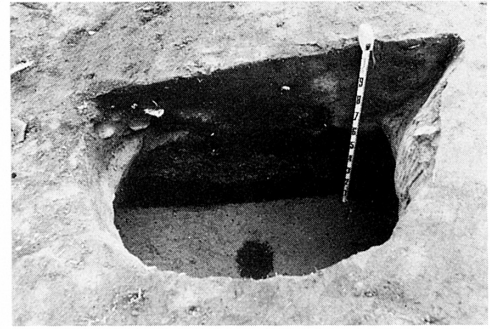
101号土壙(セクション)



112号土壙(セクション)



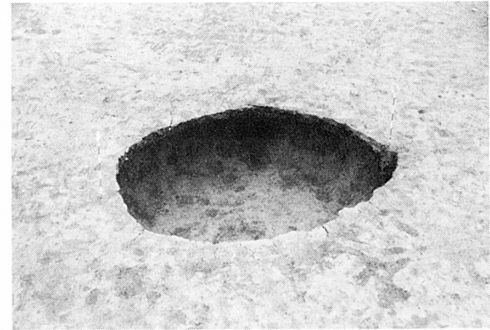
113(左)・115(a-右下、b-右上)号土壙



127号土壙(セクション)



Ⅳ-2区土壙検出状況



Ⅳ-2区検出土壙

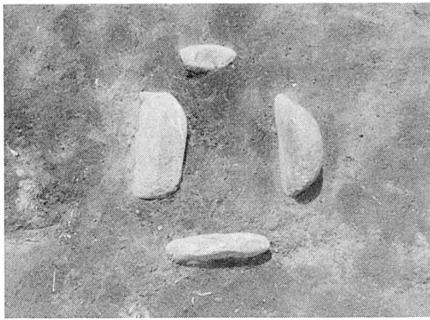
PL. 5 Ⅳ-1・Ⅳ-2区 検出土壙



配石群近景



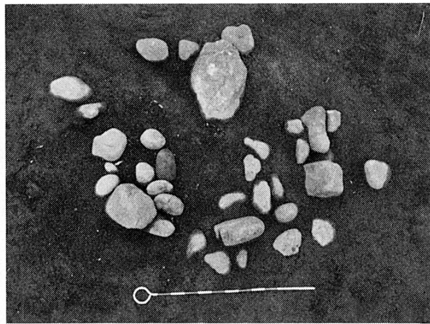
第1号配石



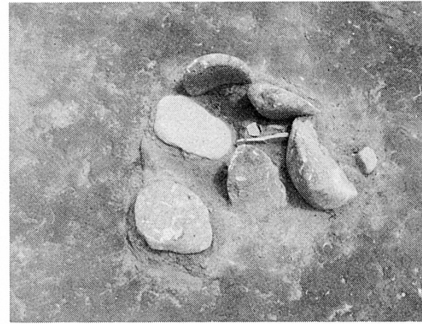
第5号配石



第1号配石断面



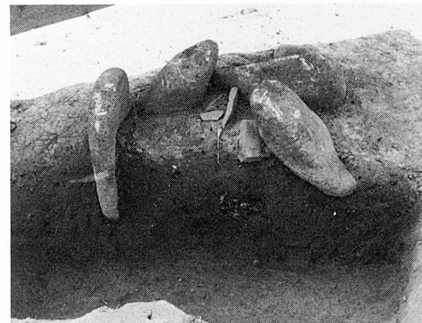
第7号配石



第8号配石

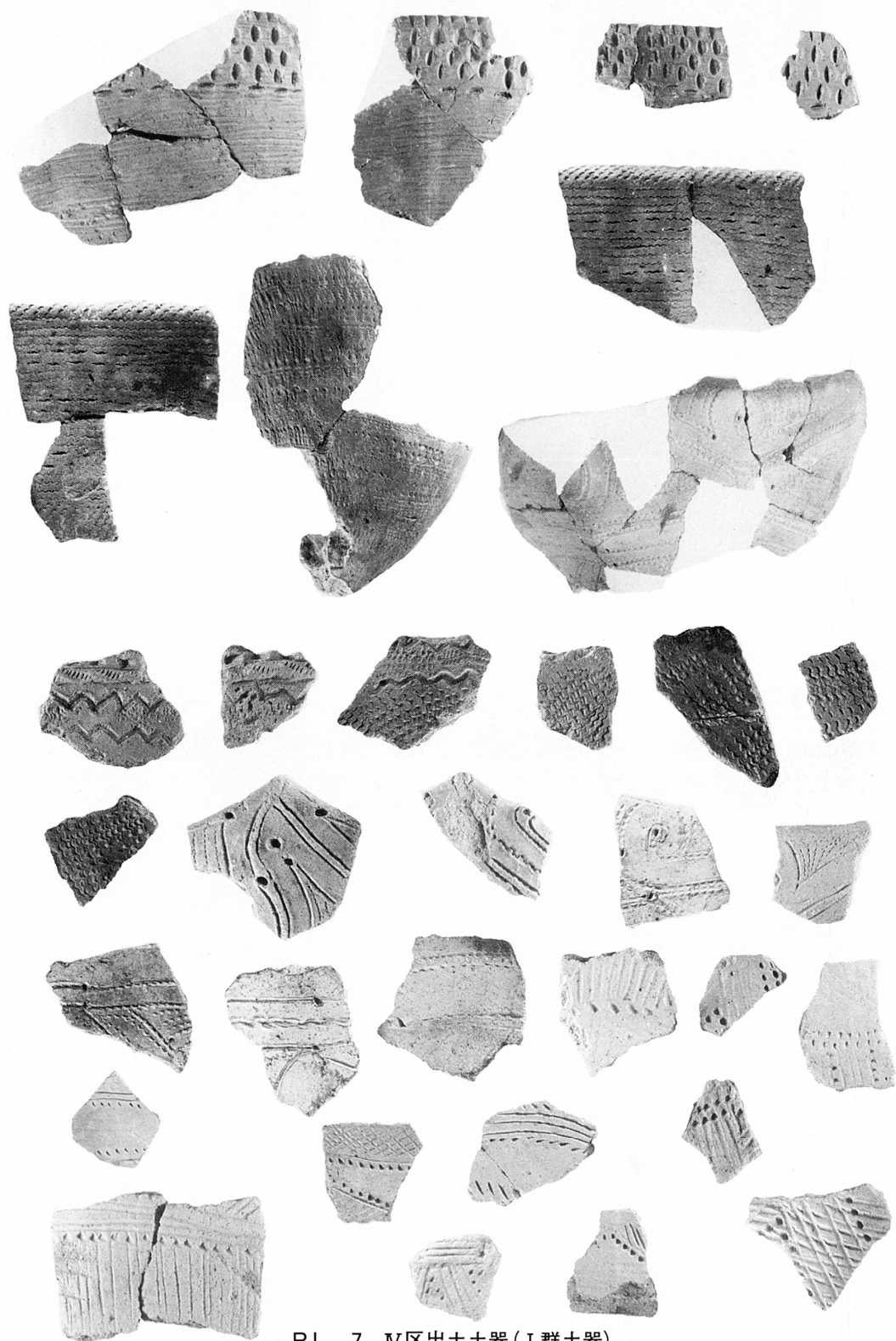


第9号配石

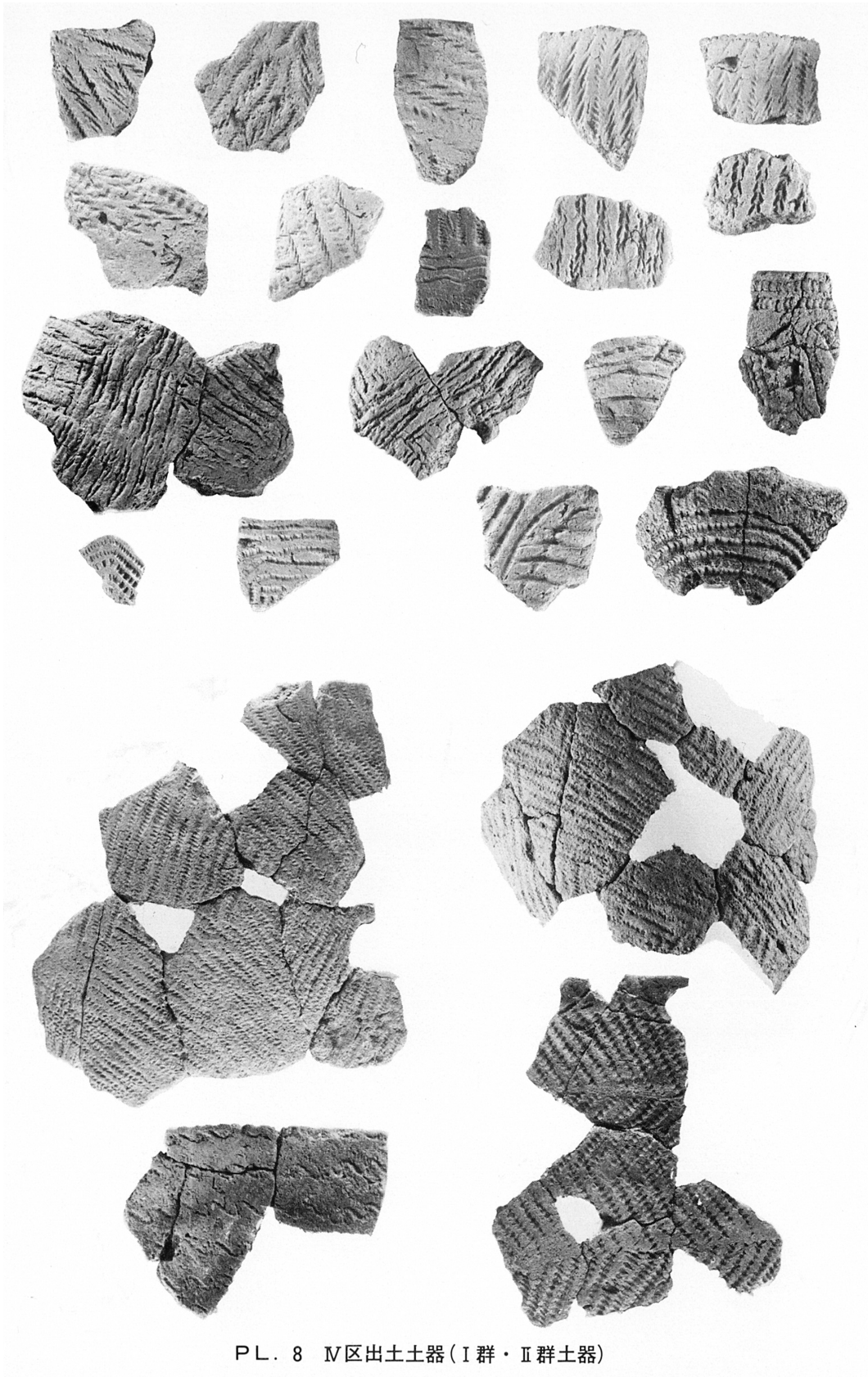


第8号配石断面(左端は石皿)

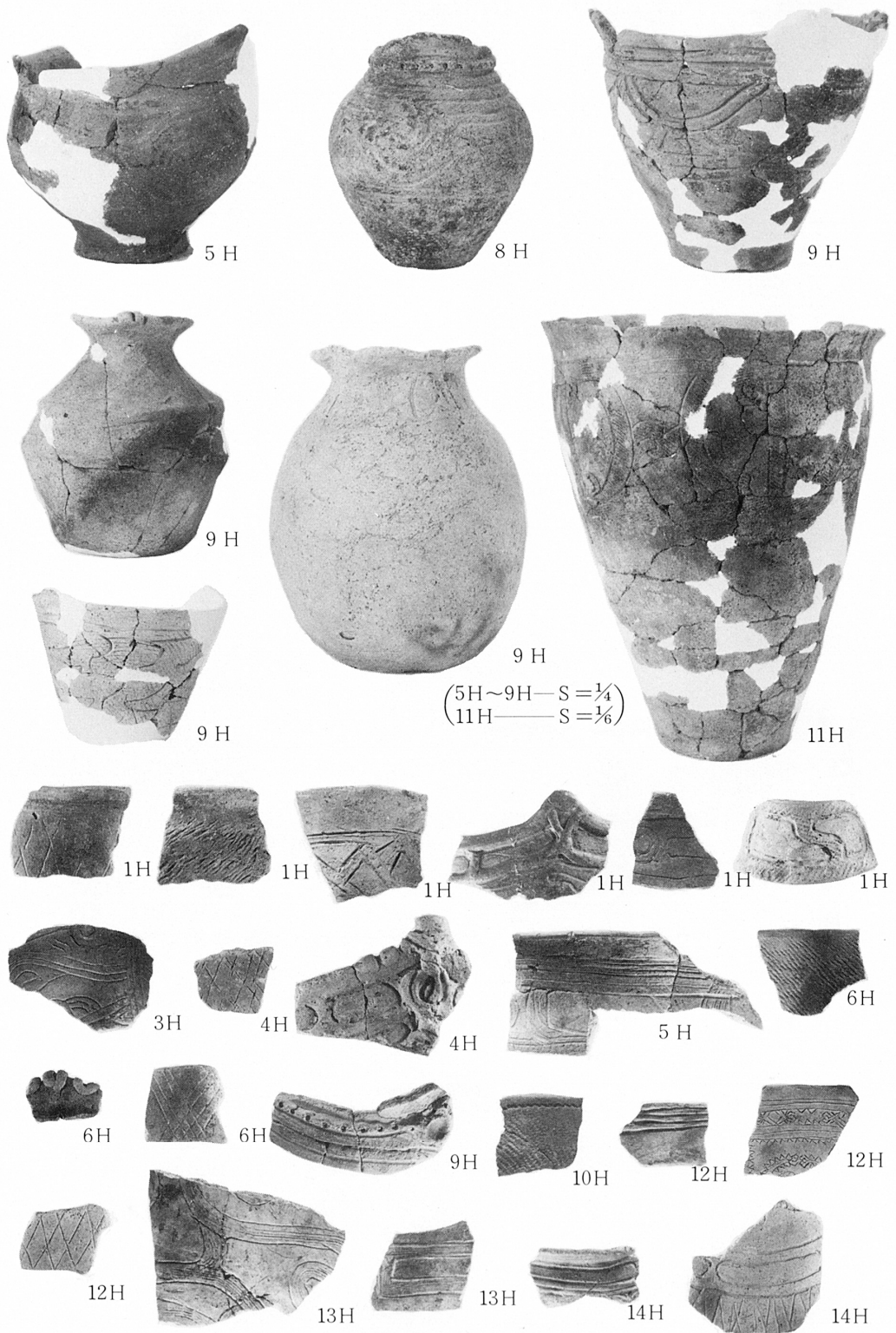
PL. 6 IV-2区 検出遺構(配石)



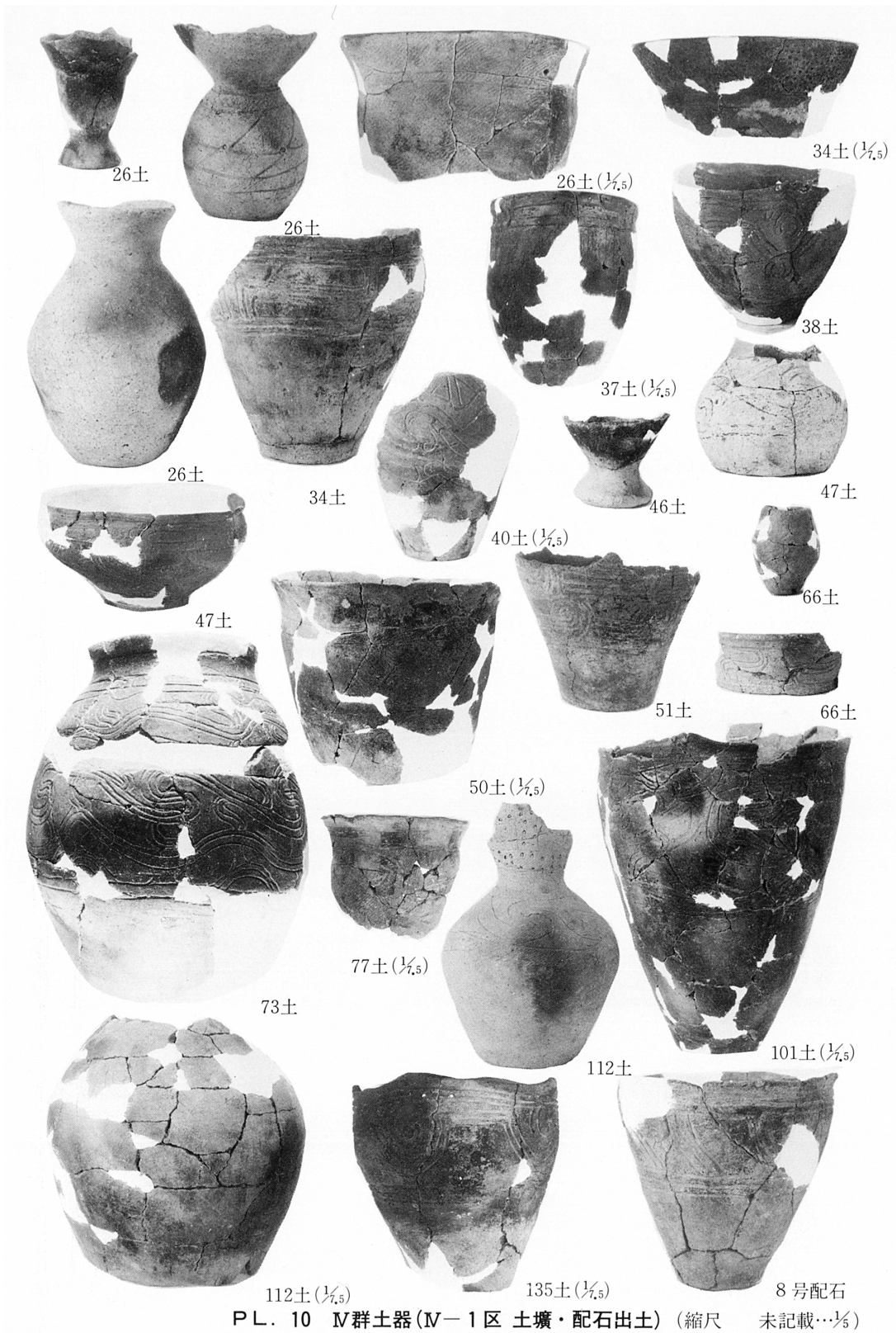
PL. 7 IV区出土土器(I群土器)



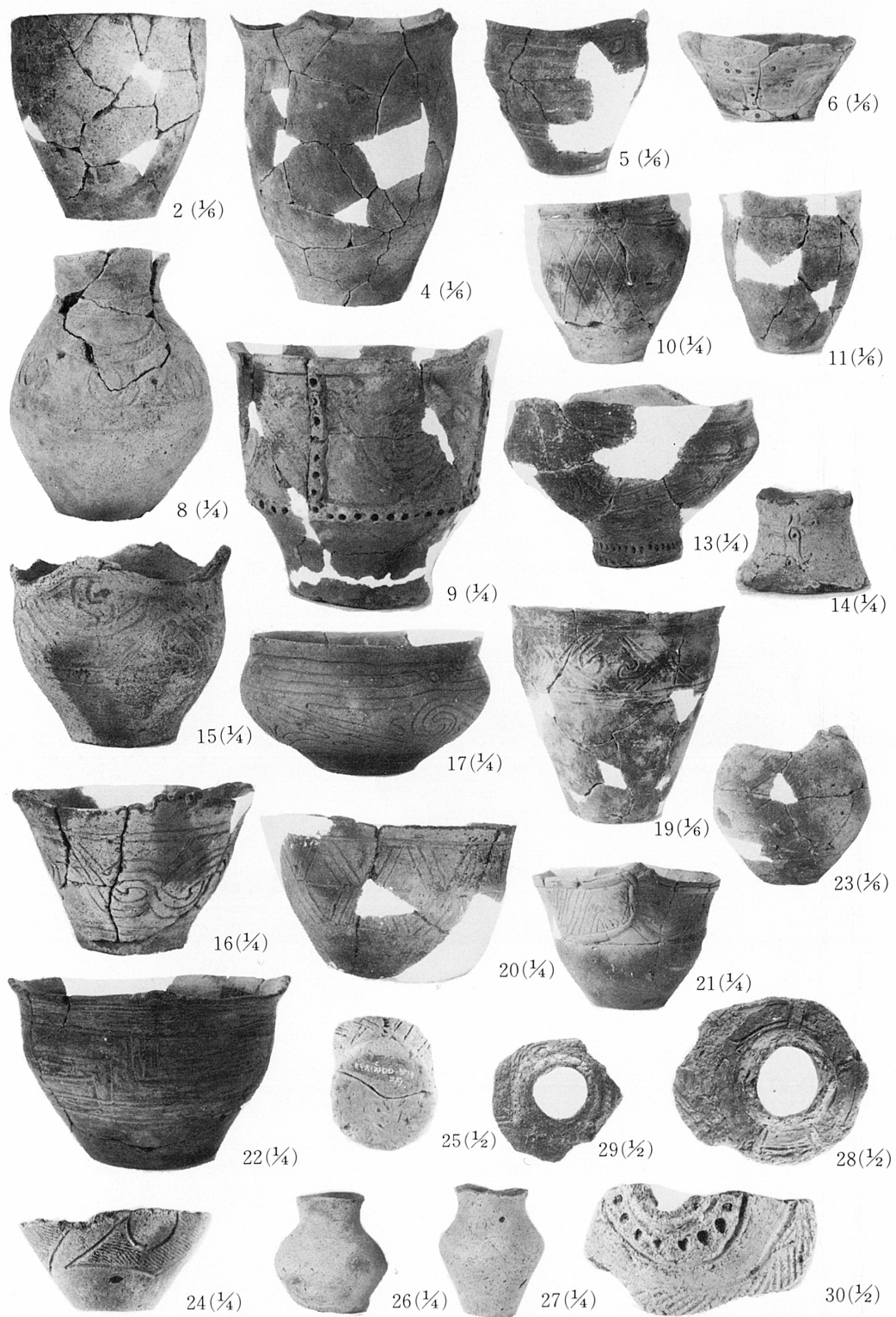
PL. 8 N区出土土器(I群·II群土器)



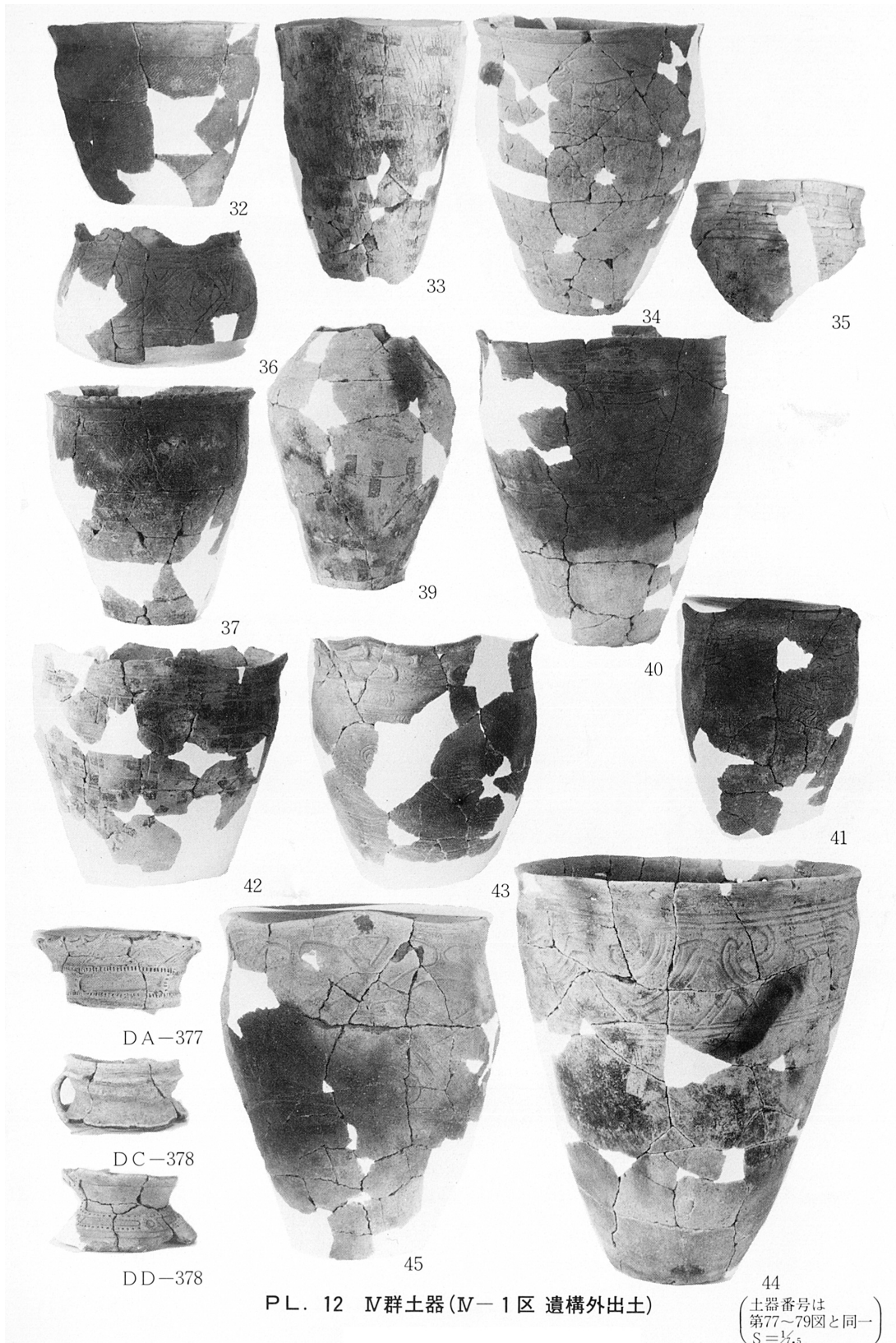
PL. 9 IV群土器 (IV-1区 竖穴住居跡出土)



PL. 10 IV群土器(IV-1区 土壙・配石出土) (縮尺 未記載...1/2)



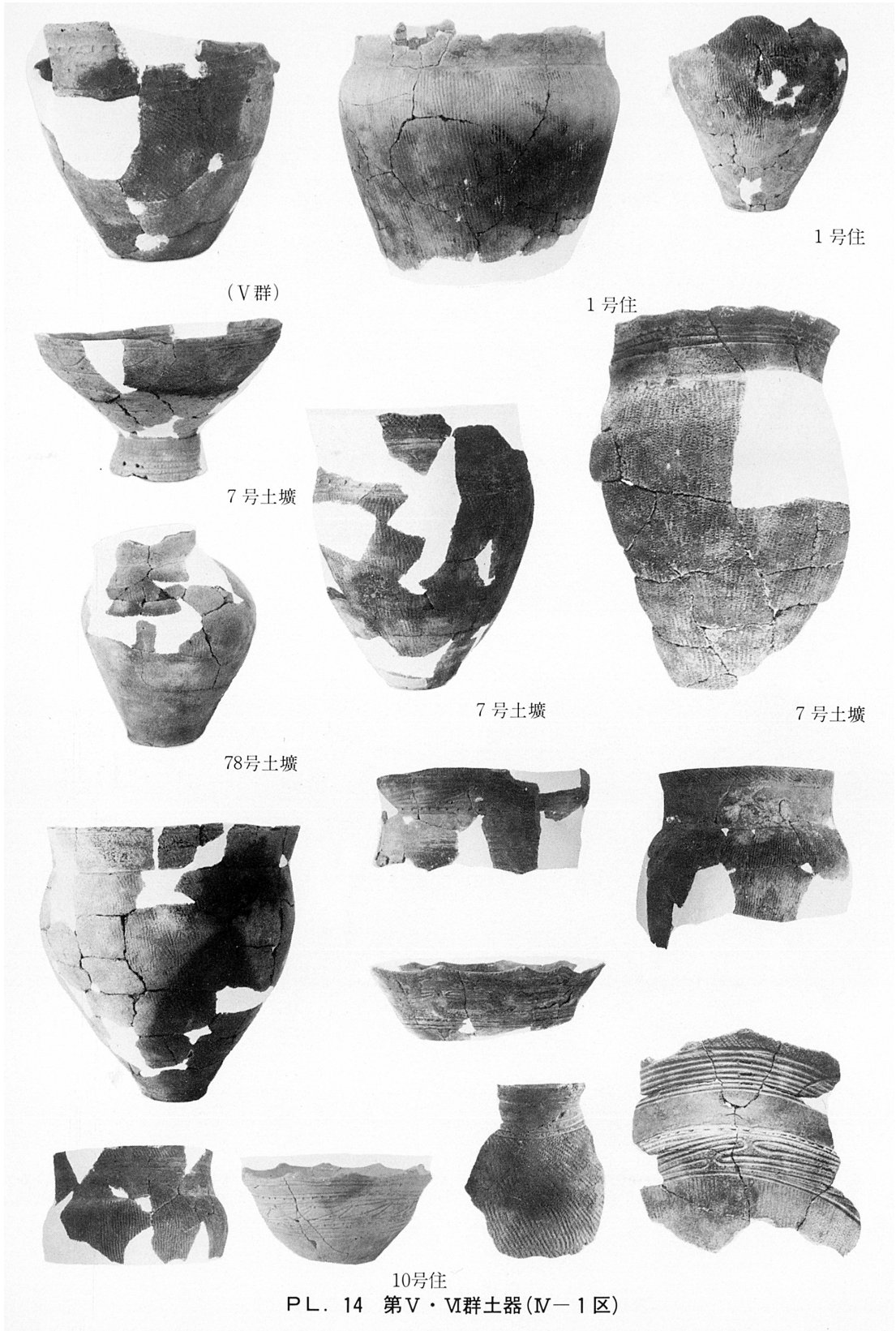
PL. 11 N群土器(N-1区 遺構外出土) (土器番号は第76図と同一)
 () は縮尺

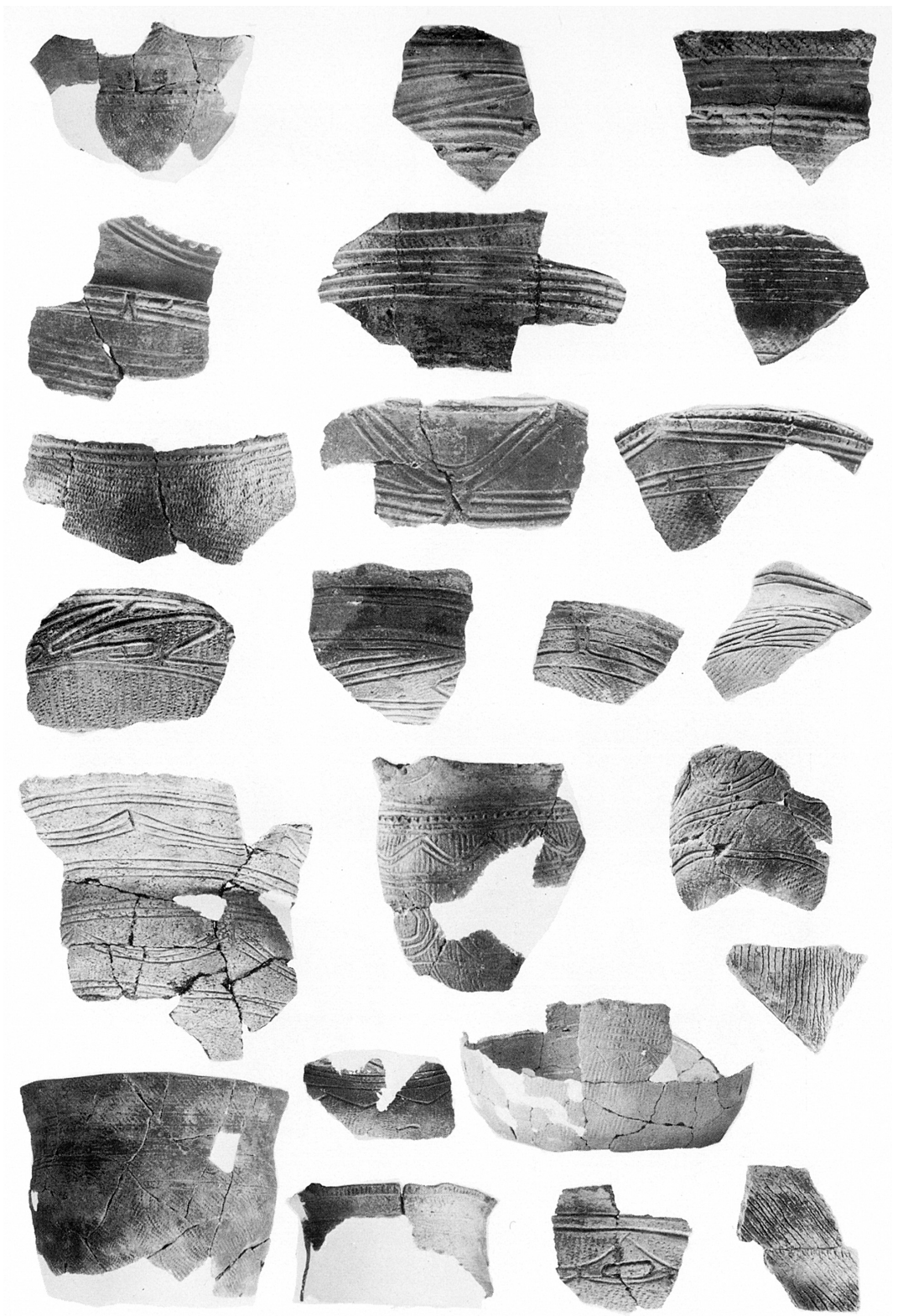


PL. 12 IV群土器 (IV-1区 遺構外出土)

44
 (土器番号は
 第77~79図と同一)
 S=1/5







PL. 15 第VI群土器(Ⅳ-1区)



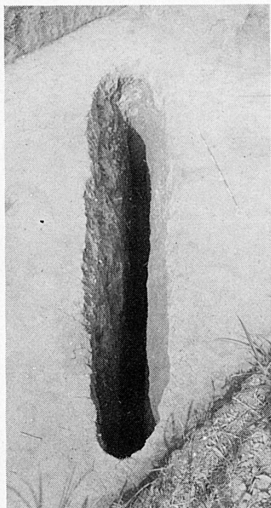
V区 遠景



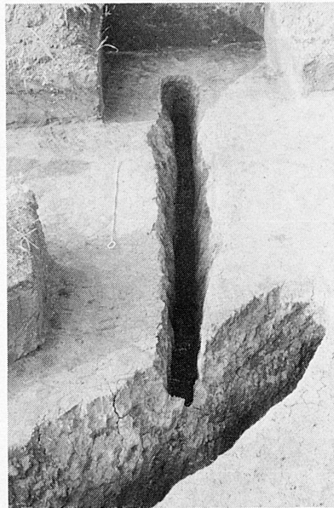
V-2区 遺物出土状況



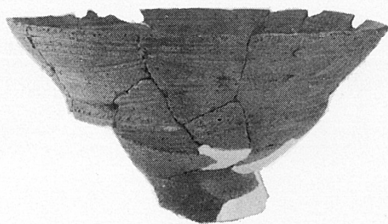
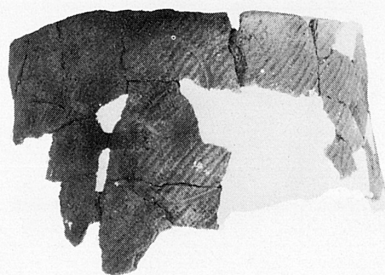
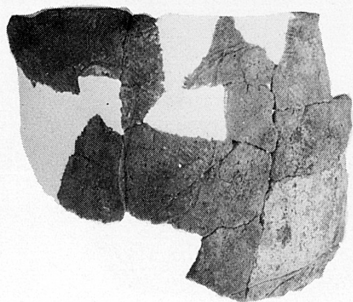
3号溝状ピット



6号溝状ピット



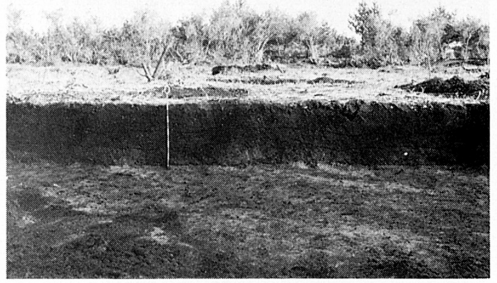
7・8号溝状ピット



PL. 16 V区遠景・遺物出土状況・溝状ピット・遺構外出土土器



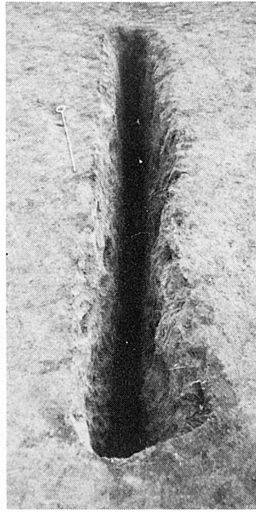
Ⅵ区 遠景



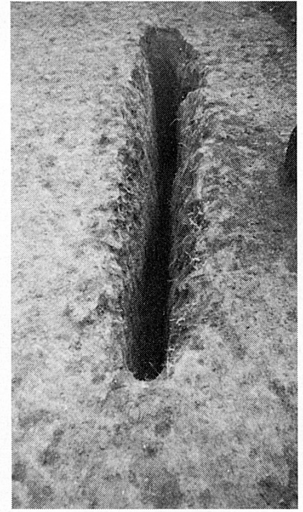
基本層序



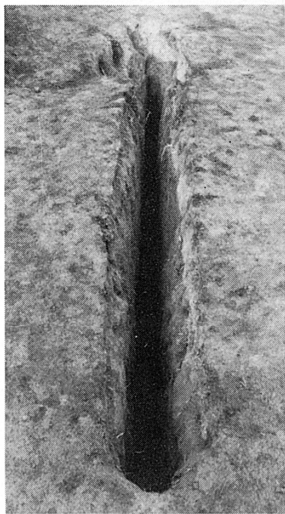
1号溝状ピット



2号溝状ピット



3号溝状ピット

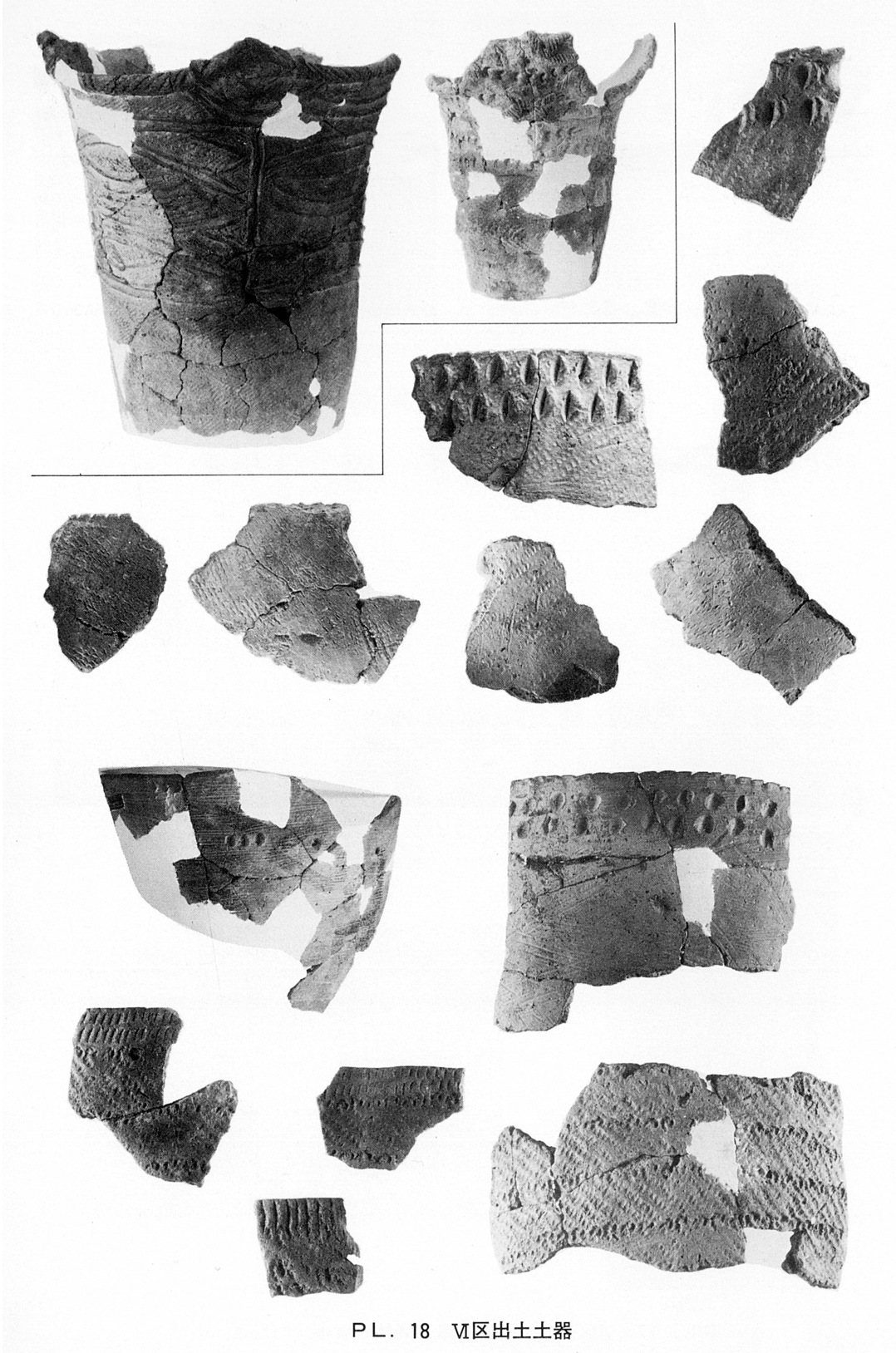


4号溝状ピット



円形ピット

PL. 17 Ⅵ区遠景・基本層序・溝状ピット・円形ピット



PL. 18 VI区出土土器



Ⅶ区 遠景(南→北)



Ⅶ区 作業風景



1号住居跡



3号住居跡



4号住居跡



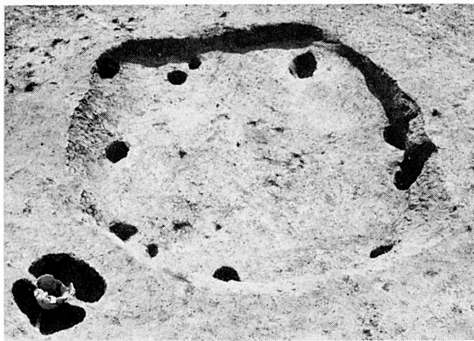
10号住居跡



5号(下)・12号(上)住居跡



12号住居跡



13号住居跡



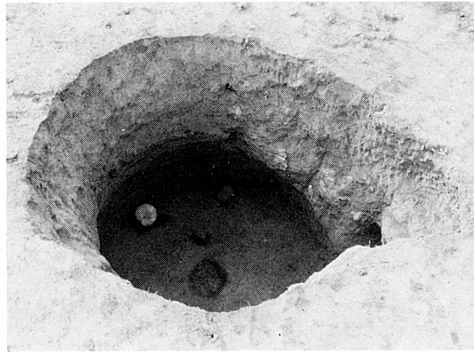
14号住居跡



土器埋設遺構



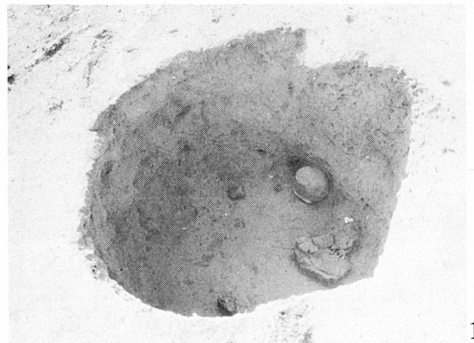
6号土坑



7号土坑

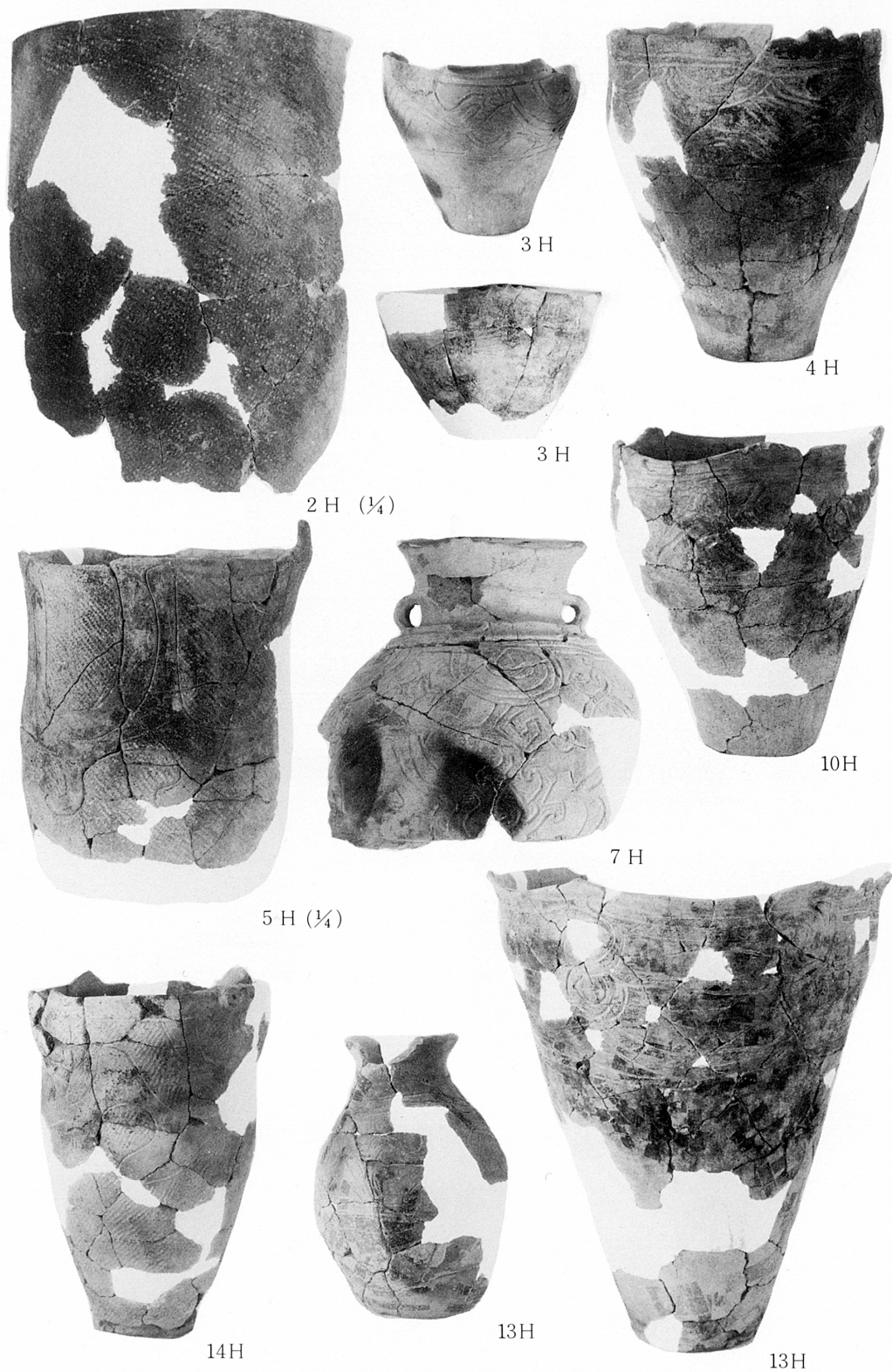


14号土坑



13号土坑(左右)

PL. 20 Ⅵ区 検出遺構



PL. 21 Ⅵ区出土土器(1) (縮尺 未記載…%)



15H



7土



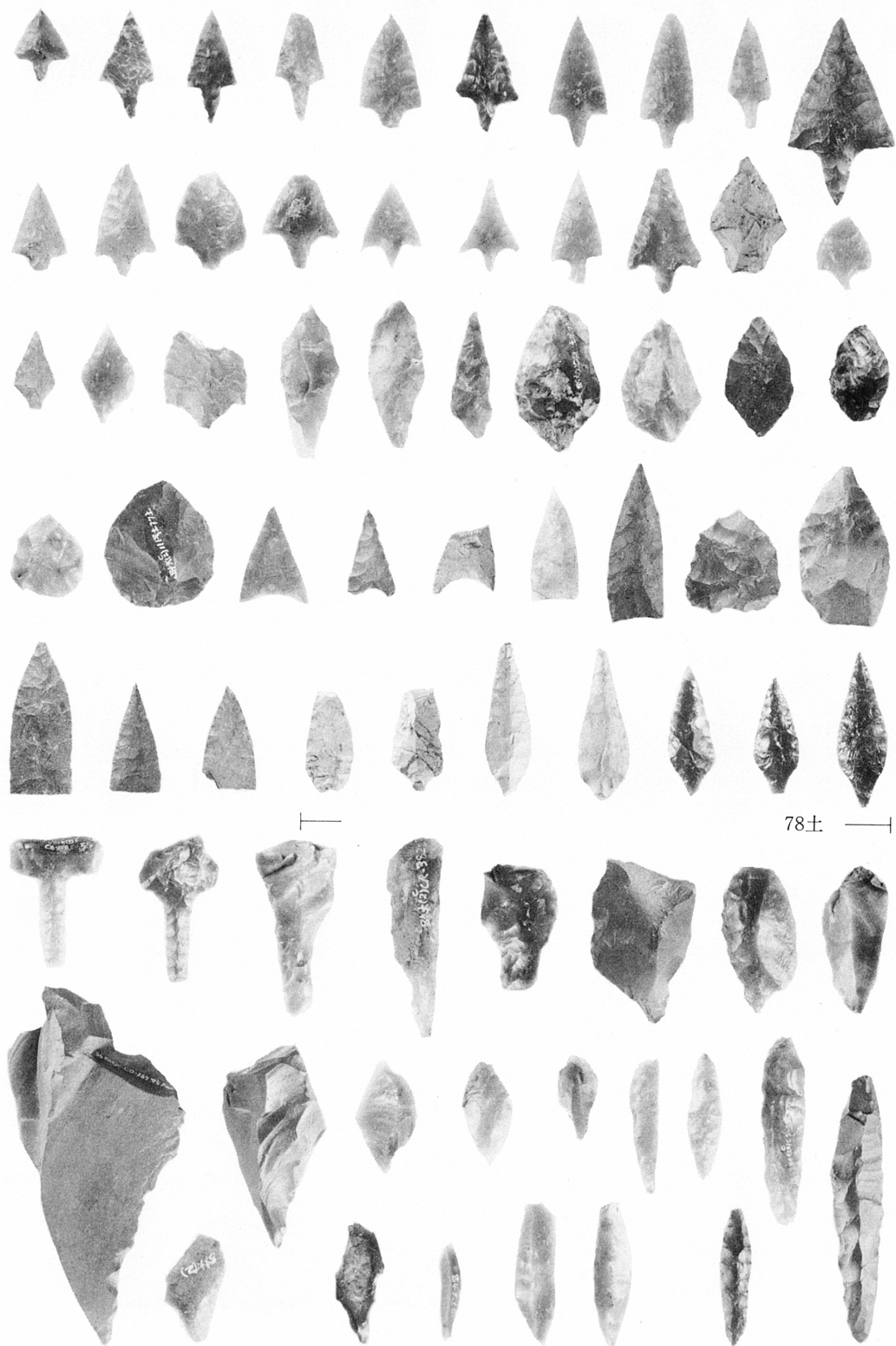
9土



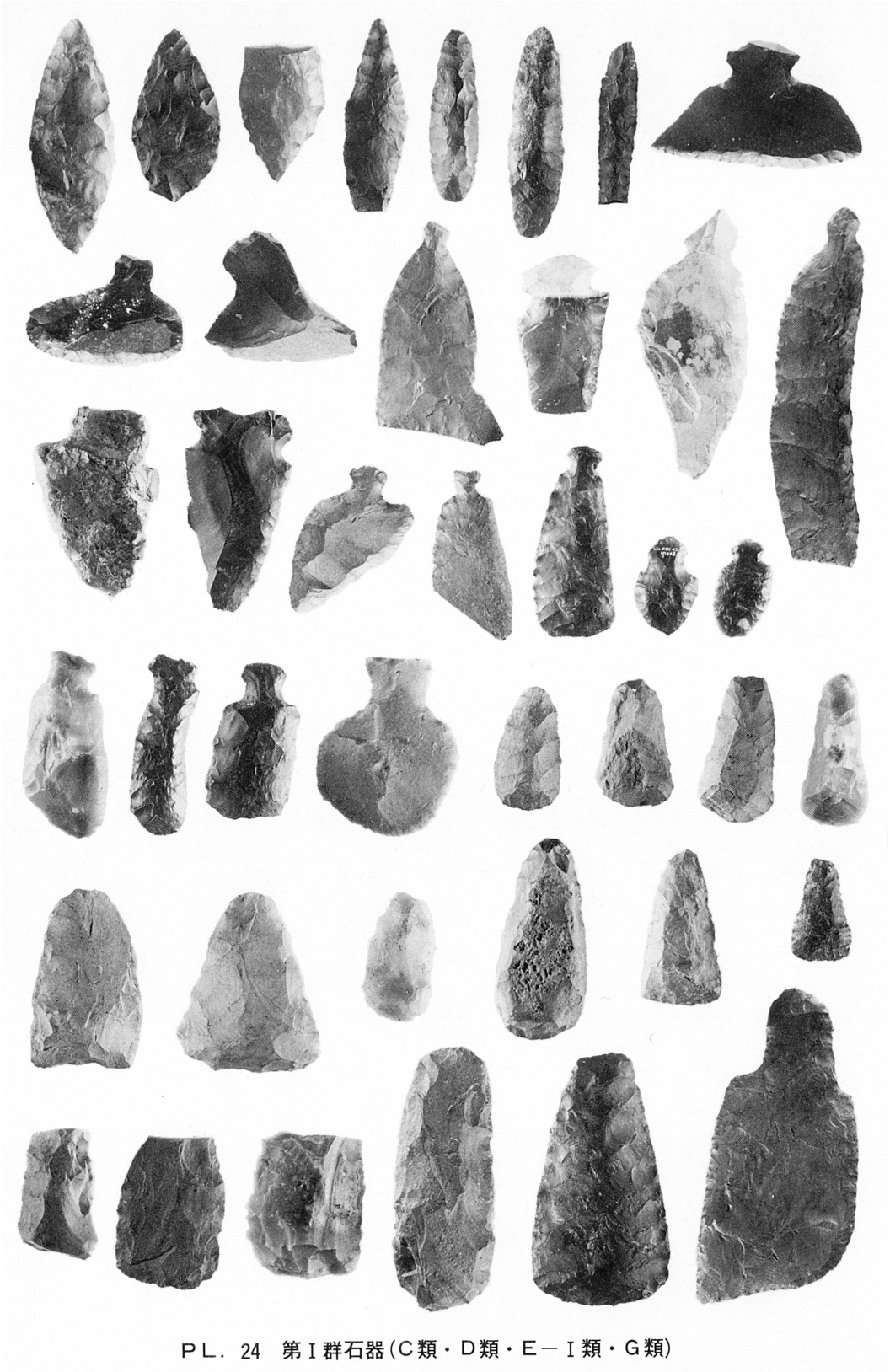
13土



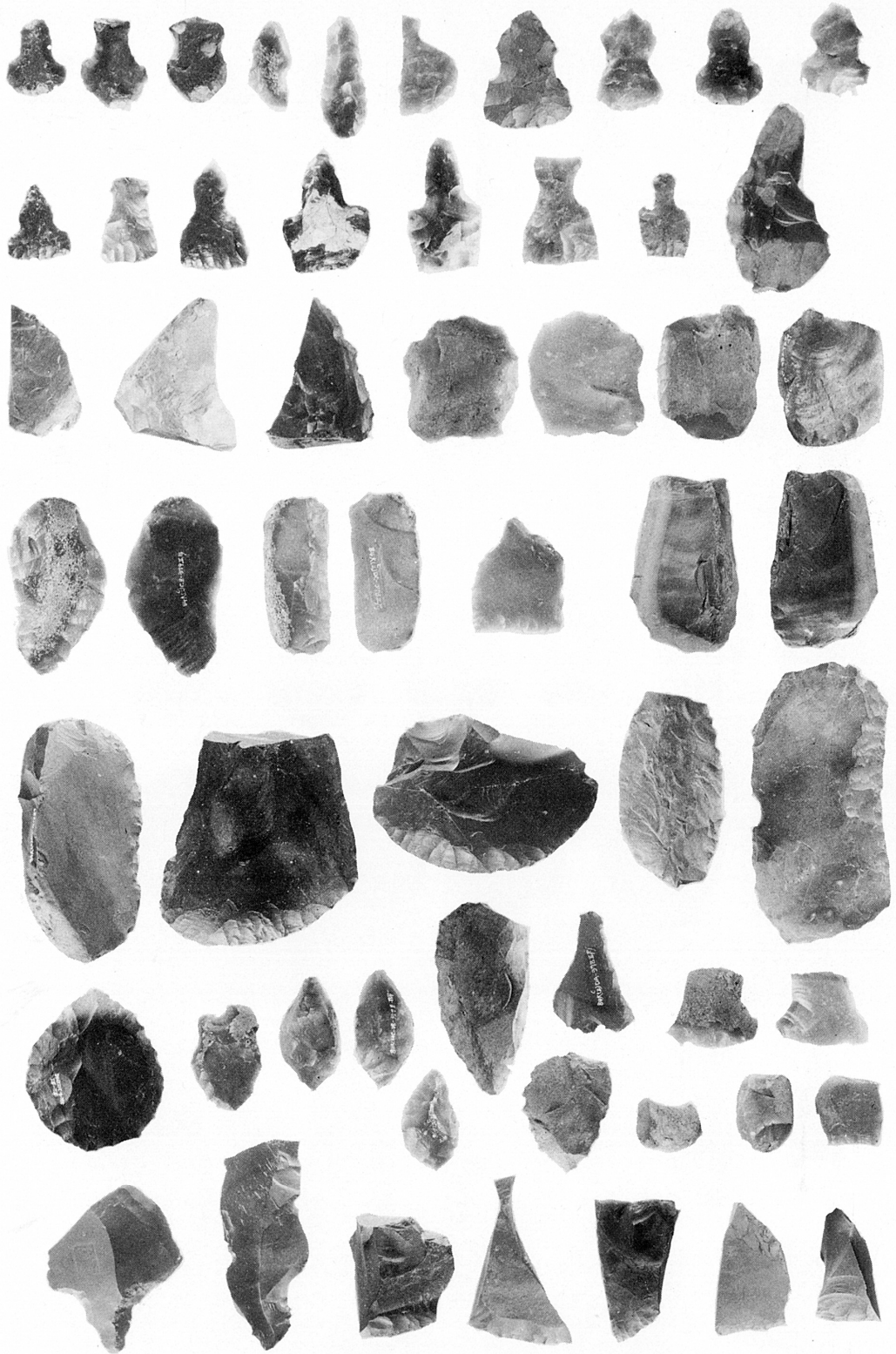
PL. 22 Ⅶ区出土土器(2) (S=1/6)



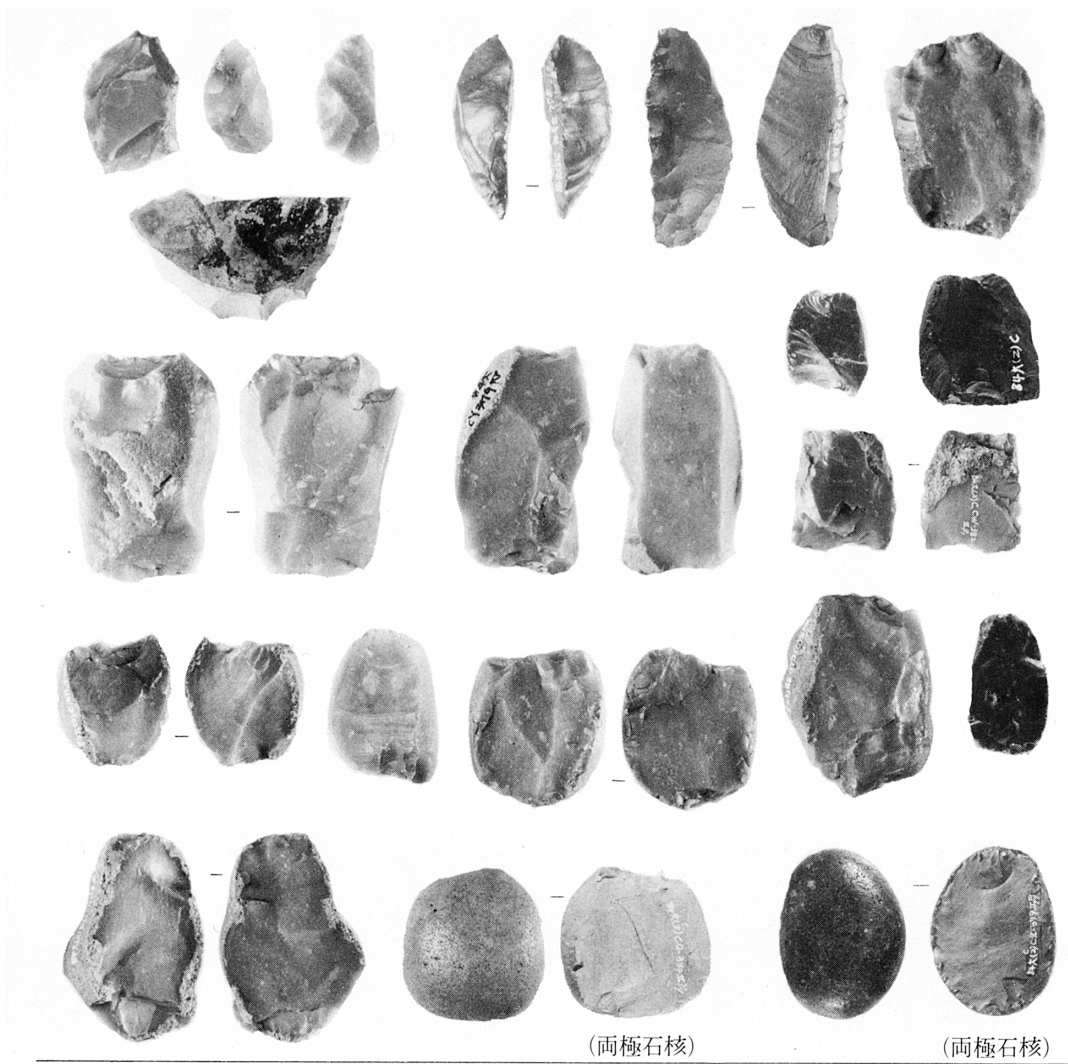
PL. 23 第I群石器(A類・B類)



PL. 24 第I群石器(C類・D類・E-I類・G類)

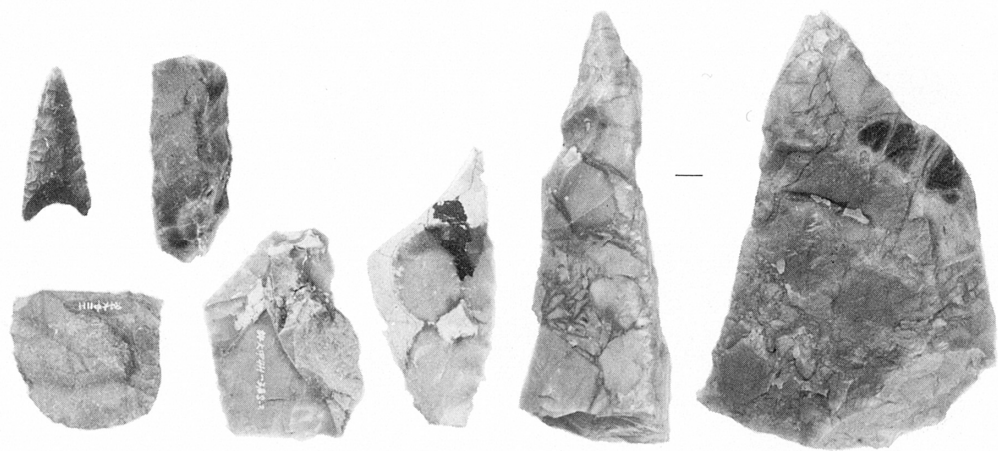


PL. 25 第I群石器(E-II類・F類)

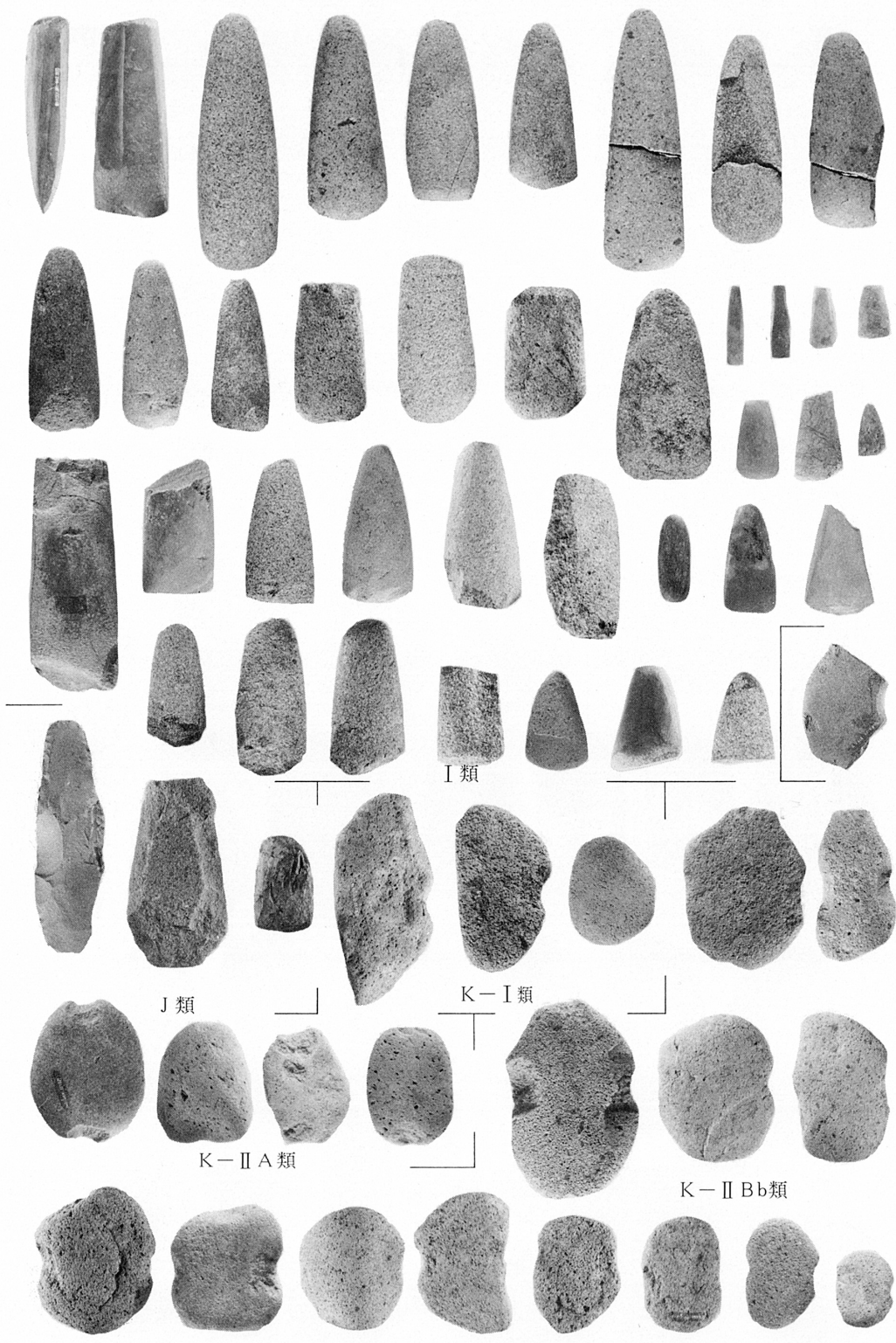


(両極石核)

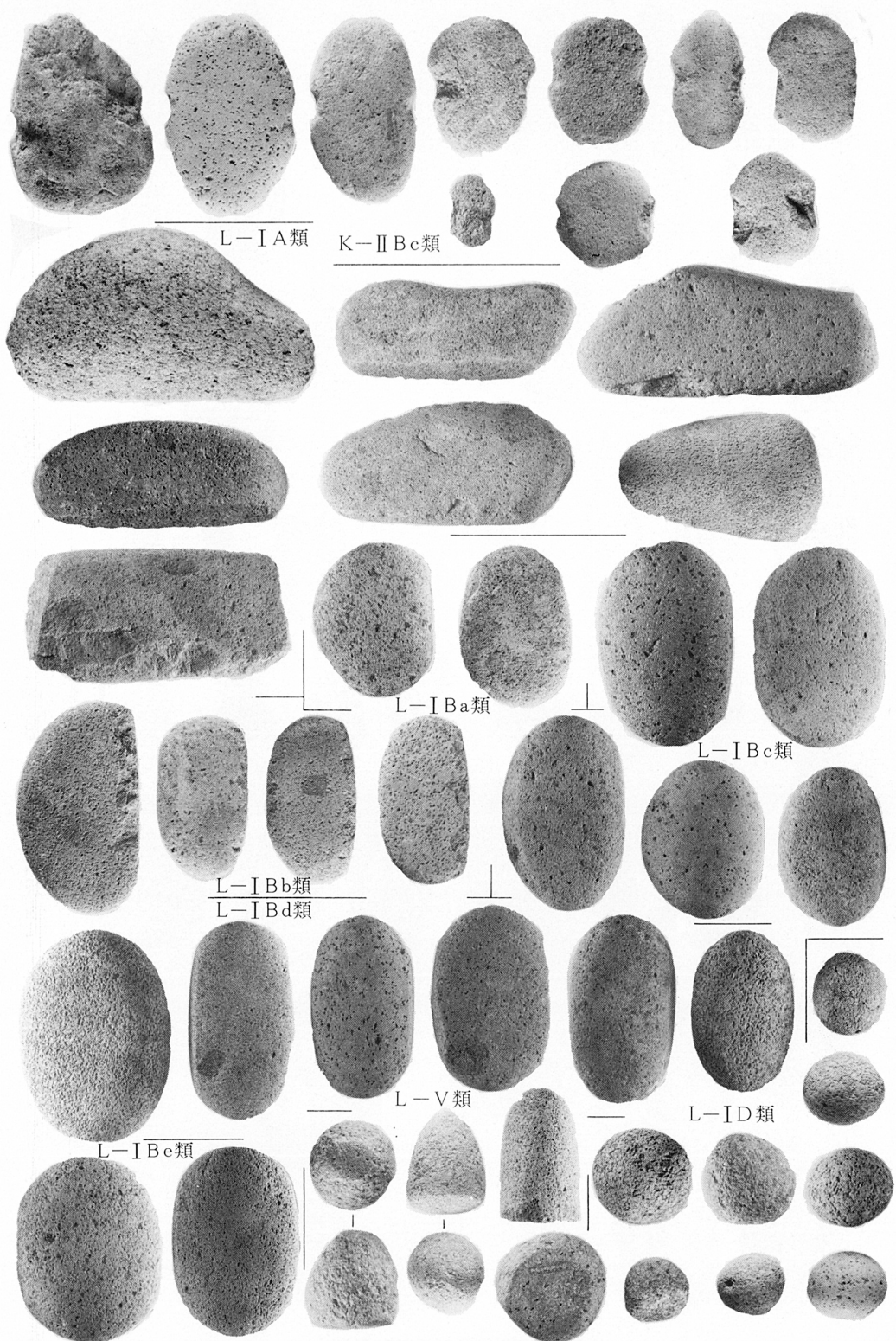
(両極石核)



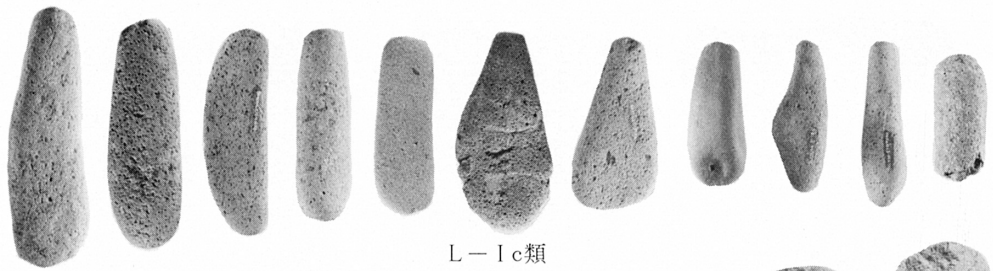
PL. 26 第I群石器(F類・H類、下段はⅥ区出土石器)



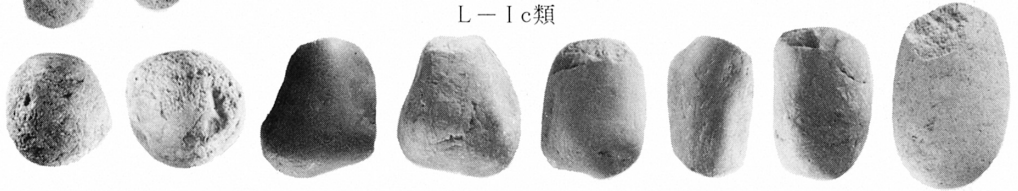
PL. 27 第Ⅱ・Ⅲ群石器(1)



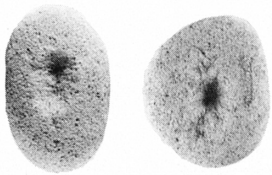
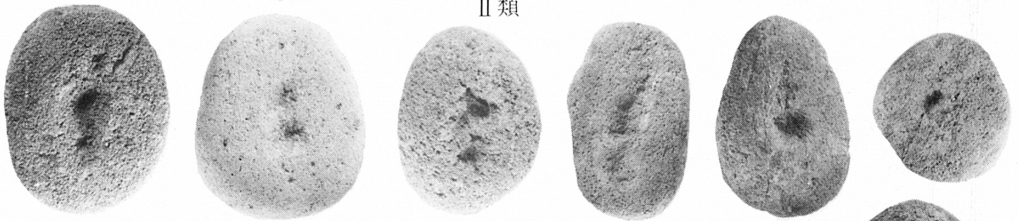
PL. 28 第Ⅲ群石器(2)



L-I c類



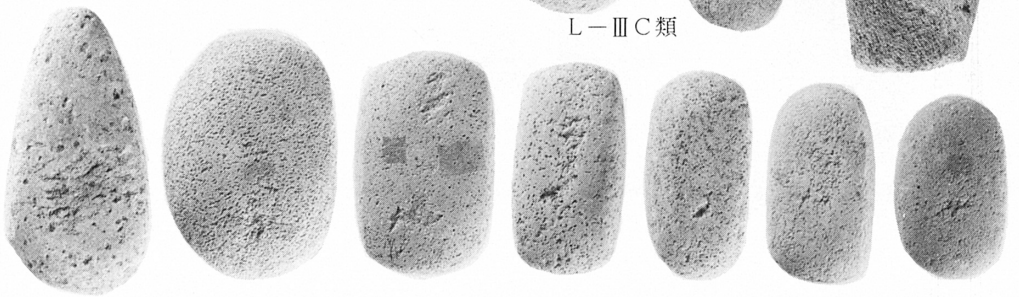
II類



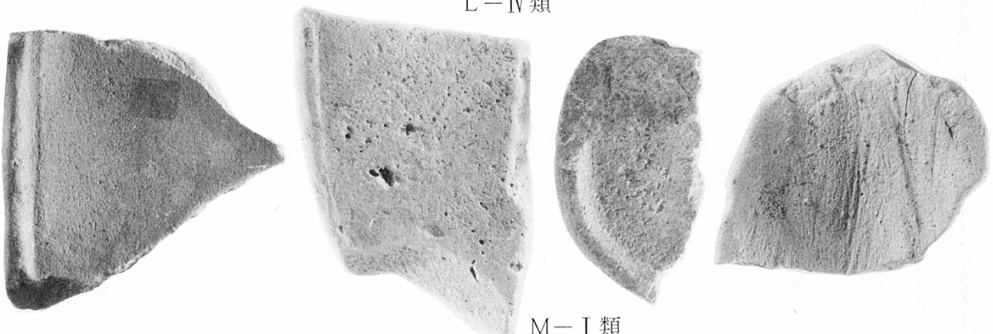
L-III B類



L-III C類

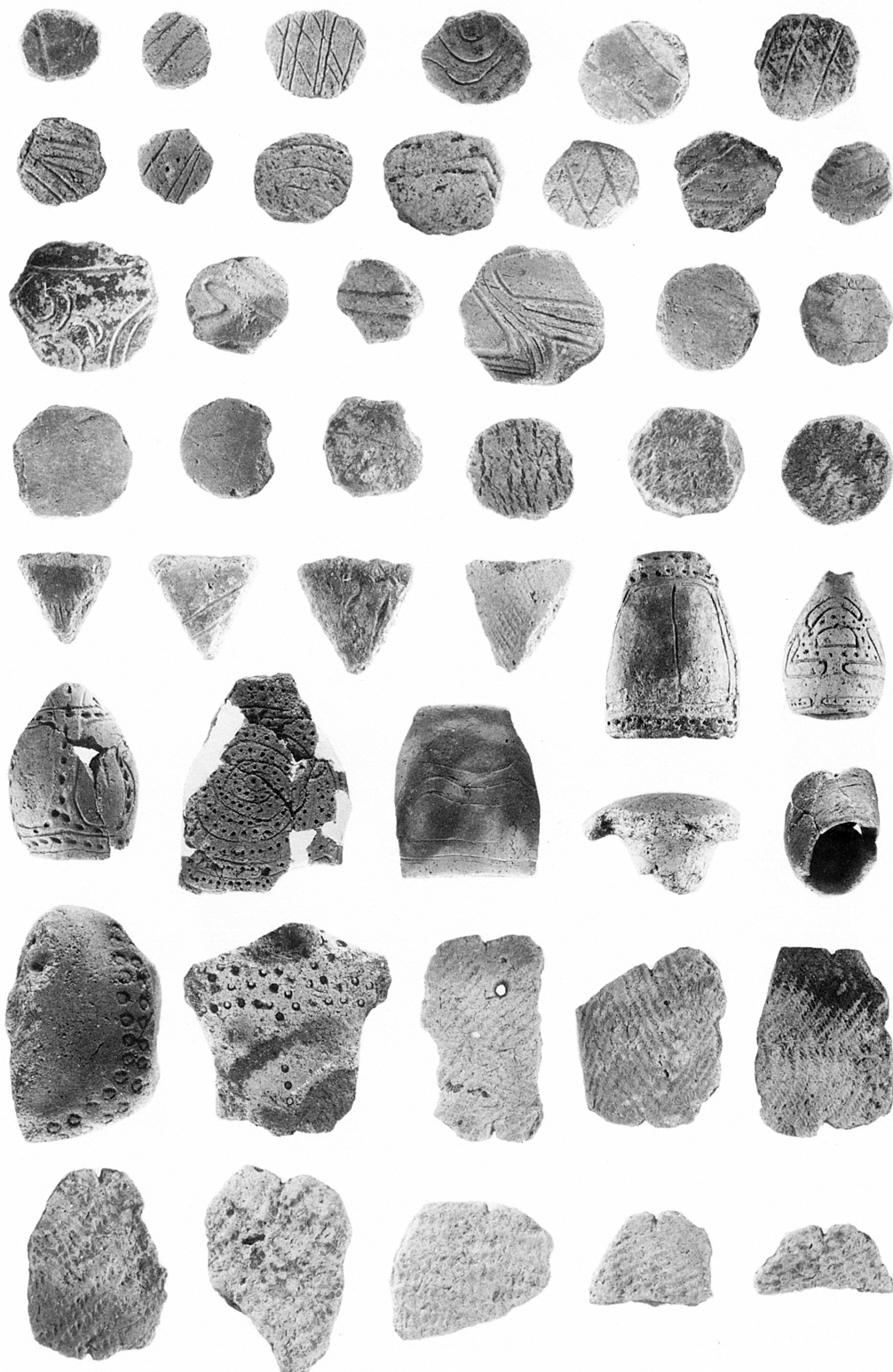


L-IV類



M-I類

P.L. 29 第三群石器(3)



PL. 31 出土土製品

青森県埋蔵文化財調査報告書第97集

大石平遺跡Ⅱ発掘調査報告書

—むつ小川原開発事業関係埋蔵文化財調査報告書—

発行日 昭和61年3月31日

発行 青森県教育委員会

編集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒030 青森市大字新城字天田内152-15

印刷所 東北印刷工業株式会社
〒030 青森市合浦一丁目2-12
